昭和十五年一月

柳田泉
神田豐穗

柳田泉著

明治文學叢刊

政治小說研究 上

第6號

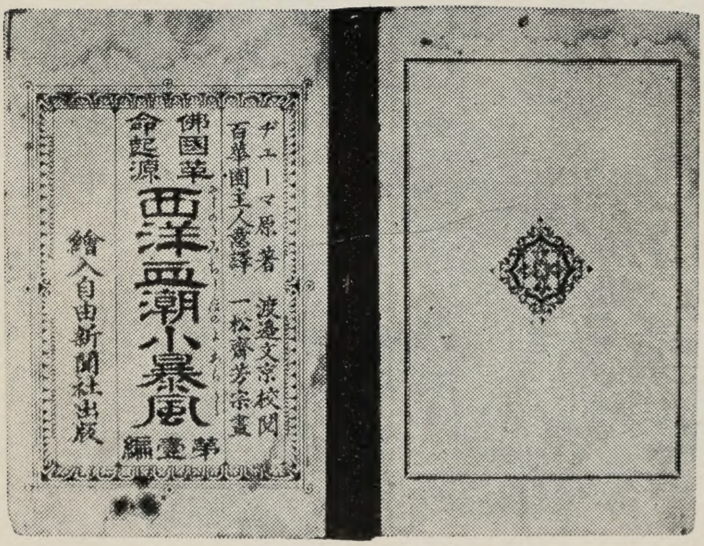
東京 春秋社藏版
松柏館發賣



戸田欽堂



櫻田百衛





繪入自由新聞
第百號記念
（明治十六年三月廿八日）



宮崎夢柳
（大蘇芳年戯畫）



坂崎紫欄



小室信介

序に代へて

明治文學研究家の若い諸君！——

長いこと待つていたゞいた『政治小說研究』がやつとお目にかけられることになつた。その點は先づまづ喜んでいたゞきたい。勿論私も喜んでゐる。

喜んではゐるのだが、正直のところ、私は、今自分の本を前にして少々呆然としてゐるのだ。叢刊の第一卷として二月に『明治初期の飜譯文學』を出した時も、我ながらその尨大さにいさゝか驚いた。これは私だけでなかつたらしく、いろいろな人から賞めていたゞいた時も「大きな本」といふことが條件のやうに繰返されたところを見ると、何うも、誰もが尨大だと感じたものらしい。『飜譯文學』は一册讀切といふのでもさうだつたのに、それが今度の『政治小說研究』に至つては、同じ位の分厚な本が上・中・下と三册になるといふのだ。上下二册だけは豫定してゐたのだが、それが二册では何うしても納まらず、上・中・下の三册になる。一册六百頁、三册一千八百頁！　而かもその一千八百頁の悉くが明治初期の政治小說と政治小說家の硏究に捧げられてある！　これでは何うして呆然とせずにゐられやう。

『飜譯文學』の時にも、豫定三百五十頁が四百になり、五百になり、六百になり、六百三十頁になつたについて、大にその無算當を叱られもし笑はれもしたが、あの時には、いつの間にかさう殖ゑたのだ。いつ殖ゑたのか知らない。私が氣がついたら殖ゑてゐたのだ。此の本を印刷所へ渡すとき、「今度は大丈夫か」と出版者から度々念を押されたので、私は大に愼重に豫定を立て、各章の枚數配合の順序などに可成り心を配つたつもりでゐた。出版者には勿論大丈

物だ！

夫大丈夫と答へた。ところが何うだらう、いつの間にか頁がどんどん殖ゑて、私の氣のついた時には、何うしても完全に一冊食み出しさうになつてゐたのだ。何といふことだらう、印刷者は、原稿は化けるものだといふ、若しそんなら私の原稿程よく化ける原稿も少いだらう、氣をゆるしてゐたら、いくら膨れ上るか知れたもんぢやない、まるで魔物だ！

此の卷には、私は『佳人之奇遇』以下に數章豫定して置いたのだ。「春のや朧とその政治小説」、「小説神髓と政治小説」、「ヂスレーリの政治小説について」、「政治小説家としての須藤南翠」、及び南翠研究の附錄として、「小宮山天香」「宇田川文海」の二章が挿入されることになつてゐた。これだけを上卷に入れて、下卷は末廣鐵腸から始められる。さうなると丁度いゝ手順だと思つたのだ。ところが、豫定した上卷には、『佳人之奇遇』までゞもうギツシリ、毎卷六百頁といふのでさへ可成りな犧牲だから、それ以上七百頁、八百頁となつては如何に大腹中の春秋社主とて悲鳴に似たものを揚げるに違ひない。況んや八百頁でも納まる自信がないのだ。ところが、一方下卷の方を改めて調べて見たら末廣鐵腸だけで、二百五十頁にはなる、解題附年表と索引で百頁、殘り二百五十頁で何もかも押し込まうとしたつて、とてもとても出來る相談ではない！　それで上卷からの食み出し分と下卷から末廣鐵腸を全部拔いて、合せて中卷をこしらへることにした。かうして『政治小説研究』の上・下二冊が、上・中・下三冊になる運命がきまつたといふわけだ。

貴方がたは、これを聞いたら、きつと又笑ふだらう、さうして柳田さんが「またジャングルのやうな本をこしらへたね」と囁きあふだらう、若い貴方がたから見たら、私の本は恐ろしく氣のきかない、無細工な、無恰好なもの、まるでアフリカの叢林か眞夏の入道雲のやうなものに見えるらしい。本音をいへば、書いた私にだつて幾らかさういふ氣がする。私だつて、出來るなら、氣の利いた、きつちりした、ハイカラな手頃な本にして上げたいのは山々だが、

それが何うもさうはいかない。本性は爭はれないといふが、こんな時にもそれがちやんと出て來るのだ。私は元々北國の土百姓の子だ、都雅とか才敏とかゝらは凡そ緣が遠い、文學研究家で候と澄してゐる柄ではないのだ、芭蕉の翁ではないが、無能無才「たゞ此の一すぢにつながつて」しまつたから仕方がないものゝ、元來が、千丈の樫の木を伐り倒す業は知つてゐても、一果の桃核に千匹猿を彫るやうな藝は、心にしみない。その本性が何處にでも出る、研究にだつて、讀書にだつて、著作にだつて同じやうに出るのだ。而かも力を入れゝば入れる程、餘計それが出て來るらしい。今度の『政治小說研究』などは、それの一番いゝ見本といふところだらう。かういふと威張るのだかわびてゐるのだか一寸分からないが、先づ謹んで寬恕を願つてゐるものと考へて、此の別の意味でのジヤングル・ブツクを大目に見ていただきたい。

尤も、此の本がかういふ混沌尨大なものになつたのは、一つは私が成るべく頭の中を空にしてしまはうとかゝつた所爲もある。政治小說及び政治小說家について多年調べてゐたものが可成り多く私の頭の中に蓄つてゐる、それをすつかり此の本に盛り込まうとかゝつたことが、確かに一因を成してゐる。だがその盛り込み方が、今もいふ百姓流だつたのだ。

だが、まあ可い、ジヤングルならジヤングルで仕方がない、大丸太なら大丸太で仕方がない。ジヤングルはジヤングルでも、このジヤングルには道はつけてある筈だ、貴方がたはそこから入り込んで熱心に探險して御覽なさい、きつと何か見つかる、いろいろなものが見つからう。探險者の熱心と根氣次第では、思ひがけない獲物もある筈だ。その獲物は勿論貴方がたのものだ、自由にお使ひなさい。可笑しい話だが、北海道の熊のことを聞いたことがあるでせう。熊は骨折つて鮭をとつて、いゝ氣持で筵にさしてもつてかへる、だが筵の尾を結ぶことを知らないので肝心の獲物は皆後からつけて來た人間が拾ふといふ話だ。貴方がたがこの本を讀むと、きつとその熊の後をつけてゐる人間の

やうな氣がするに違ひない。此の本はさしむきその態の役目かも知れない。何の役目にしろ、貴方がたのお役にたてば、それでいゝ、それでいゝのだ。

どうも大變な序文を書いてしまつた、かう調子に乘つては、此の本の題目に對しても濟まないわけで、「著者十年の心血の凝る所」とか、「その間苦心探賾寢と食とを忘るゝに至る」とか、「徴と雖ども聊か載籍の缺を裨補するに足らんか」などとやると、板につくのかも知れないが、外は五月だ、若葉も躍れば鯉も跳る、それに私の書齋の日ざしの好さは又別だから、思はず筆も躍らうといふものだ。

さて、これで私は私だけの精一杯の事はした、『政治小說』の研究に關する限り、私だけでは問題が片づいたわけだ。後は貴方がたの番だ、煮て喰はうと燒いて喰はうと、イズムで割らうと、精髓を拔かうと、そこは御隨意だ、——

そこで今一度、明治文學研究家の若い諸君、長い間待つていたゞいた此の本が出來たことを兎もかく喜んでいたゞきたい、さうしていつまでもお手許に置いていつまでもお役に立てゝいたゞけたら、望外の幸ひだと思つてゐる。

昭和十年五月

柳田泉識

上巻目次

研究前記

政治小說研究の必要

政治小說研究の必要　政治小說といふと、一概に目的小說と分類され、大抵の文學史家や文學研究家からは、繼子扱ひをされ、何國の文學史でも、眞の申譯的に、文壇傍流の一として輕く觸筆されるの常である。明治文學史家乃至研究家の態度も、從來は大體さういふもので、所謂明治文壇本流となつた硯友社以後の文學とは殆んど對立的に相容れないものとして、硯友社文學以前、明治初期に「政治小說」といふ所謂やくざ小說が澤山出たものだと、まるで何か美しい織物についた汚染のやうに扱はれて來たのである。世界文學史上、全般的に、政治小說といふものが、果してさう繼子的に扱はれて然るべきものか何うか、それは今こゝで論ずべき問題でないから取り上げない。又、硯友社時代の文壇小說家達が、政治小說といふものに（その名にさへ）處女が毛蟲を見た時のやうに顏を顰めたのも、いろいろな理由から感情的には理解出來る。然し後の文學史家までが、さういふ政治小說への反感をそのまゝ無批判におかけしてゐる必要は些つともない。いな、それどころではない、反對に、この反感が、所謂政治小說全盛への反動のため來たもので、決して公平なものでないことを指摘して示す責任があると思ふ。一般的にいつて、政治小說が單獨主題として研究に値するものかせぬものか、他國の文學史的研究の例はいざ知らず、明治文學史の研究に限つていへば、政治小說は是非とも研究されなければならぬ、研究といつて語弊がありとせば、是非ともこれに對する正確且つ（成るべく）十分な知識をもつことが、大に必要なのである。政治小說といふものへの好惡は問題ではない。是非さうしなければならぬ。何故といつて、明治文化の研究が政治方面から着手されなければならないやうに、明治新文學の研究は先づこの政治小說の研究から始められなければならぬ。これは我田引水的の僻論ではない。何故といへ

ば、明治新文學勃興の初頭には、當時の種々な特殊的事情、特殊的要求からして、政治小說全盛時代を現出し、それを母胎としていはゆる新文學が誕生して來たからである。

それで、上記の特殊事情、特殊要求を說明して政治小說の出現から、その文學史的意義に及び、私の論斷の僻妄でない所以をいさゝか明白にしたい。

政治小說出現の動機　一部文學史家の言ふところを聞いてゐると、政治小說など、まるで素人政治家が醉狂に書いた無駄書きのやうに取れるが、それは見當違ひで、今もいふやうに種々な理由からして、此の種の文學があの時の日本に生れて來なくてはならなかつたのである。勿論目的文學である以上意識的に作られたものに違ひないが、然しそれは作られなければならぬやうな條件がいろいろ揃つて、作られるに至つたものである。では所謂特殊事情即ち政治小說の出現となつた動機的條件は何か。幾つも數へることが出來るが、先づ直接動機となつてゐるのは、次の三條である。同し當時の政治熱、及び政治的宣傳の必要、曰く當時の文學觀念、曰く西洋文學殊に政治小說の影響。

政治熱のことについては、別に背景として述べるつもりであるから、こゝでは說かぬことにするが、何しても明治十三四年の民權論の火の手が急に強くなつたので、政府は種々な條例を出して、(一つは自衞對抗上)、片つ端から民權黨の言論武器を奪つた。その邊の事情から、民權家、即ち民間の政治家達は言論に代る新しい宣傳手段を工夫しなくてはならなかつた。元來かゝる宣傳の性質として、大に民衆乃至婦人等にも十分喰ひ入る必要があつたので、硬くるしい高尙な政治論以外何等かの新工夫を必要としてゐたのである。だから最初から當時民衆の唯一の娯樂機關敎化機關であつた演劇、歌謠、戲作等を利用したらといふ考へは、政治運動家の腦裡に動いてゐた(その少し具體的なことは、本論中で述べる)、然るに言論壓迫が激烈になるに及んで、かういふ宣傳手段が何うしても必須なものとなつたのである。これが即ち當時の政治的情勢から來る特殊要求である。この點でいふと政治小說は、大衆宣傳のため、言

論不自由を補ふために生じたもの、いはゞ明治初期のブルジョアジイ對藩閥政府の政治鬪爭に於てカムフラージュ的宣傳武器として取り上げられたものに外ならないといつて可い。

以上は政治小說といふものゝ出現した主要な原因であるが、これを助長せしめて全盛時代に導いたのは、それだけではない。そこには當時の特殊な文學觀念といふものがある。それは當時社會思潮の主流となつてゐた實學的功利主義思想が文學をも支配し、文學をして徹底的に社會的有益有効なものたらしめやうとしたのが、有力な一因である。元來德川時代以來、我が國の文學觀念は勸懲主義を標榜したものであつたが、幕末から明治の初頭へかけてはそれが只看板だけとなつて、內實は種々猥褻殺風景な、獵奇的なものになりつゝあつた。だが明治十年以後になると、漸くこれに氣がついて、看板と實質の矛盾を取り除いて、眞實社會人生に役立つ文學にしようといふ一種の改良意識が起る。ところが、政治小說が出現した當時の社會に於いては、最も意義のある役に立つことゝいへば、それは政治改良といふことであつた。此の觀念と文學改良意識とが結びついて、凡ての文學、凡ての小說中で最も有益なものが政治小說だ、政治小說でなければ文學でないといふ風な文學觀念を生んだ。さうしてこれが舊い勸懲主義の觀念と比較すると只皮を取りかへただけで實質は同じものであるのに、皮だけでも取り換へたせゐか、非常に新しいものゝやうな氣がして、一時可成りな勢力をもつた。これが政治小說全盛を將來した第二の原因である。

此の第二の原因の背後に、さうして同時に第二の原因と並んで、西洋文學の影響といふ大きな力がある。元來、西洋文學の移入が、時代の政治熱乃至それに緣ある方面を介してなされたものであることは、今日では略ぼ常識となつてゐる。これは西洋文學傳來の歷史を一通り調べて見れば分かることである。西洋文學は、それ自身に對する興味から移入されたものではない。一般西洋文明、政治、法律、諸制度、謂ゆる文物なるものに附隨して移入されたのである。從つて明治初期に紹介された西洋文學は、かゝる西洋文明紹介者達（廣義にいつて）が、餘技的興味から、餘技

的に紹介したものが大半である。純粹な文學的興味から力を入れて紹介されたものは、後々のことで、初期には先づ少ない。紹介される作物が、本來大衆的なものであらうと純文學的なものであらうと、內容によつて選擇して紹介するといふのではない。二三の例をいはう。明治の飜譯文學の先驅視され、創作の方にも可成り大きな影響を與へた『歐洲奇事・花柳春話』、これは作そのものは政治小說といふべき程のものではない、いな西洋流の人情小說なのであるが、これの移入は原作者リットン卿が政治家であるために、日本の若い政治家志望者織田純一郞の興味を惹いた結果であつたことは、改めていふまでもなからう。又ユーゴーの作物の紹介は、明治の飜譯文學史に一轉機を劃するものであるが、これも最初は專ら政治的に興味をもたれたからであつた。それは、明治十二年三橋惇の譯した『今世西洋英傑傳』を見ても分かるが、その自由主義の爲めの奮鬪から日本の自由民權論者の一偶像とされ、その意味で自由の先達として、政治家側からその作物が移入された。外遊中の板垣退助は、ユーゴーに政治小說を譯せと勸められ、その作物をもち歸つて、同志をして熱心にこれを譯させて公にした。この事が、又、政治小說の出現に、乃至明治文學の改良に强い影響を與へたのである。後にユーゴー紹介の專門家視された森田思軒がユーゴーに興味をもつてこれが紹介を始めたのも、本來は政治的興味からであつた。歷史小說家のデュマが、明治飜譯文學では革命文學の泰斗となつてゐるのは、周知の事實である。又シェークスピヤの『シーザー』を『自由太刀餘波鋭鋒』として、スコットの『湖上の美人』を『春窓綺話』として紹介した如きも、政治的興味によることは、一はその題名に照し、一はその內容の政治小說的改作に照して知られる。

「文明開化」の語にカヴァされた此の西洋文學の影響は大きい强いものであつた。それは何を敎へたかといふと、一つは、以上の如き經路で移入された爲めに、文學には是非とも政治的色彩のあるべきものといふ考へを强め、且つ又實際、模範的政治小說を提供して、大に日本の政治小說家の創作慾を刺戟した。又一つは、一般讀者階級に對して、

文學尊ぶ可しの觀念を與へた。當時の日本では、普通には小說の如きものを下等の娛樂視して、士君子等の手にすべきものではないといふことになつてゐたが、西洋では立派に文學として尊重されてゐる。紳士も淑女も小說を愛讀し社交上の必需品となつて居り、又紳士淑女が自身で小說を書いて怪しまない。怪しまぬどころか却つてこれを榮とし人にも羨まれたりする。堂々たる大政治家(ヂスレーリ)の如きでさへさうする。卽ち西洋の例によると、紳士でも識者でも小說を手にし、小說を書く、且つ又政治家の手に成る政治小說といふものがある。從つて西洋文學の知識が移入されるにつれて、當時の人々の文學觀念は次第に高尙になり、それと共に有識者の小說試作といふ如き現象も見られるに至り、有名の政治家も、西洋の實例を見て、躊躇するところなく小說を書くといふまでになつた。かういふ事情が、政治小說の全盛に貢獻してゐることは、改めて記すまでもあるまい。

政治小說の出現、殊にその全盛時代の出現にはかういふ種々な原因があつた。だが、吾等は以上の三主原因にもう二つ程考慮に入れて可いものをもつてゐる。その一は、從來の日本文學には、明白な genre となつた政治小說といふものこそないが、時勢や政治を諷刺した作物や戲文が相當多く、それが傳統的には政治小說の先驅的存在をなしてゐるといふこと、又一つには、所謂全盛時代の政治小說の作家といふのは、士族出の政治運動家が多いが、かゝる人々の教養を考へてみると、表面は成る程四角張つた理屈張つたものである割合に、漢詩の嗜みとか歷史、軍談の嗜好とか、稗史耽讀とか、それぞれ文學的教養乃至趣味といつたものが、可成り深く浸み込んでゐる。それは、彼等の政治論に、多分の理想主義的な、感情的な、ロマンチックな特色があるのでも、さうと察せられる。卽ち彼等は、文士、小說家になり得る可能性をもつた人間であつたといつて可い。

そこで、政治小說全盛といふ現象は、かういふ當時の政治界、文學界、社會文化、政治家達に潛在し顯在してゐたかゝる諸原因から何うしても出現しなければならないやうに決定されてゐたものだといひ得やう。

政治小説の文學史的意義　以上の所記を要するに、舊文學の遺物たる戯作稗史が、世界共通の觀念内容をもつた文學とか小説とかいふ威張つた存在となるには、何うしても政治家といふ當時の有識階級の最高峯たる人々の手に成つた政治小説といふ形式上の過渡期を經なければならなかつたといふ事情が、略ぼ推察される。そこで、今度は、逆に專ら文學史の方からして政治小説存在の意義を綜合的に考へて見よう。これを明瞭にすると、政治小説研究の必要が一層顯然とするであらうから。

　政治小説は明治文學史上の新ジャンルであり、一時代をつくる熱力をもつたものである。これだけでも、普通ならもう一應の研究に値する理由とするに足りる。だが今はかういふ事は別として、もつと時代に卽して語らう。第一に政治小説の出現は、當時の人々の文學觀念に一種の革命を與へ、文學をしていはゆる戯作から文學（初歩ながら）といふ眞面目な概念まで向上させ、「童幼婦女」の玩具でなく、立派に男子の仕事とするに相應はしいものたらしめ、男子をして安心して文學に從事することを得せしめた。第二に、政治小説の出現は、一方文學が立派な一の事業であることを敎へる一方、政治上、文學上の現實の問題から、文學改革の必要を覺らしめた。つまりこれの出現で、文學革命が拍車をかけられた趣きがある。勿論同じ文學改良意識とはいひながら、政治小説家達のそれと、いはゆる明治新文學の開山たる春のや朧のそれとは、少し方向を異にした（それは前述動機の條からでも推測されやう）。春のやの文學革命論は、その一部分に、政治小説萬能論を否定するところをもつてゐるが（政治小説を否定したのではない、小説卽政治小説といふ立場に反對したのである）、又その主旨主張は有力な政治小説家の採用するところとなり、政治小説の全盛と共に、いつとはなく、その文學革命の主張が全文學界に徹底することになつた。だから文學史的に、大體として見れば、春のやの文學革命は、政治小説によつて具現されたものといつても可い、いはゞ政治小説の勢力によつて、文學革命の目的を達したといふ結果（少々意外の結果だが）になつてゐる。これは、然し意外といつても、當

時の特殊事情として、かうなるのが却て自然であつたのかも知れぬ。明治維新を、明治元年から書き始めるのは、便宜上のこととして恕すべしとするも、實際明治維新が元年に始まるといつたら、今日の研究家は絕倒するであらう。同じやうに、明治の新文學を、嚴密に明治十八年の春のや出現と共に始まるとしたら、敍述の都合はよくとも、正しい文學史とはいへない、春のや出現の雰圍氣は政治小說（及び飜譯小說）がつくつたものである。明治十四五年以後を新文學出現の胎生期、萠芽期としなくては、少くとし今日新しい研究に基礎した文學史とはいへない。此の時期を稗文、種彥、春水でのみ代表させるのは、間違ひである。兎もあれ、明治新文學の有力な先驅、乃至母胎として政治小說の存在を認めること、これを認める以上十分にこれを研究してその盛衰消長の跡を確實ならしめることは、今後の文學史家たる覺悟をも人々の義務である。

第三に、前にもいつたが、政治小說の出現によつて、日本人の創作慾が多大な刺戟を受け、時代の文學に破格なる新鮮な血液を注射する効があつた。その結果、素人小說家の續出となり、政治小說衰退の一原因ともなつたが、然し創作慾の刺戟として、後來の文學に可成り役立つたことは、認めずには置けまい。

上來說いて來たところに依つて、明治新文學の研究には、先づ政治小說の研究から始めなければならぬといふ論斷が、私の僻妄でないことだけは略ぼ明瞭したことゝ思ふのである。

政治小說發展の背景

一　政治的

文學の史的發展を辿るには背景の研究把握が必要であることはいふまでもないが、殊に政治小說の研究には、それが必要である。そこで此の章で、吾等は二樣の背景を用意することにした。一は政治的背景、他は文學的背景。

政治的背景についていへば、政治小說の研究にあつては、殊に此の背景たる當時の政治思想乃至政治鬪爭の發展を出來るだけ十分に把握しないといけない。さもないと、政治小說の負荷してゐる政治的使命がよく分らず、單に政治家の好奇心醉狂めく原因に歸せられてしまひ、政治的必要なり社會的文學的要求なりから生れたものだといふことが理解されない。此の際殊に注意すべき一事は、當時のブルジョアジィの意識が大體進步的なものであつたといふことで、當時の政情その他はこの根本事實をつかんで見る必要がある。その進步的とは、日本をして凡ての點で世界的レヴェルまで達進せしめるといふ理想への精進の意味であるが、此の精進が日本の國際的競爭への參加を意味し、又かかる競爭への參加、乃至理想への精進のためには當然一種の政治的社會的再組織を必要としたので、蓋しブルジョア對藩閥政府の政治鬪爭は、日本國民の此の理想達成に伴ふ必然的陣痛であつたのである。當時のブルジョアジィは兎に角一般的に進步的意識をもつてゐて、その理想の達成に相當努めたといふことは、明治初期社會發展史上の根本事實として認めなければならぬ。

第一　自由民權時代（明治七年――十三年）

明治初期のブルジョア政治鬪爭の精神が、自由民權（又は民權自由）の語をスローガンとし鬪爭的形態を取つた第

一步は、明治七年一月の愛國公黨結成及びこれに據る民選議院建立建白の提出とされる。勿論こゝに至るまでには至るだけの政治的曲折が種々あるが、今は史的背景を語るべき起點を便宜上こゝに定め、これ以前の曲折を說くことは省略しよう。本來研究態度として單なる便宜主義を採るは避くべきであるが、敍述の簡明を欲する以上、止むを得ない。(やゝ詳しいものは、指原安三『明治政史』、尾佐竹猛博士『日本憲政史』に依るを可とする)。

此の民選議院建白で口火を切つた愛國公黨の自由民權運動は、一種の啓蒙運動で政治鬪爭とはいへぬといふ說もあるが、兎に角時のインテリゲンチャ及び操觚者階級から相當熱烈に後援され乃至論議されて東北、土佐、阿波等の二三地方に鬪爭支部を形成しつゝ、翌八年二月の愛國社組成とまで生長したが、當時まだ强い封建的餘勢の下に生活してゐた大衆の共鳴するところとならなかつた上、經濟的背景なく、且つ此の運動の關係者中の或る人々が、佐賀の亂や西南戰爭などに直接間接に捲き込まれたので、この運動そのものも種々誤解されて官憲から激しい彈壓と迫害を招いた。愛國公黨の運動は舊士族が中心であつたからそれも無理がなかつたのである。一種の論者があつて、西南戰爭の原因にこの民權運動を結びつけて說いてゐるが(その當時からかういふ見方がある)、それも一つの見方ではある。然し結果からいへば、民權運動の發達はこの戰爭によつて甚しく阻害され、その後の運動は必要以上の鬪爭に力を費さゞるを得なくなつた。

私は敢て必要以上といふ。時の明治政府は藩閥の代名詞を貰つた專制支配者ではあつたが、西洋新文化輸入の先導者であつただけ、民間のブルジョア民權思想に對して全然沒理解なものではなく、相當の理解をもつてゐた。それを示す第一の證據は、明治八年の立憲政體云々の聖詔、地方官會議の開催、元老院、大審院の設置、國憲の起案等々で、兎に角くそれを裏書きしてゐる。漸急の差があつても、政治に對する根本精神に於いて、官民上下の協調を全然不可能ならしめる程の不和がなかつた。然るに十年後、自由民權運動に下された彈壓は官民兩者の間に甚しい惡感情を生

み、上下の政治的協調を不可能なものにしたのである。

西南戰爭時の彈壓と迫害に奮起した民權運動者は、板垣退助の率ゐる土佐の立志社を中心に漸く積極的鬪爭の態度を取り、慘澹たる潜行運動を續けて、從來の同志たる不平士族、文筆階級の外に、（種々な理由から）多數の地方ブルジョアの共鳴をかち得て經濟的基礎を確立した。かくて彼等の運動は漸く表面化し、十一年九月、大阪に於ける大會で愛國社再興の第一聲を揚げ、翌十二年その第二回第三回の大會を同地に開いたが、此の第三回の大會に於いて國會開設を天皇陛下に願望する件を決し、願望の檄文を起草し、明春三月を期して實行に移ることとした。即ち消極的に恩惠的に專制政府から許與される政治的權利を一蹴し、「天賦人權」の主張によつて專制政治に對抗して、人民自身の手で理想的な政治改革を行はうといふ公然な鬪爭決意を示すに至つたのである。

所期の十三年三月、二府二十八縣八萬七千人の總代たる百十四名の民權鬪士は愛國社の第四回大會を大阪に開き、先づ社を改めて國會開設願望有志會とし、國會期成同盟規約を定め、國會願望書を草して、總代をして太政官及び元老院に呈出せしめた。太政官も元老院もこれを受理しなかつたが、此の一擧から國會願望の叫びが全國的に囂々と火蓋を切られた。

政府は此の形勢を恐れ、同じく四月、集會條例を發布して民間鬪士の運動を彈壓しようとした。だが彼等はそれを物ともせず、此の年十一月、期成同盟第二大會を東京に開き、會名を大日本國會期成有志公會と改め、國會願望の善後策を議し、且つ鬪士の決心を固くするため「遭變者遺族扶助法」を決定した。更に一部の有志は此の運動に力強い永續性を與ふるために一の自由主義的政黨を結成すべきことを主張し、自由黨結成盟約を定めた上、十四年十月の再會合を約し、勇躍して歸つた。

政治小說の嚆矢　此の年はかく民權鬪士にとつても充實した收穫のある年であつたが、明治文學史上からいつても

注意に値する年であつた。何となれば政治小說といふ日本文學上の新genreが明白に具現したのはこの年だからである。卽ち政治小說の嚆矢と稱される『民權演義情海波瀾』が公にされたのは、正に十三年六月である。著者は封建貴族出のインテリゲントで民權運動のシンパサイザーたる戶田欽堂、自己慰安的な、まだ消極的な人情本的政治小說であるが、專制政府に對するブルジョアジイの勝利を寓して、時の民權鬪士の意氣を反映してゐる。

第二　政黨萠芽時代（明治十三年——十五年）

十三年に於いて民權運動の氣勢が全國を壓したことは、前に述べた通りであるが、それは勿論時運と鬪士の熱意にもよるが、地方ブルジョアが先に府縣會開設によつて政治的に覺醒しかけて來た折柄、全國民衆に多大な不安を抱かしめてゐた紙幣下落による政府財政策の失敗を巧みにとり上げて、鬪爭スローガンの中に入れた爲めもあつた。十四年に入るや、民權鬪士は一層有力な鬪爭武器を與へられた。それはフランス革命思想家ルソオの『民約論』を中心にした急進自由思想である。これは主として西園寺公望及び中江兆民の力により、東洋自由新聞によつて宣傳されたが、同新聞が倒るゝや、中江は更に政理叢談を發行して、盛にルソオ流の自由說を祖述した。こゝに於いて民權鬪士の指導理論は一變し、從來の、實地を重んじた漸進的な英米派自由說から急轉して、理論感情を主とした急激なフランス派自由平等思想となり、鬪爭振りが一般活潑なものとなつた。

『民約論』と略ぼ同時に、理論的にではなく行動によつて此等鬪士を感激せしめたものは、露國虛無黨の悲壯な專制反抗の消息である。殊に少女ヴェラ・サシュリッチのトレポフ大警視狙擊事件、及びツァールアレキサンダー二世爆死事件は、何といふ大きなセンセイションを與へたらう。

尙ほ此の運動の氣勢を支持したものに、英國自由黨の勝利、愛蘭借地黨の奮鬪等があつた。

民間の闘士がかく着々と出足鋭く進出する勢ひには、流石の專制政府の堅陣も統制が亂れざるを得ない。政府中の聰明分子は、幾分の讓步の止むを得ざることを認めた。その著しい實例の一は、明治十六年に國會を開設するといふ大隈重信の所謂密奏である。その他國會開設を奏上した參議連は、伊藤、井上等からして、山縣、谷、曾我の如き軍人連にも及んだ。かく政府部内が動搖しつゝあつた折柄、外には有名な北海道開拓使拂下事件なるものが起り、天下の人心が反對と不平に沸然と湧き立つた。民權闘士はこゝぞと失政糺彈の火の手を揚げ、かゝる失政の起るのも、畢竟國に國會なく憲法なきためであると宣傳して、多大な効果を收めた。

此の年十月、民間闘士たる自由主義者等は約の如く東京に會し、昨年の假設的自由黨と期成同盟會を合して大政黨を作つて一大運動をなすことに決し、黨成つてこれを自由黨と稱した。これと同時に關西に於ける同志も日本立憲政黨を結成してこれに應じた。自由黨と意見を異にする連中は改進黨組織の準備をした。

政府は民間運動の火の手が意想外に猛烈なのに驚き、急いで開拓使拂下問題を撤回し、大隈一派を追放して陣營の統制を計り、更に聖詔降下を請ふて、來る二十三年を期して國會を開設する旨を天下に宣言した。

此の詔勅降下は專制政府からせば窮餘の策であつたにせよ、民間運動にとつては思はざる儲け物であつた。この詔勅の降下を機に、從來自由民權をスローガンとして專制政府に對抗して來た熱烈だが漠然たる民權運動が、政黨と云ふ明確有力な闘爭形態をとることになるのであるが、これはブルジョア對藩閥の政治闘爭史全體からみて一進步であつた。こゝで運動は發展の第二段に移つて來る。

第三　自由黨時代（明治十五年――十八年）

十五年以後政治闘爭は、政黨を中心として對專制の闘爭を展開して行く。そのうちで十八年頃まで自由黨が闘爭を

リードする形になつてゐるので、自由黨時代といふ。

政府では十四年十月國會開設の詔勅を降下して民權鬪士達の機先を制したが、いよいよその宣言を實際化する準備として、十五年二月伊藤博文一行は憲法取調の爲め洋行した。今日から思ふと、事がこゝまで來た以上、政黨の方でも冷靜に準備をしつゝ二十三年を待つてゐたら可いのであるが、物の勢といふものは、さう簡單に片付かぬ。多年の惡感情と猜疑心から、民間鬪士は專制政府をさう易々と信ずることが出來ないので、鬪爭態度を緩和するどころか、益々火の手を强める(事實又何をするか知れない)。殊に昨年十月政府を逐はれた大隈以下の人々が、これも昨年の自由黨結成の際に、指導理論の相違からこの黨に加はらずにゐた人々（嚶鳴社一派及び三田出身の青年政客等）及び東京大學の青年等と團結して立憲改進黨（十五年三月）なるインテリ・ブルジョア一黨を結び、表面的ながら自由黨と共同戰線を張ることになつたので、民間鬪士の勢焰は揚がるばかりであつた。

政府は、共に兩立せずとして逐つた大隈一派が一黨を結んで民間鬪士と同じく攻勢をとつたのを見るや、新な脅威を感じた。それで種々輿論に對する對抗策を案じたが、その第一は新聞による言論戰であつた。御用記者達は皆をうけて勤王論王道論を振りかざし、民權鬪士殊に自由黨の人々を國賊なるかの如く論じた。自由黨側では『民約論』一點張りでは何うにもならぬので、明治維新なるものゝ再檢討を始め、維新の大業は本來が立憲運動であり今日の自由民權運動はその繼續であり、從つて民權運動を成功せしめるのが陛下に忠なるものだと應じた。民約論の思想を徹底せしめると、自然國體問題になるのに、そこまで行かなかつたところに當時の日本人の氣性が見える。だがかういふ御用記者連の國賊呼ばゝりも全然反響がないわけではなかつた。此の年四月の板垣退助岐阜事變の如き、その著しい現はれであらう。御用記者達は此の對抗を更に有力なものにするために立憲帝政黨を組織した。これは必ずしも政府の意をうけて作つた政黨ではなかつたが、民間政黨はさうは考へず、これを目標に鬪爭が尖銳化した。

政黨の團結が各地到るところに蔓延し、闘爭分野が全國に及ぶや、政府は忽ち得意の彈壓を下した、曰く集會條例改正追加、曰く請願規則、曰く府縣會議員の聯合集會及び往復禁止。正面から此の强打を喰はして置いて、裏面からそれぞれ手蔓を辿つて懷柔策を試みた。その最も著しい例は自由、改進兩黨首に對する洋行慫慂である。正直な板垣は忽ちこれに引かゝつた。さうして自由新聞を發刊して黨の闘爭武器たらしめたばかりのところであり、有力な二三黨員が脱黨を賭して洋行中止を論じたに拘はらず、遂に後藤象二郎等と歐洲に向つた(十六年十一月)。板垣が歐洲に向つた理由は如何なるものであつたにせよ、この擧が自由黨の闘爭氣勢を殺いだことは事實であつた。

此の時、心ある人々の最も疑問視したのは洋行費の出所であつた。さうしてこの疑問を先づ一言したのは改進黨の機關紙であつた。(疑問の口火もそれとなく政府筋から匂はされたものかも知れない)。自由黨は憤怒して盲目的に反撃した。これを見た政府は奇貨措くべしとなし、兩黨離間の策をとり自由黨に對して當時改進黨の兵站部視されてゐた三菱會社を攻撃する材料を與へて、自由新聞で三菱の罪惡を極論させた。

政府の三菱壓迫は種々の事情から出てゐるが、要するに新興ブルジョアの大資本主義が藩閥專制政府の基礎を經濟的に脅威するに至つた結果と見て可い。又三菱の首腦者岩崎が改進黨首領大隈と個人的に特殊關係があつたことも、一原因であるかも知れない。他派の舊資本團と三菱との對抗といふことも考へられる(政府は三井と特殊關係があつた)。兎もあれ、政府は既に殆んど命令的に他派の資本家を總動員して共同運輸會社なるものを作り上げて、打倒三菱にかゝつてゐた。此の時、丁度板垣洋行費問題から自由改進兩黨が隙を開いたので、好機至れりとばかり、離間策を施し、打倒三菱運動の方に利用したのである。正直な自由黨は、打倒三菱には「海坊主退治」、打倒改進黨には「僞黨撲滅」のスローガンを掲げ、鳴物入りで攻め立てた。

今日からいふと、一部自由黨の正直さは憐殺すべきものがある。最近の研究によると、板垣自身こそ知らなかつた

らうが、洋行費が政府の手で三井側から出てゐることが略ぼ明白にされてゐる。且つ大隈だけが三菱から金を受けたのではない、自由黨の黑幕たる後藤の如きはこれより甚しいものがある。且つ三菱をかゝるものたらしめたのは專制政府の保護なのだから、改進黨よりもむしろ政府を攻撃すべきであつた。自由黨もその理屈は分つてゐたらうが、事こゝに出でずに感情に走つて改進黨に鋒先を向けて、民間運動の闘爭陣營を最後迄分裂に終らしめ、專制政府に陣營立て直しの暇を與へたのは、何といつても愚といふの外はない。

だが或はこれが元來兩黨のもつてゐた運命で、政府の離間策の如き、口火の役をつとめたに過ぎないのであつたらう。自由改進兩黨の間には、その指導理論と政治闘爭の手段と結成分子との性質相異から生ずる暗默の不和が、抑もの最初からあつたのである。自由黨の本體は、舊封建士族、地方の中農階級、無產壯士、それに少數のインテリゲンチャであり、改進黨の方は、新興の都市ブルジョア、地方の大農地主、及び多數のインテリゲンチャである。結局は同じブルジョア政治闘爭を目指して專制政府に對抗しても、利害とする所が自ら異なるものがあらう。且つ改進黨の中堅は自由黨結成の際、指導理論の相異から加盟しなかつた人々である。「僞黨」といふ感情は、自由黨が當初から改進黨一派に對して抱いてゐたものであつた。

「海坊主退治」、「僞黨撲滅」の叫びは、明治十六年の大半の間續いた。改進黨も自由黨の攻撃に多少對抗的態度をとつたが、インテリゲンチャが多い此の黨は、鳴物入りの喧嘩に於いて到底自由黨の敵ではなかつた。

だがかく一部自由黨の人士が「僞黨撲滅」に勝利の興奮を味つてゐる中にも、自由黨そのものは漸く重大なヂレンマに陷入りつゝあつた。

初め自由黨の指導幹部がルソオの民約論を指導理論として歡迎したのは、自由民權を宣傳する武器として明快な議論を利用したゞけであつて、英米自由主義に育つた彼等は、民約論流の革命思想、自由平等の理想を直ちに實行する

心算ではなかつた。然るに此の理論が尊重され勢力を得るにつれて、黨內にはこの理想論を直ちに實行せんと欲する人々が生じた。殊に黨の中堅たる青年鬪士が共鳴した。十五年以降、黨としての合法的鬪爭が彈壓（十六年には新聞紙條例改正、出版條例改正が追加される）されるに及んで、彼等は益々激昂し、指導幹部とは別に非合法的鬪爭によつて此の理想論の實行を圖つた。彼等は青年にありがちなロマンチックなヒロイズムから、虛無黨的手段によつてフランス革命の如き舞臺を現出したいとさへ望んだ。その非合法鬪爭には、種々のプログラムが決定されてゐたらしいが、今日明確にその證跡を辿ることは難い。だが十五年以後續發する「暴動」なるものが、大抵その何れかに連絡をもつてゐるところを見ても、さうと察知される。さうして注意すべきは、この運動の一端がプロレタリア階級と接觸してゐる點である。いはゆる「暴動」乃至それに類する主なものを時間的に列擧すると、左の如くなる。

明治十五年十月　車會黨事件
同　十一月　福島事件
同　十六年三月　高田事件
同　十七年五月　群馬事件
同　九月　加波山事件
同　十一月　秩父暴動
同　十二月　名古屋事件、飯田事件
同　十八年　春　日比谷公園爆彈事件
同　十九年六月　靜岡事件

かくて自由黨に於いては、何時とはなく此の非合法の急進分子が黨の鬪爭をリイドするやうになり、黨の指導者達

がこれに引き摺られるといふ奇觀を呈した。かゝる急進分子が、單に自分の利害から專制政府に對抗して來た地主やブルジョアと對立的地位に立つのは當然の理であらう。而かもこの對立は積年の不景氣とまつて黨の經濟的基礎を不安にする。對立が激化する一方、政府の彈壓と迫害は日增に强くなる。有力者はその犧牲となる。暴動は頻發する。原因に無知な大衆は自由黨そのものを嫌忌し始める。かくて十七年十月に至り、自由黨は、大會を大阪に開き、黨としての合法的闘爭不可能といふ口實の下に解黨し、今度は專ら精神的結合のみによつて運動を共にすることゝした。是より先き、立憲政黨は旣に十六年三月解黨し、帝政黨は九月解黨し、各地の地方政黨で解黨するものが續出したが、大半は政府の彈壓と經濟的理由によるものであつた。

十七年十二月に及び改進黨にも一種の解黨論が起つたが、黨員の大部分が贊成しなかつたので、黨首大隈以下數名の脫黨を見た。殘つた黨員は合議制の指導幹部の下に、依然合法的闘爭を續け得たが、これはその穩健な現實主義と堅實な經濟的基礎によるものであつた。

元來は自由黨も改進黨もブルジョア政治改革を目指して起つたものではあつた。が、自由黨は專ら理想に奔り、華華しく專制主義と闘つたが、半途で精力を消磨し去つた。改進黨は政治的闘爭に於いては常に自由黨の後塵を拜してゐた觀があるが、堅實に步を進めて來たので、黨の危機に立つて善處する底力を養つた。かくて十七年以後數年間、改進黨は唯一の大政黨として、民衆啓蒙のため、ブルジョア民主主義確立のために地味な闘爭を續けた。

第四　改進黨時代（明治十八年――二十年）

十七年自由黨解黨後二年間は、政治闘爭の點からいふと無風帶といつても可い。舊自由黨の過激分子が、その志からいへば可憐な、然しその成果からいへば精衞塡海ともいふべき非合法運動を二三企んだことは前記の表をみても分

かるが、然し大勢からいふと、自由黨派の活動は、彈壓のため、地方の不況のために冬眠的沈睡に落ちた。改進黨は流石に都市のブルジョア資本家やインテリゲンチャに基礎してゐたゞけ、黨首の脱黨にも係らず立派に存立し、十八年以後毎年大會及び大演説會を開いて氣勢を揚げはしたものゝ、聰明な現實派たる彼等は、專制政府の牙城に肉迫するといふ華やかな形式的鬪爭よりも寧ろ啓蒙的に社會啓發に盡力して、社會改良を唱へ、ブルジョア政治改革の實質的達成を目指した。此の政焰衰微の間に、明治十六年「僞黨撲滅」の混戰を機に陣營を立て直した政府は、憲法發布の準備をし、內閣制度に組織代へをして、着々立憲政治の實現に努める一方、彈壓の手は緩めず、且つ爵位令を發して、貴族なるものを公定し、他日のため專制政治の根本を固めることを忘れなかつた。だから政治界に於いては、政黨の表面的無力に對し、政府が斷然これをリードしてゐたといへる。だがその專制政治も、岩倉の死後伊藤博文が中心となるに及んで、實質的には絕對專制的支配力を失つて、一種のブルジョア政府となりつゝあつた。此の點からいつても、政治界の無風帶といふことが首肯されるわけで、躍進する新興資本主義の力が既に實質的に藩閥專制政府を征服してしまつたとせば、ブルジョア政黨たる民間黨としてはこれとの鬪爭によつてかち得べきものが何もなかつたからである。

今日から冷靜にいふと、ブルジョア政治改革の問題はもう國內的には大體片付いたわけである。それはブルジョア資本主義の急激な進展（政府保護下に）による一種の無意識的妥協によつた爲め極めて不徹底な結果となることが明白であつたにせよ、先づ止むを得ない。然しそれは今日回顧的にはさういつて濟ましてゐられるが、まだ上下の猜疑や惡感情の多大なものが生々しく殘つてゐた當時の人々がさう達觀の出來なかつたのは、無理もない。彼等からいふと、立憲政體の成立は最早や確實なことにせよ、それを專制政府の手に委してゐたのでは何ういふものを與へられるか分からないといふ不安が斷えずあつた。といつて、種々な點で直ちに政治鬪爭を再開するには形勢が不利である。

やむなく彼等は連合して政府の施設を監視するといふ消極的鬪爭の態度をとつた。これが卽ち大同團結なるものゝ生れるに至る機運の動きである。

此の間、既に實質的にブルジョア資本主義の勢力下に歸した專制政府——假にこれをブルジョア的專制政府とよばう——が最も困惑した問題は、國內的ではなしに、國外的のものであつた。卽ちブルジョア革命の達成——ブルジョア資本主義の完成に必然的にともなふ國際資本主義的競爭への加入を正體とした「條約改正」問題、これである。勿論明治政府が此の問題に努めたのは一朝一夕のことではない。條約改正問題には長い歷史がついてゐる。然し明治十七八年の交に至ると、實質的にブルジョア化した政府は、如何にしても此の問題を解決して、關稅自主權と治外法權撤廢を獲ち得る必要に迫られた。

民間鬪士も此の問題に無意識ではなかつた。だが彼等はこれを別の觀點に於いて取り上げた。彼等は淸韓その他に對する列强の壓迫により、國際資本主義的競爭の東漸的現勢に眼醒めた、彼等のいはゆる東亞問題、「東洋の安危」なるものがこれである。東洋の安危が日本に關するところ甚大であるといふ意味は、東洋が國際資本の被搾取者となり了れば、日本の國力（卽ちブルジョア資本）の伸張が不可能になるといふ意に解すべきであらう。從つて日本の資本主義的伸張には、國權恢復を絕對的必要とする。こゝに至つて東亞問題と條約改正とは同一要求を內外から見ただけだといふことが分かる。政府も民間鬪士も事實は同一理想達成の爲めに奮鬪してゐた觀があるが、立場の異なるによつて見方を異にし、目的實現の手段を異にしたのは當然のことであつた。

十九年に條約改正談判を始めた政府は、此の問題を解決すべく、彼を主にした。功を急ぐ政府としては、それも仕方がなかつたらう。治外法權で讓步し、內地雜居を許すことにした上、彼の意を迎へる心算から盛んに所謂歐化政策なるものを實行した。然るにこれは、我を主とし、わが國民的覺醒を主として、政治的社會的改良の問題を解決せん

とした民間鬪士乃至彼等のシンパサイザーたる人々の痛烈な反對に出會つた。

政府はこれを押切る意氣なく、條約改正を延期（中止）するに決した。民間鬪士はこの機を外さず、消極的監視の態度を積極的に變じ、條約改正失敗を題目として舊勢力の糾合を謀り、これに乘じて內政上に於ても專制政府を牽制しようとした。此の時民間運動の最前線に立つて最も猛烈な活動をしたものは、いはゆる壯士である。堪りかねた政府は、都下の民間鬪士の有力者に對してクーデターを下した、卽ち有名な保安條例の發布で、明治二十年十二月二十六日のことである。星亨、林有造、中島信行、尾崎行雄、片岡健吉、中江兆民、馬場辰猪、以下一時の名士壯士五百餘名が逐客となり、天下騷然、官民が再び猛烈な政治鬪爭を開始しかけた。

第五　大同運動時代（二十一——二十三年）

大投機師後藤象二郎は、この氣運に乘じて民間運動の統一を計らんとし、蹶起して大同團結の旗幟の下に全國を遊說し、東洋の安危、國家の前途、政府監視を大聲叱呼した。先づ此の旗幟の下に走せ參じたのは、解黨以來日蔭者扱ひをうけてゐた舊自由黨員であつたが、改進黨の一部、國粹派の學士等もこれに加盟した。全國各地の有志はこれに響應し殆んど十三四年の民權運動全盛時を再現して、政府にとつて一大敵國を出現せしめた觀があつた。

政府はこれに對抗すべく、十六年に兩虎を爭はしめて利を得た故智にならつて、先づ改進黨の舊總理大隈を外相にし、條約改正の難事業を續行せしめ、その條件として前任者（井上馨）の爲すところの根本を更改せぬといふ事をもつてした。大隈は從前の改正案に多少の改良を加へ、着々諸外國と新條約締結に進んだ。大隈は得意であつたが、改進黨は窮した、今迄攻擊した井上案と相去ること左して甚しくない新條約を心にもなく賞揚しなければならなかつたからである。舊自由派は又も政府の一部と相呼應して大隈及び改進黨を攻め立てた。國粹派も改正中止を欲した。だ

が大隈は屈しなかつた、改進黨もよくこれを支持した。然し大隈が刺客に遭つて重傷を負ふた爲め遂に、中止された。(二十二年十月)(此の間二十二年二月十一日憲法發布の大典がある)。

さてかく民間運動の陣營を攪亂して置いて、政府は更に二十二年三月後藤を入閣せしめ、大同團結運動を骨抜きとなした。大同團結は首腦を失つて分裂し、大同俱樂部と大同協和會を生じた。さうして條約改正反對運動中は相提携してゐた政治家達が、中止と共に確執を新にした。かくて愛國公黨の再興、自由黨の再興となり、國會を前に再び大同を策するものがあつたが、改進黨の方で氣乘りせず、一方自治會、保守中正黨、九州改進黨の如きも組織乃至再興され、民軍の陣營は小黨分立の混沌たる狀態のまゝ二十三年七月の第一回總選擧を迎へたのである。

國會開設と共にブルジョア政治鬪爭期、ブルジョア民主主義移入のため全國的の政治鬪爭が(甚だ不徹底不滿足にしたが)大體終ることになり、いはゆる政治小說全盛の時代も略ぼこれと共に去るわけである。これからの政治鬪爭は國會中心に政黨なり議員の手なりで行はれる、從つて此の後の政治小說が別趣のものとなるのは當然であらう。

二　文學的

背景の二として、吾等は當時の文學界の鳥瞰的概說をもつてする。讀者は背景の一(政治的)と相映發して、これを讀むことによつて、政治小說なるものゝ文學史的位置を明確ならしめ得やう。

序　論

初期文學について　明治文學を歷史的にみて初期といふ場合には、明治十年頃までと見る人々もあり、明治十八年に坪內逍遙の『小說神髓』と『書生氣質』が出、硯友社の結成の出來た前後までをいふ人々もあるが、便宜上今十八

九年までとする。如何なる明治文學史でも此の期の文學は至つて簡單に手輕に扱はれて、見るに足らず、讀むに足らず、何々するに足らずと片付けられてしまつてゐる、讀む方でもそれを怪まない。今日の價値判斷からいへば事實さういふものかも知れないが、『詩を作るより田を作れ』といふ思想が大な勢ひをもつてゐたころ、あまり儲かりもしない文學戯作などを生涯の仕事として曲りなりにも新文學興起までの過渡をつなぎ、新文學の胎生する土臺となつた先人達の功績に報ひるに、何々するに足らずでは些か酷に過ぎる。機に臨んで彼等相當に研究してやつていゝ。

その頃の文學觀　もつとも、此の當時の作家又は一般の人々の文學に對する考へが如何に幼稚な、卑屈的なものであつたかといふことを觀てみると、かういふ待遇をうけても止むを得ない氣がする。此の頃文學といへば漢詩漢文、和歌和文などのやうなものをさすので、今日第一に文學といへば頭にうかぶ小說などは眞面目に文學視されず、戯著とか戯作とかいつて、いはゆる婦女童幼の玩弄物視されてゐるのが普通であつた。創作を尊び模倣を忌むのがその國の文學の尊嚴を維持する所以であるとせば、創作小說などは文學の第一位に置いて尊ばれるべきものであらうに、この頃では創作家自身さへがそんな事を考へず、自ら輕んずること甚しいものがあつた。この卑屈的な考へを正して、國民の文藝的創造性を發揮させたのが、明治文學の第一の使命でも意義でもあつたのである。

その頃の文學思潮　**勸懲主義**　以上と多少關聯してであるが、此の頃の文學界の思想的主潮は、曲亭馬琴を集大成者とする勸善懲惡主義が概して勢力を得てゐて、世態人情のうがちを目的とした寫實風の作物もなくはなかつたが、まだ勸懲主義を獨立するとか排除するとかいふことも出來ず、却つて勸懲主義と妥協して、遠慮がちに寫實を試みてゐるやうな姿が見える。此の勸懲主義が勢力をもつてゐたのは、德川文學の傳統をうけてゐる點は勿論であるが、別に明治初期の政府が、敎部省をして有名な三敎則といふやうなものを發布させて一種の藝術政策を實行した結果も與かつて力があつたことゝ思ふ。又「文明開化」の利用厚生主義と一寸步調の合ふところがあつたのも一因であらう。

だが西洋流の文學思想の傳播や文學者自身の自覺やから、上述のやうな、文學に對する卑屈的な考へが訂正されて來、それと同時に文學の目的も勸懲主義にあるのではなくて世態人情の描寫にあり、卽ち純な寫實にあるのであるといふ考へが勢力を得て來て、文學界に確固とした新しい途が開けて來た。これに大に貢獻したのが理論的には坪內博士の『小說神髓』であり、實行的には二葉亭の出現、硯友社一派その他の寫實主義運動である。だから傳統上思潮上からいへば、明治の文學は總體的には馬琴流の勸懲主義の勢力に對する反動とみれば見られないこともない。

明治十年前後までの文學

混沌期の二期　混沌期を明治十八年までとして、それが文學史上自から二期に分かれる、明治十年の西南戰爭までが第一期、それ以後が第二期といふ風にである。

明治十年頃までの文學界　第一期の文學は九分九厘まで前代繼承の模倣文學で、獨創性と認められるものは殆んどなく、嚴密にいへば、それは文學らしい確固とした文學の出なかつた時代であり、文學的闇黑時代である。社會は自家生活の基礎の整理に急だつたので、その基礎に發展すべき文學などはまだ顧みる餘裕をもたなかつたものと見ていい。明治八年四月の東京日々新聞の社說に當時の文學の衰へたのを論じて、「歷史には維新史すらなく、小說傳奇は十年來廢絕し、脚本地を拂ひ、新作狂言醜を極め、和歌連歌俳諧又衰微してしまつたが、たゞ盛んなものは飜譯書の出版だけである」といつてゐるが、若干の割引をつけて讀めば、これは大體當時の文學界の實狀であつたらう。

その頃の文學の種類　明治元年から十年頃までの間に幾分文學として認められるものに何んなものがあつたかといへば、新聞と飜譯物を別にすると、大體戲作小說と脚本であり、小說の方には幕末から引き續いた合卷物（『白縫物語』、『倭文庫』、『阿玉池櫛月形』、『薄佛幻日記』などの）、一九、三馬流の滑稽うがち物（『西洋道中膝栗毛』、『安愚

樂鍋』などの)、幕末漢學者の戲文の脈をひく漢文の戲著(『柳橋新誌』、『東京新繁昌記』などの)、小説と歴史の混血兒めいた實錄物(『復古夢物語』、『近世紀聞』、『明治太平記』などの)の種類があつたが、文學上の價値からいへば、滑稽うがち物が稍や見るに足るだけであつた。

合卷物とその作者達 維新の當時合卷物は大抵は幕末からの引續き物で、形式内容とも些の創意がなく、僅に挿繪に時代を反映した珍らしいものがあるに止まる。此の江戸式合卷の出版形式は十五六年頃まで續き、その前後から(事實は十一二年頃から始まる)東京式の活字の合卷物と永久に代謝してしまふことになる。此の種の合卷物の作者としては、二世柳亭種彦、二世爲永春水、萬亭應賀、鶴亭秀賀、假名垣魯文、山々亭有人、柳水亭種淸、二世笠亭仙果などがあるが、明治文學として見るときは春水、應賀、魯文、有人などが幾分記するに足るだけである。就中有人(本名條野傳平、號採菊、明治三十四年歿)が後に割合に活躍してゐる。彼は新聞界の先覺記者の一人であり、新聞小説の大家として重んじられた。

滑稽物と魯文 滑稽穿ち物は、形式としては一九、三馬を模倣したにすぎず、内容も至つて淺薄なものではあるが材料にその時代の世態人情をとつてあるので大に時人の歡迎をうけた。或る意味で明治十年以前の代表文學である。從つて此の種の作物を殆んど一手に引うけた假名垣魯文はこの時代の代表的文人であるともいはれ得る。魯文(明治二十七年歿)は商家の出で別に學問に根蔕があるわけでも何でもなかつたが、目先きの利くのは一種の天才といつてよく、巧みに時代の風潮に乘じて時代意識の向ふところを察して諷刺諧謔の筆をとつたので、歡迎をうけたのも無理がない、當時の日本人の生活、西洋崇拜、文明開化熱などの混沌たる情景を知るには魯文を讀むに如くはない。『西洋道中膝栗毛』(明治三年)、『安愚樂鍋』(明治四年)、『胡瓜遣(きうりづかひ)』(明治五年)などをこの頃の代表作とする。

應賀の諷刺物 魯文が寧ろ文明開化謳歌者であつたのに反し、萬亭應賀(本名服部孝三郎、明治二十三年歿)は、新

文化に反抗する態度でいかにも苦々しげに諷刺勸懲の戯著を作り、『新文鬼談』、『活論學問雀』、『異形異物各覽會』、『諸藝畑水練』、『近世あきれ蘂』、『馬鹿につける大妙藥』など、見るから世間を小馬鹿にしたやうな題をつけて明治五年以降毎年數冊公にした。往々時事を諷き、時弊を罵る點でいさゝか首肯させるところがあるが、概していつて新時代に對する理解が殆んどないので、老痴人の寢言めいて聞えるのも止むを得ない。

柳北と撫松　漢文戯著の名家としては成島柳北(明治十七年歿)と服部撫松(明治四十一年歿)がある。前者は『柳橋新誌』、『京猫一斑』、その他の著者、後者は『東京新繁昌記』の著者、『東京新誌』の記者として記憶される。

實錄物とその作者達　實錄の作者としては、『近世紀聞』の染崎延房、『復古夢物語』の松村春輔、『明治太平記』の村井靜馬、などがある。村井靜馬は文名がないのでこゝには記さない。染崎延房は卽ち人情本や合卷物の老大家二世爲永春水のことで(明治十九年歿)ある。『いろは文庫』、『婦女八賢誌』、その他の作者としての彼の盛名は當時まだ相當大きかつたらしいが、此の時期の彼の文學活動は末枯の秋のやうな物淋しい印象を與へる。だが作家としては本來魯文より一二段上であらう。

春輔の人情物　春輔(號櫻雨園、明治十七年歿か)は實錄物の作家として知られ、馬琴流の英雄でなしに人間らしい人間を描くに幾分成功してゐる。又彼は此の頃不振だつた人情物『春雨文庫』(實錄と人情物の混淆作、二篇以後和田定節)、『春風日記』の作者としてやゝ注目に値ひする。

戯曲　河竹默阿彌　戯作界に於ける魯文を凌駕する盛名のあつたものは、脚本界の河竹默阿彌である(本名吉村新七、明治二十六年歿)。彼は江戸時代で『村井長庵巧破傘』、『三人吉三廓初買』その他の傑作を劇壇を獨歩する概があつたが、明治に入つても新た散髮物(ざんぎりもの)の新境地を開拓して『島衛月白浪』などの名作を公にしてみせた。但し十年以前に屬するものは、『東京日々新聞』、『明治巷談東日記』などの數種で。明治に於ける眞の活動は十年以後に入らう。

明治十年以後の文學（その一）—戲作小說、續き物

明治十年以後の文學界大勢　十年の役以後、日本人は自家の內的文化の整頓といふ方に眼を向け、漸く文學を味ふだけの餘裕が生じたが、當時の一般社會は恐ろしい勢で上下とも西洋崇拜を追ひ、文明開化熱が全國に瀰つて來たころとて、かういふ社會が生み、かういふ社會が育て、かういふ社會が歡迎する文學が第一に何ういふものか、容易に想像がつく。かくて「我國小說ノ趨向將ニ一變セムトスルヤ、織田氏譯スル所ノ『花柳春話』之ガ嚆矢ヲナセリ」云云（森田思軒）といはれてゐるやうに、飜譯文學が「紛然群起」して新文學の第一線をきることになつた。そしてそれが更にこの時代の世間の政治熱、自由民權思想と結合して政治小說を現出させ、所謂明治新文學の基礎とも萠芽ともなつた。依然として混沌期ではあるが、その間多少展開の途がついた時代であるので、新文學胎生期乃至準備期といつてもいゝ。先づ前代から繼承の戲作小說が何んな變化をうけたか、それから語る。

戲作小說の變遷。新聞の續き物　此の頃には合卷物といふ出版形式はまだ行はれてゐたが、それは前々からの惰勢で續いてゐるので、戲作小說家の趣向を揭げる舞臺は別にあつた。一般出版界の先頭に立つて、新聞紙が長足の進步を遂げ、從來の所謂大新聞の外に、家庭向きの小新聞といふものが現はれ、この小新聞（『東京繪入』、『いろは』、『讀賣』など）が競つて此等の戲作者を收容して筆を執らせた。それで合卷草双紙小說の變形として續き物と呼ばれる一種の新聞小說が生じて來た。それは新聞の雜報を引のばすか潤飾するかしたもので、別に淸新な手法や趣向もなく、いはゞ合卷草双紙を活字で組んで繪を少なくしたやうなもので、底を割れば平々凡々なものであつたが、それでも新聞といふ新機關を利用したので、一般社會に報道的興味と共に文學的嗜好を普及させた功は認むべきであらう。たゞ新しい材料をつかんでゐただけにその手法が幾分寫實の分子が多くなつて來て、必ずしも勸懲を目的とはしてゐない

ことは注意すべきである。當時の合卷的出版の多くは、この續き物を、改刪するか、或はそのまゝで出版したものであつた。此の續き物の現象は雜誌（『歌舞伎新報』、『芳譚雜誌』など）にも見られる。

この頃の小說作家　この頃の合卷作家、續き物作者は大概、魯文、春水、高畠藍泉（三世柳亭種彥）の三者の門下に多く、この三者に師弟一門の關係のない作者は少なかつた。

魯文及びその一派　魯文自身の此の期の有名な作には『高橋於傳夜叉譚』（明治十二年）、『格蘭氏傳倭文賞』（同年）『荒磯割烹鯉魚腸』（十四年）などがあり、『名廣澤邊萍』（十三年）、『籬の菊操鏡』（十四年）などの作者として又後に繪入自由新聞で活動をみせた二世花笠文京（渡邊義方）、『蓆旗群馬嘶』（十四年）、『川衞天網船』（十五年）その他の作者彩霞園柳香（雜賀豐太郎）、胡蝶園若菜（若菜貞爾）、蟹垣左文（野崎城雄）、江東みどり（齋藤緑雨）は皆彼の門から出た作者、又純然たる門人ではなかつたが、『鳥追阿松海上新話』の作者久保田彥作、及び伊東橋塘（專三）などは魯文の傘下に屬する作者である。

柳亭種彥（三世）　明治十五年に二世（實は三世）柳亭種彥の號を嗣いだ高畠藍泉は幼名瓶三郞、幕府のお坊主出身であるが、畫を能くし又相當の學問識見もあり、氣慨にも富んだ人物であつた（明治十八年歿）。その作は、趣向に奇をもとめず、道義を說くこと强く、概して舊士族の世界を寫したものが多く、文品では種彥を追ふてゐたが、それでも一種の新味があり、いつも文明開化の啓蒙者の態度で筆をとつてゐる。代表作とも見るべきものは、『巷說兒手柏』（明治十二年）、『梅柳春雨譚』（十三年）、『岡山紀聞筆命毛』（十五年）、『楓時故鄉の錦木』（十六年）、『怪談深閨病』（十七年）、『蝶鳥筑波裾模樣』（十七年）、『黑白染分韁』（十八年）などである。

柳亭派の人々　柳亭派の長老としては、柳水亭種淸（櫻澤堂山）、文亭梅彥（四方新次郞）、二世柳下亭種員（有山新兵衞）、などがあるが、種淸が『五人殲苦魔物語』（明治十二年）、『艷孃毒蛇淵』（十三年）を著したぐらゐが見るべき

ものである。門人には柳淵亭藍江（倉田恭英）、柳條亭華彥（三品長三郎、號蘭溪）、柳塢亭寅彥（右田寅彥）などがある。華彥は『操の一節』（明治十六年）『小夜千鳥浪音信』（同）以來、新聞小說家として明治前半での有數の大家である。寅彥は此の頃文名があつた割合に知られた作品がなく、後朝日新聞記者となり、更に帝國劇場の座附作者として名を成した。前田香雪（健次郎、夏繁）はこの派の客員とみてもいゝ。（饗庭篁村、幸堂得知もさうであつた。）

爲永派の人々　爲永派は割に少なく、二世春水の外には狂文亭春江（知久泥堂）、古川魁蕾（精一）の外一二にすぎない、この派はやはり人情本式の濃厚な才子佳人小說が得意であつた。當時續き物の壓卷といはれた東京繪入の「淺尾よし江の噺』（後に十六年に單行本、『淺尾岩切眞實競』と改題）などがその好い例であらう。岩切某といふ才子肌の書生に幾人もの佳人が戀するといふ甘たるい物語りだが、これが大流行をした（坪內逍遙、內田魯庵談）といふところを見ると、時の社會の小說觀もうかゞはれて面白い。

岡本起泉その他　岡本起泉（初め貴泉、名は勘三、明治十七年歿）は上の三派の何れにも屬しないが、若年で歿した割には稀に見る多作者で『夜嵐阿衣花仇夢』（明治十一年）、『東京奇聞』（十二年）、『澤村田之助曙草紙』（十三年）『幻阿竹噂廼聞書』（十四年）、『根瀨戶戀神奈川』（十五年）、『思案橋曉天奇聞』（十五年）などの外數種ある。小說史上名を記すに値ひする一人である。その他、有人、應賀、梅亭金鵞（瓜生政和）、二世仙果などにも多少の作がある。

注目すべき二文星。篁村と南翠　こゝで、續き物の作者としては以上の諸家の遊軍とも見え、何の門下にも屬してゐないが、以上の諸家よりもはるか重大な文學史的位置をもつ作家が二人ある。これは饗庭篁村（與三郎、竹のや主人、大正十一年歿）と須藤南翠（光暉、變名土屋郁或は郁之助、大正九年歿）である。此の二人は續き物作家の出ながら共に戲作的習氣を脫して新文學初頭の二文星と輝やいた。二人が盛名を恣にしたのは二十年前後であるが、共に十五年ごろから續き物の筆を取つた。だが二人の作風は正反對で、篁村が輕妙洒脫、八文字屋風の短篇物に自然な流

露を示したのとは反對に、南翠は馬琴風の結構を立てるに巧みで、事件構想の手腕が尋常ではなかつた。一は政治小說が大きらひ、一は政治小說家としても名を馳せたなど、何處までも對立してゐる。

關西派の巨匠文海　此の頃關西新聞界の續き物作者の元老宇田川文海の名も逸してならぬものであらう。『西南拾遺』（明治十二年）、『春霞筑波曙』（十四年）、『北國奇談檜の橘』（十六年）、『巷說二葉松』（十七年）などの作があり世話物よりも時代物を得意とし、沙翁物の飜案を試みたり、政治小說に筆を染めたり、二十三四年頃まで可なり大きな勢力をもつてゐた。

同じく（その二）——西洋飜譯文學

新文學に對する要求　飜譯文學の流行　舊來の戲作が新しい時代の文運に動かされて續き物と一進歩をとげはしたもの丶西洋文明崇拜、文明開化熱の漲り出して來た當時の社會、舊い傳統を破壞して新しい光明を仰がうと一心になつてゐる當時の社會が、舊來の戲作に滿足せず別に新しい文學を求めたのは當然であらう。然かもその滿足の出來るやうな新文學は一朝にして出來はしない。時も熟さないし、力も足りない。そこで彼等はその不足を西洋文學で滿たさうとする。かうして明治十年以後二十年前後までの飜譯文學全盛期を現出することとなる。

西洋文學紹介の動機　明治初期の飜譯文學は大體始めから幾分の政治的意圖をこめてなされたものであるが、一面また別な理由もあつた。社會に斯のやうな要求のあつたことは別として、當時新教育をうけて西洋文明に接した青年達は西洋文明崇拜の一現象としてその文學にも接した。自然の結果として西洋の小說と舊來の戲作等と比較することになり、西洋小說の規模の巧妙、結構の複雜、思想の豐富、趣味の清新なのに驚いたらう。それで西洋紹介の序でに、上のやうに驚異と東西同一人情なところを知らせたいといふやうな興味から、文學飜譯の筆を執り出した點もなくは

ない。さうして始めはかく興味本位で筆を執られたものも亦、時勢の政治熱につれて次第に(殊に十五年頃から以降)政治的意味なり色彩なりを帶びさせられて來たのである。

初期に出た飜譯文學書　原作者の分布　明治十年前後から十八九年までに輩出した飜譯文藝の主なるものには、『歐洲奇事・花柳春話』(織田純一郎譯)、『蝶舞奇緣』(桑野鋭譯)、『歐洲情譜・群芳綺話』(大久保勘三郎譯)、『花心蝶思錄』(高須治助譯)、『人七癖』(森澄德聰譯)、『黃昏日記』(醒々居士譯)、『繫思談』(藤田茂吉、尾崎庸夫譯)、『想夫戀』(佐野尙譯)、『春情浮世之夢』(河島敬藏譯)などの人情物、『寄想春史』(丹羽純一郎譯)、『哲烈禍福譚』(宮島春松譯)、『春風情話』(橘顯三譯實は坪內雄藏譯)、『五九節操史』(松岡龜雄譯)、『佛國美談』(粟屋關一譯)、『春窓綺話』(服部誠一譯)、『自由太刀餘波鋭鋒』(坪內雄藏譯)、『慨世士傳』(坪內逍遙譯)、『梅蕾餘薫』(牛山鶴堂譯)、などの傳奇物(政治的分子もの)、『八十日間世界一週』(川島忠之助譯)、『月世界旅行』(井上勤譯)、『空中旅行』(同譯)『魯敏遜漂流記』(井上勤譯)、『海底紀行』(同譯)、『北極旅行』(福田直彥譯)などの科學的冒險物、『烈女之疑獄』(杣田策太郎譯)、『良政府談』(井上勤譯)『虛無黨退治奇談』(川島忠之助譯)、『哲爾自由譚』(山田郁治譯)、『佛蘭西革命記自由之凱歌』(宮崎夢柳譯)、『鬼啾々』(宮崎夢柳譯)、『西洋血潮小暴風』(櫻田百衞譯)、『春鶯囀』(關直彥譯)、『政海之情波』(渡邊治譯)などの政治的興味が中心のもの、『天路歷程』(佐藤喜峯譯)、『ガリヴァ回島記』(片山平三郎譯)、『狐の裁判』(井上勤譯)などの寓意物、等々があり、その原作者は英(モーア、シェークスピヤ、バンヤン、スウイフト、デフオー、スコット、ヂスレーリ、リットン)、(佛)フエヌロン、デュマ、ヴェルヌ、ヴェルニエー)、獨(シルレル、ゲエテ)、伊(ボカチョ)、露(プーシュキン)に亘つて相當有名な文豪が網羅されてゐる。以上を一見しても此等の西洋文學が、物質文明の移入同樣、何も彼もごちやごちやに一時に輸入紹介されたといふことがわかる。飜譯の體も始めは抄譯乃至改作かと疑はれるのもあるが、終り頃に及んで眞面目な文學的なものになつて來てゐる。

聖書飜譯の完成　尙ほ明治十三年『新約全書』の邦譯が奧野昌綱、松山高吉、植村正久等の手で完成されたが、これが飜譯文學の文體や、後年の文學界や思想界に可成り大きな影響を與へた事實は忘れてはならない。

同じく(その三)――飜譯文學の影響、創作小說

飜譯文學の影響、創作慾を刺戟す　淸新な西洋文學の移入につれてそれが如何程當時の日本人の心を感動させ、引いては彼等の創作慾模倣慾をそゝつたか、それは模倣的創作の續出によつて容易に看取することが出來る。それ等の創作中先づ現れたのは人情物の飜譯小說を手本にしたものであるが、これは當時の日本の小說界に流行してゐた才子佳人流の人情小說と同趣のものであるから、一番模倣し易かつた爲めであり、他の類ひはさう模倣し易くなかつた爲めであらう。著しい實例は和田竹秋の『鴛鴦春話』(明治十二年)と菊亭香水(佐藤藏太郎)の『艶才春話』(明治十五年)の二つである。

此の二つはともに明白に『花柳春話』をモデルとして作られてゐる、才子佳人が私に相契るが浮世の風浪に阻まれて多年辛苦する、だが結局目出度く納まるといふストーリイはそつくりそのまゝである。『艶才春話』の方はストーリイにも文章にもやゝ强く模倣の痕跡を示してゐる。だが二作とも、舊來の戲作小說や續き物よりは文學的要素に富んで居り創作的才能を示してゐる點で、文學史家は相當の注意を拂つていゝものである。『艶才春話』の後身は卽ち當年洛陽の紙價を高めた『慘風悲雨・世路日記』(明治十七年)である。或る意味で此の二つの小說は『當世書生氣質』以前に出た最も注目すべき創作小說であると思ふ。

同じく(その四)――政治小說

此の項は後章の概觀と重複するから省かうかと思つたが、體裁上、やはりあつた方がいゝとも考へられたので、殘して置くことにした。大略なところは諒察されたい。

政治小說流行　明治十五年前後に至つて、數年以來高まりかけてきた全國自由民權論、一般の政治熱が頂上に達しかけたかの觀があり、それと同時に政府は、民間の言論出版の自由を大に壓迫し、新聞、演說、結社、集會などの規則を甚だ嚴重なものにして極力この大勢を阻止しようとかゝつた。それでその政治的不平を吐露する機會と機關を失なつた政論家、操觚者達は、從來重視してゐなかつた小說といふ文學形式をかりて所懷を述べることを競ふに至つた。主として彼等の手になる十五年以降の飜譯文學が俄然强い政治的色彩を帶び、歐米の政治小說乃至政治文學を紹介したばかりでなく、政治に緣のない純文學物にも政治的題目を冠らせたり乃至さも本來政治的意味のあるものゝやうに改竄したりした。だがその中に、外國文學をかりて欝屈をもらすといふ間接的な迂遠な方法をとらず直接自家の胸臆を小說に漏す風が流行し出して、所謂政治小說全盛時代の出現となり、從來いふに足らなかつた政治文學が一時文壇の主流となつた。

飜譯文學と政治小說　元來飜譯文學と政治小說とはいはゞ同一原因の二つの結果といふべく、新敎育をうけた時人が西洋文學の飜譯によつてわづかにその文學的要求を滿足さしてゐた當時から早晩起るべき運命をもつてゐたのである。大まかにいつて明治十年前後から十五六年頃までは政治小說の萠芽期となつてゐる。此の間不斷に西洋文學に接し、乃至これに興味を感じて飜譯紹介に專心してゐた主な人々は大抵有爲の少壯政論家であつた。彼等の好んで讀んだ小說の著者たるリツトンやヂスレーリ、ユーゴーなどは立派な政治家であつたので、いつしか此等の譯者達の文學觀は一變し、文學小說も亦男子の事業として立派なものだと思ふと同時に、一面舊來の戲作の齒がゆい有樣をみては手がむづむづするのを感じたであらう。五六年間の準備で自分達の理想に添ふやうな小說を書けるだけの自信が出來

たが、たゞ時機が熟さなかつた。その時機を熟させたのは、主としてこの政治熱の高潮だつたのである。

政治小説發達の三期　政治小説發達の區別については後に詳説するが、今總括的にみて三段階に分けられるものとすると、第一期は十五年頃までゞ、この間に出たものは『民權演義情海波瀾』(戸田欽堂)、『自由之栞蝴蝶紀談』(上田秀成)、『龍宮奇談黒貝夢物語』(風頼子)など戯作風の多い寓意的なものである。第二期は十五年から十八年までとして、この間に出たものは概して傳奇的分子が多く、いはゞ傳奇小説中に政治的分子（政黨的主張）、政治的豫言を含ませた如きものになつてゐる。『民權泰斗板垣君近世紀聞』(中島市平)、『東洋自由曙』(馬鹿鈍子)、『齊武名士經國美談』(矢野文夫)、『福島奇聞自由夜話』(箕輪勝)、『阿國民造自由廼錦袍』(櫻田百衞)、『勤王爲經民權爲緯新編大和錦』(小室信介)、『自由艶舌女文章』(小室信介)、『文明東漸史』(藤田茂吉)、『佳人之奇遇』(柴東海散士)などはこの第二期の産物である。傳奇的分子の多いのは、或は戯作者側の人情小説に反抗氣分を示したところもあらう。また以上の二期を通じて、その作者は何れも政論家操觚家で專門の文人戯作者ではない。第三期は十九年から二十一年頃までの政治小説全盛時代で、作風が可成り寫實的になり、政治的宣傳も極めて露骨になり、第二期の傳奇的なのに反して人情小説的分子が加味されてゐる。作者も政論家側と專門文人側から各々出て來るが、例を擧げると、『二十三年未來記』、『政治小説雪中梅』、『政治小説花間鶯』(末廣鐵腸)、『新日本』(尾崎行雄)、『内地雑居未來之夢』(坪内雄藏)、『國會後日本』(仙橋散士九岐晰)、『新粧之佳人』(須藤南翠)、『文明開花春告鳥』(服部誠一)、『二十世紀新亞細亞』(服部誠一)、『處世寫眞緑簑談』(須藤南翠)、『中原の鹿』(宇田川文海)、『居酒屋の娘』(西村天囚)、『外務大臣』(坪内雄藏)などは此の期の主な産物である。二十二年以後は衰退期に入る。その後の政治小説が、別樣の意味で存續することは度々いつた通りである。

『經國美談』と『佳人之奇遇』　第二期以後は私の說く混沌期文學以後に屬するものだから、その期の作品については後に詳しく語られる筈。第二期の諸作中で、代表的に廣く讀まれたものは矢野龍溪の『經國美談』(十六年)と東海

散士の『佳人之奇遇』(十八年)である。『經國美談』は諸家のギリシヤ史を材料にして、古ギリシヤ、テーベ(シイブス)の名士エパミノンダスとペロピダスとが力を併せて國事に奔走し、遂に志をとげてテーベを全ギリシヤに覇たらしめた事實を演義稗史體の小說に作つたので、「巧みに英雄の精神風度を寫し、記事の間に政治の得失を論破し、敍情の中に風俗の美惡を辨析して」ゐるとは藤田茂吉の評である。この作は嚴密にいへば創作政治小說の最初のものといつてもよい。人物や性格の描寫にも馬琴風の誇大な理想化がなく、可成り自然で個性も見えてゐる、筋にも變化があつて面白い。有名なレウクトラの戰の前後など今讀んでもつひ引込まれる。『佳人之奇遇』は幕末亡國の士(蓋し著者)を主人公とし、これに愛蘭及び西班牙の亡命美人を配し世界を舞臺として、亡國の跡を弔し强國の横暴に悲憤しつゝ自由に對して燃えるやうな思慕を寄せた大長編である。行文は『經國美談』の平易、通俗、文學的なのに對し、漢文崩しの衒學的な修辭的な美文であるが、やゝ灰汁のぬけない手際である。

政治小說の文學史的意義 (重複するやうだが一言する)時人をして小說は男子の讀むべき又男子の仕事とするに値ひするものといふ考へを抱かしめた點、從つて文學の位地を高めるに幾分貢獻した點、及び內容形式ともに幼稚な拙劣なところが伴なつてゐたにせよ、混沌期の小說に通有してゐる舊戲作の弊習をいちぢるしく脫却して新文學胎生のため、少くとも播種となるべき新しい要素を小說界に注入した點で、政治小說の功績は認められなければならない。

同じく(その五)――新體詩の興起。戲曲界一瞥

初期の明治文學にはなほ二事の書かなければならないものがある。新體詩の興起と戲曲界の消息である。極簡單にそれにふれる。

新體詩の發生 明治の新しい詩歌、いはゆる新體詩の基礎を西洋詩を模範として意識的に置いたものは、明治十五

年の『新體詩抄』である。井上哲次郎、矢田部良吉、外山正一三者の編であるが、三者とも學者であつて詩人でないところは、小說壇で新文學の基礎が政論家などの素人文學者の手で定まつたのと似てゐる。此の集所收の新體詩十九篇中譯詩が多く、創作詩が五篇だけに止まり、それも格調（七五調）は舊くさく單調で措辭も蕪雜であり、感興などといふものは殆んどないといつていゝ。矢田部氏譯の『グレー氏墳上感懷の詩』を壓卷とする。だが詩的價値はとにかく、明治文學史上に新體詩といふ一の新しい文學形式を定めた事實は否むことが出來ない。

同じ十五年から十八年に亘つて竹內節の『新體詩歌』(五集)が出て、民間の新體詩作者を紹介してゐるが、注意すべきは小室屈山（名は重弘、宇都宮人）である、彼の作になる『自由の歌』は措辭の蕪辭はさることながら、感興の點で遙かに『新體詩抄』の博士達を凌ぐものがある。

明治十八年には長篇史詩『十二の石塚』が出た。作者は上州安中の人、半月湯淺吉郎である。舊約士師記中エホボの故事を歌つたもので、長歌風の詩形を用ゐ、古典的な用語を相當にこなして驅使してゐる。此の詩の創作はキリスト文學を移入するのが先であるかに見え、敍事詩といふ一新體を確立する努力でなかつたかに見えるが、然し矢張りかゝる努力の現れであつた。勿論『新體詩抄』の風によつて起つた第一人者であらう。

以上のやうに、湯淺氏を除けば、頭の堅い學者先生と悲憤慷慨家流の政論家達が、西洋崇拜熱にかられて、國語にもつとも自然な七五調で表面的な進歩思想と政治的不平などを歌つたに過ぎないものであつたが、それでもこれが一般的に普及して、遂に後代の新體詩人を起す種子をまいた。

戲曲界　演劇改良論の起り　戲曲卽ち脚本方面では依然默阿彌の一人舞臺といつてよく、明治十年以後の散髮物としては、『西南雲晴朝東風』、『正權妻梅柳新聞』、『人間萬事金世中』、『綴合阿傳假名書』(高橋阿傳)、『霜夜鐘十字辻筮』、『木間星箱根鹿笛』、『古代染新形浴衣』、『島鵆月白浪』などがある。此の最後の作を書いたのは明治十四年で、彼は

この年表向きは劇界を引退したが、劇作の筆を絕つたのではなかつた。
劇壇も明治十年後勃興の機運に向ひ、鬼才守田勘彌は新富座全盛時代なるものを現出させた。同時に市川團十郎、尾上菊五郎、市川左團次などの名優が輩出して劇界の改良に盡し、劇及び劇關係者の位地を大に高めることが出來、明治二十年には天覽をさへ賜はることになつた。
明治十九年の演劇改良會の組成は新歸朝の才人末松謙澄の主唱になるものであつたが、これも根本は當時の西洋文明崇拜熱の一現象と見るべきであらう、だがたとひそれが皮相な運動であつたにせよ、劇界の實際を高尙にするために相當の功があつたと思ふ。
此の項は不本意ながら眞の一瞥にとゞめて置く。(昭和三年十一月十九日夜、昭和十年三月二十日增訂)

政治小說發展の概觀

一　政治小說の定義

政治小說とは何ぞ。この問題は、一般的には、『政治小說』(The Polical Novel: Its Developement in England and in America. 1924.) の著者スピーア教授の定義で間に合ふ。曰く「政治小說は、『情緒』よりもむしろ『觀念』に重きを置く一種の散文物語である。これは、或る與へられた一片の既成法制の功過よりも、寧ろ立法機構の如き乃至經世的活動に關する理論の如きを扱ふ。この際、作者の主なる目的は、政黨の宣傳、社會の改良、乃至政府を支持する人々の生活或は政府を構成する諸勢力の暴露である。かゝる暴露の場合、往々應接客間が政黨駈引の內幕を表出する手段として利用される」云々。一般的概念としてはこれで足りると考へる。政治小說なるものゝ本質に對する概念はこれで大體つかめるかと思ふ。然しこの定義そのまゝを通して明治の政治小說の概念をつかまうとするには、漠然し過ぎ抽象し過ぎるところがある。この定義は(由來定義なるものゝ然る通り)いつ何處の政治小說にもあてはめられる代りに、全然個性拔きである。然し何國の何の文學でも、個性拔きといふことは有り得ない。政治小說とて然り。從つて何處何處の國特有の政治小說と云々する時には、この定義を補足訂正して個性を附加したものにしないとピッタリしない。明治政治小說もその通りである。

明治文學史上で、吾等が普通に政治小說、政治小說と云々してゐるものは、その初期(國會開設前)のものを指す。然し事實は、國會開設後も政治小說は可成り書かれて居り、日淸戰爭後、三十一二年頃には、政治小說要求の聲が公

然文壇に高まりさへしてゐる。だが、主として文學史上にその存在を認められてゐるのは明治十九年二十年前後に盛に出たものである。此の期の政治小說を、スピーア教授の定義にあてゝ見直すと、政治小說の三目的、宣傳、改良、暴露のうちで、宣傳改良といふ點には及んでゐるが、暴露までは十分及んでゐない。寧ろ文學史上で餘り問題にされてゐない二十三年後の政治小說に强烈な暴露的諷刺を本體としたものが見られる。事實又、三十一二年頃要求されたものも、此の後者の政治小說であつた。こゝは一寸研究家の注意を要する。

それで今述べた明治政治小說に特有な意識を附加してスピーア教授の定義を補足して見ると、「この際、作者の主なる目的は」以下を次のやうに書きかへる必要がある、「(最初)は人民の政治的啓蒙、政黨の革命的宣傳乃至鬪爭の補助的武器として利用し、(中頃は)個人的政見發表乃至社會改良思想の積極的機關に充て(最後には)新興日本の國權仲張意識を反映させる一面、政府を支持する人々、政府を構成する諸勢力を暴露する諷刺的武器として利用することであつた」云々。つまり此の「最初」と「中頃」を主としたるものが、いはゆる明治政治小說と稱されてゐるものであるが、それだけでは事實明治政治小說の全般をつくした概念をつかむことが出來ない。こゝは從來の概念內容を訂正しなくてはならぬ。

こゝで序に明白にして置きたいのは、此等の初期政治小說の內容の性質についてゞある。此等の政治小說なるものが、今日の「小說」といふ概念で律し得るものばかりだと思つたら、大きな間違ひである。勿論政治「小說」といふからには今日考へられるやうな形式の小說も入つてゐる、否な大體さういふものが中心を成してはゐるが、今日の小說概念には全然內包されてゐない戲文、諷刺文、スケッチ、雜記、史傳、戲曲、筋書、飜譯の如きものか多量に混入してゐる。これは、當時の「小說」といふ語が可成りルーズに使用されてゐた爲めで、これを恐ろしく廣義に使用して、幾分でも假作的構想をもつた文字を小說と目して怪まなかつたのである。だから政治小說といふと、大體何等か

の政治的イデオロギイーをもつてゐる假作的文學であれば、筆者も政治小說と解し、讀者も政治小說を以て目して怪まなかつた。それが、明治二十年頃迄は特に甚しい。私はいつか明治初期政治小說のことをかういつたことがある。「此の時期の、民權主義的政治鬪爭のために發生し、此の鬪爭を反映し此の鬪爭の爲めの武器として利用された特殊な文學作物に對する總稱である」云々、明治二十年頃迄のものは、正しくその通りである。二十年以後は「小說」の語義なり內容なりの定まつて行くにつれて政治小說の性質とか範圍とかも自ら局限されて來る、然し矢張り前述の傾向が脫しきれないで、自ら治外法權を要求してゐるやうになる（これが、文學史家から政治小說がまゝつ子扱ひをされる一因でもあるのである）。政治小說の研究には、最初からこの點を呑み込んでゐることが肝心であらう。

時々耳にする問題であるが、政治小說の主要條件は、政治的イデオロギイか、それとも政治的事件の描寫かと、いふ問題がある。定義について一言した序に、この問題にも觸れて置かう。一般的にいへば、かういふ問題は何れといつて强て決定し得るものではない。時と場合と目的とに依つて、何れともいひ得やう。對象とする政治小說の本質と研究家の着眼點とによつて、何れが主かといふことが定まるわけであるが、然し肝心の本質なり着眼點なりに異同があつては、何れを何れともいひ得るし、何れを何れともいひ得なくなる。主要といふ點からは、此の二つが何れも主要であることは、スピーア敎授の言によつても推測される。だが今若し明治初期の所謂政治小說を對象としていふとして、此の二條件中何れが主かといふことを歸納的にいへといふなら、それは、政治的イデオロギイの方が主要なる役目を遂げてゐるに違ひない。明治初期のそれの如き政治小說に於いては、その一面たる豫言的未來記的性質上、政治的事件の描寫に及ばずとも、政治的イデオロギイの假托的表出で目的を達し得るし、又達し得てゐる。又反對に、政治的事件の描寫を生命とする政治小說であつても(例へば、二十三年以後の一部政治小說の如き)、政治的イデオロギイを全然拔いたなら、果して政治小說として成立つであらうか、疑はしい。單なる暴露的政治的小說にしろ、それ

は消極的にせよ一種のイデオロギイから出てゐると見なくてはなるまい。卽ちスピーア敎授の所謂る「觀念」に重きを置く物語云々といふ語は、此の邊のことであらう。然しこれは强ひて比較してのことで、今もいふ如く、時と場合と目的とによつて、甲が主、乙が從、乙が主、甲が從ともなるのであるから、一般的に强ひて主從を定めやうとするのは無理でもあり、不可能な問題でもある。たゞ何かの必要上、對象を定めて比較的に論ずるならば、別である。

尙ほハインリヒ・カイタア、トニイ・ケルレン共著の『小說論』(Der Roman)の中では(八五頁)、政治小說を分類して傾向小說(Tendenzroman)の一種としてゐるが、これは、勿論當然の分類である。その傾向小說に關する說明を大略右に揭げて參考としよう。曰く「傾向小說に於いては、一般的にいへば、小說のストーリイを或程度まで口實として、作者は大きな着彈距離からあらゆる問題或は思想について意見を表明しようとする。かうして夫々學術小說、政治小說、社會小說、宗敎小說、美術小說が成立する。その根本觀念は、ストーリイの中に挿込まれて銳く打印された一のイデエ(Idee)であり、このイデエは興味に於いてそのストーリイそのものを遙かに凌いでゐる(藝術性なしにではないが)。傾向なるものが、文學的に正しいとされるのは、ストーリイ、卽ち話の筋を損はずに新なる意味に高める時、又藝術作品の統一を著しく損はず、而かも散文的無味に陷入らぬ時である。若し傾向小說の中に織り込まれた或る學問的理窟が强く飛び出てゐるならば、その場合傾向小說は敎訓小說となる。國事小說(Staatsroman)も、此の種類に入らう。此の後者は敎訓小說と同じく、詩歌と學術の分水嶺に立つものである」云々。

二 政治小說發展の段階

政治小說の發展がその背景とも母胎ともいふべき政治運動の推移と步調をそろへてゐることは、政治小說のそもそもの性質上當然のことゝいつて可い。從つて政治現象の推移の段階が、そのまゝ政治小說發展の段階となることも、

同樣に自明のことであらう。此の發展の段階を年代的に正確にすることも、政治小說なるものゝ概念を正確につかむには必要である。これについては、今迄誰も調べも言ひ出しもしないところであるが、私は多少苦心をして少々發見らしいものをした。その結果を簡單に述べよう。

度々いふやうに、所謂政治小說は明治初期に限られたものであるが、然し政治小說は明治時代を通じてある。二三に分裂したり假裝したりしてゐるが、兎もかくも初期だけで絕えたものではない。經濟小說、冒險小說、戰爭小說、社會小說、社會主義小說、等々の中繼によつて、大正時代に入り、最近のプロレタリア文學と立派に連絡する。又戰爭小說、冒險小說あたりから枝を出してファショ文學あたり（なるものがありとせば）とも握手出來る。だが、今は明治時代の政治小說の硏究が主體であるから、これだけに限つていはう。明治の政治小說といふものを、私は先づ明治二十三年國會開設前後をもつて分水嶺に二つに分かつ。勿論これは單なる思ひつきや便宜主義からではない、何うしてもこゝで分けなくてはならぬのである。それは國會開設は、明治政治史上に於いて全く空前絕後の大事件であつた上に、此の前後を境界として、政治小說の目標も調子も大に違ふからである。何う違ふかといふと、實際は一々實例を擧げて證言すればいゝのであるが、限ある場面ではあり又後々それが自然分かつて來ることであるから、それは止めるとして、結論だけを出すと、國會開設前は、自由民權的對內的改革が主潮、以後は國權伸張的對外的進出が主潮となる。又國會以前は對內的に積極的好望的主張、對外的にやゝ消極的で冷淡であるが、以後のものは對外的に大に熱心し、對內的には往々冷嘲的暴露的の氣味が多くなる。さういふ次第で、こゝを限度として前後二段階に大別するのである。かゝる變化の原因は、日本の世界的進出の急務と實現された國會理想に對する知識階級の心的態度の動きによるところが多い。その邊のことは、本文中所々に說いて行くつもりであるから、こゝでは言及せぬが、兎にかく、かう二大別した前段が所謂政治小說で、何の文學史家もこれについて（多少ながら）言葉を費してゐるのみ、此

の後期の分には及ばない。然し此の後期の國權的乃至暴露的政治小說研究も相當面白いものでもあり、前期とは別の意味で極めて有意義なものでもある。

そこで、これを年代的に正確にすると、政治小說としての嚆矢とされてゐる『情海波瀾』が出たのは明治十三年であるから、十三年から二十三年までの約十年間が卽ち政治小說の前期に當りそれ以後、先づ三十三四年社會主義小說の現れるまでを後期とする。さうして前期と後期とは、年代は略ぼ等しいが、史的重要さからいつては、それは比較にならぬ程前期が重い。前期は進展全盛の期であり、後期は保守乃至後退の期だからである。だから段階の區劃も前期に精密にして後期に粗略にするのは、已むを得ない。依つて今は、强て後期の區劃を試みず、前期のそれのみを試みて置かう。

普通明治十三年刊の『情海波瀾』をもつて政治小說らしい構成をもつた政治小說出現の嚆矢とするが、只今までのところでは、强てこれを打破する必要もないので、矢張り十三年を基準とする。十三年以前が先づ政治小說の發芽期と見て可い。十三年からが政治小說の發達期、十九年から全盛期となるわけである。ところで普通の文學史風な區分の仕方ならこれで澤山といふものであるが、政治小說の區分は文學史的にだけではいかない。此の十三年から十九年までの間を發達段階に應じて何うしても二つにしなくてはならぬ。そこで、今一度あの背景の政治的發展を想起して頂くとして、十三年は國會請願を中心に自由民權が全國的に統一されかけた年、十四年から十五年にかけては政黨勃興の年、十七年は自由黨解體の年、十八年は日本最初の內閣制度が出來上つた年（この事實は殆んど國會開設につぐ程重大な事實だが、歷史家はよく注意して頂きたい）、十九年までに政治的變遷の大切な機會が二つ程あるわけであるが政治小說の發達は、かういふ段階に實によく應じてゐる。そこで背景の發展をも取り入れたつもりで用語を改めた發展段階を區分してみるとかうなるのである。曰く十年――十三年（萌芽時代）、十三――十五年（自由民權文學時代）、

十五——二十三年(政黨文學時代)、これを區分して十五——十七年(政黨全盛時代)、十七——十九年(政黨衰退時代)十九年——二十年(政黨復興時代)。これを一見して解るやうに表示すると、——

- 政治小說
  - 前期(民權時代)
    - 萌芽時代
    - 民權文學
    - 政黨文學
      - 政黨全盛時代
      - 政黨衰退時代
      - 政黨復興時代
  - 後期(議會時代)

先づかういふことになる。僅々十幾年かの發達期間をさう細分しては餘り煩瑣ではないかといふ批難も出るかも知れない、然しそれは明治時代の文物一般の推移の急激さを知らぬ人々の言であつて、此の推移の激しさといふものは今日では想像も及ばない、明治初期に至つては、殊にそれが甚しい。だからして、一年乃至二年で一轉しても、他の時代の十年乃至二十年分位の變化を成就してゐる時がある。それだけ上下國民の意氣組みも違つてゐたのである。

さてかう前期を區分して見ると、後期(議會時代)の方も何とか形をつけないと納まらないやうな氣がする。そこでこれも兎もかく區分して、議會文學、暴露文學、國權文學としよう。然し此の區別には必らずしも秩序的な年代的區分が伴なつてゐるのはなく、年代的には共存併立する時も少なくないが、兎もかく眞の大體からいつて、政治小說の推移の跡がかうもいへると思ふので、かう區分して置く。

前期三段階の區分について、なほ他の點から他の特色で稱呼することが出來る。政治的イデオロギイによつて寓意時代、宣傳時代、主張時代ともいへる、又は一層政治的に、準備期、闘爭期、自覺期とも、準備期、破壞期、建設期ともいへる。更に文學的に、前期、理想文學期、寫實文學期としても可い。然したゞ漠然と前、中、後期などといふ

區分の仕方は、何の意味もないものとなるから、研究上さういふ使用は避くべきであらう。

三　史的發展の概觀

此の一節は、いはゞ贅疣的な存在で、重複となるのは覺悟の上であるが、研究本論が可成り大部に成り、又各項について相當詳密なものになることであるから、先づ鳥瞰圖的に明治政治小說の發展について一應の知識をもつて本論を讀んでいたゞいた方がよいやうな氣がしたので、用意したものである。

概觀を述べるにも、前述の年代的區分によることは勿論であるが、然しそれに各期各時代に屬する作家又は作品を織り込んで、幾分具體的にしていかう。

萠芽時代　此の時期は大體、明治十一年頃から民權運動の全國的になつた明治十三年頃までを含む。現れた作品は(一)政治的諷刺を含んだ戲作戲文か、(二)政治家の傳記を小說化した稗史、(三)時事小說ともいふべきものであり、中には政治小說に近いものもあるが、何れもそれだけでは政治小說とはいへない。第一の例には洞陀樓翁投書(明治七年一月、新聞雜誌)、遊山船(明治八年、朝野新聞)など、第二の例には『南海自由の旗揚』(明治十二年、板垣退助傳)など、第三の例には『島田一郎梅雨日記』などがある。次の章で此等の諸著作について今少し纒めて述べたいと思つてゐるから、こゝでは眞の暗示に止めよう。

民權文學時代　大體明治十三年から十四年、十五年の前半頃に亙る。聊か政黨時代に跨がるが、大體として自由民權運動が全國的に高潮に達した時期である。

十三年は國會期成同盟會の成つた年であり、國會開設の大建白の出された年であり、集會條例の發布された年であるが、通例政治小說の嚆矢とされる『民權演義情海波瀾』が此の年六月を以て現れたのは、甚だ興味ある事實である。作

者の戸田欽堂は舊封建貴族出の知識階級であり、洋行歸りの階級打破論者であり、自由民權論の熱烈な同情者であつた。内容は人情の葛藤に政治的意義を含めたもので、無論戲作的なものであるが小說の體をなし、小說的構成をもつてゐる。イデオロギイ的には、結局ブルジョアの勝利を暗示してはあるが、幾分不安げである。

此の外、十三年に出た政治小說乃至准政治小說には『國勢夢想記』(岸甚咲)、「龍宮奇談黒貝夢物語」(風賴子)等、十四年のものには「東洋奇談風綠情誌」(嘯風子一宮猪吉郎)、「冥府紀事」(生田精之、十五年刊)、「秋詠續物語」(加藤富三郎)、「自由之業蝴蝶紀談」(上田秀成、十五年刊)等がある。以上の中注意すべきは、『冥府紀事』は漢文戲作であるが、反動的な、自由民權不贊成の方である。又『秋の詠』は一名『大和政沸蘭ばなし』といひ、明治十四年の開拓使事件を諷刺戲作にしたもので、直接自由民權に關係はないが面白いものである。

以上十三、四年の政治小說を通じていへば、何れも小說として極めて稚拙なものであり、夢中の記事に托した戲作風のものが多い。内容的には漠然とした自由民權の宣傳であり、好望的で、溫情的で、殆んど鬪爭的抗上的でない。又、作者の態度も、消極的に漠然と小說的形式を利用してゐるのみで、小說や文學について確たる意見は殆んどなく況んや文學的自覺など全然無い。形式は、往々カムフラージュのため夢中の記事に托したものを見る。

以上の外、小說ではないが、『魯國奇聞烈女之疑獄』(杣田策太郎、十五年刊)、『魯帝弑逆記』(大久保常吉、十四年刊)の二篇は當時の民權運動家に多大な感化を與へた。前者は明治十三年少女ヴェラ・サシュリッチが大警視トレポフを狙撃した事件の審問記事、後者は十四年、露帝亞歷山二世が虚無黨に暗殺された顛末の記錄である。此等の虚無黨の暗躍から自由民權の鬪士は兩樣の意味で多大な感動をうけた。

政黨全盛時代(一)　自由黨時代　政黨全盛時代は明治十五年以後二十四年迄を含むが、政治小說の方に於いても此の時代に入ると、單に自由民權の勝利を宣傳するといふだけでなしに政黨と交渉をもち、政黨の政治思想を反映し、

政黨の論爭武器、宣傳武器として利用される。それで政黨時代乃至政黨文學時代といふ。そのうちで第一が政黨全盛時代、十五年以後自由黨の解黨迄で、これを自由黨時代ともいふ。民權運動で自由黨が第一線に立つて華々しく活動した時代だからである。政治小説の方でも、自由黨側の作家の方が斷然多い。兎に角作家として扱はれ得る人々と、その作物を擧げてみると――

櫻田百華園。「阿國民造自由廼錦袍」（十四年、十六年刊）

「西洋血潮小暴風」（十五年）

(The Memoirs of a Physician by Alexandre Dumas)

此の人は岡山出身で、栗原亮一の書生格から自由新聞記者をし、若くて死んだが、幾分天才めくところがあつた。意識的に西洋の政治小説に倣つて小説を試みた最初の人であり、政事小説といふ語を用ゐたのも彼が最初かも知れない。從來何の傳もないので、これを調べるには私は可成り苦心した。兎もかく、いはゆる革命文學のトップをきる人として、政治小説研究では特に注意すべき人であらう。

宮崎夢柳。「自由乃凱歌」（十五年）

(The Taking of the Bastille by Alexandre Dumas)

「寃枉乃鞭笞」（十五年）

「勤王濟民高嶺の荒鷲」（十六年）

「一滴千金憂世乃涕涙」（十六年、十七年刊）

(The Gentle Savage by Edward King)

「虛無黨實傳記鬼啾啾」（十七年、十八年刊）

（主として Sergius Stepniak の "Underground Russia" を稗史小説化したもの）

（他略す）

夢柳は土佐高知の人、高知新聞、自由新聞、自由燈記者。漢詩人としても名があつた。今日では鐵腸以前の政治小説家中の代表的人物とされてゐる。

坂崎紫瀾。「汗血千里駒」（十六年）

「自由之花笠」（同　年）

「露國安那物語」（同　年）

（他略す）

紫瀾は夢柳の先輩に當る。彼の名は知つてゐる人が多い。高知新聞、土陽新聞、それから自由燈に入つた。紫瀾は國粹的政治小説の作家で、純粹の熱血漢であり、維新志士の事蹟を好んで扱つた。

小室案外堂。「東洋民權百家傳」（十六年）

「新編大和錦」（十六年）

「興亞綺談夢戀々」（十七年、二十五年刊）

「自由艷舌女文章」（十七年）

案外堂小室信介は丹後宮津の人で、有名な小室信夫の養子である。本姓は小笠原氏。自由黨の別働隊たる日本立憲政黨から自由新聞へ來た人で、小説家的技倆は以上の誰よりも富んでゐた。殊に東亞問題先覺者の一人として記憶されていゝ人である。

以上の人々が自由黨側の作家なるに對して、改進黨では——

矢野龍溪。「齋武名士經國美談」（十六——七年）

の大作がある。これは人も作も餘りに有名だから今は別に述べない。

この期の作物に通じていへることは、大體政治鬪爭の激化を反映して、俄然反上抗官的な氣味を帶び、感情的に革命精神を讃美し、ロマンチック反抗を生命とした破壞的な宣傳（主として自由黨側に）が多い。啓蒙的態度は勿論であるが、政治小說を意識的に重視し、積極的に利用する——必要とするに至つてゐる。これは彈壓の急を避けるといふこと、言論の不自由を補はうといふ目前の事情から來てゐるが、外來的なイデオロギイ的影響もある。明治十五年自由黨總理板垣が洋行の際、ユーゴーに會つたら、日本の如き特殊國では、政治小說を國民に讀ませるが可いといつた。板垣はそれに感心して澤山政治小說を買込んで歸朝土産にし（十六年）、夢柳その他の手をかりて、自由新聞、政理叢談等に譯載したが、その邊の事が大いに形響してゐる。矢野龍溪が一代の名士として筆を小說に染め、而もあれ程の傑作を公にしたといふことは、如上の特殊事情を離れても、一般に當時の人々の小說觀を改めるに多大の效があつた。此の頃の政治小說中には譯物が多い。それは兎に角、日本文學史上の新ジャンルで見當が付かないから、手取早く本家のものを借りたといふ點もあらうが、實はこれも同時にカムフラージュの一手段であつた。その證據にはその譯なるものが、原作に構はぬ增補删削勝手次第なもので、直向宣傳的に改作されてゐるからである。或る評者は此等の譯物を一括して豪傑譯といつたが、よく當つてゐる。原本とされるものは、露國の虛無黨や佛國の大革命の事蹟をかりて爲政者への警告とし同志への奬勵としたものが多いので、此の期の自由黨派の文學を革命文學ともいふ。作者は何れも政治的宣傳の效果さへ擧れば小說的巧拙は論ぜぬといふ風が見える。作の形式としては、稗史風が多い。これは當時の讀書階級が、形式的にはまだ舊封建主義的文學觀念の支配下を脫しきつてゐなかつた爲めであらう。

政黨衰退時代（二）　**改進黨時代**。**復興時代**（三）　**大同團結時代**　自由黨解黨後二十三年に至る迄を指す。此の間正

式な政黨としては改進黨が唯一のものであり、又、政治小說の方でも改進黨乃至准改進黨作家の方が頭拔けて多い。だから此二つを合せて改進黨時代といつてもいゝのであるが、二十年以前と以後とでは、調子が少し變るから、全部を改進黨時代としてしまふのも穩かであるまい、矢張りかう分けた方がいゝであらう。たゞ作家が共通である關係から二つ突くるめて論ずる方が便利でもあり正當でもある。さもないと機械的な分け方になつてしまふ。

改進黨の諸名士は、親分矢野龍溪が政治小說に成功して以來、文學的嗜好ある政友や後輩が我も我もと政治小說を書き始めた。その尤なるものに須藤南翠、藤田鳴鶴、尾崎咢堂、服部撫松等がある。

須藤南翠。「慨世悲歌照日葵」(十九年)
「處世寫眞綠簑談」(十九年——二十一年)
「一顰一笑新粧之佳人」(十九年)
「遠征奇勳曦の旗風」(二十年、「旭章旗」)
「唐松操」(二十一年)
「隱君子」(二十二年)

此の人々の中で一番早く龍溪を模倣したのは南翠である。彼は明治十二三年、龍溪が政治小說を書く遙か前から新聞讀物作者として一家を成してゐたが、一方インテリ青年の常として政治が好きでもあり、政論記者を兼ね、改進黨に投じて國約憲法論に氣焰を吐いたりした。彼は模倣の點では天才といつてよく、初め龍溪を模して、専ら明治維新を舞臺にして稗史風の政治小說を書いたが、ヂスレーリの飜譯小說をよみ、又、坪内逍遙の寫實小說に親み、『小說神髓』に動かされるに及んで、稗史的結構と現代的寫實風の社交的背景もつた和洋折衷式の新式小說を工夫して大に世人の喝采を得たものである。一時反動的に、文學史的には甚だ低く評價され過ぎて、饗庭篁村の持ち上げられるのと

對比して甚だ氣の毒なものであつた。然し政治小說方面からいふと或る意味でのエポックメーカアである。彼の作品は從來の如く輕視さるべきではない。時代の代表的作家の一人として再檢討を要する。

藤田鳴鶴。「濟民偉業錄」(二十年)

これも明白に龍溪に奮發して書かれたものなることは一讀して分明である。舞臺を支那明末に代へ、明末の惡政に譬へて明治政府の專制政治を諷し、その改革を叫んでゐるもので、普通には餘り讀まれぬが、面白いものである。

尾崎學堂。「新日本」(明治十九年)

此の作は何方かといへば、リットンの『擊思談』(十八年)を模したり、ヂスレーリの『ヴィヴィアン・グレイ』を模したりした趣が見える。これはたゞに改進黨的政治理想だけでなしに、新日本運動の提唱、新日本の人々の當然もつべき婦人觀、結婚觀、社會生活、外交政略、その他について暗示するところのあらうとした、頗る野心强いものであるが、小說としては未成品たるを免れない。

服部撫松。「二十三年國會未來記」(十九年)

「文明花園春告鳥」(二十一年)

「二十世紀新亞細亞」(同　年)

「支那未來記」(二十八年)

戲文家として『東京新繁昌記』や東京新誌で賣り込んだ服部撫松も、政黨時代に入るや、改進黨に參加し、改進黨イデオロギイ宣傳の政治小說を書いた。漢文戲作家としてのみ知られてゐる撫松にも、案外かういふ眞劍な努力の一面があつたのである。

以上は改進黨の純然たる黨員であるが、改進黨の傍系シンパサイザーたる位地にあるのは、春のや朧(坪內逍遙)で

ある。文學革命家逍遙の功績については、今こゝで格別述べぬことゝし、政治小說家としてのみ一瞥して置く。

春 の や 朧。「清治湯講釋」（十五年）

「自由太刀餘波鋭鋒」（十七年）

「開卷悲憤慨世士傳」（十八年）

「京わらんべ」（十九年）

「內地雜居未來の夢」（同　年）

「外務大臣」（二十一年）

右のうち第一は東京大學にゐる頃のわざくれで、一種の政治的戲文である。第二と第三は當時の政治熱への關心を示した飜譯、第四以下は創作政治小說であるが、然しその作には特別に際立つて黨臭といふものがない。大體はインテリゲンチャによくある啓蒙的改進主義である。その名著『小說神髓』（十八年九月初刊）が、政治小說の形式描寫方面に決定的な影響を與へたことは、注意しなくてはならぬ。

以上の諸氏に少し先立つて、而かも何の政黨的背景もなしに、一篇の政治小說を公けにしたのみで一躍大家となつたのは、東海散士柴四朗である。

柴　四　朗。「佳人之奇遇」（十八年――三十年）

「東洋之佳人」（二十一年）

「羽川六郎」（三十六年）

然し東海散士は何よりも『佳人之奇遇』の著者として傳はつてゐること、いふまでもない。柴氏の經歷のことや此の小說の內容のことは後に詳しく語るから今は述べぬが、たゞ一つ辯じて置きたいのは、この小說が筋が通らず支離

滅裂だといふ非難がある點である。それは卒然この小說を讀めばさういふのも無理もないが、然し成立ちの事情を考へてみると、たゞさう見なし去るべきではない。この作八篇のうち第五篇あたり迄が初案で、以下は追加であり、本來ならば別の小說となるべきものである。兩者の刊行年代に六年の隔てがあり、事件も舞臺も變るのでさう見るのが當然である。或はこの小說全體がもつと大きな腹案の一部で、まだ未完の作であるといつても可い。何れにしても著者の心境と共に生長して來たもので、豫定したプランに依つたものでないと察せられる。その點だけは斟酌すべきである。柴氏は必ずや第五篇、散士の歸國で一應大團圓にするつもりであつたと思ふ。さう思つて、讀むと一先づ纒つてはゐるのである。

丁度此の期に入るものに――

關　直　彥。「政黨餘話春鶯囀」（十七年）

渡　邊　治。「三英双美政海の情波」（十九年）

がある。此の二部の飜譯政治小說は暗默の間に大きな影響を與へ、爾後の政治小說にとつてモデルの役目をつとめるところがあつたらう。前者はヂスレーリの『コニングズビイ』、後者は同者の『エンヂミオン』である。

政黨復興期は二十年二十一年大同團結の運動あたりからと見て、この期を大同團結時代と呼ぶことにする。この期に入つて政治小說の火の手が益々强くなり、完全に文壇を席捲して政治小說の全盛時代となる。前述の諸家中、この期にも盛に執筆してゐる南翠、東海散士の如きもあるが、全盛時の代表は大同團結の鬪將末廣鐵腸とならざるを得ない。彼はその政治思想に於いて自由、改進を折衷し、その政治的經歷に於いて獨自の大同的立場をとつた如く、その政治小說に於いても、從前の諸作家を集大成した趣きがある。鐵腸の最大の功績は、政治小說を兎もかく小說にしたことである。單なる小說的テクニクの點で、南翠の敵ではないが、政治小說の作家としては鐵腸は優に南翠の上にあ

る。これは鐵腸が政界の實狀を十二分に心得て、その知識を十分利用してゐる爲めである。文學史家が、政治小說といへば鐵腸を以て代表させるが、これは兎も角當然である。

末廣　鐵　腸。「二十三年未來記」(十八年、十九年刊)
「雪中梅」(十九年)
「花間鶯」(二十年——二十一年)
「雨前之櫻」(二十一年)
「國會開設之前後」(二十三年)
「南洋の大波瀾」(二十四年)
「明治四十年の日本」(二十六年)
「戰後の日本」(二十八年)

此の內二十三年迄の分は議會文學の典型的小說、二十四年以後の分は、國權伸張主義の理想をあくまで發揮したものなので、後期政治小說中の最も代表的なものである。

鐵腸と同時の作家には、上記諸家の外に政黨に關係ある人々で——

內村　義城(舊立憲政黨)。「二十三年夢幻鐘」(二十年)
「鶯宿梅」(二十年)
志賀祐五郎(舊自由黨)。「枯骨の扼腕」(二十一年)
小林雄七郎(——)。「自由鏡」(二十一年)
高安龜次郎(——)。「ねやの月」(二十年)

「世界列國之行末」（二十年）
矢野　龍溪（改進黨）。「浮城物語」（二十三年）
久松　義典（――）。「南溟偉蹟」（二十年）
「代議政體月雪花」（同　年）
「東洋社會黨」（三十四年）
大久保夢遊（――）。「深山櫻」（二十年）
中村　望天（――）。「昴駒之蹄」（同　年）
等あり、此の期には殆んど政黨に關係のない人々に――
福　地　櫻　痴。「もしや草紙」（二十一年）
「猥芋の煙」（同　年）
「滑稽妄說仙居の夢」（二十三年）
「撰擧競爭噓八百」（二十五年）
「大策士」（三十年）
小　宮　山　天　香。「聯島大王」（二十年）
宇　田　川　文　海。「中原の鹿」（同　年）
「雪裡松」（同　年）
牛　山　鶴　堂。「日本新世界」（同　年）
「日本之未來」（同　年）

久永廉三。「國民の骸骨」(二十一年)
「國會の燈籠」(同　年)
「新日本の娘艷舌」(同　年)

右のうちで、櫻痴の政治小說はあくまで冷嘲的暴露的なもので、此の種の政治小說の典型といつて可く、政界失意の彼として、鬱憤の洩らし所としたものであらう。

尙ほ久松義典は政治小說と社會主義小說との連絡を示す存在として、特別に研究に値する。

十八年以後二十三年までの政治小說の特色を簡單に述べると、形式からいへば、前期の諸作が往々稗史風になりたがるのに反して、現代的寫實風が主となる。內容は概して破壞的分子が去つて建設的となり、感情よりも理性に訴へる分子が多く、合法的秩序的改革を重んじ、國會を目標とし、國會に於ける勝利を理想とするやうになる。勿論政黨の思想を反映宣傳はするが、然しそれは前期の如く黨第一の鐵則に縛られてはゐはしない、可成り自由に個人的意見が加味されて來る。前期に飜譯が多いのに對して創作が多いが、これは手心を心得、見當のついた結果と見られる。勿論御手本はあるので、それは前期の佛露流の過激なものではなく、英國流の政治小說(主としてヂスレーリのそれ)に影響されてゐる。

一寸說明を要するのは、政黨全盛時代に政治小說が全盛でなく、政黨の衰退時代に政治小說が全盛になつて來たのは何うい ふものか、といふ點である。一寸聞くと矛盾のやうにも不思議のやうにもうけとれるが、よく觀察してみると、かうなるのが當然なのである。

先づ政治小說それ自身の方からいふと、明治政治小說の出現した動機がカムフラージュ的大衆宣傳といふ點にあるが、つまり政府の彈壓を避ける新工夫として取上げられた形がある(無論積極的な主張ももつてもゐるが)。然るに十

八年以後數年間の政黨衰退は何の爲めかといふと、政府の彈壓が益々嚴しい爲め（と民間不況とで）政治的活動が出來難くなつたからである。然し根本の政治熱が冷却したのではないから、その宣傳的捌け口を求むること益々急である。これがカムフラージュ的宣傳手段たる政治小說といふものに一層多く賴ることになる。それから今一つは、丁度此の頃折よく政治小說に傑作（當時として）が續出したので、益々世人の注目を惹いて文壇に覇を唱へることになつた點も認められる。

政治小說自身の側にさういふ發展の好條件があるのに、一般文壇では時の政府の歐化政策に起因する社會改良熱から分派した文學改良熱、小說改良熱が、恐ろしい勢ひでもり上つて來た。そこで所謂文學革命といふ現象が生ずるのであるが、この改良熱と政治小說が結びついた（此の點を詳しく說く餘裕がないが、文學革命の要求を先づ取り上げたのは政治小說であつたといふこと、文學革命の首唱者春のや朧が一面政治小說家でもあつたといふこと、必要上小說改良の聲を先づ揚げたのは政治運動者であつたといふことなどから推察されたい）。政治小說全盛の條件はこれで大體揃つたわけである。もつとも當時の國民の經濟生活のことも一考すべきで、當時一般民間としては不況であつたが、新興の都市ブルの上中層階級は、多年の積蓄でこのころから漸く餘裕が生じ、歐化政策と相俟つて、（西洋風の）社交生活といふ新現象が生れた、文學改良熱は直接間接この社會生活に負ふところが大きいのである。且つこの社交生活が又、決して政治と絕緣したものではないので、益々政治小說全盛の空氣を釀すことになつたわけである。

第二期以後注意すべき變化は、從來政治小說家はイデオロギイ的には民權主義第一であつたが、この期間に及んで國權恢復乃至擴張第一にした小說の目立つて來たことである。これはブルジョアジイの急激な膨脹の結果、民權の啓蒙的宣傳よりも條約改正による資本主義的進出を第一に必要とするに至つた爲めであらう。大同團結思想はその前提として見られる。卽ちブルジョアジイが合して藩閥貴族に當れといふ意識、更に國內合同して外國に當れといふ意で

ある。ブルジョアと貴族が爭ひ、ブルジョアが勝つといふ階級的題目が度々繰返されてゐる。さうして此の爭ひの際女性が言論金力で男性を助けて政治的成功を得しめるプロットが度々用ゐられてゐる。更に進んで日本人の海外發展を慫慂したプロットが現れる。一方では又且つ政治小說に寫實的分子が入つて來て以來、イデオロギイ的宣傳を第二第三にした政界暴露小說が生じて來た。

政治小說の急衰　明治政治小說は此の期の中頃、即ち二十年前後全盛時に達し、廿三年俄然衰接する。その差が甚だしく急である。これにはそれぞれ理由がある。全盛に導いた理由は、前述の如くであるが全盛に至る道が急だつただけ衰落も急なわけである。全盛は墮落と反動を期待する。政治小說の場合も同じである。政治小說の人氣が文學界讀書界を風靡するや、模倣が續出した。この模倣の多數多量なのが一面所謂全盛の意味でもあるが、此の模倣者の多くは俄仕立で、政治理想も何もない政界に無緣な素人作家が多かつた。それで自然、政治的意義のない拙作の濫發となるや、世人一時に興を醒したのである。だが根本的にいへば、ブルジョアジイは此の時迄には不滿足ながらも實質的に參政的制覇を成就してゐた。新に盛上つた政治熱は即ちブルジョアジイの實質的勝利と海外進出を中心としたものであつた。從つてブルジョア政治鬪爭のため、民權宣傳に出發した政治小說の宣傳的使命は、既に終へてゐたのである。社會は政治中心から經濟中心に移りつゝあつた。世人は對內的政治運動に方向轉換の必要を感じつゝあつた。そこへ無暗に拙劣な陳腐なイデオロギイの俄政治小說を澤山出されたのでは、大概厭倦の情を催す。加ふるに小說改良熱は立派な政治小說を出すに與つたが、同時に讀者を批判的にした。素人作家の俄政治小說など歡迎されるわけがない。以上が急衰の因となつたものである。(尙ほ知識階級の幻滅、彼等の對ブルジョア態度の變化も、勿論この政治小說急衰に大關係がある。)

急衰後の二十三年以後も、政治小說は續くが、その中心題目は際立つて國權擴張と政界暴露の興味である。重ねて一言いひ添へて置く。

政治小說以前の政治的文學

（一）飜譯文學

此の研究に於て、明治十三年の『情海波瀾』を以て政治小說の嚆矢として步を進めて行くつもりであることは、上記の所々で述べて置いたが、この嚆矢といふのは、勿論絕對的の意味ではない。いはゞ暫定的便宜的の意味が多分に含まれてゐる。政治小說には政治小說としての形式とイデオロギイを該備してゐなくてはならぬ、目下のところこの條件に一番近く當篏まる一番古い作品が『情海波瀾』であるから、これを嚆矢とするのである。今後、今日以上に研究が進んで『情海波瀾』よりも古く出た小說でかういふ資格に當篏まるものが出て來るまでの暫定的嚆矢であるのみならず、自由民權運動が明治十三年國會運動に至つて卒然發生したものでないやうに、政治小說めく文學も十三年に至つて全然無傳統的に、絕對的新種子として發生したものではない。明治十三年より以前にもそれ相當な政治文學はあつた。これは、原則的にも、文學が社會意識の反映たる一面をもつ以上、當然のことであらう。たゞこれ等政治文學が明確に政治小說として分類出來る形態を備へてゐなかつただけである。そこで如何なる意味でにせよ『情海波瀾』をもつて一先づ所謂政治小說の嚆矢と定めることに今は異存がないものとし、さて、『情海波瀾』の出る以前に何ういふ政治文學があつたか、作品實例を擧げていさゝか詳しく語りたい。もつとも政治小說の發展概觀を說いた際に、或は政治小說の文學的背景を述べた際に多少その邊のことに觸筆しては置いたから想像はつくと思ふが、矢張り特別に此の問題について一言しないうちは何となく落つかぬ氣持である。尤も詳しく語るといつても、程度の問題であるか

ら、時代は明治維新後とし、研究前記の打留めとして紙數の許す限り詳しく語ることにしたい。
さていよいよさういふ政治文學、即ち換言せば文學に於ける政治的分子を語るとして、これを大體次の如き項に分けて語る方が便宜であらう。(一)飜譯文學、(二)實錄文學、(三)時事文學、これである。以下これの順序に從つて語ることにしよう。

第一は飜譯文學中に於ける政治的分子であるが、その先頭に取り上げられるのは、明治元年の譯に成るといふ――『全世界續未來記』、一名『新未來記』である。これは和蘭人ヂオスコリデスの原著で、原題を「紀元二千六十五年一名未來ノ瞥見」といふ。愛梅主人近藤眞琴が譯したものである。上條信次は、別に、『開化進步後世夢物語』と題して、同じ原本を明治七年に譯出してゐる。此の小說の內容は豫言的寓意小說で、『余』なる人物が、英國の碩學ロージャアベーコンとミス・ファンタシヤ(幻し姬)に導かれて英京ロンドンの後身たるロンヂニアに周遊し、更に宇內の旅行に出て紀元第二十一世紀の進步せる科學文明の諸相を見物して驚異するといふ「午睡ノ夢」を書き記したもので、先づ西洋流の夢想兵衛小說の一つと思へば可い。然しその科學的根據があるところに紹介の意味があつたのである。
この小說の第六編第七編に往々政治を論ずる語がある。第六編には民を壓する惡政は永く權力を維持する所以でないと、既に自由政治の讃美を寓して居り、第七編にも略ぼ同じ意が見えてゐる。然し譯者のイデオロギイは國權伸張文明開化で、まだ民權の自覺は明白には出てゐない。先づ蘭學者の西洋崇拜熱の現れと見れば可からう。次に明治三年の――
『西國立志編』 譯者の中村敬宇については、いふまでもあるまい。この書は勿論政治的意圖で書かれたものではない。『自助論』(Self-Help)といふ原名の示す通り、人間自助自立の道を說き、古人今人の實例によつてこれを強調し

たもので、何も直接立憲政治とか自由民權とかに關係はないのである。勿論これを社會意識を背景として見ればブルジョアジィ個人主義道德の進步的一面を表示したもので、これが明治初年日本へ紹介されて大流行をしたといふことは、當時の新興日本の現狀に照して多大の意義のあるものなことは、木村毅君のかつて指摘した通りである。譯者の中村敬宇も必らずしも政治的意識のみから試みたわけではないと思ふが、然しこれを紹介する際に全然政治的意識を無視したのでもない。その證據には同書第一編の序に「夫西國之强。由于人民篤信天道。由于人民有自主之權。由于政寬法公。」といつて居り、又「論に曰く」といふ條に「國所以有自由之權者、由于人民有自主之權、人民所以有自主之權者、由于其有自主之志行」といひ、滔々として民主自由の福音を讃美してゐる。又その卷頭の要目を一瞥したのみでも「自助ルノ精神」といひ、「人民ハ法度ノ本」といひ、「國政ハ人民ノ光ノ返盟ナリ」といひ、「邦國ノ盛衰」は人民に因るといひ、かういふ思想は當時の日本人にとつて全く新しい民主的なものであり、同じ民主的思想が政治方面に適應されるとき、民主政治的を意識を生じて來るのは當然であらう。『西國立志編』それ自身は政治文學ではないが、その與へた政治的影響に相當大きなものがあつたと思ふ。

明治五年『魯敏孫全傳』(齋藤了庵譯)も亦、これ以後數回繰返して紹介されてゐる(判明してゐるものが、明治十年山田隆正『回世美談』、明治十二年橋園迂史の『魯敏孫島物語』、十六年井上勤『魯敏孫漂流記』、二十年牛山鶴堂『新譯魯敏遜漂流記』の四回試みられてゐる)、「商業資本冒險家」の典型的存在たるロビンソンの物語が、これ又新興日本の現狀から見て、大に流行すべき理由をもつてゐたことは、いふまでもない。元來此の小說は、その創作當時、デフォー一流の政治的立場を强調する意味もこめて書かれたものであつたから、見樣によつては一種の變態政治小說ともいひ得るものであつた。デフォーは元來ジャーナリストであり、政論家であり、商業貿易に基礎し、中等社會を中堅とした民主的政治を理想としてゐたものである。その意識が彼の論文は勿論小說にも隨筆にも反映してゐるので、

『ロビンソン』にもそれが出てゐる。此の譯書は初めの方だけで、半分にも及んでゐないから、ロビンソンの眞面目を全部發揮してはゐないと思ふが、それでもこれがブルジョア自由主義とブルジョア個人主義の鼓吹たるところは、これだけでも察しがつく。又譯者に多少のイデオロギイがあつたことは、その緖言に見える、「此書モト英國ニテ童蒙輩ヲ耐忍ノ術ニ勸誘セン爲メニ述ベシモノナレバ自ラ小說ノ體裁有テ確實ナラザル說アルハ固ナリ然リトイヘドモ大方君子賤近ナルヲ以テ捨ス熟讀玩味セバ自ラ魯鈍孫ノ如ク一頑固島ヲ開化セシムルニ至ランノミ」云々。これで大抵想察することが出來るのである。

明治七年の『後世夢物語』は、『新未來記』と同じものであり、前に述べたからこゝに繰返す必要はない。明治十年には――

『民約論』、服部德譯がある。これが民權意識から紹介されたものなることは、これ又明白である。因にいふ、此の書は中江兆民居士の譯解が出て以來殆んど人が知らぬ位になつたが、譯もなかなか良く、ルソオについても相當正確な知識をもつて紹介してゐる。世のルソオを語る人が徒らに兆民居士の飜譯のことのみ云々するのは、その普及の功を認めてであらうが、ルソオ紹介の功は先づ服部德氏が占むべきもの、而して譯者服部氏が舊幕人である點は、注意すべきところである。

明治十一年刊、島田三郎抄譯、萩原乙彥演義『通俗民權百家傳』は、西洋民權家の傳記を稗史化した最初であるかも知れない。兎に角此の書に至つて可成り政治小說に近いものとなつて來てゐる、たゞ小說としての形式が整はぬが六七分までは政治小說といつて可いものになつてゐる。此の書は、飜譯文學史の方からいへば、大した價値のあるものではないが、政治小說發達史からいへば、明治十三年以前にあつて先づ注目すべき隨一の書といはねばならぬ。初篇三卷、卷一はブルタス、パブリアスの合傳、賢婦コルネリア、兩グラキュスの合傳、卷二カトウ、ブルタスの合傳、

卷三ウィリアム、ラングトンの合傳、及び西紀一二一七年英王ヘンリー三世の卽位から一六〇〇年代に至る英國の民權發達史、第二、三篇はクロムウェル時代までの英國民權發達史及び英國民權家を敍してゐる（第二篇は本多省三原譯、第三篇は肥塚龍原譯）。左にその文體の見本を出してみやう。

羅馬の建國六百年の比頃に（紀元前百五十年間、本朝開化天皇の御宇）チベリアス・グラキュス、カイアス・グラキュスと喚做したる。同胞の義士有けり。當時羅馬は國中の。貴族擧て權威を振ひ。私擅橫虐憚る色なく。彌倍し豪富を自ら負みて。人民を惱虐するにぞ。微賤の者は苦楚を喫して。困難中に大抵は。陷らざるも無かりしを。グラキュス兄弟は。日來不平を懷くが儘に。共同一致奮發して。下民保護の律を議し。專民權を主張して。竟に彼の貴族們が。權務を縮束し人民自由の權利を得て。公平通利の功成しも。未だ幾千ならざりしに。貴族等が且怨み。且嫉媢さも遣る方なく。互に邪念を凝しつゝ。悄地に語らひ示し合せし。姦計に陷りて。日は異なれども兄弟が。厄難は同じ苦戰の場に。效果なく命は失ひしかど。其功績は千載の。今に至りて語り次ぎ。言傳へてぞ久方の。光り輝く玉櫛笥。兩個が義勇は死して亡びず。後榮爰に赫奕たる。實に往古の支人が。所謂身を殺して仁を成すとは。恁る儔の評語ならまし。（卷一十八丁裏——十九丁裏）

以つて如何に小說に近いものとなつて來てゐるかゞ察知されるであらう。

次に同じ十一年刊の有名な『花柳春話』について語らう。此の小說はよくこのまゝ政治小說視されるが、この小說そのものゝ政治小說でないこと、西洋流の才子佳人人情小說であることは、私が『明治初期の飜譯文學』の處々に辯じて置いた通りである。だが此の小說の作者リットンは政治家としても當時の權家の一人であり、作中に政治家が出入し、從つて政治の談話もあり、又政黨政治の內情の如きものにさへ及んでゐる點で、當時さういふ小說中の政治的分子に驚異した人々が、これを政治小說を以つて目したといふことは、想像に難くない。延いて又、これが政治小說

の出現に對して若干の刺戟を與へたといふことも、認めて然るべきであらう。第三篇より第四篇に亘り、主人公マルトラヴァースが讀書著作を禁じられて議員となることより、英國政治界の內情、政治界裏面の駈引、政治と社交、女性と政治等の問題が一わたりは語られてゐる。然しそれは單に政治社會のことを描寫してゐるだけで、何も政治小說的な一種のイデオロギイを以つて觀察してゐるのではない。況んや時代に沸騰してゐる自由民權の反映の如き尙は更である。且つマルトラヴアースには何等政治の理想といふものがないらしく見える。（よく觀察せば恐らく反貴族の自由主義らしく見えるが）。それだけでも政治小說として成り立ち難いことを示してゐるのである。たゞ以上の如く漠然とながら、英國政界の裏面を小說に取り入れてあるといふことで、讀者に大に新鮮な興味を與へたといふことだけはいひ得ると思ふ。

明治十二年には宮島春松の『歐洲小說哲烈禍福譚』があり、又これ又その本來の性質よりせば一種の政治小說的特質をもつものであつた。これは譯者が緒言に

其說所は國に君主たる者の政敎を主とし艱難快樂禍福興廢を皮相に表はし誠意正心治國平天下を心裏に蓄諷諭最懇に云々

といつてゐる通りである。元來此の小說は、哲人フェヌロンが、ルウイ十四世から王太孫ブルゴーニュ公の敎育を托されたとき、太孫に王道を敎へるために書いたものと傳はつてゐる。トロイ戰爭の勇將イサカ島の王ユリシイズの子テレマックが、戰爭後二十年間も歸國せぬ父を探すために出かける、さうして途中肉體的にも精神的にも種々樣々な危難にあふ。その度に附人マントールは智慧を貸す。マントールの敎訓と自分の武勇によつてかゝる危難を切拔ける。そのマントールの敎訓が、卽ち何時の間にか、津々たる興味のうちに王道を說いてゐるのである。マントールのテレマックに說く人倫は、王孫に說くものであるのに、新しい民本主義に立脚したものであつて、封建的な色彩は少ない。

又マントールはテレマックに頻りと王道の原則を說く。その原則は、「王は臣下の爲に存在し、臣下は王の爲めに存在せず」といふので、封建君主の絕對專制の原則ではなく、立憲君主としてのそれである。恐らくフェヌロンは、當時のルウイ十四世の專制政治に一種の不滿を抱き始めてゐたと同時に、その頃から漸く勃興しかけて來た民衆の自覺の聲に耳を傾けてゐたものに違ひない。

『哲烈禍福譚』はかういふわけで一種の政治小說であり、譯者にもさういふ意圖は多少あつたらしいに係らず、直接自由民權を說いてゐないの故をもつて、政治小說として一般讀者から大した歡迎をかち得はしなかつたらしい。然し此の小說の政治的イデオロギイには、かういふ民本的立憲主義的のところがあつたといふことだけは記憶して頂きたい。

明治十三年に於ては、吾等は准政治小說と目すべきものを二部見ることが出來る。『鷲瓈皤兒同島記』、『瑞西獨立自由の弦』、これである。前者はいふまでもないデイン・スウイフトの『ガリヴアス・トラヴェルズ』、後者は有名な『ウイルヘルム・テル』、テルがスウイス獨立の功勞者であり、自由民權の一偶像であることには異存もない筈であるから、これに若干の政治的意識を認めるのは當然であらう。又『鷲瓈皤兒』も、本來、時の政治界に對する諷刺を生命とした一種の暴露的政治小說めくものである。これは格別說明するまでもなからう。此他莊司晉太郎譯の『月世界遊行日記』なるものは果して小說か實話か何れとも判斷しかねるものであるが、これはウインナの人マルメルスの傳記及びマルメルスが氣球で月世界に上り、月界の王者と會つて政治その他の問答を交す物語から成つてゐる。さうして政治は君民同治を可とする結論になつてゐるが、この結論は當時の日本の政治界に取つて可成り面白いものである。

以上の如く、兎もかく十三年までの飜譯文學方面にも政治的分子を寫したものが可成りあるといふこと、その或る者は政治小說と今一と息といふところに來てゐるといふこと、これ等が政治小說を出現させるに多少役立つたといふ

ことは、事實である。同時に然しその政治的分子が雜然としたものが多く、意識的に纒つたものゝ少い點も注意を惹いていゝところである。

尙ほ以上の外に、硬派の飜譯文學では、明治九年河津祐之譯『佛國革命史』(ミシュレー)、十年永峯秀樹譯『歐羅巴文明史』(ギゾー)、十二年土居光華譯『英國文明史』(バックル)、十五年久松義典譯『泰西革命史鑑』(續は『佛蘭西革命』)、十三年瀨谷正二譯『志士必讀暴君殷鑑』等々がある。此等の中は、小說の利用される以前に於いて、政治小說と同じ使命をもつて利用されたものも少なくない。

(二) 實錄文學

實錄文學とは、本來ならば歷史文學に入るべきであるかも知れぬ、又或る程度まで時事文學に分類されるところもある。分類上からいへば一種變態的な中間的存在であるかとも思ふが、然し自家獨自の特色が全然なくはないので、矢張り實錄文學として特別な一類を形作らせる方が可からう。時事文學に比較して、實錄文學の方が、大體として歷史性のある事件人物を幾分記錄的に扱ふ、又歷史文學に比しては、必ずしも史的眞實にのみ拘泥せず、幾分小說的要素を交へてゐる。さうかといつて、歷史小說とまではいひきれる種類の作物ではない、それ程公然と創作と想像を許すものではない。いはゞ或る歷史的事件又は人物を、成るべく記錄的文獻に依り、創作を交へずに、而かも小說的興味をもつて讀めるやうな、按配と文章とで書く、さうしてその記錄の眞僞精疎はさう問題にせず(大體に於て甚しく間違つてゐない限り)面白い方を取る、さういつたものが實錄文學であると思へば、先づ間違ひがない。

此の種の文學は勿論日本には澤山ある、然し今一部の實錄文學史を書くわけではないから、それの起源とか沿革とかには說き及ぶつもりはない。ところで、實錄文學は勿論實錄文學で、政治文學ではないのであるから、それがその

まゝで直接に政治小説の先驅となることは、先づない。然し實錄文學がその對象として、著しい政治的事件なり、政治的人物なりを選んだ時には、その筆なり敍述なり思想なりが、我知らず政治問題にふれ、政治思想の吐露とならざるを得ぬ。さういふ政治的實錄文學が出來上つた場合、これに對する讀者の心的態度の如何によつて、さういふ文學は、讀者に政治小説的影響を與へる。さういふ過程からして、かういふ政治的實錄文學が政治小説の先驅と見なされ得る場合が度々ある。

明治初期の實錄文學、殊に政治小説出現までの實錄文學の中で、私は、左の數種の如き、此の種の政治的意味をもつたものとして擧げ得ると思ふ。

松村春輔。「復古夢物語」
同　「近世櫻田紀聞」
同　「春雨文庫」
吉村明道。「近世泰平記」
條野採菊。染崎延房。「近世紀聞」
村井靜馬。「明治太平記」
高畠藍泉。前田夏繁。「東臺戰記」
高畠藍泉。桃川燕林。「賞集花廼庭木戸」

先づ松村氏の作物から語らう。

『復古夢物語』（明治六年――九年）は、ペルリ來航から明治維新の大業の成就せるまでを、大體編年體として、間々面白き逸話等を挿み、王政復古の昔語を試みたものである。勿論歷史といふ程のものでなく、書いてある事實も傳聞

の間違ひが可成りあり、又各方面の狀勢を萬遍なく傳へてゐるといふのでもない、或る部分を詳しく或る部分は略、乃至全然載せぬところもある。だが明治維新の大事業、大活劇を文學的に記述した最初の作物として、兎も角研究家の一讀を要するものであらう。通篇事件の表面的現象を面白く描寫するといふのみで、本文には格別作者の政治理想といふ類のイデオロギイがかつたものは見えてゐないが、概していつて、當代の開化政治の頌榮、封建制度打破の讃美を寓してあることは、各篇卷頭に掲げた作者春輔の序文を見ても、略ぼそれと察せられる。これを讀むと、明治維新の大理想が、大局からして國權伸張、民意暢達を標的にしてあることが窺へるが、かく明治維新の大理想を再吟味することは、一は過去の成績によつて時代を批判する力を養はしめ、一は此の大理想が生長しつゝあるのを見て、こゝにれを助長實現せしめんとする志を固めるに至るであらう。かゝる實錄文學を讀むの利益はかく兩樣に見られ、こゝに至つて實錄文學が、それを讀む者として天下の政治的動向に關心をもたしめるに至るのである。

同じく松村氏の『春雪奇談近世櫻田紀聞』（明治八年――九年）は、初めは『復古夢物語』の附錄として草されたものであるが、遂に單行するに至つた。內容は、表題で知らるゝ如く、水戶浪士が櫻田門外で井伊大老を斬つた始末を稍や文學的に記したものである。櫻田事件は『復古夢物語』の一部であるが、倒幕維新運動の直接の一原因となつたといふ點で特に詳しく拔出して別冊としたものであらう。作者の水戶浪士、井伊大老に對する見方は一見識あるものといつて可い。井伊は開國を斷行した點に於いて賢明であつたが、權勢に任せて對內的に暴壓政治を行つたのは失敗である。又水戶浪士の所行は、文明の世からせば、頑固の擧とされるが、その憂國の誠心は大なるものがあるといふのである。政治的正義を高調すると共に暴力政治、壓制政治への警告を寓し、又國民に愛國憂世がその義務なることを敎へる。こゝに又此の書を讀む意義の一半があるであらう。

順序であるから同じく松村氏の『開明小說春雨文庫』をいはう。此の作は都合八編あるが（明治九年――十五年）、二編

までが松村氏であり、その後の執筆は和田定節（瓜生政和、即ち梅亭金鵞）の作である。然し最後まで松村氏の閲を受け材料も舊に依つてゐると思はれるから、こゝでは假に松村氏の著として語らう。これは開明小說と角書がついて居り、又敍述描寫の體も、前の二書とは大分違つて先づ小說體となつてゐる。然し全くの小說でないことはその序（大久保春曬）を見れば分かる。

开も這書を春雨文庫と題名けしも松葉巴の唱歌を礎とし或は故人の小說物を鈔案做し部分にあらず只本文の眼目は旣往十有餘年開鎖和攘の說發り海內鼎沸の時に當り丹心報國の壯夫は義を泰山の重きに較べ命を鴻毛の輕きに做へ美名を靑史に殘すあれば奸智を逞ふし一時の榮花を願みて汚名を千歲に傳る佞臣あり或は貞操の爲に身を薄命に終り或は孝順の不幸にして身を苦界に沈むる未通女あり當時見聞爲る所有爲轉變の憂世ならずや恁而我師春輔大人は其人この眞說なる事迹を折にふれつゝ筆記せられし物今はた櫻雨園窓下の文函に蔵むをもて這回梓に上し更に辭を飾ずして春雨文庫と號けられたり云々。

これによれば、小說の體をなしてはゐても、矢張り一種の實錄文學といはなければならぬ。たゞ前二書が維新の大運動の表面の事件を說いてゐるのに對し、此の作は專ら「正史の裏みち婦女の事跡を記すを以て主旨と做したるもの」である。いはゞ維新外傳ともいふべきものである。

以上の序によると、此の小說は一種列傳體のものとなり、多勢の壯士、美人、孝女、烈婦などの傳記が續出する仕組みであつたらしい。だが實物は何うかといふと、最初に遊女喜遊の傳を出し、次に島田左近と藝妓君香とを出したあたりはさうするつもりであつたらうが、後は殆んど二組の物語りの交代になつてゐる、一組は京都を舞臺にしたもので、勤王の町人俵屋淸兵衛の苦心とその妻お岩の貞烈、今一組は橫濱を中心とした物語で、幕士渡邊吉太郎、その戀人お梅のことである。一方は勤王攘夷が背景となり、一方は開港佐幕が背景となる。その間に近藤勇とその情人お

みやの話が織込まれてゐる。八編までのところでは、此の三つが何う絡み合ふのか、推察がつかないが、何れ舞臺の進むと共に一つに纏つて來るのであらう。そのことで一番面白く出來てゐるのが、俵屋清兵衞の話で、これが實話とすれば可成り面白い人物がゐたものだと思ふ。淸兵衞は長州の勤王黨に近づいて種々密事にも與かつてゐるが、文久頃には次第に幕府の京都手入りが嚴しくなるので、わざと小常といふ藝妓に迷つた風をして人眼を欺いてゐるが、然し身邊が愈々急になるので長州へ落ようと思ふ矢先を、彼の妻お岩へ戀慕してゐる寅吉といふものゝ訴人となつた爲め遂に捕はれる、その後が知りたいと思ふが、小說の中絶で、それきりである。然し此の種の實錄小說で、淸兵衞やお岩のやうな町人階級（ブルジョア）が主として描かれることは先づ珍らしい。殊に町人が時代の政治的活劇へ參加してゐる點を小說してあるところなど、新しい分子といつて可い。勤王に托して實力相當の人間的待遇を要求し始めた町人精神といふものが出てゐる。町人の自覺を反映したものとして、又正義の最後の勝利を寓してある點で、又義勇奉公の意氣を示してある點で、一種の宣傳小說的氣味があることは、いふまでもない。これを順に利用せば、現在の美政を讃美する人々には、そのこゝに至る辛苦艱難を示して現在の有難さを益々感銘させる、これ程の犧牲者があつてやつと今日の開化となつたのだ、だから天朝の御恩を忘れてはならぬと共に、かういふ犧牲者の精神も忘れてはならぬといふことになる。これを逆に利用すると、あれ程辛苦艱難したが結局今日のやうに開明になつた、だから吾等も何んな艱難を忍んでも理想の政治的建設に進まねばならぬといふ志士への奬勵ともならうか。何れにしろ、松村春輔の實錄文學は、政治小說前期に於ける政治小說的分子としては十分硏究家の一讀一考に値するものである。

吉村明道の『近世太平記』（明治六年）は先づ純然たる記錄文學といつてよく、幕末から明治へかけての略歷史といつた方が可い。だが文學的潤ひは餘りない。これに餘するものに、山田俊藏の『近世事情』（同年）がある。『復古夢物語』を今少し乾燥無味にしたものと思へば可い。これ等については、今別に取りたてゝいはぬことにする。

次に語るべきは、條野採菊と染崎延房の編輯になる『近世紀聞』である。これは松村春輔の著作と並んで實錄文學中の巨擘といふべきものである。條野・染崎共編とはいふもの丶條野は初編だけのことで、後は全部染崎であるからいはゞ染崎の著としても可いわけであらう。染崎氏とは、いふまでもない爲永春水の二世を名乘つた幕末小說界遺老の本名である。

內容は第一編嘉永六年のペルリ浦賀渡來かに第十二編西南戰爭の概略をもつて筆を結んでゐる。だが事實は明治二年の函館戰爭の終末以後は眞の餘白へ走書をした程度のものであるから、先づ函館戰爭までと見るのが、至當であらう。この書の內容的價値については、木村毅君がかういつてゐる。

『近世紀聞』の價値は、嘉永六年黑船浦賀に渡來の以後、明治十年の西南戰爭に到るまで、前後三十年近くの史實、街談、巷語、風說、逸聞の殆んど凡てを集大成し、維新大革命の百科全書と稱するも不可なき點にあらう。封建日本から新日本に甦生の過程に起つた出來事で、苟も耳に挾むに足る事は細大洩らさず列敍してある。云々（飜刻『近世紀聞』の解題）

全くその通りであらう。加ふるに文章は流麗であり、敍述は稗史小說的であり、讀んで面白く、或る程度まで史實を握んでゐる。表面的の大事件を詳しく語ると共に、個々人の興味ある逸話傳記も遺失しない。此の當時に、これ等戲作者の力でよくこれまで大部の、これまで內容の實充したものを書いたものだと感心する。編者染崎氏の文學者としての實力は、魯文などを數段立ち超へてゐたといふのが眞實であらう。又幕軍を脫兵とか脫士とか激徒とかいふが、賊軍といはぬのは見識ありといふものである。

此の書にも勿論、「開化を增す」とか、「太平の有難」さとかいふ以外、格別な政治的意識は現れてゐないが、讀者の態度如何で、『復古夢物語』以下の場合に見る如きものもあり得ると思ふ。たゞ『復古夢物語』以下に比して、文學的

としては整つてゐるが、何となく熱が少ない。これは維新の政治的活劇に對する作者の感情の相違であらう。何となれば松村春輔は自ら武器を把つて尊攘運動に加はつた人物であり、條野、染崎以下はさういふ經驗がないからである。然し何れにしても維新革命の大理想に對する概念を讀者の腦裡に養ふことに、可成り効果があつたといふ點は、十分認められやう。

『事情明治太平記』(明治八年、村井靜馬編輯)、これも『近世紀聞』に劣らぬ長編物であり、恐らく此の種の實錄文學では一番長編であるかも知れない、初篇から二十五編かに及んでゐはしなかつたか。內容はいはゞ『復古夢物語』の續篇といつて可く、德川慶喜の大政奉還から明治十年西南戰爭に及んで居り、『近世紀聞』が略した函館戰爭以後のところを詳しく說いてゐる。文學的にいへば、『明治太平記』は、『近世紀聞』の敵ではないが、より近接な時代の事件に說き及んでゐる點で、讀者に對する政治文學的感化は『近世紀聞』より大きかつたかも知れない。それは維新以後になると、動機の複雜な政爭といふものが背景になつて來るからである。

元來、維新以後の暴動といふものは、士族の不平とか封建的餘燼とか何とか片づけられてゐるが、さういふ單純なものではない、發端は尊王攘夷がいつとなく尊王開國となつたことにあり、つまり維新の大運動が、西洋の勢力によつて幾分當初の大理想を歪枉せしめられたといふ點にある。明治六年征韓論の問題は丁度その歪枉の頂點になるわけである。こゝで維新運動の理想派は退いて、現實派全盛となつて來る。現實派の勢力に對して、理想派は、此の歪枉を是正して、維新以來の大理想に還らうとする。その還元の努力がいろいろな形で現れる。萩、熊本、鹿兒島の暴動もその一つの現れであり、民選議院建白もその一つの現れである。かく自由民權運動の起源を維新の大理想に求める見方は普通國粹的とされるが、かゝる國粹的な見方も、以上述べたところによつて理由のないものでなかつたことが分かると思ふ。

「明治太平記」の如きものは、別にさういふ政治的鬪爭の推移を思想的に、イデオロギイ的に語つてゐはしないが、征韓論前後の政變、更に溯つて明治政府の建設以後の變遷を觀察することは、これ又讀者の態度如何によつて、以上の如き國粹的立場を暗示したことであらう。

『東臺戰記』(明治七年、前田夏繁、高畠藍泉)、これは主として前田氏の手に成つたものであるが、名の如く上野戰爭の追憶記といふ如き體裁であり、天野八郞の『斃休錄』を附錄としてゐる。尙ほ上野戰爭に關する實錄には原田某氏の**『山鵑一聲』**といふのがある。然し總體が彰義隊その他の立場を舊幕人のイデオロギイで辯護したものであり、それが餘りに明白に出てゐるので、こゝではたゞさういふものがあるといふことを擧げて置くに止める。

最後に**『賞集花迺庭木戸』**(ほめつどふはなのにはきど)は、轉々堂主人閱、桃川燕林著となつてゐるが、事實は、轉々堂主人卽ち高畠藍泉の自著である。明治十三年五月初篇刊、十六年三月六篇大尾、內容は、以上の諸書と違つて木戸孝允傳を稗史化したものである。藍泉はその畫技をもつて木戸の知遇を得てゐたものらしく、その著作で木戸のことに及んでゐるのは、これだけに限らないが、これが特に詳しく書いてある。木戸の素性、立志、吉田松陰の薰陶、維新運動に於ける役割、幾松の逸話等から民政への注意その他に至るまで比較的整然と書かれてゐる。木戸の傳記は今日誰しも知つてゐることであり、從つて此の書の內容にも立ち入つて梗槪を述べるやうなことは止めるが、同じ實錄でも、木戸が政治家だけに、政治的分子をいさゝか明白に出してゐる。左に二箇所引用しよう。初編上發端。

國家の興廢は政事にあり政事の得失は補佐にあり補佐賢明なるときは俊士朝に滿ち七百年來王室のおとろへたるを回復し赫々たる天威をかゞやかし萬民自由の權を得て太平をうたふ聖代となし奉りし忠貞の功臣多く世に出し中に文學武術人に秀で百折千磨の艱苦をなめて遂に國家のいしずゑと世にうやまはるゝ人となる心の花はふたばより餘の木にまさる松と菊(下略)

次に六編下の一節、——

（明治九年）四月十四日木戸公が染井の別業へ天皇の車駕を迎へ奉り同年六月東奥御巡行に扈つて僻地の民情を視察し大いに歎息せられしとぞ同九年十月朝廷におゐて金祿公債證書發行の議あるに臨み木戸公はひそかに思はるゝは立憲の政體は民をして自任の責を負はしむるに有て責を負はしめはおの〳〵進むで其長上に死べし瑞西白耳義の如き小國にして兵備とゝのへるは我國の士族に等しき者あればなり然るを一般の人民に責を負せずして獨士ぞくの威勢のみを佃らば萬一政府に事有しとき誰か又是を守らんと再三再四とゞめられしが其論終に行なはれず云々

全編趣意は木戸の功勳を頌するにあつて、別に政治的寓意を欲したものではないが、木戸の政治理想を敍する條は、かういふ風に自然一種政治小說的な香味を發してゐる。作者藍泉は何れかといへば政治嫌ひであつたといふから、作者の側には別に何等の寓意も示すつもりはなかつたらうが、丁度これが出たのは明治十三年であり、十三年に立憲政治提唱の元勳木戸公の傳記小說を出すといふ點に、幾分か時代の反映なり要求なりが見えてゐるともいひ得る。

實錄文學は、その形成上、直接政治小說と連絡をもつてゐるものがある。十四年『蝴蝶紀談』、十六年『高嶺の荒鷲』の如き初期の政治小說に形式上實錄稗史風にしたものが相當あり、それが年を追て寫實形式の小說風になつて行く。又作家では、坂崎紫瀾、高瀨眞卿の如きは何れも此の實錄文學派の系統を引いてゐる。或る點では小室信介の如きもさう見られぬところがなくはない。矢野龍溪の『經國美談』（十六年）の如きも、多少この實錄文學の意識を㨾んでゐはせぬかと思ふ。

（三）時事文學

時事文學とは、時事を材料とした小說、戲文、雜記その他をいふのであるが、その時事は必らずしも政治的事件と

のみ限らず、汎く社會的影響をもつものである。「時事」とは本來その時々の出來事といふ義であるから、勿論政治といふ特殊な意味だけに限られたものではない。だが、その時々の出來事のうちで、政治は最も眞劍な、最も影響の廣い、最も際立つた出來事であるから、これをもつて時事が代表されるのも、無理ではない。それで時事文學の大部分がその時々の政治に關係したものであるのも、當然だといふことになる。

時事文學は、その筆者の態度によつて二つに分けられると思ふ。一は專ら報道的記錄的な態度の文學、他は諷誡諷刺の精神を寓した文學である。一は筆者の主觀的批評は成るべく拔きにして時事（事件）の骨子たる事實を文學的に面白く報道することを目的にしたもので、これは大に實錄文學に近い。たゞその對象が現在の事件であるのと過去の事件であるのとの相違がある。他は、事件の骨子は讀者が既に理解してゐるものとして、その事件に對する筆者の主觀的批評を主體としたものである。此の方は前者程公然と表明し惡いから、勢ひカムフラージュとして戲文形式、滑稽小說、雜錄等々の側面的態度で發表されることになる。だが、批評的イデオロギイを主體としたものだけに、この方が前者よりも政治小說的分子が多い。單に政治小說的分子といはず、中には立派に政治小說となつたものもある。此の分類の點でいへば、前者に時事文學の一項を獨占せしめ、此の後者の方に、諷刺文學といふ一項を占めさせたとしても當然な譯であるが、何れも時事が對象となつてゐる點で、これを總括して時事文學とし、その中で二つに分類しても、可くはないかと思ふ。暫らくさうして置かう。さうして便宜上一を記報文學、他を諷刺文學といふことにする。

記報文學の類は、時事の續出に從つて出るので、その數は、明治初期だけでも夥だしいものがある（これは諷刺も同じこと）。今勿論それを悉く紹介する餘裕がないので、その主要なものを極く簡單に擧げて行かう。

「淀川合戰見聞奇談」（明治元年、浪花野夫）
「慶應太功記」（同年、東園主人）
これは何れも明治戊辰、鳥羽伏見の役を最も早く文學化したものであるからその意味で先づ掲げる。他にも此の種の作物は多いと思ふ、勿論多少のカムフラージュが施してあることはいふまでもない。
尙ほ明治元年前後數年間には、此の種のものゝ單行本は餘り見當らぬが、新聞記事で此の種文學に入るものが多く又それを一枚刷の錦繪仕立にしたものも澤山ある、だがさういふものは、餘裕がないので一々こゝに擧げることをしない。
明治七年佐賀の亂以後漸く時事文學の單行本が殖ゑる。
「佐賀電信錄」（明治七年、神奈垣魯文編輯）
「臺灣外記」（同年、染崎延房著）
これは臺灣征伐の當てこみもので、明末臺灣に據つて淸朝に屈しなかつた國姓爺鄭成功の事蹟である。
「臺灣軍記」（明治七年、田代幹夫著）
「繪本熊本太平記」（明治九年、篠田仙果編）
初編は熊本の神風連、二編は山口秋月の賊の發端になつてゐる。
「探誠夢復路」（明治九年、沼尻絓一郞編）
これは、明治九年十二月茨城縣の暴動を扱つたもの。
以上はまだまだ、政治的イデオロギイを云々するところまで行かぬが、時人の頭腦に時事の印象を強く叩きこむ役目は幾分か果したことゝ思はれる。

明治十年に至つて西南の亂があり、此の未曾の內亂を題材とした文學が實に枚擧に暇のない程夥しく現れた。左に擧るのは、私の寓目したものゝみで、別に强て探索に及んだのではないが、それでもこれだけある。事實仔細に調べ上げて見たなら、これの倍數乃至それ以上もありはせぬかと思ふ。

「西南傳信錄」(明治十年三月、未詳)
「薩肥傳信錄」(同　年三月、常井誠一郎編輯)
「探誠夢復路」(同　年二月、沼尻絓一郎編輯)
鹿兒島事件の卷として一編上下、二編上下である。
「繪入鹿兒島征討全記」(十年二月、井澤菊太郎編輯)
十年四月第二十號、報道的文學としては、此の戰役に關する限り代表的なものゝ一つである。
「繪本鹿兒島戰記」(十年二月、篠田仙果錄)
西鄉のために辯護してゐるところがある。
「同　後篇」(刊年未詳、永島福太郎錄)
「鹿兒島戰爭日記」(十年三月、永島福太郎錄)
「同　後篇」(刊年未詳、同　人)
「鹿兒島電報記」(十年三月、高瀨茂顯編輯)
「鹿兒島征伐物語」(十年三月、篠田久次郎(仙果)編輯)
「薩摩大戰記」(十年三月、大阪鈴木雷之助編輯)
「鹿兒島戰爭記」(十年三月——十月、篠田久次郎錄)

「鹿兒島軍記」(十年三月、大西庄之助錄)

「西鄉隆盛蓋棺記」(十年五月、山本園衞編輯)

これも暗に西鄉の英雄なるを賞める意識が强い。その每號の表紙裏に題して曰く「此賊以前無₂此賊₁、此賊以後無₂此賊₁、隆盛々々大哉隆盛」といつてゐる。

「繪本西南太平記」(十年三月、沼尻絓一郞編輯)

十年八月、十五號(二册)にて終つたものらしい。これは直に『明治太平記』に續けて可いものである。此の種の文學中、一讀に値するもので、逸話逸事等も多く、先づは面白い。この書にも到るところ西鄉の英雄なることを暗に賞めてゐて、若干政治的なイデオロギイが仄見えてゐる。殊にその第十四篇の土佐立志社の活躍を描くあたりは、大に政治小說的意味を示してゐる。例へば第十四編上卷九丁十――丁に曰く「旣に高知縣の士族は兼て民權論に熱心せし者にて今般の事起るに及んで大に其氣力を盛んにし立志社靖獻社中立社抔の有志輩時々各所に集會し頗る激烈の論を發して曰く今や全國の民情未だ治を思はず稍もすれば騷擾に及ぶは他なし二三の有司が獨り政務を專制して人民政事上に關する權なきに由れりと遂に數千百人同志戮力して大に爲あらんとす」云々。以て一班を概すべきであらう。

「西南鎭靜錄」(十年九月、沼尻絓一郞編輯)

これは『西南太平記』の續篇である。つまり『太平記』の十六篇以下と見れば可い。

「參考鹿兒島新誌」(十年九月、和田定節輯)

此の種文學中最も大掛りなるものゝ一つ、これも矢張り西鄉の英雄なるを認め、賊軍に對しても同情の筆をもつて描寫してゐる。

「鹿兒島征記」(十年九月、西野古海集輯)

『西鄕隆盛夢譚』（十年九月、羽田富次郎編輯）

初は六枚續きの錦繪風のものに書入れてあるが、此の年十月大阪で同じものが單行され、第一號となつてゐる（伏見豐吉編輯）。これは記報文學としては嚴密に分類されぬかも知れぬが、諷刺文學に入れてしまふべき性質のものでもないので、こゝに擧げて置く。これは頗る面白いもので、西鄕が夢に造化翁（天帝）に謁して、天帝から謀叛した心事を問はれ、具さに奸臣彈劾を奏上するといふ筋で、全く西鄕黨の宣傳文學ともいふべきものである。第一、天帝の使が、西鄕を呼んで正士正士といふのからして並々ならず變つてゐる。更に西鄕が天帝に奏上する言葉は、全く當時の政治に對する諷刺と見るべく、此の一段は政治小說に近いものがある。曰く「抑日本皇帝には延喜天曆の先年にも劣り玉はぬ英名智識普天率土に著しくは侍れども左挨右挨の貴臣に二三の奸臣ありておのれの私欲を專横にし陽には公明を唱へ陰に苞苴を以て凡愚なる人をも官途に選擧せしより遂に其害農商に蔓延び地稅改正の擧におよび貢米代價に不適當なる代價を賦し正金收取るに因て各在の農民莚旗を動かし强訴止時なく商家に苛き租を加へ下民の自由を壓へ萬民塗炭の苦難を顧みず己は花奢淫欲を横にし官路の事務は一々民心に悖り萬民の朝廷を怨むもの少からず且外は朝鮮國と卑屈和議を結び苟且の偸安而已にして皇國萬世の國辱を顧みず內は只洋法に而已泥醉み忝けなくも吾日本國三種の神傳たる寶劍の武用を廢し剩へ國に功ある華士族の永世祿を祿劵金祿となし漫りに賣買の權を許せしより士族は遂に奸商の手に身をおとし進んでも生路なく退いても依るべき主なく私怨を王朝に積りしより非謀を企つるに至り多くの人命を殞すは是則ち阱を國中に作るの制方ならん是等國事の成敗を過し明治六年十月の會議の席にて建議せしも御採用にもならざるゆへ臣其職にありて其言を入玉はぬ上からは某ありて何の益かあらんと職を辭し古鄕に歸り」云云。西鄕の口を借りてはゐるが、全く時政に對する批評沙汰である。此の物語は、政治小說發達史上からは注意されて然るべきものである。

「鹿兒島英雄銘々傳」(十年九月、西野古海錄)
「鹿兒島紀事」(十年九月、村井靜馬著)
此の中にも、暗に西鄕を賞める點が多い。
「繪本西鄕一代記」(十年十月、早川德之助錄)
「眞書西鄕隆盛一代記」(十年十二月、羽田富次郎著)
西鄕の功勳を詳しく說き、西鄕の大英雄なることを認めてゐる、從つて西鄕を賞める所が多い。たゞ賊となつたのを惜むといつてゐるが、然しその點には同情してゐる、勿論時政に對する諷刺も多少は見えてゐるであらう。
「西南征討記」(十一年、岩崎茂實著)
「鹿兒島鎭定錄」(十年、伊藤靜齋編)
「鹿兒島實記一夕話」(十年、編者不明)
「西南雲晴朝東風」(十年、河竹默阿彌)
「桐野利秋身上噺」(十三年一月、田中正治郞編輯)
初篇三册だけ寓目してゐるが、二篇三篇は果して書かれたものか、又は書かれずに止んだものか、知らない。これも桐野の少壯時代から豪傑であつたことを、大にほめて書いたものである。
さて又、明治十一年から十五年までの間で、時事文學として擧げ得るものは、——
「不事多(ふじた)俠客傳」(十二年か、羽田富次郞編輯)
「豐時(ふじ)田秋(たのあき)浪速新雁(なにはのはつかり)」(十二年、柳水亭種淸輯)
二書ともに藤田組贋札一件に因んで藤田傳三郞の傳記を小說化したもの、此の外にもまだ〱ある筈、それ程これは

當時の大事件であつた。『新雁』の雁は贋へかけた洒落である。

「南海自由の旗揚」（十二年、牧岡安二郎編輯）

民權泰斗板垣退助傳を稗史めかしく述べたもの。

「島田一郎梅雨日記」（十二年六月、岡本起泉編輯）

大久保公の刺客たる島田等六人の傳記（といふよりも寧ろ逸聞）を小說化したもの、表面懲誡のためとかいふが、內心は島田等の心事行動を壯とする風が見えなくもない。西鄕黨に對する同情もある。

「格蘭氏傳倭文賞（ぐらんどしでんやまとぶんしやう）」（十二年七月、假名垣魯文和解）

前大統領グラントの日本訪問の記念ともいふべきもの、その簡單な一代記を稗史風にしたもの。

『名廣澤邊萍』（十三年二月、渡邊文京綴）

明治四年廣澤參議暗殺の事件、及びその裏面に橫はる新舊思想の衝突等を描いたものであるから、當然實錄文學に入れてもいゝわけであるが、此の書の出來た動機がさうはさせない、それは、此の十三年三月に嫌疑者中村六藏の言渡があつたので此の事件が新に世人の記憶に上つた、そこを狙つたものが、此の小說である。だから矢張り時事文學に入れるのを可とする。廣澤暗殺の動機犯人等はその當時から全然迷宮に入つたものとされたが、此の小說はその傳說の一つを執つて、犯人を暗に中村六藏とし、これに久留米の國粹黨たる古松簡二、板垣太郎等を配し、當時の政府の政治振りに對する不平と外人の跋扈を憤る餘り、外人應接の參議の廣澤を斬つて政府に警告したといふ風なことになつてゐる。勿論大した根據の無いことではあつたらうが、此の國粹主義、憂國思想、反政府氣分といふところに、十三年當時の讀者階級の心境に何やら映るものがあつたことであらう。

「冠松眞土夜暴動（かむりまつまどのよあらし）」（十三年九月、武田交來錄）

神奈川縣眞土村松木長右衞門燒打事件。

『蓆籏群馬嘶』(十四年四月、雜賀柳香綴)

明治十三年十月群馬縣榛名山下にあつた事件で農民同志の對抗から暴動を生じかけたもの。

『思案橋曉天奇聞』(十五年二月、岡本勘造(起泉)綴)

明治九年萩の亂の際、前原と鼓應して事を擧げようとした會津藩士永岡久茂一派の思案橋事件を題材としたもの、寧ろその側面史ともいふべく、久茂の情人藝妓小仙が主として活躍する。これも勿論政府反抗、政治上の不平を書いてある。

此の頃はもう政治小說が出た後に屬するので、これ以上書く必要はないが、今一つだけ書いて、かういふ時事文學が如何に政治小說化したかの經路を明確に示して置きたい。それは、——

『民權泰斗板垣君近世紀聞』(十五年春、中島市平編輯)

である。これは十五年四月の岐阜事件をそのまゝ小說化したもので、內容は全く政治小說そのまゝである。通例草双紙型の戲作小說は挿繪と本文と相應ずるものであるが、この書は草双紙型をとつてゐるに拘はらず、繪組はは板垣一代記であり、本文はこれに頓着なく、初編は某氏の板垣退助論、明治十四年甲府に於ける板垣退助の演說、二編は明治十五年四月岐阜事件の顚末、三編は刺客相原の判決書による記事となつてゐる。雜賀柳香が序してゐるやうに、「自由民權を伸張せんとする諸氏には必携の書」であると共に、「婦女童蒙といへども倍々自由を培養し改進の良田を耕やし我邦をして富强の結果を觀るの階梯」に近いものであり、殆んど純然たる政治小說である。卽ち時事文學も亦、かういふ場合、かういふ人物と事件に會へば政治小說と連絡するに至るものであることを記憶されたい。冒頭の一節—

自由は天賦の賜ものなり自主は天賦の精神なり凡そ生とし生る人誰か自主自由を貴としとせざる者あらんよしあり

とせば該人や天の賜ものを取らず我精神のあるところを知らずたゞ此世に出しのみに停まり木偶の坊も同じき無神經なるべし今や我日本三才の童子といへども自由を說自主獨立の氣象を帶び行ところとして民權の伸張を計らざるはなし盛んなり賀すべしといふべし此氣運に至りしは維新以降　聖天子の德澤により日一日に文明にすゝみ開化の域におよびし乃ち天賦の賜ものなれど慶應の初年までは卑屈に甘んじ厭制の治世を習慣としたる日本人民にして未だ十五年の星霜に滿たざる明治政府の下に斯の如く自由改進の說熾んに起きたるもまた以てこれを奬勵するの泰斗あるが故なり其人や誰ぞ前參議正四位板垣退助君その人なり云々

私のいはゆる記報文學は以上に止めて、次に諷刺文學の政治的分子を一瞥したい。それに最早此の章も大分長くなつてゐるから成る可く手短かにしたい。尤も此の種の文學は明治初期では最も夥だしくあるから、何うしてもさうなるのは、當然である。材料も凡て坐右に有り合せのもので間に合せて置かう。

先づ明治元年の新聞から拔いたものを一つ二つ揭げよう。

明治元年六月、『もしほ草』第十四編

すみの江のなにがしといへる人の隨筆の內よりぬき出したそはなし

此世界の東のはてに扶桑木とて最大なる木あり七八百年以來この木に蟲がわいていたくくひあらしてほとんど枯なんとす始はうつくしき赤色の蟲よついつゝにてみきにちかきあたりの枝葉をくひをりしが又白き蟲二三いでさて赤蟲とかみあひつひに赤蟲をくひころして東にさしでたる大枝にとまりて葉どもくふうちに赤蟲の種もあちこちに殘居けんこれもこゝそこと這まはりてくひ又白蟲とかみあひなどしけりかくて年經るほどに黑蟲靑蟲黃蟲などさまぐ\のむしいできて夜晝となくめりめりとくひあらしかみあひなどして騷立ほどに此木の主たる者も其勢ひにおさ

れてせいすることあたはず此木をばくひとられんとす口惜きことゝおもへどせんすべなしさるほどに蟲はあまたの子をうみつけ又外よりくるもありあらたにわくもありてちいさきや大なるやいろ〳〵のきたなげなる蟲うざ〳〵とむれゐてくふほどにいと大なる木なれど蟲なき所もあらざりける此木の主いかでこのむしども追拂てんとてたちさわぎしかども力不レ及してやみぬ夫よりぞ蟲はなほふえにけるかくてとしへてのちあちこちに大なる蟲いできて小むしどもをくひころしぬ又それよりも大なるがひとついできてその蟲どもと爭ひあふほどに又大なる蟲いできたりてはむかふむしどもをばみなくひころしぬ此蟲は外の木の葉までくひあらしたて此大蟲死けるあとに今ひとつの蟲ありけるがやう〳〵くひふとりてこれぞこの扶桑木をばおのがものがほにして木のぬしにはすこしばかりの枝をあたへおきて已がちなみあるこむしけらい蟲ども數しらずおほかる蟲どもに枝どもそれ〳〵にわかちあたへておのれはひがしにさしいでたるいとおほきなる枝にすつくりてすみけりさてそのむしども子あまたうみつゞけるほどにとしどしにはびこりてこの木にすきまもなくたかりゐてよるひるとなうたゞくひにくひあらしければさしもおほひなる木なれどめのいづるひまもなくいまははやかれなんとす

同六月五日、『もしほ草』第十六編にも、「神戸よりきたりしはんじものうつし」と題して諷刺漫畫に添へて文章がある、これなども前者と同じ趣意のもので、內亂をつゞけてゐるうちに、日本が外人の有とならうといふことを諷したものである。

その他新聞紙には此の種の諷刺文章が澤山あるが略す。

『安愚樂鍋』（明治四年、假名垣魯文）

別に政治的イデオロギイがあるわけではないが、總體として社會諷刺の穿ちの上乘として取るべきであらう。目次に西洋好の聽取、墮落個の廓話、鄙武士の獨盃、野幇間の諂言、諸工人の侠言、生文人の會話、娼妓の密肉食、半可の

江湖談（うきよばなし）、歌妓（げいしや）の坐敷話、文盲（ものしらず）の無茶論、人車の引力語（ひきこと）、覆古の方今話（いまやうばなし）（此の話の中に文明開化讃美のイデオロギイがある。時勢の變、西洋萬能の思想もある）、商法家（あきうど）の胸會計（むなかんじやう）、芝居者の身贔負藪、醫者の不養生、落語家の樂屋落、茶店女の隱食、新聞好の生鍋（これにも多少の開化イデオロギイあり、新政の有難さ、自主自立の權、自由の理等の說もある。）

「かたわ娘」（明治五年、福澤諭吉）

日本婦人が眉を剃り齒を染めて陋習を嘲つたもので、引いて一種の諷刺といへやう。

「大洋新話蛸入道魚說教」（明治五年夏、假名垣魯文）

例の三條敎則を旨としたる宣傳的戲作、併せて時世を諷しようとしたもの。

魯文と同時に諷刺的戲文を多く公にした者に萬亭應賀がゐる。大抵は明治五六年から七八年へかけて出たものが多い。それは時事を諷刺したものではあるがこれが、必らずしも當らぬものもあり、又政治に亘るものが無いので、左に表題だけ擧げて置かう。

「聖人肝潰志」（明治五年）
「理解新文五穀祭」（同　年）
「大鈍詑新文鬼談」（同　年）
「當世利口女」（明治六年）
「新制兎美談語」（同　年）
「虫類大議論」（同　年）
「日本女敎師」（明治七年）

「智惠のはかり」（同　年）
「倉庫三代記」（同　年）
「馬鹿大妙藥」（同　年）
「青樓半可通」（同　年）
「近世呆れ蔓」（同　年）
「權兵衛種蒔論」（同　年）
「太郎兵衛水掛論」、「孫兵衛活計論」
「異形異物各覽會」（明治八年）
「修身千代見草」（同　年）
「活論學問雀」（同　年）
以下は略して、一々擧げない。
此の他『明治文化全集』の文明開化篇に收まつてゐる幾多の啓蒙文學の如きにも、此の諷刺文學の類に入るものがあらう。今一々は擧げないが、詳細は同篇について見られるが可い。
次に此の頃の新聞から拔いた政治的諷刺を二つ程揭げやう。
〇新聞雜誌第百九十一號、七年一月（洞陀樓翁投書）
府下某ノ街ニ一大商アリ始祖以來數代ヲ累ヌ世ニ名高キ名家ナリケリ主人幼若ニシテ數名ノ番頭後見ヲ爲セリ斯テ時勢ノ開明ニ赴キ世ノ巨商大賈ノ益榮ヘルヲ羨ミ己ガ家モ之ニ傚ヒ追々古格ヲ改メ新法ヲ施コシ店ノ召使手代小僧丁稚ニ至ル迄散髮洋服とんびこふもりヲ持シメ開化メカシテ喜ビケリ然ルニ近來却テ世話ヲ爲シ過ギシニヤ諸務多

端ノ餘番頭ノ者モ各己レガ意見ヲ張リ議論區々ニシテ更ニ一致セズ或ハ開化ニ過ルト言ヒ又ハ益新法ヲ施スベシトヒ俄ニ奉公人ノ給金ヲ減ジ年來ノ扶持米ヲ割取リ手代丁稚下女下男ノ持テル品ニモ盡ク運上ヲ出サシム又朝ハ斯ク爲スベシト言付ケタハ右樣爲スベカラズト命ジ一日ノ內千萬命執ヲ目的トモ方向立チ難シ斯クテ家政行届キ開化ニ赴キタリシト誇レドモ惡ムベキハ彼手代丁稚左ハ思ハズ暗ニ雜談小言ヲ吐散ラシ我家ハ自主自由ナラズ束縛苛刻ナド面從服非シテ彼所ノ蔭ニ寄リ此所ノ隅ニ集リテハ舌ヲ出シテ私語ケリ偶々活氣ノ者アリテ果ハ手物ヲ以テ番頭ノ尻ヲ扣キ不知顏シテ匿シ居ケリ番頭ハ益怒テ虎狼ノ威ヲ逞フセントシ丁稚ハ愈潜ンで狐狸ノ術ニテ誑ントス彼ノ大商家モ斯ク多人數ノ氣方ヲ失ヒテハ往先キモ覺束ナク不意ニ不和騷亂ヲ生ゼンモ難計餘所目ニ見ル所モ實ニ氣遣ハレ元來他家ノ事ニテ默シテ止ムベキ事ナレド彼丁稚等ノ小言ノ儘ヲ聞書シテ番公ニ報知ス云々

これを明治六七年の政情に照して讀めば津々の趣味あるを覺えるであらう。

〇新聞雜誌第二百九十九號（七年九月二日）

當今形勢の小說並圖

此頃東京ニ住スル豪商アリ七八年前ヨリ家ヲ起シ頗ル商法ニ手ヲ着ケ一時海外迄モ名ヲ轟カセリ然ルニ番頭ノ者我儘ノミ申シ或ハ無學無筆ニテ世界ノ商法ヲ知ラス色々新法ヲ始メ一店內ノ者ヲ苦メリ當春ヨリ主人某ヲ南郭へ誘引シ何百萬ト云フ大金ヲ散セリ夫ヨリ一店ノ者益々不服ニテ暇ヲ取リ虛病ヲ構へ其日暮シノ景況ニナリ店ノ燈火モ追々暗クナルノ勢ヒ隨テ世帶向モ日々難澁ニテ土藏中へ貯蓄フ金モ甚ガ乏シク相成リ是ニ於テ一店中へ儉約ノ沙汰ヲ出シ普請モ差留タリ一日一店中ノ番頭ヨリ丁稚ニ至ルマテ呼集メ主人問テ云ク一店興隆ノ法如何ト訊セリ何レモ顏色靑サメ妙論ナク只々浩歎スルノミ番頭以下ノ月給ヲ半減ニシ又ハ二男三男其外厄介者ノ扶持米ヲ減スルノ外手段アルマシクナド一統小聲ニテ評議ノ央遙ニ末座ヨリ幼年ノ丁稚大聲ニテ發言スルニハ此度御店ノ衰替ハ全タ親方幷

ニ番頭方ノ南廓ヘ御耽リ御散財ヨリ起ル事ニ付一日モ早ク其御遊蕩ヲ御止メ爲サル丶事第一ノ急務ニテ儉約ヤ給金ヲ減ズル等ノ事ハ枝葉ノ事ナリト一座ノ者トモ小僧ノ此聲ニ醉夢ヲ醒シ成程尤ノ論ト爲セリ是ガ則チ鄙言ニ云フ下圖ノ如キモノナラント評判セリ（圖略、負ふた子に淺瀨を敎へらる丶ところ）

南廓云々を臺灣征伐と解せば、諷刺の妙味がはつきり出て來る。

此の種の諷刺文學で同じ頃有名であつたものは、朝野新聞の雜錄である（多くは成島柳北の手に成る）、その中で「最初無上の喝采を」博したものは、――

「遊山船」

といふ三版許りの文章であつたといふ。私はまだその原作を讀んでゐないが、――

我國を以て一つの遊山船に喩へ當時の政治家を乘合人及び船頭になぞらへ船の方針定まらずして遂に山に乘り上ぐるを以て一篇の趣向となし、夢を以て之を結び、都々逸又は端歌によりて三大臣參議等の心情性行を寫し、讀む者をして案を拍つて妙と叫ばしむ。（末廣重恭『新聞經歷談』）

柳北はこれで大に天下に才名を揚げたが、その實は柳北は添削者で、元來は無名氏の投書であつたといふ。これだけで見ても、『遊山船』は大分政治小說に近いものであつたことも想像される。（その他の雜錄中にも政治的意識の含まれてゐるのがある、これ等も勿論一讀されるべきである。）それから刊否未詳のものに、――

「新鮮妓院論」（明治八年）

といふのがあるが、これは恐らく民選議院を花柳界の事情にもぢつた諷刺戲作であらうが、何うも刊行されずに終つたものらしい、作者は轉々堂藍泉卽ち三世柳亭種彥である。

明治九年創刊の東京新誌は、この種の諷刺文學は特に注目すべき雜誌であるが、左にその主だつた諷刺文學の目次

を擧げて示さう。

○今ノ民權黨ハ士權黨ノ辭柄ニ過ギザルノ論（明治九年十一月）

○民劍由來記（十一年二月）

○東洋自慢八天狗合戰記（十一年四月）

○紙幣等迯ニ金貨大人飛ニ艦于歐洲ノ序（十二年三月）

○起國會子文（十二年八月）

○國會合戰記（十三年九月）

○黑貝新說（十三年十月）

○國會餘錄黑貝開設請願者（十三年十二月）

○民劍之利鈍（十四年三月）

○女民權家崛起（十四年七月）

○自由子祭ニ民權靈ニ文（十四年九月）

○黑貝與ニ鱆魚足下ニ書（十四年九月）

○自由黨建立記（十四年十一月）

○新橋奇談大自由家降眠權黨（十四年十二月）

○夢幻記行熱國一班（十五年六月）

○立姸快寢黨團結（十六年一月）

西南の役を諷刺した文學は幾種もあらうが、戰役當時出たものは、『鹿兒島洗湯論』位のものかも知れない。十二年に

至つて――

「西郷地獄征討記」（十二年五月）

が出てゐる。これは、地獄へ行つた西郷が、桐野、篠原、村田等を引連れて閻魔大王と一戰に及ぶ話で、西郷隆盛暴徒を引率して地獄へ趣く事並暴徒の面々大評定の事、閻魔王宮勝利酒宴の事並西郷桐野等王宮夜討大戰爭の事（初編）西郷隆盛月照僧に面會を致す事並に地獄勢を地雷火にて鏖殺にする事（二編）といふ内容である。

「龍宮奇談黒貝夢物語」（十三年十月、鳳頼子）

著者鳳頼子が夢に浦島太郎に誘はれて太平洋底の夢想國に至る、こゝは龍宮のあるところでその首府を豚犬といふ。豚犬で黒貝開設の物語をきくといふ筋であるが、これは初篇だけでまだ黒貝の物語りまで入らない。豚犬は勿論東京といふこと、黒貝は國會のことである。國會開設願望當てこみの諷刺戲作である。

「民權穴さがし」（十三年二月、牧岡安二郎編輯）

これは諷刺といはんよりも啓蒙的民權文學である。

「國勢夢想記」（十三年九月、岸甚咲（ジンサク））

これも同種の諷刺寓意の文學であるが、ずつと纒つたイデオロギイをもつてゐる。全編著者憂子が浦賀の客舍で見た午睡の夢である。憂子は夢に難船して一大國に漂着する。その國に一大都があり、繁盛無比である。そこの住民はアジア人たるも、これを使ふものは皆白人種である。憂子はその故を深く怪んだが、端なく一老翁の物語で此の國がかくなるに至つた歴史を聞く。此の國の歴史は最初は武門の歴史である。然るにそれに對する反動として尊王運動生じ自由（解放）運動となつたところへ外艦が渡來して王政復古となる。王政復古の初期は立派なものであつた。富國强兵採長補短、自主自由、先憂後樂といふので、實に王者の政道であつた。ところがやがて大臣の專横、官吏の汚行が生

じ、反動溯流して媚外壓内となり、財政逼迫、民心乖離となる。そこで有志蹶起、官民抗爭となり遂に內亂の慘狀を呈した、然るにそこへ又外敵が征來したので、遂に亡國になつたのであるといふ。上下離叛が亡國の因であり、これを避けるには早く國政を改革すべきであつたといふ老人の言である。これは勿論當時の朝野の政治鬪爭の成行を憂へて、このまゝ上下離叛を續けて行けば神國日本も駄目だぞといふ警告を發したものであるが、著者の同情が人民の側にあつたことは、いふまでもない。

「冥府紀事」（十四年九月、明治日報、生田精之）

漢文體の時事諷刺小說で、國會請願者、演說家、新聞記者、代言人、官吏、神官僧侶等を材料にして諷刺の筆を弄したもの、大體の立場は民權運動反對である。民權家は人民を煽動して犯上好亂ならしむといひ、新聞記者は新政府の强力を羨み、無能官吏の俸給を嫉すといひ、國會請願者が五ケ條の御誓文を楯にとりて民權、國會を主張するのを叱し、あの御誓文は人民に對するものでなく、天地神明に對するものであると喝破してゐる。

「秋の詠續物語」（十四年十月、加藤富三郎）

一名「大和政沸瀾咄し」といふ、日本政府大騷動の話といふ意味であらう、內容は例の北海道開拓使拂下事件に於ける黑田清隆の暴橫を諷したもので、此の種の文字としては最も猛烈なものゝ一つである。

「文明開化地獄極樂一週記」（十五年二月、大久保夢遊）

地獄の部と極樂の部とある。地獄の部では、西鄕が江藤、前原等と共に地獄に來て見てその壓制に驚き、自由主義の旗を擧げ、閻魔大王と戰ひ、西鄕等が勝つて、西鄕が衆の推薦で王位に卽き、自由の政治を敷いて地獄を開化の安樂鄕たらしめる。極樂の部では、こゝの國王釋迦無尼は極樂の開化を欲したが、何うも國內に頑固黨が多いので閉口してゐた、ところが今度隣國の地獄では西鄕が自由の安樂國としたといふので日蓮親鸞等に視察せしめるといふ物語。

西鄉に對する同情と、自由民權のイデオロギイと相合成して出來た諷刺戲作である。最後に——

「民權膝栗毛」（十五年十月、蠻觸舍蘇山）

膝栗毛の人物をかりた政治戲作で、何れかといへば諷刺的といふよりも啓蒙的である。神田兒の彌次喜多が、同じ神田に住む嚧田文明、久良增太を尋ねて、皮相文明の駄目なことや自由民權の眞僞を論じ合ふといふ趣向で、大旨は自由文明の進步も道によるべし、道によらずば不可なること、下等社會自覺せずば眞の民權も國會も發達せぬこと、自由を下等社會に教へ込み、僞民權論者の假面を剝ぐことを宣傳するにあるといふ。彌次喜多は下等社會有志家を代表してゐるわけである。

以上の外にも當時の文學に於ける政治的分子を語れば、まだまだある。戲曲に於けるそれ、新體詩に於けるそれ、歌謠に於けるそれ、漢詩に於けるそれ等、幾多の語るべき方面がある。だがさう問題を擴げると、「明治初期の文學と政治」といふ大きな問題に變形して來て、私が此の章を書いた趣旨とは少し相異して來る。此の問題は又この問題として特殊な研究題目となるべきものであるから、他日當然何人かゞ取り上ぐべきであらう。此の章を書いた私の趣旨は、『情海波瀾』以前の文學にも政治的分子が存在してゐたこと、さういふ分子が相混じ、相合し、相醞釀して、文學上政治小說なる新ジャンルを出現せしめる素地となつたといふことを語つて、『情海波瀾』を政治小說の嚆矢とする意味を明確にするにあつたのであるから、今こゝで問題をさう擴げる必要はない。從つて前に述べたやうに、以上で研究前記を打切つて、研究本記に入ることにしよう。

研究本記

『民權演義情海波瀾』と戸田欽堂

一

此の書の研究本記第一章を『情海波瀾』とその著者戸田欽堂に關する研究で始めるには、二重の意味がある。それは上來述べて來たところによつて略ぼ推察されると思ふが、第一は、『情海波瀾』が政治的イデオロギイを含んだ最初の小説か何うかといふことに多少の問題があるにせよ、兎に角小説的形式で當時の政界の潮勢を描いて、それに幾分か明確に把握され得る政治的イデオロギイを寓したのはこの小説が最初、即ちお粗末千萬であるが明瞭に政治小説らしい體裁、資格を備へて現れたのはこれが最初であり、第二は、此の小説の出た明治十三年が丁度國會願望といふ特殊なスローガンで標榜された國民の參政權要求運動が眞實力强い全國的運動となるに至つた年であるからである。明治十三年の政治熱と、『情海波瀾』の出現といふ二つの事實の間には縱し必然的な關係がないにせよ、かゝる劃期的な年をもつて或る研究主題の時間的起點とするのは、研究主題に何等實質的損害もなくて研究者には極めて便利な發足點を與へることになる。況んやこの二つの事實の間に當然の因果關係があるとせば、(又事實さうであるが)如上の利益の外に、明治の政治小説は殆んど抑もそもの最初から時代の政治運動、國民の政治熱と密接な關係があり、それの勃興によつて生起し、それの盛衰と共に消長したのだといふ大提要が、何等の絮説を要せずして、先づ讀者の腦裡に自然に印象されるといふ大きな利益があるに於いてをやである。

それで私は、やゝ唐突の氣味があるが、明治政治小説研究の第一章を明治十三年の『民權演義情海波瀾』で始めることにする。だが先づこの小説について語る前に、その著者を語ることにしよう。以下の各章とも大概この例に從ふこと

にする。政治小說の名はあつても、いはゞ多くは片々たる小冊子なのに著者研究といふのも大層めくかと思ふが、然し著作を研究するに時代と著者を離れることが出來ないのが一般原則であり、且つ私としては、著書によつて著者を傳へたいといふ微意もあるので、著者の傳記は必ず一應は究めることにしたい。それもその著書に應じて繁簡宜しきを得たいと思ふが、何れかといへば簡略に失するより詳繁に失した方がいゝと思つてゐる。著書には自らにして世に傳はる機會が多いが、著者にはそれが少ない。或る人が或る機會を得てこれを傳へない限り、多くは埋沒して永遠に知れなくなる。此の意味で、私は著者を傳へることにいさゝか多く力を割くつもりである。

Know, then, thyself, presume not God to scan;
The proper study of mankind is man.

ポープが『人間論』(Epistle II) でかう歌つた詩句は有名なものであるが、この心はいつまでも人間の胸に生きてゐるものと見える。著書と共に著者を語りたいといふ私の興味も、恐らくこの心の現れであり、「人類の正當なる研究」の一つであらう。

『情海波瀾』の著者戸田欽堂は、今日文學史上埋沒された戲作家小說家の一人として殆んど何の足跡も記されてゐない。その傳記の如きも少數の好事家研究家以外には多少とも聞えるところがない。生前の彼は無名の一寒生ではなかつた。彼は封建貴族たる大名の血族であり、海外留學の新知識であり、宗教啓蒙運動者の一人であり、民權自由運動の同情者であり、一言でいふと貴族出のインテリゲンチヤの代表的人物であつた。その小說の諸作などは彼としては本來餘技的試みの現れで、生命を托したものではない。だがその餘技的試みの小說によつて、政治小說の先驅者乃至先驅者の一人といふ名で辛うじてその生涯を辿られる結果になつたのは、運命の小さやかな皮肉の一つである。

欽堂の父は美濃大垣藩主戸田釆女正氏正である。母はおせんといつて、横濱で有名な高島嘉右衛門の姉に當るといふ。欽堂は嘉永三年七月十九日美濃大垣城に於て生れた。幼名は唯之助、後に三郎四郎氏益(ウヂマス)、欽堂と號した。維新後は欽堂を通稱とし、鐵研と號し、又後に小説戯著などには狐痴情仙、花柳粹史などの戯號をもちゐてゐる。

嘉永七年（安政元年）八月、庶腹の欽堂は出でて分家なる旗本戸田監物の嗣子となつた（一）。

欽堂の若いころの傳記は殆んど知られてゐない。十六歳で同じ旗本久貝(クガヒ)家の女と婚したこと、此の頃からすでに酒が大好物で、學問勉強にも酒氣があるときが進歩がよかつたことが傳はつてゐるぐらゐである。だが後年の欽堂の著作や趣味から見て、漢學詩文書畫とも一通りは學び、戯作稗史の類も好んで讀んだかと思ふ。さうしてある程度までは(所謂殿様藝にせよ)、才分の豊かな貴公子であつたらしい。

明治元年、欽堂年十九、この前後から外舅高島氏との關係で洋學の知識を多少得た形跡があるといふ。明治四年四月、欽堂は舊藩主なる異母弟戸田氏共(ウヂタカ)（今の伯爵）と共に從者數名を隨へて米國に遊學した。さうして主として東部のニユージヤアジイのニユーブランスウイツクや、ニユーヨーク州のトロイなどで勉强したが、勿論學科はさう高いものではない。英語の習得といふ以上に普通學の初歩ぐらゐに止まつてゐたらしい。だが課餘の見聞には、人情風俗政治と共に相當得るところがあつたらう。殊に欽堂は基督教の信仰に心を動かし、在米中洗禮をうけたと傳はつてゐる。然しこの遊學はさう長くは續かず、約一ケ年で歸朝した。理由は從者中に病人の續出したのとお大名式遊學で費用のかゝり過ぎとにあつたらしい。

明治五年歸朝した欽堂はその米國で見聞したところを早速實生活に應用しにかゝつた。さうして表面的皮相的にせよ、一年間の米國遊學が舊大名の封建貴公子を立派な尖端的開化人にしたことを證明した。彼の理想の實現には、戸田家と高島家の富力が大に彼をバツクしたと思ふ。

明治六年の末か七年の初め頃、欽堂は銀座三丁目に九星堂といふ唐物屋を開店した。屋號は戸田家の家紋九曜星に因んだものであるといふ。店員には舊藩士中の商才世辭のある連中を使用した上、彼自身も前掛姿で客に應接した。本家の近親などでその突飛さに苦々しい言葉を浴せる人があつたが、彼の目指したところは、無爲徒食の封建士族根性を叩き潰すにあつたのである。此の店では、洋式敷物、裝身具、文房具、ラムプ、置物などを扱つて、一時はなかなか盛大にやつた。だが品物はよく賣れたが算盤が合はず、殊に明治十年欽堂自身が華族銀行に入つて祕書の役になつてからは、殆んど人手に任せきりになつたので、一層甚しい損失を招き、十二年頃には自然沒落となつた（二）。

註（一）或は分家阿波守氏壽の家を嗣いだといふ。未詳（或は同一人か）。

註（二）昭和六年一月三十日原胤昭氏談話。

二

欽堂の洗禮を受けたことは、今いつた通りであるが、彼は歸朝後、折角米國で習得した英學英語に仕上げをかけるつもりで、築地の西洋人集會所やカラザアスの學校によく出かけた。カラザアスの學校は築地大學校と稱したが、舊い工場に手入れをしたもので、まるで豚小舍の如き建物であつたといふ。敎師にはカラザアス、ワデル、グリイン、デビソンなどが居り、敎科書は勿論英書である。カラザアスは日曜日毎に英語聖書の講義をして有志に聞かした。欽堂は勿論此の講席にも出た、彼は聖書 Holy Bible をホーライ・ビブルと發音したので、それが彼の綽名になつてゐたといふ。若くて快濶で、身分が好くて、嚢中も豐かな欽堂には、多勢友達が出來た。中でも親密に交つたのは、同じカラザアス學校にゐた原胤昭、戸川安宅（殘花）、田村直臣、鈴木舍定等であつたが、原、戸川二氏とは殊に親交があつた。此の三人は共に幕府の遺臣（といふのも大仰であるが）であつたばかりでなく、信仰、趣味、その他の點で

三人は品字會（品字は三口、即ち一人一口有り、三人三口有りで品字即ち三人の義）などと洒落て、よく一緒に遊び（當時の青年のことだから遊蕩の氣味も少々はあつたかも知れない）、よく飲み、よく談論した。時勢論をやつては大聲に悲憤慷慨し、欽堂夫人をはらはらさせたことも度々であつたといふ。

明治七年十月、第一長老教會が創立されたが、欽堂等は皆これに加はつた。三人とも、教會の傳道には大に盡力したもので、銀座や芝口邊の傳道集會には、定つて出かけて行つて說教した。此の三人は、何れも身分のいゝ武家の出だつたので（戸川は旗本、原は與力）、當時まだ冥々裡に士族を優越階級と認めてゐたころのことゝて、彼等の傳道價値も効果百パアセントであつた。それだけに、教會でも此の三人の傳道を大に歡迎して別格扱ひにした、又三人の方でも、傳道のある夜は世話役の注意で、特に會衆に感銘を與へるために盛裝して出かけたものであつたといふ（原胤昭氏直話）。

信者が殖えるにつれて聖書の需要が多くなる。此の頃漢譯の聖書が澤山渡つて來てゐたものゝ（今日の日本譯聖書はまだ出てゐない）、耶蘇の本だといふので、厭がつて誰も扱つて賣つて吳れる者がない、宣教師の方では何うかして信者の手に渡したいものと苦心してゐた。欽堂はこれを見て、原、戸川の二人と相談し、唐物店九星堂を半分に仕切つて、その半分に耶蘇教書肆十字屋といふ看板を揭げ、聖書の販賣を一手に引受けることになつた。これが明治九年といふ（今日樂器店の十字屋は、この十字屋の何代目かの後身である）。

同じ九年春になつてカラザアスの學校は、校主のカラザアスと他の教師達の間に反目があり、遂に廢校となつた。この邊の事情が第一長老教會へも反映して、教會も分裂し、一派の人々は米國ミッションから補助を受けぬ主義を標榜して、日本獨立長老教會といふものを創立した。この一派とは欽堂を始め、原、鈴木、田村氏等十八名の人々で、銀

座三丁目の幸福安全社に獨立長老教會といふものを置き、欽堂と原氏は長老、鈴木舍定、田村直臣は執事となつた。設立式には中村敬宇が來て說教してくれた。幸福安全社は即ち明治七年愛國公黨の連中が根據として國會の下稽古をしたところであつた（此の鈴木氏が後自由黨の幹事として活躍した有名な人物である）。

欽堂が自由民權運動に關心をもち出したのは何時ごろからのことであるか、それは明確には斷言し得ない。然し推測によると、民選議院建白、愛國公黨結黨の頃から既に關心をもつてゐたものであらう（或はもつと以前からかも知れない、基督教と自由政治と大に思想的に關連するところがあるから、その邊から早く感染してゐたものかも知れない）。西南戰爭後、國會願望運動が次第に熾烈になると共に、自由民權の演說が漸く盛んになつて來た。欽堂が身錢をきつて同志と共に民權宣傳の演說に奔走し始めたのも此の頃で、先づ大體明治十一年の交であるといふ。十二年になると、荒川高俊、瀨谷正二等と共に北辰社を結んで民權宣傳に一段の步を進め（資金は欽堂から出たものらしい）、更に十三年三月には、同族の有志數名と協議して國會開設請願の建議を出さうといふので、欽堂自身その草案を書いたといふ。從つて此の頃の欽堂は民權家としては有名なもので、華族中での民權家と稱された。今日明治初期の華族民權家といへば靑年西園寺公望を以て代表的花形と考へてゐるが、何ぞ知らん西園寺公が佛國留學から歸朝した時（十三年十月）には、欽堂はもう民權家中の長老として尊重されてゐたのである。その證據として、十三年十月出版の『明治民權家合鏡』といふものを見るが可い。その年寄の條に

由利公正、副島種臣、戸田欽堂、淺野長勳

の四人の名が擧げてあるのでも、想察されやう。獨り欽堂だけに限らず、當時の華族の民權運動に對する態度なり動きなりは、實に面白い、十分獨立した硏究に値するものであるから、その中纏めて發表したいと思つてゐる。今日新

聞雜誌で淺野長勳を大名中の目出度い長壽者だなどと片づけてゐるのは全く目出度い骨頂で、當年の長勳は華族中での過激民權家、その過激論に手を焼いた政府がイタリィ公使に祭り込んで海外に敬遠した程であつた。欽堂、長勳の外に秋月種樹、上杉茂憲、長岡護美、北小路利慶、武者小路實世、中御門經明、芝亭實忠等民權華族が澤山ゐる。淺野長勳の國會開設意見の如き、今日殘つてゐるが、實に堂々たる論で、民權鬪士に伍しても遜色がない。欽堂の民權運動を理解するには、その背後なり周圍なりに、さういふ空氣が渦卷いてゐたことを知らなくてはならぬ。

欽堂の政治意見は今日明確にし難いが、原胤昭氏の談によれば、可成り手強いもので、此の世界のシステムはこのまゝでは駄目だから一度叩き壞さなくてはならぬとよく語つたとのことである。察するに、單なる民權論でなく幾分社會主義的（基督教からの）分子を加味した自由民權論であつたのではなからうか。

私の手許には次の如き欽堂の演說題目が集まつてゐるが、彼の奔走を知る資料として、左に列してみよう。

○知識辯（十二年五月四日、薫誘舍演說會）
○西郷隆盛遺書の感（十二年五月十一日、同會）
○幇間ノ說（十二年五月二十五日、同會）
○人面獸心ノ說（十二年六月八日、同會）
○會計辦（十二年六月二十一――二十二日、同會）
○西洋店下し（十二年六月二十一日、仁天館演說、日本橋壽亭）
○美人ノ說（十二年六月二十八日、同、同）
○グラント傳（十二年七月二十日、深川演說並討論會）
○北辰ノ說（十二年八月一日、北辰社演說及討論會）

○兎ノ賣買（十二年八月六日、同）
○〇〇（マルマル）論（十二年八月二十二日、北辰社か、井生村）
○一大奇（十二年八月二十八日、同、福田亭）
○夢感（十二年九月二十七日、北辰社、牛込神樂町八重垣神社）
○撃劍論（十二年十月四日、同、同）
○おかめ八目（十二年十月二十日、愛民社演說會、四谷大門町大泉亭）
○撃劍論（十二年十一月五日、同、同）
○秋風鱸魚之感（十二年十一月十二日、同、同）
○題未詳（十二年十二月二十日、同、四谷舊尾州邸内簿記學校）
○娼婦論（十三年二月四日、同、同）

以上は、半ば偶然に拾ひ出したもので、專心探求したのでないからこれだけに止まつてゐるが、恐らくこれは、欽堂の試みた演說の何分の一かであらう。右の中で愛民社は、彼が同志と共に組織したもので、娼妓の品行（少々可笑しいが）を改良し、女紅場を設置してやる運動などを目的としたものである。（娼妓解放といはずに改良意識でやつてゐるところに時代の面影がある）。北辰社や愛民社の如きは、資金も欽堂が出してゐたのであらうから、これを道樂的浪費と見る戸田家としてはその扱ひに困つたらしい。欽堂の華族銀行入りも、恐らく本家で欽堂の扱ひに困つた結果からであらう。間もなく餘り金使ひが激しいといふので、本家でも一切宛がひ扶持に定めてしまつたので、欽堂も大分閉口したといふ。

此の政治熱中時代の副産物が、政治小說の嚆矢『情海波瀾』といふわけである。

三

『情海波瀾』（十三年六月刊）は、小説として、恐らく欽堂の處女作であらう。情海とは政海を意味するなどと説明しなくとも、民權演義といふ角書きを見れば、此の小説に政治的寓意のあることは明瞭であるが、欽堂の序詞が一層よく著作の動機を裏書きしてゐる（「一家自由ノ奇想ヲ聚メ之レヲ筆硯ニ上セテ以テ漢土ノ莊希歐洲ノ伊蘇普翁ニ擬シ寓言自ツカラ世ヲ諷セント」云々（一）。さうして作中の人物が如何にも生々しくその寓意を表象してゐる。從つて此の小説の含む政治的寓意を解するには、此等の人物の表象するところを考へ、それと此等の人物がこの小説の物語で何ういふ役割を演じてゐるかといふ點とを照合すればよい。その物語といつても、人情本式の極めて簡單なものである。

柳橋に魁屋阿權（サキガケヤオケン）といふ藝妓がある（「抑々此美妓ハ性質活達思想清楚ニシテ平素軟弱ノ風儀ヲ喜バズ自奮不屈ノ氣節アリテ徒ニ撫媚轉覆ヲ好シトスル普通妓園ノ侶ニ非ス實ニ猫中ノ於菟（トラ）ト云フヘシ」（二））彼女は和國屋民次（ワコクヤミンジ）といふ通客を愛し、民次も阿權の情に大に心を動かしてゐるが、永い間關係してゐる卑屈屋（ヒクツヤ）やつこといふ藝妓が一方にまだ切れずにゐるので、阿權は悶々としてゐる。而かもまた國府正文（コクフマサブミ）といふ豪商が金力權柄をかさに幇間の繪八餡吉を介して頻りに阿權をわがものにしようとかゝつて來る。民次も始めは逡巡の氣味があつたが、阿權との仲が新聞にうたはれるやうになつたので、斷然やつことの舊情を切つて、阿權との芳盟を實現しようと決心する。阿權は一夜客を山谷に送つた歸路の船で假寢して夢をみる、それは自分が國府の意に從はず民次を慕ひぬいたので、民次もやつこと縁を切つて公然阿權と夫婦になる。そこで流石國府正文も我を折つて、二人の新婚を祝ふため兩國の會席某樓で盛宴を張る、といふのである。此の夢で物語が終つてゐる。

此等の人物がそれぞれ何を表示してゐるのか。魁屋阿權は自主自由の權、民權の魁となる意、和國屋民次は日本人民の意、卑屈屋やつことは卑屈な奴隷根性、國府正文は專制政府のこと、
綜八鮨吉は當時の通語で大小官人のことを意味する。その政治的寓意とは、「人民は當然自由民權運動の先頭に立つて政府に當るべきであるのに、舊來の奴隷根性に煩はされて思ひきつて起つことが出來ずにゐる。だが旣に新聞を武器として言論戰の火蓋の切られた以上、躊躇することが出來ない。政府も官吏その他を力にして權柄によつて民權を抑へ、いつまでも權力を握らうとしてゐるがさうは行くまい。やがて人民が權利を得て、上下兩國會議場裡に政府と相見るに到ることは疑ひがない」といふ邊であらう。一半は寫實的、諷刺的、奬戒的、他の一半は豫想的、希望的、期待的である。卽ち一方では明治十三年當時の民權自由運動の實勢を諷刺すると共に、今一方では十三年後に於けるその運動の結果を豫想してゐる。勿論豫想は民權の勝利、政府の讓步を示してはゐるが、前半に、人民を奬戒する意味を强調してゐる割に、政府に對する意識的反抗、反抗の爲めの反抗といふやうな態度は見えない。これは、此の小說の著作されたころ（十三年六月）は、民間運動が漸く激烈になりつゝあつたが、然かも官邊の彈壓も民間の反抗もまだ十五年以後程激烈なものではなかつたことを、幾分か語つてゐるやう。

『情海波瀾』は單に小說として見ればその趣向描寫文章ともに如何にも素人くさく如何にも齒がゆい、第二齣に佐倉宗吾郞妻子別れの場を劇中劇めかしく挿入したのは面白い試みだが、大衆をして宗吾その人を民權家として新しく見直させるといふつもりなら格別、さもない限り宗吾の運命は阿權民次のそれと何の關係もない。性格としても情客民次の如きは、人民の熾烈な意氣を代表する人物とは見えず、あくまでも梅暦一派の丹次郞式若旦那である。今少し描きやうがあつたらうと思ふ。たゞその素生として、新興ブルジョア階級（多少封建貴族的イデオロギイのある）の一員となつてゐるのは、この頃の參政運動が本質上藩閥政府とブルジョアの鬪爭である一面を語るものとして面白い。

末段、夢に托して政界の未來を語るところは、その頃の諷刺小說政治戲作の常套手段であるが、此の作のは一結沓然といつたやうな感じを與へる。更に如何にも時代にふさはしいのは、民次が新聞紙をよんで奮然決心して起つところである、――

(前略)讀了ツテ民次ハ前後圈點ノ文字ヲ熟視シ其探訪ノ密ニシテ且ツ捷キニ驚キ又將來ヲ想像シ默然トシテ謂ラク早晩彼カ妓籍ヲ脫シ永ク芳盟ヲ締ハントノ密約ハ早ク既ニ世ノ人ノ耳ニ上レリ今ニシテ尙因循セバ定テ通客ノ嗤嘲ヲ招カン然レトモ先キニ奴ノ舊情ヲ斷タザレバ他日紛紜ヲ生スルモ亦計リ難シ如何ニ之ヲ好結セント首ヲ低レ雙手ヲ胸ニシテ沈吟セリ(三)

以上述べたところに依つてこの小說の如何なるものかを概見することが出來るが、政治小說『情海波瀾』の名こそ堂々たれ、小說としてその如何に幼稚なものであるかが分かるであらう。要するに政治小說といひ條、これだけのものであつて、嚴密には先驅的歷史的意味より以上のものは、全然ないといつても酷評とはいへない。

欽堂が此の小說を公けにしたとき、時代が時代だけに戸田家の親戚の故老達の中には、大名の子が戲作者になつたといつて怒つた人々があつた。欽堂はそれに頓着せず澤山印刷して、知人にたゞで吳れてやつたりしたといふ。然し流石に時代の政治熱に投じたか、賣行もよかつたらしい。それは出版書肆が新聞に御禮廣告を出してゐるのでも知れやう。(四)

『薫兮東風英軍記』(明治十五年四月刊)は脚本的形式であつて小說ではない。だがそれを著作した動機が政治的であることは、次の新聞記事(五)を見ても知れやう、――

戸田欽堂氏は豫て演劇を好まれしより何とぞして劇場狂言の脚色に民權自由を加へたいとて頻りに此に熱心せられ

先ごろ英國劇場狂言の中最とも有名いものを飜譯し外題を英軍記と名號られたり（中略）譯者戸田氏は民間の何物たるを容易く婦女子に知らしめん爲め狂言作者とならんとの望みにて頻りに勉强される由なれば遠からずして民權家の狂言作者が世に現はれるべし云々

此の脚本を欽堂の飜譯といふのは記者の傳聞の間違ひで、材料は英國種であるが脚本は欽堂の作である。英國の賢王アルフレッドが牧者に身をやつして種々苦心の末デーン人を破つて王國を再興し、國礎を確定して、人民に自由と幸福とを附與するに至つた事蹟を脚色したものである。この一二年後、少年才子山田美妙齋が、矢張り此の脚本と同じくアルフレッド大王傳に取材して、その處女作『竪琴草紙』を草してゐるが、見樣によつては、此の邊にも政治小說と明治新興文學との連絡があるやうに思はれて、意味が深い。

註（一）『情海波瀾』第一齣、一頁
註（二）同　同　二――三頁
註（三）同　第四齣、三五――三六頁
註（四）明治十三年九月十五日、朝野新聞第一一〇一號廣告
註（五）明治十五年四月二十一日、日の出新聞第一〇號記事

四

明治十七年六月二十三日、欽堂は兩國の中村樓で小說家名披露會といふのを催し、それを機會にかねて自分が發明した樂器を試演して來客に聽かせた。此の時の小說家名は、「狐窟情仙」といふのであつた。これより先き、欽堂は感ずる所があつて北辰社を退き（恐らく北辰社自身が解體したものであらう）、今度は小說家になるつもりで、下駒込村

の邸に籠つて小說戲作の腹稿に餘念がなかつたがいよいよ自信がついたか、かゝる號で、小說家の名乘をあげるに至つたのである。この日彼は來賓たる華族紳士新聞記者等を前に、自分が北辰社を退いた原因から小說家をもつて自任するに至つた理由を述べ、轉じて自分が今度の演奏曲譜を發明するに至つた顚末を具さに語つたといふ。又此の樂器とは欽堂唱歌器、一名紙腔琴といふもので、これに用ひる譜が卽ち活奏曲譜である。欽堂は米國にゐた頃から和洋折衷の樂器を發明しようと思ひ立つてゐたといふが、遂にこれに成功したものであつた。

小說の方は、折角の意氣込みに係らず、さう傑作も出來ない。明治十八年四月、輿論日報の發行さるゝや、小說記者としてこれに關係し(五月廢刊)、同年八月日本たいむすの出るや(十二月廢刊)又小說を寄稿したといふが、私は欽堂が此の後者に寄稿したものゝうち、『娘化粧挿頭紫陽花』(十六年執筆)といふ一篇だけ寓目することが出來た。

これは幕末から明治に亘る物語りで、舊幕金座役芳野某の娘おすみといふ女性の七粧變轉の生涯を描いたもの。いはゆる函入娘のおすみが、ふとした初戀のもつれから、小櫻丹二といふ兇漢に身を失し、丹二と共に上方に奔るが、生計に窮して表面三絃師匠となりつゝ美人局や押がりゆすりを働く。やがて丹二が捕はつたのでおすみは身投して死なうとするが、不思議に助かる、さうして父母や故里戀しさに江戸へ下る途中、欺かれて京の島原に身賣される。そのうち維新となつて、吉原に住替へ、野晒太夫と仇名されて全盛の名を唄はれるが、陸軍の利者乙骨某に根引されてその權妻となり、何不足ない榮耀榮華を極める、そのうち、初戀の相手の零落してゐるのに逢ひ、忍んで首尾した揚句、旦那の乙骨に知れて、手切れとなる。おすみは藝妓となつて男を養ふが、男の不治の病ひに同情し、心中の相談となり、墨田川に出かける、だが思はぬ人に救はれて、おすみだけ生き殘る。思はぬ人とは丹二である。おすみは丹二に逢つてから又昔の惡事を始め、美人局ゆすりなどを繰り返す。とゞ東京を喰ひつめて丹二の故鄕上州で女俠客めく世渡りをするが、積惡の報ひで丹二もろとも捕はれる。丹二は時疫で獄中で死ぬ、おすみはこれに發心して伊香保近

在に隱遁してゐる名高い聖人を訪ねて弟子となる。此の聖人の前身こそ意外とも意外、おすみの父芳野菜であつた。さうしてこれに仕へる高弟某が前年心中の時入水した筈の戀人の後身であつたのである 云々。

十八年十一月には『嬉笑珍談浮世粹蕩夫』といふ戲作の第一號を出してゐるが、何號まで出たものか分からない。これは純然たる滑稽物で和合人や七偏人を明治時代に引直したものと思へば可い。洒蛙吉、鈍太、刎三といふ「當世の粹蕩夫とうたはるゝ能樂者の正札附」三人が品川の小妓樓からの歸途、種々の滑稽を演じるといふのが全篇の發端である。

明治二十年十二月單行『諷世嘲俗吾妻ゑびす』といふものが、小說として欽堂の最後の作ではなからうか。一名を裏借屋合壁雜譚とことはつてあるが、「當世の裏店社會の人情滑稽の眞趣を描き出さんと試みしもの」(一)、日本橋松島町の裏長屋一區劃を中心に、そこに住む人々の喜悲樣々な運命を諷刺的に穿つたものである。もとより長屋の生活を中心とした散漫な物語であるから、これといつて定つた主人公も何もないが、暗々裏にお賤お艶二少女を首尾に置いて勸懲の意を寓してゐる。作中の長屋生活の觀察は少々眞を穿つてゐて、一片の書物見聞では出來ないところがある。欽堂の新聞記者的經驗が多少は役に立つたものかも知れない。面白いのは、第六回に孝女お賤が父の病苦を紛らすために『巽本春色辰巳園』といふ小說を讀んで聞かせる一節があるが、この小說が板垣伯が岐阜で遭難したる件を眞賀喜屋お鯛、尾張屋お嫛の二女が戀人丹志を爭ふことに作りかへたものである。だが此の一節があるからとて、この小說を政治的寓意のあるものと考へたなら、それは勘違ひである。描寫の筆の老練になつた點は認むべきであらう。欽堂の豫告してゐる續篇『朝日ざくら』は成らなかつたと思ふ。

以上の外『七變化』といふ小說もあつたといふが(二)、私は未見である。明瞭に欽堂の作と知れてゐる小說の作は今日のところ以上で盡きてゐる。(三)

概していつて、欽堂の小説は、素人の作としては才分があり過ぎ、玄人の作としては底力がなさ過ぎる。自分一家の持味があり、描寫の手法などにも努めて清新を旨に工夫してゐるらしいが、自分で書いて自分で纏りがつきかねる風が見える。要するに殿樣藝といふ臭味が何處までもつきまとつてゐる。

小說以外の欽堂の著述には。『論事矩』(明治十二年)、『花柳粹史』(明治十二年十二月創刊、雜誌)などがある。前者はジェボンの論理學の譯、後者は基督敎徒たる彼に似合はしからぬ類の雜誌である。恐らく愛民社關係などから深入りしてかゝるものにも指を染めたものであらう。尤も雜誌にはこれより早く「智慧の舍密」(明治十年一月――六月)がある。その他團々珍聞、「月とスッポンチ」の中にも彼の投寄にかゝる文章が若干あるといふ。『鐵研詞藻』、『酒史』の二篇は近刻と豫告されてゐるが、刊否未詳である。

ある書(四)には、欽堂のことを「放蕩にして落魄し小說戲文を綴りて世を渡つた」と記してあるが、放蕩は兎も角、落魄して小說戲文を書いて生活したといふのは事實ではない。彼は終生、華族銀行の無役祕書で扶持を貰つて居り、又本家からの合力もあり、母方の高島家の後見もあつたらうから、さう甚しく落魄したのではない、從つて小說や戲文で衣食しなければならなかつた譯ではない。だが、この道によつて衣食する必要がなかつたから彼の小說には遊戲氣分を離れた力の籠つたものが出なかつたともいひ得やうから、この點は欽堂にとつて幸福であつたか不幸であつたか、俄にいひ難い。

欽堂は晚年大酒のために病氣となり、橫濱神奈川山の高島家別莊で養生してゐたが、明治二十三年八月十日、まだ四十一歲の若さで歿した。

註(一)『吾妻ゑびす』跋文の一節

註（二）欽堂の華族銀行時代の同僚だつた三輪信次郎氏談話。これは或は本文の『娼化粧』に對する同氏の記憶違ひかも知れない。

註（三）たゞ疑問なのは花柳醉史の著といふものである（例、十三年刊『粋學新論一杯奇言』）、私はこれは何うも欽堂の作物ではないかと思ふが、さう斷ずる明證がないので今は差控へて置く。

註（四）『名人忌辰錄』『國民大帳簿』その他の欽堂の略傳。

五

欽堂は元來がお大名のお坊様で鷹揚に育つたのだから、少し人間が甘かつたといふ或る人の評も尤もであらう。それに新歸朝の知識をいさゝか多くふり廻した爲め、着實な人々から輕佻と考へられ、當年のモダーンボーイ、即ち尖端的開化人の好代表と見られたのも無理がない。だが一面才氣潑溂たる點もあり、眼先も利き、頭も相當働く。新しい工夫事が好きで、紙腔琴を發明したことは前に述べたが、その他板紙ボール紙の製造、洋傘の骨の彈力の改良などにも頭を惱したことがあるといふ。趣味が廣く、書畫遊藝、皆好んだが、藝事は自分でするよりも寧ろ名人の藝を樂む方が好きであつた。花柳界の通客であつたことはいふまでもあるまい。

最後に吾等は、折角戸田欽堂の存在を立證した序に、彼の文學史的意義といふ如きものを簡單に一考してみたい。

第一に、政治小說の先驅者、乃至先驅者の一人としての欽堂の名は、たとひ小さいながら明治初期文學史の上から搔き消すことが出來ない。

第二に、欽堂は封建貴族出の知識階級でありながら、好んで小說戲作家となつた。彼が『情海波瀾』を公にしたと

き、戸田家の親類の怒りにあつたことは前にも述べたが、明治初年には封建貴族流の文學觀が世人の意識を占めてゐたので、稗史小說の類は士君子の公然手にすべからざるもの、婦女童幼に勸懲の道（それも封建主義からの）を敎へる道具としてのみ存在するものといふ考へが一般であつた。かういふ時代に、その封建貴族なり知識階級たり士君子たる欽堂の如き人物が小說家になつたから、世人の眼を驚かしたことは相當大きかつたらう。從つて又この事が幾分たりとも世人の文學觀を打破し、稗史小說の位地を高めるに効があつたと察せられる。一面又、時人一般からいつて政治そのものが人間唯一の高大な職分であるやうに考へられてゐたので、その高尙な政治と小說稗史が結びつけられることによつて、自然後者の位地が高められるに至つたやうなこともあつた。かういふ文學觀小說觀の變化は、この時はまだ極めて仄かな微かなものであつたが、然し兎に角それの働きのあつたことは認めなければならならぬのではなからうか。（昭和八年十二月明治文學研究創刊號、昭和十年三月增訂）

明治十四五年に於ける先驅的政治小說家の二三

(一)上田秀成

明治十四五年の間『情海波瀾』について、先驅的に政治小說に指を染めた人々は幾人かある。そのうちで先づ記憶さるべきは百華園主人櫻田百衞であるが、櫻田氏と略ぼ同時に乃至相前後して相當意義ある政治小說の試作をなし而かも今日全然忘却され了つてゐる人々が二三ある。此の二三子については、櫻田の後に語るのが順當かと思ふが、櫻田はいろいろな點で宮崎夢柳と並べて語る方が相應はしいから、櫻田を後にして此の二三子の方を急がう。

その一は上田秀成。

上田秀成、蝸石園主人と號する。福岡縣の士族といふのみで、その傳記は殆んど不明である。學問文章の素養は相當あつた人らしく和漢は勿論、英學も一通りの知識はあり、政法經濟の學も好むところであつたかに見える。私が此の頃の新聞雜誌を閲讀した際にわづかに拾ひ上げた記事によると、明治十四年八月頃から十月前後まで明治日報に在社してゐたらしく、同日報に數篇の論說を書いて居り、又同年十一月、丸山作樂、關謙之その他後の帝政黨の連中と同じく演說をしてゐる、題して外交論といふ、その內容は未詳であるが想像に難くない。同じ十四年十月、「東洋學藝雜誌」の發刊されるや、編輯人と署名して第五號明治十五年二月に及んでゐるが、この後間もなく上田秀成の名は此の雜誌の何處にも見當らなくなつてゐる。又十五年二月の「東洋學藝雜誌」第五號によると「繪入人情豐年溫故誌」

を發兌する旨の廣告が見えるが、その中に編輯城重源次郎、校正彩霞園柳香、補助蝸石園甲山とある。此の蝸石園甲山も蝸石園上田秀成と同一人物であらう。然るに「豐年溫故誌」の實物には補助假名垣魯文とあつて、秀成の名は何處にも見えない。怪しむべきである。

かく傳記的事實からいへば殆んど烏有視されても致方のない人であるが、たゞ「明治日報」及び「東洋學藝雜誌」に書いた論文のおかげでその政治的意見の方は傳記に比すると多少明白に把握し得る。彼の論文で最も早く見られるのは、明治十四年八月十九日「明治日報」四〇號所載「如此ハ予ガ感」と題するものである。その次は八月二十一日四二號の「政事ノ海路」と題するもの、之は政治改革に於いて漸進すべきを論じてゐる。八月三十一日から九月三日に亘つて（五十號から五十三號）「出版書籍ヲ論ジテ人智ノ進度ヲ測定ス」といふやゝ長い論文があるが、これも漸進論で、日本人の知識の度は此の頃出版される書籍で知られるが、その肝心の書籍を見ると低級な趣味のものが多い、これでは知識の度が高いとはいへない。政治も此の知識の度に應じたものがよく、從つて急激なる改革は不可である云々といふのである。轉じて「東洋學藝雜誌」の方を見ると、第一號から第二號にかけて英國の哲人ヒュームの自由政治論を紹介し且つこれを批評してゐるが、その批評の文章に依つてみても、彼の考へがあくまでも學者的穩健說である。政治は時と人による、何の政體が永久に絕對によしといふ如きことはない、勿論自由はよきものなるも外來的乃至煽動的に流行するは贊成し難い。人民の中心よりしたものでないと永く保たない云々。第四號には「本誌改良ノ因由ヲ述ベテ皇帝陛下ノ萬歲ヲ祝シ奉ル」といふ一文があるが、これには、眞理をもとめ、これを發揮するを任とす云々とある。第三號から五號に亘つて「非時事小言」といふ福澤諭吉の『時事小言』の駁論があるが、これでも、先づ第一に眞理を求めよ、然らば正人が增加して自ら國權が强大とならん云々といつて、福澤が萬世の眞理に從はずに一時の權道なる人爲の權力を重視するに反對してゐる。

以上を總合すると、此の人は「明治日報」に近づいた點は保守反動家らしく見えるが、然し事實は單なる保守反動家ではなく、中正主義の漸進的改革論者であつたらしい、今日でいふ意味の自由主義者としてのインテリゲンチャ、さういふ立場にゐた人らしい。

此の人、上田秀成が、政治小說『自由之櫱蝴蝶紀談』を書いたのも明治十四年のことである。この小說は十五年九月十日の出版となつてゐるが、事實は十四年七月十八日以前の著作でなくてはならぬ、何となれば板權免許は丁度此の日附であり、當時の制として板權免許を得るには著作の草稿を添付するを要したからである。且つ十四年十月、此の作が出版の豫告をされてゐる（同月十五日、「明治日報」八七號）、曰く、

此書は政治社會の狀態を小說に綴り專制の害自由の源を說き如何なる勢ありて國亂れ如何なる實ありて善良なる治果を得るかを目前に見せしめ怪談奇說の間に理の一なるを示すも決して理窟を云はず行文は平假名を附し婦人女子にも解し易からしむる珍書なり且つ世態人情を說くことの切實なる文法の新奇なるは一讀して知り玉ふべし

此等の事實から十五年刊のこの小說が十四年の作なること、明白であらう。然しこの豫告は單なる豫告に終つて、十五年九月に至つて始めて出版されたものに違ひない。ところで面白いのは、此の十五年度の方の出版廣告であるが、この方では、まるでこの小說が自由民權宣傳の爲めの福音書なるかの如き文句に變つて來てゐる。曰く、

右は蝸石園主人夙に民權自由の小說なきを嘆じ近世の時事を看破したる著作にして婦女童蒙といへども解し易くして自由の精神を益々鞏固ならしむる面白くして有益なる小說なり苟も政治思想を有する人は必讀されん事を希ふ。

僅か一年の差だが、自由民權論進展の勢力がかゝる點にまでもはつきり見られると思ふ。

この小說は卷頭に第壹編と題してあるが、第貳編以下の刊行はないらしい。第壹編所載の目錄によれば、第五編ま

では刊行の豫定になつてゐるが、これで終るつもりであつたかまだ續くものであつたか、一切分からない。左にその第五編までの目錄を揭げて見ると

第一編　第一回　玄道蹈雲會神仙　千歲古木現奇變
　　　　第二回　壯士慷慨談國事　少女奇才勵兄志
第二編　第三回　梅花下五士歃誓　園池頭兩士開鬪
　　　　第四回　阨解季惠認於榮　救他氏季失金囊
第三編　第五回　少女彈琴述艷情　臨海樓上會壯士
　　　　第六回　私告意衷談昇級　漫想美人感奇夢
第四編　第七回　氏守公爲月下翁　季惠星夜見怪物
　　　　第八回　月前聞笛認美人　垂淚羽衣說吉凶
第五編　第九回　托家氏季航遠洋　開宴壯士興來賓
　　　　第十回　開進社前捕壯士　國守奇計狙宰相

といふのであるが、何うやらこれでも猶ほ未完であるらしい。

從つて第壹編だけでは窮極的には何を書かうとしたのか知り難いが、幸ひ著者の自序があるので、この小說著作の趣旨だけは分かる。曰く、――

(前略)しかはあれども作者も亦聊用心なきにあらず夫能く語る者は其心靜なり故に惑はず動く者は變化無量なり故に邪魔を生ず然れども變化極る時は魔も亦消滅する期あり故に悟りて靜なる者は初よりして知ると雖も迷ふて動く者は後に至りて前非を悟る緈(こと)あり能く讀者(よむもの)は此書も亦其本末を知ることあらん云々

恐らく當時日に急になり行く民權論者の過激なる擧動を非とし、中正漸進主義の立場から眞の自由の理想を闡明して示さうと欲したものに違ひない。別に彩霞園主東洋太朗（雜賀豐太郎、柳香）の序があるが、その一節に——

余が友蝸石園上田秀成氏ビーコンスフキールド及びワルヂエッフ兩氏が顰に倣ひ今度蝴蝶紀談を新著す善く方今內外の事情に通曉する實に政治學楷梯の小說書たる事を保證す

とある。「ビーコンスフキールド」はいふまでもない英國保守黨の總理、度々內閣宰相となつた政治小說の元祖、ワルヂエッフはロシアの政治家で、これ又「小說稗史の類を著述し以て露人頑陋の迷夢を打醒して文明の元素を誘起せん」とせる人、その近著を『ローリン』といふと、以て當時政治小說著作の際自ら模範とし理想と仰いだものが奈邊にあつたかを知る多少の參考となし得る。

第壹編の梗概を手短に語らう。

著者上田秀成の分身ともいふべき玄道先生が或る春日の夢に異人に導かれて神仙の膝下に到り、神仙の賜はつた遠眼鏡で下界の龍王國を望む、それが發端である。龍王國は大洋の中にある無双の樂國である。「蒙昧の時より國王を神とし尊び稍後世になるに從ひ皇帝を以て神種と敬し（中略）民は上を見ること父母の如く上は下民を見る猶赤子の如くす此以數千年の其間國治り民豐に他の各國と交通せざれば自國の外に國あるを知らず自ら耕し自ら織り太平を謳歌」してゐた。然るに紀元千八百六十年の頃西洋諸國に迫られて開港通商を始めたところ、大方ならず國運が繁昌した。この國開港の際社會の物論が自然進步的の開港派と守舊的の非開港派と二分されたが、遂に開港黨が勢力を得て政府の大臣宰相が皆開港黨に占められたので、西洋文物一切が崇拜され、國制西洋を學ぶに至つた。就中心にかけたのは軍備の整頓であつた。そこで時の宰相岩開氏守は、自邸の傍なる一千年を經た槐樹の神木を伐つて軍艦にしようとする、學士一條國守は急に神木を伐ることに贊成せず、今暫時まてといふが、岩開はきかず、これを伐らしめる、

流石に神木の倒れる聲の大さには諸人が驚かされた。此の木を伐倒すの日、岩開が見てゐると切口から白氣が立ち騰り、やがて二匹の蝴蝶と化し、南北に分れて嚙み合ひ、南の蝶が北の蝶を嚙み殺したので、大に怪しんだ。岩開はこの大木で護國艦を造る。やがて岩開一派の開港黨は專制の擧動が多くなるので、國民が漸く怨み、人心不穩になる、此の機に乘じて「自由黨と自稱して政府の官吏に抗爭する有力の黨派」を生じた、これは千八百七十四五年のことであつた（以上第一回）。

開港黨に敗けた守舊黨も今は守舊の非を悟り開港の是を認めるに至つたが、開港黨の橫暴に對する憤濾から、守舊論をすてると共に、逆に自由の論を楯として政府に抗しようとかゝつた。自由の論の勃興には此の邊の事情もある。

一條國守は先に宰相に反對して辭職したのだが、この形勢を見て大に憂慮してゐる。そこへ日新館の新聞記者海原唯世が來て、淸遊に誘ふに托し時事を論じて入社を勸める。席上の日本茶から二人の間に日本論が交換されることになるが、これが此の小說の眼目である。國守は唯世の勸めもあり、愈々「我れ自由の說を以て政府の官吏に抗爭し上下治術に意を注がし政道の眞理を知らしめて我國をして地球上第一等の自由國と爲すより他には術もなし」と決心する、國守の妹玉苗は兄の決心を聞いて、宰相の權勢を制し、龍王國をしてアメリカの如き自由の國たらしむるは今だと兄を奬まし、困苦を共にするを誓ふ。（第二回）。

梗槪は以上二回より語ることが出來ないのは遺憾であるが、著者の意のあるところは大體推察がつく。

隱微な用心深い寓意になつてゐるので、說明しにくいが、龍王國とは勿論日本のことに相違なく、岩開宰相は薩長政府、一條學士は土佐を表徵するもの、千年の神木こそは將軍政治をいふものであらう。神木を伐つて軍艦にするとは、將軍政治を倒し兵馬の權を朝廷へ納めたことの意であらう。蝶夢の幻は政府對自由主義の爭ひの暗示と思ふ。第一回は歷史的で近代日本の自由主義發生までを說き、第二回はいよいよ自由主義伸展のことに及んで來る。一條學士

と記者海原とは遠い外國の事ででもあるやうに日本論を交してゐるが、これは勿論當時の日本政治の現狀と、著者の望む理想日本とを對比さしたものに外ならぬ。

夫れ日本の今日あるは今日ある所以あり（中略）初め日本も我國の如く外交を初めし頃は國中自然と黨派を分ち一黨上にある時は一黨自然に下にありて隱然これと相競へば上たる人は心を引しめ勉めて人民の心を拿りて敢て暴政あることとなし恬くて數年を經るままに互に政理を研究し能く其術を得るに至り漸進の人も固陋に陷らず急進の人も過激に涉らず人民安堵の思ひをなし產業ます〳〵盛にして商賣旺盛に至れるなり

これは勿論當時の日本の現狀ではなく、著者達の描いてゐた理想日本の姿である。末段の數句はブルジョアジイ勃興を歡迎するものとして殊に注意して讀むべく、當時の知識階級の目標が奈邊にあつたかゞ知られやう。

今我國は之れに異なり一黨固陋にして世上の事を知らず一黨は宰相に媚びて一身の榮利を祈り民を虐し主を罔し他人の諫を用ひざれば忠臣去りて朝廷に直諫の士なく獻白請願は上に達せず人民囂々として安堵せず會議は官吏の相談に過ぎず新聞集會には條例なけれど人身保護の律なければ柰に捕縛に遇ふことありこれ敎へずして民を殺すものなり下に自主の氣象なければ上に專制の思あり

といふのは、多少のカムフラージュを施してあるが、勿論當時の日本政治社會を諷したものに違ひない。然らば何によつて龍王國を日本の如き盛大な國家たらしむべきか、それには自由の論によるべきである。

今先生日本を見て我國を憂ひ給ふならば何とて其道を行ひ給はざる先生才あり新紙の記者たり此の心を以て心とし世の民心を振起せしめば今や人心既に動けり其成らんこと必然なり若し其黨（自由論者の黨）生しなば政府に迫り法を定め會議を起し憲法を立てなば各々政治の志想を生じ治法を探り法律を正し世を治め民豐に我國光を四海に擧げ西洋東洋南北の國を感服し俺們が威名を後世に傳る緈のなからずやはと辯舌淸しく論すれば云々

理想日本を徒らに羨むまでもなく、これを實現せしむる道がこゝにある、我人俱にこれが實現に努力しようといふ寓意である。自由主義による立憲政治を施くことこそ、日本國家興隆の道だといふ著者の言外の主張がこゝに見える。以上でみると、『情海波瀾』と同じく好望的で妥協の意はもつてゐるが、政府との抗爭は幾分か豫見してゐるやにみえる、たゞ無用の抗爭はあくまでも避けたいといふ態度である。明治十四年當時の一部インテリゲンチャの心的態度の反映として興味あるものである。

『蝴蝶紀談』は小說としては格別の取柄のあるものではない、趣向の如きも馬琴などにありふれたもので新味はないが、たゞ稗史實錄の形式で政治小說を書かうとした點で、形式の上でも若干の意味をもつといふことだけ記憶されゝば澤山であらう。

上田秀成の今一つの政治小說『自由之空夢(そらゆめ)』は、殆んど私の發見（むしろ發掘）に成るものといつて可い。明治十五年四月十二日發兌の「鳳鳴新誌」第五十一號に載つてゐる未完斷片である、次號以下に連載するやうにいつてゐるが、次號以下には全然なく、この號所載の第一回（夜半鐘聲驚㆓市民㆒ 友之雄辯服㆓惟從㆒）だけで中絶してゐる。恐らく此の第一回もまだ一部分だけであらう。

此の小說は未來記らしく見せかけたものである。時は一千九百五十六年二月五日の夜、處は何處とも分かぬ某府に於て、太守朝居工匠の虐政に反抗して義兵を擧げる。此の府選出の代議士で自由論者たる伴友之は馬車を驅つて府民を激勵し、義兵に加はることを說いて歩く。府民はこれに贊成する。警察局では警備を嚴重にしかけるが、これを見た友之は長官に何事をか說得しようとする。話の筋は全くこれだけで、後はたゞいよいよ大規模な革命戰になるらしいと想像されるのみ、何の手掛りもない。然し著者の所見は友之の激勵演說に一端が見えてゐる。

愛國盡忠ナル我ガ良友諸君ヨ諸君ハ曩ノ砲聲ヲ聽キ我黨ノ志士ガ將ニ奮起シテ夫ノ壓制苛酷ヲ極メタル本府ノ太守朝居工匠ヲ討滅シ國ノ爲メ自由ノ爲メ身命ヲ擲チ同胞兄弟ノ厄ヲ解キ數十年來萎微振ハザル工商ノ業ヲ起シ永ク皇帝陛下ノ泰德ヲ仰ギ久シク自由ノ人民タラントスル我黨ノ志ヲ好ミシ來リテ助力スルノ意アルヤ否ヤ云々

「數十年來萎微振ハザル工商業」の一段が如何にも意味深長に聞かれるではないか。『蝴蝶紀談』中の理想日本の姿を描いた條と參照すると、朧氣だが何やら當時の所謂自由民權運動の核心に觸れるものがあるやうな氣がする。

『自由之空夢』の描寫は、『蝴蝶紀談』の稗史體なのに對し、明白に飜譯體を學んでゐる。小說のテクニクとしては勿論言ふ程のものがない。

（二）　嘯風子一宮豬吉郎

その二は一宮嘯風子、卽ち『東洋奇談鳳緣情誌』の著者である。

此の人の傳記については上田秀成以上に知るところがない。長崎縣士族であつて、明治十四年十一月一日から十五年一月二十七日迄（大阪）「朝日新聞」の假編輯長となつた。その間十四年十二月二十二日「朝日新聞」八五四號に正樂寺住職安滿勝了の事を書いた事から讒謗律に問はれ、十五年二月七日附で罰金七圓に處された。而かも此の判決の下つたのと日を同じくして、彼は病死したといふ（一）。當時の假編輯長なるものは、皆罰よけのロボットであるから未成年の青年をもつてこれに宛てた。さういふ點から考へると此の一宮も、まだ二十歲にもならぬ青年、いな少年といつてもよい年輩であつたらう。以上が、『鳳緣情誌』の著者一宮について私の語り得るすべてである。何せ明治十五年のことであるから、この位でもよく分つたものと思つて、喜んでゐる次第である。

明治十四年五月出版屆出となつてゐる小說『鳳緣情誌』は、恐らくこの少年の唯一の著作、處女作にして最終作で

あつたらうと思ふ。少年の試作だけに素人くさい整はぬところの多い缺點だらけのものであるが、それだけに政治小說としては、戸田欽堂等のカムフラージュ的寓意一點張りではなく、勿論大體は寓意式作風を學んでゐても、幾分思想的に露骨なところが見える。そのあくまでも素人らしい素撲なところが、却つて面白いと思はせる。こゝが政治小說の發展上一進步といへばいへるのである。

『鳳絲情誌』は全六回で團圓してゐる。その內容の如何なるものであるか。

第一回　雪中語レ情畫樓畔　金屛成レ媒訂二芳緣一

冒頭に著者の天道哲學があるが、飽くまで樂天的好望的である。

善者ハ彌盛ニ惡者ハ益衰フ此ハ是レ天ノ常道善者ノ樂テ以テ善ヲナシ惡者ノ怕レテ以テ惡ヲナサヾル所ナリ邪盛終ニ衰ヘス善微永ク盛ナラザラシメバ天下ノ佳人才子ハ天ヲ仰テ其ノ無情ニ泣キ世ノ奸人惡徒ハ兇威ヲ專ニシテ社會ニ横行セン盛衰常ナラスト雖トモ善者終ニ天佑ヲ得ルヲ見ルトキハ天亦無情ニ非ザルカ

以下發端にうつる。時は現代であるとし、場所は何處とも分からぬ、たゞ「五大洲ニ善名ヲ輝ス一帝國ノ中央」とのみ書いてある。そこに「古來權勢ヲ擅ニセシ一貴權」國田某といふのがある。これは「己ノ權勢ヲ憑ンデ人ヲ虐使シ永ク威福ヲ專ラニ」した人物である。この人物の女に專子といふのがあるが、專子は才色双全の佳人ではあるが心術極めて邪惡であつた。だがさうとは知らず世の著者で專子に思をかけるものが少くなかつた。中でも門閥政治家の守山舊策といふのがこれを慕ふ心が最も強かつた。一日守山は雪見に出かけて一亭で小酌してゐると、これも雪見に來た專子主從と出會ひ、夢かとばかり喜び、間を得て戀慕の意を通ずる。專子は喜んで守山の情を容れるが、人眼があるので玉環を交換して將來を誓つて別れる。

第二回　奇緣遇レ兩双燕濕　芳詩寄レ情蝴蝶戲。

專子と守山はこの後私に情を通じた。守山は有名の門閥政治家で元來一國の政治を掌に握り頗る權勢があつたが、「只自家ノ威福ヲ擅ニシ毫モ人民ニ自由ヲ與ヘズ人ノ思想ヲ壓塞シ擅制ヲ以テ政事ヲ行ヒ」、且つ品行も惡かつたので人望を失つた。守山が人望を失ふと共に、その敵手たる政治家民谷某が漸く民心を得て來た。民谷は「賢明ヲ以テ政事ニ預リ大ニ國民ノ爲ニ力ヲ盡シ自由ノ道ヲ得セシメン」と欲する、民心を得るのも無理がない。民谷の一子權理は秀才美貌で氣慨あり、學藝に富み、著述を事として世に名を知られた。こゝに又政治家愛民某といふのがある。元來西洋の名族であつたが、微賤から身を起し、憂國愛民の活動で名一世を振動したが、今や東洋に移つて再び政治に與り、自由民權の論を唱へて岡田、守山等に反對し、民谷と親しかつた。一日愛民が民谷、權理等民權政治家を招いて饗宴を張つた。愛民の一女國子は、民谷權理の才識に深く感じ、これと契らんとする心を起した。二人は遂に醉を醒すに托し、五言の詩をもつて互ひの情を述べた。國子は民谷に守山と親む勿れと忠告し、且つ守山が自分に艷情を通ぜんとして拒まれたことを語つて用心させる。

第三回　兇豎嫉妬逞二奸計一　才子不幸陷二災難一

守山は先に專子を得て一時は歡喜したが、輕薄才子のことゝて忽ち國子に情を移し、頻りに艷書を送つたが何の返事もない。ところがよく探ると、國子は民谷權理と膠漆の中であるといふ。そこで守山は民谷を嫉妬することが甚しく、何とかしてこれを陷入れようとかかる。ところが或る日民谷の著した民權自由論（とも題すべき書）を見て、その好材料を見つけた。權理は佛國の過激黨、魯國の虛無黨の例を引き、人民の自由を抑壓すれば大害を生ずるを論じて、さて——

我ガ帝國ノ同胞兄弟ハ淳良ノ性ヲ備ヘ且ツ其ノ政府ハ魯ニ非ス佛ノ前政ニ非ザレバ決シテ斯ノ如キ過激ノ擧動ニ出ル如キハアラザルベシト雖ドモ若シ其ノ堤防宜シキヲ得ズ權理自由ヲ束縛シ思想動作ヲ壓塞スルトキハ其ノ鬱結凝

積スル所發シテ奈何ノ慘狀ヲ演出スルカ（中略）嗚呼主治者ヨ予ガ言ヲ以テ未蹟ノ杖トナシ彼ノ魯佛ノ轍ヲ蹈マザルヲ勉メヨ

と諷諭してある。守山はこれを捉へて、權理は「政事を誹謗し我黨を罵り國安を妨碍するもの」となして其筋へ告發したのである。權理は種々抗辯したが、司法當局は守舊黨で占めてゐるのでその効もなく遂に獄に下ることになつた。民谷の父は愛民等に計り、執政に上告する、世の慷慨憂國家は皆民谷の寃を悲み、守舊黨の奸策を怒つた。

第四回　囚ニ天祐一才子脫レ災　陷ニ奸計一鴛鴦違レ盟。

權理を獄に入らしめた守山は、大得意で守舊論を主張し勢力を擅まゝにしたが、それで飽足らず、この機を利用して權理と國子を離間せんとかゝる。一方、權理の父や愛民等は執政に上告すると、流石に正理が抂げられず、權理に無罪の判決が下される。守山はそれに失望し、愈々奸智を逞くして權理と國子の離間を計る。守山は己が腹心を語らひ權理の一友と稱して國子に手紙を送り、權理の無罪になつたのは變節せしためだといつてやる。國子はこれを信ぜず、權理宛に確めの手紙を送ると、途中でこの手紙を欺き取り、民谷の返書を僞作して、所謂變節を是認し、民權非自由國會尙早を說いてやる。國子はこの返書を得て大に悲み、權理の來るのを待つて諫めんとするが、權理は來ぬ。守山は又一方、國子より守山へ送る手紙を僞作し、間違つた風をして民谷の許に送る。書中、權理を罵り、如何にも守山と譯ありげに記してある。權理は果して大に怒り、國子を省みず、獨り讀書して志を養ふ。

第五回　尋レ花郊外遭ニ危難一　改レ志義士救ニ才子一

守山は權理と國子の離間に成功したので、專子と二人で邪曲橫暴を極めた爲め益々人望を失ひ、人民は益々憤怨した。守山は人民の憤怨を民谷等の所爲となし、民谷を除かうとする。一日守山は腹心四五と某山に花見に出かけると折柄民谷權理も散步に來てゐる。守山好機至れりと、歸途を狙つて權理を暗擊しようとする。民谷はそれとも知らず、吟

遊夜に入つて歸途につかんとしたところへ、守山の腹心の一人好村自由介（じいうのすけ）は密に來て守山の計畫を告げる。それで權理は間道から去り、守山の計は破れる。守山は又も夜頑固某を刺客として權理の邸に入らしめ、權理を刺さしめんとする。

第六回　夜縛二凶徒一推二姦謀一　再依二奇緣一訂二鴛盟一。

好村は守山の計を知り、民谷邸に入つて頑固某が手を下さぬうちに彼を捕へ、且つ守山が僞書をもつて民谷と國子を離間せしことを告る。民谷始めて悟り、好村をしてその僞書を齎して國子の許を訪ひ、國子の得た僞書と引合し、且つ行違ひを說明させる。かくて二人とも好村の說明で心が解けたので、權理は明日改めて國子を訪ひ、新に鴛情鳳緣を結び、將來を誓つた。權理は「守山等ノ兇豎ヲ斃シ守舊黨ガ頑陋ノ迷夢ヲ提醒シ大ニ民權自由ヲ振起シ國權ヲ擴張シ國威ヲ朝陽ト與ニ東洋ノ天ニ輝カサンコト」のその素志なるを告げたところ、國子はこれを勵まして自分も驥尾に附して力を致すことを約束した。

民谷は此の後益々民權を主張し國會論を唱へたので、これに和する者が四方に起り、固田守山等は勢力を失つた。民谷の人望は益々盛んで民權の泰斗と仰がれ、政權が悉く改進黨（民谷その魁たり）に歸せんとする。

そこで著者は結んで曰く、——

嗚呼天ノ善ヲ善シ惡ヲ惡ム所是ニ於テヤ益々顯ナリ中ノ佳人才子浮雲風雨ノ爲ニ天ノ無情ヲ嘆スルナカレ天ハ其レ果シテ無情ニアラザルナリ

即ち冒頭の樂天哲學に照應させてゐる。

此の小說は著者の政治思想が可成り露骨に現れてゐるので、その點說明するまでもない、たゞ表象的寓意の部分を註釋すると、先づ固田某は日本の封建的支配階級のこと、專子は專制主義、守山は守舊の保守黨、民谷某（父）は民

間志士、民谷權理は人民の權利、愛民某は西洋流の民權論、國子は國民乃至國家のことである。守山が專子と通ずるは、保守黨が專制主義を行つて橫暴に振舞ふことを意味し、民谷父子や愛民父子が守山一派に對抗するのは、民間志士が西洋の自由民權論を楯にして人民の權利を主張し、國民本位の政治を實現させようといふのである。民谷權理の寃罪は保守黨が自由論者を過激派と誣ひることであり、權理と國子が離間されるのは、保守黨の奸策によつて國民が民間志士を疑ふことを意味してゐるのである。總體として自由民權論の保守々舊論に對する勝利を豫想したものであるが、やはりまだ好望的で(前にもいつたが)、明確な抗上鬪爭的意識が見えない。而して民權の勝利と共に國權の振張を目指してゐるところが眼立つ。

だが小說のテクニクの上からいふと矢張り取るに足らぬものといふべく、趣向も淺薄不自然笑ふべきものが多い、文章も『情海波瀾』流の漢文讀下しであるが、瑕疵も多くなまなましい。たゞ非常に稀な本であるから、その意味で尊重すべきであらう。

註(一) 明治十五年二月十四日「郵便報知新聞」記事

(三) 和田稻積

三は和田稻積。

和田は坂崎紫瀾の後輩、宮崎夢柳の同輩で、本來ならば今少し後に出づべき人物であるが、都合上こゝに繰り上げて語つて置く。

和田についても餘り詳細な傳記を聞いてゐない。和田は愛梅野史又は半狂道人等と號して、土佐長岡郡大津村の人である。初め立志社で設けた立志學舍に學んだらしいがよく分らない。土佐の舊各社のうちでは修立社に屬してゐた。

修立社は明治十年十一月の設立で、その趣意によれば、天賦の自由を擴充し、人爲の權力を抑制し、上は政治を改良し下は自治の氣象を發達せしめ、以て最善至美の社會を構造せんとするにあり云々、當初から純然たる政社である。明治十三四年の交「高知新聞」及び「土陽新聞」の記者となつて紫瀾や夢柳と共に筆をとつた。和田は又辯舌も達者で度々演壇に立つてゐる。十五年一月、坂崎の東洋一派民權講釋が起るやこれに加入して馬鹿林鈍々と名乘つた。同年四月板垣の岐阜遭難には修立社及び「土陽新聞」總代の一人として見舞にかけつけた。同年十一月東京の「繪入自由新聞」の記者に聘されて上京、爾後同紙に執筆を續けてゐたが、明治二十年十二月の保安條例には土佐人の故を以て東京を逐はれ、母を奉じて甲州に入り、その地の新聞社に寄寓して僅に衣食を仰いだ。二十二年大赦歸京の後又「繪入自由」に入り、同紙が「萬朝報」と合併するや、「萬朝」記者となつたが、明治二十六年十月五日肺患で歿した。享年三十餘。この肺患は、保安條例で甲州入りをする途中ひきこんだ感冒のこぢれたものであつたといふ。

和田の愛梅の號は宮崎夢柳の向ふを張つたものであると思ふがそれだけに、文章の方は相當自信があつたらしい。「高知新聞」時代には、勿論「繪入自由」になつてからも小說的文字を弄したに違ひないと思はれるが、あるとしても皆匿名か變名が多く、今日殆んど確め難いのを遺憾とする。たゞ一篇、私が「高知新聞」閱讀の際發見したものがあるが、それが卽ち政治小說「春窓娘讀本」なるもので、只今のところ和田の小說として、政治小說は勿論普通の人情小說もこれ以外には一寸見定められない。「春窓娘讀本」は明治十五年二月十五日から二十七日までの間に「高知新聞」に二回、「土陽新聞」に二回載つて中絕したものであるが、紙數も僅かのものであり又新聞が新聞だけに寓目する機會のない人々が多いだらうし、土佐方面立志社系の純然たる政治小說としてはハシリの部に屬するから、全文を收錄しよう。

明治十五年二月十五日「高知新聞」二七三號(この本文の收錄は明治新聞文庫主任宮武外骨翁の好意によるもので

ある)。

○春窓娘讀本　　愛梅野史編

草木の秋にあへば凋み落て骨のみ殘りたる如くなるも春にあへば芳ばしき蕾の笑ひ初るあるを見る此の時期に當つてや古への花咲爺はイザ知らず四時の循環草木の榮枯はこれ造化翁の妙工に由るの理を了るものは已に笑んとするの瓣を閉ぢしめ將に結ばんとするの實を凋ましむるの能はざることを解するならん無情の草木すら然り況て有情の解語花に於てをや縱ひ鐵柵の裡に閉籠め嚴父の膝下に侍せしむると雖へども效あることなくして害あるのみ此れをこれ悟らず江湖頭翁破瓜の少孃をして其懷春の情を抑へ天禀の官能を空ふせしめんとし良緣あるも求むるを知らず徒らに時期を愆り子女をして其處を得せしめざるより忽ち足下から鳥の立が如き一場の活劇を演出し云ふべからざるの災害を胎すこと鮮からず愼まざるべけんや戒めざるべけんや今此に書き出す一條の物語は東京なる或る友人より寄せられたる原稿なるが愛梅か拙き筆を以てこれを敷延し且つ潤飾を加へたるものにして聊か寓意の存するあり看官諸君よ若し之れを諸君の記性に質さば大ひに了解する所ろあらん希くば尋常狂蝶戲花譚と同日の觀を下す勿らんことを

第一回

「お英さん學校のかへりかへ「オヤお米さん此間は有難う今日はアノ拜借仕た西國烈女傳をお返しに出掛るところでした　米「是れから私の宅へおいでゞないか　英「左樣なら一寸お國さんの所へ廻つて下さい一昨日賴まれた手紙の都合があるから　米「ホンニお國さんと云へば頃日彼所の內は大層もめて居るそうだがお聞きだらうね　英「私なんぞは每日のやうにゆきますから彼所の容子はよく知つて居ますマアアノ番頭の岩八や伊助なんぞの燒餠の膨れ顏惡くらしいことネー米「お父さんもあまり氣の利かないたとひ幾許勝手向や番頭の都合がわるいと云つて破瓜になつた

お國さんをあんなにいじめて二十三にならなくちや男に肌ふれさせぬとか婿を取らせないとかまだ八九年も箱入の生娘で心棒させようとはあまり壓の强ひお父さんだヨ　英「お國さんのことを思つて居るお方は澤山氣を揉んでも番頭が中々嚴しいので一寸顏みることさへ出來ず此節は鹽梅が惡くなるほど鬱いで居るそうな　米「私の內は皆な粹がきくので其樣ことに苦しいことはないのサ　英「私しだつても同じことだにお國さんは氣の毒だネヘ」ト喃舌々話しながら通る二人の娘を見るに年齡十六七にて色白く肌膚濃かなれど眼睛の茶褐色なると髮毛の縮れて赤きとは玉に瑕あるが如し然れどもその性質怜悧にして讀み書の道にも疎からざるものと知るべし

明治十五年二月廿三日「高知新聞」二七七號

第二回

通りかゝりし兩人の娘は果して何所の誰れなるかは看官の判斷に任せん却說彼のお國と云ふは東京日本橋通りなる富財家大和屋某の娘にて芳齡は二七をたゞ一ツこすや越路の雪の肌膚花の顏柳の眉殊に其の性質柔和にして愛敬溢るゝばかりなるは蕾める花の春風に綻び初めし如くにて其の一枝を手折むと現を拔して通ひ來つ又は文章もて云ひ寄る人も多けれど柳の腰を吹き靡せし風の一個もあらざるは實に今の世に類ひ稀なる娘とて其の名もパツト忽まちに江湖の新聞に書き載せられ社會の輿論にかゝることゝはなりぬ抑も此の大和屋と云ふは今を距る事數千年前より一家連綿として富み榮へ殊に諸國商人との交際取引多く日增に繁昌しけるより番頭手代丁稚小僧下婢など數名召し使ひ萬事に拔目なきやう注意充分に行き屆きたるは有繫名高き大店とこそ知られたり主人は今年三十四五天性正直にして能く人をいたはり假初にも苛酷い扱をなし召使の者などを困苦しことなけれど店向の諸事萬端を引受けて居る番頭手代はそれに引き換へ過半中國生れの狡猾き男や九州育ちの荒くれ者にして其昔し開店の彼れ是れ混雜せし

折不圖此の內へ雇はれ段々出身せしも兎角世間の義理人情などに頓着せず氣隨氣儘なる擧動のみ多くして有心人々は皆な眉をひそめつゝ內々爪彈きするに至りければ自然と評判あしくなりて次第に店も衰微に赴むき從ふて家內折合はず年々風波の絕ゆる間なきのみか夥多の財產を費耗し負債益々崇むに至りしは實に餘所ながら嘆かはしき事ならずや話頭一轉お國は今日も唯だ獨り机に凭て傍らなる書架より取り出す書帙は何やらん二葉三葉開きつゝ

（本文）一國文明の進度は其の婦人を待遇するの狀態如何を以て之を判定するを得べしとは殆んど世間の通說となれり然り而して男子と男子の關繫を規する法律峻酷なる國に於ては男子と女子の關繫を規する法律も亦た等しく峻酷なり政治上に於て腕力正理を凌駕する邦に於ては家裡に於ても亦た均しく然り國家の壓制は必らず家族の壓制と相主伴す

お國は是れを讀みかけしが身にもしみ〴〵引き競べ其まゝ卷を閣いて過ぎ越方を思ふに付け最ど塞がる胸の中淚を落す冊子の上へ文字も鈍むでかすむらんエヽヂレツタイと小聲にてツト坐を起つて窓の側彼方の庭園を打ち見やり「アノ鶯が戀ひ慕ふ梅の花に宿らんとて嬉しげに鳴き囀ることの自由さよ吾身も鳥の翼あらば思想のまゝに飛んで往き來もなるべきにアヽ儘ならぬは浮世の常か左は云へ苦しき吾身の上へ斯樣に暮すも基はといへば皆アノ番頭の岩八や手代伊助等が所爲なりと云つても此方は女の體サテ宜き思案が有りそうなものと獨言折しも〔柱時辰器の音チーン〳〵〕オヤモウ十二時だヨ。

明治十五年二月廿五日「土陽新聞」一二號

第　三　回

昔し佛蘭西の蘆騷は自由の主義を擴めんと歐洲諸國を巡りしも當時の政府に忌み嫌はれ殆んど身を措くの地なきに

苦しめりとかや去れば彼の遠大の偉業を將來に期し國家を泰山の安きに置んとする輩の如きも時未だ到らざるに際しては千辛萬苦を身に引き受くること多し閑話休題茲に民野權太郎と呼ぶ一個の壯士ありけるが其爲人活潑にして頗る氣力あり元より才學衆に秀で辯舌暢快にして義理に明かに其志望遠大にして議論高尙なり且つ其の風采の優美にして人に接する極めて溫和なれば一回相ひ面して談話するときは常に其の人を慕ふて止まざるに至らしむ其の生所は詳かならざれども久敷諸國を漫遊して志を同ふする知己朋友も尠からず就中東北人士や南海書生と深く交を結びて時々通信などし最も睦敷なし居けるとかや民野は聊か思ふ仔細あらん先年より東京に駐まりて猶ほも學業を勵む程に追々上達なしけるにぞ四方の名士は早くも其の名を聞き傳へ今では此の民野と云へば少しく志ある者は皆な知らざるなきまでに至り或る時は其の家を訪ひ又た或る日は己が寓居を叩かるゝなど日々に交際ふ其人は皆これ有爲の壯士とこそは知られたり煉瓦石造の層樓は雲に聳へ白堊の壯閣は日光と相映ず車馬の往來織るが如く肩摩轂擊右に除くれば左に當り躊躇狼狽歩行に苦しむ景況は實に日本の大都會東の京の大通りなり折から二個の田舍書生蓬の如き散髮に兵兒帶幾重もキリ〳〵卷き高足駄をカラ〳〵と蹈み鳴らし群集の中を推し開らき脇目も振らずに行き過ぎつゝ頓て目に付く標札に「民野權太郎寓」ハア東野君爰だ〳〵と二個の書生は打ち頷首きズット內へ這入りつつ案內乞ふて待ち居たり民野も今日は幸ひの日曜日なりければ或る朋友に誘引て平素の鬱氣を慰さめんと衣紋つくろひ立出んとするところへ宿の下婢が取次に二個の名刺を指し出し何やら用事のある人と聞いて其儘坐敷へ通し双方寒暖の口誼を叙べ了り「僕等は東野。孤島と申して僻陬に生れし書生なるが嗚呼がましくも有志の黨派に加はるもの嘗て御高名は新紙にて承知仕れり以後は宜しく御交際を願はんため斯くは推參いたしたりと詞を揃へて述べければ「イヤ吾輩迚も唯だこれ一個の寒書生何分ともに兩君の御助力願ひ奉ると是より主客とも打ち解けて社會の狀況に付き種々の談に時間を移せしにぞ二個の書生は猶ほも後日の面會を約しつゝ暇を告げて歸りける

明治十五年二月廿七日「土陽新聞」一一四號

第四回

二個の書生が歸りしは日も早や西に沒り果て塒を求むる群烏のガアガア鳴き渡る頃ゐなりしかば節角約せし偶の遊步も不慮の客に支へられ一刻千金の好時節を空しく過せし殘念さと民野は獨り小言きながら我が居間に入り例の如く終夜讀書せんと頓て机に倚り弧燈を剔つて書帙を繙き太古は希臘。羅馬の沿革より近古は佛國革命米洲獨立聯邦の歷史など講究する內ち彼の阿歷山。該撒。拿破翁等の專恣を憤り索古刺庭、志施魯、蘆騷等の卓見を慕ひ又は路易第十六世の斷頭機に登るの所に至りては卷を抛つて嘆じ華盛頓。顯理等の偉業を奏せしところに及んでは机を拍て快と呼び或は鞭撤武の論を排し或は斯邊鎖の說を容れ既往を懷ひ將來を察すれば慘憺襟を沾し慷慨腕を扼して云ふべからざるの感を起せり折しも室內馥郁としてゑならぬ薰りしつ一個の美人絲の鬢は雲の如く皓き齒は雪を欺むき其の形容は梨花の雨に濕ひ海棠の露を含むが如く蹌々徐く步して机の前に坐を占しはこれなん唐土の楊妃か小野の小町も斯くやと想像ばかりにて有繫の民野もたゞ恍然として居たりける彼も亦た深窓に育ちし娘氣の最と愧かし氣なる風情にて暫時辭も出ざりしが少し頭を擡げつゝ谷間を出でし鶯の初音を囀づる聲音にて「妾は大和屋の娘國と申すもの元と貴君とは乃父が允せし云ひ号け過にし明治八年の夏の初めに結納の印を双方取替せたるばかりにて指折り算へば早や八歲浮架々々白駒を過せしも邪知な番頭や狡猾き手代が隨意な讒口を御爺さんに告げし上へ罪なき妾を非道な扱ひ觀物遊步は猶ほ更に何から何まで嚴かに制定を立てられ束縛られて峻酷き社會に焚く鹽の煙と共に立ち登る人の與論を聞くに付け袂の干く間さへも泣く音血を吐く時鳥雲井遙かに八九年長き月日を過さねば伉儷れぬ吾が身の赤心をお察しなされて下されト指し俯いて居たりける民野は莞爾と打ち笑て「成程卿が生れし年忘れもしない四月十四日卿の父御が公然と堅い約束せし事は世間の人も知つてゐる今更ら何う斯う詞を變へ卿を誡める

理由あらじ吾等が察するところによれば詞を食むべき謂れなし必定番頭の岩八や伊助山次の手代等が隱謀に出しことならん今は吾等も書生の身卿が心は酌み知れど躁急ては若しも過ちあらん兎角時節を待たれよと云ふを打ち消し「イエ〳〵たとひ書生の御身なりとも親の允せし兩人が中天下晴れての自主自由片時離れる義務はない時節を待てとは無情ぞへ「ハテ幾許條理のあるにもせよまゝにならぬは世の慣習親の威光は是非がない又如何程非道な番頭でも店を管る上へからはソウ蹈み付けにやァ出來ない譯け八年九年經る內には宜い分別も有うから短氣を起して後の世へ仇な浮名を流さぬようキツト心に誓はれよ「アイ御詞に從ひまして今暫くは忍耐も思ひの丈けは時々書信になりと互の胸「イヤ書信も此頃ろ油斷は出來ず大層店に注意るから「それでは貴君が面影を格子先から垣間見て「ム、それ程までに吾等の事をエヽ自由なければ死せしも同然ト覺へず怒りの大喝一聲四邊を見れば身は是れ机にすがりしまゝ渾身は汗に浸りつゝ南柯の一夢と覺にけり

本文にはこゝで中絕とも何とも斷はつてゐないが、越えて三月二日の「土陽新聞」十七號に、編輯長某氏が「過日來揭載し來れる春窓娘讀本の件についてお調を受けた、さうして右娘讀本は揭載差控へよとの申渡しゆへ殘念ながら暫く〳〵」といふ記事があるから、これで永久の中絕となつたものであらう。

此の小說は斷片ながら一寸注目すべきものである。文章も前二者の作よりぐつと砕けた人情本式となり、櫻田百華園の『自由廼錦袍』(十四年作)を承けた恰好になつてゐる。人情本式政治小說の常套作風として寓意を用ゐてゐるがそれとて、本文を一讀すれば容易に解讀されるものである。カムフラージュは、表面から解せば政治小說にならずにゐて、人名その他一寸した文句語句で政治的寓意をふくめてあるもので始めてカムフラージュといへるのだが、此の小說のやうに政治的意識を露骨に示したのでは格別カムフラージュの必要がない位である。だが前々の例によつて簡單に註記してみると、お英は英國、お米は米國であり、第一回は先進の自由主義國が日本の未開不自由に同情してゐ

る想像である。大和屋は日本、お國は明治の國民である。慈悲深い御主人といふのは、恐れ多いが明治大帝を表象したものであらう。番頭の岩八は岩倉具視、伊助は伊藤博文、山次は山縣有朋のことであらう。第二回は、明治の新政が初め明治大帝の御意志が徹底して結構だつたが、後番頭即ち大臣等が權を振ふに及んで弊政が生じ、財政も亂れて來たといふのである。こゝに一寸女權思想が現れてゐるのは、注意される。民野權太郎は勿論自由民權論者のことで、第三回は自由民權論の起源とその流行を諷したものであり、第四回は國民が早く民權伸張を得て國家の發展繁榮を期したい意を寓したもの、明治八年以來云々は、明治八年四月十日の聖詔によつて人民に立憲政體を許されたことを意味してゐるのである。

十四五年に於ける政治小說の先驅的作者は以上の三人の外多數あるが、かゝる先驅者中最も注目すべきは何といつても百華園主人櫻田百衞であり、宮崎夢柳は櫻田を繼いだ形になる。こゝに語つた半狂和田稻積は、丁度櫻田と宮崎の間に眞の一寸顏を出すことになるのである。(昭和九年七月書物展望第三十七號)

百華園主人櫻田百衞

一

百華園主人櫻田百衞——此の人については、私は百方手を盡して捜索したが、今なほ明治七年以前の傳記的事實は殆んど知ることが出來ない。生地も生年月日も詳しくは分からないが生れたのは安政六年（或は四年）で、生地は備前國、それも恐らく岡山であらうといふ。自ら志を立てたのか、何か機會があつたものか、夙に上京し（明治五六年頃）、牛乳配達などの勞役によつて辛うじて學資を得つゝ、英漢等の諸學を學んだ。それだけのことである。此の人の遺作の小説「自由廼錦袍（じいうのにしき）」には多少自叙傳的と思はれる分子があつて、それによると、若くして父を失つて母の手に生長したらしいこと、母に勵まされたらしいこと、學問好きだつたらしいこと等一二の推想的記事を附加することは出來るが、その推想が何の程度まで當つてゐるか、それは斷言出來ない。

明治七年は櫻田百衞が十六（或は十八）の時である。この年一月、前年十月の政變に辭職した板垣、副島、後藤、江藤の四參議は、小室信夫、古澤滋、岡本健三郎、由利公正以下の同志と共に愛國公黨なるものを組織し、一月十二日夜副島種臣の邸で本誓署名式をやつた。さうして十七日には有名な民選議院建白書を左院に呈出して民權自由の運動の火蓋を公然と切つた。この愛國公黨の本誓の席に集つた諸國の志士の中に、少年櫻田百衞も加つてゐたといふ。彼は、この席で志摩（鳥羽）の人栗原亮一と相知つた。栗原は櫻田より長ずること四歲（乃至二歲）、或は同志小松原英太郎、木庭繁、竹內正志等と苦學したり、或は中村敬宇の同人社に學んだりしてゐたが、英漢學に於いては優に人

の師たるに足る力があつた。櫻田は一見栗原の爲人と學識に服し、爾來これに師事兄事し、所請「腰巾着」となつて敎へを受けた。櫻田はこの時既に日本外史、十八史略を讀み、それに多少英學の素養があつたといふが、栗原から史記と英學を講義して貰つた。栗原の同志たる小松原、竹內、木庭等は皆岡山縣の人々である、さうしてその中には愛國公黨の加盟者たる人々もゐたかも知れない。櫻田を愛國公黨に結びつけ、栗原と結びつけるに至つたのは、此等先輩たる岡山人士の紹介によるものではなかつたかとも思ふが、今は尋ねる由がない。

翌八年、栗原は同人社の敎頭に擧げられたが、同九年敎職の傍ら木庭、小松原等と謀つて「草莽雜誌」を創刊（三月）して大に自由民權思想を鼓吹した。櫻田も、栗原から講義を聽く一方、書生の役目から學校の助手、雜誌の編輯までも手傳つた。だが此の雜誌は論旨過激のため間もなく禁止となり、身代りに發刊された「莽草雜誌」も三月ならずに禁止されたので、櫻田は暫時學事に專心することが出來た。

明治十年冬、栗原は敎職を辭し、同志竹內正志と共に高知に板垣退助を訪ふたが、この時櫻田も隨つたといふ。翌年四月愛國社再興の議が決して栗原は植木枝盛と南海、山陰、山陽に遊說することになつた。高知まで隨つたものとせば、この時も櫻田は栗原に從つたものか。或は故鄕の岡山にでも歸つて機をまつてゐたか、又は東京に戾つて苦學生活を始めたものか。その邊の消息か分からない。私の推測によると、此の時は櫻田は土佐行に隨はず東京に殘つてゐて苦學をつゞけてゐたのではなからうかと思ふ。此の頃（十一年頃）の東京の諸新聞に東備の書生櫻田某と署名した寄稿（主として政治論）が見えてゐるがこれが何うも此の櫻田百衞らしい匂ひがする。然し明瞭しない。十二年三月、栗原は竹內と共に大阪に浪華學舍といふものを設けて生徒の薰陶と國事の盡力を任とし、傍ら著譯に從事したがこの時櫻田は栗原に重用され、敎授その他種々努力するところがあつた。十三年秋病氣のため（喘息といふが恐らく肺患であつたらう）一時故鄕に歸つたが、十四年春病の癒えるのを待つて又上阪した。この間、病後の銷閑のため一

小說『阿國民造自由廼錦袍』を作つたといふ。

此の年八月、板垣退助は海南の草廬を出で、大阪を經て關東東北に遊んだ。この時栗原は學舍を他に讓り、板垣に從つて上京して自由黨結成のために奔走した。櫻田は栗原と別れ、先輩木庭等が讃岐高松で發行した「腰拔新聞」の操觚者として同地に赴き、熱心に民權自由を唱へたが、幾くもなく自由黨結黨（十月）の報を得、踴躍上京して、十一月後藤象二郎邸の大會に馳加はつた。（此の後藤邸の大會で彼は栗原の弟中村菊也と初めて交りを結んだ）。

先是櫻田は再度上阪して間もなく、栗原の紹介で但馬城ノ崎の人西村代野子と相知つた。代野子は夙に民權自由の思想に染み、この時も同志の女流と女子嚶鳴社といふものを組織するつもりで板垣に會ふべく上阪したのであつた。代野子は櫻田より數年の年長であつたが、兩人相得て深く傾投し、遂に栗原の媒介で約婚するに至つた。代野子は櫻田に伴つて高松に赴いたが、間もなく母の許諾を得るために故鄕に旅立つた。だが代野子が歸らないうちに、櫻田が急に上京することになつたので、櫻田は途次城ノ崎に立寄つて代野子母子に面して、約を新にして去つた。代野子は高松に殘つてゐた櫻田の母を手許に呼び迎へ、櫻田をして後顧の憂ひをなからしめた。

上京後の櫻田は、その政治的主義のため、又は衣食のため腰拔新聞その他に寄書し、（或は大會後高松へ一時歸つて退社後又上京したものかも知れない。腰拔は十五年三月退社）又新聞小說をも書いたといふが、今日この頃の文章が一篇として殘つてゐるものがない。十五年六月、自由黨がその言論機關として「自由新聞」を發刊するや、彼は栗原の推薦で記者の任に當り、初號から百華園主人の名で政治小說『西洋血潮小暴風』を掲げたが、時人の要求に合した爲めか、俄然人氣を得、殊に靑年志士、自由主義者の間の歡迎は華々しかつた。中には東洋の若きユーゴーといふ誇大な讃辭を浴せるものもあつた（一）。九月「繪入自由新聞」の創刊されるや、社友としてこれにも寄稿した。宮崎夢柳と相知り相許したのもこの前後のことである。だがこの頃は彼の持病が可成り進んで來たらしく、僅々半歳の間に

幾度か筆を抛てゝ藥餌に親まなければならなかつた。然かも病勢は衰へる樣子もなく、十五年の晩秋頃からは全く病床の人となつた。櫻田の師とも兄ともいふべき栗原亮一は此の年十一月板垣、後藤の一行に從つて洋行してしまつた。これより先き、櫻田は栗原の弟中村菊也（二）の家に同居してゐたが（十五年三月頃から）、彼の病が重るにつれて、菊也は彼を懇篤に介抱した。越えて十六年一月、親類の故障で久しく上京を許されずにゐた櫻田の妻代野子は、櫻田の同志吉田某から櫻田病氣危篤看病に來いといふ電報をうけとつた、だが代野子の上京せぬうちに櫻田の死期は迫つた。私はこゝで中村氏の書翰の劇的な一節を引用するのを禁ずることが出來ない。

（前略）十五年初秋の風の吹く頃から「ぜんそく」病が重くなつて資生堂の買藥も止め（モルヒネ）醫師にかゝる事となつた。新聞社も缺勤勝ちとなり、僅か二十圓也の給料では醫藥の料にも事を缺く。知人もあつたけれども何れも「月落黨」（註、金のない壯士連中）金策には困惑した。それで私は徹夜して家具を造り、夜店で賣つて金を調た事もある。死去二三日前から醫師の注意により、下座敷の六疊に移し、下女と替りあつて看護してゐた。死去の當日、朝食の牛乳とパンを少し取つたが、午後四時頃であつた。菊さんと手を握りしめ、はらはらと熱涙をこぼし永々お世話になつたが、モー駄目だ。二階にある硯と卷紙をおみつ（下女）に取りにやつてくれ玉へ、と息もたえだえである。

この悲痛な言葉にハツと胸をしめられたが、言はれるまゝに取り寄せてやると、震へる手に筆を取つて、——

月花に別れもおしき旅路かな

と辭世のつもり。

「君、心細い言をいひ給ふな、これからが君達の活動する世界だ」

と勵ましたが、返事はなくて間もなく顏色が蒼白となり眼を細めたので「泣く泣く末期の水を口にそゝぐと、それ

を一となめして事切れとなつた。

明治十六年一月十八日のことである。享年二十五(或は二十七)。翌十九日の繪入自由新聞は彼の死を弔つていふ、——

(前略)花耶花耶何ぞ其れ自由の風に先つて斯の如く短命なる一杯の黄土旅櫬長く埋み數點の青燐覊魂永く化す生きては遂に郷關に還る能はず死しては復た社會に作す可からず嗚呼々々哀い哉痛い哉

これは恐らくは宮崎夢柳の筆であらう。なほ彼は、十六年新に加賀金澤で發行する筈になつてゐた「北陸自由新聞」の記者として赴任することになつてゐたが、病死によつて沙汰止みとなつた。

註(一)歐米政理叢談第四十八號、櫻田の遺稿『自由廼錦袍』の廣告に、彼が生前にかういはれたといふことが見える。

註(二)中村菊也氏は鳥羽藩士中村武市の四男、兄の栗原亮一は武市の三男に當る。栗原氏が明治十年代自由民權の志士として奔走するに當り、中村氏も志を同じくしたが、二人共に飛び出しては家を支へる者がないので、中村氏は止まつて亮一をして自由に活動せしめることにした。かくて中村氏は自ら指物職を學び、父母扶養の任を負つて、兄に後顧の憂なからしめたのみならず、間接に自由黨の志士連中を後援したことが多々ある。車會黨一件や加波山事件等では嫌疑を受けて北海道落ちをしたこともある。國會開設後、意を政治に絕ち、後發奮して陸軍技手となり、技師に昇任。目下紀州新宮に隱退してゐる。上記櫻田百衞傳の資料は中村氏及び西村代野子遺族西村靜枝氏の示教に負ふものが多い。

二

櫻田は身體の惡かつたせゐもあつたか、同じ自由黨の中でも辯論は長技でなく、從つて公開の席で演說したことなど餘りなかつた(一)。だがなかなか慷慨悲憤の情熱家で、可成り過激な思想の持主ではあつたらしい。自由新聞記者が此人や固とに慷慨悲憤の壯士にしてまたと世間にあり難き人物なり(二)

と語つてゐるのや、彼の友宮崎夢柳が

百華園主人は天資慷慨悲憤の士なり、一片の精神自づから抑制する能はず(三)

と評してゐるのによつても、さうと想像はつくが、彼の著譯した小說を讀むに及んで如何にもと首肯される。明治十五年十月東京府下に現れた車會黨運動は(四)、仔細に調べてみると、自由黨の青年志士が政府側の彈壓に我慢が出來ず意識的計畫的に企てた反抗運動實行の第一着手ともいふべきものであるが、勞働者を煽動しその力を利用して露國の虛無黨か佛蘭西の共產黨流の手段で一種の社會改革を企圖した形跡が見える點で、日本の社會運動史上見逃すことの出來ないものである、この運動の指導方針の密議に與かつた自由黨志士は十一人あつたが、そのうちでも奧宮健之及び櫻田は重大な役目を演じ、この指導方針實行の第一段取として、奧宮と共に車夫の頭分三浦龜吉を說いて味方にしたのであつた(五)。だが既述のやうに櫻田は病身であつたので、餘り華々しい表面的活動が出來ず、そのうち奧宮等が入獄し、自分も病床を離れられぬことになつたので、此の運動も物にならずに終つた。この事實は、たゞに櫻田が一通りの悲憤慷慨家であることを實證してゐるのみではなく、並々ならぬそれだといふことをさへ明示してゐる。

元來櫻田にはロマンチックな情熱的な血液が多少とも遺傳してゐたらしい。彼はかつて自分の父のことを友人に語つて――

僕の父は變り者で、門附娘に戀をした

といつたといふ(六)。又彼の母は殘年を岡山金光敎會の八雲琴師匠として送つたといふ。かゝる事實は多少とも櫻田の遺傳を語つては居らぬか。櫻田が政治小說を書いたのは、勿論當時の政治的事情が彼の胸に釀成した鬱憤に動かされるところが多かつたであらう、だが政治的動機がなくとも、彼は小說家に成り得たかも知れない。彼は平居文學の嗜好が深く、死に至るまで、草双紙戲作の小說類を枕頭から離さなかつたといふ。又極めて筆まめな性質で、始終論

文小說の如きものを諸方の新聞に投寄してゐたといふ(七)。これは主義のため、衣食のためは勿論であらうが、然し一つは自ら一種の發想慾表現慾にかられたものであらう。漢詩の方にはさう造詣がなかつたものか遺作は殘つてゐないが、和歌・俳句は一通りのものながら一二傳はつてゐる。

秋の月戀しき人の面影を
　見るが如くに思はるゝかな

これは十五年の秋、病やゝ進んだ頃但馬の空を望んでよんだもの。

打水の座敷騷がすそゞろかな

これは十五年夏、來客中(夢柳とか)、庭に打水した小僧の杓がはねて、客の夏羽織をぬらしたのを叱したものといふ。

その他辭世の句は前に述べた通りである。

趣味として、櫻田は當時の靑年志士らしく詩吟劍舞のやうな固くるしいものも好きであり、友人と小宴の席などでもよく腰間秋水鐵可斷とやつたといふが、又一面なかなか粹人らしいところもあり、端唄、都々逸などにも巧みであつた。だがその最も好んだのが——

よしや此身はどうなり果てよが
　國に自由がのこるなら
よしや日本は苦熱の地でも
　今に自由の風が吹く

などといふよしや武士であつたとは、流石に時代と爲人とが偲ばれる。

註(一) 明治十五年七月十六日淺草井生村樓でやつた國友會政談討論演說會で櫻田は「奢美ノ害」といふ題で一席やつてゐる。

又同じ二十九日同所で「遺産論」といふ題で一席やつてゐる。私の今のところ知つてゐるのは、この二席だけである。

註（二）明治十六年一月十九日、自由新聞一六一號、櫻田百衞死去記事

註（三）宮崎夢柳『鮮血の花』緒言（明治十七年五月十一日、自由燈第一號）

註（四）明治十五年の車會黨運動については、昭和七年十一月號「日本國民」に私が詳しく書いて置いた。

註（五）田岡嶺雲『明治叛臣傳』の中、奥宮健之の項（一五〇頁）參照

註（六）中村菊也氏よりの書翰

註（七）此の前後の記事は、主として中村氏の示教された材料による。

三

櫻田百衞の文章で、今日明白にさうとして殘つてゐるものは、前記の小説二編、それから明治十五年九月一日繪入自由新聞第一號所載の發刊の辭、これだけである。他は前にも述べた如く、今日その蹤跡を尋ね難い。少くとも自由、繪入自由等の新聞には雜文乃至論説の如きものが、まだ幾干かあるに違ひないと思ふが、何れをそれと指摘しかねるのは、遺憾である。繪入新聞第一號の發刊の辭は甚だしい長文のものでもなく、且つ櫻田の爲人氣象の一斑がわかると思ふから全文を左に掲げて置かう。

○繪入自由新聞此不自由社會に生る　　百華園手稿

維時明治十有五年秋九月第一日拂曉自由豪放不羈無頼なる繪入新聞子吾小日本の東京に產る這兒や頗ぶる壯健生れ乍らにして能く世事と風月を談す阿嬢(はゝ)の會計に安抱(いだか)れ阿爺(ちゝ)の記者に問曰(とふて)く本邦(このくに)は是自由鄕にして人民は皆固有の權利を持する歟阿爺此言を聽いて顏色茶如浩愁歎息(あをざめといきをつ)き首を俛(たれ)て應へて謂らく否々左樣芽出たき國柄には非ざる也獨り

吾國のみに止まらず宇內の万邦に生息る無數の蒼生は都て人造の羈絆に縛られ積漸の陋習に瞞され貴重なる自主自由の權利は曾て夢にだも見し事なく 少數なる痴子の壓制を受け蠢爾として 豕羊と群をなす 耳その中些しく人權の重んず可き所以を悟りたる者は佛蘭西合衆國及び社會黨の人民のみ他は歐米諸國の民と雖ども蓋ふに未だ眞正の自由は知ざるなり況んや東洋の孤島をや神風暴き蘆原をや僅々たる學者諸生若くは地方の有志家とか名くる輩は聊さか之が眞理を解し得たるが如きも多數なる下等の衆庶に至りては蒙昧蠻夷依然たる亞細亞の舊愚民にして更に人間らしき形情を觀ず隨つて之を御むる政治屋も亦頗ぶる〇〇なれば硯海如何に浪高く舌頭甚麼に滑らかなるも自己の所存を具さに談論筆記して以て斯民を教導る能はず實に不自由極まる社會にして悲愴の娑婆と謂ざる可らず噫々自由兒にして這土に產る汝が不幸も亦憐れむべき哉繪入子曰く否決して不幸に非ず是卽はち兒が特に好んで本邦に生出し將來に爲すあらんとする所以なり請ふ其說を述ん今夫が阿爺が所謂ろの痴子文盲なる下等社會を以て假に荒蕪たる田野に譬へ之に向つて〇〇或ひは國會等の種子を蒔き而して其結果の美ならんことを望むも豈得べけん乎故に兒は身を以つて鍬鋤となし下等田地の開墾に從事し耕耘成て後眞正なる平權主義の苗を植つけ急成の實熟を目擊んと欲す此故に社會旣に錦玉に人民皆自由なれば兒は乃はち用なきも若これに反して政治擅制に黎民奴隷なれば地球上往處ろとして兒の必要ならざるは無矣兩慈幸はひに兒の不祥を傷む休れと此に於て記者掌を拍て嘻悅び肆に盃を揚げ肴を盛て一門の男女を招き大に繪入兒の誕生を祝す宴酣なる時繪入子俄かに起て天の八方を睥睨み傲然聲を放つて勅げて曰く嗚呼汝三千有餘萬の同胞衆庶よ苟しくも汝等にして萬物の長たる魂魄あらば速やかに來つて予と偕に事物の眞理を講究し固有の權利を復し天賦の自由を得て以て眞誠の人間社會に遊べ久しく予が心襟を惱ます勿れ

いさゝか戲文調を取り入れたのは、此の新聞の性質を斟酌して調子を下げたものであらうか、この論旨から察して櫻田が如何なる思想の持主だつたかは想像されやう。

四

櫻田の小說『阿國民造自由廼錦袍』は十六年九月、卽ち彼の死後に刊行されたものであるが、彼の序によると十三年秋から十四年春まで鄕里で病氣保養してゐた間に書いたものだといふ。恐らく十四年の春に出來たものに違ひない。

此の小說に筆を着けた櫻田には、それ相當の抱負がなくもなかつた。宮崎夢柳はこの小說に序して——

> 余が友百華園主人玆に感ずるところあり嘗て自から東洋政治社會の稗史小說家たらんとす云々

と述べてゐるが、これは明かに櫻田の抱負を裏書したものであらう。櫻田自身も、この頃の此の種の著作の例になく卷頭に自家の小說觀を說いて、自分の抱負の程を暗示させてゐる。大要に曰く、從來の學者思想家（一般にいつて知識階級）は情史卽ち小說といふものは正しい敎への裨補にはならぬのみか、男女の心を亂す毒藥だと考へてゐる、だがこれは間違つた考へである。

> 凡そこゝろを切ならしめ思想を感ぜしむるものは、情史に優れるものは鮮矣。人の心を亂す所以もこの勢力のあればなり。

小說の職能は感情の移傳にある。さうしてこの移傳の勢力は極めて强い。だからこそ小說の職能を知りこれを正しく利用せば必ず効果がある。

> 今這勢力を。うまく用ひば甘い實を。結ぶは必ず疑ひなし。往昔佛國のボルテールや、此間まで英國の宰相たりしベンジャミン、ヂスレリーなどいふ大家も。皆この情史を著はして世を醫し俗を諷されたり

これこそ人民啓蒙社會改造の好方便である。人間の敎へは必ずしも經典や道學書にのみあるのではない。

> 且つ古の倭歌に春雨のそれとわきては降ねども受る草木の已が種々。と詠にしごとく。意を配て。聞ば花謠や唄々

逸の文句の中にも四書五經より貴重も訓誡は有ものなれば。善も惡きも看官の。判斷に差別はあるぞかし。情史に含る利益より生ずる僅の弊害を見て。禁ずべしなど喋々するは。學者の迂濶といはまくのみ。
櫻田は更に自分の此の小說の目的についてから暗示してゐる。
余が這小說をものにしたるもヂスレリー、ボルテールには及ばねど情と貞の何物なるを聊か女兒等に變則で諭さんための趣向か否か。この冊子を大尾まで。讀なば必ず曉るべし
「變則で」の三字に意味がこめてあると見なくてはならぬ。

此等の小說觀なり小說効用論なりは極漠然としたお粗末なもので、今日からいへば恰んど議論になつてゐないといつても可いぐらゐであるが、それでも明治十四年當時の文壇人たる戲作者達に比較すると、櫻田の見地は流石に淸新さと幾分の尖銳さがある。感情の移傳を小說の第一の職能と見たところなどは烱眼といつて可い。ボルテールやヂスレリーを引例に出したのでも、彼の考へてゐるところが從來の馬琴一流の勸善懲惡小說とは違ふことを示してゐる。時人に比して、櫻田の小說の理解が幾分深く細やかである。兎もあれ、西洋の實例に刺戟されて、自分で意識的に政治小說家とならうと志したのは、櫻田百衞を以つて最初とする。

だがこれだけの抱負と理解の下に出來上つた此の小說は、全く眼高手低、小說としては決して傑れたものではない。此の點で、この時代の戲作者達の腕前と五十步百步、むしろそれ以下かも知れない。趣向の立て方は、根本的にいつて舊式な人情本的であり、才子佳人の三角關係とそれにからむ「情と貞」を描いた寫實的人情小說と受け取れる。『自由廼錦袍』といふ題名からして一見政治小說たることを示してゐる上、作中の人物の姓名やその言動會話等によつて

政治的寓意のあることは勿論推察がつくが、その寓意の隱微である割に人情本式濃味が強すぎるので、流石に夢柳も、序で用心して讀めと斷つてある。寫實的戀愛葛藤に政治的諷刺を寓する行き方は、戸田欽堂の『情海波瀾』と同じことであるが、櫻田の小說の方は文章までも純然たる人情本式である。これは一面小說に對する櫻田の嗜好と造詣を語るものであらう。夢柳が漢文漢詩や支那小說から力を得てゐるのと好い對象を成してゐる。勿論此の小說にも、政治的寓意以外取柄といふ程ではなくとも、個性特徵といつたやうなものが强いて探せばある。それは惡ずれのしない素人らしい生眞面目さ、自叙的分子の織込みによる實感的新味、作者の視野の廣さ（當時としての）から來る社會批評めくものゝ片鱗、これ等が擧げられやう。

此の小說の荒筋をいへば——

主人公草野民造の父は筑紫某地の百姓であつたが維新の時發奮して農兵となり、功によつて士官まで進んだが五稜廓の役に討死した。民造は母の手に人と成つたが、父の性をうけて直情徑行、甚だ不正を惡み義に勇む少年となる。十二の時、敎師某に伴はれて東京に修業に上る。こゝ迄が此の小說の前置きである。本文は十餘年を一足飛びにし、民造今は二十二三、顯官大内閣太夫の食客となつてゐる。病後の民造がその多病の身と「斷捨難き一條の大節」（民權自由主義）のため今なほ故鄕の母に安心させかねてゐることを述懷して淚を飮むところ、淡いながら假空とは思へない感情が籠つてゐる。次でにいふが、少年民造が上京の際母から訓戒されるところもさうである。その他早く父を失つて母の手で生長したこと、夙に上京して苦學したこと、明治十四年民造二十二三といふこと（櫻田は二十三）、平生多病だつたらしいことなど、恐らく偶然の思ひ附きではなく、前に推想した如き自叙的分子があるのではなからうか。

大内家の女中阿國は日頃民造を慕つて眞心を盡してゐたが、惡母に迫られて大内家を去る、去る前夜、民造の許に忍んで來て、死をもつて民造に迫り、將來の約束をさせて了ふ。一方大内の一女阿權も民造に死ぬ程の戀を感じてゐ

る。乳母に智慧をかりた阿權は一日民造に胸の思を打ち明けるが、民造はお國との約束がある上、阿權の身が、大内夫妻の考へでもう別懇の薩川蟹丸に片付けることに定められてゐるのを知つてゐるので、相手にしない。阿權がなほ思ひきれず、父に頼めば許してくれるからといふが、民造は義としてそんな事が出來ないと答へる。そこへ阿權の婿と自任する薩川蟹丸が來會して、二人の仲を邪推し、民造を罵る。こゝで薩川は、民造等の唱へてゐる自由民權論を書生論といひ、政府に世話ばかりやかせずに、早く官權に阿附して衣食の道にありつけといふ。

思ひを殘して去つた阿權は、いよいよ明春早々薩川に嫁入のことを母から言渡される。阿權は心に承知しないが、母を安心させるため假りに肯づく。民造は、今は藝妓になつた阿國からの手紙で密會し、久しぶりで積る話をする。

いはゞかういふ極めて單純なものである。人物の性格も言動も幾分の寫實的新味はあるが勿論根本的には梅暦流の人情本的人物を殆んど一歩も出てゐない。殊に主人公の言動が一見餘りに丹次郎式好男子で、到底自由の志士とは考へられぬが、『情海波瀾』の民次がブルジョア階級の一典型であるに對し、これは農民出のインテリゲンチヤである點で『雪中梅』の國野基の先驅と見れば破顔されるところがある。時代的背景とか何とかいふ程の事々しいものもない、たゞ人物の會話の際に、當代社會への批評めくものぐらゐは口にさせてゐる（例へば第四章六十一頁以下、時代と女性の覺醒を論じたところ）。兎にかく本文の一節を引用して置かう。

（前略）國「マア永ひ目で前途を見ていて被下如何致ますかそれに能平民〳〵つて被仰けれ共其平民が一ち番貴重いのではございませんか（中略）民「もし永く其口を失忘ないで私と偕老にでも成と生涯難儀だから實に先刻もいふ通り世間並の沙汰じやアないョ　國「それは貴君が他の卑屈な學者や諸生さんのやうに誰にでも狐媚て電信（縁故や手引）斗り求めたりなにか被成ないで國のため世の爲め命を的に民權をお主張遊すと一般で奴家も何も存じません癖にさういふ見識の高尙い大丈夫なご氣性の方に何致して衣服は襤褸でも精神に自由の錦袍を着て世を渡ります方が

他の女(ひと)の金に身を汚して絹布(きぬ)を被て暮すのより大變愉快なのでございます(下略)(一)

此の小說に政治的寓意のあることは明白だが、その政治的寓意の何かといふことは、さう明確に指剔しかねる。それは、此の寓意が極めて隱微でありエリューージヴで、容易に把握されないからだ。それには作中の人物の姓名から判じてその人物が何を表示してゐるかを見定め、その人物の言動と此の小說の物語の進展とを照合してそれを讀解くより仕方がない。

私解によると、民造は日本人民、阿國は國家、大內は內閣卽ち政府、阿權は政權、薩川は薩長藩閥乃至吏黨、大內夫人お警は警察力を意味する。これを物語の筋に照すと、先づ民造の父の經歷は、維新の變革と共に人民が頭を擡げて貴士族と同權になつたといふ暗示である。民右衞門は舊日本の人民、民造は新日本の人民と見られても可い。民造と阿國とが將來を約束するのは、國家がやがて人民の參政によつて幸福を得る寓意であらう。民造が大內の食客となり、阿國が女中となつてゐるのは、差し向きのところ、人民も國家も政府の恩惠的待遇の下に勝手にされてゐるより仕方がないといふ謎か。阿權が民造を慕ふのは、政權は當然人民のものといふ意、阿權が民造に賴んで、早く父に自分を貰ふやうに申出してくれといつて、民造がそれを拒むのは、哀願的態度に出たなら人民に參政權を與へられるかも知れぬが、然しさういふ卑屈なことはせぬといふ心であらう。又一意國のために盡して政權の如きは眼中にないといふ意氣もこめてある。大內夫妻が阿權を抑へて薩川に嫁にやることは、當時の政府が警察力を利用して政權を握り、藩閥と利福を分ちあつてゐることを諷刺したものと見られる。

要するに、今こそ人民と國家は政治と藩閥の自由勝手にされてゐるが、維新以來當然の勢ひとして、將來は自主自由の幸福な境涯に到ることが出來るといふ、これが此の小說の政治的寓意である。一面、當時の政治界の現勢を諷刺

し、他面將來の政治界の機運を暗示したものだが、政府吏黨に對する反抗意識は多少見えてゐても、總じて諷刺的暗示的、希望的、豫言的、期待的である點は、此の頃までの先驅的政治小說に通じた特徵の一つを示してゐる。革命的悲憤慷慨や反抗のための政府反抗が露骨に政治小說に織込まれるのは、明治十五年以後である。これは何といつても此の頃までは政府の彈壓や官民の軋轢がまだまだ十五年以後程苛辣でないことを物語つてゐる。趣向も寓意も人物も『情海波瀾』に多少とも似てゐるといひ得るが、たゞその何れの點に於いても一步乃至數步進めてゐることも事實である。殊に『情海波瀾』では權力（阿權）が唯一の對象物になつてゐたのに、これでは國家（阿國）が對象となつてゐる、こゝに自由民權運動への時人の理解の深さを增した點が反映されてゐると見て可からう。人物の性格の或る部分の如き、又全體の調子そのものが、何處となく『雪中梅』、『花間鶯』の先驅的作品たるかの印象を與へるのは事實である。

註（一）第四章六一―六八頁の間を省略して引用。

五

『佛國革命起源西洋血潮小暴風（にしのうみちしほのこあらし）』はもと明治十五年自由新聞に掲げられたもの、櫻田はこの小說を十八章まで草し未完のまま殘して逝いた。僅々十八章が斷續約半歲（六月―十一月）に亘つたのは、一に彼の多病の爲めである。第十六章までは同年十二月第壹編として出版されたが、翌年一月發行禁止となつた。十七年五月『自由燈』が創刊されるに及んで、宮崎夢柳は此の編の未完に終つてゐるのを遺憾とし、『佛蘭西太平記鮮血の花（ちしほのはな）』と題して續筆して五十餘回に及んだが又々未完に終つた。

此の小說は『自由乃凱歌』と共に、明治初期の政治小說中代表的なもの〻一つとして、文學史などに往々名を擧げ

られてゐるが、これは創作ではなくて西洋小說の意譯である。原作はフランスの大デュマの長編歷史小說『一醫師の回想錄』(The Memoirs of a Physician)で、意譯の筆はその第一部ともいふべきジョセフ・バルサモー篇の半分强に及んでゐる。

この小說の原作は元來何ういふものかといふに、彼の十八世紀末のフランス大革命を主題とした幾編かのデュマの歷史小說中丁度發端の部分に當り、怪人バルサモーの暗中飛躍と天才ルソオの哲學精神を背景としてルイ十五世宮廷の腐敗陰謀暗鬪を寫し、大革命の序幕を描いてみせたもので、一醫師云々と題してあるのは、一醫師セバスチアン・ギルベルト(ジルベール)の經歷が中心に織り込まれてゐるからである。

一七七〇年五月六日、トンネール山の古城の廢址で見光主義者(「イルミネートオ」の譯語、共和主義的自由思想家の祕密會合がある。會衆は世界各地の共和主義者の代表たる人々である。會合の目的は壓制政治を轉覆し、被壓制者を解放するにある。怪人ジョセフ・バルサモーは何處からともなく來てこれに加はる。だがその智辯大膽のために直に大先達と仰がれ、會議の牛耳を執る。各國の同志は各々此の祕密會の目的を死をもつて實行することを決議し、分擔を定めて分れる。バルサモーはフランスに革命を起す大任を負ふ。

八日の後、バルサモーはその老師匠たるアラビヤ人アルソタスと妻のロレンツアを伴つて遙々パリーに赴く途中ナンシイの近くで大雷雨に逢ふ。その混雜の間に妻と師匠も分れ分れになり、バルサモーだけはその折邂逅した若者ギルベルトの案內でタベルネイ男爵の館に客となる。ギルベルトはタベルネイ家の令孃アンドレーの乳母の子で、母の死後書生兼下僕の役をつとめてゐるのであるが、熱烈な自由主義者でルソオの民約論の愛讀者であり、主人の壓制と吝嗇を憤つてゐる。しかも一方又、アンドレーに深い人知れぬ戀を感じてゐるのである。翌日、思ひがけなくもオーストリアのマリイ・アントアネットが、フランスの皇太子と成婚するためパリに急ぐ途中、タベルネイの館に立ち寄

る。バルサモーは男爵を操つて自分をマリイ・アントアネットに謁見せしめる。アントアネットは彼が占星術に通じてゐる由を聞いて自分の過去未來を占はせる。だが未來を占はせて、强ひて自分の死樣を見せて貰ふや、餘りの恐ろしさに卒倒する。バルサモーは直に姿を晦ます。お附の人々は後を追ふ。殊にタベルネイの長男で少壯士官のヒリップが第一に追跡する。ヒリップはアントアネットのフランス入國以來ストラスブルグから前驅をして來たのである。アントアネットは、男爵及びアンドレーとその侍女ニコールをも一行に加へて巴里に伴ふ恩命を傳へる。兎角してゐるうちにも、フランス宮廷では國王ルイ十五世の寵妾デュバリ伯爵夫人を中心に反アントアネット陰謀が進行してゐるので、時の宰相ショアジウル夫人からその旨を認めた密書が屆いて、アントアネットを急きたてる。アントアネットは男爵一行に後から續くやうに命じて急いで出立する。かくて男爵とアンドレーの一行は大急ぎで仕度してパリに向ふことになる。さうしてギルベルトだけは邸の管理を命ぜられて後に殘されることになるが、勿論ギルベルトはアンドレーと離れて一人殘る氣がないので、密かに間道から徒步で男爵一行の馬車を追つて、これもパリに向ふ。だがその途中、旅費の缺乏から、空腹のために路傍に絕息してゐたのを、折柄通りかゝつた一貴女に助けられ、その馬車に同乘してパリに赴く。此の貴女はアントアネットの敵方たるデュバリの腹心のションといふ女性だつたのである。

この物語はまだまだ續くが、櫻田の意譯したといふ部分に關する限り、以上で足りる。以上の梗概は原作によつたのだが、これを櫻田の意譯したものと對照すると、櫻田の意譯の如何なるものかといふことが極めて明白にわかる。

櫻田の意譯では、全編の發端たるトンネール山廢墟の祕密會議の場が比較的詳しく、バルサモーが山を下りてからが甚しい省略に從つてゐる。今假にこれを前半後半と呼ぶことにして、前半は原作に對照して比較的詳しいばかりでなく、原作に無い部分が可成り多い。殊に相當猛烈な自主自由熱を吐露してゐるところがさうである。例へば、バルサモーが祕密會場を指して山を登る途中、妖怪に化けた同志が現れて、わざとバルサモーの大望を嘲き立てゝ罵しる

ところがある、櫻田はその時のバルサモーの心をかう語つてゐる。――

說得て甚だ妙ならぬ牽强附會の腐敗論は。聽も懶し吾輩は。不識や痩軀鮮血を。肥料となして壓制の。蕪田を耕やし自由の幹に常も春なる風薫ばしく花を開かせ果を結せ。四千萬の生靈を。塗炭に救ひ固有の權利を復さしむるを畢究の。責任となし自家のみ。昨死の盟ひを金鐵にたて。渝らぬ例しを海山に。比べし者をと明々地に言ねど察了き憤怒の色を。眼瞼に含み掌を扛て。不服の旨を示しつゝ(一)

かういふ文句は原作には全然ない。又祕密會議の席で、會頭が新來者のバルサモーをして誓詞に血判させるところがある。――

先左の誓詞に血判あれと礫刑に甕りし神使(耶蘇)の名を。ロの中に唱へつゝ差出したる文に曰く。第一條〇〇〇第二條吾黨ハ吾黨ノ志望ヲ達センガ爲メ生命財産ヲ抛ツベシ第三條吾黨ハ〇〇〇〇〇〇〇〇吾黨ノ會議ニテ樹立タル眞誠ノ憲法ヲ遵守スベシ第四條〇〇第五條苟クモ吾黨員タル者ハ親子兄孫姉妹夫婦師弟朋友恩人等ノ俗縁ヲ斷チ事ニ臨デ一切顧慮スル所ナカルベシ第六條吾黨員ニシテ密事ヲ漏ス者アルトキハ直ニ斬ニ處スベシ第七條吾黨名ヲ鮮血革命黨ト稱ス第八條吾黨ハ如何ナル艱難ニ遭遇シ又幾百載ヲ經ルト雖モ上條ノ企望ヲ達セザル以上ハ決シテ解散セザルベシと讀下して旅人は小刀を以て指を刺し。掟の如くに血判成了り云々(二)

此の誓詞の文句も第五、第六の兩條を除くと原作のとは全然違つてゐる。次でバルサモーが代つて會頭となつて全會衆に大演說をするところであるが、原作にはバルサモーが自分の過去を說き自己の偉大を讃美する部分が、この譯では恐らく猛烈な民權自由論的革命論となつてゐる(三)。例文略す。

以上は顯著な例を二三擧げたのであるが、比較的小さな出來事の彼是顚倒してゐる例は幾らもある（例へばナンシイ近くの大雷雨のとき、原作ではバルサモー自身が氣絶することになつてゐるが、櫻田の譯ではバルサモーの妻が氣絶することになつてゐる。第一此のバルサモーの妻のロレンツアのことが原作では長々と出てゐるのに、櫻田の譯には名さへ出てない）。又時間の點も、譯の方では紛亂してゐる。卽ち譯では大雷雨は下山の翌日のやうになつてゐるが原作では八日後である、譯ではバルサモーがタベルネイ家に數日ゐたやうに記してゐるが事實は只一夜であり、譯ではアントアネットの出發、タベルネイ一家の出發、ギルベルトの出奔がそれぞれ數日の間隔ある出來事になつてゐるが、原作では同一日の出來事なのである。又人名の取違へもある。卽ちアントアネットに密書を送つてその旅程を急がせるのは、譯ではリシュリユーとなつてゐるが、事實はその反對のショアジウル一味から來たもの等である。

これが櫻田の所謂意譯、批評家の所謂明治初期の豪傑譯なるものゝ本體である。譯とは名のみで、何も原作原著者を紹介するのが本意なのではない、寧ろ或る原作、或る原著者に托し、譯といふカムフラージュの下に、鬱積した感情を存分に爆發させようといふのが目的なのである。だからいくら原作とは遠いものになつても、いはゞ原作を骨子とし改作物、原作に近い改作小說といふやうな非難を受けても、成るだけ自家の自由民權思想、反政府思想、乃至は革命思想を宣傳すべく都合のよいものにしたいのである。櫻田の場合でいへば、デユマを忠實に紹介するつもりは毛頭ない、たゞ此の小說がデユマの革命小說だといふ事實を利用し、これに托して自黨及自家の政治思想を宣傳することさへ出來れば、それで滿足なのである。いな、デユマを忠實に紹介したら、却つて宣傳効果を薄めたかも知れない。それは、デユマの同情はいつも王黨側のヒイロー達にあるからである。此の點で櫻田や宮崎夢柳などの政治小說の飜譯なるものは、事實著作同樣に扱はれるのが當然だといつて可い。

此の『血潮小暴風（ちしほのこあらし）』は片々たる小冊だが、自由黨の思想精神を具現した最初の小說として、『自由黨史』にいはゆる

革命文學の尖端に立つものとして、單なる飜譯小說といふ以外に重要な史的意義がある。この小說や『自由乃凱歌』が當時の青年、殊に自由黨派の壯士達に如何に大きな感激を與へたかといふことは、當時の政治運動に携つた故老が口を揃へて首肯してゐる(四)。それは一つは、此の小說が自由黨の代表言論機關たる自由新聞に發表されたので、黨の指導精神を具現してゐるものと認められた故もあつたらう。此の小說の影響の具體化したかと思はれるものを一二擧げると、見光又は見光主義といふ語が、この後自由黨の志士の間に大に流行し、現に自由燈(十七年)の發行所の如きはこれを社名にした。又此の小說が如何に同黨志士の反政府的思想を刺戟したに違ひないかと思はれるのは、十五年の末に起つた福島事件で河野廣中、平島松尾、花香恭次郎、愛澤寧堅、田母野秀顯、澤田清之助等六名を斷罪する根據となつた血判盟約書(五)なるものと、此の小說中の鮮血革命黨の誓詞(前記引用)なるものが如何に酷似してゐるかを見ても、想察されやう。

此の小說を『自由廼錦袍』と比較して見ると、實に飛躍的な思想態度の相違がある。思ふに此の一年半の間には幾多の重大な政治的出來事が相續いて起つた。十四年十月十二日には國會開設の大詔の降下があり、引續いて內閣の大變動(十月二十日)、自由黨の結成(十月二十九日)、十五年に入つて東洋議政會の發起(二月十二日)、伊藤博文の歐洲行(憲法制度調査のため)(二月二十七日)、改進黨の組織(三月十六日)、帝政黨の組織(三月十八日)等があつたが、政府が彈壓對抗策を講ずるにつれて、民間志士の政府反抗熱も高まらざるを得なかつた。殊に自由黨の人々に對して何より大きなショックを與へたものは十五年四月の板垣退助遭難事件であつた。此の事件以後自由派の思想言動が何といつても目立つて赤い過激な革命的なものになつたことを否み難い。更に又思想的に自由黨の主張をバックしたものに東洋自由新聞(十四年三月創刊)、政理叢談(十五年二月創刊)があり、共に青年政客の燃え易い心を純なフランス流の政治理想で煽つた。殊に政理叢談に中江兆民が譯載したルソオの『民約論』(『民約譯解』)は爾後自由黨の政治活

動の指導理論となつた(六)。この間の消息が、『自由廼錦袍』の希望的、豫言的、期待的な態度が『血潮小暴風』の意識的反抗、革命的思想鼓吹に飛躍的に變つた理由を說明して餘りがあらう。

註(一)『西洋血潮小暴風』第二回七頁

註(二)同　第三回十二――十三頁

註(三)同　第五回二四――二六頁

註(四)二三例を擧ぐると加藤平四郞、伊藤仁太郞、三田村玄龍(鳶魚)の如き人々の直話。少壯時の三田村氏が自由黨員として政治運動をしたことは知る人が少ない。

註(五)此の盟約の文章はいろいろに傳はつてゐるが、內容は大體同じである。今『自由黨史』(下卷一三――一四頁)に揭げてあるものを引いて置く。

第一　吾等は自由の公敵たる擅制政府を顚覆し公議政體を建立するを以て任となす

第二　吾黨は吾黨の目的を達するが爲め生命財產を拋ち恩愛の繫繩を絕ち事に臨みて一切顧慮する所なかるべし

第三　吾黨は吾黨の會議に於て議決せる憲法を遵守し倶に同心一體の働をなすべし

第四　吾黨は吾黨の志望を達せざる間は如何なる艱難に遭遇し又幾年月を經過するも必ず解散せざるべし

第五　吾黨の密事を漏し及誓詞に背戻する者ある時には直に自刄せしむべし

右五條の誓約は吾黨の死を以て決行すべきもの也云々。

註(六)政理叢談第一號(十五年二月)から譯載されてゐるフランス革命史の演義體のものに『西洋血汐の灘』といふのがある。櫻田はこの篇の題に眞似たものかも知れない。

六

明治文學史上、政治小說の華やかなる頃を現出するのは、いはゆる革命文學以後である。明治十四五年以後政府の彈壓と民間の反抗運動が白熱的に軋轢して來るにつれて、政治小說なるものが世人の意識に次第に確乎とした地歩を占めて來る。此の革命文學のトップを切つて、僅か短かい時間であつたにせよ東洋のヤング・ユーゴーといふ人氣を負つたのが我が百華園主人櫻田百衞であつた。櫻田に繼いで、否なむしろ櫻田を大成して革命文學の花形となつたのが宮崎夢柳である。人氣の多少は兎に角、櫻田が、漠然とした粗笨なものだが獨自の小說觀をもつてゐたこと、小說の本質勢力を幾分正當に理解してゐたこと、意識的に小說の力を政治思想の傳播に利用し、眞劍に政治小說家として起たうと努力した第一人者であること等々、考へて來ると、夭折した櫻田のさゝやかな事業に文學史上幾分かの生命を認めてやりたい氣持になるのは、ひとり私の贔屓心の所爲ばかりでもあるまい。

櫻田と私との因緣は相當長い。

私は明治初期飜譯文學の研究に沒頭してゐたころ櫻田の名を知り、彼の小說に興味を感じて、何とはなくどんな經歷の人間かを知りたくなつた。それで先輩知友の中その方面のことを知つてゐさうな人達に何度となく尋ねてみたものである。だが誰一人として答へてくれる人がなかつた。第一櫻田だの百華園主人だのといふ名を知らぬ人が多かつた。私は長い間、『西洋血潮小暴風』の奧附で彼が岡山縣の人であるといふことだけを知るに止まつてゐたのである。

そのうちに私は政治小說に手を伸し始めたが、こゝでも私は櫻田を調べる必要に出會つた。私は更に樣々な方面の人々に彼のことを聞いた。だがやはり、はつきりした事は誰も答へてくれなかつた。私は誰も答へてくれる人がなければないだけ、餘計この櫻田百衞なる人間に興味と同情を感じて來た。それでこれは一つ自分で彼の傳記や作物を徹底的に調べてみようと決心したのである。作物は苦もなく入手することが出來たが、傳記の方は容易に調べる手蔓が

得られなかつた。

私は彼が岡山縣人だといふ點を便りに、先づ岡山の山陽新報主筆杉山榮氏に賴んで土地の故老などに櫻田に關することが何か分かるまいかと訊ねて貰つた。杉山氏は新聞を通じて又は個人的に種々盡力して下すつたが得るところが全くなかつた。私もこれには落膽して、こんな好事家めく仕事を思ひ切らうかとした。或る日他の必要があつて『自由黨史』を讀んでゐると、その上卷六七九頁に至つて「自由新聞」の關係者中に櫻田の名を發見した。私の希望はこれで新にされた。これは古い自由黨關係の人に聞けばわかるなと思つたのである。それで私は明治文化研究會の席で一度か顏見知りになつた昔の自由黨幹事加藤平四郎氏（本年三月死去）に手紙を上げて櫻田のことを御存じはないかと尋ねた。殊に自由黨員である上に、加藤氏も岡山縣人といふから、何か手答へがあるだらうと思つてゐると、果然極めて漠然と種々な知識を得ることが出來た、櫻田が栗原亮一の腰巾着であつたこと、中村敬宇の同人社に學んだらしいこと、櫻田には女民權家の女丈夫らしい妻君があつたこと等々。さうしてこの妻君はまだ生きてゐるかも知れぬから、その邊の事は栗原氏の未亡人に尋ねたらよろしからうといふので同未亡人の宿所を敎へて下すつた。

私は急いで栗原氏未亡人に手紙を上げて、櫻田の妻君といふ人の氏名生地などを尋ねた。さうして多分これでもう萬事解決だと思つて安心してゐた。間もなく同未亡人からは御返事が來て、櫻田の妻君は西村よの子といひ但馬城ノ崎の人であること、だが大正十三年二月死去したこと等を敎へて下すつた。私は西村女史の死をきいて又落膽した。

私は、然し考へ直した、西村女史は死なれても遺族の人々の手に何か櫻田關係の資料があるかも知れない、その方から探してみようと。それで今度は西村女史の遺族を尋ね當てるのに熱心した。手掛りとしては先づ何しても城ノ崎に問ひ合せるより仕方がない。私は城ノ崎町役場宛で切手入りの手紙を出した。返事がない。又出した。返事がない。三度目に事明細に書いて出したところ、やつと返事が出來た。それによると、城ノ崎役場は例の三丹の地震で燒失し

戸籍原簿もその時燒失したから、西村氏のこと、遺族のことも極大體よりわからぬといふこと、西村女史の死亡は確實なこと、西村靜枝といふ人が今朝來郡和田山町にゐることなどが分かつた。和田山町といふのも茫乎としたことなのでいろいろ考へた末、やむなく同町警察署と郵便局にあてゝこれこれの用事で西村靜枝といふ人を知りたいのだが何とかして教へてくれまいかといつてやつた。ところが双方とも親切にも早速返事をくれた(この時の嬉しさは今でも忘れない。) それで西村靜枝氏に手紙を上げて櫻田のことを御存じないかと同じ事を繰り返して尋ねた。事實この時はもう度々失望してゐるからさう大して望みをかけたのではない、いはゞ念拂しの氣味だつたのである。ところが意外とも意外、靜枝氏の手許には櫻田氏の寫眞と著書と傳記資料が多少殘つてゐた。靜枝氏はこれ等資料を全部私に快く貸して下すつた上自分が母君から聞傳へられた事の記憶を書けつけたり、わざわざ城ノ崎へ出かけて老人連に會つて尋ねて下すつたりした。この傳記資料の主なものは「新朝野新聞」(明治二十七年)の數枚でその中の「女俠西村よの子」といふ記事の中に櫻田の傳記資料が散見してゐるのであつた。こゝまで來るまでに、一方私は帝大の明治文庫で古新聞閲讀のついで櫻田に關する知識を二三得てゐた。卽ち彼の死時、病狀、歿年その他を知ることが出來たのである。然るにこの新朝野新聞を見るに及んで、櫻田の死時のことをやゝ詳しく知ることが出來た上、よの子女史に櫻田の死去を電報した友人吉田某、櫻田の死水をとつた友人中村菊也といふ名まで知ることが出來た。それで私は靜枝氏にこの中村氏とは何んな方かと質問してやつたところ、その答に曰く、中村氏は栗原亮一氏の弟で或は今尙ほ現存かも知れない、栗原氏の奥樣にお聞きを乞ふ云々。私の心は躍つた。卽時栗原氏未亡人に照會したところ、喜ぶべし中村菊也氏はまだ現存してゐられた、何處に、紀州の新宮町である(只今は市である)。私は又長い長い手紙を書き、今日までの事情を詳述して、中村氏宛で書留で出した。新宮までは手紙の往復が一週間はかゝる。この一週間が私にとつていかに待遠しいものであつたらう。一週間目には返事の先ぶれがあつた、それは私の手紙を受取つた旨と、櫻田の

友人であつたこと、古い書類を調べる間二三日待つてくれといふことであつた。私は多少の焦躁を感じたが、然しもうかうなると急がずとも可い、私は割合に樂な氣もちでその間待ち通すことが出來た。やがて炭酸紙に鐵筆で十二行罫紙に細々と認められた返事が來た。これが皮切りで私と中村氏との間にはその年（昭和六年）三月から四月にかけて十回以上の通信が交はされた。私は櫻田の傳記に關する事實では現在ではもうこれ以上調べやうがないまでに知ることが出來た。（一二の點を除いては）。私は、これで櫻田に對する寸志を漸く滿すことが出來たやうな氣がした。櫻田のことを知りたいと志してから、もう七八年になる。人々には私のこの長い間の努力がいかに無駄なものかと見えたことであらう。それだけ私は又、何といふことなしに「それだからこそ俺がやるのだ」といひたいやうな氣がしてゐた。だが何れにせよ、私はこれ等の中村氏から得た材料で自分の望んでゐたやうに、明治政治小說研究のうちにかく櫻田百衞に關する一章を加へることが出來たのである。私の骨折ぐらゐは、この滿足で十分酬はれたとして可からう。中村氏から此の時得た資料で自由黨裏面史に關するものが、相當あり、壯士連の生活、密偵のことなどいろいろあるが、それ等の發表は他日他の場所に讓ることにしたい。

宮崎夢柳とその政治小說

一

宮崎夢柳、名は富要名に因んで號を芙蓉散史といふ、夢柳居士又は夢柳狂士はその戲號である。土佐の人。安政二乙卯の年某月某日、高知中新町に生れた。父は土佐藩士（極く輕格だつたといふが）宮崎富成、母ゑつ子、川村氏。富成、初名は名東才右衞門、學問もあり、勇壯活潑の氣象に富み、土佐藩維新人物の一人だつたといふ。維新後名東縣に出仕し、東京虎ノ門金毘羅の神官となり、後轉じて讃岐の琴平本宮の宮司になつた。母ゑつ子は並々ならぬ賢婦人で、夢柳の幼ないころ、わが子をしてその學塾で學び得た書物を膝下にもつて來て覆讀させ、自身でそれをよく暗記し、わが子が忘れたときには自分の暗記したところによつてこれを敎へた。それで終には母自身も、四書五經を暗誦することが出來た。夢柳が幼少にして才學の名を顯したのは、母の薫陶によるものが多かつたといふ。

夢柳が德永千規に師事したといふが、それは幾歲ぐらゐのことかよく分からない。千規は、有名な武市半平太に師と仰がれた偉物であつた。此の人から夢柳は和漢の學を學んだといふ。

詞賦に對する嗜好は幼少の時からもつてゐた。少年のころ、藩校致道館で專ら經史を研究してゐたが、傍ら阪崎紫瀾、結城凡鳥、土居香國などと好んで詩文を論じた。一日前藩主山內容堂が學事見廻りに來たが、一般學生の才學を試みようとして、柳といふ詩の宿題を出した。夢柳は退思苦吟の餘、夜分に至つて夢の中に得るところがあり、乃ち明日その詩を出したところ、絕妙の詩句だといふので容堂から深くその才藻を賞された。後來、夢柳の戲號を用ゐる

に至つたのはこれによるのである。夢柳が詩文の才に天賦の長をもつてゐることが、かくして廣く同館の儒官の間にも廣まつた。

明治三年、夢柳は歲十六で東京に遊學した。此の年藩の學者奧宮正由が少年を率ゐて上京したといふが(一)、若齡の夢柳もこの時從つて來たものではなからうか。上京後、夢柳は丸山某の塾に入つたといふ。此の丸山某を丸山作樂だと記してあるものもあるが(二)、丸山作樂が果してこの頃さういふ塾を設けてゐたか何うか、養嗣子正彥の手になる『作樂傳』を一わたり調べてみたが、何うも違ふらしい。夢柳は、別に成島柳北、重野成齋等の大家について詩文を研磨したので、天賦の才は益々長じた。この間又、英人某夫人について英語を修めたといふ。(或は英語を學んだのは高知にゐたころからともいふ)。從來夢柳は洋文洋語を解せざる人の如く考へられてゐたが、事實は多少の素養をもつてゐたらしい。後年世間に鳴つた所謂夢柳の飜譯小說の如きも、悉く人手をかりたのみのものでは決してない。さもないと、板垣退助が歐米漫遊から歸るや、その携へて來た小說を特に夢柳に囑して新聞に譯載させるなどのことはあり得なかつたらう。

夢柳が舊友結城凡鳥等と詩酒の遊びに耽り放浪生活に入つて父の不興を買つたといふのも、此の幾年間のことであらう。明治七年八月、島本仲道が北州舍を大阪から東京に移し、東京を本部とし、大阪を支舍とするや、夢柳はこれに入つて、北州舍の事業を助け、仲道から大に愛遇されたといふ。事業を助けたとは、何ういふことをしたものか、書記祕書の如き任務を執つたものであらうか。彼自身こゝで政治法律の學を多少修めたらしい。又島本等の感化で民權思想を抱くやうになつたらしい。更に明治八九年の交(八年七月にはまだ北州舍にゐる)、夢柳は東北地方に遊歷した。その範圍が何の邊まで及んだか、何か目的があつてのことか、よく分からない。北州舍の事業又は仲道の目論見と何等かの關係があつたものか、それともたゞ夢柳個人が漫然と所謂千里の遊をやつたものか、只今私の手元にある

材料からは分明しない。たゞ一つ當時遊歷の記念として知られてゐるのは、茨城新報の發刊である。これは二度目の茨城新報で、明治九年春、水戸で發刊されたとのことであるが(三)、夢柳が、同地の素封家松延義路氏を扶けて自ら發起人となり、一社を創立したものであつた。これが夢柳の新聞事業と關係した最初である。

明治九年、夢柳二十二の時、母ゑつ子は病歿した。この時父富成は琴平の神官として讃岐にゐたので、夢柳は遠く讃岐に奔つて母の喪に服した。喪が終つて又水戸へ引返したものらしい。

明治十年には夢柳はまだ水戸にゐたらしい（高瀨眞卿『羽皐半面錄』）。十一年頃東京へ歸つたものか。だが恐らくその後間もなく東京を引上げたものであらう。鄕里での消息は分からない。たゞ想像されるのは、舊友坂崎紫瀾、土居香國等と依然詩酒徵逐の遊びに耽つてゐたらしいことである（例へば『仙壽山房文鈔』（土居香國）、卷二賞園梅記を見よ）。此のころの夢柳の詩は香奩體で、才調雋麗、情致纏綿、而かも新奇なるを喜ぶといつた風である。旁ら結城凡鳥等が東京で出してゐた「撃壤叢誌」にも關係してゐた。此の後者の創刊は丁度十一年九月であつた(四)。

明治十三年七月、自由主義系の高知新聞（同名の二度目の新聞）が發刊されるや、植木枝盛が主幹となり、坂崎紫瀾(斌)、和田半狂（稻積）などが記者となつた。

此の時、夢柳も同新聞の記者の班に加はつた。後同系の土陽新聞が發刊されるや十四年十二月その記者も兼ね、後更に高知自由新聞（十五年五月）にも筆を執つた。此の頃は民間志士から國會開設の大請願書が出て、國會期成公會が組織され、やがて自由黨が出現した（十四年十月）自由運動の全盛時代であり、さもなくとも土佐は自由の發祥地として自由主義者の意氣が大に揚つてゐたのであるから、自由主義の高知新聞も全紙を擧げて自由民權の宣傳に供し更に記者を幾班かに分けて全縣遊說班を組織してまで努力した。青年血氣の夢柳も勿論此の渦中に投じ、一廉の民權家として言論に文章に相應努めたものである。その例として、「讀勅諭而泣」といふ演說筆記（高知新聞、十四年十一

月八日）や「遊說紀行」（土陽新聞、十四年十二月十四日）が見えてゐる。だが彼の民權的活動の詳細は知られてゐないたゞ注目すべきは、夢柳が此等の新聞に所謂艶筆をふるつて續物を載せ、いはゞ小說執筆のお手習ひをしてゐる點である。

概していつて當年の夢柳は、今日から見て、讜論正議の操觚者といふよりも、寧ろ多感多恨の風流才子として印象を殘してゐる。それには、岸田俊子との唱和の如きも與つて力があらう。俊子は京都の人、後の男爵中島信行夫人湘烟女史その人である。明治十四年、俊子は病氣養生のため（或は內實民權思想の洗禮を受けるため）土佐に來り、高知城南鏡川の畔なる小松氏の別業に滯在してゐたが、屢々立志社の演壇に立つて、過激な民權論に氣焰を吐いたといふ。俊子はその宮仕へといふ經歷を有つてゐる上に、才色双美、辯舌も流るゝ如くであつたので、彼の女が一度口を開くや、聽衆は恍然として聞き惚れたといふ。俊子は又漢詩を善くし、能書の名があり、高知の詞客と唱和して大に詞壇を賑はした。中でも夢柳との應酬が殊に多く、その詩は高知新聞紙上に掲載されたので、兩人の唱和が殊に人口に膾炙した。その一例を示せば、——

春窓夜雨、次二湘烟女史原韵一

可憐花向二愁邊一落　相思詩於二夢裏一成
微雨夜來春一霎　重簾如ㇾ水不ㇾ堪ㇾ情
花朦朧裏月無ㇾ影　柳黯澹邊燈有ㇾ痕
如ㇾ許夜深如ㇾ許雨　笛聲以外不ㇾ聞ㇾ喧

俊子は十五年一月の末頃歸京したらしいが、夢柳の送別の詩がある、七首の中から拔いて見ると——

懶下捲二重簾一望中遠波上　江樓送ㇾ別意如何

星星一夜瞼邊滴　春涙多二於春雨多一
離愁將レ向瀲江波　奈二此春宵一刻一何
燈下從レ今人悄坐　落梅風處笛聲多
春風巴上杳二烟波一　奈二此孤帆レ欲レ發何
情切却忘離別語　說二加餐一外不二多多一
燈前涙眼漲二雙波一　君去其如二相思一何
春隔梟川楊柳月　勞々夢々不レ堪レ多

既に俊子が歸つてから、彼の女を懷ふ詩がある——

長天一白月悠々　此夜美人何處遊
知否水南風露底　芙蓉花瘦不レ勝レ秋

夢柳も元來筆蹟に巧みであつたが、後にはその筆意が湘烟に酷似し、何れが夢柳、何れが湘烟か辨じかねる程になつたといふ。

明治十五年春、夢柳は上京した。上京後は、板垣退助主宰の自由新聞社に入つた。「自由新聞」は同年六月廿五日第一號を出してゐるが、夢柳の關係したのは、何時ごろからか。自由新聞の最初の組織に既に「相場及び小說」の掛として櫻田百華園と夢柳の名が見えてゐる（『自由黨史』上卷六七九頁）。だが一方七月に入つても高知新聞に執筆してゐた樣子がある。(高知新聞は十五年七月十四日發行を停止され、その姉妹新聞ともいふべき高知自由新聞は一週間の後の二十一日に又停止されたので、兩新聞とも盛大な葬式を營んだ)。或は東京から寄稿だけしてゐたものかも知れない。

此の年九月、自由新聞の別働隊として、通俗平易、所謂大衆の自由民權化を主旨とした「繪入自由新聞」が發刊された。夢柳は此の新聞では第一線に立つて活動した。或は小說に、或は論文に、實に目ざましい勢ひで、お蔭で第一號から筆禍を買ふ始末であつた。此の時も、筆で足りないで、舌でまで活動した。(例へば十六年五月十三日築地久松座の政談大演說會のプログラムに「似て非なる者を恐る」宮崎富要君といふのがある。)繪入自由にあること約二年、十七年五月、「自由燈」の創刊されるに及んで、夢柳の活動舞臺は此の新聞に移つた。

自由燈は繪入自由と同じく、大衆社會に自由民權意識を强めるために起されたものであるが、本家の自由新聞が自由黨内の紛爭から休刊同樣振はなくなつてゐた反對に(此の年十月、自由黨は解黨した、その精神は消失しなかつたが、その後は黨としての團體活動はしなくなり、專ら祕密手段で政府の彈壓に對抗した)、此の新聞は立派にその衣鉢を傳へ、その精粹を發揮して、一時自由主義、所謂見光主義の火の柱たる觀があつた。發起者の一人たる案外堂小室信介は夢柳の知己であり、百華園なき後夢柳と相並んで、小說に論文に悲壯淋漓たる文章を掲げてゐたので、世間では此の二人を双玉聯璧として並稱し、その水際だつた活動は當年の文壇を動した。殊に十七年の十二月から虛無黨小說『鬼啾啾』を同紙に掲げたころが、自由民權文士としての夢柳の全盛時代であらう。小說家として、操觚者として文章家としてその社會からは第一流と見なされて、盛名を一時に恣にした。

だが、夢柳に盛名を得させる主因となつた同じ『鬼啾々』の出版(十八年)が禍根となり、全盛の人を忽ち獄裏の人と變へてしまつた。是より先き十八年十一月自由燈に改革沙汰があり、夢柳は退社してゐた。が、十九年三月十六日、遂に出版條例違犯の廉で(『鬼啾啾』を納本せぬ件)輕禁錮三ケ月の刑に處され、石川島監獄に收容されるに至つた。

同十九年六月二十日出獄後、東京から大阪を經て高知に歸り、休養旁々土陽新聞に執筆した。出獄後は人物も　良

となり、その詩風も一變して以前の浮誇織麗の體がなく沈鬱雄渾の趣を得て來たといふ。土陽新聞の在社がどれだけ續いたかわからないが、翌二十年五月大阪中ノ島自由亭に於ける全國自由主義者大會には板垣退助に從つて出席してゐる(五)。恐らく板垣に從つて高知を出發したものではあるまいか。此の際、板垣の辭爵問題があり、板垣は大阪から更に上京することになつた。この時の辭爵の表文は、夢柳の手に成つたものである。

大阪に留まつた夢柳は日報社に入つて、大阪日報に筆を執ることに成つたが、意見の合はぬことがあつて、浪花新聞に轉じ、更に中江兆民、寺田寛等が東雲新聞を計畫するやこれに參加し、明治二十一年一月の創刊號から筆を執つた。此の年十月大阪であつた大同團結有志の會合出席者に彼の名が見えるが、眼立つた活動はしてゐない。かくて東雲新聞に在ること一年有半、明治二十二年六月不圖瘟熱を病み、それが癒えずに、七月二十三日大阪堂島の寓居で歿した。享年三十五。臨終の際、辭世の詩を一篇賦さうとして、自分で筆をとつて三十といふ二字を辛うじて記したがそれを續けかねて筆を拋げたといふ。思ふに三十年來云々といふ句でも認めるつもりであつたらう。

翌七月二十四日阿部野に葬つたが、會葬者百三十餘名あつた。

夢柳の病むとき、父富成は六十餘の老年で高知に隱居してゐたが、衰老して行旅の勞に堪へぬので、わが子の病氣が急に迫つたことを聞いても大阪に出て來ることが出來なかつた。夢柳病中一切の事はその姉及び姉の夫松木氏が世話したといふ。

東雲新聞は夢柳の傳を掲げてこれを弔し、最後の一節にいふ「嗚呼居士が三十有四年の在世は社會の表面に於て其遺跡少からず居士が衆に異なるは斯る野暴らしき政界の志士にして又た意氣なる色界の醉客たりし事是れなり若し居士をして身上の裏面に廻はり生前に一篇の懺悔錄を著さしめば艶話奇談の多きは啻に盧騷(ルーソオ)先生の懺悔錄のみには非るべし惜哉悲哉」云々。

註（一）高知城東中學五十周年紀念誌
註（二）明治二十二年七月「東雲新聞」所載略傳
註（三）明治初期新聞年表（外骨氏）
註（四）同
註（五）『明治政史』上卷（明治文化全集本）五〇九頁

二

夢柳の筆になる詩文論説小説稗史を全部集めると、その活動年代の短い割合には可成り浩瀚なものになると思ふが夢柳研究の第一材料ともいふべき彼の關係した新聞雜誌の全部に寓目することは今日先づ不可能といふべく、從つて明治初期操觚界乃至文學界に於ける夢柳の業蹟を完全に知ることは不可能に屬する。今夢柳の文學活動を大別すると、漢詩人として、記者として、小説家としての三方面から見られるが、材料の點からいつてこの活動が比較的完全に知り得られるのは、小説家としての夢柳居士である。

夢柳が小説稗史乃至それに類する文章に筆を執り出したのは何時ごろからであらうか。正確に斷言は出來ぬながら大體の推測として、明治十三年七月高知新聞入社以前には小説めくものゝ作が無かつたと見てよからう。私の寓目した高知新聞その他は比較的揃つてゐるものであるが、これには、私の調べた限り、次の數篇が掲載されてゐる。――

○春色雙木（しゆんしよくふたき）の花（はな）（全十回）
明治十四年二月二十二日――三月三十日
○野路（のぢ）の梅（うめ）が香（か）（全八回）

明治十四年四月三日――五月一日

○近水の樓臺月の面影　（全十回）

明治十四年七月十四日――八月十三日

○薄化粧鏡の花　（回數未詳）

明治十四年十一月十六日（第一、二回は高知新聞、第三回は土陽新聞）

○深山の樹木　（回數未詳）

明治十五年六月十四日（第一高知自由新聞、第二、三回高知新聞）

高知新聞、土陽新聞、高知自由新聞、此の三種の新聞は同じ自由主義系であるので、その內の一種が官憲から發賣禁止を食つたり停止をくつたりすると、紙面と記事を融通し合つた。それで、同じ出し物が二新聞に跨つたりすることになつてゐる。兎に角以上が小說手習ひ時代ともいふべき第一期の作品である。さて東京時代を第二期とすれば――

○自由乃凱歌　（回數未詳）

自由新聞、明治十五年八月十二日（第一回）――十六年二月四日（第九十四回）未完。十五年十月第一編（一回――二十回）刊、同十二月第二編（二十一回――四十一回）刊。

○寃枉の鞭笞　（全十五回）

繪入自由新聞、明治十五年九月一日――十月二十八日、同年十二月刊。

○ガーネット・ウオルスレーの傳　（全十五回）

繪入自由新聞、明治十六年一月十四日――二月一日、埃及のアラビイ・パシヤを破つた英將ウオルレスー傳を傳奇化したもの。これについては本文中に別に述べない。

○蝴蝶世界夢の通路　（未完）

繪入自由新聞、明治十六年一月二十日第七回中絶。

○高峰の荒鷲　（全五十七回）

繪入自由新聞、明治十六年五月二十三日――八月十六日。同年八月前編、九月後編刊。

○憂世乃涕涙　（全七十五回）

自由新聞、明治十六年九月十四日(第一回)――十二月二十八日(第七十五回)、十七年三月刊、三冊。

○龍動塔話　（未完）

歐米政理叢談、明治十六年十月(第一回――十二月(第四回)、未刊。

○鮮血の花　（未完）

自由燈、明治十七年五月十一日(第一回)――七月二十七日(第三十六回)――八月九日(第三十七回)――九月二十三日(第五十六回)、未刊。

○鬼啾啾　（全七十三回）

自由燈、明治十七年十二月十日――十八年四月三日。同年十月刊。

此の『鬼啾啾』の出版で筆禍をうけて入獄したのであるから、大體以上で第二期即ち東京時代を終る。第三期は在高知、在大阪時代であるが、此の期の小說は――

○垂天初影　（全二十三回）

土陽新聞、明治十九年十二月二十三日――二十年一月二十四日。未刊。

○芒の一と叢　（全三十五回）

東雲新聞、明治二十一年一月十五日——三月九日。同年五月刊。

○義勇兵（全六十二回）

東雲新聞、二十一年十二月刊。

○自由乃凱歌（再出）（前四十五回、後五十九回）

東雲新聞、明治二十一年某月、二十二年五月刊。

たゞ注意すべきは第二期、第三期に於ける作品數は第一期に比して少いやうに思はれることであるが、それは第一作品の長さが違ふといふことも理由になるが、同時に必ず無署名の作品があるに違ひないといふ暗示にもなる。私は繪入自由、自由燈時代には必ずそれがあつたと思ふ、その例として——

○薔薇の露

繪入自由新聞、明治十八年七月。十九年七月刊行の『近代悲憤・烈士傳』中に收まつてゐる。フランス共産黨の壯年首領ビゴーといふ人物の傳記を小說らしくしたもの。

○霜夜の月（回數未詳）

自由燈、明治十八年十二月廿七日第三十一回中絕、ユーゴーの『九十三年』を譯したもの。

などは確かに、その文章や用語癖から見て如何にも夢柳であるらしくとは思はれるが、無署名である。他にも此の例が多少あつたものと思ふ。然し今日では最早や辨別し難くなつてゐるから、材料として此等を漫りに用ゐるわけには行かない。

夢柳の小說中、第一期の手習ひ時代のものは論外で、文章の艷美といふ點以外にいふ程のことはないが、第二期以

後のものになると、自ら一貫した特色が出てゐる。第二期以後の夢柳の小說は飜譯物と創作（內容的に區別して）とあり、飜譯物がその大半を占めてゐるが、その內容はフランス革命とロシア虛無黨に關するもの、創作の方も矢張り內容は革命とか虛無黨に關するものである。さうして兩者に通じて著しい特色は自由の禮讃、爲政者の不正暴壓に對する燃える如き憎惡、民權伸長の鼓吹、志士の犧牲的精神の賞揚、ルソオ流人權論の祖述などであり、それが誇張的な言語をもつて猛烈な感情をこめて高調され、讀者の胸を强烈な自由民權思想で動かさずには置かぬ。

以上夢柳小說の特色は同時に又、彼の小說の目的を語つてゐる。讀む者の心に强烈な自由民權思想をそゝること、それは卽ちかゝる小說が目的とするところだつたのである。元來夢柳は「政治上の稗史小說」の目的を說いて「此の政治の善美ならんことを企圖し世運の隆盛ならんことを計畫する志士仁人等が須らく先づ其の勤とし其の職とすべきもの」卽ち「世の所謂下等社會の提醒誘導」（一）に役立つことであるとなしてゐる。此處でいふ下等社會とは、所謂無產社會といふやうなもののみではなく、童幼婦女に一般人を含めたもの、卽ち知的下等社會、社會大衆の義と解すべきであるが、この社會大衆の政治的自覺を促し政治思想を普及させるのが、自分の政治小說の目的であるといふのである。社會の木鐸を以つて任じ、文學小說を「小技視餘技視」してゐるといふ夢柳が甘んじて小說に筆をとつたのは、一にかゝる目的があつたからである。だが自由第一の夢柳にとつては、政治思想の普及とは、自由民權思想を鼓吹することに外ならない。此の二つはこの場合一となり、政治思想卽ち自由民權思想といつて可い。さうして夢柳はその小說を史實乃至事實による實物敎訓書たらしめた。彼は歷史上、自由民權思想の最高潮のあらはれと解されたフランス革命とロシア虛無黨の活動といふ二つの理想的史實を脚色したものにより、或は自ら脚色することによつて、最も有効に此の目的を果さうとつとめたのである。

夢柳自身は、個人として何等か特異な政治思想をもつてゐたか、いな、いなそれは理論的には極めて漠然としたル

ソオ流の、スペンサア流の、寧ろ中江兆民流乃至板垣退助流の自由思想であつた。夢柳が自由民權の鬪士として純眞な血性漢だつたことには疑ひがないとしても、その自由思想は、彼自身思索して得たものでも學得した結果でもない、時代の雰圍氣、環境の勢力に感情的に共鳴し雷同したものたることは否まれぬであらう。德富蘆花の『思出の記』(三の卷十、十一前後)を讀むと、當時の人々が如何に時世を風靡した自由熱に醉ふてゐたかゞ好く書いてあるが、夢柳も此の自由熱に醉つた一人であつた、いな、土地がその醱酵の本場だけに、最も强く盲目的に醉う人間のた一人であつたらう。

當時の自由論は、いふまでもなくルソオの天賦人權論、スペンサアの自由民權論の說を基礎とした理想論であつた。その要領をあげると――

曰く天賦の權利曰く平等の自由曰く全く政府の干涉を廢止せざれば最大幸福を得べからず曰く政府は我々の權利自由を保護するに止まり社會の福利を增加せんとするの行爲の如きは其の適當なる職掌に非らざるなり云々(二)

純眞で率直で痛快で、如何にも人心を感動させるに足る程眞劍熱烈なところがあり、又全國人民の政治思想の喚起に大に効力があつたが、理想論の常として現實に卽かずに空理に走せ、空疎感情的で實際的經綸を伴はぬ缺點があつた上、極端に走せては徒らに權威に對して悲憤反抗して過激破壞的に流れた事實もあつた。夢柳の自由民權思想が大體以上の要領と以上の缺點とで代表されるものと思へば可い。

現もあれ、かゝる自由主義政治運動の最高潮は、自由黨の出現となつた。さうしてその盟約の第一條たる「自由ヲ擴充シ權利ヲ保全シ幸福ヲ增進シ社會ノ改良ヲ圖ル」云々は黨の理想を要約したものであり、爾後暫らく黨關係の同志の思想活動を支配する鐵則として役立つた。黨の同志は此の理想を實地に具現させせんとてあらゆる手段をとつた。言論、出版は勿論、實行運動によつてさへそれを遂げようと努めた。夢柳の政治小說の如きも、大處からいへば、個

人の著作といはんより、かゝる努力の變形した現れの一つであつたのである。

特に注意を乞ひたいことが一つある。

夢柳が政治小說を揭げた新聞は、主として繪入自由新聞と自由燈であるが、前にもいふ如く此の二新聞は共に、夢柳の所謂「下等社會の提醒誘導」、即ち大衆の啓蒙宣傳のため、といふことを使命としてゐたものであつた、殊に繪入自由の如きは、その創刊の始めに於いては全く露骨な自由黨の宣傳機關で、主として「勞力社會」の政治的覺醒に努めたものである。「勞力社會の諸君に告ぐ」（夢柳稿）、「智力と腕力の中裁を試む」、「人間と禽獸と相異なる所以を論ず」、「歐米各國勞力社會の近狀、我東洋同社會の諸君に告ぐ」等、毎日毎日かういふ社說で勞力社會の覺醒に努め、兼ねて大衆へ呼びかけてゐる。人間には天賦の權利があること、我等はまだその權利を伸張させることが出來ぬことこの權利を伸張させることとは、やがて國權の伸張となり、從つて愛國といふことと同じなこと、人間の貴重なのは此の自覺と愛國心によることなどといふのが、その所論の主なものである。

此の大衆への啓蒙宣傳は、最初はこれを政治的覺醒して黨勢擴張に利用しようといふにあつたに違ひない。自由黨の立前は自由平等であり、理論上さうなるのが當然といへばいへるが、その背後には、その頃新に都市ブルジョアジイが擡頭しつゝあり、それと共に貧富問題（つまり勞資問題）といふものが識者の注意を惹きつゝあつた。自由黨がその平權主義から此の問題を捉へて貧者に味方したのは勿論であるが、此の新興都市ブルジョアジイの大部分は所謂自由主義の改進黨の支持者であつたので、こゝからも自由黨對改進黨の對立關係が生じて來たのである。十六年十七年と貧富問題が深刻になり貧者に同情した自由黨の一部の人々が純理的に先行的に左傾化して行く、それにつれて改進黨とは全く相容れない立場となる、同時に最初の政治改革といふ目標がいつしか社會革命といつた色彩を帶びて來たので、政府からは更に激しい壓迫を受ける、黨內が二つに割れる、同情は失ふ、資本が出ぬで、自由黨解黨の原因

ともなるのであるが、夢柳が政治小說を書き始めたのは、まだ自由黨がその政策上、勞力社會、大衆社會を利用しようと熱心に啓蒙宣傳に從事してゐた時であることを記憶していたゞきたい。

註（一） 夢柳著『高嶺の荒鷲』の序

註（二） 末廣鐵腸著『雪中梅』（十九年刊）上卷、三四――三五頁

三

以下、夢柳の政治小說の內容に就いて語らう。

第一期の作は、いはゞ前にも述べたやうに小說のお手習ひめいたものばかりである、何れも新聞雜報中の面白げなものを多少潤色して所謂續物にした體のものである。文章の濃艷なのを別にせば、これ有りとて夢柳に重きを加へるやうなものは一つもない。然かもその大半は市井の瑣事をたゞ手綺麗に平凡に寫してある點で、第二、第三期の夢柳の小說とは際だつた相違がある。

「春色雙木の花」は、林某の娘お留といふもの〻一寸した妖婦振りを書いたもの。年端もいかぬ小娘が役者に溺れたのを手始めに、色仕懸で金を捲き上げやうとしたり、呉服屋をかたつたり、不始末で二度離緣になつたりしたお話である。「野路の梅が香」は、土佐中村の劍客樋口某の女お梅の薄倖の生涯を記したもの、父の歿後、一家零落したので母を養はんがため、高知に出で、丸新樓といふのに奉公する內、中野某と戀仲になつて奉公を引いたが、某の嫉妬に恐れ、逃げて丸新へ歸る。その後濱田某と再び戀に落ちたが、間もなく官の解放令によつて自由の身となる。然し生活に困つて又も田舍で稼いでゐるうち、黑金某の妾となり、姙娠と同時に手切を與へて歸されたもの〻、母子窮困に陷入つたので黑金某へ無心に出かける途中、幼子は死し、お梅も死にかけるのを舊主人に救はれ、再び稼業を始める

やがて高知へ轉じて藝者となつたが、朋輩に虐待されて行方知れずになる、といつた風のものである。「近水の樓臺月の面影」は、阿波德島の士村瀨某の娘お照は、家族の犧牲として、人の妾となるが、後藝者となり、高知へ流れて來る。某商會の手代で刀劍賣買を職としてゐる矢野某、お照に深く馴染み、女を落籍して、德島で商法しようとして出かける。だが折柄の西鄕の亂で、土佐人で刀劍商といふのが阿波の役人に疑はれ、男は拘囚の身となる。百方手を盡してやつと放免されはしたものゝ、その土地では如何とも成し難いので東京に出る。お照は或る家に身を寄せて矢野の消息を待つてゐたが、何の音もない。その內家の主人の橫戀慕に堪へかね、やつと工夫して高知へ逃かへる。それからお照は性格が一變して自墮落の生活を送つて、東京の男から消息があつても見向きもせぬ云々（社中の惡友の素破拔きによるとこのお照は夢柳の愛妓であつたといふ）。「薄化粧鏡の花」は未完物だから、筋は明瞭でない。ある孝女が母の病氣を天神宮に祈つての歸途、多勢の乞食に捉はれてひどい目を見やうとしてゐるのを、鬪犬會から歸つた若者が助けて、送つて行く。何れ此の二人の間に何等かの交渉が出るのだらうが、よくわからない。「深山の樹木」も未完物である。土佐の人河野某（少年）と常陸の人妻木某（老人）の間の物語りの體らしいが、水戶郊外長岡の原に通りかゝつた女性が癪に苦しんでゐるのを、連れてゐた十三四の少女が介抱してゐるところで終つてゐる。物語りが何う發展するものか分からない。

第二期の作物に移る。

上京後間もなく自由新聞に載せた『佛蘭西革命記自由乃凱歌』は飜譯小說である。これを新聞に揭げるとき、夢柳自らかう語つてゐる。

本編は原佛國の學士デュマ氏が彼の大革命に際し世に名高き破獄一件を綴りしテーキングジーバスチイルと題せる

ものにして弊社社友の百華園主人が既に掲載半なる醫者の記錄（西の洋血潮の小暴風）に連續せる稗史を意譯せしなり云々。

此の百華園主人の小說が、筆者の病氣によつて途切れ勝ちだつたのを補ふ爲めに、更に夢柳の此の小說を掲げ始めたものらしい。

夢柳の此の小說は、彼の所謂『テーキングジーバスチイル』卽ち『バスチイユの奪取』（原名、アンジュ・ピトウ）の第三十四章あたり迄を大意譯にした上、增删を存分に加へたものである。譯とはいふものゝ、甚しい抄譯の上、增減勝手、前後混同、創作に等しい豪傑譯である。その上元來は歷史小說であるべき此の小說に、譯者の感想や自由民權の宣傳や貴族の横暴などを加へて、强ひて政治小說に揑つち上げたものである。これは百華園主人の行方そつくりである。刊本の第一、第二編は原書の第十七章の終りごろまでに相當する分量が收まつてゐる。

（第一編）一七八〇年代、ヴィラコテレーでの出來事。少ピトウは孤兒となり、乳兄弟セバスチアンの父醫博士ギルベルトの世話で叔母に引とられて十二歲から十五歲迄過す。十五のとき學校を追はれ、叔母に怒られて、女友カセリンの家に寄食する。カセリンの父ビロウは農夫ながら志士的氣性に富み、ギルベルトと深い交りがある。ギルベルトはアメリカから自由民權を說いた小册子を送つてよこしては頻りに革命の氣運を煽つてゐる。一日アメリカから歸つたといふギルベルトの手紙が來るが、その手紙に異狀があるので、ピトウに云含めてパリまでギルベルトの樣子を見にやる。間もなく警吏が來てビロウの家を家搜し、ギルベルトより依托の小匣をもつて歸る。ビロウは益々ギルベルトの身を不安に思つてピトウの跡を追ひ自らパリに赴く。二人は途中兵士の屯ろしてゐるのに不思議の思ひをするが、パリに來て間もなく亂民の渦卷にまき込まれる。これは、丁度賢相ネッケルの罷免に激した人民がカミール・デモランの演說に奮ひ立つた時だつたのである。ビロウ、ピトウの二人は亂民と共に兵士を相手に奮闘するが、やがて

身を潜めてセバスチアンのゐる學校に行き、ギルベルトの消息を詳にする。ギルベルトはアメリカから歸るとパリに入らぬ内に、不明の理由で捕縛されて有名なバスチイル獄に入れられたのである。ビロウは衆人の嘲笑を顧みず、バスチイルを破つてギルベルトを救ふことを誓ふ。

（第二編）ビロウはパリ市長フレッセルに會つて談判し、バスチイル守將宛の書面をもつてそこに向ふ。彼に從ふ群衆と、カミールその他の率ゐる連中と一緒になる。ビロウは守將ダロニーと城砦引渡しの談判をするが不調になる。かくて有名なバスチイル獄包圍となる。激戰數刻、遂に民軍勝つて獄を占領し、自由の凱歌の第一聲が上る。ビロウとピトウ、その他はギルベルトの部屋を尋ねて、ギルベルトを助け出す。（固有名詞の呼び方はわざと夢柳の譯のまゝにしておく、以下大抵そのつもりである。）

原書第十八章から三十八章迄は此の時自由新聞に譯載せられたが、未刊行のまゝとなつてゐる。これを更に改譯増補したものが二十二年刊の『自由乃凱歌』である。

夢柳の譯が、櫻田と同等乃至それ以上の大意譯であることは勿論である。これ又、櫻田と同じことで、何もデュマの小説を傳へるのが主意ではなく、これを借りて自黨の宣傳イデオロギイを發表すれば目的が達するといふのであるから、自然さうなる原作にないのに、夢柳が種々の補筆を試みてゐるのも、櫻田と同じことである。例へば、第一編第八回、冒頭に、當時のフランスの政治の不正、貴族の壓制、警吏の横暴などの如何に憎むべく恐るべきかをさも當てつけがましく誇張的に力說してゐる。

當時佛蘭西の情況を如何にと尋ねんに人民の智識日に月に進み行き獨立の氣象の盛んなるに隨ひ專ら蘆騷の民約編などを愛讀して自由の論同等の說を唱へ出したるにも拘はらず暴虐無道なる貴族等は政府の上に相集まり威力を擅になさん爲め新聞條例集會條例出版條例等種々樣々の苛法酷律を設け自由を妨げ權利を奪ふにぞ人民深くその天地

の眞理公道に逆ひにゐるを怒り罵り、斯る害ありて益なき政府は寧そのこと速かに顚覆して仕舞はんものと竊かに思ひ居る情狀を見聞くにつけ貴族は之を己が身に反顧もせで過激なり疎暴なりと只管に人民を誣ゆるのみかは或る時は警吏を遣はし辯士を禁錮せしめ或る時は憲兵に命じて學者を捕縛せしむることの斷間なきより人民は益々不平に不平を重ね到る處何となく悲憤慘憺の景色を表すに至りしとかや云々。

これは原作にはない、夢柳の補ふところである。フランスの文字を取り去れば、夢柳等在野志士の側から當時の日本を記したものといつても大して相違がない。まだある。第一編第十八回、フランス人民がバスチイユ奪取とまで奮激した原因を說くところも原作にはない。第二編第二十九回、夢柳が頻りにバスチイユの守將ダロニー（本當はドローニイ）の暴虐冷酷を罵つてゐるのは、全く夢柳の想像文字であつて原作にはない。

殊に注意すべきは第一編第八回のギルベルトの手紙である。「某久しく亞米利加に滯在し熟々國內の事情を察するに革命の創痍まだ癒ざれども人民は各自能くその天賦の自由權利を全ふし得たるが故我が佛蘭西よりは幾層の開化に進み隨つて安寧幸福を享るが如し我が佛蘭西も亦追ひ〳〵亞米利加州と同じ有樣に立到るべけれど若し率先して事を計る者なき時は決して速かに美果を結ぶ能はず汝己に德を積み恩を敷きて勞力社會の父母と尊敬せられし上は是非奮發して率先者となり政府の抑壓を打破り自由を伸し權利を張ることを勉め給へ」云々。これは夢柳の補筆でなく、原作にもあるが、此の譯書でいへば、こゝ等が眼目たるべきものであらう。これは勞力社會に對する覺醒の呼びかけであるが、夢柳はこゝだけでなく、繪入自由の論文に於いても「勞力者諸君に告ぐ」といふ題で頻りに勞力社會の自覺が民權伸張に必要なことを說いてゐる。此のビロウは純然たる農夫である。農夫の革命志士、こゝに『情海波瀾』の民次、又は『自由廼錦袍』の民造、さては『血潮小暴風』のバルサモーとは全く變つたタイプがある。かく勞力社會へ力を入れることは、自由黨の政治運動が、この頃から少し新しい方向を取り出して來たことを反映するものではあ

るまいかと思はれる。

『魯西國虛無黨寃枉の鞭笞』は單行のものには夢柳の署名はないが、繪入自由の方には夢柳稿となつてゐる。此の小說の單行は稀本といつて可い。內容は有名なヴェラ・サシュリッチの經歷を潤飾したものである。材料から嚴正にいへば纂譯といふべきものであらうか、大分創作で補綴してあるので大體夢柳の作といつても可からう。

陸軍大尉サシュリッチといふのは武功の士であつたが、十六になる女ヴェラを殘して歿した。ヴェラは母と共にカルコフ郡に流寓し、一商家の世話で漸く衣食することになつた。その商家の一子ボゴンポッフをヴェラは心に慕つてゐたが、商家の主人もヴェラの心中と素性に感じて、わが子と結婚させるつもりでゐた。ところがボゴンポッフは都に出て大學に入ることになつた。ボゴンポッフがいつ頃からバクニン（此の小說の所謂パクミン）の虛無黨思想を奉ずることになつたかわからぬが、やがて學生過激派の牛耳を執るやうになり、一八七七年事を擧げんとして、敗れて捕はれた。丁度その頃ヴェラも慘禍にかゝつた。ヴェラの女友にネッチェーフトといふのがゐたが、これが虛無黨の一人であつた。それが、黨員中の最も危險なスパイを殺した廉で捕縛され、家宅搜索をうけたとき、文書中からヴェラの手紙が出て來た。それは何等の害もないものではあつたが、ヴェラは直ちに拘引されて、都に護送された。ヴェラは初めは自分の無罪を信じ、不幸を憐れんでゐたが、一日獄內で戀人ボゴンポッフが大警視トレポフへの不敬から打殺されるのを見て、急に官吏を憎む心を起し、虛無思想の洗禮をうけた。間もなく罪案が定つて、キエフ地方に三年流刑にされたが、期滿ちて歸鄕すると、老母は憂愁の餘り彼の世の人となつてゐた。母の仇、夫の仇と、恨み骨に徹したヴェラは、支度して都に上り、トレポフを狙擊して重傷を負はせる。一度は逃げのびかけるが、ふと考へる所があつてわざと捉はれる。公判の日、ヴェラは雄辯を揮つて官憲の暴惡を訴へ、自己の無罪を述べる。青年アレキサ

ンドロフがこれに感奮して立つてヴェラの辯護をする。聽衆が味方して法廷を騷がし、ヴェラを逃してしまふ。これが機となつて人民が覺醒し、止むなくば暴力によつてロシヤ政治の改革を行はうとする陰謀が續出し、遂に一八八一年の皇帝アレキサンドル二世の暗殺となつた。

此の小說は、明治の文學界に虛無黨文學を移入した最初であり、歷史的にも注目を要する。これより以前、實錄文學としては、この小說の原型である『露國奇聞烈女之疑獄』(十四年、曙新聞、十五年刊)があり、『西國烈女傳』(十四年)中の一節があり、『魯帝弑逆記』(十四年)、『魯國變亂記』(十五年)等があるが、小說となつたのは、これが最初である。夢柳の小說はこゝで、革命文學から虛無黨文學へ轉移して行くのであるが、夢柳の小說の轉移といふことは、同時に當時の政治小說それ自身が轉移したことゝ同じ意味になる。勿論、虛無黨文學といつても、總體としてこれを根底から理解して、虛無黨運動を意識的に日本に持ち込まうとしたものではない。自由民權的立場からこれに接したわけである。虛無黨の人々を自由の鬪士と見、その活動を一種の自由民權的なものと考へて、それに對して漠然としたロマンチックな熱烈な憧憬を感ずると同時に、それは、あくまでも、これに托した政府の壓制を反省せしめ、自由民權のイデオロギイを伸張させることが出來れば、目的が足りたのである。つまり大體の態度としてはフランス革命の小說を利用したと同じことで、多分に警告的、宣傳的なものであつたが、(それは所々に加へてある夢柳の補筆をみても分かる。)この方は歷史ではなく眼前の生々しい事實なだけに、フランス革命よりは效果があつたので、一時虛無黨文學の時代といふものになつた。だが夢柳の小說が自由黨のイデオロギイとあくまで密接に對應してゐるものとせば、たとひ夢柳が意識的には虛無黨運動の移入を意圖してゐなかつたにせよ、自由黨の何處かに幾分變兆を來した、虛無黨的な氣分が勢力を得て來つゝあつたことは事實であり、それの反映としてかく虛無黨文學なるものを存在せしめたのであらう。自由黨中の青年派の激化の如き、全くさう見られる節々がある。かゝることは然し虛無黨文學から學ん

でさうなつたといふよりも、政府の壓迫、黨内の暗流、その他種々な事情から、此の一派の青年達に虚無黨に近い氣持をもたしめるに至つたのであらう。さうして虚無黨文學が强い感情によつて民權意識の徹底に役立つたと同時に、さういふ虚無黨的氣分の强化にも利用された（有意か無意かといふ差はあらうが）といふことは事實と見て可い。

『蝴蝶世界夢の通路』、これは夢柳の政治小説創作の最初かも知れぬ。繪入自由に出たものであるが、七回で中絶して居り、且つ公然と筆者の名を署してゐないが、第二回の末尾に記者夢柳曰く云々と見えてゐるから、正しく夢柳の手に成るものに違ひない。

これは、前年（十五年）の十二月に勃發した福島事件に刺戟されて書いたのであるが、別に福島事件だけを政治小説にしたといふのでもない。だから寓意が二重に重なつて、一寸やゝこしい上に、發端數回で中止といふのであるから殆んで何が何だか、作者の意を捉むに苦しむのである。東京日本橋に會津屋國右衛門といふ豪商があり、これは明治に入つて大きくなつた店である。國右衛門は明治五年十月病死する。後には妻お眞の間に一子國太郎がある。又會津屋の一家に權七といふものがあり、夫婦ともに早く死んで一女お民を殘してゐる。お民は早くから本家の會津屋に引とられてゐたが、子柄がいゝので、國右衛門夫婦は、これを國太郎に妻合して家を譲らうとする。二人はそのつもりで仲よく生長して來た。ところが、國右衛門が死去したので婚禮が延びる、母のお眞が又間もなく死ぬ、婚禮は又延びる。これより會津屋には不幸が續き、番頭の制助が女中上りの女房お專と腹を合せて國太郎お民の若年を幸ひとし、店を勝手に掻き廻す。さうして二人の婚禮はお民二十を過すまで待てといふ。制助お專は國太郎に辛く當るので、國太郎は向島の寮にこもつて文學三昧に耽つてゐる。お民は店の將來のこと、自身の身上のことなどを心配して國太郎の許を訪るが、國太郎は何考へてか取り合はぬ。それで思ひ餘つて身投せんとするのを、乳母のお板に助けら

れる。お板はお民の打ち明け話を聞いて大に同情して味方になる。一方制助お専は、お民の出奔を幸ひ、店を横領するつもりで、わざと默つてゐる。制助はかねてくすねてゐた金を九郎兵衛といふ者の手で、埼玉縣の新開村といふところに貸付ける。それは、此の土地を只取らうとの魂膽からである。そこで村民との間に激しい爭ひが始まり訴訟となる。丁度こゝで中止してゐる。

國太郎といひ、國右衛門といひ、お民といひ、國家國民を寓したもの、制助お専は專制の義を割つたもの、お板は板垣を寓したものといふ風に見て來るといふと、專制政府が國民を虐待して參政權も與へぬ、板垣が國民の味方をして參政權を得させようとするといふ意味が出てゐることは、明白であるが、新開村の件や村民との爭ひが何の意味かこれだけではまだ一寸曖昧を免れぬ。會津屋の字は、正しく福島事件からの連想であるに違ひなからう。後は讀者の推想に任せて置くことにする。

『勤王濟民高峰の荒鷲』も夢柳創作の稗史である。これも繪入自由所載の時のは無署名であるが、單行の時には夢柳著となつてゐる。嘉永の末頃から明治十六年へかけて義賊鷲松の一生の物語りであるが、材料は當時流行の續物風の實説である。

主人公鷲松は、甲州白根嶽の麓の郷士武田某の拾ひ子である。鷲が落して行つたのでさう名づけられる。武田某の家はもと豪富であつたが、猿の祟りで一家死絶え、鷲松だけ殘る。武田に縁ある高林寺の天山和尚が、鷲松の人相を見て、出家させ、悟山と名のらせる。悟山は始めは道德堅固であつたが、同じ寺の惡僧念山に誘のかされて、持ち前の勇猛な氣性から、盜賊の仲間入りをする。念山の前身は殺人强盜の兇状持で龍馬小僧といふものである。悟山はやがて將軍家を倒して人民の壓制を除き、天下を革命しようといふ大志を起し、徒黨を集める。盜賊しては非道の富豪

から金を奪ひ、一には軍用にし、二には善人を救ふ。悟山が江戸に出て大事擧行の機を覗つてゐるうち、孝女歌扇と相知り、歌扇から復仇の大義を打ち明けられるが、ふとした事からその仇が念山であることが分かり、念山に義を說いて孝女に打たれさせる。やがて悟山は秀齋と改名し、浪人の群に投じ、結盟して革命に猛進し、强盜脅迫などをして軍用金を集める。本據の薩州邸を燒かれてからは一同と京都に逃れ、討幕運動に努力する。明治元年の鳥羽伏見に、又上野戰爭に、秀齋は大功を立てる。やがて奧羽も平ぐに及んで、秀齋は一日深く思ふ處があり、天下を革命して人民の壓制を除かうといふ素志が、形を變へてながら殆んど成就したのを見て、飄然と故山を指して還る。その途中沓掛で師僧の天山に再會し、もとの悟山にかへり、師の後を受けて念山等の燒拂つた高林寺を再興し、遂に大往生を遂げたといふ。

此の小說に寓意があるといふことを、夢柳も前編の緒言に匂はして居り、その友花笠文京（渡邊義方）も後編の序文で記してゐる。それはつまり政治的寓意のことで、今もいふ人民を壓制する德川政府を除き、天下を革命するといふ意識をこめて、此の德川政府を明治政府に通はせ、明治政府の政治を壓制政治と見てこれを改革しようと意を示した點にある。勿論それればかりでなく、此の革命が勤王となるといふ思想、即ち民權運動をもつて明治維新の大理想の完成と見る意味もこもつてゐる。更に自由黨に即していへば、自由黨の志士壯士の腕力主義を暗に辯護してゐるところもある。つまり目的は手段を辯解するといふので、悟山等の暴力行爲を辯護するに托して、自由黨の青年連中の疎暴な行動を辯護してゐる。寓意、隱微といふのはかゝる意味のこめてあることを指したものである。

ところで、此の主人公の悟山、即ち秀齊が天下に行はうといふその革命とは何ういふものか。それが注意を要する點であるが、先づ悟山はその一味徒黨に義擧の志を明にしてかういつてゐる、――

我々一致徒黨して斯く盜賊を働くものゝ限りあるの命もて尋常一樣の事を爲しては面白からぬその上に後の世まで

も人々の誹りを受んは必定なれば今より共に大いなる志ざしを惹起し花の都を徘徊して先づ手初めに大小名の金銀財貨を殘らず奪ひ窮民貧者に賑はすべし若し又仕事の案外に容易く行きて勢ひを得たれば其れまで恩を被せ情をかけて窮民貧者を味方となして兵を擧げ年久しくも威權を奮ひ下民を虐げ苦しめし將軍家を擊ち倒して高き譽れを天下に擧げん（前編十三丁）

これで見ると悟山の志すところは「窮民貧者」の救濟と、これを味方にした革命である、いはゆる勞力社會のための政治改革である。語を換へていへば、プロレタリア政治革命であつて、ブルジョア政治革命ではない。然るに自由民權運動は、政治史研究家、殊に犀利な眼光で唯物史觀的に批判を加へる研究家達の common report によるといふと、ブルジョア政治革命だといふことになつてゐる。然るに夢柳の政治小說が、自由黨の准機關紙ともいふべき繪入自由に掲げられて黨員なり讀者なりから喝采されてゐた點からいふと、その寓意はいはゞ自由黨の公認的なもの、自由黨の一般氣分を代辯したものといつても可からう。然かもその公認的な寓意にかういふ非ブルジョア革命的な、プロレタリア的なものがあるといふことは、自由黨そのものゝ思想なり運動なりの一部に矢張りさういふプロレタリア的氣分があつたことの證明になるであらう。他の場所でも、夢柳はさういふプロレタリア的行動、「窮民貧者」の暴動を暗に是認してゐる如き文字を弄してゐる。右の一節を讀んで見玉へ――

（前略）早慶應三年となり亂れ初たる麻糸の淺ましき世の情態を今日より推測すれば世に所謂社會平權權利同等の主義に基き、下民を壓制束縛してその性命財産の生殺與奪一に皆己れが愛憎の勝手に出るが如き惡虐暴戾なる大小名の邸宅は申すに及ばず身は大厦高樓に棲息（すまゐ）してロは肥甘の美味珍肴耳に絶えせぬ歌吹の聲榮耀榮華に暮すものゝ假令隣比（となり）に質草も皆枯れ果て置くものは袖の涙の露時雨濕る竈に朝夕の烟さへ立兼つ暑さ寒さに泣き叫ぶ窮民貧者のありとても見て見ぬ振りの强慾無慈悲親の代から受け續き錏一文を惠まざる豪農巨商の其家へは遠慮會釋もあら

あらしく押入てこの手強き談判金銀財寶を押借せしは治世に在りて法律の大罪人と見ゆれども騷亂革命の時代には珍らしからぬ壯士の擧動實に愉快とも活潑とも稱へ樣なき健氣の心を當時はいづれも知らざりけり（後編十二丁——十三丁）

暗に此等壯士等の行動を是認してゐる如き口吻である。これは一つは、當時夢柳の周圍にかゝう暴力運動の計畫でもあつたことに對する辯護かも知れないので（例へば車會黨運動の如き）、そこは注意して讀まなくてはならぬ。

以上のイデオロギイ的な部分を別にせば、此の作は小說としては極陳腐な、稚拙なテクニクから成るもので、秀れたものでも何でもない。たゞ序文の、小說に依る下層社會啓蒙論は、一寸讀むに値する。

『一滴千金憂世乃涕淚』これは明治初期飜譯小說中の珍品の一つである。稀本といふ點では、有名な『想夫戀』などよりもずつと稀れであらう。原著者は英國の人エドワード・キング、演義者は宮崎夢柳居士とある。演義の二字でその飜譯振りの何んなものかゞわかると思ふ。明治十六年十一月五日「歐米政理叢談」第五十一卷の奧附廣告に、日本出版會社の名で此の書出版のことが見えてゐるが、此の方は出版されなかつたものらしい。然し此の時の廣告は、此の小說の由來、大旨を知るに重寶なものであるから、引用して置く——

右（卽ち此の小說）は先きに板垣（退助）君の海外より携帶せられし書中本年初春英京龍動にて出版せしエドワード・キング氏著作ゼントル・サヴエーヂと題せし一篇を宮崎夢柳の譯述補綴せし者にして此の人間社會は百事萬物悉く邪惡なり須らく進んで改造すべしと云へることを大趣旨とし其間英雄烈女の傳記才子美人の遇合等より魯國の虛無黨佛國の共產黨等の事情を詳說細錄したる政治上の稗史小說なり今般自由新聞より拔萃し猶夢柳氏の校訂を經且つ數箇の密畫を加へて近々出版せんとす云々。

自由新聞所載の時日は、既記の通りである。此の小說の原本については未だ深く知るところがないが、原著者キング氏についてはいさゝか知るところがなくはない。エドワード・キング (Edward King) は一八四八年北米マサチューセッツ州ミッドルフィールドに生れた人で、ジャーナリストを職業とし、一八七五年 "The Great South" を著して有名になつた。これは長い間南部諸州を跋渉した體驗の記錄である。一八七五年から一八八八年までは、米國新聞雜誌の通信員としてヨーロッパ(主としてパリ)に住んでゐた。露土戰爭の時はバルカン地方へ出かけたこともあるといふ。著書には "The Gentle Savage" (1883). "Europe in Storm and Calm" (1885), "A Venetian Lover" (1887), "Joseph Fa'monah" (1893). 一八九六年三月二十八日歿したといふ。即ち『憂世乃涕涙』の原作は、一八八三年作ロンドン發行の "The Gentle Savage" に外ならない。

梗概を語れば――

時代は十九世紀の中頃ででもあらうか。北米合衆國政府では、自家の屬國でもないインディアン、チロキー族の土地を通つて鐵道を敷設する許可を某會社に與へたので、チロキイ族の議會はこれを不當とし、此の鐵道敷設を中止させることを議決し、ブリーザント・メルリノーといふ青年志士を代表として此の鐵道會社の有力者たる銀行家のハルレストンの許に派する。ところがハルレストン一家は歐洲漫遊中であつたので、メルリーも歐洲に渡り、スウイスのインターレークンといふ地でハルレストンに會ふ。始めはハルレストンも取り合はなかつたが、メルリノーの熱誠と才辯に動かされて中止の考慮を約する。メルリノーは猶はハルレストンと交渉を保つ便利から滯在する。滯在中樂師スタニスローといふ者と相知る。

ハルレストンの娘にアリスといふ美人がある。或る日散步の歸途雷雨にあつて氣絕してゐるのをメルリノーに助けられたのが機緣で、二人はやがて想思の仲になる。メルリノーは過激主義の志士で、社會は邪惡也、大破壞して大改

造を加ふべしといふ論を持してゐる若者だつたが、アリスの純情には心を動かし、いさゝか變節しかける。ところへ故國では賣國漢の輩出で形勢不利の報が來る。メルリノーは愕いて故國へ歸らうとベルンまで來ると、故國の同志から更に消息があつて、僞黨の敗北を傳へ、留つてハルレストンの說得に專心せよといつて來た。ベルンにゐる中に、不圖した機會から、メルリノーはスタニスローと再會し、彼がロシア革命黨員なることを知り、互に素志を談じて大に共鳴する。スタニスローとベラの兄妹は此の地に集まつてゐる革命黨員の牛耳をとつて、武器密造にかゝつてゐるのである。（スタニスローはバクニンと師友關係がある（現に此の小說第二十六、七、八回はバクニンの傳記である。これは夢柳が所謂補綴した部分の一つであらう。）メルリノーは遂に革命黨に加盟して、社會大改造の理想を遂げんとし、同黨の指導黨員に會ふためにパリに出かける。

一方アリスの方では、メルリノーを慕ふ餘り病氣になつて、同じベルンまで來てゐたのにメルリノーに會ふ機がなくそれなりパリなる父の許に歸つてゐる。メルリノーはハルレストンがパリにゐる由を耳にし、故國の用事で再び出入する間に、アリスとの舊情が再燃し、社會改造の理想のことや革命黨員との會合のことも一時忘れてしまふ。黨の長老イグナチィスは、アリスを思ひきれとメルリノーに忠告する。さうして自身アリスにあつてメルリノーを思ひきらせる。そのうちにもロシアの風雲が急をつげ、虛無黨は結束して起つ。ベラもロシアに入らんとする。メルリノーは、ベラに約し、故國にかへつて同時に事を擧げんとかゝる。然るにベラは、ロシア入りのため出立の前夜、ロシア政府の密偵の手で毒殺される。女中がその筋の廻し者であつた。ベラが死ぬと、スタニスローが代理としてロシアに向ふことになるが、これまた誤つて爆彈で負傷して死ぬ。死ぬ時同志に重大な自白をした。ベラは妹ではなくて實は彼の情人であり、彼はベラの生命を助けたさに、かねてから政府の手先になつてゐたのだと語る。

故國に歸つたメルリノーは、同志に疑はれてもベラからの打合を待つ。然るにその打合は來ずに、ベラの急死、ス

タニスロー事件の消息が來る。メルリノーはつくづく「情」が革命の邪魔になることを思ふ。そのうちにも米國政府は鐵道政策を勵行することゝなり、チロキイの土地を强ひて借りるため、國境へ大兵を集中する。チロキイの僞黨はこれに內應しようとする。メルリノーは、最初は大志望のため自重してゐたが、遂に一切を忘れて僞黨撲滅に起つ。だが僞黨の姦計で暗打をくひ、負傷して水に落ち、一時行衞不明となるが漁人リォンに救はれ、リォンの山小屋に療養の身となる。所がその家はアリスの女友ケローの母の家であつたので、折柄アメリカに歸つてゐたアリスは雪を冒して尋ねて來る。アリスと會つて間もなくアリスに祕密を托してメルリノーは恨みを飮んで死ぬ。アリスは戀人に遺志をつぐことを誓ふ。

（前略）斯る都城（みやこ）（モスコウ）の中なれど、茲は人家の多からず、竹籬茅屋此處其處に、貧しき民の住居して、見るも憐れの勞役に、其の生活を營む土地、遠く聞ゆる雞犬の、聲より外は物凄じき、傍に一箇の寺院あり。但だ見る土を堆（うつたか）ふして橋と爲し、樹を種へて牆に代ふ。曇花蕭瑟として貝葉荒凉たり。衆佛露に棲んで諸天日に暴らす。草枯れて殘碑を沒せり。未だ何の年の寶刹なるを審らかにせず、塵暗ふして古額を封せり。焉んぞ誰が代の琳宮なるを知らん。遙に見れば疑ふて樵戶と爲す、近く到れば初めて僧家なるを覺ふ。過ぐる頃より此の寺院に、住居へる兩個の僧尼あり。

此れこそイグナチイス、アリスの二人である。二人はかうしてロシア革命に活動しようといふのである。夢柳は此の物語の『拾遺』を出す意志を卷尾にほのめかしてゐるが、それは成らなかつたらしい。

此の小說も社會に相當大きな影響を與へたものと見えて、德富蘆花の『富士』第一卷に次の一節がある。――「駒子の幼時は、一切繪本や草紙物を見せられなかつた。小學時代に、熊本に來て政談演說などした湘烟女史岸田俊子にかぶれて、下通町の潤い二階で、唯一人『諸君』と呼んで、演說の眞似をしたりした頃に一滴千金浮世之淚といふ飜譯小說

を見た。露西亞の虛無黨の事を書いたものであつた。其頃駒子が英語を習ひに往つた英國の女宣教師ブランドラム女史の塾の上級生に警部の細君が居て、其小說にかぶれ、日本も改革するのだと謂ふて、小說の中の可愛い娘の役を駒子に振り、あなたも勉强して其樣に働いて下さい。と大眞面目に駒子に言ふたものだ。」(警醒社版、四七九――四八〇頁)

これはその一例であるが、まだまだ澤山あるかと思ふ。

此の小說の原本が見られないので、飜譯の工合は何んなものか比較は出來ぬが、然し夢柳自身譯といはずに「演義」といつてゐる位であるから、從來の豪傑譯に劣らぬものであることが察せられる、增删勝手といふ手心も勿論加はつてゐるであらう。それに此の種豪傑譯では、往々原作の調子なり主旨なりを全く變じてしまふことがあるので、原作が果して何を描かうとしたものか、何を目的にしたものか、譯本だけ讀んだのでは、分からないが、原作も總體として可成り激烈な思想をもつたものではあるらしいが、題目に考へてみて、何うも本筋は矢張りメルリノーとアリスの戀愛を中心にした主義と情の人情小說で、その傍流として政治的、革命的な分子をもつたものではなかつたかと思ふ。然し夢柳の譯本では全然革命小說、虛無黨文學らしくなつてしまつてゐる、これは恐らく原本のさういふ部分だけを大に强調して、種々な文獻からその邊の知識を增補し、例の宣傳意識にぴつたりはまるやうに改譯(むしろ改作)したものであらう。そこで演義などと逃げたのであらう。だがこれは虛無黨小說としては、前に語つた『寃枉乃鞭笞』の比ではない、更に遙にしつかりしたものである。

自由黨の一部人士が所謂激化して虛無黨に同情をもち、それの立動を宣傳に利用しようとしたことは事實であるとし、何うしてさうなつたか。自由黨はその初めに於ては英米流の立憲代議政治を理想としてゐたものであるが、十年以後ルソオの思想を汲んで天賦の自由、人權の平等の如き思想に接するに及んで、次第に過激的な指導理論をもつや

うになつた(種々な實際的情勢がさうならせもしたのである)。此の際ルソオも大きな影響を與へてはゐるが、一方で萬人幸福に對して平等の權利ありとし、萬人平等自由でなければ社會の平衡が保てないといふ理論をルソオよりも近代的な學術的用語で說いたスペンサアの『社會平權論』(十四年五月、譯書初刊)のことも考へなくてはならぬ。スペンサアの『社會平權論』が自由黨、殊に土佐派の政治意見には大きな影響を及ぼしてゐる。これは理論上のことであるが、又實際上からもかく社會平權を叫ばなければならなくなつて來た。それは、前述の如く當時自由黨は大衆(主として勞役社會、無產社會)を煽揚して味方にする必要から(平等主義から來た方針でもある)、宣傳に有効なスローガンを要した、それで此の平權主義をそのスローガンとして採用したからである。此の大衆に着眼したことの背後には當時漸く識者の注意を惹きつゝあつた貧富問題があること、前に說いた通りである。

かういふ意見をもち、かういふ羽目になつて來た自由黨人士の眼から虛無黨を見る時、我が意を得たと思はれることが少くはなかつたらう。勿論、前にも述べたやうに、根柢の根柢まで虛無黨哲學を突きつめて見たら、これはロシアでなくては生じないもので、自由黨の精神とは一致しないところが少くないことに氣がついたであらうが、當時の血氣の青年にさう微妙に頭を働かす餘裕などない、たゞもう漠然と總體的に虛無黨の悲壯な健氣さにうたれて、無我夢中に同感してしまつたといふ氣味がある。萬人の幸福と自由の爲めに身を棄てる、全能ともいふべきロシア政府を僅僅幾十幾百の力で啣へて振り廻はすやうに痛快に手を燒かせる。そこに何ともいへないロマンチックなヒロイックな感情を燃やして、滿たされない若い反抗心を空想的に滿足させる。虛無黨に同情した自由黨人士の心裡にはさういふものが一杯潛んで沸々と熱く湧き上つてゐたのであらう。夢柳はこの小說の或る箇所で、かう附言してゐる、「此一回は前回よりひきつゞきベラー、メルリノーが世を憂ふる熱心より覺えず粗暴過激の言語を發し我が日本の如き皇統一系萬代不朽實に一種特別の國土に住居ふ臣民の心情に取りては讀むに忍びず看るに堪ざるもの少なからず」云々。私

はこれを恐らく夢柳の衷心の言であらうと考へるのであるが、或は一種のカムフラージュだと見る人々があるかも知れない。それは何れにせよ、然し道理の上からは、何人とて虚無黨を非常にいゝものとも、そのまゝで日本に移入出來るものとも考へなかつたことと信ずる。だが轉じて感情上の事となれば別問題である。そこには何かにつけて抑屈して伸びぬものがあり、鬱々として快よからぬものがあり、不自由、窮屈、不如意、何ともいひ様のないものがあつた。虚無黨の言動が此の氣持を發散させるに効果的に役立つたことは事實であらう。此の邊の事情からして又、虚無黨の言動を宣傳に利用することにもなるわけである。

此の小說の中の虚無黨に關する知識を並べてあるところは、大抵は演義者夢柳の補入ではなからうかと思ふが、原本を見てゐないので何とも斷言出來ない。たゞ主人公ブリーザント・メルリノーや虚無黨の女鬪士ベラの言說などには夢柳の補入でないものがあるに違ひない。例へば、メルリノーの社會改造の大旨——

眼を開ひて獨り熟々。人間社會の現狀を。顧みながら人は皆な。皮相の觀に惑はされ。世は文明なり開化なり。實に完全と愚かにも。滿足せしが如くなれど。試みに見よ政治法律。その他百般の事々物々。いづれも邪惡の極度にして。眞理公道と云へることは。口にも唱へ字にも書き。假初にも能力を。有するものゝ誰一人。辨へぬはあらざるに。哀ひかな實際は。情慾の爲めに蔽はれ來り。優勝劣敗弱肉强食。國と國との關係より。人と人との交際迄。表裏反對一として。眞理に適ひ公道に。基きしもの更になく。想へば嗟嘆の限りなり。如何にもして此組織を。改造せんと勇敢にも。無比の大志を抱きしゆゑ云々（卷之一、第三回三丁裏）

これは政治改革といふよりも社會改革で、夢柳等の正面的主張とは大分違ふ。又ベラの一般社會に對する不平（卷之一第十七回、第十八回）、ベラは、平等自由なるべき人間が人爲の桎梏に束縛されて、一は勞役者として終始勞役止むなく、一は貴族として勞役者の稼出せる米錢を酒色に浪費する上、勞役者には生命の安心もない專制的社會組織を怒

つてゐる）、及びロシヤ社會の改革の必要（卷之一第十八回廿三丁表）も、矢張り單なる政治改革ではなく徹底的な社會改革を欲してゐるものである點に於て、自由黨、從つて夢柳の正面的主張と大分違ふから、これ等は夢柳の補筆ではあるまいと考へられるが、或は此の後者の方（ベラの意見）は、勞資關係の强調されてゐる點などで、多少のイデオロギイ的添加乃至變更が行はれてゐるかとも疑はれるが、少くとも前者は原本にあつたものであらう。その他の虛無黨關係の記述は大抵夢柳の補筆であるらしく、よく讀むと、何等かの點で自由黨なり乃至夢柳なりの自由民權論的イデオロギイが附加されてゐるのである。そのうちでも、（卷之二）第二十六――二十八回のバクーニン傳（此の傳を借りて虛無黨の發生を說いてゐる）、同第三十一回の虛無黨事情の條などは、附加物の極めて薄い部分であるが、大抵は可成り濃く附加物を被されてゐる。例を出すと、（卷之二）第十二回、社會邪惡の實例として、メルリノーの故國チロキイの形勢を說くところに、僞黨一味が米國鐵道會社から賄賂をもらつて「主義を變じ節操を換へる」云々のことがある。此の時彼等は眞正の有志から擯斥されたのを恨み、豫ねて地方に虛譽を得てゐるのを幸ひとし、新聞言論で眞正の有志を讒謗する、さうして將來見込がないから脫黨したといふ聲明を出し、一方では「鐵道會社の內意を受けて益々奸曲を働くゆゑ」有志も怒つて遂に僞黨撲滅の運動となるのである。これは勿論自由黨の改進黨攻擊の餘波で、鐵道の賄賂云々は三菱會社の黃白で動いたといふこと、脫黨云々は、板垣洋行費問題で、末廣鐵腸、馬場辰猪、大石正巳等が憤慨して脫黨したことを利かしてゐるのである。又（卷之一）第十四回、メルリノーがベルン市街見物で、貧民の狀態に大に同情し、貧富問題から社會の邪惡を論じてゐるが、これなども、前々いふ當時の貧富問題（勞資關係）を反映してゐるに違ひない。（卷之二）第十九回、虛無黨員イグナチイスが、虛無黨の目的が萬人の幸福の建設にあるので、決してたゞ破壞をもつて快しとして止むものでないことを說き、世人の誤解から徒らに過激視されてゐる點を縷々辯じてゐるが、これは虛無黨の辯護であつて、同時に自由黨に對する世評への抗議でもある。（卷之一）第二

十三回、歐洲に於ける社會主義、革命思想の起源を論じ、社會黨、共産黨、虚無黨などの發生するのは、政府が自分で當然改革しなければならぬことを改革しないからで、かういふものが出たら自分で反省して早く改革に着手するのが道であるのに、改革の方は一向棄てゝ置いて、かういふ改革主義者達を威力で壓迫するのは、間違つてゐると語つてゐるが、これは歐洲の事實に托して當時の明治政府に對する警告を寓したものである。(卷之一)第二十四、五回、虚無黨の祕密會議を寫してゐるが、これは自由黨有志の密議會をモデルにして潤飾したものではなからうか、「滿場の人々は。互ひに所見を陳述し。討論誠に過激々烈。或ひは寒き易水の。荊軻の跡を慕ふものあり。或ひは遠き博浪の。子房の心を稱むるもあり。就中老翁は。漸進ならねど輕卒の。擧動の功を成さゞるを。人々に說き諭し今日の最大なる。急務と云ふは外ならず。我黨の人々が。其處此處に散在して。世の風潮を激發し。徒らに理論に走り。實地實際に事を行ふ。勇氣なき情狀を。改良するの手段にありと。議論も已に盡きしより」云々といふ語は、自由黨に對する夢柳の叫びかけと解されはしないか。(卷之二)第四十回、ロシヤに於ける政府の壓制政略、祕密探偵の横行、民權志士の受難、地方官吏の暴政等を敍べてゐるのは、ロシヤに托して時政に對する憤慨を洩らしたところが見える。殊にロシヤ人民が皇帝陛下に對する上書は、例の虚無黨がロシヤ帝に奉る檄(當時の新聞に見えてゐる)から來たもので、原本にあるのではなからうと思ふ。上書は政府に壓制政治の中止を命じ、密偵を放逐し、人民に自由を與へると、革命も虚無黨も直に止むべしといふ意を痛烈な語句で述べてゐるが、これは、人民の上書に托して自由黨の政治的主張を寓したものであらう。暴力が我が黨の本旨でないと重ね重ね辯じてゐるのも、自由黨の爲めに抗議してゐるものと解して可い。

以上の如く、夢柳の補筆が相當澤山あるらしいから、これも亦た例の豪傑譯たること疑ひなしといつて可い。演義と逃げたのは尤もである。虚無黨文學として、從來は同じ夢柳の『鬼啾啾』が代表的な作物となつてゐるが、私が讀

んだ結果からいふと、此の小説も、『鬼啾啾』に劣らぬ強い感情をもつたものであると斷言が出來る。讀者はこの點記憶されたい。

小說として、テクニク上からの議論は、原本未詳の今日、先づ止めて置いた方がいゝ。だが大體は才子佳人人情小說らしいのが自由民權乃至虛無黨主義の宣傳小說と化した結果、筋にも不自然が生じ、首尾朦朧たるところも出來、性格がまるで崩れてゐる。メルリノーの煩悶も今少し强い深い描寫をしないと、輕薄才子めいたものに見えやう。スタニスロー、ペラなどの方は斷片的ながら强く表はれてゐる。末段メルリノーとアリス再會の場は、再會までの說明が今少しないと、全然戲作稗史式の不自然な趣向となつてしまふ恐れがあらう。

『龍動塔話』わざわざ意譯と斷はつてあるから、その譯し振りは想像がつくと思ふが、有名なウイリアム・エンズワースの『ロンドン塔』の第一篇第一章の約四分の三ぐらゐのものを手加減自由自在の太平記調且つ馬琴調で四回にわけて引のばしたものである。たゞ原書の大旨なり、こゝつなりはしつかり握んでゐる。卷首に括弧して（板垣先生歐洲より携帶の書に係る）とあるから、明治十六年六月板垣退助が歐洲漫遊から歸朝の際に持つて來た書物の一つであることが分かる。書出しのところにロンドン塔に關する解說を述べてゐる叢談子といふのは、夢柳ではあるまいが、よく要を摘んでゐる。「抑も此の塔は昔し英國の專制政治たる時代に方りて惡むべく悲しむべきの牢獄となり當時暴君奸相の爲めに厭嫌忌憚されたる幾多の志士仁人が塔内に幽囚せられて殘忍苛酷なる刑に處せられ滿地の熱血を灑ぎ千歲の冤魂を留めたるの舊跡なるが故に今に至るまで佛國巴里の牢獄たりしバスチール城と共に永く世人の記性に印し遊客の其地を經過する每に尙は存在するところの斷頭機上の血痕を認め又獄室の壁面に囚人の手づからなる詩歌を鐫入し堪ゆべからざる悲憤慷慨の情を寫せしを見て以て壯快活潑なる自由革命の一大氣運は此の慘憺悽愴の中に胚胎し

來りしを回想し感淚の衣襟に滴るを覺えずと云ふ」云々。

本文は、ジェーン・ダッドレーが父と夫の野心の犧牲となり、女王の冠を戴かされるためにノーザンプトン公の邸からロンドン塔をさして船行列美々しく練り出して來る、途中何處からともなく彼の女の船の前に奇怪な老婆と子供が現はれて不吉な豫言めくことをいふところで終つてゐて、完成してゐない。譯文は太平記調と馬琴調を交ぜ合したやうな流麗なものであるから、讀んで美しいことは美しいが、あまり意譯々々と手加減を試みた結果、少々可笑しなところもなくはない。本文冒頭――

但た見る四通八達の街衢は鐵路長く琴絲を曳き電信高く蛛網を撒じ、櫛比鱗次の家屋は白堊遙かに朝暾に輝やき丹瓦聳えて映霞を籠む、大小の店舖幾千萬の人の影、長短の橋梁東西南北の車の聲、瓦斯燈は夜を照して花を散する如く蒸汽船は水を蔽ふて山を築くに似たり繁華の景況雜踏の情狀は實に目を驚かし魂を褫ふ這は是れ世界第一とその名も高き英吉利の龍動府とぞ知られたる。

成る程十九世紀のロンドンならこれでもいゝかも知れないが、十六世紀のロンドンでは何うであらう。勿論かういふ文句は原書には一つも見當らない。然し夢柳當時の大衆讀者にはかういふロンドンの描寫の方が却つてよく頭に入つたのかも知れない。譯出の動機は、勿論叢談子の所謂「壯快活潑なる自由革命の一大氣運は此の慘憺悽愴の中に胚胎し來りしを」回想せしむるため、これを回想せしめて民權イデオロギイを強めるためであるに違ひない。こゝに於て又々デュマの場合と同じ意圖が出て來る。これは『ロンドン塔』は必ずしも革命小說ではないからである。

『**佛蘭西太平記鮮血の花**』これも題名で想像されるやうに飜譯小說であるが、この小說で夢柳は今一度フランス革命へ歸つてゐる。これの原作に就いては夢柳はかう記してゐる――

此の一編の小說は元と學士デューマ氏の著作に係る「メモリイ・オフ・フジシアン」と題せしものにて亡友百華園主人曩きに之れを譯し西の洋血潮の小暴風と題して自由新聞に掲げたりしが未だ業を卒へず空しく別世の人と爲りしは遺憾と云ふべし故に余は其の稿を續ぎ毎號之れを本紙（自由燈）に載せんとす云々。

劈頭暴力革命の慘禍を說き、本書の譯述は此の害毒を明知せしめる爲めと斷つたり、聊か戒心する所があつて原書の儘に譯すと蛇足を添へたりしてゐる所は、眞實藥の效き過ぎを恐れたといふところもあらうが、寧ろ厄除けの呪文と見て可い。それにしても再應『西洋血潮小暴風』のことを物語らう。

發端は一七七〇年トンネール山の廢墟に於ける鮮血革命黨の祕密會である。ジョセフ・バルサモーは始めてこれに加はつたがその智辯膽勇で會議の牛耳をとる。集まつた志士は各自の仕事を分擔して散會する。バルサモーはフランスの革命を分擔する。

バルサモーはパリに向ふ途中大雷雨に遭ひ、落雷にうたれて氣絕する。そこを通り掛つた一青年ギルベルトがこれを助ける。ギルベルトは附近のバール・ル・デュークのタベルネイ男爵家の書生兼下僕（實は乳母の孤兒）で本篇の主人公である。ルソオ『民約論』の愛讀者で熱烈な自由論者であり、男爵の客嗇と壓制に憤つてゐる。バルサモーは男爵を金で欺いて逗留して養生することを許される。或る日、思ひがけなく此の家の長男のヒリップが來て、皇太子妃として御入輿の途中にあるマリー・アントアネットがわが家に立ち寄ると注進する。男爵はその光榮に恐懼する。バルサモーはマリーに謁見し、妃の將來を繪に描いて占ふ。マリーはその恐しさに卒倒する。バルサモーは護衛の白刄銃口を逃れて身を掩す。マリーはタベルネイ家に殊遇を與へ、男爵を供奉の列に、娘アンドレーを宮女に召し出し、支度金を與へて、後から來れといつて先づ急いて去る。タベルネィは手落なく支度の上、費用の上からギルベルトに暇をやる。ギルベルトは兼々アンドレーに戀してゐたが、主家の一行が明日パリに去るといふ前夜アンドレーの寢室

に入り痲睡劑で正體のない彼の女を犯す。主家の一行は女中ニコールも伴ひ、パリに上る。ギルベルトは數箇月の內は手當金や何かで生活してゐたが、田舍に埋もれるに忍びずパリに上る。途中路銀を失ひ、暑氣と空腹と疲勞のために氣絕する。そこを通りかかつた一人の美人が助けて馬車にのせパリへと急ぐ。

『鮮血の花』の物語はこれに直に續く。ギルベルトを助けた美人はマリー・アントアネット事實はデュバリ伯夫人、アントアネットの敵の宮女で、王黨派の一人なるシオンといふ女性である。ギルベルトを助けたのは物の役に立つ若者と見て、王黨方に引き入れ、自由志士等のスパイに使はうとしたのである。それと知つてギルベルトは監禁された家を脫する。パリに赴いて、ルソオの弟子になるつもりで走つたが、路に迷ひ、雷雨にあつて野宿する。翌朝、ギルベルトが眼を醒して出かけやうとすると、程近い草原に身を橫へて讀書を樂んでゐる一人物がゐる。初めはギルベルトがパリへの方角を聞いても答へさへしなかつたが、やがて打ちとけてパリへ何の爲め行くかと問ふ。ギルベルトは、ルソオの弟子になつて學問修業し、自由擴張壓制排斥に盡力したいといふ。その人は、ギルベルトを伴つてわが家に來、食客とする。主人の留守にギルベルトは一編の懺悔日記を見つける。天地間これ程壯快な文字がないと思ひ、やがて此の家の主人こそルソオなのだらうと察する。主人が歸ると、さう打ち明けて、改めて入門を乞ふ。ルソオも隔意なく貧乏生活を共にすることを許す。ギルベルトは寫字生となつて生活を助ける。一日ギルベルトは町の酒場で鬱懷を慰めてゐると、明日マリー・アントアネットがサン・デニーの尼僧院に參詣に來る由をきく。そこで急にアンドレーに會ひたくなつて、明日又出かける。アンドレーに會ひはあつたが、タベルネイに叱り懲され本意なく別れる。だが何うしても思ひきれず、歸途アンドレー父娘の馬車の跡をつけると、意外とも意外、自分のゐるルソオの家と背中合せの表屋敷がそのタベルネイ家なのである。これよりギルベルトは勉强に事よせて裏手の部屋に籠り、アンドレーの起居を窺ふ。ルソオ夫妻は漸くギルベルトを探偵に非ずやと疑ふ。思ひ切つてギルベルトに告白させて、アンドレ

ー一件を知り、安堵する。一方バルサモーは此の頃バスチール城の附近に姿を現はし、要害を探りつゝ、祕かに大事を擧る機會を待つてゐる。

ルイ十五世の寵姬デュバリ伯爵夫人は心配してゐる、それは今度太子妃アントアネットが召つれたアンドレーが非常な美人であり、王の心がこれに動いて行くといふ噂を耳にしたからである。事實又、デュバリの反對派は、アンドレーを餌にして王の寵を奪はうとかゝる。デュパリーの弟ジャンは姉の心配を見てゐられず、アンドレーの樣子を見に太子妃の宮に出かける。

一八七四年七月二十八日は、太子ルイと太子妃アントアネットと正式に大婚禮式を擧げる日である。此の日種々な祝祭がある筈になつてゐるが、目出度い當日になつて種々異變が起る(假に大風がふくとか故なく人が驚動するとか)人々は表面祝つてゐるうちにも何事かありはしないかと不安がる。果してその不安が的中して、花火の爆發から近くの火藥樽にうつり、大騷動となり、見物人に多勢死傷が出來る。タベルネイ一家も、勿論太子妃の氣に入りのことであるから擧つて出かけてゐたのであるが、いざ騷動となつて、逃れ出る人々の間に離れ離れになつてしまふ。ギルベルトは偶然にもアンドレーに出會ひ、彼女を助け出さうとしてあがいてゐるうちに、更に爆發があつて、二人とも負傷して人事不省になる。だがギルベルトは自分の倒れる前に、アンドレーを丁度見かけたバルサモーに托する。

アンドレーの兄ヒリップは頻りにアンドレーを探してゐる。ルソオは又、ギルベルトの身を氣遣つて探しに出かける。その間に「平民」醫師マッーの奔走がある、彼は平民の治療を第一にするので、「平民」醫師といはれてゐるのである。

ギルベルトは助かつてルソオの家で養生してゐる。さうして二階の部屋から矢張アンドレーの邸を窺つてゐる。一夜ニコールは此の頃新に出來た戀人ボージールを引き入れたまゝ門を開け放しにしてあるのを知り、ルベルトは二

階から飛び下りてタベルネイ家へ忍び込む。さうしてアンドレーとタベルネイの話を洩れ聞き、アンドレーがバルサモーに助けられて無事歸つたことを知り、安心する。さうして我が家へ戻らうとする折、丁度來かゝつたニコールに見つけられてしまふ。

これがコリンズ叢書版の英譯三冊本のうち、第二部の『デュバリ伯爵夫人』の略ぼ四分の三程のところまでに相當してゐる。此の物語全體として約三分の二程に達してゐるあたりであらう。(右の梗概は、原本からではない、わざと夢柳の紹介してゐるまゝのものからとつたので、原本の方とは多少の相違があるかも知れない)。

譯が依然典型的の豪傑譯であることはいふまでもない、又イデオロギイ的添加があり、增刪省略勝手たることも、いふまでもない。今繰返して詳しくいはぬことにする。緒言で「原書の儘に譯す」等と言譯してゐるが、たゞ大筋をデュマの原作に借りてゐる外は創作に近いものである。たゞ流石に用心したものか、彼が「一片の精神自づから抑制する能はず行文常に危險激烈なりし」と評した櫻田百華園の文章に比較すると、大分穩やかにぼかされて、感情的分子が緩くなり、その所謂「壯快活潑」の度を幾分減じてゐることは事實である。緒言に述べてゐるフランス革命論、それから延いての平和革命と暴力革命の論は一つはカムフラージュでもあるが、又一つは爲政者に對する警告でもあらう。

正直にいふと『鮮血の花』といふ題目は、夢柳が譯した部分に對しては相應はしくない、これは恐らく櫻田百華園の譯した『西洋血潮小暴風』中に見えるバルサモー等の鮮血革命黨といふ語句から連想したものであらう。原本の方は丁度この部分はルイ十五世を中心とした宮廷生活、戀愛遊戲、桃色陰謀の如きものが主體でバルサモー、ルソオ、マラー等の革命的活動が陰の方に廻つてゐるのであるが、夢柳は逆に成るべく宮廷陰謀の駈引などを省いて、バルサモー、ルソオ、マラー等の活動を表面に出さうとかゝつてゐる。だからこの人々の關する限り(殊に末段マラーの平

民主義が躍如と出てゐるあたりは)、政治小說としての宣傳的價値はもつてゐるには違ひないが、總體としては次第に正直に素直に譯して來てゐるので、元來宣傳小說ならぬ此の小說の本體がやゝ出過ぎてゐるやうに思はれる。それだけ革命文學としては、微溫的な結果になつてゐる。

『虛無黨實傳記鬼啾啾』は、『自由乃凱歌』と並んで夢柳小說中の代表作の如く有名になつてゐる。此の小說を著とするか譯とするかは異論がある、夢柳は自ら著と表してゐるが、有體には纂譯とでもいふべきであらう。然しそれにせよこの譯といふ語に著と甚しく相異した意味をもたせてはならぬことは、前々の譯の例の通りである。夢柳自ら此の小說の由來を述べていふ——

(前略)頃日偶々「地底の祕密」と題し、彼の全世界に向つて至大至强の感觸を與へ人々の注意を喚起したる魯國虛無黨の形情を記せし一書を得たり抑も此の書は一千八百八十二年卽ち我が明治十五年の春三月英京倫敦に於て魯人ビレウロッフ氏の手記せしものなり(中略)其の說く所精確切實(中略)加ふるに該黨の領袖たる人々の詳傳をも掲げたる故一讀人をして身躬ら魯國に至り虛無黨と相往來して其の事情を知悉するの思ひあらしむ(中略)余感歎措く能はず直に全篇を譯出せんと欲す而して又心竊に憚るところあり果さず遂に篇中兩三人の事蹟を拔萃敷衍して且つ近日西字新聞の傳ふるところを參酌して此の一部の小說を作れり(下略)(自由燈、十七年十二月十日)

「地底の祕密」とあるのは、本文を讀んで明らかに『地底のロシヤ』のことだとわかる。レウロッフの手記とあるのは夢柳が序文の記者ラウロッフを著者と誤認したので、有名なステプニャクの著たることはいふまでもない。八二年はその英譯の出版された年である。恐らく此の書も外國から板垣がもつて來たものゝ一つであらう。夢柳は、原書、西字新聞の外に『鬼啾啾』より前に日本に紹介された虛無黨文獻(田島象二『西國烈女傳』ヴェラサシュリッチの項柚田策太郎『烈女之疑獄』、西河通徹『魯國虛無黨事情』、川島忠之助『虛無黨退治奇談』など)を悉く涉獵して作中に

利用してゐる。その他夢柳自身の想像や創作も可成り多分に加はつてゐる。『地底のロシヤ』そのものに就いてさへ、勝手に剪裁綴合してゐる。著と署名したのはその爲めであらう。

挿話の長い割合に、本筋の物語は長くない。一八七八年の秋若い男女の虛無黨員が露都彼得堡で祕密內閣議長警視總監メセンチエフ中將を暗殺する。これが發端である。兇漢は二人とも、ネワ河に身を投じて逃れ去る。こゝに虛無黨の歷史、主義、成因について長講があり、一原因としてヴェラ・サシュリッチの警視總監トレポフ狙擊事件を說き、さて男女刺客の成行に及んでゐる。男の刺客はブラントネル、女はソヒヤ・ペロウスキー（ペロウスカヤ）といふ。ブラントネルは同志のリソップとその娘アレイに救はれる。アレイは思ふところがあり、リソップとブラントネルをわざと密告して入獄させる。これは獄中のクラポキン侯を脫出さすための苦肉の計である。クラポキン脫獄の計は見事成功したので、更にリソップとブラントネル救出の計畫が立てられる。これも成功して、二人は救出されるが、一寸油斷してゐるところを、隱家を警吏に包圍され辛うじて散々にのがれる。一人アレイは重傷を負ふて死ぬ。ソヒヤの方は氣絕して河水に漂つてゐたのを漁人に救はれ、モスコウ附近の廢宅を隱家として同志と交通してゐる。こゝでソヒヤの傳が數回つゞく、夢柳はソヒヤが大に氣に入つてゐたらしく、筆力を盡して描出してゐる。此の隱家で黨員が討論した結果、全力を擧げて暴力運動を續けるに決し、先づ時の露帝アレキサンドル二世の暗殺を計る。所が九分通り成就したと思つてゐると、パリにゐるクラポキン侯から、足がついたから用心せよといふ飛札が來る。ソヒヤとリソップは父娘に化けて國境邊の汽車でパリから來た祕密探偵を欺いて密書を奪ふ。だが遂に計畫が露見する。黨員は止むなく逃れて再擧を試みる。此の間虛無黨が宮廷に血染の諫告書を投げ込むなどの怪事がある。遂に一八八一年春の露帝暗殺の大變となる。ソヒヤその他は捕はれて處刑されるが、虛無黨の勢は日に日に強くなつて來た。

各刑場に近接せし埋葬地は日々に穿たれ古苔舊艸を見ざるの光景慘憺たる情勢は人をして魂消ゑ腸斷ゆるの思ひあ

らしむ或は云ふ夜陰風雨のときに當らば從來死刑に處せられたる幾百千の虛無黨の幽魂四方より飛び來りて聖彼得堡府の中にも最とも廣衙大路ネワ河の流れに沿ひ大帝彼得の騎馬像を安置したるところに聚り一團の燐火となつて焰々と燃ゆるかと思ふ間もなく散亂しいつくとなく滅ゆるや否や啾々たる哭聲あり遠く耳を欹つれば悲雁の長空に鳴くが如く孤猿の斷橋に叫ぶが如く忽ちにして擊筑變徵の音を成し忽ちにして彈絲絕紘の響を起し愴然悽然聞くに忍びず良あつて又た燐火となり帝宮の上に至つて呵々と笑ふなど怪しきことの多しとかや云々。

と結んでゐる。全篇痛烈悲壯の氣が滿ちてゐて、文章に光焰があり、讀者に深刻な感銘を與へる。これを小說として見るときには面白さは『虛無黨退治奇談』に及ばぬかも知れぬが、煽情文學乃至煽動文學としては、此の種のものゝ隨一であらう。

以上の梗概によつて、夢柳が描かうとした二三子云々といふのは、ソヒヤ・ペロヴスキー（ペロヴスカヤ）、クラポトキン侯、リソップ（リソガップ）ブラントネル等であり、西字新聞等で補つたといふのが、ヴェラ・サシュリッチの傳と虛無黨の言動に關する知識的部分であらう。又その中で夢柳の創作や想像があるといつたが、その例を二三擧げると、ソヒヤは勿論大體は、夢柳の描いた通り、美人で辯力膽力無双の女性ではあるが、大抵は黑幕參謀か黑幕指揮官で、メゼンチェフの暗殺の如きには、自分で手を下してゐない。手を下したのはミハイロフその他といふ。又此の小說ではソヒヤの相手方として恐ろしく偉い人物になつてゐるブラントネル、これも實在の人物ではあるが、夢柳の考へたやうな偉物ではないらしい。夢柳のブラントネルは、その行事から考へて有名なヴァレリアン・オスシンスキイ、それからソヒヤの愛人だつたアントレー・シエリヤボフを合して造り上げたものらしい。ステプニャクの書にも、クラポトキンの逃走にはオスシンスキイが大役を演じたことを書いてあるのに、夢柳は何故ブラントネルなどといふ比較的有名でない人物に大役を演じさせたものか、一寸考へがつかない。又アレイといふのは夢柳の點出した烏

有の女性らしく、リソップ即ちリソガップにはさういふ名の娘がゐないらしい。

ヴェラは前に出した『寃枉の鞭笞』を殆んどそのまゝ編み込んでゐる。然し彼女はメセンチェフ暗殺には何の關係もなかつた。

此の小說が「虛無黨實傳記」と冠し、如何にも虛無黨の事蹟を傳へることが主であるかの如く見せかけてゐるが、事實は矢張り虛無黨を傳へるのみが目的ではない、その邊の消息は緖言で多少窺はれる「余曩きに佛蘭西革命記自由凱歌、一滴千金憂世涕涙等の諸篇を著はし、之れを世に公けにせしが、幸ひに讀者の評奬を辱なふせり。因りて復た將さに他の政治上の稗史を稿せんとせしも、之れが好材料なきに苦しみ居たりしに」(單行本緖言)、丁度『地底の祕密』と題する好い種本があつたので、これを使ふて云々といふ由來書きになるのであるが、これを種子に使つて好い政治小說を作らうといふ心算でかゝつたのであるから、たゞ虛無黨の言動を傳へて能事足れりとしたのではない。『憂世の涕涙』などと同じく大にイデオロギイ物添加物があるものと考へなくてはならぬ。

本書第二回(單行本)の虛無黨の本質、虛無黨の沿革を述べたところはステプニャクの書の序論を中心にしたもので割合イデオロギイ的添加が少ない方であるが、それでも仄見えるものがある、例へば本序論のところで、特に虛無黨が工匠社會に力を入れてゐることを力說してゐるのは、貧富問題、勞資問題を控へた時代への呼びかけである。同じく發生の理由の條で、農民の重稅のことを細かに說いてゐるが、これは、當時農民が不景氣で、重稅に惱んでゐるといふ事實をこゝに寓したものに違ひない。メセンチェフ暗殺の理由も、時の當局者に對して聊さか諷するところがあつて筆を執つたものであらう。同じく第二回ツルーブレッコイ・パッションといふ監獄の有樣、悲慘とも不潔とも、暴虐とも形容出來ない有樣、これも矢張り當時の志士を收容した監獄なり役人の態度に對して多少反省をもとめる意味が見えてゐる。第三回農民總代が租稅輕減嘆願の爲め上京して方々に奔走し、結局何處へ行つても筋違ひの扱ひを

受けて、止むなく歸國するところは、明治十三年の國會期成同盟會の總代が太政官や元老院を歷訪して、自由民權、國會開設の急務を論じ立てた時の實感が大分雜つてゐると思ふ。自由黨の人々には（一般の讀者にも）これだけを讀んでも胸にこたへるところがあつたらう。同じ第三回、官吏の干涉壓制、暴橫等も、必ず諷するところがあると見る。

第四回、虛無黨の綱領中、改革實行のプログラム——

（中略）故に吾人は第一現政府の重荷に苦呻するところの露西亞人民を救護して、此の國難を脫せしめ、人民をして自由權利を得せしむるに足るべき政治上の改革を爲すことを望まざるを得ず。第二民意を表言するものは國會なり、然れども、普通選擧法に因て選擧したる代議士を以て組織せられし國會にあらざれば、充分に此目的を達すべからず。故に吾人は斯かる國會の設立を望まざるを得ざるなり。（中略）

これは勿論全文夢柳が創作したものではないが、たゞ前後を通じての剪裁は夢柳の手に成り、而かもそれが「露西亞」といふ文字を日本と代へると、そのまゝ自由黨の政治改革のプログラムかと見擬ふが如く出來てゐる。そのプログラムの細目に於いても——

第一以上に述べたる主義に依て國會を設立し全國々事上の主權を之れに與ふべき事、第二地方官吏を民選にし、郡村の自治を定め、理財上の獨立を立て以て大に地方自治の制度を興起すべき事、第三地方議會をして充分に理財施政の權利を得せしむべき事、第四土地に關する人民の權利を確定すべき事、第五力役社會の手に製造事業を與ふるに至るの處置法を立つべき事、第六宗敎、思想、結社、集會等の諸件をして全く自由ならしむべき事、第七選擧は凡て普通たらしむべき事、第八常備軍を廢止し護鄕兵の制を立つべき事、云々

此等の箇條は實際に於て虛無黨が表明したものに違ひないが、それが矢張り夢柳の手で多少辭句が補訂されて全然自由黨年來の主張と同一步調に化せられてゐる。虛無黨のプログラムのまゝでいふと、此の第四項は土地國有の提唱で

ある。それが「土地に關する人民の權利を確定すべき事」と極めて鈍角的にぼかされてゐる。又第五項は工場を勞働者の手に引き渡させるといふ强いものであるが、それが「力役社會の手に製造事業を與ふるに至るの處置法を立つべき事」などと訂正されてゐる。此等の點を考へても、夢柳が虛無黨の言動紹介のため如何に苦心したかといふこと、同時に如何にこれを自由黨精神の宣傳に利用したかといふことが分かるのである。第四回密偵（スパイ）が虛無黨員の仲間に入つてわざと過激論を唱へて如何に人々を挑發するかといふことを說いたところにも勿論、當時の實情の反映があらう。

第十回モスコウ郊外の怪邸宅の趣向は『憂世乃涕涙』や、『寃枉の鞭笞』などにも出て來るもので重複してゐるが、事實ソヒヤが主になつてさういふ家を借りてゐたことは事實であるといふ。然しただ此の家での黨員の會議の光景の如き、幾分自由黨の靑年派の間にも同樣なことがあつたのではないかと思はれる。第十一回には此の家から鐵道線路まで爆彈仕掛のための地下道を掘るところがあるが、これも事實であらう、だが川島氏譯の『虛無黨退治奇談』（明治十五年刊）に負ふてゐる趣向たることが明白である、又國境上でソヒヤ、リソップが政府の密偵から密書を奪ふのも、同じ小說から借用したものであらうと思ふ。最後に第十二回、虛無黨がロシヤ皇帝に上つて憲政實施を諫告する書があるが、夢柳はこれをアレキサンドル二世に上つたものとなし、二世帝がこれを容れぬので明治十四年三月一日の大變が起つたものであるかの如く說いてゐるが、事實は、三月一日の事件の直後、虛無黨の實行委員から二世帝の嗣たるアレキサンドル三世帝に上つたものなのである。上書の文章は長過ぎるのでこゝに引用はしないが、原文上書と比較すると、可成り潤飾訂刪されて、例によつて自由黨精神の宣傳に都合のいゝものになつてゐる。

以上によつて、此の小說の主なる目的が、虛無黨の言動そのものを忠實に傳へるにあるのではなく、寧ろこれに、托して自由民權、自由黨精神を宣傳する點にあるといふことが想察されるであらう。

こゝに注意すべきことは、『憂世乃涕涙』に於いても『鬼啾啾』に於ても、虛無黨の手段が結局テロリズムによつて

ゐることは同じであるが、兩者に描かれてゐる虚無黨の目的が違つてゐることである。『憂世乃涕涙』に於いては專ら社會革命を志し、あくまで、ロマンチック、理想的(寧しろ空想的)破壞的であるが、『鬼啾啾』に於いては、立憲政治を志すところの現實的な建設的なものになつてゐる。これは恐らく明治十六七年當時の客觀狀勢の變化、暴動頻出に鑑みた結果であらうが、一つは、前者の材料は始めから小說であり、後者の材料が實傳實錄であるといふことにも依るであらう。

『鬼啾啾』を小說として見れば、筋のつゞかぬところ、不自然なところ、趣向の陳腐なもの、重複せるもの、あまり露骨に他から借りたので興がさめるものなど、種々な缺點があり、決して佳作とはいへない。たゞ全篇に漲る一種の熱情と夢柳特有の文章の力とが此の小說を讀むに足るものたらしめてゐる。

第三期に屬する作物は、第二期に比して少ない。私の手がけた夢柳研究資料からいへば、此の第三期が一番不完全なので、必ずや調べ殘しが多いかと思ふ。

『垂天初影』は飜譯だが普通の小說ではない、有名なルソオの『懺悔錄』の初めのところを拔抄して、意譯したものである。前編第三章の終りころまでの、興味ある箇所を短篇風に區切つて、前々と同じ流儀で意譯してある。ランバアシーア(ラムベルシエ)牧師の胡桃の樹のこと、ウィルソン(ヴュルソン)孃との交涉、晚食の炙肉の話、彫刻師の許で盜癖のついたこと、ド・ワレンス夫人との關係から、リヨンで病氣の音樂師匠を振りすてゝ逃げるところまでを譯してある。多少の誇張があるが、これは流石に矢鱈な改作はしてゐない。

尙ほ前述『鮮血の花』の中にも一二節「懺悔錄』が見えてゐる。

『芒の一と叢』は創作政治小說であるが、一讀して飜譯臭が强く、『鬼啾啾』の或る部分の燒直しではないかとさへ

思はれるぐらゐである。燒直しではないまでも、これを書いてゐたときの夢柳の頭に『鬼啾啾』のこびりついてゐたことは明らかである。それは內容が明證してゐる。

書出しに稗史風に水戸の天狗騷動のことなどを書いてあるが、蛇足をのけると、本筋は簡單なものである。水戸の士兒島某の一女文子（武田耕雲齋の血をひく）は虛無黨の事情を書いた書物（明白に『鬼啾啾』）をよみ、大にソヒヤの人と爲りに感じ、誓つてこれを學ばうとする。一日父と日光に遊び、一少年が華嚴の瀧に向つて演說の稽古をしてゐるのを見る。その文句は虛無黨がロシヤ政府を攻擊する議論である（『鬼啾啾』第十回）。文子は大に感心する。少年は三浦卓（たかし）といふ。その夜、三浦は國事犯の嫌疑者として拘引される。文子は深く同情する。東京へ歸つて間もなく新聞でその姓名と嫌疑の次第を知り、父に乞ふて、三浦の辯護に立つ。三浦は幸ひにして無罪となる。卓の文子に對する感謝と文子の卓に對する仰慕の念から、二人は戀仲となる。さうして文子の父が死んでから二人はパリに遊び、共產黨、社會黨、虛無黨に交はる。黨のためモスコウ郊外でロシヤの高官を暗殺するが（その名をハクブノップといふ、此の當時最も威權赫々たる日本の大臣にこれに似た名のあることは指摘するまでもない。）追手をうけて、文子は重傷に死し、卓は捉はれて刑殺される。二人の一子秀は生長の後虛無黨の少年首領となつて世界にその主義を行ひ、父母の遺志を果す。

人物にも場面にも敍述にも、『鬼啾啾』そのまゝのところが多い。甚しきは『鬼啾啾』の文章をそのまゝ利用してゐる。例へばソヒヤの生立、虛無黨の成生、牢獄中の悲慘などがさうである。文子は『鬼啾啾』中のソヒヤ、卓は同じくブラントネルに擬したもの、卓裁判の場は、ヴェラ裁判の場を反對に描いたものである。高官暗殺、文子傷死のところも皆『鬼啾啾』が手本になつてゐる。『鬼啾啾』が發行禁止になつたので、『芒の一と叢』に書き代へたものといつても可い。

今や孃子が蘇比亞の傳を看了りし折も折程遠からぬ隅田堤の一酒樓にて彈き出せる三絃の音微かに風がもて・謠の聲抑も誰れ人の調べにや節面白く聞えたり 俚謠「性命ないとて苦にせまいもの。野邊の石碑に月がさす。見やれ苔にも花が咲く。獄屋もどりに袖褄牽かれ、晩に逢ふとの目遣ひに。招く合圖の旗章。芒に交る髑髏。心と讀んだが無理かいな。

此の俚謠は「いろけないとて」の替歌で、小室信介の作と傳はり、當時民權志士の醉後好んで高唱したものであつた。

『佛國史談義勇兵』、エミイル・ガボリオー原著、ガボリオーは探偵小說家として、黑岩涙香の名と共に明治初期の飜譯文學界に不朽の名を殘してゐる人物であるが、この作は少し違つて、フランス革命時代の國民的意氣を描いた歷史小說である。緖言によつて主意內容の如何なるものかは分かる、が――

> 本編は原と佛國有名の小說家俄勃牢の記述に係り一千八百七十年佛國拿破翁第三世が普國と釁隙を生じ來りて巴里城上の風雲既に殺聲を帶ぶるに方りて聯隊長たりし一老翁公旦周が一夕其の朋友兒孫に對して講談演說せしところのもの卽ち一千七百九十二年代佛國王政の竟に亡び共和政府の將さに興らんとするの際普國の强兵勁軍を擊破して以つて一大凱歌を奏したる義勇兵の事蹟にして其間名士の雄辯を揮ふあり美人の奇厄に罹るあり或ひは自由を唱へ或ひは權利を論ずる等當時最も熾んなりし憂國愛民の氣象情況を描き出して宛然目に在り云々

といつてゐる。デュムリエー將軍がアルゴンヌの森林地帶でプロシヤ軍總督ブルンスウィック公を大敗さした事蹟を描いたもので、固より小說ではない。ガボリオーはこれを以て普佛戰爭當年の佛國人の敵愾心を刺戟しようとしてゐるのであるから、大に義勇兵をほめるのは好いとして、これをそのまゝ日本の自由民權意識に引いて來るのは、少しく牽强である。だが專ら民間志士の元氣を鼓舞するためと考へれば、夢柳の主意も通るわけである。これは始め大阪の東雲新聞に連載されたものといふが、時日を詳にしない。原本は、矢張り板垣が外國から持ち歸つたものゝ一つで

はあるまいか。最後の一段を文例に引かう。——

武蘭維克(ブランスウヰツク)侯は十二時間餘の攻擊に敗退すること五回終に意を退軍に決したり普王震怒總督に迫りて最後の決戰を試みしめんと傳令の使者三反總督は竟に命を奉ぜず悄然として云ふ「是れ無益の苦戰を買ふのみ余は已に勝算なきを知れり」と此一戰や我が佛蘭西の諸軍卽ち義勇兵は砲火の洗禮を受けて始めて最初の大捷卽ち此役の最終の大捷を得たるなり此後數週ならずして普軍は悉く其國に退却したり陀毛理(ダモリーズ)總督は其誓言に差(たが)はずして果して能く我が佛蘭西を一大危急の間に救濟したるなり余は尙ほ諸君に對して演說すべきこと頗る多しと雖ども余は已に諸君が以上の演說に於て概ね當年の我が佛蘭西を知り得たりと信ずるに付余は玆に余が演說を完了すべし諸君庶幾はくは請ふ焉れを諒せられんことを

此の小說は純然たる飜譯で、意識的な宣傳的イデオロギイの添加は殆んどない。注意すべきは、譯文體であるが、これの譯文は從來の豪傑譯に比して全く違ふものとなつてゐる。これは一般小說のテクニクの進步の影響もあるが、何よりも先づ飜譯文學界に勢を得て來た周密文體なるものゝ力であると認めなければならぬ。

『自由乃凱歌』の明治二十二年刊行の分は、大體明治十五年自由新聞に揭載したものゝ未刊分を改譯し、これに續稿をしたものである。これも東雲新聞に出たものといふ。原書は丁度第四十一章あたりまでで、十五年度の分より數章增加されてゐる。

物語の筋は勿論十五年刊の『自由乃凱歌』第二編につゞく。ギルベルトはビロウの物語を聞いて彼を逮捕投獄した目的が祕密の小匣を奪ふにあつたことを悟る。それで彼の逮捕狀を探してみて、署名者が當時の宰相ネツケルなのを知り大に驚く。ネツケルは彼の知己だからである。急いでネツケルの娘ドステイル(ド・スタエル)を訪ふて、ネツケルに會ひたいといふ。初はブラツセルに行つたとて隱れるが、遂に出てあふ。ネツケル自身も、ギルベルト逮捕を

意外に思ふ。それで逮捕要求者を調べてみて、チャーニイ（シャルニイ）伯夫人が王后の許しを得てさうしたものだとわかる。だがチャーニイ伯夫人とは何人で何の爲めにギルベルトを怒つてゐるか、ギルベルトは氣がつかぬ。ギルベルトは人民の勢力の輕視出來ぬことを說き、ネッケルに請ふて國王宛の紹介狀を書いて貰ふ。國家の將來を憂ふる餘り、自分が國王の傍にゐて舵をとつて幾分でも好望を生じさせたいといふのである。ギルベルトは國王に會つて先づチャーニイ伯夫人の何者か、何の爲めに自分を逮捕させたかを問ふ。召されて來たチャーニイ伯夫人が昔のアンドレーであらうとは思ひもかけぬ。昔アンドレーは魔睡藥の力で辱めをうけ、（バール・ル・デュークを立ち去る際、ギルベルトとの間の出來事）姙娠の身となつた。その生んだ子は捨てたが、ギルベルトが拾つて、我が子として育てゝゐる。ビトウの乳兄弟セバスチアンがこれである。王后は此の間の事情を知つてゐるので、ギルベルトを憎んでゐるのである。

　ギルベルトは望み通り國王の侍醫といふ名で顧問役となる。さうしてバスチィユ奪取騷動の善後策として國王のパリ行幸を進め、王后と正面衝突をする。結局國王はギルベルトの策通りパリに行幸する。パリは大歡迎をする。だがそれに係らずこれ以後政治の實權は人民に歸してしまふ。人民は先にバスチイユ守將や市長フレッセルを虐殺したにあきたらず、前宰相フーロン、知事ベルチエーを虐殺する。日に日に血腥い出來事が多くなるので、ビロウも革命に厭氣がさし、ビトウ共々歸村しようと云ふ。ギルベルトは革命の仕事はこれからだといつて、英國のピットの策動、貴族僧侶の抑壓等のことを話す。一方王后は頻りに陰謀を試み、フランドル聯隊を呼び寄せて王室の勢力を恢復しようと計る。それが有名なオペラハウスの大宴會となり、醉狂した軍人は人民に挑戰する（こゝで中絕）

　十五年度のと二十二年度のとの間に物語の順序に多少の差違がある、例へば前者ではフーロン、ベルチェーの虐殺が國王のパリ行幸の後なのに、後者では物語の最先に持ち出されてゐる類である。だがそれよりもずつと根本的な差

達は、飜譯の文體、飜譯の態度に關するものである。十五年度の分は、所謂豪傑譯で改竄、補綴、抄略、物語の大筋の外は一切原書にお構ひなしなことは前に述べた。例へば今いふ部分でも、原書ではアントアネット王后が夢にギルベルトに似た怪物に驚かされるところを、夢柳はアンドレーと王后がチャーニィ伯を爭つて嫉妬喧嘩をすることに作りかへてゐる。王公貴族の醜を增さうといふ心算からであらう。だが二十二年度分では物語の順序に多少前後さしたところこそあるが、大體は原書を忠實に譯してゐる、文章も、夢柳得意のロマンチックな壯麗な太平記調ではなく、一種の寫實的周密文體をやゝ窮屈らしく用ゐてゐる。

此の日卽ち七月十七日毘朗(ビロー)は府廳內なる議事堂に赴き衆代議士に對して凡そ三時許り反覆丁寧自己の意見を演說せし後一室に休憩し居たるところへ遽だし氣に驅け來りしは是れ壯士彼藤なり彼藤は呼吸を休む間もなく 彼「毘朗君毘朗君、我が親愛なる毘朗君」と幾度か呼びかけたるにぞ何事にやと毘朗は振り向き 毘「如何なる事の起りしか

彼「奇聞あり、驚くべきの奇聞あり 毘「好新聞か 彼「最も好新聞なり、非常の好新聞なり、余は今吾黨の俱樂部にて聞き得たり 毘「先づ其の何事なるかを語るべし 彼「君は總理大臣風龍(フーロン)の死したることを知れるか 毘「然り、余は之れを知るのみならず身自ら其の葬儀に會して幾千百の群衆が粗暴過激の擧動を彼れが遺骸に加へんと犇(ひし)めき合ふを制止したり。彼「然るに其の實際に於て彼れ未だ死せずとは驚くべき新聞ならずや（下略）

十五年度の分では、それがかういふ調子である。——

斯る處に表の方から息急き來たる一人の少年(わかうど)是れなん彼のピトウなるがビロウの近くへ進む間も早高らかに勝利勝利吾儕は勝利を得たりと呼はる聲にビロウ初め人々は何事にやと訝かるをピトウ漸く胸撫下し某今日フォンテンブローと云へるところの集會にて一大事を聞き來れり其は吾儕が兼てより其肉を啖て年來の重なる遺恨を報はんと思ひ居るに生憎や病死せしと聞知りし宰相フーロンの大惡人が猶存在へて居とのこと言葉訖らずビロウは打ち笑み愚

かなることを云はずもあれフーロンは先きに病死して已に葬式を營みしは汝も我も見しならずや（下略）

此の變化は、夢柳が、時代文學の變化を意識したところから出て居り、夢柳の興味の變つたところからも出て居やう。だがそれと同時に夢柳得意の時代がもう過ぎ去つたといふ淋しさをも暗示するのである。

この後期の『自由乃凱歌』に至つては、その飜譯の態度からも知られる通り、夢柳が意識的に宣傳小說化してゐるところはない、たゞフランス革命を描いてゐるといふ點で政治小說の役目を果してゐる感がある、だがかういふ風に忠實に譯しては、デュマ本來の原作に還元して來て、たゞの歷史小說とのみ見られる恐れがなくもない。この際この小說をあくまで政治小說らしく見せるものは、卷頭に揭げてある島本北洲の序文である。この序文の暴力論は自由黨の傳統精神を示すものである。

四

以上によつて分かるやうに、夢柳の小說の第一目的は、換言すれば自由民權主義者の最高團體たる自由黨の理想を宣傳普及するに役立つかといふことである。これに役立たぬときは、小說として何れ程巧みに出來てゐたとて、無駄である。反對に、これに役立ち、この目的を有効に果し得る限り、如何なるものでも可い。飜譯たると、著作たると一向構はない。同じ理由から、飜譯し飜案するに當つて、必ずしも原本に拘泥せず、此の目的を果すため有効に役立つやうに手加減を加へられる。彼を假りて我の懷抱するところを吐き、我に都合よいやうに彼を利用するのが根本精神である。從つて飜譯といつても、創作だか改作だか分からぬ結果になつてゐるのは當然であらう。

だが、此の目的をみたすに急なる餘り、小說として幾多の缺點破綻が生じて來る。これは飜譯の場合とて、同じことである。必要があつて生れたものであるから、その必要を滿しさへせば可い、あとは先づ不具でも構はぬ、これが

夢柳の思惑であつたらう。兎に角夢柳の小説と名のつくものは、小説のテクニク方面一切を犧牲にして此の目的のために捧げられてゐる。趣向も、平凡で陳腐なところと、途方もなく新奇突飛なものが雜居してゐることがある、一例を擧げると『芒の一と叢』の筋書きを通讀されるが可い、作中の人物だとて、その通りで、概念的で生きてゐない、誇張的英雄的超人的である、偏へに夢柳の傀儡物だといふ感じを與へる。本來さういふことのなかるべき飜譯の中でさへ、往々人物がさう改作されたり趣向が取り換へられたりしてゐる。ではさういふ不具なものが何故當時の人から其程喝采されたかといふと、第一は周圍の文學が幼稚だつたからであり、第二は夢柳の文章の力であり、第三には主として當時自由主義者の共通興味の標的だつたフランス革命とロシヤ虛無黨の活動とを描いたものだつたからであつた。

今日夢柳の小說をよんでみると、『鬼啾啾』、『憂世乃涕涙』など二三のものを除くと、讀むに値ひするものは先づないといつて可い。それは、吾等は今日宣傳價値によつてかゝる小說を判斷せずに小說として判斷するから益々さうなる。時代の感情容氣の所產であるだけに、その目指すところがぴつたり時代の心についてゐた。だから當時の讀者は、夢柳の小說の不具缺點の一切を見ずに、たゞ夢柳が第一義として語らうと努めるところだけを旺盛な感與で受容れることが出來た。かうして夢柳の小說と當時の讀者の間には極めて深い强い感情移動が行はれた。だが、今日では、夢柳の小說を讀んでも、さういふ感情移動が行はれることは出來難い。從つて面白くない、詰らぬ、讀むに値せぬといふ論となる。さうしてこれは、宣傳文學の當然受くべき運命でもある。事實夢柳の小說は自由黨の政治運動といふ背景から引離したのでは、殆んどその存在意義の强半を失つてしまふのである。

だから夢柳の小說は、あくまで自由黨の政治運動、その黨勢の消長を背景にして見られなければならぬ。此のことは、自由黨の盛衰及び黨の勢力の消長が、夢柳の政治小說家としての得意及び失意の時代と一致してゐるのからも、

察せられやう。明治十五年の自由黨全盛時代から、十七年の解黨を經、自由黨の精神が個々的にだが最も活潑な彈壓反抗運動となつて表示される。十八、九年迄が夢柳小説の第二期即ち得意時代であり『民約論』流の自由民權論が勢ひを失つて再び英國流の議會主義が勢を得て來た十九年以後は、夢柳小説の失意に近い時代である。今自由黨の政治運動を背景とし、その運動の最も過激な現れたる――

明治十五六年　福島事件
同　年　高田事件
明治十七年　加波山事件
同　年　群馬事件
同　年　秩父暴動
同　年　飯田事件
同　年　名古屋事件
明治十九年　靜岡事件

などを頭の中に置き、彈壓に抗する血腥い物凄い空氣を吸つてゐる氣持ちをもつて、夢柳の政治小説を見直すと、夢柳の政治小説が始めて生きて來る。小説としての巧拙を超越した生きた政治文學となる。夢柳の小説とかゝる反抗運動い間に必らずしも因果關係を求めずともよし、又事實多少のそれが直接間接にあつたとしてもよし、なくともよし、何れでも可いが、かう見來つて、始めて夢柳の政治小説に何かしら凛乎とした生氣をもつて來るのは事實である。

夢柳の小説は、一時代の自由主義者の共通な政治理想の宣傳機關の一部であり、生ける自由黨の政治運動の一部として、つまり政黨の文學としての任務をもつてゐたといふ點を認めて、これを評價すべきである。

最後にその小説によつて、夢柳を文學史的に語れば、飜譯小説と政治小説を結合させて、政治小説に新しい要素を注入したこと、文學を政治思想の普及宣傳に利用し、時の政治運動と文學を密接に結合させ、かくして政治小説の發展に一轉機を劃させたことに於いては、夢柳の貢獻の相當大きいことは、何としても看過が出來ない。政治小説史上乃至明治文學史上、夢柳の小説に於いて程より以上時代の政治理想と文學が密に結合したことはなかつた。此の貢獻の功は本來夢柳とその友櫻田百華園とで擔ふべきものであつた。だが百華園は夭折して、すべてを夢柳に遺した。夢柳は亡友の遺志をやゝ大成した形がある。だが先後をいへば、百華園こそ夢柳の先驅者であつたといつて可い。

それから今一つ、夢柳の創作小説『芒の一と叢』は『鬼啾啾』の影響を甚しくうけてゐるものであるが、たゞ日本で書かれた革命文學、社會思想文學の先驅的存在の一つとして、今後は歷史的に相當注目されていゝと思ふ。

（昭和五年七月執筆、昭和十年四月增訂）

佛蘭西革命・露國虛無黨

——文獻的一章——

前々章、又は前章に於いて、私は、當代の政治小說を「革命文學」と呼び、又「虛無黨文學」といふ名でさへ呼び、その時代を「革命文學」時代、「虛無黨文學」時代といつた。又事實さう呼ぶに相應はしいものなることは、諸君が上來見て來た通りである。だが、いさゝか冷靜に立ち直つて考へて見ると、此等の稱呼はいかにも小題大做といふ感じがせぬであらうか。何となれば、前々章に於いてはフランス革命を題材にした小說を一篇、前章に於いては同じ種類のものを三篇、虛無黨の言動を寫したものを四篇だけ擧げたに過ないので、此の少數をもつて時代呼はりも片腹痛いといふ氣が起らぬとも限らない。そこで眞實をいへば、私のいふ「革命文學」時代、「虛無黨文學」時代といふ語を今少し合理的に了解して貰ふためには、何等かの用意が要るのである。だが他に好い工夫もないので、止むなく、私は二つの文獻をもつて、その工夫に代へたい。それは、「革命文學」の背景を成すフランス革命關係の文獻、「虛無黨文學」の背景を成す虛無黨關係文獻の二つをそのまゝ抛げ出すことである。

此等二つの文獻は、私が格別說明を加へなくても、通讀すれば如何にその頃の知識階級の人々が、それぞれの立場から此の二つの大きな歷史的現象に關心をもつたかといふことが略ぼ分かると思ふ。二つの現象のうち、虛無黨に關するものゝ方が著しく多いやうに見えるのは、一つはフランス革命に關するものは、多くは長篇物であるのに、虛無

黨物の方が短章が多いからであるが、又一つは、前にもいつた如く、過去の遠い歐西の地の事實としてのフランス革命と、現在の隣國ロシヤに於ける騷動とでは何うしても關心の程度に差異を生ずるのは自然だからであらう。

今一つ讀者に斷つて置くのは、これ等の文獻は特に以上のやうな目的で漁り集めたものでなく、ふとさう思ひ立つたまゝ、手許にあるだけのものを陳べただけであるから、此の種の文獻がこれで盡きてゐるなどと夢にも考へて下さらぬやうにといふことである。まだまだ盡きてゐはしない。たゞこれを讀んで十五六年乃至十六七年の交、フランス革命なり、虚無黨の言動なりに對して時人が如何に深い大きな關心をもつてゐたかといふことの一端を分つていたゞけば、それでいゝ、それさへ分つていたゞけば、「革命文學」時代「虚無黨文學」時代といふ稱呼がさう無理なものと感じられなくなるであらうからである。

○第一　佛蘭西革命文獻

明治九——十年

○佛國革命史　四　河津祐之譯

（九年十二月第一卷——十一年五月第四卷刊行）

原本ミニエー『フランス革命史』

明治十一年

○佛朗西ノ學士ルーソーノ百年期祭　久保田貫一

（東京日々、二〇五二號）

フランス革命に關する文字あり。

明治十二年

此の年も多少あるべき筈であるが、只今のところ手許に何の材料もないので、空白とする。

明治十三年

○民權國家破裂論　　一　井　上　勤

（フランス革命の事蹟を引いて爲政者を戒めしもの）

○佛國バスチールの略傳

（東京日々、七月十三日、これは可笑しい文獻で、丁度此の前日の報知新聞が、バスチイニ記念祭のことを書くといふので、豪傑バスイル氏云々と建物と人名を誤つたので、その正誤に書いたもの、豪傑バスチイル氏云々の一語、實に當時の豪傑連の洋學知識の程度一般を表示したものである。）

○佛國高名之政治家コーント、ミラボウ之略傳

（八月十五日、政談第一號以下）

○ジャコビン黨ノ首領マキシミリアンロベスピーヤ之略傳

（十月一日、政談第九號以下）

明治十四年

○佛國革命原因論　　　島　田　三　郎

（十一月十五日、嚶鳴雜誌第三十三號）

明治十五年

○泰西革命史鑑　五　久松義典

（十五年一月第一冊――同年七月第三冊、十六年四月續篇第一冊――十七年三月第二冊、以下未詳、此の續篇がフランス革命之部である。）

○佛國革命小論　古澤滋

（六月十日――六月二十九日、日本立憲政黨新聞、英國ヂョン・スチュワルト・ミル著）

○讀佛國革命史　報知新聞

（六月九日第一篇――六月十九日第三篇）

○佛國革命議事日記　自由新聞

（七月十八日、同新聞十六號以下、フランス革命史の根本資料として有名な議事日記を殆んど全譯せるもの、約半歲連載す）。

○英佛革命論　自由新聞

（十月六日、同新聞七二號以下、――十月二十二日、九十一號）

○佛國革命原因論　鈴木五郎輯錄

○佛國革命自由黨魁眞段郎蘭傳　上　門田平三

（四月刊行、原本は米人アボット氏『History of Madame Roland』）

○佛蘭西革命起源西洋血潮小暴風　一　櫻田百衞

（六月――十一月、自由新聞、十二月單行）

○佛蘭西革命記自由乃凱歌　二　宮崎夢柳

（八月十二日――十六年二月四日、自由新聞、十五年十月第一編、十二月第二編刊）

○佛蘭西大革命原因　一名　西洋血潮の灘　政理叢談

（二月第八號――八月一日、第十二號）

○革命條開勇婦テレーズ傳　日本立憲政黨新聞

（十一月五日、日本立憲政黨新聞一九五號以後）

明治十六年

○自由の花笠　坂崎紫瀾

（十六年二十五日――十一月二十九日、土陽新聞、『眞段朗蘭傳』を稗史化せるもの）

○自由の旗揚　澗松晚翠

（六月、政理叢談、フランス革命を稗史體にせるもの、小說といひ得るやいなや未詳なるも、これに近きもの）

明治十七年

○評論佛國革命全史　草間時福

（四月十日第一卷出版、第二卷以下未詳、佛國チエル氏原著、河津祐之氏校閱）

○故ローランド侯佛國路易十六世に上るの書

（十月十六日、自由新聞）

○佛國革命修羅の衢　坂崎紫瀾

（七月九日――十二月に至る、自由新聞、ヴィクトル・ユーゴー『九十三年』）

○佛蘭西太平記鮮血の花　　宮崎夢柳
（五月十一日――九月二十三日、自由燈、原本はデュマ The Memoirs of a Physician『西洋血潮小暴風』の續き）

明治十八年

○佛國革命論　一　　獨逸學協會譯
（リョースレル述といふもの）

○佛亂餘聞霜夜の月
（十一月――十二月二十七日迄、自由燈譯者未詳、宮崎夢柳か、ヴィクトル・ユーゴー『九十三年』）

明治十九年

○泰西女丈夫朗蘭夫人傳　一　　春のや朧
（十月刊、原本はグレース・ホワートン及びフヒリップ・ホツートン原著『社會の女王』中、マダム・ローランの條）

○讀史偶評壯烈譚林　一　　久松義典
（フランス革命史中の壯烈なる事蹟をとつて論評したるもの）

明治二十年

○通俗佛蘭西革命史　一　　高木秋浦

明治二十一年

○佛國史談義勇兵　一　　宮崎夢柳
（二十一年、東雲新聞、同年十二月刊）

○自由乃凱歌　一　　宮崎夢柳

（二十一年、東雲新聞、二十二年五月刊）

○第二　虚無黨關係文獻

明治十一年

○魯都ノ變

（十月二十六日、朝野一五四二號、海外新報、大警視ゼネラル・メセントゾッフ氏暗殺）

○論日魯兇黨　　高橋矩正

（十一月二十一日、曙、一五三八號、魯は虚無黨、日は社會黨、日とは日本ではない、日耳曼即ちゼルマニー、獨逸のことである）

明治十二年

○魯國民權黨沸起シテ尼古頼師起國ノ噂

（四月二日　大瀛新報）

○魯國私黨ノ憲法幷ニ評

（四月十八日、明林新誌第五號、私黨とはセイクレットソサイティ、祕密結社のこと）

○魯國ノ虚無黨

（五月二十三日、東京日々、二二三七號）

○魯國ノ暴政

（六月一日、朝野、一七一七號、ニヒリストの跋扈に對して軍律を適用する云々）

○痛哭論

（六月四日、朝野、一七一九號、ロシヤ虚無黨益々盛也、壓制のみにては根治されぬ）

○魯國虚無黨の有害　勢海愛國堂主人

（六月十五日、山陽新報）

○魯國虚無黨ノ新聞紙

（六月二十日、朝野、一七三三號、ゼムリヤ・イスワボダ、國及び自由云々、死せるメセンチェフの諷刺畫のこと）

○魯國ノ虚無黨

（九月十六日、報知、エコー・ジュ・ジャポンより、佛國ウォルテール新聞抄云々）

○虚無黨の術策

（十月二十二日、内外交際新誌第一號）

○魯國虚無黨ノ暴狀　末廣鐵腸

（十月二十八、九日、朝野、一八三九、一八四〇號、外遊中の淺野乾から資料を得て書いたもので、此の頃としては最も纒つた論文、概況から目的、手段等に及んでゐる）。

○魯國革命黨ノ魁首

（十一月七日、報知、チョウバロフといふもの云々）

明治十三年

○魯國革命黨ノ檄文

（一月三十一日、内外交際新誌第八號）

○虛無黨の大逆

（三月二十三日、東京日々、二四八三號、自由ノ濫用）

○魯國虛無黨ニナラヒテ國權ヲ張レ云々

（七月、官令全報附錄、都鄙日乘中、岡山實行社員平野彌太郎ナルモノノ演說、『明治奇聞』第二より抄す）

○魯廷虛無黨ノ疑獄ヲ解ク

（十月十九日、東京横濱毎日、二九五五號）

明治十四年

○邪說ノ害

（一月二十七日、東京横濱、共產黨、社會黨、虛無黨のこと）

○魯國烈女ウェラサシュリッチ糺問ノ記

（一月三十一日、曙、三九五號以下、客冬十二月米國通信中より抄錄す云々）

○魯國虛無黨犯罪者所刑の槪略

（二月七日、報知）

○讀魯國少女糺問之記

（二月二十一日、曙、四一二號）

○虛無黨論　在東京高須鐵峯

（二月二十五日、曙、四一六號）

○露西亞皇帝殂落

（三月十六日、東京日々、二七七七號以下、虛無黨の兇險よりアレキサンドル二世帝の一代記に及ぶ）

○魯帝の小傳

（三月十六日、朝野、二二四五號）

○兇賊ノ害

（三月十九日、東京日々、二七八〇號）

○暗殺論

（三月十九日、曙、四三四號、虛無黨の暗殺云々）

○虛無黨の爆發器を注文したる話

（三月二十四日、東京日々、二七八四號外信、ビルミンハム（バアミンガム）の時計工ホーシンソンのこと、探偵小說を讀む如し）

○虛無黨の來歷　田中耕造

（三月二十六日、共存同衆演說會）

○三ビ邪說ノ害ヲ論ズ

（三月二十九日、東京日々、虛無黨のこと、檄文も主旨も擧げて說明してゐる）

○魯國皇帝アレキサンドル二世非命之殂落　一

○西國烈女傳　・　田島象二

(四月刊、第三章にヴェラ・サシュリッチ傳がある)

○魯帝弑逆記　二　　大久保常吉

(六月刊、諸新聞の報道を合輯したもの、附錄に、逆徒處刑之始末)

(四月一日發賣、大阪心齋橋安土町、北尾)

○虛　無　黨　論　　大　矢　早　利

(四月十四日、立誠舍演說會)

○國會ノ開設ナキハ國民政治上ノ思想ヲ激昂スルノ媒タラザル乎　　酒井雄

(四月十五日、東洋自由二十一號)

○歷山二世治下の魯西亞

(五月十九日、朝野二二九〇號以下數回、虛無黨の活動を詳記す)

○虛無黨より露帝に送りし書狀

(六月九日、朝野二三一六號、同六月十日、十一日の分にも虛無黨の公告文その他のことあり)。

○虛無黨ノ目的

(六月十日、東京日々、二八五〇號、バクーニン云々の文句あり)

○虛無黨の熱心は我國の民權家をして尙一層憤激せしむるに足らざる乎　　西郁玄道

(六月十一日、井生村樓、國友會演說)

○露國政府を轉覆せんと欲するものは豈虛無黨のみならんや　　益田克德

(六月十二日、井生村樓、東京演說會)

○魯國の開明は其れ虛無黨撲滅の日にある乎

（六月十三日、江湖新報六十九號）

○露國虛無黨ノ原因

（六月二十二日、三日、朝野、二三二九號、英國スタンダードの譯）

○魯國最近ノ形勢

（六月二十六日、大阪新報、其の後の虛無黨のこと）

○虛無黨の使者皇帝亞歷山第三世に面會す

（七月二日、大阪新報）

○虛無黨の潛伏

（七月六日、東京日々外信、二八七一號）

○無政府ノ說

（八月七日、東京横濱、三一九三號）

○虛無黨陳實書

（九月十九日―十月二十日、東京日々、虛無黨員の化學士レオ・ハルトマンが紐育ヘラルドに寄稿したるもの、連載十數回、一八八〇年露帝アレキサンドル二世を地雷火にて弑せんとした顚末、及び虛無黨の歷史、此の種文獻中稀に見るもの也、東京日々子は、かゝるものに日本人をして感染せしめぬために紹介する云々。）

○露國虛無革命黨實施委員より有名なる同黨ハルトマンに送りたる書翰

（九月二十三日、大阪日報一六八四號以下）

○魯國虚無黨の形勢
（十月四日、江山評論第一號）
○魯國虚無黨ノ近況ヲ聞テ感アリ
（十月二十八日、自治政談第二號）

明治十五年

○東洋ノ虚無黨　樽井藤吉
（此年一月演說、三月錦江新誌）
○露京の一奇話
（二月九日、東京日々、先帝の靈が現れ今帝と問答したがる、虚無黨の陰謀なるべし云々）
○虚無黨援を國外に乞ふ
（二月二十八日、東京日々、三〇六一號、ヴェラ、ラヴロフ等佛國ラジュスチイス新聞に檄文を掲ぐ）
○露國奇聞烈女の疑獄　一　杣田策太郎
（四月刊、十四年曙新聞に出たものゝ單行本）
○露國ノ虚無黨益ス熾ンニシテ軍人ニ感染ス
（五月二十八日、江湖新報一七二號）
○露國祕密神聖會　在東京　弘崎一郎稿
（六月二十三日、東京日々、虚無黨撲滅の祕密結社云々）
○魯國革命黨

（七月四日――十五日、自由新聞第四號以下十四號、フォートナイトリー・レヴィユーより記載、虛無黨史也、
朝野の「沿革」と同じものか）

○論歐洲社會黨（つゞき）

（七月十一日の分、朝野二六二三號、虛無黨論、此の語は一八六二年作のトルガニーフ氏作父子ヨリ出ヅ云々）

○魯國虛無黨の沿革

（八月四日――八日朝野、二六四四號――二六四七號、プリンス・クロプキンがフォルトナイトリーレヴュウに
載せしもの、ワラスの作と略ぼ同じ云々）

○虛無黨の由來

（八月十日以後、日本立憲政黨新聞一二四號以下ロンドンの新聞による云々）

○魯國政府ノ存亡　黑岩大

（八月二十九日、國友雜誌五十一號、演說筆記、虛無黨の生ずる譯、粗暴過激に赴く譯、大とは淚香の初名）

○東京繪入投書

（十月十九日、ヴェラサシュリッチの傳――恐らく『烈女之疑獄』か――がもう三版を出したといふ、爲政家は
宜しく戒心せよ云々）

○露國虛無黨事情　一　西河通徹

（自由新聞に出しフォートナイトリー・レヴィユーの記事を綴集せしもの、末廣鐵腸の序あり、爲政家の暴壓政策
を戒しめてゐる）。

○虛無黨退治奇談　一　川島忠之助譯

（九月刊、佛人ポール・ヴェルニエ、La Chasse aux Nihilistes といふものを譯す）

○魯西國虚無黨寃枉の鞭笞　一　宮崎夢柳

（十二月刊、此年九月一日――十月二十八日繪入自由新聞に出しもの）

明治十六年

○クロプキン侯傳

（三月十五日―二十二日、朝野二八一九號―二八二四號、ステプニャクの『地底のロシヤ』を底本にせるものらしい）

○借地虚無黨

（樽井と同郷の人幸米松（ユキヨネマツ）なる人、名の如き一黨を組織しようといふのである、參考のためこゝに出して置く）。

○露國ノ情勢

（四月二十二日、自由新聞二三二二號以下）

○魯國虚無黨

（四月二十八日、朝野二八五五號、ヴェラのことその他、フォルトナイトリー・レヴィユー云々）

○露國ノ學生ヲ論ズ

（七月五日、東京日々、三四六九號、ロシヤ學生が虚無黨に接近する原因、日本の學生の政黨加入のことなど）

○露國變亂實記　一　松田勝太郎

（九月刊、諸新聞報道記事を合輯せるもの、十四年刊『魯帝弑逆記』をそのまゝ合本再刊せるものと見ゆ）

○烈士バクーミン、烈婦ヴェラサシュリッチ　伊賀我何人

（十六年六月、群馬縣室田村有志自由懇親會にて演説此の頃の人々はバクーニンをよくバクーミンと發音した、

伊賀は群馬事件その他の關係者である)。

○一滴千金憂世乃涕涙　宮崎夢柳

(九月十四日——十二月二十八日、自由新聞三五六號——四四三號、(前項に詳説あり。)

○露國安那物語　坂崎紫瀾

(十六年十二月一日——十七年四月一日、土陽新聞、川島氏『虛無黨退治奇談』を更に稗史化したるもの)

明治十七年

○虛無黨怒つて憲兵都督を殺す

(二月十三日——十六日、自由新聞四七五號以下)

○クロプキン公のこと

(三月十四日、朝野、公がナインテインスヒンチユリーに寄稿せるシベリヤ囚徒の記事)

○虛無黨再燃

(四月一日、自由新聞、長文章也)

○虛無黨之祖ヌシヤエツフ傳

(四月三十日、東京輿論新誌一六一號)

○虛無黨(ツゞク)

(五月四日、日本立憲政黨新聞、五八四號)

○魯國虛無黨祕聞錄

(八月十二日、自由、六二八號以下、一八八二年三月四日於倫敦府ピ、レウロツフの原序あり、卽ちステプニヤ

クの『地底のロシヤ』の譯なるを知る)。

○同　題

(八月十六日——十月十一日日本立憲政黨新聞六七三號以下、譯文も自由新聞と同じ)

○同　題

(八月二十八日、自由廣告、板權出願中、免許あれば直に出板す云々、曾田愛三郎)

○論虛無黨報復主義

(十月十四日、十五日、自由新聞、六八一號以下、加波山事件の直後とて、何か諷するところがあるのである)。

○虛無黨實傳記鬼啾啾　宮崎夢柳

(十七年十二月十日——十八年四月三日、自由燈、同年十月刊行、これの著作に使つたものはステプニヤク『地底のロシヤ』その他)

明治十八年

○虛無黨も亦愛國心あるか　千代田生

(六月四日、自由燈)

○薔薇の露　宮崎夢柳

(七月、繪入自由新聞、フランス共產黨首領ビゴーの傳記、十九年七月刊『近代悲憤、烈士傳』中所收)これ以後はさう擧げるに及ばぬと思ふので、省略することにする。以上の文獻は二つとも甚だ不備なものであるが、然しこれによつて當時日本の知識階級が此の二つの歷史現象に對して重大なる關心を示してゐたといふ一端が推測され、そこで「革命文學」、「虛無黨文學」の語の人を欺かぬことが分かるであらう。

『經國美談』とその政治理想

一

此處で、吾等は轉じて改進黨の名士矢野龍溪の政治小説家としての半面を窺ふことにしよう。龍溪がその政治小説『經國美談』を著したのは、もとより改進黨といふ如き一黨一派の主義宣傳のためではなく「憲法の制定、國會の開設、政黨の樹立と相俟つて、これ等の圓滿なる運用發達を期するがためには、更に國人に對する政治思想の普及を計り、大衆の政治的視野を擴めなければならぬ」(一)との大局的見地からであつたことには疑ひがない、だが當年の龍溪が改進黨政治家の花形であつたゞけ、從つてその政治理想が改進黨主義の精髓であつたゞけ、彼がこの小説によつて普及しようとした政治思想も自ら改進黨的立場に依る結果になつてゐることは、蓋し止むを得ないことである。

前々の例に倣つて龍溪の傳記を掲げる筈であるが、彼に關しては既に單行の詳傳(二)があるから、それは省き、その代り『經國美談』の成立を稍や詳しく敍べて、この小説著作當時の龍溪を髣髴させるだけに止める。

「青年齊武(テーベ)政治家」(Young Politicians of Thebes)と副題した小説『經國美談』の刊行されたのは、明治十六年三月(前篇)――十七年二月(後篇)であるが、著者龍溪はこの刊行に先立つ數年前から、早くもこの種の小説を著作しようといふ宿志をもつてゐた。

先生は、かねてから先づ人心を作興せしめなければ、憲政の確立は望めないと考へてゐた。「凡そ人が生死も顧みないで水火の中へも赴くのは、その人の胸中に、これが眞理であり、正確であるとの鞏固たる信念があるからである。この信念に殉じて、生死を眼中におかなかつた往昔の烈士名士の事蹟や、言行を聽く時は、誰しも感奮興起せずにはをられない。近い例を以ていへば、明治維新がさうである。あの鴻業が見事成就するに至つた原因は、もとより種々あるに相違ないが、水戸光圀の『大日本史』や、賴山陽の『日本外史』や、または『太平記』等に、南朝幾多の烈士が勤王の大義に殉じた事蹟を敍して、人目に躍如たらしめたことが、人々を奮ひ起たしめ、王政復古の機運を醞釀せしめるに大効果あつたことは、何人も認めて疑はぬところである。然るに、今民權伸張、憲政樹立の大業は日本始めての事柄であるから、一般の人心を振ひ起たしむべき歴史も、傳記も、小說もない。これが一大缺點である。由來、東洋には過去數千年、これ等の運動が嘗てなかつた爲めに、日本國民は、未だ立憲運動なるものを知らぬ。故にこの際、どうしてもかの王政維新に於ける『日本外史』、『太平記』等にも比ぶべき一書を國人に與へて、一般の奮起を促さなくてはならぬ。それには、生硬な論文めいたものよりも、寧ろ『太平記』流に小說體に事を敍して、まづ讀者を興味のうちに引入れることが上策である」と考へてゐた。そして機會ある每にその腹案を練つてゐた(三)。

ところが偶然の事から此の腹案なり宿志なりが實現されることになつた。著者は自分でかう語つてゐる。——

明治十五年春夏ノ交、予疾アリ臥蓐連旬、無聊ニ勝ヘス眼史冊ニ倦ム卽チ和漢ノ小說ヲ求テ之ヲ讀ム諸書脚色陳套語氣卑下ニシテ人意ニ滿タサルヲ憾ム（當時の小說に不滿であつた點に注意されたい）後チ數日手ニ任セテ枕上ノ書ヲ取リ之ヲ讀ム卷中會々希臘、齊武勃興ノ事迹ヲ記ス其事奇異、粉裝ヲ加ヘスシテ人ヲ悅ハシムルニ足ル因テ之ヲ譯述センコトヲ思フ乃チ諸家ノ希臘史ヲ索ム其書甚タ稀ナリ（中略）且ツ史家カ齊武ノ事ヲ記スルヤ多クハ其ノ

大體ニ止テ當時ノ顚末ヲ詳記スル者少ク人ヲシテ糢糊雲烟ヲ隔ツルノ想ヒアラシム是ニ於テカ始メテ其ノ鈌漏ヲ補述シ戯レニ小說體ヲ學ハント欲スルノ念ヲ生シタリ然レトモ予ノ意本ト正史ヲ記スルニ在ルカ故ニ尋常小說ノ如ク擅ニ實事ヲ變更シ正邪善惡ヲ顚倒スルカ如キコトヲ爲サス唯實事中ニ於テ少シク潤飾ヲ施スノミ是ヲ以テ腹稿早ク成リ之ヲ筆セント欲セシカ世事忙匆ニシテ未タ著作ニ從事スルニ遑アラサリシナリ(四)

かくて年來の宿志は古希臘、テーベの勃興といふ好題目を得て具體化されることになつたが、然し龍溪の當初の腹案は、元來これとは相違したものであつたのである。

はじめは、一の新たな「立憲帝國」を描いて見ようと思つたさうだが、一切を想像による架空のものたしめると、或はその筋から發行禁止を食はないとも限らぬから、なるべく史實を中心として、その一斑を潤色するが安全だと思つた。しかし、英佛の革命史なぞは、年月も未だ新らしい生々しい事實であり、事件の內容も極めて審かなので、これを都合よく粉飾することは困難である。ところが、ギリシヤ史は中古の事であつて飾るに易い。殊にテーベの興亡など人をして卷を掩ふ能はざらしめる。しかも、事は「糢糊雲烟を隔つる想」あらしめる茫々二千年の昔に於ける一小共和都市に關するから、十分に脚色の餘地がある。たゞ小都市であるだけに、筆を執るに非常なる不便を忍ばねばならぬが、しかし、當年の志士が、南歐人特有の燃ゆるがごとき純情を驅つて、民權の伸張に慘憺たる苦心を重ねるさまを描くには、恰好の舞臺でもあつた。(五)

かうして當初の腹案が轉じてテーベの勃興を中心とすることに定まり、此の主題を中心に新たに腹稿は成つたものゝ、當時政戰に多忙だつた著者にはこれを筆にする餘暇は容易なことでは得られなかつた。十五年の六月、龍溪は京攝の間に遊んだ。初めの豫定ではこれを機として京阪の閑地で譯筆を執るつもりで數部のギリシヤ史を用意して行つたが、政界の花形役者たる彼にはさういふ閑暇が許される筈がない、同志の送迎應接が日に忙を加へる上に、四方から沓至

する文書に應答しなくてはならぬといふわけで、此の行、遂に初志を果すことが出來なかつた。その後も依然、南船北馬東奔西走で、とても著作などの遑がなかつたので、折角の腹稿も十に五六を忘失するに至つた。そこで龍溪もいよいよ久くしていよいよ忘失してしまひはせぬかとの心遣ひから、腹稿の大略を敍記せんとかゝり、報知新聞社員佐藤藏太郎に口授して先づ大意を筆記させた。だがこのまゝでは矢張り此の小説の完成が何時まで延びるか分からなかつたが、間もなく好機到來で、その完成を見ることが出來た。

然ルニ第十二月ニ至リ不幸ニシテ報知新聞停止ノ事アリ又當時歳晩ニシテ四方ノ招聘ヲ絶チ少シク身心ノ間ナルヲ覺フ乃チ一切客ヲ謝シ屛居シテ著作ニ耽ル當時予ノ右腕ニ疾アリ親ラ筆管ヲ執ルニ勝ヘス因テ口ツカラ文章ヲ述フ佐藤氏傍ニ在リ且ツ聽キ且ツ記シ漸ニシテ積テ卷ヲ成ス是月下旬新聞解停ノ前二日稿稍ク成ル然レトモ本ト口述筆記ニ成リシモノナルカ故ニ同音異義ノ字ヲ用ウル少カラズ時ニ予ノ患部モ亦タ方ニ愈ユ乃チ手自ラ校閲洗刷シテ字句ヲ修正ス改作スル所極メテ多シ延テ十六年第一月中旬ニ至ル卷中意ニ滿タサルノ字句隨テ更ムレハ隨テ生ス自ラ笑テ謂フ無用么麼ノ冊子何ソ力ヲ費スニ足ラン乃チ之ヲ印刷ニ附ス嗚呼一部ノ戯著予カ數旬ノ思ヲ費ス間々文字ヲ作ルノ嘲リヲ志士ニ免レサルヲ知ルナリ（六）

かゝる過程を經て『經國美談』前篇は漸く世に公にされることになつた。

因にいふ、前記の報知社員佐藤藏太郎とは、明治初期小説界に有名な『慘風悲雨世路日記』の著者菊亭香水のことである。菊亭は龍溪と同じ豐後佐伯の人であるが、その自傳たる『文士佐藤鶴谷傳』（未刊稿本）には『經國美談』の助筆に關する興味深い追憶の一節があるから、左に掲げて置かう。

鶴谷ガ矢野龍溪先生ノ經國美談ヲ著ストキ助筆シタルコトハ、同書ノ自序中ニモ記セラレタルガ、鶴谷ハ初メ芝佐久間町ナル矢野氏ノ邸内中ニ在ル一家屋ヲ與ヘラレテ之レニ住シタルガ、毎日兩國藥研堀ノ報知社ニ通勤スルニハ、

約一里半ノ道程ナルヲ以テ、後報知社ノ支店樓上ニ移轉シタリ、毎日午後六時過ギ新聞ノ編輯ヲ終リ、兩國ヨリ芝ニ往キ、晩餐ヲ矢野邸ニテ食スルヲ例トス、龍溪先生ハ食後必ズ散歩ニ出カケ、午後八時九時頃ニ歸ラルヽヲ常トス、其レヨリ中二階ナル先生ノ居室ノ中央、燈火燦然タル下ニ一脚ノ淨案ヲ据エ、先生ハ案ヲ背ニシテ正座セラレ、鶴谷ハ案ニ對シテ坐シ、起草ヲ始ム、先生扇子ヲ笏ニ執リテ宛モ講談師然タル體ニテ文言ヲ演ベラレ、鶴谷筆ヲ走ラセテ之レヲ記ス、一句毎ニ先生、書タカ、ヨイカト問フ、鶴谷悪筆ナレド筆記ハ達者ナリ、先生ノヨイカト問フ時ハ、已ニ記シ終リテ二三分時間アリ、斯ノ如クニシテ一夕一回ヲ終ル時ハ、夜已ニ十一時若クバ十二時ニ達ス、而シテ筆記シタル半切紙ハ毎回二尋許ヲ通例トス、先生鰐口ヨリ五圓札ヲ出シテ歸途ノ車代ニセヨト與フ、鶴谷頂キテ矢野邸ヲ出テ門前ニテ腕車ヲ雇ヒ、日本橋迄到リ其レヨリ藥研堀ニハ歸ラズシテ吉原ニ行キ、娼妓ノ部屋ニ机ヲ備ヘシメ、筆記ヲ文章ニ改竄シテ一章ヲ完全ナラシメ、之レヲ淨書シテ翌朝報知社ニ出勤シ、先生ノ机上ニ供ヘ置クヲ例トス、龍溪先生出社之レヲ一覽セラレ、深更芝ヨリ歸リテ此ノ淨書ヲ能クス『エライ』ト毎モ賞讃セラレタリ、或時天長節ノ夕、矢野邸ノ書生、鶴谷ニ豚食ヒヲ强請ル、鶴谷携ヘテ土橋ノ一肉亭ニ到リ、共ニ飽食痛飲シテ歸ル、此夜モ例ノ如ク先生ノ背後ニ坐シ、筆記ヲ始ム、先生、書タカ、ヨイカト呼ブコト數次、答ヘズ、已ニシテ鶴谷遽然ヘイ書キマシタト云フ、先生笑フテ、虚（ウソ）ヲ云フナ、先刻カラ鼾聲齁々（ゴツゴツ）トシテ聞ユ、今日ハ是レニテ止メヨト、例ノ如ク車代ヲ與ヘテ歸ラシム、龍溪先生夫人ニ對ヒ、爾後筆記ノ濟ムマデ、藏サンニハ晩餐ノ時、酒ヲ副ユルヲ廢セヨト命ズ云々

『經國美談』前篇着手の動機が著者龍溪の病氣にあつたが、後篇著作の機會も、亦病氣によつて得られた。偶然は偶然であるが、又一奇とすべきであらう。

初メ余ノ前篇ヲ草スルヤ聊カ思フ所有テ後篇ノ述作ヲ六七年ノ後ニ期シタリ（中略）然ルニ昨十六年ノ秋季ニ至リ故有テ俄ニ後篇起草ノ志ヲ生ス是歳八月ヨリ九月ニ至ルマテ微恙ノ故ヲ以テ親ラ社務ヲ執ラス家居シテ痾ヲ養ヒ時ニ論説ヲ草シテ之ヲ社友ニ寄スルノミ十月ニ至リ箕浦、犬養ノ二兄ハ尙遊テ北越東羽ニ在リト雖モ藤田兄ハ病稍ヤ癒テ社務ヲ監シ尾崎兄ハ地租改正ノ議ニ關シ大篇ヲ結撰スルノ擧アリ余ノ心身少ク閑ナルヲ得乃チ二兄ニ請テ二ケ月ノ間ヲ假リ遂ニ述作ニ從事スルニ至ル（七）（下略）

注意すべきは、此の時矢張り自ら筆が執れなかつたので、速記者若林玵藏の力を借りたことである。かくて——

十月ヨリ十一月中旬ニ至ルマデ腹稿ヲ定メ十一月廿三日ヨリ始テ稿ヲ起シ十二月十三日ニ至テ第一稿ヲ脫スルヲ得タリ（中略）十二月十四日以後又自ラ其ノ添削潤飾ニ從事セシカ大ニ心思ヲ費シ時トシテハ初メヨリ之ヲ手自カラセサリシヲ憾ムニ至レリ是レ蓋シ第一稿ハ專ラ其力ヲ大體ノ結構布置ニ用テ其他ヲ顧ミス故ニ今文字ヲ繕修スルニ及テハ其ノ大半ヲ更正セサルヲ得サレハナリ故ニ十二月十四日ヨリ是ニ從事シ本年（十七年）一月十三日ニ至テ始メテ業ヲ卒フ（中略）第二稿ヲ脫スルニ至ルマテ通計五十餘日ヲ費セリ然レトモ若シ腹稿ヲ定ムルヨリ淨寫第三稿ノ校閲訂正ニ至ルマテノ時日ヲ合算セハ爲メニ世務ヲ擲チシ者幾ント八九旬ノ久キニ及ハントス（下略）（八）

龍溪はかゝる閑文字に時間をかけ過ぎたと歎息してゐるが、それは當時政戰舌戰筆戰に暇日のなかつた龍溪として言ふべきことで、單に一長編小說の結成から見ていへば、遙かに迅速な部に屬する。龍溪の小說家的才分の異常なことが、これでも察知され得やう。

註（一）『龍溪矢野文雄君傳』、五——六頁

註（二）即ち「龍溪矢野文雄君傳」、小栗又一編、昭和五年四月一日發行（春陽堂）

註（三）同　傳、二一五頁—二一六頁

註(四) 『經國美談』前編自序
註(五) 『龍溪矢野文雄君傳』、二一六頁
註(六) 『經國美談』前編自序
註(七) 同　後編自序
註(八) 同　同

二

『經國美談』の如きは、明治初期の文學界で第一に屈指すべき有名な作物であり、且つ今日に於いても刊行當時に劣らぬ聲價を維持してゐる點で異數とすべきものであるが、それだけに明治文學研究に志のある人々は大抵一讀してゐるか乃至內容の如何ぐらゐは心得てゐるに違ひないと思ふ。だからその梗概を描くといふやうなことは全然蛇足かとも思ふが、今この作を對象として論ずる必要上、一つは既讀の人々の記憶を新しくする意味で、又一つは未讀の人人、將來の研究家乃至專門家ならぬ人々の參考の意味で、梗概があつた方が可いやうに察せられるから、煩を厭はず述べて置かう。

(前篇)冒頭の一回は總論ともいふべく、學校の訓話を假りて篇中の諸名士の、少年時代の立志の素地を示したもの殊に巴比陀(ペロピダス)、威波能(イパミノンダス)、瑪留(メルロー)の三人の性格を書き別けて、三人がそれぞれ智仁勇の三德を代表してゐることを暗示してゐる。物語の本筋は紀元前三八二年、齊武(テーベ)の正奸二黨の爭ひがその極に達し、遂に斯波多(スパルタ)の後援を得た奸黨が正黨に勝つて國政を獨擅するところから始まる。

正黨の諸名士は、突然奸黨と斯波多軍のクーデターを喰つて、大半は隣國阿善(アゼンス)に逃れる。北境法斯(フォーシス)に逃れた人々も

少しある。巴比陀は亡命の途中伏兵に遭ひ、水に歿して一時行衛を氣遣はれるが、矢張り阿善に落延び、瑪留を股肱として、阿善に亡命した諸名士の牛耳を執る。

威波能(イパミノンダス)は同志と共に公會堂に正論して奸黨を痛撃するが、奸黨の兵士に捕へられて禁獄の身となる。阿善に逃れた巴比陀は、阿善の公會堂で雄辯を振ひ、昔年阿善民政の危機に齊武人が阿善の名士士良武(スラスブリユス)に與へた助力を引き、今日齊武民政存亡の際に阿善の援兵を乞ふ。當時阿善にも民黨と奸黨とあり、民黨の行政官李志(リシス)等は巴比陀等を助けようと欲するが奸黨の亞留智(アルチアス)等はこれに反對するのみか、暗に齊武奸黨と通謀して、亡命諸士を壓迫し、齊武奸黨の放つた刺客の便を計つてやる。刺客は巴比陀の同志を斃した上、巴比陀自身をも狙ふ。巴比陀と瑪留は李志の好意によつて、その家に寓する。李志の愛女令南(レオナ)は巴比陀の人品に好意を持つ。巴比陀も亦、一日令南(レオナ)の機轉によつて刺客の難を免れてから、令南の賢さに感じ、彼の女に好意をもつ。

此の間四年、阿善へ亡命した齊武諸名士は漸く經濟的に窮して來、同志中急進派と穩和派とが生ずる。諸亡士は囘復の二策として、擧兵侵入、潜入刺姦の二方針を論議するが、二策何れも卽行を許さない。一方齊武の奸黨は斯波多の威を恃み、斯波多から阿善に對して諸亡士の引渡しを要求させる。阿善の爲政當局は二派に分れて爭ふが、流石に拒絶論が勝つ。巴比陀はこの形勢を見て心窃に決する所があり、斷然單身歸國せんとする。有志の窮乏と民心の萎靡とから民政囘復の大計が遂に行はれなくなることを怖れ、歸國して臨機の處置を試みるつもりなのである。だが途中病んで山中の茅屋に呻吟すること數十日、圖らずも阿善へ亡命の時分れ分れとなつた家宰禮温(レオン)が乞食となつて主人を尋ねてゐるのに廻り遭ふ。禮温は巴比陀が曾つて作つた『春の花』の歌を唱へ、琴を彈じて四方に徘徊してゐたのである。瑪留(メルロー)は巴比陀の置手紙を見て、これも勇躍して故國に向ふが、途中奇禍を醸して危く奸黨の手に落ちやうとし、辛うじて同志に救はれる。やがて巴比陀も病が癒え、禮温と共に阿善に引歸して後圖を策す。

威波能は三八二年に奸黨の手に捕はれてから、幸ひまだ生命を全うしてゐた。奸黨が彼等を直に死刑に處さなかつたのは、一つは人氣取り手段でもあつたのである。だが三七九年の秋、前年巴比陀の密命を含んだ安重(アンヂウス)が種々の苦心によつて獄吏となり、遂に威波能その他を脫獄させることが出來た。威波能は法斯(フォーシス)に逃れ、安重をやつて阿善の巴比陀等と通謀する。巴比陀等は威波能の脫獄を聞いて大に喜ぶ。

この頃奸黨も流石にやゝ懈怠の心を生じ、その本色を露して、私利を營み、人民を壓迫し始めたので、民心は漸く激昂し奸黨を顚覆しようと志す連中が多くなる。奸黨は、やむなく外戰によつて人心の轉向を計らうと欲し、北境法斯を伐たうとするが、法斯は阿善と親善なので、齊武の奸黨は使節を派して阿善に諒解を求める。此の時の正使比留利は正黨名士の一人なのだが、禍ひを避るために、今迄奸黨に屈してゐたのである。巴比陀は比留利と密議し、機をみて潛入刺奸の擧を行ふことにする。

比留利は使命をとげて歸國する。奸黨は宴を設けて比留利の勞を慰める。比留利はその返禮に、日を期して盛宴を開いて奸黨の頭目を招くことにし、この旨を阿善の巴比陀にと通ずる。巴比陀はこれを機會に奸人を一掃し民政回復の事をあげようと決心し、威波能に知らせる。だが重厚な威波能は、かゝる危道詭計によつて事を成すのを好まず、あくまで正々堂々たる擧兵侵入を主張する。巴比陀は威波能の反對を押切つて、選ばれたる同士十二人と變裝して齊武に入り、三七九年十二月十一日の夜、比留利の家に招かれた奸黨の巨魁を刺す。折から法斯の同志を率ゐて來た威波能は、斯波多の戍兵を退けて本城を定め、阿善から繼いで來た同志の諸亡士と協力して民政を回復する。斯波多王亞是刺(アゼシラオス)は大擧して齊武を伐たんとする報があり諸名士がこれに備へる。

(後篇)齊武は斯波多の挑戰に應じ、阿善と連盟せんとする。だが阿善ではこの時平邪(ヘジアス)なる煽動政治家の一黨が勢力

を得、細民が政治上の一大勢力となつて來たので李志その他の盡力があつても如何ともなし難い。かゝるうちに平邪黨の勢力が過大となり、過激の亂民が阿善の國政を左右することになり、純正黨の名士は種々迫害を受ける。迫害は殘暴となり、生命も財産も皆亂民の自由にされる。李志の一家もその犧牲となり、李志、令南ともに暴虐の手に斃れる。細民の亂暴にやゝ眉を顰めた平邪は幾分秩序を整へようとして却つて失脚したから、阿善の都は一時全然恐怖時代を現出するが、名將智猛周（チモウデウス）、可武利（カブリアス）の發奮で、亂民を退けて漸く舊政を恢復する。

齊武では孤軍奮鬪であるが、中々斯波多の思ふ様には落城しない。斯軍は一時撤兵する。そのうち阿善の方も鎭つたので改めて使節を送つて連盟を策する。今度は阿善も贊成して、中部大同盟、卽ち史上では阿善大同盟といふものが出來上る。これは斯波多に對する齊武、阿善その他の攻守同盟である。

やがて斯王亞是刺は、十萬の兵を率ゐて、第二回の齊武侵入を試みる。阿善は同盟の約により、名將可武利に三萬の兵を與へて齊武を助けさせる。可武利は、齊武の城下に新陣法を用ゐて、斯波多軍を大に破る。それで豪邁の亞是刺王も我を折つて歸國する。

紀元三七八年斯波多は三度齊武を伐つたが、今度は、多年威波能等の養成した神武軍の勇士に破られて、又も不成功に終る。

三七七年威波能、巴比陀が齊武の總統官となり、心を併せ力を戮せて國家の爲めに盡力する。齊武の國運は隆々と揚り、積極的に國威を伸張する。だがそれにつれて、同盟の盟主たる阿善との間が面白く行かなくなる。

一方、連年の戰禍は漸く全希臘民衆の厭ふところとなり、哥倫（コリント）の安太隆（アンタルキダス）の唱へた希臘全土大平和論に贊成する國家が次第に多くなる、これが到頭斯波多、阿善兩國の行政首腦者をも動かして、遂に三七一年に斯波多の首都で全希臘の大平和會議を行ふことに定まる。この間斯阿兩國は密々諒解をとげ、齊武を抑へて、二國妥協して希臘の覇權を分

割しようといふのである。齊武でもそれと氣付いて、威波能を使節として派遣する。

果然此の大會で、齊武の使節威波能は、斯波多王亞是刺の威光に屈せず、正面衝突をする。阿善はそれとなく斯波多に味方して、傍觀する。齊武はこの大會議から脫退する。が、それは同時に斯波多を盟主とするこの平和同盟を相手に國家の存亡を賭する結果になる。伸張する齊武と、これを抑壓する斯波多その他との對立は、何うしてもこゝまで來ずには濟まぬのである。（著者は新興齊武の奮鬪に若い日本の將來を見たのである。）

紀元前三七一年三月、斯波多王亞是刺は同盟軍を併せ四十萬の大兵を擧げて四度齊武を征伐する。齊武では、威波能の措置を種々論議し、明かに反對した一派もあつたが、勢ひやむを得ず、戰爭と決し、これも兵三十萬を集め、內二十萬を以て威波能、巴比陀に與へ、侵入する斯軍を迎へ擊たしめる。

處が、亞是刺は前回の齊武侵入から退却する際、哥倫（コリント）の地峽で米世（メッセニア）の亡士利宗明（アリストメニス）（威巴二人の妻の兄）に射られた箭傷が再發して自ら出陣することが出來なくなつたので、雷音武王（クレオンブリユタス）が大將として全軍を率ゐて來る。かくて三月二十一日、兩軍隆具（レウクトラ）の野に戰つたが、斯波多方は威波能の武略に敵しかねて大敗する。史上にいふ、レウクトラの戰である。

此の一戰で、斯波多の霸權は地に墮ちた。同時に新興の民政國齊武がこれを握るに至つた。威波能は進んで、柳珂（アルカディア）米世（メッセニア）等の亡國を再興して斯波多に備へ、又海軍を盛んにして阿善を抑へる。斯波多は最後の窮策として當時の大國波斯に訴へて、齊武の盛運を抑へて貰はうとかゝるが、却つて波斯は齊武に同情して、齊武の霸主的地位を公認することになり、斯波多の思惑は全く喰違ふ。かくて齊武諸名士の多年の苦心が報ひられ「縱橫計成ツテ霸業定マリ、內政治ル後國威振フ」ことになつて、全卷團圓する。

以上の梗概はたゞ本筋を主とした爲め、挿話的橫筋を皆刈り込んでしまつたが、前後二篇四十五回の長物語の間には眞假樣々の挿話めく橫筋が織込まれて、深く讀者の興味を惹きつけてゐる。例へば前篇では、賢王格德（コドリュス）のこと、賢

士士良武(スラスフイリユス)のこと、テセス王と迷宮のこと、巴比陀と令南(レオナ)との相思、巴比陀と家宰の邂逅の始終など、後篇では米世(メッセニア)の亡士利宗明少年のこと、利宗明一家と、威波能、巴比陀諸名士のこと、隆具(レウクトラ)の野に纏る古傳説及び巴比陀が大會戰の前夜に見た夢中の痴鬼のことなど、そのうちでも主要なものであるが、これ等が他の澤山な小さな横筋と共に、極めて手際よく効果的に織込まれてゐる。

この小說の含む政治的分子を語ることは後廻しとして、單に歷史小說としての概評めくものを、左にものさう。

『經國美談』を歷史小說として見るに當つて、先づ頭に入れて置かなければならぬことは、第一にそれが時間的にいつて、明治歷史小說發達の準備期に屬するものだといふこと、次に、これは純然たる歷史小說ではなく、歷史的政治小說であり、主題とするところは單なる過去の英雄乃至普通の事件ではなく、古希臘、齊武の青年政治家の活動と齊武民政の廢興であるといふこと、これである。

この二つの概念を頭に於いて、『經國美談』の與へる印象を平心に纏めてみると、實に時代違ひの傑作だといふ感じが起る、傑作の上に驚くべき（今日では相當の割引を要するが）といふ形容詞を復活さしてやつても可い。これが一素人文人の處女習作だとは斷じて思はれない。私はかつて明治の歷史小說を論じ（一）明治二十年頃までを前期、乃至準備期、二十年以後二十七八年頃までを第一期、二十八九年から三十七八年乃至四十年頃を第二期、その以後大正にかけてを第三期と分けてその特色を概觀したことがあつたが、『經國美談』はその史實への忠實、史實に對する想像的解釋、偉人を人間として描寫せんとする試みなどを斟酌すると、時間的には準備期の作品なのに係らず、その表現技巧を別にせば、第一期はおろか第二期乃至第三期初め頃の諸作中においてもずつと頭角を拔いたところがある。誰しも一讀せば「傑作」と呼んでも過褒でないことがわかるであらう。

『經國美談』を一編の小說として見るとき、第一に感心するのは、そのプロット（結構）の古典的な美である。主として漢文學の敎養、支那小說の愛讀から學んだところの、照應、伏線、波瀾、抑揚などといふ語辭で表はされてゐる記叙のテクニクが類を盡して用ゐられ、それが整然と均齊を保つて布置されてゐるので、一種の古典的建築美といつたやうなものを、讀者に感じさせる。勿論作爲といふ感じは多少與へるが、感興を害する程のいや味な甚しいものではない。齊武民政の興隆といふことを大プロットとし、これを民政恢復（前篇）、國威振張（後篇）の二部分に分ち、前者の中心を巴比陀（ペロピダス）、後者の中心を威波能（エパミノンダス）とし、その下に幾多のサブプロット（小結構、横筋）を作つて幾多の人物を活動させる。その活動が卽ち如上の照應伏線云々のテクニクで整然と統合されてゐて、粗朴は粗朴ながら一種の建築美を示す。それだけに、此等のサブプロットは、幾分ながら有機的に因果的に大プロットに結合してゐる。數多い挿話的な小枝となつて横出してゐるが、結局大幹に因果的に緊密に連接させられてゐる。本筋の主題は、幾多のサブプロット幾多の横筋を結合し貫穿して、終曲（フィナレ）まで弛みなく發展して行く。古いテクニクだといへば古いに違ひないが、その古いテクニクも此處まで十分驅使されると、却つて謂ふ如き古典的な美を生む。この一點では、明治の歷史小說で「經國美談」を凌ぐやうなものは殆んどあるまい。

さうしてそのサブプロット卽ち挿話的横筋が又、史實と假作を交へて甚だ巧みに手際よく作られてゐる。著者龍溪の小說家としての天分を可成り豐富に惠まれてゐることは、これでもよくわかる。例へば前篇では第十五、十六、十七回に亘る巴比陀等の名士が變裝して奸黨を刺殺するあたり、又後篇十五、六、七回の平和會議から隆具の戰の前後を讀んでみるが可い。その他前篇では、巴比陀が水に落ちてから不思議に救はれて阿善に入るくだり（第五回）、巴比陀と家宰禮溫とが邂逅するくだり（第十一回）、後篇では平邪黨（ヘジアス）の亂と李志（リシス）父娘の悲運（第三回）、平和大會議前後（第十五回）、から隆具大戰の光景など、例の抑揚、波瀾、曲折などといふテクニクを使つてはゐるが、戲曲的興味が高潮

に達する。因にいふ、此の大會議は實錄だが、史上有名な安太隆の平和をこゝに利用してこの大平和會議といふ劇的一節を創作したのは、平邪黨の亂の點綴と相待つて、これだけでも龍溪の歷史的造詣と小說家的手腕を伺ふべき一證左となる。兎に角幾分は史實そのものゝ興味もあらうし、又當時の評者がいつたやうに、左傳、戰國策、史記、水滸傳、八犬傳、さては佛蘭西革命史、近世列國史あたりから借りた智慧もあるにはあらうが、若し龍溪に小說家的才分の惠まれることが薄かつたなら、かういふ結果は生じ得なかつたと思ふ。

更に著者が多數の史書を涉獵しその知識を融合して努めて當時の希臘列國の形勢を再現してみせ、背景を能ふだけ正確に描いてゐるので、主題の進展がそれだけ鮮明に見てとられる。これも特長の一つである。

篇中の人物に至つては、大體は史實によつて解釋を加へて、よく性格を書き分けてはゐるが、今少し個人的情緒なり、心理なりの分析描寫が欲しいといふ氣がしやう。然し概していつて、從來の稗史に描かれた人物の超人的類型的誇張的偏一的なところが、それ程甚しくなく、英雄をも賢士をも婦人をも、割に平等に人間的な見方をしてゐるところが見える。諸名士の中でも巴比陀、威波能、瑪留の三人は特に力を入れて描かれてゐるが、それだけ幾分理想化されてゐる、殊に巴、威の二人はさうである。だが此の手加減も、著書が單に一英雄としての威波能、一賢士との巴比陀を解剖描寫してゐるのではなく、齊武民政の立役者として、一種の理想的政治家を現はさなければならぬのだと氣がつくと、是認される。諸名士の理想化の割合に、奸黨の冷溫知や亂黨の平邪、斯波多王亞是剌などの性格がなかなかよく出來てゐる。又プロットに支那臭があるやうに、人物にもある。例へば威波能の何處かに龍溪の崇拜したといふ諸葛亮や韓魏公の面影があつたり、瑪留に「水滸傳」の黑旋風李逵の風が見えたりする。平邪黨の亂が佛蘭西革命を思はせるやうに、平邪がルソオ、ダントン、デ・ムランを思はせるのも、事實である。この最後の事は、同時に、龍溪が、此の作に於いてはたゞあるがまゝの齊武民政の興隆を描くつもりではなかつたことを語つてゐる。

勿論、『經國美談』にも種々注文を付けたい點がある。その何れもが無理な注文かも知れないが――。先づ總體からいつて今少し小說にした方が可かつたといふ氣がする。龍溪は自ら纂譯補述と署名し、前篇の凡例で「正史實事ヲ專ラ記載スルノ本意ナルカ故ニ」正史實事に悖らぬやう努めたと斷はつてゐるが、既に「人情滑稽ヲ加テ小說體ト爲ス」（同凡例）に至つた以上、今少し小說化しても可い筈である。前篇はその點可成りよろしいが、後篇がまだまだ史實に捉はれ過ぎてゐる。そのために年代や事件に多少の紛亂を生じてゐて讀者の頭腦を混亂せしめるところがある。これは一つは「六七年ノ後ニ期シタル」（後編自序）後篇を急に著作することになつたので、腹稿の時間に乏しかつた爲めが大にあらう。又既に政治小說の分子をもつてゐる以上、理知的冷情的であるのは當然であらうが、總體として感情的分子がもつと多くても可かつたと思ふ。少くとも巴比陀の如き、今少し人間らしい熱情家とした方が面白い効果を生じたらう。女性、令南の如きもさうである。齊武の民政恢復の場合や又阿善亂黨の暴虐、それに對する人民の復讐を述べる場合にも、もつと感情を見せた方が自然である。理知的結構の堂々たるところは感心するが、衷心から熱情に迫られて迸り出たといふところも幾分かあつて可い。

それから人物の理想化だが、これは一面政治小說である以上、理想政治及び理想政治家を描くのが目的である以上、勿論止むを得ない。龍溪は後年「『經國美談』は眞實に國士の風を鼓吹しようと思つて、材をギリシャに採り、智仁勇の各一方に長じた人物を配置して、半ば空想を以て書きあげたのだ」（二）と語つたといふ。だがこの目論見を露骨に描くやると、人物が道德概念のお化けになり、全篇が極めて機械的な敎訓的な淺薄なものとなつて、大に小說として（政治小說としてさへ）の興味を殺いだことであらう。兎に角篇中の主要人物の個性を、今少し人間らしく描いたらといふ不滿はある。だが同時に、彼等の性格の淺露な概念化をこの程度に避け得たのを見て、小說家としての龍溪の才分の大きかつたことが思はれるのである。

註(一) 拙稿『明治歷史小說研究』(日本文學講座第十一卷)
註(二) 早稻田文學第二二九號(明治文學號第一、混沌期之研究七一頁)

三

此の小說著作の目的は、『龍溪傳』の著者の語葉をかりると「國人に對する政治思想の普及を計り、大衆の政治的視野を擴める」爲めであり、又龍溪自身の語葉によると「眞の國士」を寫すつもりであつたといふ、何れにしても、吾等は進んで「經國美談」の政治小說としての眞面目を見たいと思ふ。

「經國美談」が表面に描くところは、古希臘の歷史中の一斷面であるが、著者の興味は、齊武諸名士の民政恢復と政治的經營にある。即ちこの二千年以前の史實が、これを著者當時の現狀に照して如何なる政治的意味をもつかといふ點にある。今、この小說の結構を政治的觀點から見直すと、齊武民政の興廢といふ主題で、前篇では民政の恢復、國政改革、民心安定等主として對內的經營を寫し、後篇では國威振起、國權伸張、邦本固定等主として對外的經營を寫してゐる。政治の要は民心安定である、民心が安定して歸するところがあるので、邦本も固定する、從つて大業を成すことも出來る。巴比陀、威波能、その他諸名士の大業は背後の國民が彼等をして成さしめるのである云々、此の點がこの小說の政治的イデオロギーの眼目といふべきであらう。前篇齊武奸黨專制の弊、後篇阿善平邪黨の細民煽動の亂、乃至全體に亘つて、民政と專制との對立、自由と暴壓との對立、志士と奸人との對立等、皆この當時の政界に對して諷するところがある。

この小說の內容の政治的意義を論ずる前に、一應著者龍溪の政治的信念を確めて置く必要がある。たゞ參考のため

であるから、それは極く概略でよろしい、但し間違ひのない正確な概念を與へるものでなければならない。私は、それには、矢張り『龍溪傳』から引用した方が安全だと思ふ。

先生は、政治家肌の祖父と父とに啼まれた先生が、福澤翁の訓を受け、更に自ら英米その他の先進諸國に於ける政治組織を研究するに及んで、遂に民權の伸張と立憲政體の樹立とを、畢生の大業となすに至つたのは、極めて自然の經路でなければならぬ。「幕末に身命を挺して働いた諸先輩は、王政復古と全國統一の事業とを成就した。次いで爲さるべき政界の大業は、これを措いて他に何があるか。」と信じた先生が云々（一）。

又いはく――

先生の志は極めて公正である。我國に憲政を布き、民權を伸張すること、これを唯一の眼目とするの外、何等の他意がなかつた。（中略）先生の眼中、國家こそあれ、國民こそあれ、薩もなく、長もなく、土もなく、肥もない。目指す所の第二の維新は、すべての封建的思想を超え、あらゆる恩怨を云爲せず、公平に打建つべきものと信じてゐたのである。ところが土佐の板垣一派は、その頃動もすれば徒に薩長を目の敵にしてゐる姿があつたので、先生はそれを喜ばなかつたといふ。（二）

龍溪は又、改進黨の（三）組織者の重要な一人であり、同黨組織後最も鮮やかな活動をした花形であつた。龍溪の政治意見を具體的に知るには、改進黨の綱領を讀む方が捷徑でもあるし、『經國美談』に現れた政治的イデオロギイを解するにはこの綱領を知つてゐた方が宜しいから、左に掲げて置く、曰く――

一、王室の尊榮を保ち、人民の幸福を全うする事

二、內治の改良を主とし、國權の擴張に及ぼす事

三、中央干渉の政略を省き、地方自治の基礎を建つる事

四、社會進歩の度に隨ひ、選擧權を伸濶する事

全部擧げなくとも可い、必要なところはこの位で澤山であらう。

さて、この小說を通觀して第一に看取されることは、專制政治に對する民政の勝利といふことである。これは齊武の正奸兩黨の爭ひにも、齊武と斯波多の爭衡にも、それ以外の小邦國の黨爭などにも（例へば後篇第十九回等を見よ）皆見られる現象である。これには、當時の藩閥專制政府に對して反省を求める意味もあり、同時に民間志士及び大衆に對する鼓舞でもあつて、民間政治家乃至志士たる人々の當然の叫びであらうが、史實に裏書きされてゐるので、人心に訴へる力は實に强い。

こゝで一寸注意を要するのは、此の民政といふ語葉の意義であるが、これはこの小說の內容からいへば明白に共和政治を意味する、齊武の民政とは齊武の共和政治といふことである。だが、それだからとて龍溪が共和政治を理想とし、日本に共和政治を採用しようとしたのだなどと考へるのは、これ程大きな誤解はあるまい。共和は自由黨さへ公然と唱へぬもの、且つ龍溪等の改進黨の綱領第一條によつても、明白に君主立憲政治の意味が出てゐるし、この小說によつても、後年はともかく當時の龍溪は細民（今日の大衆）が第一に政治上に跋扈する如き共和政治を嫌忌してゐるらしく見える。（後篇第二、三、四回邊の阿善の平邪の亂の條を見よ）。從つて龍溪の希望し謳歌した民政とは嚴密な意味での共和政治といふことではなく、人民の參政を許してゐる政治、精々で民本政治といふ程の義と解すべきであらう。矛盾といへば矛盾、曖昧といへば曖昧だが、その點はこの程度に解し、强ひて追究しなくて可い。

此の小說の語るところによると、同じ民政でも、秩序を守り、現實を先にするものは成功し、然らずして徒らに空想に走せ血氣に任せて過激の事を爲さんとするものは成功せぬのみでない、國家人民にとつて大害を醸す。齊武諸名

士の政治經營が成就し、平邪一黨の主義所爲が阿善の國家を衰亂させるのは、この爲めである。

秩序の二字は、政治の根本要件として著者龍溪の殊に重んずるところで、彼は『經國美談』前後二篇を結ぶに當つて、特にこれを力說してゐる、――

齊武ノ諸名士カ十九年間ニ於テ內ハ姦黨ヲ除キ外ハ國勢ヲ伸張セル經國ノ美談ヲ記シ來テ筆ヲ此ノ最盛ノ年ニ止ム讀者諸名士ガ新國ヲ興セル大業ノ秩序ト其ノ寬猛中ヲ得タルノ擧動トヲ記臆セヨ（四）

此の秩序とは何を意味するか。即ち「縱橫計成テ覇業定マリ、內政治ル後チ國威振フ」（後篇第二十五回破題）といふこと是れである。別の語葉でいふと、「內治ノ改良ヲ主トシ、國權ノ擴張ニ及ボス事」これである。さうしてこれはこのまゝ改進黨の綱領（第二條）なのではないか。さて又、「內治ノ改良」に當つて第一に守るべき用心は、現實の利害を主とし、必らず空想に馳せぬことである。

凡ソ國政ヲ更革スルニ於テ其ノ目的現在ノ害ヲ除クニ在ル者ハ其ノ擧必ズ治ニ終リ空想ノ利ヲ與スニ在ル者ハ其擧必ラス禍亂ヲ長ス（五）

それは何故かといふと、――

現在人民ノ疾苦ヲ除クカ爲メニ舊政ヲ改ムル者ハ之ヲ更メ盡スノ時ニ於テ更革ノ擧已ニ玆ニ盡レハナリ（六）

然るにその改革の性質が單に現在の害を除くといふだけではなしに、「人々胸中ニ空想スル政治上ノ仕組ヲ模型トシ意中ノ政ヲ行フテ一層ノ利ヲ與サン」（七）と欲することになると、――

一事僅ニ更革シ了テ直ニ二事ニ進ミ二事僅ニ更革シ了レハ又三事ニ進ム更革ノ擧動ハ止ルヘキ際限ナク意中ノ空想ハ日ニ新奇ニ向ヒ國人遂ニ其ノ弊ニ耐ヘサルニ至ル（八）

即ちこれでは何時まで經つても民心が安靜に歸する時がない。人民の爲めに計つて却つて人民を亂すことになる。こ

これは爲政家政論家の深省を要するところである。

空想を事とし、空理を弄し、徒らに過激を事とするのは、龍溪が殊に憂ふるところであると見えて、『經國美談』後篇（第二、三、四回）の阿善平邪黨の亂を敍する際に、特に力を籠めて反覆丁寧にこれを戒めてゐる。これは蓋し時の政界の風潮について、寓意するところがあるのである。

元來平邪とは何人か、その所信持論は何うか。龍溪は語つて曰く、——

玆ニ阿善ノ南部瑣良美ノ島ニ生シタル一人物アリ其名ヲ平邪（ヘーチアス）ト云フ此人ヤ百難ヲ犯スモ屈撓スル事ヲ知ラサル勁剛ノ天性ヲ有シ萬衆ノ前ニ立テ敵ト戰フモ激言詭說ヲ以テ能ク之ヲ壓倒スルノ技倆ヲ蓄フ（九）

誠に一の人傑であるが、惜いかな、——

此人ハ人民ノ患害ヲ除クノ心ヨリ寧ロ一身ノ功名ヲ謀ルノ心熾ニシテ又政治上ノ仕組ヲ發明スルニハ特ニ銳敏ノ才アレトモ其ノ目的トスル所ハ現在社會ニ存スルノ患害ヲ除クニアラスシテ唯自家ノ胸中ニ美麗ナル社會ノ雛形ヲ想造シ其ノ一時ニ行ハレ難キニモ拘ラス此ノ美麗ナル雛形ノ如ク現在ノ社會ヲ改造更革セント欲スルニ在リ（一〇）

一言でいへば、平邪は大革命時代のフランスの煽動政治家をそのまゝの人物である。彼は一度その政治論を實現しようと阿善の細民を煽動したが、純正黨の名士に沮まれて失敗し、ナポリの島に遁れた。島にあること十年、斯波多王亞是刺が齊武侵入の時に、阿善と齊武との連盟を恐れた亞是刺は、それとなくこの平邪に助力を與へて再起させた。再起した平邪は多年の持論をかざし、今度は破竹の勢ひで阿善に乘り込んで來て、細民煽動に成功し、阿善に大革命を捲き起した。彼の主張は、代議政を排して人民各自の共議政を採用すること、外交には中立を守ること、政論場は隨意集會として狼藉警備をなさぬこと、村邑會の總人員に公費をもて日當を支給すること等で、徹頭徹尾、細民の機嫌をとり結び、これを煽動するに都合がいゝやうに出來てゐる。平邪はこれを楯に細民を味方として純正黨に打ち勝

つた。

ひとり平邪がフランス革命時の煽動政治家に似てゐるばかりでなく、此の時の阿善の革命、即ち平邪黨の亂はフランス革命の經過に極めて似てゐる。全然模寫といつて可い箇所もある。純正黨にも珂理杜朗（カリストラチウス）のやうな先見の明のある人物がゐて、早く對策を講ずることを說いたが、平邪や細民の勢力を輕視してゐた諸名士は、問題にしなかつた。その內、これはと思ふ時には、早や、政論場の隨意集會が五百人公會で可決される。その結果政論場は公私とも暴民の蹂躙するまゝに任される。次いで、村邑會の公費日當支給も可決される。人民は職業を抛擲して、村邑會に衣食することになる。間もなく阿善に彼等一派の會同館といふものを建て、こゝを一派の政策討論場とし、こゝで議決したものを指令として、五百人公會に正式に決定させるに至り、いよいよ極端な平等主義政策を實行することになつた。かくて、亂民と純正黨とは正面衝突をする。亂民は進んで、會同館で正黨の外交政策を責め、正黨をば國家を大難に直面せしめた（即ち齊武と結んで斯波多等と戰ふに至らしめた）罪人であると決議し、公會を脅かして、これを可決させた。かうして、夜半の警鐘となり、諸名士の捕縛遭難となり、阿善は流血の巷と化する。會同館といひ、公會の脅迫といひ、夜半の警鐘といひ、名士の遭難といひ、細民の暴動といひ、正にこれは、阿善を借りてフランス革命を寫すもの、極端な平等政治、過激な共和主義の弊害を力を極めて描寫してみせたのは、再びいふが古を假りて今を諷せんとする寓意があるからである。

平邪は志を遂げて一派の手に阿善の政權を握つたもののゝ、暴民の氣勢の餘り强いのでいさゝか辟易し、密々に秩序回復に指をそめる。だが騎虎の勢ひで何うなるものではない。却つて過激派中に更に過激派を生じ、平邪一派は失脚する。これからは純然たる恐怖時代である。平等均一論を實行し、財産を公收し、亂黨に與せぬものを死刑にする。黑暗澹たるこの時代が暫時つゞいて人民相互に安い心もなかつたが、やがて智猛周、可武利（カブリアス）、珂利杜朗の三人の協力

で、亂民を一掃し、阿善の秩序を漸く恢復して舊政に戻すが、國運の發展は全く止まり、國家が衰頽の域に入る。

龍溪がその肚裡の創作人物平邪をかりその一派の暴亂をかりて諷しようとしたものは何であるか。蓋し彼はこれによつて民政の弊を假說して、當時の爲政家政論家に敎へるところがあらうとしたのである。民政は理想の善政たることには異論がないとしても、それが極端に走り過激に流れると、この大弊を生ずる。蓋し政治には現實の利害を第一とし、萬事空想に馳せることを排するといふ龍溪の根本的持論を徹底的に例證して示したものと見て可い。

當時龍溪の眼中には、國家的見地よりして時の政府當局に對し、深切にも人民參政後の用心を促した意味もあつた。だが、何よりも先づ自派改進黨の秩序政策、穩健主義を强調して、自由黨一派の急進政策、過激主義を排する意圖を盛つたものであつたことは、この小說全體の趨向から見て明白なところである。便宜上、再び『龍溪傳』の著者の語葉を引用するが、——

概して改進黨は秩序的進歩主義を奉じ、直接行動を避けた。自由黨がフランスの議院政治を模倣しようとするに對し、改進黨はイギリスの議會政治に範を求めようとした。かれが一院制を唱ふるに對して、これは二院制を唱道した。かれが普通選擧制を執らんとするに對し、これは先づ制限選擧から進まうとした。かくの如く、自由黨と改進黨とはその根柢をなす思想に於て既に色を異にしてゐた。その結果、主義綱領の上に於ても著しい杆格があつた。

（一一）

自由黨は好んでフランス革命や、ロシヤの虛無黨を引用した。且つ改進黨が紳商豪農階級即ちブルジョアにのみ基礎してゐるのと反對に、努めて勞力社會、下層社會、所謂細民の啓發に盡力し、これを後援にしようとした。（此の小說でも人物は貴族かブルジョア出身の人々でプロレタリアは殆んどゐない、ゐても政治の第一線に居らぬ、この點で自由黨と對立を成してゐる。）自由黨には、ルソオの空想的政治論に心醉してこれをそのまゝ日本に實行することが民

政の更革として理想的なものだと考へてゐる人々が多かつた。中には、一層進んだ共和政治の思想を持し、暴力手段によつて政府を顚覆しようと試みた人々もあつた。龍溪はこの人々に對して、その思想、その政策の到底成功すべきものでないこと、人民の幸福をもたらす所以ではないことを說きたさの餘り、この平邪の暴亂といふ大活畫を描いて見せたので、平邪の二字も平等邪道の縮語とも見られる。

尤も龍溪が自由黨の主義を排し、乃至彼等に反省を求めてゐる痕跡は、この一個所のみではない、全篇に至るところに仄見えてゐる。巴比陀、瑪留の血氣の行爲の成功せぬところ（前、第十二）、威波能が暗殺反對の正論を唱へ、暴力を却けるところ（前、第十五）、珂理杜朗が智猛周將軍に政治の要を說くところ（後、第五）、此等はその中でも際立つたものである。巴比陀等の奸黨暗殺を成功せしめてはゐるが、これは史實で止むなく許したものである、且つこれが成功を許しはしても、猶ほかゝる手段を極めて望ましからぬ、危險なものに見せようと種々工夫してゐる。龍溪が初めフランス革命を描かうとして止めたといふが、それは近代の史實として生々しいからといふだけではない、龍溪の政治理想を寫すのに都合が惡い點が多々あつたからであらう。兎に角龍溪は、自由黨一派の主義政策を排してゐる一方、改進黨の主義政策の實行可能と成功を强調してゐる。さうしてその例證として、威波能等をして改進黨主義を齊武に行はせて成功せしめ、平邪等をして自由黨主義を阿善に行はせて失敗せしめてゐる。前篇に於いてよりも後篇に於いての方が、この調子を强く現はしてゐるのは、前篇の出た十六年三月には未だ自由改進兩黨の軋轢が甚だしく表面的になつてゐず、自由黨の僞黨撲滅運動も火の手が揚らなかつたのに對し、後篇の出た十七年二月には既に兩黨の間が極端に惡化し、改進黨の花形たる龍溪や尾崎行雄などが、京阪遊歷の途次名古屋邊で自由黨の一派から暴力的脅迫をうけたといふ風評があつたのに對照すると、何やら相通ずる消息が分かるやうな氣がする。自由黨側で攻擊の主力を集中したのは、三菱對大隈重信の關係で、改進黨首大隈は在官時代權力を利用して三菱と結託して惡錢を貪つた

といふのであつたが、この小說の後篇第十三回で阿善の名將智猛周が募集せる戰費を濫用したといふ非難を受けて法廷に立つに至つた條を讀むと、自ら微笑されるやうな次の一節に出會ふ、――

凡ソ顯地ニ立チ財務ヲ取扱フハ衆疑ノ集ル所ニシテ如何ニ淸廉潔白ノ名士ト雖トモ疑似ノ形迹ヨリ想像セラル、トキハ意外ナル不幸ノ寃罪ヲ蒙ル事ヲ免レス是レ古今ノ通弊ニシテ識者ノ痛嘆スル所ナリ然レトモ天下定論アリ後世正議アリ群小ノ惱ハ遂ニ名士ヲ傷ルノ力ヲ失フ（一二）

龍溪は聰明絕倫の人だが、矢張り人間であり、黨人生活をしてゐる以上、餘りに改進黨的な心理が時として動かぬわけには行かなかつたらう。彼が後篇の自序に於いて、「聊カ思フ所有テ後篇ノ述作ヲ六七年ノ後ニ期シタリ」といつてゐる。この「思フ所」とは何か、これは揣摩する限りではないが、恐らくは、六七年後に自分の改進主義政治理想の實現を期し、いよいよ實現の際に於いて政府當局、自由黨その他に對して「それ見たことか」と言ひたかつたのではあるまいか。

だが龍溪の諷するところは自由黨一派の政綱行爲のみに止まらない、當時の爲政家に深く自省を促してゐる。前編第七齊武の奸黨が志を得て人民を愚にするところは、同第八、奸黨の探偵政策、同第十三、奸吏が上長の旨をうけて良民を惱害して志士を憤怒せしめるところなどは時代の活寫であらう。殊に同第八の民黨の名士が法廷で奸黨の審問をうけるところの如き、宛として當時天下の耳目を聳動した福島事件裁判の筆記を讀む感じのするところがある。更に前篇第二、內政整理されずば國勢伸すといふ說、同第四、奸黨の比律布（ヒリツプ）が人民參政の弊を論じ、人民參政のため政府の更迭を數々ならしめ、國家の方針をして不安ならしめ、國運の發展を阻害するといふのに對し、威波能がこれを駁擊して、「寡頭專制こそ道德を腐敗せしめ、人心を危激に導き、國家の基礎を覆へすものであると論ずるあたり、後編第一、齊武人が民政回復後極めて愛國心が强くなつたといふこと、同第十、齊武の民心が相和合して內政が大に治まり、

諸名士をして國威を發揚することを得せしめたといふこと、等々は、積極的に當時の爲政家の爲めに蒙を啓かうと試みた點であらう。

以上吾等は『經國美談』のもつ政治的イデオロギーを檢討したが、その理想とするところは自然に超黨派的な分子と黨派的な分子とをもつてゐる。人民參政の必要を力說し、民政の勝利を豫言する點は超黨派的なもの、從つて論敵たる自由黨一派でも異存のないところである。だがこの豫言を實現する手段を說く點に於いて、現實の利害を重視して空想過激を排するところ、秩序的進步主義を執るところは、正に英國風の改進黨的主義政綱を强調したものであり、自然にフランス風の自由黨の理想乃至行爲を排する結局になつて、黨派的色彩を帶びて來る。勿論、龍溪がこの小說を書いたのは、國家の大局から達觀して「政治思想の普及、政治視野の擴大」を試みるためであつたらうことは、疑はない、且つ全盛時代の齊武が全土の大平和を實現させようとする努力に超黨派的理想がほの見えてはゐる、だが龍溪の政治的信念と龍溪の政黨人的立場とがこの小說をして自然以上の如き政治的內容をもたしめるに至つたのは、必然の結果であり、如何とも止むを得ないことであつた。此の小說がかゝる政黨的色彩、卽ち改進黨的政治理想を發表したものであることを指剔した人は今日まで無かつたし、且つ著者龍溪に聞かせたならこれを否定するかも知れないが、私は今後この小說は明白にさうとして認めらるべきであり、又さうとして認められてこそ、此の小說に一種新な興味なり存在理由なりが生じて來るのだと堅く信ずる。

註(一)　『龍溪矢野文雄君傳』、一一七頁
註(二)　同　一二四頁
註(三)　明治十五年三月十六日結黨、四月發表

註（四）『經國美談』後編第二十五回最後の一節
註（五、六、七、八）『經國美談』後編第五回一〇六頁――一〇七頁より引用
註（九）同　第二回二七頁
註（一〇）同　二七――二八頁
註（一一）『龍溪矢野文雄君傳』、二〇二頁
註（一三）『經國美談』後編第十二回二五九頁

四

此の小説の出現が當時の青年、殊に青年政治運動家達に甚大な感動を與へたことは、『龍溪傳』の著者のいふ通りである。曰く、――

この書の前篇が一たび世に現れるや全國に非常なるセンセエションを渦巻き起した。當時苟くも將來に望みを抱く青年にして『經國美談』を讀まぬ者は殆どないといはれたが、全國の青年に、如何に大なる激動を與へたかは幾十版といふその頃として未曾有の版數を重ねた一事に徵しても推して知るべきである。本書に動かされて或者は民權運動に身を投じ、或者は政界に志を立てた。少くとも一般の政治的自覺を動かし、政治熱を高潮せしめることに、どれ程深い原動力となつたか知れなかつた。今日、政界に名を成す人物にして、當時に於ける本書の感化を記憶せぬ者は、殆どないといはれてゐた。（一）

德富蘆花の『思出の記』の中にも次の一節がある、――

共れから經國美談の番で、僕等は幾晩徹夜してイパミノンダスペロピダスとセーベの經營に眼を惡くしたかも知れ

ぬ。(二)

以て一般青年間の人氣の一斑を知ることが出來やう。吾等はかゝる青年の中に、蘆花の外、片山潜、高安月郊、北村透谷、巖本善治、國木田獨歩、田山花袋、その他の名を擧げることが出來るのである。坪內逍遙が思ひきつて文學界に打つて出たのも、龍溪その他によつて文壇革新の機運が動き始めてゐたのを見て決心したものであるといふ(直話)。

だがその讃美感動は超黨派的であつた。『經國美談』の讃美者の中には、改進黨の連中は勿論、自由黨の青年志士も多勢ゐた。當時政府の言論壓迫に對抗するために自由講談(三)の旗幟を建てゝ奮闘してゐた熱血漢奥宮健之、同健吉、龍野周一郎、福井茂兵衞等は好んでこれを講談化し、大衆の前に演じて何時も大喝采を得た。又明治十七年の加波山事件と陰密な關係のあつた小久保喜七は、その頃の同志が皆この小説を愛讀したことを追想し、巴比陀の作といふ『春の花』の歌(四)を誦して志氣を鼓舞し合つたことを語つてゐる(五)。此の人々の熱愛したのは『經國美談』の前篇で、これに描かれた民權志士の苦心と民政の回復に憧憬し、巴比陀、瑪留などを理想の人物として崇拜をさゝげてゐたのである。後篇に描かれてゐる國家の秩序的經營や威波能の人格など、割に顧みるところとなつてゐなかつたらしい。こゝは面白い現象である。ともあれ、『經國美談』の大旨たる、正義の名士が辛苦して民政を恢復し、國家を經營し、民政によつて專制に打ち勝つて、大に國威を張るに至つたといふことは、當時としては超黨派的の大理想であつた。思ふに此等の青年志士は、『經國美談』の光彩ある主題と興味深い史實と雄大な結構と巧妙な説話と流麗な文章に魅惑され、若い血を躍らして書中の青年政治家の奮闘に同情し共鳴し、幾分冷靜な龍溪の政治的寓意(改進黨主義の强調)の如きは省思する餘裕をもたなかつたものであらう。又或る人々は、よしこれに多少氣づいたにしても、この小説が時代違ひの傑作である上に、著者龍溪の造詣の博大なのに壓倒され氣味で、何處までが史實、何處までが假設であるか辨別することが出來ず、且つ龍溪の所論が露骨を避けて史實に托して如何にも溫乎と諄々と說き出され

てゐる上にその志操の純正なことが知られてゐたから、反對黨側の讀者も、その改進黨主義的分子の批判を敢てする程の反對意識をそゝられなかつたのかも知れぬ。何れにしても、吾等はこゝにも亦、龍溪の文學的才分の卓拔なのを認める。

こゝに「經國美談」の感化力の大さを語る逸話がある。この頃、大名華族の某氏に一人の若殿があつた。彼はその富と地位に安住して學問などは勉めず、專ら遊蕩を事とし、父母や家從の忠言を耳にも入れなかつた。それで家宰の某は苦心の餘り、その若殿の寵妓某に志をうち明けてこれを味方に賴み、わざと某女の机邊に數部の書籍を置き、その中に『經國美談』を一部入れて置いた。或る時若殿は妓の許にやつて來て例のやうに流連したが、ふと女の机の邊にある書籍を見て、それが彼として意外な書物ばかりなのに好奇心を起して、いろいろとそれ等の書物を繰りひろげてゐたが、やがて女から賴まれて「經國美談」を手にとつて何氣なく讀み出した、讀んで行く內にすつかり魅了され、一部二册を一氣に讀み了つた。さうして心胸にいふにいはれぬ爽然たる氣持ちを覺えた。その日は若殿は何もいはず歸つたが、翌日からは人が變つたやうに洋學に出精し、遂に他日有爲の身とならうとて洋行するに至つたといふ（六）。

これなどは幾分迷信じみた讚美の仕方ではあるが、兎に角この時代違ひの傑作に對する時人の驚異は想像に及ばぬものがあつたらしい。第一に、この小說が日本人の手に成る創作だといふことを信ぜず、西洋の原書をそのまゝ飜譯したのでもないとこれ程の名作が出るわけがないといふ意味を公言した新聞（七）さへあつた。而かもこの新聞さへが『經國美談』を、前代未聞東洋開闢以來の傑作だが、と銘うつてゐるのである。

その他これを詠じた漢詩あり、これを題材にした淨瑠璃あり、更に後には芝居とまでなつた。又前篇發刊後間もなく松林伯圓がこれを講談に仕組んで大喝采を得たことは、よく人の知るところである。

今この小說に對する當時の評言を吟味して、『經國美談』がいはゆる洛陽の紙價を高めたのは何故かと考へてみると、

（第一）に、脚色の巧妙が擧げられてゐる。この脚色といふ語には、いはゆるプロットといふだけでなしに主題の意味もこめてあるので、つまり「西洋古代の革命記を小說體」（八）にものして、青年政治家の活動と性格とを相關的に書き分け、而かもこの頃の青年志士達が夢想してゐた理想の民政を古ギリシャの史實をかりて空想裡に成就させて見せてゐる。これが歡迎の第一因であらう。この頃の志士達からいへば、自分達の分身ともいふべき齊武の青年政治家達の、この頃の日本の專制政府ともいふべき齊武の奸黨をこつぴどい目に叩きつけて勝利を得るところが此の上なく痛快に思はれたのである。（第二）には當時の人々には想像も及ばないやうな西洋古代の人情風俗世態を描いて東洋人の耳目を一新せしめたといふことが擧げられてゐる。つまり日本人でありながら西洋の世界を自國のやうに描いたといふ點が新奇を好む當時の人々を驚かし且つ滿足させたのであらう。よく讀むと著者龍溪の古代描寫が思ひがけないモザイクの近代的補綴（例へば後篇第十一回名士淑女夜會の條、第十四回平和會議の條など）をしてゐるところもあるのだが、そこ迄は氣がつかない。（第三）には文章の艶麗とか縱横自在の筆とかいふことが擧げられてゐる。此の文章、即ち Styleといふことは、古來日本小說の價値を定める重大要素となつてゐる。明治以後舊來の文章といふものゝ重味が割合に重視されなくなつたが、『經國美談』の出たころは未だ然し文章第一主義が相當威張つてゐて、作品の批評には必ず文章の好惡を以て第一標準とする風が殘つてゐた。從つて龍溪も『經國美談』の文章には餘程苦心し、當時流行の漢文體、和文體、歐文直譯體、俗語俚言體の四體を兼用して自家一流の通俗で典雅清新な一文體を作り出したのである。この事は『經國美談』後篇の卷頭文體論の條に詳しい。兎もあれこの小說の文章も當時としては讀者を牽引する魅力の一つであつた。さて私は以上の三因に今一つの原因を附加へたい。それは、此の小說が當時民間政客の花形で改進黨第一流の名士たる矢野龍溪の手に成つたといふことに對する大衆の英雄崇拜的乃至事大思想的興味で、これが相當大きな役割をしてゐると思ふのである。

註（一）『龍溪矢野文雄君傳』、二一七頁
註（二）蘆花『思出の記』第十一回
註（三）昭和九年十二月「傳記」所載「政治講談事始」
註（四）『經國美談』前編第十一回、巴比陀が單身本國に潛入しようとして、途中の山家に空しく病臥の身となつたとき、月夜此の歌を聞いて、歌の主の家宰禮温と出會ふところ。
註（五）昭和四年文藝春秋（月未詳、『龍溪傳』所引）
註（六）明治十七年五月三日、開花新聞三四七號
註（七）繪入自由新聞五二六、五二七號（明治十七年九月十三日、十四日）
註（八）右同新聞記事中の句

五

『經國美談』の出現は明治の文學史から見て何れ程の意義をもつものであるか、換言すると、爾後の政治小說、乃至一般に明治小說に對して何れだけの影響を與へたか、何れだけの貢獻をしたか。かゝる設問の一半に對しては、前節でもう答へた。次にその他の一半に對して答へる、それは從來の文學史の常識を繰り返す結果になるかも知れないが、一應述べて置かう。

從來の明治文學史乃至明治文學關係の諸論文に、漠然『經國美談』をもつて政治小說創作の嚆矢と認めたものが多いが、今日の研究ではもうこの說は通用しないことはいふまでもない。だが當時の知識階級に對して政治小說の力を認めさせ、彼等の意識に政治小說といふ文藝上の一形態の存在を明確ならしめた點では、最初の小說だといつても可

い。彼等はこれを讀んで、政治小說といふもの丶興味を知り、勢力を知り、同時にその政治思想普及のためには極めて必要なものたることを覺つた。爾後の諸新聞に、往々政治小說の必要を力說した諸論文（一）の見えるのは、必ずしも此の小說にだけ刺戟されたのではないことは、明白であるが、この小說の出現直後からさういふ現象が始まつてゐることは、十分注意に値しやう。かくて政治小說創作熱が次第々々に刺戟された結果『佳人之奇遇』『雪中梅』以下の傑作を始め、幾百といふ愚著凡作までが二十年前後數年後に續々生え揃つて、遂に文學史上に空前な政治小說全盛時代といふ一期を劃させるに至つた。これは勿論獨り『經國美談』のみの功ではない、だが然し『經國美談』の出現とその流行とがかういふ現象をこ丶まで導くに與つた最有力な分子の一つであることには、何人とても異論がないと思ふ。

且つ又、龍溪の如き政治家が小說といふ形式に政治的意見を寓させて立派に成功したといふことは、かく小說を政治と握手させることによつて、當時一言に戲作と貶されてゐた小說そのものに對する世人の觀念を多少とも變へ、小說の位地を向上せしめるにも大に力があつた（二）。

翻つて思ふに、『經國美談』成立の直接の動機には古來乃至當時の日本小說界に對する不滿の念が伏在してゐたことは、前に引用した龍溪の自序から明白であるが、畢竟龍溪は、此の小說を、小說としても立派なものにしようとしたのである。この事は又、彼が、この小說製作の間に小說としての技術的方面に實に多くの工夫と力を費してゐることでも分かるのである。卽ち龍溪に小說改良の意識があつたと、吾等が斷じても、さまで見當の外れた推論とはいへないであらう。

此の政治家出身の小說家の小說改良意識が明治初期の文學改良運動の根幹的一面を成す點に於いて、龍溪の肚裡にかういふ意識が動いてゐたといふことは、十分眼を見張つて注目すべきところであらう。

龍溪は又、小說の本質を解してかういつた、「世人動モスレバ趣チ曰ク稗史小說モ亦タ世道ニ補ヒアリト蓋シ過言ノミ若シ夫レ眞理正道ヲ說ク者世間自ラ其書アリ何ソ稗史小說ヲ假ルヲ用キン唯身自ラ遭ヒ易カラサルノ別天地ヲ作爲シ卷ヲ開クノ人ヲシテ苦樂ノ夢境ニ遊ハシムルモノ是レ則チ稗史小說ノ本色ノミ」云々、これは一つは當時有識者間に一の通念となつてゐた小說卽敎化の具といふ考へを打破しようとしたもので、その點では時代に照してみて卓見といはざるを得ない。言が簡に過ぎるが「小說神髓」の萠芽的思想の一つと見ても、さう誤つたものではない。後半の小說本質論のところ、尙は小說の本質をローマンスと見たものであり、空想的なアイデアリズムの主張に偏してゐる點があるが、こゝは政治小說家たる龍溪の眞面目で、理想開展の政治小說としてはさういふロマンチックな一面をもつ必要があつた。それと同時に此の本質論には、當時の識者の小說觀の一面が反映してゐることも、無論首肯されるであらう。龍溪は更に進んで、かういつてゐる「故ニ稗史小說ノ世ニ於ケルハ音樂書圖ノ諸美術ト一般尋常遊戲ノ具ニ過ギザルノミ是書ヲ讀ム者亦タ之ヲ遊戲具モテ視ル可ナリ」卽ち一種の藝術遊戲論であるが、旣に、小說と敎化敎訓といふ實利との必然的關係を否定した龍溪の結論としては、當然かうなる筈であつたらう。この實利的關係を離れてなほ且つ文學をその實利と同等以上に高く買ふやうなことは、政治家にして英國風の改進思想の持主たる龍溪には望むべからざることであつたらう。私は、龍溪の小說觀それ自身を甚だ高しとするものではないが、その小說を敎訓的實利から分離せしめんとしたところに、從來の文學觀から一進展すべき機を認めるものである。

此の小說の全篇を書き終つたとき著者龍溪はかういふ詩を作つた。年少誤懷二天下憂一。時々深夜聞レ鷄起。半生事業何所レ成。枉向二燈前一編二小史一。だがその小史の賣行が大によく、前後二篇で數千金の利を得たので、いよいよ宿志の外遊を決意し、後篇の完成刊行後間もなく、十七年四月を以つて征途についた。當時の一新聞は報じていふ（三）。

半挺の墨一管の筆能く千金に値する者は文士の名譽なり改進黨中學藝德行の名譽高き報知社の矢野文雄先生は豫て

英國の憲法内閣の組織政黨の運動等を取調ん爲め歐行の素志ありしが曩に經國美談を著して意外に世に行はれ已に三版を刷出し千金の利を得られしに依り之を洋行の資に充んとて草稿を七八年後に期せられし後篇を俄に起稿して世に出されしが是亦千金の利ありしに就き蹶然足を英米に入れんと思ひ立たれ來月中旬を期して先づ英國へ赴き歸途は米國を巡遊せらるゝよし先生が近作に、日月匆々去似ㇾ流。縱横費ㇾ計二春秋。屏居半歳君休ㇾ怪。萬里售ㇾ文試ㇾ遠遊。とあるを以ても知るべし一部の著述を以て萬里の波濤を跋渉するは實に先生を以て嚆矢とす云々。

註（一） 此等の論文については私が別に執筆中の「明治初期の文學論」中に詳しい、本書「政治と文學」の條參照。

註（二） 例へば八木半痴譯『露人氣質』の須藤南翠序文の一節參照。

註（三） 明治十七年三月三十日、開花新聞三一九號）

【附】菊亭佐藤藏太郎

一

前章に於いて、『經國美談』の述作に際し龍溪と同鄕の記者佐藤藏太郎が大に力を致したことを語つたが、その序次、こゝで佐藤氏のことを語らう。佐藤氏は菊亭香水と號し、これ又『慘風悲雨世路日記』の著者として明治初期の文學界には逸すべからざる名であるが、別に政治小說の著作も二三あり、『世路日記』も政治小說的に見得べく、此の書でいささか語つて相應はしからぬ人ではない。私は、先づ『世路日記』を語り、それから菊亭の著に成る他の政治小說について述べ、その後に菊亭自身について數言する考へである。

『慘風悲雨世路日記』の今本は、政治小說として見れば見らるゝものであるが、著作の初めに於いては、これに政治的意圖を寓するつもりは何等無かつたのである。『世路日記』は中途で改題した題名であつて、その初名を『月氷奇遇艶才春話』といふ。これの執筆は明治十一年の由であるが、執筆の由來は『文士佐藤鶴谷傳』に詳かである。(後節、傳記の條參照)。

曰く

明治十二年三月鹽屋學校ニ轉勤ヲ命ゼラル、是ヨリ先鶴谷、鶴谷女學校ニ奉職スルモノ前後五年、方正謹直ヲ以テ稱セラレ、職ニ當ルヤ懇切子弟ヲ敎ヘ、精勵校務ヲ執リ、權勢ニ阿ラズ、富貴ニ媚ビズ、孳々トシテ務メ、汲々トシテ懈ラズ、當時同校ノ規律整然見ル可キモノ多カリシハ、一ニ鶴谷ノ力ニ依リシナリ、サレド由來頑雲ハ自ラ掩

ヒ、狂風ハ花ヲ散ラス、敎員中ニ三奸佞ノ徒鶴谷ノ聲譽ト名望トヲ娼嫉シ、竊ニ之ヲ傷ケ之ヲ貶セント圖ル者アリ、是ヲ以テ其ノ方正ハ頑冥人情ノ何タルヲ解セズトセラレ、其ノ謹直ハ過嚴子弟ヲ敎ユルノ道ニ違ヘリトセラル、鶴谷之ヲ聞クヤ憤然筆ヲ執テ一小史ヲ起草シ艶才春話ノ題名ヲ以テ、之ヲ豐前中津ニ於テ刊行スル田舍新聞社ニ投ズ後東京書肆ノ請ニ委セ、改メテ慘風悲雨世路日記ト題シ東京ニ於テ發兌セルモノ卽チ是レナリ當時世ノ鶴谷ヲ知ラザル者、此書ヲ以テ著者自己ノ經歷ヲ序スルモノト思惟シタリ、サレド事實ハ決シテ然ルニ非ズ、鶴谷ノ該小史ヲ起草スルヤ、一面ニハ當時敎員社會ノ風紀弛頽シ、苟安小康ニ甘ンジテ毫モ靑雲ノ志ナキヲ諷シ、他ノ一面ニハ頑冥人情ヲ解セズト識ル者ヲ反省セシメンガ爲メ纒綿濃厚ノ情致ヲ序シタルモノナリ、而シテ世路日記ハ大ニ讀書社會ノ歡迎ヲ受ケ、前後五十三版ヲ重ネテ書名ハ普ク全國ニ知ラレタリ

卽ち『艶才春話』は、敎員社員の奮發と敎育界の覺醒と自己辯護を目的として書かれたものであつて、格別の政治意識はない。右の文中に所謂「靑雲ノ志」が政治的成功を意味してゐると見れば見られるが、必ずしもさうでないやうに解されるから、先づ作者構想に明白に政治小說的なものがまだなかつたといつて可い。そのいさゝか政治小說的色彩をもつて來るのは、明治十七年『世路日記』云々の改題增補を經て以後のことである。

此の『艶才春話』を草するに當つて、菊亭が手本として模倣したのは、當時刊行されたばかりの『歐洲奇事ノ花柳春話』（丹羽純一譯）であつた。それは題名から推して想像がつくところである。菊亭からの手翰にも、「御賢察の通り當年服部誠一郎氏の筆に成る花柳春話の雅句名文に擬し候も」云々とあるから、此の點は間違ひがない。

『艶才春話』を出版した東京書肆といふのは、春山堂大角豐治郎といふもので（京橋釆女町）、上編（十四回）は明治十五年四月、中編（十回）は明治十五年七月の出版になつてゐる。多少賣れたと見えて大角は下編を催促したが、當時郵便報知の記者として多忙であつた菊亭には、急に下編の完成に着手することが出來なかつた。ところが明治十

七年二月、菊亭は埼玉縣會の聘に應じ、書記長となつて赴任した。この時少し閑暇を得たので、舊稿を增訂し下編の趣向をつけ、遂に完成したのである。これが十七年四月、さうして三編合して一冊に出版する時に、(十七年六月出版東京稗史出版社) 改題し『慘風悲雨世路日記』といつた。政治的イデオロギイを多少含むに至つたのはこの下編である。

梗概をいふと、某校に一少年教師があり、教子の少女の才色に心を動かし將來を約す。此の教師は今迄方正を以つて知られ、學校の柱石ともいふべき健氣な少年であつたが、天緣ともいふべきであつたらう。少女も勿論かねてから少年教師の才貌學識に心中慕つてゐたものである。ところがこゝに一人の無賴の好色漢があり、此の少女の色を愛し、密に情を通ぜんとしたが、少女がきかぬので、種々注意してゐると、何うも教師と相許してゐるといふことが分かつた。そこで一計を按じ、大に二人の交情を吹聽して評判を立てさせ、同時に役場の吏員に吹込んで、その少年教師を轉任させる。教師は少女のことがあり、且つ學校に對する功績があるので、轉任を欲しないが、上司の命で止むを得ず、他の地に去る。少女は大に悲むが、これも泣く泣く他日を待つことになる。然るに少女の母は繼母であり、何彼につけて彼女を邪魔にするのであるが、今度も教師との風評が立つたのを奇貨とし、父に讒言し、早くも無理に親戚の某に嫁入らしめてしまふ。教師は他鄉にあつてこれを聞き、益々快々して樂まず、遂に教員社會に見切をつけ、斷然奮發して大阪に遊學する。少女は涙を呑んで嫁入つたが、然しそこでも不幸な日がつゞく、それは先の好色漢がまだ野心をすてず種々奸策を弄して、良人の心を離れさせるからである。一夜大雪の際、不圖した事から又々良人の怒をかひ、遂に離別になつて歸る、然るに、繼母はこれを聞いて大に怒り、少女の不貞不孝を責め、此の家には留められぬといひ、外に追ひ出す。少女は雪中に彷徨したが、前途を果敢なみ、遂に崖上から谷に身を投じて自殺せんとする。こゝまでが十五年刊『艷才春話』上、中編の梗概である。

十七年初刊『世路日記』は上中で(下、十三回)三編に分れて居た。その上中の部分は、『艷才春話』と文章趣向勿

論大體同樣であるが、只一つ著しき差異は『艶才春話』では最初から少年とか少女とかいふだけで、人物の姓名がない、ところが『世路日記』では始めて人物に姓名を與へ、少年敎師を久松菊雄、少女を松江タケ子、好色漢を安井策太となし、その他下編に出る人物には皆姓名を附した。その上、人物の描寫を增補して若干現實味を與へやうとかゝつてゐるらしく見える。例へば『艶才春話』では、第一回「敎師ノ少年ハ睡眠ヲ摩一摩シ少女ヲ一視シテ」云々となつてゐるだけであるが、『世路日記』の方では、此の「敎師ノ少年ハ」の次に、「姓ヲ久松ト云ヒ名ヲ菊雄ト呼ブ年未ダ弱冠ニ至ラズト雖ドモ資性怜悧博覽强記好ンデ文章ヲ作リ兼テ和歌ヲ能クス人皆ナ其才識ニ感賞セザルハナシ殊ニ花卉ヲ愛シ本草ニ通ズ優致マタ尋常少年ノ遠ク及バザル所ニ出デタリ」云々の文字を補つてゐる如きこれである。これは著しい例であるが、この他にも多々かういふ例はある。その邊に注意されたい。

さて少年敎師久松菊雄は大阪にあつて勉學數年、才識大に進む。友人二人、結城松雄といひ、勝間田早苗といふ。三人切磋していよいよ學問に勤める。ところが早苗が劇症の脚氣に罹つたので、二人は退學して看病するが、天命如何とも出來ず、早苗は歿する。二人は更に友誼を堅くして、益々勉强する。菊雄は勿論故山の老父と情人タケ子のことを忘れてゐはせぬが、心密かに成業の曉を期し、口には出さない。此の頃に及んで、菊雄に一著述があり『社會道德篇』といひ、彼が平生の蘊蓄を傾けたものである、稿が成つて出版しやうとするに資がないので、人を介して義俠の富人秋田某氏に會ひ、資を乞ふ。秋田某は、菊雄の人品を愛し、たゞに出版の資を與へたのみならず、自分の一兒に對する敎育を囑し、今後自家の一室に寓して勉强を續けさせる。然るに秋田家に一女千代子があり、これはかつて道頓堀の劇場で菊雄を知り、これを戀して病を釀す程であつた。菊雄が我が家に來たのを見て、大に喜び、一夜菊雄を訪ふて、情を訴へ、迫るに死をもつてする。菊雄は止むなく、假に他日を約してわづかに女を去らしめる。ところが女の父秋田氏も、菊雄の爲人に感じてゐたので、女中から千代子の意中を聞いて却て喜び、公然菊雄と千代子を婚せ

しめようと決心する。だがそれを話さぬうちに、菊雄の故郷から老父急病の報があり、菊雄は倉遑として歸國する。折角歸國したものゝ、道中に手間取つたので、もう父の死後であつたので、菊雄は大に悲觀する。

菊雄は父を喪つた憂を醫せんために郊外に出遊し、某家の園に遊んで、端なくタケ子とあひ、又タケ子の繼母から昔日タケ子を虐遇して親戚に嫁せしめしは策太等の手からタケ子を保護するための馴れ合ひで、眞の結婚でなかつたこと、タケ子が身投げせんとした時これを助けて、江崎某の家に托し、策太等の眼を眩ましたことなどを語り、自ら媒介となつて菊雄とタケ子と結婚せしめる。かくて菊亭は此の小説を結んで曰く

時正ニ明治十四年十一月初旬ニシテ世ハ恰モ明治二十三年ヲ期シテ國會ヲ開設スベシトノ大詔アリタル時ニ際シ擧國ノ人心大ニ奮起シテ苟モ志ヲ國事ニ懷ク者ハ皆ナ爭フテ四方ニ奔走シ有志ヲ集メテ人心團結ノ事ヲ謀ラザルハナシ時ニ會々彼ノ難波ニ別ヲ告ゲタル友人結城松雄ノ訪ヒ來タルアリテ留マルコト數日共ニ國事ヲ論ジ當世ヲ談ジシガ今ヤ男兒タル者ノ安ンジテ僻偶ニ逸居シ在ル可キノ秋ニアランヤト互ニ主義ヲ共ニシ目的ヲ同フシテ大ニ改進自由ノ說ヲ主張シ翌十五年歲始ニ及ビ二人共ニ再ビ故鄉ヲ後ニシテ東京ニ來リ今ヤ現ニ某政黨ニ加盟シ演說ニ文壇ニ專ラ彼ノ改進自由ノ說ヲ主張シ居ルト云フ

而して此の結末の一節が卽ち初刊『世路日記』の唯一の政治小說的分子なのである。こゝに至るまで、或は教育界の弊風を說き、或は都會と地方とを比較し、或は書生生活の理想を論じなどしてはゐるが、政治のことは出て來ない。最後の一節に及んで、菊雄松雄二人政治運動に奔走する一段を出現して、さうして幾分政治小說めかしてゐる。かく本來政治小說でない此の小說をして、遂に政治小說がかつたものたらしめたのは、恐らく時代の政治熱の昂揚、著者の政治運動接觸、矢野氏の政治小說出現等が原因となつてゐるであらうと思ふ。

尙主人公菊雄については、菊亭は、前記『鶴谷傳』の引用文中で、「此書ヲ以テ著者自己ノ經歷ヲ序スルモノト思惟シ

タリ、サレド事實ハ決シテ然ルニ非ズ」といつて自分を菊雄視されることを否定してゐる。成る程菊雄の境遇なり事情をそのまゝ著者に當てはめることは無理なことであらう。然しながら此の小說の人物中、最も著者に近いのは、この菊雄である。菊雄は兎もかくも、性格才能趣味に於いて著者菊亭に類似してゐることは事實である。前に引いた菊雄の人物を說明した條で、「資性怜悧博覽强記」は同じ、「文章和歌」を能くするも同じ、才識を感覺されたのは、次節の傳記に明らかである。「殊に花卉ヲ愛シ本草ニ通ジ」云々、これに至つては、全く菊雄卽ち菊亭といふ氣がする、菊亭花卉を好み、殊に菊を愛し、菊栽培にかけては甚だ深い造詣をもつてゐた、本草にも勿論通じてゐた。それから菊雄は冠弱の年となつてゐるが、菊亭が鶴谷校に敎鞭をとつたのも、弱冠であつたといふ、その境遇に於いても、菊亭の左遷的轉任事實（傳記の條に明白なり）と菊雄のそれとは大に似てゐる、敎育界に於ける功勞も似てゐる。たゞ違ふのは、菊雄の退去は艶聞に禍されたのであるが、菊亭の轉任は骨硬にすぎたのであらうといふ點である。その他、菊亭が菊雄を敎育界から失つたことを言を盡して惜んでゐるが、これは直ちにとつて自家を弔ふ文字と見てよい、是等の點にも菊雄と菊亭の類似があるのである。

敎育界の弊風を說いた點は、事が初等敎育に止まり、且つ著者の鄕里大分縣下の事實を基礎としてあるので、（第一回、第二十三回）巧みに穿つてはあつても、それ程人を動かしはしないが、都市集中に反對して田園の美點を述べてゐるところは（例へば第三十五回）、この頃としては珍らしい言であり、中央集權に反對した地方分權說の反映とも見られる。然し一つは、矢張り菊亭の天性からも來てゐると思ふ（傳記參照）。その上書生に話を論じ、書生が社會の耳目の中心となるべきこと、書生の自重すべきこと、やがて書生の世界にならうといふ豫言は（第二十八回二十九回これ又時代思想の反映で、漸く學問敎育が社會に重視されて來たことを語るものと見て可い。その他、此の小說には議論感想が多く、事に觸れ、物に遭ふ每に種々の意見を吐露する。第十二回結婚論の如き、その一である。これは、

男女結婚の際に、當事者の意志如何を顧みず、親の威權で押し片づけるのを惡弊としたもので、當時文明開化者流の輿論と合つてゐる。今政治小説として見る立場から、かゝる思想のことは一々は辨じないが、有志の人は、本書について見られるが可い。

『世路日記』はその初刊の當時に於いて既に大に青年社會の愛讀するところとなり、數版を重ねたといふ。『世路日記』の政治的イデオロギイは以上の如きものであるから、これによつて歡迎されたとは思はれない、又その教育改革の意見が世人を動かした爲めとも思はれない、その他云々の思想的分子によつて當時の人々がさう甚く感動したとは考へられない。恐らく此の小説をさうまで青年社會に愛讀させ歡迎させたのは、この小説のもつてゐる感情的方面であらうと思ふ。この少女たる少年少女が環境と傳統の束縛、家族制度の壓制等から脱して希望の多い若々しい新社會を形作らうとする努力、いはゞ此の二人の求める感情的解放、そこに著者自身の要求の發露があり、當時の多數青年の共鳴があつたのではないか。著者は、その特色ある歎美的文章で、この感情的解放を到るところに求めてゐるが、その態度は殆んどセンチメンタリズムといつても可い。このセンチメンタリズムは、著者が此の小説の人物に灑ぐ涙もあるが、同時にそれは自己憐憫、自己同情の涙でもある。さうしてかういふ感情的解放が當時の青年社會の共通な惱みであつただけ、天下の青年は皆著者のセンチメンタルな涙に和して泣いたものである。この感情的解放といふ點に、私は、此の小説が青年社會に歡迎された第一の理由を認めたいと考へるのである。

小説のテクニクの方面からせば、この小説は格別いふに足るものではない。前にもいふやうに、通篇に議論が多くて描寫が少なく、趣向構想、單純を極め、性格又全然類型的で、菊雄、タケ子の外はたゞ影法師に姓名のついてゐる如きものが多い。而かもその菊雄、タケ子の如きさへ、纏綿たる情緒の奴隷といふに等しく、生きた性格をもつてゐない。趣向に不自然、飛躍、省略も多いが、末段、タケ子の繼母の述懷の趣向は、德川時代の稗史小説に往々見るも

のであるが、然しこれは此の場合陳腐でもあり不自然でもあり、感興を殺ぐこと甚しい。この述懐を削れば著者の勸懲主義に背くかも知れぬが、述懷の趣向は全篇の劇的事件(幼稚千萬だが)をまるで茶番じみたものにし、讀者は呆然として馬鹿馬鹿しさを嘆ずる、今迄の同情はこれで吹飛んでしまふ、といふわけである。

明治十七年より十年の後、二十八年十一月、著者菊亭は大阪の書肆岡本偉業館から『世路日記』の訂正增補本を刊行した。此の時十七年初刊の分を訂正して上中下三編（三十七回）を新に二十一回に分ち、これを前編と稱し、更に第二十二回より第三十三回に亘る分を新に起草して後編と稱した。この後編に於て『世路日記』は、殆んど政治小說といふべきものになつてゐる。

菊雄と松雄は東京に出て「大ニ奔走シテ專ラ力ヲ政治ノ改良ニ盡シ、廣ク交リヲ天下ノ志士ニ結ビ、前途我ガ國ノ政治ヲシテ全ク藩閥ノ積弊ヲ除キ、寡人政府ノ內閣ヲ一掃シテ更ニ善美ナル立憲代議政體ノ新政國ト爲ンコトヲ企望シ、焦心苦慮有爲ノ志士ト共ニ之レガ方策ヲ謀ルト雖ドモ、時機未ダ熟セザル所多ク、殊ニ政府ノ方針ハ當時國事ニ奔走スル有志者ヲシテ、一層之レガ檢束ヲ嚴ニスルノ傾キ無キニアラザルヨリ、苟モ卓見深慮アルノ士ハ、須ラク其ノ翼ヲ潛メ、其ノ耳ヲ弭シテ以テ敢テ之レニ抗抵スルノ色ヲ示サズ、唯此際民間ニ於テ政社ヲ結ビ、鞏固ナル政黨ヲ組織シ、以テ豫ジメ他日ノ準備ヲ爲スニ如カズト一ニ政黨組織ノ急務ナルヲ論ジ、苟モ主義目的ヲ同フシテ以テ意氣相投ズルノ士ハ互ニ相集リ、相謀リ、以テ一ノ政黨ヲ組織シ、人心團結ノ事ノミヲゾ圖リケル」、これが二人上京後の活動の概要である。明治十五年の事と斷つてゐるが、その持論は大同團結論である點は、自ら二十年以後の政治的風潮を經驗したことを暗示してゐる。

菊雄は一日吾妻橋の傍で策太にあふ。策太は密偵として民權家に近づいてゐる。策太は强て謀る處があるといふので菊雄を新吉原に誘ふ。菊雄は新吉原の遊春閣で秋田氏の女千代子の零落せるに遭ふて大に驚く。秋田氏は、菊雄去

る後、急に兩親共に歿し、惡い叔父に家產を奪はれて、千代子孤身となつたので、遂にかくの有樣であると語る。菊雄は、必ず千代子を救ふことを約して歸る。

第二十四回に十五年當時の日本政界の描寫があるが、自由、改進、帝政三黨分立のこと、新聞言論界も亦三派に分立すること等、普通政治史上の知識で想像し得るものである。然るに、九州二三縣の有志と東北地二三有力の士とが時勢に鑑みるところがあつて政黨分立を不可とし大同團結的意見を立て、その主張を宣傳すべく新に日東正義新報なる新聞を起した。久松菊雄は迎へられて社長兼主筆となり、結城松雄等と筆を鼓してその大同的持論を主張した。この間策太が僞手紙で菊雄の夫人夕ケ子から金圓を詐取することなどあるが、それ等は略して、吾等は夕ケ子が、菊雄の錦衣歸鄕を見ぬ中に、產褥に死んだことを語らなければならぬ。菊雄は夕ケ子の死にあひ、鬱々として樂まず、暫時社務を松雄等に托し、遊歷を事とする。一日鴻ノ臺に遊ぶの途次、偶然勝間田早苗の弟繁雄とあひ、その家に伴ふて早苗を祭る。その後、幾日、繁雄と江ノ島に遊んでゐる時、松雄等の筆禍を聞き、奮然起つて歸社して又筆政を督する。

第三十一回は、勝間田繁雄の草した「新年ヲ迎フノ感」である。新年とは卽ち明治十六年のことであるが、繁雄の說は、東洋漸く多事ならんとする際、人民の政治思想は却て衰へ、國事國政を思はずして私利私益を專らとし、愛國の情なく、興國の元氣なきを慨したものである。これは十六年以後漸次政治思想の衰退期に入ることを語つてゐるものであるが、一面又日淸戰後の日本國民の理想の低卑となつた一面を諷したものでもあらう。好く味つて讀むことを要する。

やがて結城等の在獄の期が滿ちたので、菊雄は一大盛宴を設けて結城等の慰勞會を開く。この時策太は會場に紛れ込んで、見露はされ、危く生命を失くさうとする。

勝間田繁雄は、深く決心するところがあり、洋行を志し、菊雄にも同行を慫慂する。菊雄は喜んで同意する。そこ

で繁雄は、菊雄の衷心を察し、先づ遊春閣の妓千代子を落藉せしめ、菊雄の夫人とさせ、さてその後菊雄と二人海外萬里の波濤を踏む。立憲政治の實際を視察して、二十三年國會開設の日に役立てようとの意であることは、いふまでもない。

後編は小說としては、前編より更に稚拙なるを覺える、テクニク上その他について、更めて多くいふに及ぶまい。たゞ菊雄卽ち菊亭の政治的イデオロギイを知るために、正義新報の開業式に於て菊雄が試みた演說を全文左に揭げて置かう。

諸君ノ知ラル、如ク、我ガ叡明至仁ナル　天皇陛下ハ、客歲十一月十二日ヲ以テ、大詔ヲ降シ給ヒ、吾々帝國ノ臣民ヲシテ、來ル明治廿三年ヲ期シ國會ヲ開カセ玉フ可キコトヲ知ラセ給ヒタリ、今ヤ我國ノ形勢ヲ察スルニ南山ノ南、北水ノ北到ル所地トシテ政黨ノ團結アラザルハナク、人トシテ黨派ノ關係アラザルハ無キノ有樣トハナレリ、蓋シ立憲代議政體ノ下ニ於テ種々ノ政黨樹立スルハ固是レ自然ノ勢ニシテ毫モ怪シムニ足ラザル事ナリ、然リト雖ドモ今日我國ニ興ル所ノ政黨ヲ見ルニ其主義目的トスル所自由ト言ハザレバ卽チ改進、改進ト唱ヘザレバ卽チ自由ト稱スルモノニ他ナラザルガ如シ、或ハ帝政黨ト呼ビ、漸進主義ヲ主唱スルモノアリト雖ドモ、其等ハ甚ダ少シニシテ、今日ノ政黨タルモノ、概ネ改進自由ノ二派ニ大別セラレタルモノト言ッテ可ナリ、然ルニ地方政黨ノ如キハ、姑ク措テ問ハズ、現今都下ニ在ル所ノ政黨ヲ擧グレバ、先ヅ自由黨アリ、立憲改進黨アリ、亦立憲帝政黨アリ、帝政黨ノ如キハ敢テ論ゼズト雖ドモ自由黨ト云ヒ、改進黨ト云フ、名稱上小異無キニアラズト雖ドモ、等シク是レ國政ヲ改良シテ社會ノ進步ヲ企望スルノ政黨ナリ、然レバ兩黨ノ間柄ハ恰モ唇齒補車ノ關係ヲ有シ以テ他年愈ヨ議會開設ノ曉キニ到ラバ一致交涉互ニ相助ケ、相謀リ、以テ宿昔抱ク所ノ主義目的ヲ達セザル可カラズ、然ルニ今日私カニ兩黨間ノ有樣ヲ察スルニ、表面上未ダ著シキ軋轢ノ跡ヲ露ハスモノ無シト雖ドモ、內部ノ感情ニ至リテハ、其

際殆ンド、呉越晉楚モ啻ナラズ、以テ互ニ相敵視シ、互ニ相疎絶スルノ傾少シトセス、到底今日ノ勢ヲ以テ進行センカ、早晩兩黨間ニ一大葛藤ヲ生ジテ以テ其局漁者ノ利即チ政府黨ノ利ト爲ラズンバアラザル可シ、豈深ク憂慮ス可キノ至リナラズヤ、今ノ時ニ當リ之ガ相互ノ親睦ヲ圖リ、兩黨間ノ好和ヲ謀ルニ非ズンバ他日國會議場ニ立テ民間黨ノ勝利ヲ得ル事、決シテ能ハザル所ナルベシ、我ガ先輩ノ諸君大ニ見ル所アリ、因テ今此ニ本社ヲ興シ、日東正義新報ヲ發兌シ、終始力ヲ兩黨修睦ノ事ニ盡シ、兩間ニ立テ其ノ親和ヲ謀ラント欲ス、蓋シ有力ナル民間ノ政黨ニシテ、相結ビ相謀ルアルニ於テハ他日立憲代議政體ノ下ニ立チ、國會議場ニ其說ヲ鬪ハスト云フトモ何等ノ事カ恐ルヽニ足ルモノアランヤ、若シ之ニ反シテ、政黨區々相乖離センカ何等ノ企望モ達スル事能ハズ、何等ノ目的モ遂ゲ得ルコト能ハザルベシ、是レ即チ我ガ先輩諸氏ノ本社ヲ與シ新紙ヲ發兌シテ以テ今ヨリ民間ニ於ケル政黨間ノ修睦親和ヲ謀ラント欲スル所以ナリ、尙ホ其レ本社執ル所ノ意見ノ如キハ是ヨリ日々刊行スル所ノ紙上ニ於テ知了スル所アランコトヲ企望スルノミ、願クバ鹵酒麁肴ト雖ドモ、諸君幸ニ大白連引十分ノ歡ヲ盡サレンコト、是レ偏ニ企望スル所ナリ

此の大同團結思想は、前述の如く明治二十年以後の政治風潮を經驗した爲めから來るものであるが、今本文にいふ明治十六年に卽していへば、十六年に起つた自由黨對改進黨の猛烈な軋轢を憂慮したものともいへる。卽ち改進黨の一部にはかういふ思想をもつて此の軋轢を甚しくすまいとかゝつてゐた人々もゐたといふことが首肯されるであらう。又これを現在からする過去の批評と見てもいゝことは、勿論である。

此の後篇の構想は、二十八年に始めて考へたものか。それとも明治十七年初刊の當時、その後編を書く考へがあつたものか、私は何うも十七年初刊の時に、大體かういふ風な結構の後編を書かうといふ心算が菊亭にあつたのではないかと思ふ。然しこれは、眞に私の想像であつて、假に何れとも斷言し難い。然し明治十六年で打切つてある點、そ

の政治思想に改進自由の調和を切望してゐる點などで、何うも二十八年に始めて考へついた結構ではないと思ふのである。たゞ注意すべきは普通の人情小說が、やがて若干政治小說的色彩を帶びて來、遂に純然たる政治小說めくものとなつて來る、そこの變遷に著者の政治熱の進昂の度が反映されてゐるやうに考へられる。

二

『世路日記』の外、菊亭の政治小說的著作で、私がその題名を知り得たものは、――

明治十六年「寒紅梅八年之雪」
明治十七年「愛國餘情秋之夕暮」
同　　年「慨世小話秋之夕」
同　十七年「瑞西革命小話弦響錄」
同　十八年「以太利新興記龍之翼」
同　十九年「磯衛（いそちどり）正義之諸聲」
同二十八年「東洋太平記」
年代　未詳「開國史談東天紅」

等であるが、此のうち私が實際寓目してゐるのは、初めの一部に過ぎず、他はたゞ題意によつて僅かに內容を想像するのみである。『弦響錄』はウィルヘルム・テルの事蹟を小說化したものたるは疑ふ餘地がない、大阪每朝新聞に出たものであるといふ。『以太利新興記龍之翼』とは、恐らく新興イタリイ建國の際の壯快な事蹟を小說に仕組んだもので、彼のカヴール、マッヂニイ、ガリバルヂーの三傑が英明なヴィクトル・エマヌエル王の羽翼となつて遂に大業を成したこと

を稱へたものであらう。『正義之諸聲』といふのは何やら一向考へがつかない。『東洋太平記』はいふまでもなく日清戰爭を中心に、日本が勝つて東洋の天地が太平に歸することを述べたものであらう。『東天紅』は日本の幕末時代から明治維新へかけての開國始末に因んだ政治小說風のものであらうと思ふ。

以上は眞の私の想像に止まるのであるが、次は多少直接の知識をもつてゐるものである。

『寒紅梅八年之雪』は結局未刊に終つたものといふが、明治十五年冬初篇、十六年春二篇を著したもので、(著者手翰)菊亭の政治小說では恐らく一番小說らしいものであらう。題意は、寒紅梅が八年の雪を凌いで八年後に天晴見事な花をさかすといふので、その八年後は卽ち明治二十三年國會開設の期である、以て政治的寓意の仄見えてゐることがわかる。尙ほ著者から私宛の手翰によると、——

國家が廿三年に開設する大詔降下に就きて八年間は志士烈士も尙積雪の裡に幾多の壓迫を受くることを種として爲永流の小說に書きました、木挽町萬字堂淺井氏は畫工に賴みて口繪三枚を書かせ彫刻も出來ましたが、淺井家に事故ありて出版するに至らず其儘となりました云々

次に本書の內容が暗示されてゐる初篇の序文を引用して置かう。

青帝一降立春の節到れるも今暫し去年より殘るしら雪にかすみかねたる四方の山霰吹きまく山あらし谷の氷柱の解やらで花の梢も黃鳥も心のまゝに啼音さへ笑ふ色さへ憚りの關よりつらきいくた川幾多の辛苦かねてより誓は積る雪の中八年の春を梅ケ枝の操變ぜぬ美婦が國事に盡力す壯士に立つる誠の貞節は世にも得難き一小美談色香床しき寒紅梅八年の雪と表題して綴るもながきおだ卷の緖の端がき說き出せども固より不粹な野暮作者意氣な所はいさゝかもかけぬ時計の針ならで廻らぬ筆の拙きは看官ひとへに宥してたもト

花柳の道もしらぬ火の筑紫のはてなる一寒生當時東都に遊學して花みず橋の畔に住む　菊亭香水しるす

此の序文でみても、又菊亭の手翰によつていふも、この小說が人情本の形式をなしてゐることが明白である。「操變ぜぬ美婦が國事に盡力す壯士に立つる誠の貞節は世にも得難き一小美談」云々、これを敷衍したのが、此の小說の大筋となるのであるが、編中に出る「美婦」は芝日蔭町の藝妓梅吉、菊次、小竹、權妻小雪（もとは藝妓）娼妓千代菊先づ此の五人、「壯士」の方は愛國社員桂木正雄、本田精一郎、松山繁、吉澤敏行、勝山英吉郎五人、それに官人山諸源禮その他二三人出る。兩者間の交渉をいへば、桂木は梅吉の愛人、本田は菊次の愛人であつて同時に千代菊の情人、松山は小竹の愛人、吉澤は小雪の愛人、勝山は千代菊の兄、山諸は小雪の旦那（後に小竹の父で、千代菊兄弟の父の親友なることが分かる）である。

枝葉の筋は大きにやゝこしい、何かしら始終ごたごたしたものであるが、大筋は、馬鹿馬鹿しい程簡單である。梅吉等はいろは新聞の誤つた記事を讀んで桂木が入獄したと心配してゐると、桂木はこれを種に女どもをかつぐ、一しきり大騷ぎになる。やがて仲直りに桂木、本田、松山が各々愛妓をつれて向島の吉澤の隱棲へ出かける。此の時初めて隣家の妾宅が昔の朋輩藝妓小雪の家であることを知り、妓どもは舊交を暖める、が、その舊交から引いて、昔の情人吉澤とも舊情が燃え出す。小雪は頻りに吉澤に縋りつかうとするが、吉澤は女の情は汲んでも志士の骨頭を忘れず、亂りがはしい眞似をしない。その間に菊次に一つの悲劇が起る、それは官吏横淵某の横戀慕である。新聞記者管野の智腦をかりたり、妓家の女主人の威をかりたりしてうるさく迫り、金力でいふことをきかさうとするので、菊次は遂に家出して隅田川に身投しようとする。そこを吉澤に助けられて、向島の家にかくまはれる。本田は愛人が突然見えなくなつたので、大に人生の無常を感じ、政治活動にも何やら幻滅を覺え、佛門にでも入りたい心地になる。それを見かねた松山は、元氣をつけるためにと吉原に誘ふ。此の時本田の相方になつたのは、千代菊といふ初々しい花魁であつたが、二人とも、一見して離れ難ない氣がする。さうして本田は足繁く千代菊の許へ通ふうち、此の女性の可哀

さうな身許をきく。千代菊は九州某藩の武士の子であるが、父が大樂源太郎の騷動の時に死刑となり、間もなく母も失ひ、兄英吉郎と二人、東京へ流寓して來たものである。ところが兄は明治十四年のこと、端なく著述の咎が重く禁獄三年半罰金二百圓の罰をうけた。然かも罰金の金が出ぬとなほ實刑一年を增すといふ。か弱い兄の身のことを考へた千代菊のお千代は我慢がならず、娼家に身を賣つたものであつた。

かくて話頭が幾多の葛藤を生んで漸く佳境に入りかけたところで、突然目出度し目出度しになるのは何うしたものか、一日此等の壯士が揃つて吉澤の宅を尋ねると、小雪のところにゐるといふので、そちらへ廻る。するとそこには旦那の山諸がゐて、皆を迎へ、千代菊の素生から彼女を落藉してやつたこと、兄英吉郎を助けて出獄さしたことを語り、一同喜ぶ。なほ此の山諸が小竹の父（故鄕紀州へ置いて來た娘）とわかつて、松山と小竹を一緒にして山諸の家を繼がしめる。これで終つてゐる。

別に性格描寫の何うのといふ難しいものはない、たゞ通り一遍の人情本である。相手の男が「壯士」即ち靑年政治運動者達であるといふだけで、格別際立つた菊亭自身の政治的イデオロギーの寓意などもない。たゞ僅かに自主自由の世とか開進黨が一番いゝとか報知新聞に限るなどといふだけで、それを暗示してゐる位である。もつとも八年の辛抱とか苦勞とかいふことは度々繰返してゐるが、これとて總體の趣向に照して何となくたゞ附燒刄としか受けとれない。或はもつともつと長篇にでもしたら面白くなつたかとも思ふが、現在のまゝのものでは政治小說的色彩よりも人情本式色彩の方がずつと濃い。作者は流石新聞記者だけに新聞の內幕めいたことが度々出て來る。その中で官權新聞の素破拔を見本にお目にかけよう。（第八回）

それ遊妓の身の果敢なさは壓制苛刻の昔日も不羈自由なる今の世も其趣は更めざるが三筋の線に束縛せられて昨日は自由主義の靑年輩が飛鳥山の會に聘かれ今日は保守黨の老人達が新富座の宴に到り三笠が下の雨舍りには勤王家

と袂を濕ほし八年が嶺に春を待つては慷慨才子と深雪を悲しむつとめぞ如何に憂かるらん此處は久保町梅花亭奥に二人の遊客は年紀廿四五なるべきも三十の上を四つばかりも越せしと見ゆる男なりしが一人は黎顏低眉にして尻さがりなる薄眉に一人は左まで色黒からぬもいやに少き鬚を生やして見つたくもなき面容威なくて猛き擧動は問はずも知れたる鯰公なるべし　鯰「時に管野君岐阜の事件（十五年四月、板垣退助が岐阜で刺された件）は其後變つた電報も來ないか　管野「どうも弊社には今回の事の種が取れないで困ります「さう言へば實に飛鳥日報には餘程今回の種は少ゐやうだのう、して憎まれ兒頭かたいとかで彼の報知抔には中々悉しう書立てゝあるよ夫れに又相原が履歴などは餘程探偵が屆てゐる樣だ「なあにあの履歴抔な只記者がゐゝ位に構造なのでせうでなかつたら僅か三日目にあの樣細密な探偵が迚も屆く筈ではありません「然し其處を探るのが君達の職掌で平生天下の耳目とか社會の先導とかいふ所だらう「なあに只輕々匆卒に誤聞を報導しては大に世間を誤らする道理故却て事の疑はしきはなるべく載ない樣に致しますのが弊社の主義です「だつて報知あたりから後れたり又は探偵が屆かなかつたりすると矢張り我輩等までも氣が揉めるよ「へゝ、夫れは實に難有ございますがなあに該の新聞あたりからまだ敗走はいたしませんゝ「今何枚くらゐ出るじや「そうさ先づ三千五百も出ませうか「其樣に發賣たら別に月々保護金は貰はないでも宜だらう「然し弊社の日報にして盛に彼の保守説を主張せなかつたら世の人心は皆々急進過激の異論邪説に惑はされて到底いふべからざる程な大事をも惹き起すでせう、ですから是非弊社の日報をして盛大にして一萬以上の發賣高にせなかつたらいけないと社員一同は大奮發です「フヽして今足下等は何程の月俸を貰ふのだ「なあに小生等は至て纔です然し皆これも國の爲めと思ひ君の爲めと思へば月給の多少は決していふ譯はありません（下略）

菊亭が此の小説を草したのは、前述の如く明治十五年から十六年へかけてゝあるが、此の時は先づ兎もかくも自由民權の爲めの奮鬪が菊亭の主眼であつた、ところが、此の小説は第九回で一時中止し、第十回以下は二十三年以後の續

筆である。この續筆の方の政治思想は前年と可成り違つてゐる。（文體の差異は次の文章で察せられやう）。菊亭は本田の口を藉りてその思想を吐露せしめてゐるが、全く政治幻滅論である。政治への幻滅が此の頃の知識階級の一つの思想的タイプであることを考へると、此の變化は可成り注意して讀みとらなくてはならぬ。第十二回本田は菊次を失つてから鬱々として樂します、讀書三昧に入らうとかゝつてゐる。——

陰雲濛々として一天を覆ひ細雨霏々として朝來開かず本田は此日も只獨り鬱陶たる旅窓の下に寂寞と古書を閲して何やら感ずる體なりしが「於戲去年の十月詔あつてより全國の人民は大いに政治の思想を抱き到る處として政黨の團結を爲ざるはなく各其執る所の主義に據り二十三年のその後は堂々たる國會の議場に於て成敗を決せんと今より盡力するが如きは實に我國千載の美事にして固より喜ぶべき事なるべきも亦今退いて彼の政治家と稱する者將た有志者と唱ふる輩を熟視するに悉く然りといふにはあらずと雖ども或は輕藻浮薄にして事物の前後を顧みず猥りに事を誤るものあり或は疎暴過激にして國法の如何を忘れ徒らに政治を說く者あり或は傲慢人を蔑視し或は狡猾他を欺き德義の心は微塵もなくして只蠅頭の私利を營み只蝸角の私榮を謀り名を政黨の至公に假りて其實己が爲にする者又鮮しとせざるが如し於戲眞正なる德義心を懷きて今日の社會に立ち眞に我が國の公益を謀り眞に我が民の自由を擴張せんと謀る人士はそれ果して幾千かある彼を思ひ是を思へば五月蠅社會に何時までか立つて思ひを焦さんより塵の浮世を離れたる片山里に身を避けて高根に昇る月の光尾上に通ふ松風を山の友と樂むこそ遙に自由を得たりといふべし人生僅か五十年石火光中に此身を寄せて長を爭ひ短を競ふも幾くの光陰ある蝸牛角上に雌を較べ雄を論じて勝利を得ばとて許多の世界なる我誤てり賴母しげなき世の中に由なき望を繫くるより斯まで不樂しき歲月も過せ實は古人が詠ぜし如く平生不作皺眉事。天下應無切齒人。莫憂世事兼身事。須看人間比夢間と眞に然り蝸角の虚名何にかせん蠅頭の微利何か願はんと嘆息數刻」云々

こゝに吐露されてゐるのは本田の心事であつて、同時に二十三年以後の菊亭の心事でもなければならぬ。政治に對する幻滅、人生の頼み難さ、佛敎的厭世主義、さういふものが、此の述懐に看取されるが、この現實政治に對する幻滅といふことが二十三年以後の一部インテリゲンチヤの著しい心的傾向であることを記憶していたゞきたい。

そこで『世路日記』から『寒紅梅八年之雪』に亘つて、菊亭の政治的イデオロギイを年代的に整理を加へれば、最初は、改進黨（報知派）讃美（十六年）、自由改進兩黨の調和、大同思想（明治十七年）、政治への幻滅、厭世的思想（二十三年以後）といふことになつてゐる。而して政黨的色彩が比較的薄くして、文學的關心の强い點に於て、菊亭の文學者としての立場が、從來政治小說家のグループに入らず、新文學小說の先驅として決定される所以であらう。

三

菊亭香水の傳記を知るには、彼の自敍傳によるのが一番可い。題して『文士佐藤鶴谷傳』といふ。未刊の稿本であるが、先年私が借覽して手抄して置いたものがある。今これを編綴して菊亭の生涯の概略を知る便りとする。

名ハ盛卿、字ハ子晩、通稱藏太郎、鶴谷ト號ス、別ニ傲霜、兌山、香水、菊亭主人、柴門隱士、梅狂道人、疎影堂主人、鬪天樓、南溟漁長、鶴谷漁夫、海邊黑人等ノ號アリ、安政二年七月十日、豐後國佐伯藩ノ士籍ニ生ル、考諱ハ盛義、蘭州ト號ス、妣高司氏、鶴谷、幼ニシテ頴悟敏捷、强記倫ヲ絕チ、洽聞長者ヲ凌グノ慨アリ、齡甫メテ四歲、小倉百人一首ノ全篇ヲ暗誦シテ、其歌詞一モ誤ルモノナシ、時人目スルニ奇童ヲ以テス、常ニ群兒ト嬉戲スルヲ好マズ、古老ニ談話ヲ聞クヲ無上ノ樂ミトナシ、意ニ解セザルモノアルトキハ、反問幾回輙ク輟メズ、古老云フテ年代繰ト呼ブ（年代繰トハ方言ニシテ根堀リ葉堀リ問フノ意）、明治三年年十六鄉學闕令藏ノ私塾暇習館ニ入リ、漢籍ヲ學ブ、傍ラ松岡員外ノ塾學半

堂ニ遊ビ詩文ヲ修ム、員外其才ヲ愛シ授クルニ子晩香道人ノ號ヲ以テス、七年五月漢學塾ヲ去リ佐伯中學校ニ入ル、此年八月大分縣師範學校傳習所ヲ設ケ、小學教員ヲ養成ス、八年二月鶴谷、師範學校ニ入校シ、九月卒業、鶴谷（地名）女學校教師ニ任ゼラル、鶴谷教鞭ヲ學校ニ執ル後モ、自己ノ修學ヲ懈ラズ、楠文蔚、關鹿門等碩學先輩ノ設ケタル植松學舍ニ就キ漢學ヲ修メ專ラ文章ヲ研究ス、鶴谷天資文才ニ富ミ、詞藻麗艶、行文流暢ヲ極ム、教師楠先生、其稿ヲ添删スル毎ニ、筆力ノ凡ナラザルヲ賞シ、嘗テ草稿ノ一端ニ、左ノ數語ヲ記シ、以テ鶴谷ヲ奬勵ス、

以ニ斯艶筆一。學ニ明理之文一。他日必將レ樹ニ旗幟於詞壇一矣

十年西南ノ役起リ、薩軍熊本城ノ圍ヲ解キ、豐日ノ野ニ轉戰スルヤ、人心恂々向フ所ヲ知ラズ、鶴谷數々文章ヲ草シテ大義名分ノ存スル所ヲ說キ、之レヲ新聞社ニ投ジタリ、五月廿六日賊兵三百餘佐伯城市ヲ侵シ、士族ニ從軍ヲ强ユ、鶴谷難ヲ浦村ニ避ケ船ヲ雇ヒテ佐賀ノ關ニ渡リ、陸路大分縣廳ニ至リ、佐伯地方ノ賊狀ヲ具申ス、十一年二月教員ノ職ヲ辭シ、中津市學校ニ遊バント欲シ、負笈佐伯ヲ發ス、大分ニ到ルトキ偶々事故アリ、遂ニ留リテ安部淡齋翁ノ門ニ遊ビ、漢學及ビ文章ヲ研究シ業大ニ進ム、七月大分縣ハ前教員級ヨリ數等ヲ進メ、更ニ鶴谷女學校教師ヲ命ズ、鶴谷止ム無ク志ヲ翻シテ佐伯ニ歸リ、再ビ子弟養育ニ從事ス、此年九月學務派駐官持區內聯合教育會ヲ北海部郡臼杵町ニ開催ス、是ヨリ先十年戰亂後、縣下ノ教育事業ハ一般頽廢ニ歸シ、容易ニ復興ノ緖ニ就カズ、鶴谷等深ク之ヲ慨シ郡內各校ノ教員等ト謀リ、長文ノ建白書ヲ提出シテ大ニ當局ノ怠慢ヲ詰責ス、今聯合會ヲ開クニ當リ、鶴谷出席シテ巡廻訓導、學區取締等ノ行爲ヲ酷烈ニ彈糾シタリ、會議了ル後臼杵學校試驗教師ヲ命ゼラル、十一月十日鄉友明石寅、宮本舸平、中島固一郎、金田熊藏等ト、始テ演說會ヲ寺院ニ開ク、（碧松山久成寺）蓋シ佐伯町ニ於テ演說ヲ開クモノ、是ヲ以テ嚆矢トス、十二年三月鹽屋學校ニ轉勤ヲ命ゼラル、十三年六月、佐伯城市ノ青年七十餘名、團結シテ一社ヲ組織シ名ケテ久敬社ト稱ス、鶴谷推サレテ社長ニ擧ゲラル、蓋シ西南戰後我ガ國ノ民心ハ、國會開設ノ一日モ速カナラン事

ヲ切望シ、各地競フテ結社團結シ、演説會、討論會等ヲ公開シ、以テ政治ヲ論談スルモノ、日一日ヨリ盛ンナルモノアルヲ以テナリ、十四年二月南郡初メテ聯合町村會ヲ佐伯町養賢寺ニ開ク、鶴谷ヲ聘シテ書記長ニ任ズ、九月太政官大書記官矢野文雄、報知新聞社長藤田茂吉ノ兩氏相前後シテ佐伯ニ歸省シ、舊城三ノ丸ニ於テ演説會ヲ開キ、本邦現下ノ狀勢ヲ說キ、大ニ鄕人ノ政治思想ヲ鼓舞ス、矢野氏ハ縣下諸郡ヲ巡廻シテ歸京ノ時、鶴谷ヲ東京ニ伴フ、久敬社員其他鶴谷ノ友人ハ鶴谷ノ爲メ、大ニ祖道ノ宴ヲ城南久部村ニ張リ其榮ヲ祝シテ行ヲ壯ンニス、此年十一月國會開設ノ大詔下ルヤ、矢野氏官ヲ辭シテ野ニ下リ、報知新聞社ヲ購フテ機關トシ、大ニ爲ス所アラントス、而シテ鶴谷ノ報知社ニ入リタルハ翌十五年一月ナリ、是レ鶴谷ガ新聞記者トシテ筆ヲ文壇ニ執ルノ始メナリ、而シテ其報知社ニ在ルヤ頑トシテ曩日田舍書生ノ意氣ヲ脫セズ、口ヲ開ケバ都會ノ汚邪充滿ヲ譏リ、都人士ノ浮操輕薄ヲ罵リ、社中唯ダ矢野氏アルヲ知テ他ヲ眼中ニ置カズ、主幹藤田茂吉氏ノ言ノ如キ、一ツトシテ容ル丶所ナシ、矢野氏竊カニ之レヲ患ヘ屢々諭示スルモ遂ニ其効無カリシト云フ、居ルコト四年、十七年ノ秋招カレテ大阪每朝新聞社ニ入リ、次テ神戶新報社ニ入ル、十八年二月山陰島根縣ノ有志者相謀テ八雲新聞社ヲ興シ、鶴谷ヲ聘シテ社長兼主筆トス、三月靑山氏ヲ娶ル、居ルコト一歲辭シテ南豐佐伯ニ歸臥ス、當時大分縣令西村亮吉氏ノ政黨ヲ忌諱スルヤ、蛇蝎モ啻ナラズ、縣民中苟モ政黨ニ加盟スル者アレバ之レガ擧止ニ注視セシメ、部下ノ屬僚ハ固ヨリ郡吏町村吏ノ末輩ニ至ルマデ、堅ク政黨員ト交ルヲ禁ジ、偶々之レニ近クアルトキハ、忽チ事ニ托シテ其職ヲ免スルヲ常トス、是ヲ以テ鶴谷ノ故山ニ歸ルヤ來テ門ヲ叩ク者ナク、訪フテ言ヲ交ル者ナシ、終日無聊、僅カニ幽鬱ヲ慰スルモノハ一張ノ須摩琴ト、數帙ノ書籍トアルノミ、サレド鶴谷意氣傲然トシテ毫モ屈撓セズ、又舊久敬社員ノ中意志堅牢ナル靑年等ハ屢々鶴谷ノ草廬ヲ訪フアリ、鶴谷ルーソーノ民約編、社會平衡論、自由之理杯ノ書ヲ講シテ靑年等ノ志氣ヲ奬勵シ、靑年等ト謀リテ夜陰ニ乘ジ、孤舟ヲ城東約一里ノ濃霞山背ニ泛ベ、巖石參差タル磯頭ニ上リテ海濱ノ藻屑ヲ掻集メ、之レヲ焚キテ烱火ト爲

シ、以テ慷慨激越悲愴淋漓ノ演說ヲ爲シ、共ニ快哉ヲ絶叫シテ歸リシコト數々ナリシ、此年縣下大分町ニ於テ豐州新報社ナル一社ヲ興シ、七月中旬ヨリ豐州新報ト題スル一新聞紙ヲ發行ス、社主鶴谷ニ請フテ主筆タラシム、即チ豐州ニ筆ヲ執ルコト一年五ケ月、二十一年辭シテ退社ス、爾來僑舍ニ閉戸シテ世人ノ來訪ヲ謝絶シ、潛心一意、哲學、神學、宗教ノ書ヲ研鑚シ、傍ラ筆ヲ著作ニ執リ、新說天則圖會、眞神州、嘯風吟月、柴之廬、新陽春、悲世觀等ノ數編ハ此間ノ著述ナリ、是ヨリ先矢野文雄氏歐洲ヨリ歸朝シ、二十三年五月鶴谷ヲ東京ニ招ク、鶴谷六月大分ヲ發シ上京ス、居ルコト僅カ四ケ月ニシテ、矢野氏ノ留ムルヲ肯カズ匆々大分ニ歸縣ス、鶴谷性元ト都會ノ地ヲ好マズ（自傳中「都會生活ヲ厭忌ス」ノ一項アリ）後大正十一年四月ニモ矢野氏書ヲ鶴谷ニ遣リ、多額ノ俸ヲ給シ一ケ年ノ豫定ヲ以テ、或書ノ編纂ニ從事センコトヲ勸メタルモ、鶴谷辭シテ應ゼズ、二十三年十月大分新聞社ニ聘セラレ、幾モナク主筆トシテ同紙ノ編輯ヲ主宰ス、二十五年五月大分新聞ヲ退社シ、同七月獨力大分日報社ヲ興シ、廿一日ヲ以テ大分日報第一號ヲ發刊シタリ、大分日報ノ發達ハ頗ル良好ニシテ、社運日ニ月ニ隆盛ヲ加ヘ、翌二十六年七月起業一週年ヲ迎ヱシ時ニハ全縣下各地ノ有志者ヨリ、祝詞祝文、又ハ賛辭ヲ寄送セラルヽモノ積ミテ堆ヲ爲スニ至レリ、而シテ同年十月一日ヲ以テ、隔日發行ヲ日刊ト爲シ、題號ヲ改メテ大分日々新聞ト稱ス、十月十四日、縣下未曾有ノ大水災アリ、各地ノ道路大ニ破壞シ、橋梁盡ク流失シ、交通ノ途全ク杜絶スルモノ幾旬ノ長キニ至ル、是ニ於テカ新聞代價集金ノ如キ、全然不可能ノ事ニ歸シ、左ナキダニ收支僅カニ運轉シ來タレル日報社ノ經營ハ、言フ可カラザルノ困難悲境ニ陷リタリ、此時ニ當リ居常日報社ノ隆盛ヲ羨ミ、如何カシテ其進運發展ヲ妨害セント狡計居タル、奸譎老猾ノ徒ハ乘ズ可キノ機到レリト喜ビ、日々新聞ノ印刷ヲ請合居ル活版所ノ社員等ヲ誘惑シ、多額ノ印刷料支拂ヲ一時ニ督促セシメ其他百方詭計ヲ運ラシテ日報社ノ倒壞ヲ圖リタリ、鶴谷大ニ憤慨シ自己ノ所有セル書畫骨董物ヲ賣却シテ活版所ノ支拂ヒヲ濟マセ十一月五日ヨリ新聞ノ發行ヲ中止ス、サレド鶴谷ノ氣慨ト勇膽トハ此一敗ニ挫折セズ、翌二十七年三月

一日、親カラ大阪ニ赴キテ活版機械並ニ活字其他新聞紙ノ刊行ニ要スル一切ノ器具ヲ購入シ來リ、新タニ工場ヲ社內ニ設ケテ、同年四月廿九日ヨリ、更ニ優美ナル體面ノ大分日々新聞ヲ再刊シタリ、サレド樹苗生ジテ根幹堅カラザルニ先チ、暴雨狂風數々發芽ヲ摧ク、如何ンカ其生育ヲ完フ爲シ得ン、大分日々新聞ハ困難ト闘ヒ妨害ヲ排ケ、勇奮其維持ニ努メタルモ、正義ノ城廓ハ奸徒ノ毒箭ヲ禦グニ由ナク、二十九年六月ニ至リ、遂ニ廢刊陷落ヲ告ルニ至リタリ、初メ鶴谷ノ日報社ヲ興スヤ、丘陵ニ依リテ山ヲ築カズ、川澤ニ依リテ川ヲ穿タズ、孤身獨力以テ新タニ一社ヲ創始シ縣下ニ率先シテ日刊ノ新聞ヲ出シ、經營前後五年ヲ支フ、業ノ成否ハ問題ニ非ラズ、大分縣下ノ新聞歷史ニ斯特異ノ事蹟ヲ留メタルハ、眞ニ文士ノ光榮タルナリ、三十年九月大分西新町ノ一角ニ購ヒタル宅地ヲ賣却シ、廳下ヲ去リテ佐伯ノ自邸ニ歸住ス、十一月宮崎縣ニ遊ビ、十二月十五日ヨリ、佐伯ノ同志者ト謀リ、日豐新聞ヲ發刊ス、三十二年九月大分新聞社主大津淳三氏ノ招聘ニ應ジ入社ス、十月再ビ大分町ニ移住ス、三十三年五月熊本市ニ開キタル關西新聞雜誌社大懇親會ニ出席ス、六月大分新聞社ヲ辭退ス、此ノ後又著述ヲ事トシ、國史ノ研究ニ耽リ、宿好ノ存スル所寢ト食トヲ忘ルヽニ至ル、著書百種ヲ越エ、等身モ啻ナラズト云フ。(今年八十一歲健存)

鶴谷ノ東京ニ在ルヤ、學者大家ノ叢淵タル、郵便報知新聞ノ一社員トシテ、日々編輯局ニ出勤シ、當代ノ名士矢野文雄、藤田茂吉、箕浦勝人、犬養毅、尾崎行雄、鴻儒碩學栗本鋤雲、森田思軒、芳川春濤等ノ諸氏ニ交リ、學問文藝ハ固ヨリ、思想上、人格上、直接間接ニ、感化陶鎔セラルヽ所鮮シトセズ、而シテ鶴谷ガ文學者トシテ交際シタルハ高畠藍泉(三代目ノ柳亭種彥)假名垣魯文、前島和橋、雜賀柳香、若菜貞爾等ノ諸氏ニシテ、互ニ文學上ノ意見ヲ交換シタリ、又矢野文雄氏ノ令弟矢野武雄、小栗貞雄ノ兩氏ヨリハ學問上其他ニ就キ最モ懇切ニ訓誨ヲ受シトハ鶴谷ノ能ク語ル所ナリ、鶴谷ハ繪入朝野新聞、いろは新聞等ヨリ囑託ヲ受ケテ小說ヲ起草シ、書肆萬字堂主人淺井重光(元東京府ノ六等屬)氏トハ、意氣相投合シテ交リ深ク、常ニ萬字堂ニ出入シテ同書肆ノ月刊雜誌、面白叢談話ノ種、及ビ淨瑠璃詳解ハ鶴谷一人ノ

手ニテ編纂シタリ、永代惨話文化之夢ト寒紅梅八年之雪ノ政治小説ハ淺井氏ノ依囑ニ依リテ鶴谷ノ著ハセシモノナリ、其頃鶴谷ハ號ヲ菊亭ト呼ビ、起草ノ小説ニハ皆ナ菊亭香水ト書キタリ。

鶴谷ノ東京ヲ去リテ大阪ニ來タルハ明治十七年九月ナリ、筆ヲ大阪毎朝新聞ニ執リタルガ、當時同新聞ニ掲ゲタル、瑞西革命小史弦響錄ハ、非常ノ好評ヲ博シ、爲メニ多數ノ購讀者ヲ增加セシメタリ是レヨリ、先社長加藤政之助氏ハ、回天綺談ト題セル一部ノ政治小説ヲ立案シ、記者山田某ヲシテ筆ヲ執ラシメタルモ、文章鄙野俗惡ニシテ意ニ充タザルモノ多ク、爲メニ印刷ニ附スルヲ躊躇シ居タルガ、鶴谷ノ入社ヲ幸ヒトシテ改竄訂正ヲ依託シ、修補成リテ直チニ出版刊行セシメタリ、大阪ハ東京ト違ヒ、文士トシテ交際スベキ人物甚ダ少ク、僅ニ金子錦治外、一二ノ操觚者ニ過ギザリシガ、鶴谷ハ安土町四丁目ノ書肆、松雲堂主人鹿田靜七ト交際シテ每ニ同書肆ヨリ大部ノ奇書ヲ借覽シ、又文章ヲ草スルニ當リ引證考據ニ必要ノ書籍ハ同書肆ニ就キテ何程ニテモ自由ニ閲讀スルヲ得タリ、今鶴谷ガ地方ノ藏書家トシテ多數珍奇ノ書籍ヲ有スルハ、當年鹿田ヨリ購ヒタルモノニシテ、此點ニ就キテハ、東京ニ居タルヨリ、大阪ニ在リシ方、多大ノ利益ヲ得タリ、鶴谷ヲシテ博覽多通ノ世評ヲ博セシメタルハ、大阪書肆ノ賜ナリト云フモ可ナリ、大阪每朝ニ在ル時ヨリ、神戶新報ニハ小説其他散文ヲ草起シテ送リタルガ、後社長桐原捨藏氏ニ招カレテ入社シタリ、神戶ニテモ史蹟名勝ヲ探ルヲ無上ノ愉快トシ、行平ノ事蹟等ニ就キテハ造詣深遠ヲ極メタリ、云々（下略）

（昭和十年四月）

政治と文學

政治小説と文學改良意識

一

上來、種々の場所で、當時の政治と文學が如何にして特に密接な交渉をもつに至つたか、政治家側の文學に對する觀念が如何に變化して來たかといふことを、斷片的部分的に說いたと思ふが、此の邊で、この問題を今一度纏めて說いて置いた方が、後々への連絡上、甚だ都合が好いやうに考へる。それで此の問題を主題とした一章を設けた。

勿論、誤解もないであらうが、「政治と文學」といつても、その一般的交渉の原則とか、この兩者の交渉の comprehensive な沿革を研究するのではない、當面の目的としては、明治初期の政治小說に關連する限りに於いて、この問題を取り上げるだけで足りるのであるから、考察の範圍をそれ以外に及ぼさない。又、記述の事柄で、前々來のものと重複が必ず出ると思ふが、その邊は諒察を願つて置く。

或る見方からいへば、自由民權運動の時代は政治偏重時代であり、此の政治偏重といふ點に於いて、これに封建思想の殘映を見れば見られぬことはない。民權運動者の大部分は、殊に初期に於いては、舊士族連中が多い。何故士族が多いかといふと、社會變革に對する不平からといふこともあるが、然し士族は多年政治第一主義で敎へ込まれて來

た人間であり、政治といふ事以外に人間の仕事がないやうに考へてゐる。從つて自由民權時代に及んでも、多年の習慣で、政治運動に奔走することを、自己の天職と心得てゐた連中も少くはなかつたらう。これが民權運動者に士族の多い所以であり、又民權運動が政治偏重現象となつた所以でもある。

ところでかういふ士族の思想を考へてみると、彼等は多くは青年時代に封建主義的教養で叩き上げられた人々である、勿論時勢への順應と、政治變革の必要から、新奇な西洋の思想を取り入れ、或る程度までこれを理解もし、又採用もするが、その封建的教養が頭腦の中から一掃されるやうなことはあり得ない。文學に對する彼等の觀念の如きも、さうで、表面は何の彼のといつても、衷心は、何が稗史小說の如きもの、と考へてゐたに違ひない。封建的觀念では、稗史小說の如きものを、勸善懲惡の具となし、婦女童蒙の玩弄として眞面目な文學視してゐなかつたのが事實だからである。これは、何等證明を要することなく、このまゝ事實と認めて可い。例へば、宮崎夢柳の如きも、大事な目的があるから止むなく稗史小說などに筆を執るといふやうなことをいつてゐる、又その友の櫻田が政治小說を書く決心をしたのを、甚く思ひ切つたえらい事のやうに考へてゐる。矢野龍溪の如き人物でさへ、その小說觀に於いて、稗史小說といふものを、まださう高尙なものとも考へてゐないのである。

勿論、その間、西洋文學に接する人々によつてかういふ態度が次第に改革されて來た。西洋では稗史小說が尊重され、紳士淑女が皆これを愛讀する、又堂々たる人物で小說を書く人も多い。甚しきに至つては、(當時の政治運動者から見れば、一代の偉人とも豪傑とも見えた) 政治家や廟堂の大臣さへ小說を書くといふ、かういふ實例を見ては、封建的な文學觀念も多少變化を來したことは事實であらう。明治十五年七月二十一日の時事新報には「政治家小說を作る」と題して、英國の前大宰相ビコンスフヒールド、露の政治家ワルチエッフ等が人民啓蒙、政治理想發表のために小說を書きつゝありといふことを事珍らしげに報道してゐる。かういふ事實の如きは、大に當時の政治運動者達を感動

さしたものであらう。櫻田百衛が甘んじて東洋の政治小說家とならうとしたのも、ユーゴーやビコンズフヒールドの事蹟を知つてからのことで、それは彼の小說『自由廼錦袍』の緒言に見えてゐる。さういふ次第で、西洋文學の實例を見聞した人々は、多少文學に對する觀念を改めてはゐたらうが、然し大體としては、矢張り文學輕視、小說蔑視、餘技視の態度であつたことに違ひない。

二

然し前記の政治文學の條で說いた如く、政治と文學とは、特に諷刺戲文の形式で、可成り早くから交涉をもつてゐた。又、政治家も稗史小說を輕視しながらも、その大衆を動かす力の絕大なものがあることは、知つてゐたのである。從つて、政治家側で、大衆相手に政治宣傳を試みようといふ場合に、稗史小說乃至文學を利用したらといふ考へが、これ又可成り早くから彼等の二三氏の胸中に往來しなくはなかつたらうと思はれる。

然し最初は、文學利用といつても、形式の簡略な、節調によつて感情を直接に簡短に聽者に傳へる歌謠が選ばれたことは當然であらう。かういふ歌謠は種々あるが、今代表的なものとして、土佐の「よしや武志」を擧げる。私の藏本は明治十年十月の刊行となつてゐるが、此の集に入つてゐる歌謠は、此の時より暫時前に流行し始めたものとして旣に明治九年乃至十年に於いて、政治家側で大衆啓蒙のため、政治思想宣傳のため、文學藝術を利用する意識を示したことは明らかである。「よしや武志」の序といふものを讀まう。

培養宜キヲ得スンハ草木豈ニ其レ蕃茂スルヲ得ンヤ人智ノ開達亦然リ之ヲ培養スルニ於テハ素ヨリ高尙ナル著書アリ優雅ナル詩歌アリト雖モ要スルニ皆ナ中人以上ノ得テ其智力ヲ發成スヘキモ中人以下ニ至テハ則チ猫ノ小判ニ於ケルト一般ニシテ還タ其益ヲ受ル能ハス是レ恰モ地味ノ不饒ヲ醫セスシテ唯草木ノ枝葉ヲ傴曲シ或人之ヲ媒助スル

カ如シ豈ニ貴戚ノ豐熱ヲ期スベケンヤ今ヤ曉鴉老兒ハ大ニ此ニ見ル所有テヨシヤ節ノ編纂アリ其殊ニ優雅ナラサルモノハ蓋中人以下ニ訴ヘントスル所アルカ如シ而シテ之ヲ花柳界ニ唱ヘレハ能ク冶容ノ醜態ヲ釐革シ能ク淫婦ノ蕩神ヲ改正シ之ヲ市井田野ノ間ニ奏スレハ則チ販夫モ自ラ奮興シ耕夫モ亦タ能ク震起セシムルニ足ル若シ試ニ之ヲ有髯社會ニ一喝スレハ髯的ノ或ハ畏避退縮スル髯ニ因縁アル海老ノ海底ヲ逡巡スルカ如ク之ヲ再喝スレハ其面ニ赤色ヲ呈スル復タ彼ノ海老ノ熱湯ニ在ル如キ狀アラン其奇効ヲ現出スル夫レ斯ノ如シ嗚呼此ノ山間ニシテ此佳謠アリ歐人ノ誇稱シテ自由ハ獨々逸（ドツコイ）獨逸ノ深林ニ萠出シタリトナスモノハ抑モ亦タ故アル哉

序者の小鱗逸人は何人であるか、それは知らぬが、此の序で、文藝を以て大衆啓蒙宣傳の機關に利用する意識だけは十分認められる。別に歌謠を改良するといふ意識はまだ見えない。「よしや武士」の説明として、二三見本揭げよう。

よしやなんかい苦熱の地でも　粹な自由の風がふく
よしや此身はどほなり果よが　國に自由がのこるなら
よしや憂目にアラビヤ海も　わたしや自由を喜望峰
よしやシビルはまだ不自由でも　ポリチカルさへ自由なら
よしやおまへがフランス氣でも　私や亞細亞のガンベッタ

これを誦すれば、かういふ「よしや武士」を高唱して自由民權の宣傳に努めた土佐青年の颯爽たる意氣が髣髴と身に迫るのを覺える。明治十二年頃九州地方に流行した民權數へ歌は、植木枝盛（土佐人なれど當時福岡にあり）の作として有名なものであつた。

尙ほ同じく文學利用の考へが政治家の胸に往來してゐたのは、勿論土佐だけではない（土佐に刺激された點は有り得やう）。例へば明治十一年七月十九日の大阪日報に「民權ヲ擴張スル方法」と題する論文があるが、これでは、中等

以上の人士に對する宣傳擴張の手段として、新聞雜誌、演說討論（小說めくものも入る）を、中等以下大衆に對する宣傳擴張の手段として、謳歌竹枝（芝居も入る）宗教を擧げてある。これは一例であるが、此の他にも私の知らぬ例は多々あつたことであらう。

歌謠の次に利用されたものは、演劇であつた。これも一二例を擧げると、東洋奇事新報の記事によると、明治十年七月頃は南海道諸國では佐倉宗五郎の芝居が大入りを極めたが、これはこの芝居に此の項流行の民權論を反映させたからであるといふ。又明治十二年頃信州の松澤鶴舟（求策）は南安曇郡中萱村の義人多田嘉助の事蹟を脚色して民權イデオロギイを吹き込んで上演したところ非常の大入りであり、觀る者皆泣いたといふ。單純に感情に訴へて來るものは強い力で人を動かすものである。自由民權と演劇の交渉は、これ又獨立の好題目となり得るものであるから、ここでは單に民權思想の宣傳に利用されたといふ事實を裏書きするに止めて置く。

演劇は演劇で勿論、此のまゝ自由民權と交渉をもつたまゝ發達して行くが、當時はまだ演劇も稗史小說も内容的には明確な區別を經て居らず、演劇改良論で、小說改良を必要條件として叫んだりしても誰も怪まぬ時代であつたから演劇の流行や勢力の利用が、小說利用の方へ自然に移つて來たといふことも考へられる。さう思つて見ると、所謂政治小說の嚆矢たる「情海波瀾」に佐倉宗五郎の演劇が、劇中劇の恰好で取り込まれてゐるのは、政治小說の構成方面の問題としては、注意すべきところであるかも知れない。

民權宣傳の歌謠も上記「よしや武志」の如き、單純な形態のものに止まつて居ず、次第に發達して長編の詞曲に舞踊を伴なつたものとなつた。坂崎紫瀾自筆の紫瀾年譜を見ると、明治十六年の條に――

又草濱躍曲米國獨立曲其他民權詞曲十餘種

とあつて、此の邊の消息を語つてゐるが、事實は、十六年より可成り以前に流行してゐたものである。左の例でそれ

が判然するであらう。（明治十四年八月一日高知新聞第百五十號）

○頃日九十度以上の苦熱には流石に姑射の神人氷雪の膚もたへずやありけん上の新地得月樓の藝妓六々三十六名が毎夜竹の模樣なんつけたる揃の浴衣にて鏡川原に伊勢おんどを躍り出せし由なるが又此方には鬼神をも取りひしぐべき壯士が自由の二字を記せる赤提燈を高く揭げて例の民權躍りを勉強せらるゝとのこと柳は綠花は紅あら面白の浮世にぞある因にアメリカ獨立てふ曲譜を得たれば左に錄して四方有志の拍掌を博す

朝陽輝やく太平海や。波の彼方の亞米利加洲は。コロンブス氏の發見せし以來。吾も名高き新世界。東岸しなる英吉利領ば。日月經ること三百餘歳。次第〳〵に人別ふへて。民の產業繁昌すれば。欲に目のなき本國政府。アレのコレのと租稅をかける。されば人民よりあつまりて我も〳〵と議論をいぶる。中に拔群しパトリクヘンリー。眼血迸しり突つたちあがり。我に自由を與よ神よ。自由なければ死を與へよ。假令ひ國王政府といへど。非理の所業は堪忍ならぬ。イデヤ義兵の旗擧せんと。勇み進みし老若男女。ワシントンをば總大將に。四十八士が連判なして。本國政府の罪かき立てゝ。國の獨立世界へ示す。まつま程なく喇叭の響き。敵の大軍群りきたる。凝りにこつたる鉄石心に。鋒も矢玉もはねかへる。新手いれかへ渡海の敵に。流す血の河屍の山も。人に勝てふ天定りて和睦なせしはしちねんめ。共和政體。目出度こゝに。人の上には人こそなけれ。四年代りの大統領。上院下院の評議役。昔しつどひし十三州も。今は三十六州となりて。扨ても愉快な獨立話なし。其に引かへ亞細亞の洲は。民の權利も荒繩しばり。牛よ馬よとおひつかはれて。いきて甲斐なき此の有樣を。筆に書れず口にはいへず。遙か隔てし東の空を。眺め暮すが浮月日。

此の外、自由民權意識を歌つたものに、正則な詩歌があるが、これは大衆啓蒙的の利用意識から作られたものは少なく、主として作者自身の民權的感情を吐露したものである。漢詩は殊に然り。從つて感化影響といふ點からは政治

小說に劣らず大きなものであるが、これ又自由民權と詩歌といふ一研究題目を成すべく、こゝでは深入りせぬことにする。啓蒙的目的をもつてゐる點でこゝに名を擧げても可いものは小室屈山の『自由の歌』であらう（歌の本文は手近の諸書で見られるから略す）。

三

以上は政治家側で文學乃至文藝を民權宣傳大衆啓蒙に利用しようといふ意識の動きの一斑を示したものであるが、勿論利用意識を働かしたのは以上の如き歌謠だけには止まらない。次第に小說的形式の散文文學に及んで來た。小說以前、既に散文文學の政治的利用は、時事諷刺文學その他によつて示されてゐるのであるが（研究前記、政治小說以前の政治的文學の條參照）。これ等はまだ宣傳意識が非常に少ない、唯カムフラージュをのみ目的としたものが多い。

稗史小說的形式が政治的宣傳に利用されるに至つたのは、上來度々述べた如く、かゝる利用が稗史小說そのものゝ本來の使命であるかの如く解されてゐた當時一般の文學觀念、政府筋の言論壓迫開始のため新な闘爭を武器として工夫されるに至つたこと、西洋文學に見る政治小說の先例等が原因になつてゐるのであるが、今此の利用意識の側からすれば、自由民權論の發達につれて宣傳的主張が次第に複雜になり理論的になり說明的になつて來るので、從來の歌謠演劇の如きものだけでは十分利用しきれぬ羽目になつて來たのである。それで此等に比較して遙かに說明的便利の多い小說的形式を利用することになつたわけである。

さて小說を政治的に利用するに至つても、これ又上來の政治小說作家の例に明らかなる如く、多くは小說乃至文學には無理解に、たゞそのテクニクと形式を利用するといふまでゞ、文學的に自覺して好い小說を作らうとするなどといふ心掛は少しもなかつた。たゞ專ら主義たる政治的イデオロギイを自己の考へたまゝに聽者たる大衆に宣傳すれば

それで足れりとしたものであつた。百華園主人の如きは、多少文學尊重心らしいものを見せてはゐるが、これも利用價値の上のことで、小說そのものに對して、これを改良するとまでの熱意があつたか何うかは疑問であらう。

然るに明治十五六年の交に及んで、政治家側の文學利用者流に取つては殆んど革命的ともいへる事件が略ぼ時を同くして二つ起つた。

その一は矢野龍溪の『經國美談』の出現である。龍溪が、時代の小說に對する不滿と民權理想の宣傳小說を作らうといふ意志から出發して『經國美談』を書き上げた。その『經國美談』は、明治初期の文學といふ條件を附けて論ずる限り、全く時代違ひの傑作である。文學利用者流は、此の傑作を眼前にして、當時の所謂稗史小說なるものと、此の傑作の差違の甚だしいのに大に驚いた。彼等の驚いたのは、主としてその創作小說としての成功に對してであつた。

驚異は羨望となり、羨望は模倣となる。『經國美談』の成功は、幾多の模倣者を生んだ。この事實は、同じ文學利用的意識の中にも利用の効果からいへば、小說として立派なものである限り、その實行的効果が多いものだといふことを教へた。『經國美談』の成功は、勿論これが民族的政治理想を寓されてゐる爲めもあるが、然し何より第一に、成功の原因となつたのは、小說としての立派さといふことであつた。

そこで、勿論まだこれだけでは從來の文學輕視の觀念を全然脫去せしめることは出來なかつたが、先づこれを手本として好い小說を書かなくてはならぬ。政治小說であつても小說として好いものでなくてはならぬといふ考へを起さしめたのである。こゝに政治家側の文學利用主義者が文學改良思想に接近する第一步が始まつたのである。

これより先き、明治十年以前、功利思想全盛の際、一般社會にも文學輕視の思想が行はれ、甚だしくは文學有害論とまで發展したものもあつたが、福地櫻痴、成嶋柳北、服部誠一、三木愛花の徒が文學尊重論を固持して屈せず、ともかく文學の命脈を思想的に維持して來たが、此の頃に及んでは進んで稗史小說改良の說を唱へ、舊來の所謂稗史小說

が輕視され有害視される原因を考察して、新時態に適應したものに再組織しようといふ運動がぽつぽつ起りかけてゐた。今『經國美談』の成功と、その模倣者達の創作意識の勃興といふことを考へるとき、背後に（文壇側に）かういふ文學（といつても寧ろ稗史小說）改良の運動が起りかけてあつたといふことを見逃すわけには行かない（一）。

『經國美談』の外の今一つの事件といふのは、當時のフランス政界の老雄でもあり同時に文學界の覇王であつたヴイクトル・ユーゴーの警告である。自由黨の總理板垣退助は、十五年四月の岐阜刺客事件後、周圍の勸告を容れて（といふよりは朋友後藤象二郎に動かされて）洋行を決意した。さうして後藤及び栗原亮一、今村和郞と連れ立つて、十五年十一月出發し、十二月末巴里についた。（洋行については、表面的な出來事以外記さない）。此の際、恐らく十六年春のことであらうが、板垣はユーゴーに面會して、自由民權論の先達として敬意を表し、且つ敎を請ふところがあつた。吾等はこゝで、自由新聞記者坂崎紫瀾の筆を借りることにしよう（明治十七年七月二十二日、自由新聞、六一〇號、「彪吾先生略傳」中）

（上略）　却て說く我が自由黨總理板垣君が先に泰西觀光の遊を試みらるゝや亦先生を訪問せられしに先生は其同心の朋の遠方より來りたるを喜ばれて之を遇するに殊に厚かりしかば坐客頗る之を訝異す初見握手の禮畢りて先生は板垣君に向ひて曰く君は東洋に於て夙に自由の主義を執り多年其創業の艱難を經歷し又近日之れが爲めに刺客の變に罹りしは余の已に業に了知する所なり今や萬里遠來して殊に訪問せらるゝも余老ひて久しく談話するに堪へざれば此に余の衷情を概括して君に一言を呈すべし曰く、進め退くこと勿れと言ひ畢つて、先生又自ら之を釋解して曰く君は意氣尙ほ壯烈なれば或は余の言を以て大磐石に撞着するも亦突進すべしとの謂なりと誤解するを休めよ、若し大磐石の其前に當るあるも苟も我が進んと欲するの精神にして間斷なければ大磐石は必ず我が乘ず可きの罅隙を生じ來るなりと先生又曰く余を以て日本の現勢を察するに蓋し人民を觀感興起せしむべき歐米自由主義の政論稗

史の類を共國の新聞紙上に續々掲載するを急務と思はるゝ也と云々於是乎板垣君は親く先生著書中孰れが最も携帶し歸るべきの書なりやと問ひしに先生は首肯して之に答へて曰く余は其時世の感情と共に推移したる者なれば君若し余の著書を携帶し歸らんと欲せば蕪し選擇する所なかるべからず其十年前よりの起稿に係る者ならば是なりと時に先生齡八十有餘に及ぶ云々　（乙）

板垣はユーゴーの言に大に感激した。彼は元來正直な人であつたから、滯歐中に刻明に政治小説の類を集め（普通の政治法律、歴史傳記の類はいふまでもない）、それを携へて歸朝した（十六年六月）、さうして此等の政治小説を當時自由黨で軟派文學の第一人者とされてゐた宮崎夢柳その他に讀ましめ、その佳なるものを選んで自由新聞その他自派の機關新聞雜誌に記載せしめた。（「宮崎夢柳」の條參照）。

此の頃に於いては、日本でも新聞が大に發達し、外報の如きも比較的繁多に入つたから、歐米に於ける自由主義者の行動は、これ等の新聞に比較的詳しく報道された、殊にユーゴーの如き、ガムベッタの如き、日本の自由主義者にとつては、全く神人視され、その一擧手一投足も尙ほ崇拜される有樣であつた。然るに、その崇拜するユーゴーが、彼等の熱愛する板垣の口を通してかういふ傳言を寄越したといふことは、全く天來の福音以上の如く受けとられたであらう。

此處に於て、政治小説といふものに對する政治家側の觀念が屹と定まるに至つた。さうして稗史小説も決して輕視すべきではなく、從來輕視して餘り問題にもせず、利用一點張りでゐたのが間違つてゐたと考へた。此のユーゴーの一言は自由黨側の人々のみならず、改進黨の人々をも動かした。これが『經國美談』の出現と相俟つて、政治家側の小説に對する態度を本腰の眞劍なものにした。つまり前には、勸善懲惡の具也として別に重視しなかつたのに、今度は政治宣傳の必要武器として、ユーゴーの裏書と『經國美談』の手本を得たので、俄然これの利用價値を重視し、逐

いて小說そのものをも重要視するに至つたのである。

註（一）此の邊の消息は近々完成せんとする『明治初期に於ける文學觀念の變遷』に詳しいから、こゝではかういふ運動があつたといふことだけを記憶されたい。

四

以上述べて來た此の政治家側の小說稗史利用に對する態度の變更は、その後種々な點に表明されたが、最も著しい例は、明治十六年以後、政治家側で小說論、小說改良論、政治小說論を試みるものが急に殖ゑた點である。今此の章でさういふ論說を逐一紹介批判してゐることは許されぬから、自由黨側の意見を主として、二三について述ることにしよう。

私の知る限りに於いて、最も早く此の態度を表明し、稗史小說の重要性を認識して政治小說を政治宣傳の必須の手段と解し、進んで小說そのものゝ改良意識を示した最も纏つた意見は、自由黨の別働隊たる日本立憲政黨の機關紙日本立憲政黨新聞であつた（黨そのものは、十六年三月解黨）。同紙六月九日から次の論文が掲載されてゐる、曰く「我國ニ自由種子ヲ播殖スル一手段ハ稗史戲曲等ノ類ヲ改良スルニ在リ」。この意見の半分は板垣がユーゴーの警告を齎して歸朝する前に成つたものであるらしいが、若しさうとせば、前に述べた小說改良運動と『經國美談』の成功その他に刺戟されて起草されたものであらう。その論旨の要は、稗史小說は重大な社會的職分をもつので改良しなくてはならぬ、舊來の小說の內容を全然改良して政治小說としなくてはならぬといふのである。以下引用を交へつゝこれを紹介しよう。曰く——

凡ソ世敎ニ關スルモノヽ中ニ就テ其ノ最モ密接ニシテ且ツ効力ヲ有スルモノハ蓋シ稗史戲曲等ノ類ヨリ大ナルハ莫

カルベシ故ニ其稗史戯曲等ノ類ニシテ一タビ其主旨ヲ誤ルニ於テハ害悪ヲ社會ニ流傳スルコト誠ニ鮮少ニアラザルナリ是ヲ以テ苟モ時弊ヲ矯正シ陋習ヲ芟鋤シ我國ヲシテ佳氣靄然タル自由ノ樂國タラシメンコトヲ企圖スル者ハ大ニ此稗史戯曲等ノ類ヲ改良スルコトヲ謀ラザル可カラズ是レ實ニ我國ニ自由ノ種子ヲ播殖培養スル一ノ良手段ト云フ可キナリ

これが冒頭である、稗史小説が俄然重大なものとなつた點が明白である。さて今日、日本は文明開化の餘澤によつて自由幸福を渇望する者が夥だしく皆自由の樂國たらしめようと欲してゐるが、多年封建專制政治でやつて來たものであるから急に思ふ樣にならぬ、殊に社會の事は全體一致で進歩しないと進歩の効力が現れない。上等社會ばかり進歩が著しくとも、下等社會停滯不動の有樣では、進歩も進歩とならぬ、日本を自由の樂國たらしめるには、社會全體がその方面に向はなくてはならぬ。社會全體がその大方向を同一にして進歩しなくてはならぬのである。さうしてそれには、我が社會の最大部分、即ち下等社會及び婦女子等の頭腦を一變せしめなくてはならぬ。下等社會の人々、婦女童幼を薫和し、以て彼の專制時代の習氣を洗滌し卑屈の根性を感化して「活潑ナル自由ノ氣力ヲ英發興起セシメザル可カラザルナリ」である。さうしてこれを英發興起せしむるには、「先づ我俗間ニ行ハル、所ロノ稗史戯曲等ノ類ヲ改良スルコトヲ企圖セザル可カラズ」となる。それは何の故であるか。

抑モ我國ノ俗間ニ著シク行ハル、所ノ稗史戯曲等ノ類ハ婦女幼兒及ビ下等者流ヲ感化誘導スルノ力最モ著大ニシテ言ハヾ稗史戯曲等ノ類ハ俗人ノ爲メニハ立派ナル學問ノ教師ナリ然ルニ我國從來ノ稗史戯曲等ノ類ハ皆ナ悉ク專制ノ歴史ヲ寫シタルモノニ外ナラズシテ其主旨トスル所ハ概ネ忠孝節義ノコトニアラザレバ則チ優勝劣敗ノ戰記、綣々ノ戀情ニアラザレバ則チ因果應報ノ理、俠客力士ノコトニアラザレバ即チ盜賊博徒ノコト、怪談鬼談ニアラザレバ則チ滑稽諧謔ニ過ギザルナリ

而して此等の稗史小説が婦女童幼、下等者流を感動せしめる點は千差萬別といつても可いが、——

要スルニ多クハ專制ノ治下ニ顯ハル、所ロノ人情風俗等ヲ寫シ來リタルモノナレバ吾輩ハ開明ノ氣運ニ遭逢シタル今日ニ於テハ其利益スル部分ハ甚ダ少シクシテ寧ロ傷害ヲ與フル部分居多ナリト云ハント欲ス

何となれば從來の稗史といひ、小説といふものは、「皆ナ悉ク夫ノ專制ノ弊習中ヨリ揑造作爲シ來リタルモノナレバ其常ニ感覺上ヨリシテ陋習ニ汚染シ舊慣ニ拘泥スルノ弊ヲ養成スベケレバナリ」從つて此の如きものを以つて社會教化の具となすに於いては、如何にしても啓蒙破陋の偉功を奏することが出來はせぬ。だが、社會趨勢上種々の點から考察して、百事開明舊を厭ひ新を喜ぶ今、稗史小説の如きも、正に改良の機運にあるものであつて、實に稗史小説の改良は今日を以て好機とする。さて然らば、稗史小説を改良する手段は如何。

吾輩ハ之ニ答ヘテ云ハン苟モ我社會ノ改良ヲ企圖スルニ志アル者ニシテ文學ニ精妙ヲ得技藝ニ奇巧ヲ有スルノ輩ハ奮然進ンデ或ハ著作家トナリ或ハ俳優トナリ或ハ講談師トナリ以テ其ノ稗史戲曲等ノ舊臭厭フベキモノヲ排却シテ新奇靈妙活潑々地ノ考案ヲ揑出スルニ在ルナリト

更にこれを具體的にいへば、稗史小説を政治化して政治小説と成すにある。

定ニ夫レ彼ノ從來ノ稗史戲曲ノ趣旨トスル所ヲ改良シ、其忠孝節義ハ只君父ニ竭スノミニアラズシテ只管ラ社會ニ竭スベキノ所以ヲ明ニシ、其優勝劣敗ノ戰記ハ乃チ專制ヲ斃シテ民權ヲ興スノ戰記トナシ、綣々ノ戀情ハ徒ラニ双手ヲ抱テ水中ニ投シ空シク兩身ヲ纒フテ双頭ニ死スルガ如キノ無慘無味ナルコトヲ戒メ婀娜タル美人瀟洒タル少年が國步艱難ノ爲メニ流離シ各天相見ルコトヲ得ズ眷戀ノ情ニ迫ツテ殆ド死シテ復生キ生キテ復死セントシ時ニ偶然邂逅シテ萬斛ノ情緒ヲ敍ブルノ情ヲ寫シ來リ或ハ誓ツテ國ノ爲メニ倶ニ死スルノ有樣ヲ畫キ來リ、彼ノ因果應報ノ理ハ乃チ奸佞ハ誅セラレ正義ノ士ハ榮ユルノ痛快ヲ敍シ、彼ノ俠客力士ハ民權家ヲ寫スノ波瀾トナシ、盜賊博徒ハ

私黨偏朋ヲ貶スルノ伏線トナシ、彼ノ怪説鬼談ハ只其幽靈又ハ神靈ノ類ニ非ズシテ暴惡者ガ心經ノ苦責トナシ、而シテ滑稽諧謔ハ淫褻若クハ妄誕ノコトヲ止メテ譬喩諷刺ノ一器具トナシ以テ從來ノ稗史戲曲等ノ類ヲ改良スルニ至ラバ其實ニ千古ノ陋習ヲ洗滌シ舊慣ヲ芟鋤スルノ効力ヲ大ニシ世敎ニ益スルモノ豈ソレ鮮少ナランヤ

即ち論者の小説改良といふことが新式の政治小説の創作を意味することは、これで明瞭であらう。論者はこれに續いて英國エリザベス朝の文學全盛とシェークスピヤの出現に言及し、日本にも今日此の稗史小説改良の好時機に、一のシェークスピヤを得て、思ふ存分この改良に努力し、早く自由の樂園を現前せしめたいものであると結んでゐる。

吾輩ハ其ノ此ノ氣運ニ際シ其ノ此ノ人ノ我社會ニ顯ハレンコトヲ待ツモノナリ其人一タビ出デ此ニ始メテ能ク我國從來ノ稗史戲曲等ノ類ヲ改良シ以テ大ニ舊時ノ面目ヲ一新スルニ至リ婦女子ヲシテ忽チジヤンダルク、ローランドコルデー等ノ風采行爲ニ感起スル所ロアラシメ幼兒ヲシテワシントン、パトリッキヘンリー、ミラボー、ラフヱイツト等ノ英氣俊才ヲ欽慕セシメ下等者流ヲシテルーソー、デムーラン等ノ平等自由ヲ擴張興起シタルノ蹟ヲ追慕セシムルヲ得卑屈ノ根性ヲ除去シテ活潑ノ氣象ヲ發興シ以テ能ク上等者流ト相ヒ扶ケ相ヒ持シテ社會ニ運動スルニ至ラシメ彼ノ陋習ノ厭フベキモノヲ芟鋤シ以テ我國ヲシテ瑞氣靄然タル自由ノ樂國トナス何ノ難キコトカ之レ有ラン

要するに、稗史小説を改良して政治的分子を注入し時代に即したものとし、これを以て自由民權を宣傳する、かくて稗史小説はその本來の天職を果して理想的社會を將來せしめるといふのであるから、以前の小説觀に比して大なる變化を見るであらう。即ち政治家側で如何に文學に對して眞劍になつたかといふことが、一讀して察しがつく。

次で紹介するのは、自由黨側の意見で、自由新聞の女房役たる繪入自由新聞に掲載されたもの、明治十六年八月二十六日より以後に亘つて出た「政事に關する稗史小説の必要なるを論ず」といふのがそれである。筆者の署名はないが、和田半狂か宮崎夢柳かの文章であらう。冒頭として言論出版の二自由の論を持ち出す、曰く、——

凡そ人民の自由中言論出版の二自由は最も貴重にして且つ其の消長によりて大に國家の安危存亡に影響を及ぼすものにして他の自由に先んじて之が保障を爲さゞるべからざるは論なきなり抑も言論出版の二者は社會の文化を進め人民の智德を增し且つ施政の方針を定むるものにして社會一日も缺くべからざるものなれば必ず其の自由を與へざるべからず倘し或は此の二者を塞いで而して國家の安全を計らんとする時は是れ猶ほ枯木に培ひて其の花を見其の實を結ばん事を期するが如し豈に得べきの理あらんや之れを是れ察せずして言論出版の二自由を與ふる事を吝まんと欲する者あらば其の人や必ず愛國者にあらざるなり

言論出版の自由はかく國家の發達にとつて大事なものであるが、然しそれが何時何ういふ政府によつても完全に許されるとは限らない。此の二自由が完全に許されずに「政理が人心に」感通しない場合には、止むなく變通の策を用ゐなければならぬ。「其の變通の策とは何ぞや則ち稗史小説の力を假る是れ也」である。

抑もそも稗史小說が人心を感動せしめる力は大きい。殊に中人以下婦女子童幼に對する効果は著しい。高尙の議論は中人以上の人々には信用されても、社會の多數人、卽ち中人以下の輩には馬耳東風である。且つ言論出版の自由がない時には、政治上の問題を正面から正々堂々と論議されない、又それだけに早く何等かの手段で、社會一般の人民に早く當時の形勢を知らしめなくてはならぬ。そこで何うしても。變通の策として稗史小說の力をかりなくてはならなくなる。

そこで論旨は、稗史小說の再認識を始める。——

人或は云はん稗史小說は元と兒戲のみ何ぞ之れを以て政治の改良を計るの機器とするに足らんや況んや改革家を以て自ら任ずる志士仁人に於てをや豈に此の如き瑣細の手段によるべけんやと

これが從來政治家の腹の底にあつた文學觀念である。然るに今は全く違ふ——

余輩之れに應へて云はんとす彼の妻騷のナルシースと題する演劇院本の如き唯だ纔かに音樂の改良を爲せしに止まりしと云ふを得べき乎焉んぞ知らん其の結果は佛國多年の君主專制を廢棄せしのみならず勉めて歐洲陸地の抑制束縛を解き而して人民の自由を發達せしめしにあらずや其の他古今歐米諸邦の小說家にして往々學者社會の上に傑出超群せし有名の大家は殆んど僂指するに遑あらず是れ余輩の贅言を俟たずして少しく海外の事情に通ずる者の業に已に熟知する所なり現時佛國に於て雷名を轟かしたる小說家の巨擘ヒユーゴー氏の如きは世人評して佛國は卽ち同氏なりと云ふに至り其の功績名譽は實に旭日の東天に冲(のぼ)るが如し小說家にして斯の如し嗚呼亦た盛なりと云ふべし

――

打つて代つて大變な賞め樣である。さうしてこゝでもユーゴーの名を引合に出してある點は注意すべきであらう。かくて論者は德川時代の政治と文學の關係に及び、今日此の時勢に當然偉大なる政治小說家の出現すべきを豫期して、かう筆を結んでゐる。

況んや今日の狀況未だ政事上に關する稗史小說の洪益ある事を知らざる者あるに於てをや豈に與に眞正の政治を談するに足らんや余輩固より淺學菲才なりと雖も業に已に斯の事を以て自ら任じ盟つて稗史小說の力によつて世の所謂下等の蕪田を開拓せんと期す云々

吾等はこれと略ぼ同じ意見の發表を改進黨側からも聞くことが出來る。例へば、十六年十一月七日淺草井生村にて改進黨の士赤羽萬二郎が發表せんとした演說の腹稿といふものは「稗史講談演劇ノ改良ヲ論シテ世ノ稗史講談演劇ニ從事スル者ニ諜ル」といふのであるが、これも政治上の必要、下層大衆宣傳の必要から小說の改良を論じたものである。

以上によつて、政治家側で、從來の文學觀を改めて、本氣に稗史小說の改良に向ふことになつたことは看取されるが、注意すべきは、この所謂改良といふのは、內容を政治小說化するといふことだけで、小說の技術その他の點には

及んでゐない。何を主眼として何ういふ風に書くかといふ實際問題までは論及したものゝない點である。

此の點でヂスレーリの政治小説の紹介は、今少し後になるが更に此の改良意識に手本を與へたものであつた。ヂスレリーのことは、後章でやゝ詳しく紹介するから今こゝでは略して置かう。

五

以上によつて、政治と文學が種々な曲折を經て、緊密に結合するに至つたこと、文學改良意識が、政治小説の創始に於いて政治と堅く手を握るに至つたことの一斑は明らかになつたと思ふ。

かくて政治的宣傳と手を握り合つた文學改良は何處に行くか、吾等は次章坂崎紫瀾の研究の條下に於いて多少具體的に語り得るであらう。さうして何事にも一徹生一本の自由黨氣質は、かういふ問題にも現れて、政治が文學と手を握つたのは一時の方便からといふことを忘れると共に、文學改良に專念し、文學改良を卽ち政治改良、社會改良と同一視し始め、遂には政治卽文學、政治の無い文學は考へられぬといふ態度なり思想なりが生れて來る。卽ち小説卽政治小説、政治的分子のない小説は考へられぬといふのである、さうして此の文學觀は新形式らしく見えるが、よく考へてみると、何のことはない馬琴流勸懲主義の變形したもので、一方は小説の本務をもつて教化の具と見、一方は小説をもつて政治宣傳の具と見るに至つたといふだけ、傾向的にいへば大した進化ではない。たゞ目的が變化したのである。進歩的なところといへば、勸懲主義は個人の進歩改善を目的としてゐたが、政治小説の方は個人と同時に社會全體のそれを目的としてゐるといふ點で、こゝに矢張り時代相當の新しい意義があるのである。

なほかゝる極端な政治小説觀については、後章『小説神髓と政治小説』について論する際に、今少しく具體的に論及することが出來るかと思つてゐる。

勿論小説改良意識の發展は、獨り自由黨側のみでなく、改進黨にもあつた。中卷に於ける須藤南翠、それから下卷に出る尾崎行雄、藤田茂吉、その他がそれぞれの立場と思想とから、この問題に努力し、それぞれの方法と工夫によつて或る程度の成功をかち得たのであつた。此等改進黨側の人々の意見も大抵その人々各自の條下にあるから、これ又今こゝで立ち入ることは止めよう。

だが今後さういふ理論的な條に及ぶ毎に、先づ此處に說いてある政治と文學の關係について一應記憶を新にして頂きたい。

私は上來、文學と政治の關係を說くに當つて、此の政治小說の創作による兩者の連繫といふ點を幾分强調し過ぎたかも知れない。私のいふのは、政治家側の對文學的態度の變化と、これがその頃の文學思潮の動きに支配されつゝ支配した形になつてゐることを指摘しようとしたのである。勿論、文學改良意識が、全部その理想の達成を政治小說の創作に見出したといふのではなかつた。その邊の詳細なことは、私が目下準備しつゝある一書(『明治初期の文學論』又は『明治初期に於ける文學觀念の變遷』と題されることにならうか)に說くことにしてあるから、それに讓るとして、政治小說の創作を以て文學改良意識の全部と見ることは出來ない。それは、同じ文學改良意識からして、政治小說とは對立的關係をとるかに見える『小說神髓』が出現したのでも知られるのである。だから政治小說の創作を以て文學改良の能事了れりとした人々のみでなかつたことはいふまでもない。然し、背後に政治熱の昂騰を控へてゐる際政治小說の創作といふことが文學改良意識の最も力强い現れとして、一時は壓他的に勢力を振つたことも、同じやうに事實と見ていたゞかなくてはならぬ。

坂崎紫瀾について

一

紫瀾漁長坂崎斌は文學的敎養に於いては宮崎夢柳の先輩に當り、年齢も數歳の兄であり、政治的運動に於いても彼の先達であり、詩文ともに夢柳の推重するところとなつてゐる。政治的稗史に筆を執つたのも、年代的には夢柳に先立つてゐるから、文壇的にも當然先進として遇されて然るべきであり、又事實當時でもさう遇してゐた人々もあつたらう。だが今日から公平にいへば、夢柳に比して紫瀾が立遲れの感があり、文學史家も夢柳の名は擧げても往々紫瀾の名を逸してゐる。これは何故か。他なし、夢柳が比較的早く明治十五年に中央に出て自由新聞の如き代表的言論機關を介して宣傳文學に筆を執つてゐたに對し、紫瀾は明治十七年まで鄕里土佐の地方新聞に專心盡力し、その文學的努力も專ら地方的局限をうけてゐた爲めである。勿論當時の土佐は普通の一地方とは違ひ、自由發祥の地として天下の注意を集めてはゐた。從つて紫瀾の筆も一部の人々には識認されて、所謂「天下の紫瀾」として迎へられてはゐた。然し大勢は、早く中央文壇に出たものゝ方が一般人からは識認され易い道理である。且つ紫瀾は十七年上京前には土佐の新聞に盛に稗史小説を揭げたのと反對に、上京後は稗史小說よりも寧ろ通俗的な政治上の談理により多く筆を執つたので、なほ一層立遲れの感を與へる。これが、私としては夢柳を先に述べ、紫瀾を後に語らざるを得なかつた理由である。

紫瀾は嘉永六年癸丑十一月十八日、江戸の鍛冶橋土佐藩邸に生れた。藩主侍醫坂崎耕芸（元小原氏）の次男、母は島村氏、きさといつた。幼名は謙次。三歳の時安政二年の大地震で巣鴨に避難したが、翌年全家高知に歸つた。

紫瀾は幼時玩具をいぢつたことがなく、草双紙様のものを手にして日夜を送つたといふ。阪崎家の僕に丑松といふのがゐて、いたく紫瀾を愛し、夜は衾を共にして、『三國志』とか『太閤記』とかいろいろな軍談をして聞かした。恐らく幼い紫瀾の頭に掻き消し難い印象を殘したものであらう。

やゝ長じて中村十次郎、岡本穎平などに就いて漢學を修め、慶應三年十一月、得業生として藩校致道館に入塾したが、この時には既に資治通鑑を通讀してゐたといふ。土居香國、宮崎夢柳などは皆この頃の詩文の友であつた。

明治元年、紫瀾はわづか十六歳で致道館の素讀席句讀師補助となつた。翌二年藩兵となつて六月海路江戸に往つたが、箱館平定の報があつたので又土佐に歸つた。さうして改めて藩校の句讀師に任ぜられて、五人扶持を受けた。三年三月藩費で廣島に遊學した、此の時廣島藩校には大儒阪谷朗廬が教授してゐて、學風四方を動かしたものであつた。翌年四月歸國して自費で致道館の塾生となつた。何ういふ事情であつたらうか。五年六月には彥根藩から聘されて學校教官となつたが、翌年早々（二月）辭任して上京した。

紫瀾年譜によると、こゝに「希臘教尼古頼塾ニ學ブ者一月」とある。何の爲めであつたか、分からない。紫瀾はこの前神道に凝つたことがあつたといふが、或は彼を知り己を知るの流儀で入つたものか、それとも單に好奇心、好新癖から入つてみたものか。何れにせよ、一月たつかたゝぬに尼古頼師と大議論を始めた揚句、塾を去つた。さうして正式に神道家になるつもりで大教院に入つて講究生になり、繼いで少講義に任ぜられた。

明治七年は民選議院建白書の出た年であり、民權論が藩閥政府反抗の第一聲を揚げた年である。この年一月愛國公

黨の組織せられるや、紫瀾は、大先輩板垣退助等と共にこれに加はり、その本誓に署名した。この本誓なるものが抑も紫瀾の草案に成つたものだといふ。二月、教會新聞を起してその記者となり、又明教社を創めた。神道熱宗教熱が政治熱と並行してゐたものであらう。然し政治熱がさしたり新聞記者になつたりしてゐるうち、宗教研究から法律研究に移つて來たらしい。さうして此の冬心機一轉して郷里に歸つた。

八年再び上京、司法省十五等出仕に任ぜられ、庶務課刑法課などに勤めた。九年十月十四等出仕に昇進すると共に長野縣松本裁判所の判事に赴任した。然し長野には丁度一年より居なかつた。磊落な紫瀾は司法官でありながら政治は論ずる、新聞に投書する。有志家を煽り立てる、それだけではない、折柄西南戰爭が起つたが、紫瀾はもとより征韓論贊成だつたので、西郷方の旗色の惡いのを見ては悶々の情に堪へず、つひ酒を過す、酒を過しては土人の物議の種子をまくといふわけで、遂に諭旨と發意と半々といふ形式で、十年十月辭職した。

辭職後間もなく甲府に遊び又松本に歸つて私塾を開いたが、同地の有志家で有名な國會請願運動者の先達たる松澤求策等に迎へられて松本新聞の主筆となり(一)、盛に民權思想を鼓吹した。事大思想の强い當時のこととて前判事といふ肩書ある紫瀾が新聞記者となつて自由民權論を唱へたので、土人驚異の的となつた。それだけに反響も大きく、一二年のうちに松本が日本全國でも有數の民權論全盛の地となつたのは、主として紫瀾の蒔いた種子が芽ぐんで生長したものといつて可いといふ。

松本新聞に居る頃、福井茂兵衞（後の壯士芝居の元老）と知り合つた。傳ふるところによると、福井は放蕩の果、兩親に勘當されて信州に流れ込んで來たものといふ。

紫瀾年譜によると、この年（十年）の號に「十二月去妻還家」とある。一寸みると妻君（前年迎へし永島某女）を離緣して紫瀾が家に歸つたやうに讀めるが、これは妻君を家に送り還したといふことである。紫瀾自身は翌十一年八

月まで松本新聞にゐて盛に民權論を煽つてゐた。間もなく新聞社を辭して(筆禍)、上京したが、福井と一緒であつたものか、そのまゝ福井の家に滯在した。松本を去つたのも、恐らく例の磊落生活で酒債が嵩んだためではなからうか。九月歸國して高知縣廳學務課出仕となり、縣會書記の囑託をも兼ねた。

十二年は四月と七月に學事視察として阿波に出張巡回したりして先づ無事であつたが、十三年に入つて學務上の意見を當局に建言するところがあり、それが採用されなかつた不平から五月辭職して(此の年一月二十四日の大阪日報に紫瀾が此の程高知縣八等屬を辭して高知自由平假名新聞といふものを發行せんと出願中との消息が見えるが、何ういふものであらうか)、百做社の社長となつた。百做社といふのは、元來士族の家祿奉還金をもつて士族に授産する目的で設立されたものであつたが、民權論が勃興して板垣一派の立志社が勢を得るに及んで、反板垣の佐々木高行、谷干城等が國權主義を唱導して百做社をその機關たらしめるに至つたのである。紫瀾は百做社長となるや、さういふ情實にはお構ひなしに、先づ國會請願の建白を作り、出京して谷干城にその奉呈方を相談したところ、谷の激怒を買つたので、はうばうの態で歸國し、早速百做社から立志社に鞍代へすると同時に、七月高知新聞を發刊し、殆んど意圖地になつて自由民權思想の宣傳普及に奔走した。十四年十二月になつて、官權の猛烈な壓迫に對抗するため、同志と共に土陽新聞を發行して發行停止に備へ、十五年五月更に高知自由新聞を發行したが、高知と高知自由とは同年七月發行禁止となり、獨り土陽だけが生きのびた。

勿論紫瀾の活動は文筆だけに限られず、政談に、巡回講演に、言論戰もなかなか努めた。十四年八月、板垣に從つて高知を發し、大阪、東京を經て、北越から東北に遊説した。この時の紀行を『東北截筆錄』といふ。これは高知新聞に掲載されて大に時人の注意を惹いた。この年の末、紫瀾は東京で自由黨の成立を見、板垣が總理になつたのを土産にして歸國したが、歸國早々同志へ報告のつもりでやつた演説が舌禍を買ひ、十二月十五日附で一ヶ年間高知縣下

に於いて演說禁止の命令をうけた。當時紫瀾が土陽新聞(第三號)に出した廣告を讀むと、悲憤の情があふれてゐる。

〇言論自由剝奪ノ廣告

阪崎斌

嗚呼悲哉斌儀昨十五日其筋ヨリ自今一ケ年間本縣下ニ於テ政談演說禁止セシメラル因テ此ニ五十餘萬公衆諸君ニ號哭ス

明治十四年十二月十六日、卽チ斌二十八年二ケ月ナリ

此の政談演說禁止の結果は、民權講釋の工夫となつたのである。

紫瀾の民權講釋一件なるものは、由來誇大に喧傳されてゐるが、それは、當時としては文字通り空前の事件であつた爲め、世人の記憶に深刻な印象を與へたからであつて、事實を調べて見ると大山鳴動の譬喩を繰り返さゞるを得ない。十五年一月、紫瀾はいよいよ右禁止中講釋師に化ける決心をして、遊藝稼人の鑑札をうけ、藝名を馬鹿林鈍翁と名乘つた。同時に友人や青年二三輩にもそれぞれ藝名を名乘らせて東洋一派民權講釋といふ一連をつくつた。その連中といふのは、——

馬鹿林　鈍突(どんつく)　(岩神正矣)
同　鈍子(どんし)　(西森拙三か)
同　鈍々　(和田稻積)
同　鈍柳　(宮崎夢柳)
同　鈍澤　(波越四郎か)

であり、何れも高知新聞土陽新聞の記者や助手であつた。(紫瀾は早く松本時代から講釋落語などを政治に利用する意

圖があつたといふ。紫瀾が松本時代に世話をした福井茂兵衛は、前身が落語家であつたといふし紫瀾が舌禍をかつた前後高知に來てゐたとも、更に民權講釋に加はつたともいふ。民權講釋と福井に何か關係あるかも知れない。）

此の一連の初興行は十五年一月二十一日の夜から高知の玉水新地廣榮座で開講した。鈍柳、鈍澤の二人はいよいよといふ間際に尻込みをして出なかつたといふが他は皆、西洋民權百家傳やらフランス革命やらを兎に角一席づゝやつたが、人氣の點では大成功であつた。翌二十二日の夜同所で二日目を開講し、前座の鈍突が一席やり次に鈍翁が出て民權家傳のうちローマ古英雄ブルタス傳を講釋し、更に鈍子が高座に上つたところ、數名の警官が席に入つて來て、講釋中止を命令し、聽衆を解散させ、紫瀾の鈍翁を拘引して引上げた。紫瀾の罪條は、當夜の講釋の際、天皇陛下に對して不敬の言辭を弄したといふのであるが、それは、判決文によると講釋の冒頭たる誘ひの文句に、講釋師は賤しい者だが高所にゐて税をとるのは帝王に似てゐる云々といふ一句である。紫瀾はこの帝王といふのは各國帝王の義で決して日本の天皇陛下のことではないと辯解したが、當時の神經過敏な官憲にはそれ位なことで効目があるわけはない。此の年二月、禁錮三ケ月、罰金二十圓、監視六ケ月の判決が下つた。（紫瀾は早速控訴した、だが一年後の十六年三月控訴が破毀されたので、止むなく就刑入獄して、この件は結局することゝなつた。）

十五年四月、岐阜に於ける板垣の遭難の報が高知に傳はるや、民權派の志士數十名は直ちに駈けつけた。紫瀾は當時保釋中とてこの仲間に入ることが出來ず、空しく身の不自由を嘆じてゐたらう。六月、この事件を脚色し、『東洋自由の曙』（初名唐紅亂れの緒（いとのを））と題して高知の堀詰座で上演せしめ、大に好評を博した。

演說を禁止され、講釋で刑罰をうけた紫瀾は、こゝに漸く稗史小說の宣傳的効力といふことに着眼し始めたらしい。十六年一月を迎へると共に、彼は筆を新にして『汗血千里駒』を嗚々道人の名で土陽新聞に掲げたが、大衆の喝采を得ると共に、紫瀾の文名が大に揚り「土陽新聞には嗚々（烏々）道人あり」（二二）と知られるに至つた。三月末入獄就刑

六月末出獄、『汗血千里駒』の稿を續けて九月に及んで團圓したが、矢繼早やに、『大坪萬藏傳』、『自由の花笠』、『露國安那物語』を掲げ、その他濱躍曲、米國獨立曲（三）などの民權詞曲十餘種を草して、或は青年壯士をして傳唱させ或は花街妓流に流行させた。十七年には『安那物語』を續けて四月に及び、更に『南山皇旗の魁』を掲げて十數回になつたころ、自由新聞の別働隊自由燈の創刊にあひ、これの招聘に應じて上京した（『皇旗の魁』は百々（佐々木）甲象の續筆によつて十一月まで掲載された。）

この上京は年譜によると七月となつてゐるが、これは何かの間違ひで、五月四日高知を發し、同十一日自由燈開業式に出席して演說してゐる。その後更に自由新聞の記者も兼ねることになつた。だが上京後の紫瀾は、さういふ約束であつたものか、主として自由燈のために通俗な論說を草するだけで（だがこれ等の論文が往々言文一致であるところは注目すべきであらう）稗史小說の筆は殆んど執らなくなり、その方は同僚の宮崎夢柳、小室案外堂などに任せてしまつたかに見えた。當時自由燈の論說欄は殆んど紫瀾が持ち切つてゐた、彼は幾つかの號を使つて論說を書いた、鐵香女史などといふ女性の假名を用ゐたのも多い。年譜によると、此の年ユーゴーの小說を譯したといふが、『九十三年』を譯した『修羅の衢』（自由新聞）のことであらう。然しとにかく全然小說に見切りをつけたわけではなかつたらしく、小說改良に志して、配下の青年記者齋藤綠雨をして坪內逍遙を訪はせて、小說改良會に贊成を求めさせたり（四）彼一流の小說論（五）を吐いたりしてゐる。

だが、これより先き自由黨は十七年に解黨され、次いで十八年自由新聞も廢刊されたが、そのうちに自由燈の方にも改革問題が起り、資本主たる星亨一派と議論の合はない紫瀾や夢柳等は同年十二月に退社してしまつた。

自由燈を退いた紫瀾は、高輪の後藤象二郎の邸內に移つて後藤の傳記起草に着手した（十九年一月）。此年今日新聞に一寸入つたが、六月大阪に於いて岡崎高厚の浪華新聞發行の擧があり、紫瀾はその招聘に應じて下阪し、浪華新聞

の創立事務を終つて(八月一日一號發兌)、十月歸京した。この時『他山之石』(稗史)を草して同新聞に掲げた。歸京後又後藤邸に寓したものらしい。年譜に「十二月從後藤氏至仙臺」とあるが、これは大同團結の小手調べであつた。二十年四月後藤に從つて甲州谷村地方に遊び、五月今日新聞の主筆となる、七月後藤に從つて箱根宮ノ下に遊んだ。年譜に「此年娶中村某女」とあるが、これは三度目の夫人で、二度目の松島某女とは此の年四月離婚したのである。此の中村女史卽ち紫瀾夫人は現存であるが、やはり女流の民權家であつた。而かもその三婚の夢のまだ暖かなうちに十二月保安條令が出で、好人紫瀾も土佐人たるが爲めに退去命令をうけて後藤邸を去らざるを得ぬに至つた。

この時退去命令をうけた土佐の友人は大抵京阪に去つたが、紫瀾はひとり全家仙臺に移つた。十四年東北遊說の際の好印象が殘つてゐたからであらう。廿一年一月仙臺についたが、然し何分突然の事ではあり、元來物質に餘裕のない紫瀾は他鄕に於いて甚しい窮乏を嘗めざるを得なかつた。塵紙をのべて『江戶開城始末』を草したのは、この時である(三月父耕芸東京に歿す)。此の前後、福島で自由新聞を出すことを計畫したが、意の如く行かなかつたらしい。四月松島に開かれた東北七州懇親會に臨み、更に仙臺に政談演說會を開いた。六月山形に移つて出羽新聞の主筆となつてからは經濟的に幾分樂になつた。八月大同團結の大旆を掲げて、獅子王の荒るゝ如く信越の野に咆哮を逞しくした後藤伯及びその一行を迎へ、これに從つて秋田、青森、盛岡に赴いて歸社した。

廿二年二月憲法發布のため大赦に遭ふや、家族は宮城縣白石に移し、同地の俠士上西國八に托し(これより紫瀾は宮城縣人となる、明年の立候補のためといふ)、單身上京して、條約改正反對運動に奔走した。上京後、東西新聞(東京繪入改題)に入り、政治小說(『美人國』)その他を寄稿してゐたが、十二月更に政論社に入つた。

翌廿三年この政論は大同新聞となり、この冬更に東京公論と合して國會(新聞)となつたが、紫瀾は依然記者として止まり、國會、東京大阪兩朝日の議會記事を總括してゐた。この年の總選擧に、紫瀾は上西その他の有志に推され

て白石地方から立候補し、自由黨の名士草刈親明と爭つたが見事落選したといふ。

以上私は本書の目的が必要とする限り、紫瀾の生涯を詳敍して來たが、此の年以後最早や紫瀾の筆は稗史小說の領域には還らなくなるので、さう詳敍の用を認めない。よつて以下紫瀾の經歷の大略を述べて止めることにする。

廿四年は依然國會にゐた、廿五年品川彌二郎の選擧干涉記事の爲め、記者を解囑され、大阪に赴いて一新聞（大阪新聞）を計畫し、その主筆となつたが新聞が不成功で歸つた。廿六年一月土陽新聞社の聘に應じて高知に赴き、廿九年までゐた。この間廿七年七月には日淸役の形勢視察のため朝鮮に出かけ、牙山の役を觀て歸つた。廿九年四月上京、東京新聞社に入つた（卅一年十月退社）。六月板垣內務大臣に從つて京阪を巡囘した（十二月母きさ子歿）。三十年には後藤伯傳記編纂の囑託をうけ、岩崎彌太郞傳の材料調査に着手した。卅一年には陸奧宗光傳を讀賣新聞に揭げ、又岩崎彌太郞傳を草した。卅二年鐵道國有運動に關係す、八月板垣伯に從つて平塚に在り、同伯傳の稿を起した。卅三年『坂本龍馬』（博文館少年讀本第十九編）刊行、この年社會新報記者となつたが、翌年三月退社。卅四年『鯨海醉侯』（山內容堂傳）脫稿。卅五年末から法律新聞の編輯主任となる。晚年、土佐の瑞山會から『維新土佐勤王史』の編纂を托され、心血を注いでこれに當つた。大正元年井上侯の懇望で維新史料編纂局に入つたが、翌年二月十七日、まだ本官にならぬうちに死去した。享年六十一。蓋し此の年二月十一日の政變騷擾に興奮の餘り卒倒して起たなかつたものであるといふ。

註（一）　松本新聞に入つた月日については疑問がある。本文では年譜に從つて十月として置いたが、宮武外骨氏の示敎によると此年九月何か筆禍で罰金五圓に處されてゐるといふ。それでは九月以前の入社といふことになる。後考をまつ。

註(二) 例へば十七年五月十三日開花新聞第三五五號の記事及び單行『汗血千里駒』(明治十六年七月刊、攝陽堂)の雜賀豐太郎(柳香又は東洋太郎)の跋文を見よ。

註(三) 此の曲については前章參照。

註(四) 『逍遙選集』第十二卷、故人錄のうち齋藤緑雨の項(其二)、四五六頁

註(五) 此等小說論といふものは本章第三節に述べる。

附言。 此の傳記は、主として坂崎家所藏の紫瀾自筆の年譜を本とし、坂崎未亡人、嗣子侃氏、小原大衞氏、福島成行氏等の示敎と私の調べた資料により、別に野崎左文氏の『坂崎紫瀾傳』(昭和二年十月、明治文化研究第三年九冊)を參照したものである。

二

紫瀾の小說的勞作のうち、私が目にすることの出來たものを年代順に擧げると次のやうになる。

○南の海血潮の曙(前篇七回の豫定、四回中程にて未完)
(高知新聞明治十三年九月十九日――十四年九月二日迄。)

○汗血千里駒(全六十四回)
(土陽新聞、明治十六年一月廿四日――三月三十日中絕、七月十日――九月廿七日。同年五月初編刊、宇田川文海校。同七月――十月、別本前後續三編刊、雜賀柳香補綴。この後者は、流布本で東京攝陽堂版、前者は京都駸々堂版。)

○豪賊大坪萬藏實傳(全六十二回)

（土陽新聞、明治十六年七月三日――同年十月廿一日。）
○自由の花笠（全二十二齣）
（土陽新聞、明治十六年九月廿五日――同年十一月廿九日。）
○露國安那物語（全四十九回）
（土陽新聞、明治十六年十二月一日――十七年四月一日。）
○南山皇旗の魁（全七十回、百々〔佐々木〕甲象合作）
（土陽新聞、明治十七年四月三日――同年十一月二十二日。同年五月初編刊。二十四年六月『南海之勤王』と改題二十四回迄刊。）
○佛國革命修羅の衢（回數未詳）
（自由新聞、明治十七年七月二十五日――十二月十二日。中絶）
○霜夜の月（三十一回中絶）
（自由燈、明治十八年十二月廿七日、三十一回。此の譯は署名がなく、又全文を見てゐないので紫瀾かどうか分からぬ。だからこゝに擧げては置くが本文では別に言及しない。）
○他山之石（全廿六回）
（浪華新聞、明治十九年六七月頃か。二十三年四月刊行。二十五年二月『照鏡』と改題刊行）。
○美人國（全十回）
（東西新聞、明治二十二年四月六日――四月十九日。）
紫瀾の小説的勞作がこの八篇に止まらなかつたことは、明白であるが（例へば、明治十七月六月五日「いろは新聞

一三四七號以下に「田舎模様戀の仇衣」紫瀾釣史といふのがある。恐らく彼の作であらうと思ふ)、然しこの八篇によつて彼の小說の大體如何なるものかを知ることの出來ることも斷言される。それで、今これ以外の遺篇を強ひて探し出すことをせずに、暫時これによつて紫瀾の小說家的半面を見ることにしよう。

時人は紫瀾の小說を凡て政治小說、紫瀾を政治小說家視してゐるが、これは餘りに漠然とした見方である。紫瀾の小說は、體をもつて別つと略ぼ三つに類別される。(第一)は演義稗史體で、『南の海血潮の曙』、『汗血千里駒』、『南山皇旗の魁』、『大坪萬藏傳』、『他山之石』、(第二)は西洋小說演義體で、『自由の花笠』、『露國安那物語』、『修羅の衢』(第三)は現代小說體で、『美人國』が、それぞれ屬する。

第一類に屬する五部のうち、『大坪萬藏傳』を別にせば、他は全部幕末維新の史實を潤飾したものであり、就中『南の海血潮の曙』、『汗血千里駒』、『南山皇旗の魁』は土佐志士の維新勤王史を稗史化したものといつて可い。此等の小說は本來の性質上、歴史小說とか實錄文學とかいふべきものであるが、然かも時人はこれを政治小說と見、作者も政治小說のつもりでゐて怪まない。勿論今日からいへば、これ等の小說を無條件の政治小說と見るのは無理といふより外はないが、幾分にせよ、今尙ほこれを政治小說らしく見せるものは、全く作者が自由民權思想の宣傳前衞の有力な鬪士であつたことと、これ等小說中に見えるところの、政府の壓迫に抗して天下國家の爲めに奔走する志士的運動に對する絶大な同情とがあるからに外ならぬ。自黨の政治理想を普及させる爲めであつたに違ひないのに、書中には、材を幕末維新に借りて云々といふ程に明白に把握される政治理想を示してはゐない。然し兎もあれ、讀者も作者も共にこれを政治小說と見、幕末維新の敍述描寫そのものに何等かの政治的意味があり、從つてそれだけで當時の自由民權志士に必然的に精神的後援を與へるものと信じられてゐたとせば、そこに何等かの理由があるべきである。

その理由はある、而してそれは當時の自由民權志士が明治維新及びその原動力たる幕末の國民運動に對して懷いて

ゐた特殊な見解から生じて來る。即ち明治維新なる現象を當時の自由民權運動と必然的關係のあるもの、換言すれば自由民權運動の母胎だとする見解、これである。

此の見解は當時の自由民權家の大多數にとつては根强い信念となつてゐた。殊に板垣を神聖視してゐる土佐派政治家の一團の如き、最も根强くさう信じてゐた。例へば『自由黨史』の劈頭を見るが可い（第一編總說、第一章維新改革の精神）

維新の改革はたゞに元首の統治權を囘復したのみではない、同時に國民自由の恢復を意味する。國民の自覺による公議輿論の力をもつて皇室の大權を克復し、國民の自由を挽囘したもので、尊王と民權とは二致なきものであり、維新改革の精神を一歩進めれば立憲政體の確立となる。民權運動の基づくところは維新の大精神にある。

といふ意味が滔々述べてある。紫瀾もかゝる信念を懷いてゐたことは、彼の小說の次の一節を讀んでも知られやう。

我が土佐國士格以下の輩はよしや其智勇辯力間ま一器量ある者とても因襲の久しき累代封建制度の爲めに奴隷の如く壓しつけられ更に其頭を出すの機會（おり）なきを恨み居しも發丑前後の頃より或は文武修行の爲め江戶に在りて廣く他國の有志に交り或は尊王攘夷の論に耳を傾くるあり彼につけ此によりて誘ひ起されし天賦同等の感情の胸の炎（ほむら）を焦しつゝ其門閥を憎み階級を輕んずるの勢已に成れる折柄云々（一）

さうしてかゝる見解なり信念を助ける特殊事情として、當時自由民權論者の巨擘は皆維新前から國事に奔走した志士的經歷の持主だといふことがある。以上の信念が當時の人心に如何に根深く喰ひこんだものかといふことが分らう。別に吾等は、今こゝで、明治維新をかく自由民權運動と關連せしめて解するのが今日歷史的に妥當かいなかといふ如き事を問題にせずとも可い、たゞかういふ信念を、當時の自由民權論者の大半がもつてゐたといふ事實を知るだけで可いのである。

かゝる事實を根底の理由として見ると、紫瀾の幕末稗史は、格別明白な政治思想を揭げ示さずとも、そのまゝで既に一種の政治的意義をもち、從つてこれ等を一種の政治小說と認めることも可能となるであらう。さうしてこれを政治小說として見るとき、同主義の櫻田百華園乃至宮崎夢柳の政治小說に比べると、國粹派乃至歷史派ともいふべき一派を分かつかと思はれる。

以下此の三部の各々について多少語らう。

『南の海血潮の曙』は紫瀾の稗史的試作といふべく、南國野史と署名してある。土佐の勤王志士間崎哲馬、平井收次郎、武市半平太、吉村寅太郎、坂本龍馬などの事蹟を演義して土佐勤王運動の由來を稗史化したもので、篇を前後に分け相當長篇になることを期してゐたらしいが、前篇全七回中四回の終つたころ、板垣に從つて東北漫遊の行があつたので、そのまゝ中絕してしまつた。『汗血千里駒』や『南山皇旗の魁』などは皆これを續筆したものと見るべきであるから、いはゞ後編の改題したものといつても可い。但し四回とはいへ、その一回は優に普通の十回以上に相當する分量があるから四五十回分はあらう。全七回の目次を揭げて置かう。

第一回　賦二古體一書生嘲二權門一
　　發二片言一劍客服二國士一

第二回　亢龍無レ元鶩二高知城一
　　猛虎失レ脚捕二伏水驛一

第三回　奉二勅命一三藩震二覇威一
　　請二手書一兩士罹二奇禍一

第四回　英雄不レ忍レ去ニ父母國一
　　壯士爭護ニ送縉紳行一
第五回　首難兵一擧試ニ快戰一
　　絕命詞千秋傳ニ芳名一
第六回　字々涙美人悲ニ永訣一
　　句々血孝子辨ニ大義一
第七回　慷慨訴レ寃自作ニ寃鬼一
　　從容待レ死遂就ニ死地一

然し實際は第四回として第五回の分が揭げてあるので、內容としては五回分あるといつても可いかも知れない。兎もあれ間崎、平井、武市等が藩の咎を受けて國許に護送されるあたりで中絕してゐる。時々筆を轉じて紫瀾らしい時事慷慨の意を寓してゐる、例へば姉小路卿の英偉を弔しては、——

明治十四年の今日に當り廟堂大に猶ほ條約改正の擧を決行する能はず碧眼兒の跋扈跳梁依然故の如きを知らしめば其の髮竪ち眥裂るの狀果して如何ぞ云々（第四回の中）

此の小說の緒言に於いても、紫瀾は土佐勤王の大義が主として封建制度に對する反動力にある旨を力說し、次のやうに述べてゐるのは注意に値する。

西哲曰く天は人の上に人を造らず人の下に人を造らずと善哉言乎而して往昔封建制度の弊や其罪は時に在て人に在らず今や萬民同等の眞理は吾人の頭腦上に銘記するの日に當り尙ほ一種の新門閥を組織し人間最大の欲望的を壟斷せんとする者あるは何ぞ思はざるの甚しき云々。

「天下無雙俊傑 海南第一傳奇 汗血千里駒」はこの三部中完結してゐる唯一のもので、紫瀾が最も得意の文字である。これは有名な坂本龍馬の生涯を中心に、勝安房、中岡愼太郎、後藤象二郎などの事蹟を稗史化したもので、龍馬といふ主人公が定つて動かないので、首尾整然と秩序がついてゐる。紫瀾はいかにも坂本龍馬が好きであつたと見え、後年更に龍馬の正傳を書いてゐる。紫瀾が政治小説のつもりでこの小説を書いたのだといふことは、これを單行にする際の自序にかういつてゐるのでも分かる、――（原漢文）

本邦の小説家、馬琴京傳以下の著書多く坊間に行はるゝも、而かも其の實は支那傳奇を翻案するに過ぎず。所謂幟を抜き隊を成し、別に一頭地を出すもの、余未だ之を見ざるなり。降つて輓近に至つて、其の學識益々膚淺、或は梨園の脚色に擬して、兒女の好に投ず。千篇一律、愈々出でゝ愈々陳、殆んど走馬燈を觀ると一般なり。寧んぞ粹彩人を動かすこと有らんや。且つ其の書、當時の政事輿情如何に於いて、風馬牛相及ばざるもの、蓋し東洋專制の氣習の馴致する所なり。今や人智大に開け、社會一變せり、而して小説家獨り尚ほ樣に依つて胡蘆を畫き、其の舊套を墨守す。是れ實に都人士の一闕典と謂ふ可き也。余竊に此に慨すること有る、日久し云々

坂本龍馬の傳記は讀者も知つてゐる人々が多からうから、別段この小説の内容を説きはしない。たゞ此の小説の流布本たる雜賀柳香補綴と銘うつてある三冊ものは、紫瀾の原作と文章上に相異してゐるところが可成りある、だから眞に紫瀾の原作を讀みたいといふ人々は、新聞（土陽）に就くを可とする。

『南山皇旗の魁』これは全七十回あるが、この中眞に紫瀾の作と思はれるのは第十三回の（下）までゞある。これ以後は十七年五月上京後に當るので、上京當時續筆の約束はしてゐるが果してその約束を果したかどうか疑はしい。假りに續筆したとしても、二十回に及ばなかつたことは、紫瀾の後をうけてこれを完結せしめた百々（佐々木）甲象が、十數回は烏々道人（紫瀾別號）の手になつたと明言してゐるから間違ひはあるまい。この方は後に發表されたが

内容からいへば『南の海血潮の曙』に接續するものであり『汗血千里駒』の前に來べきある。元來は土佐の志士を中心に南山卽ち大和の天忠組の事蹟を稗史化せんとしたもので、吉村寅太郎を中心に、松本奎堂その他の傳記が慷慨悲壯な筆で語られてゐる。だが天忠組の一擧に至るまでの土佐の勤王運動が繰返されてゐるので、事實紫瀾が筆にした部分は、大半『南の海血潮の曙』の書き換へといつて可い。吉村の先輩たる間崎哲馬、平井收次郎、武市半平太などの傳記も蒸し返されてゐる。たゞ違ふのは吉村寅太郎の行動が詳敍されてゐるのと、松本奎堂、その他天忠組志士の事蹟が加へられたことである。往時を今と比較して感慨の意、爲政者に對する警告の言を寓することも、『南の海』に似てゐる。――

（前略）當時の所謂天誅は亦同志相忌の餘に出でたる者あらんも亦未だ知る可らざるなり嗚呼當時の慘狀の何ぞ今日魯國虛無黨の擧動に相似たるや是れ皆幕吏が戊午黨錮の獄に刀鋸鼎鑊を持つて世の志士仁人を虐げ苦しめたる反動にして其勢遂に無辜に及ぶの流弊を見るに至れるのみ後の輿論公議に悖る治者政府は少しく此に鑒る所あれ（三）

轉じて『**北越遺聞他山之石**』を見よう。

これは同じ幕末維新稗史でも、以上の三部とはその動機を多少異にしてゐる。以上の三部は「憂國殉難ノ前哲ノ行狀ヲ傳奇體ニ登錄シテ少年子弟ノ精神ヲ興奮セント」（四）欲したものであるが、これは序によつて知られる通り――彼の戊辰の役不幸にも大義名分を誤りしが爲めに名を埋め祀を絕つの鬼と化せし陸奧越路の大丈夫（ますらを）共が跡を探りて憐れ世の人の語り草にもなさばや

と思ひ立つて、一篇の稗史をものしたのである。從つてその態度は歷史小說を描くにあつて、政治思想と相涉るところがない。內容は、河井繼之助傳で、河井の出身、經營、幕末多難の際の進退、官軍對抗の意地などを小說化し、こ

れに蘭人スネルの妾との情事を記したものである。角書に「傑士の碧血・佳人の紅涙」とあるのは、それで分かる。紫瀾が上の序文に見るやうな志を起したのは、恐らく、十四年板垣に從つて東北に漫遊して種々遺蹟を見聞した時であつたらう。且つ前述の如く、この小說に政治的分子がなく、專ら歷史小說として書かれてゐるのは幾分注意に值する。それはこの後も紫瀾に小說の作はあるが、歷史小說はこれが最後で、いはゞ歷史小說家紫瀾が歷史家紫瀾に轉する過渡期の作とも見られるものだからである。

『豪賊大坪萬藏實傳』これは署名が魚服子とあるが、自筆年譜によつて紫瀾の作といふことが知られる。讃岐長尾村生れの豪賊で、高知界隈を荒し度々脫獄などをした大坪萬治（官誤記して萬藏といふ）の、賭博、奸智、エロチシズムに終始した生涯の物であるが、恐らく十六年入獄の際に實際見聞したところにもとづいてゐるのであらう。從つて當時高知人士には實錄的興味があつたものかも知れない。もとより政治小說とか歷史小說とかいふものではないが、因みに一筆記して置く。

紫瀾小說の第二類に屬する二部は、前に述べた如く、何れも西洋物を演義したものであるが、外國語の素養のなかつた紫瀾のことだから、俗にいふ邦語飜譯的演義以上に出られなかつたのはいふまでもない。

『實傳演義自由の花笠』は、フランス大革命時の女丈夫マダム・ローラン（この小說のいはゆる蘭女）の傳記の演義であるが、その據るところは、明治十五年四月刊の『佛國革命自由黨魁眞段朗蘭傳』（門田平三譯述）である（原本はジョン・アボットの『ローラン夫人傳』）。譯本も演義も熱烈な政治意識を吹きこまれてゐることは勿論である。この譯本は上中下三卷出版豫定のところ、上卷だけより出版されなかつたので、紫瀾の演義も上卷の分だけに止まつてゐる。即ち、蘭女が幼時父から反貴族思想を吹きこまれ、ルソオの思想を知つたこと、才貌双美の佳人と生長したこと、父の狂行

母の苦死、父の入獄、蘭女の生活苦、その友ソヒィの紹介によつて朗蘭と相知ること、二人の情意投合、二人の結婚、暫時の別荘生活から貧民と接觸し、益々貴族を憎む心を激し、遂に同胞のため自由の鬼とならんと決心するところまでゞ一先づ小團圓となつてゐる。全二十二齣、毎齣唐人の詩句をかりて題としてゐるが、その第五齣（白眼看他世上人）から文例を引用してみよう。

蘭女覺へず慷慨して實に百聞一見に如かず日頃父上が貴族は國の仇なりと口癖の樣にのたまひしも空ふく風に聞きなせしが今日のあたり身の上に斯る恥辱を受けたるこそかへす〴〵も遺恨なれと祖母諸共にため涙啼かじとすれど時鳥此れや蘭女が其名をば雲井にあぐる三つの色時まち得たる自由の花笠血の雨灑ぐ基なりと後にぞ思ひあはされける。

これはフランス革命に關するものだが、今一部の『驚天動地露國安那物語』はロシアの虛無黨に關する小說である。此の演義の底本となつたものが明治十五年九月刊の有名な『虛無黨退治奇談』川島忠之助譯であることは、紫瀾自身の序詞で明瞭してゐる。紫瀾は更に譯本及び演義の動機を說明してかういつてゐる。

此は所謂政論稗史の體にして卽ち露帝の暴殂前に於ける該黨（虛無黨）が鐵道爆裂の陰謀露顯に及びたる顚末を錄るし其の意匠の我が土佐人の好尙に投するものあるにより今更に之を兒女子にも讀み易すからしむる樣に略演なして自由の花笠の後繼たらしめ之を書中の美人の名に因て露國安那物語と改題す其の諷托の意味深長なるが如きは唯看官の頭腦の消受如何に準ずべきのみ

『虛無黨退治』の內容は極めて複雜なものであつて梗概を語るのも容易ではないが、極々の荒筋だけ物語らう。アルベルといふフランス青年が當時虛無黨の活動が全歐に喧傳されてゐるのに心を惹かれ、ボリスといふロシア青年に案內されてロシア見物に來る、その汽車の中で虛無黨員のアンナと知り合ふ。アンナはボリスがパリの密偵から托さ

れた祕密文書を奪ふに成功する。これは虚無黨がロシア皇帝を暗殺しようといふ陰謀を密告したものであつた。歸國して見て虚無黨の魔手の如何に恐るべきものかを見たボリスは、アルベル及び探偵ウラヂミルを助手として虚無黨陰謀の裏を搔かうとする。アルベルはアンナに戀を仕掛けてこれを利用して虚無黨に近付かうとする。アンナの方でもアルベルに靡く風を見せて政府方の計畫を嗅ぎ出さうとする。此の間駈引はいろいろあり、又虚無黨でも樣々に工夫し、暗殺、放火などの手段を假りて世間の不安を募らせようとする。虚無黨首領ボクタノウの活動は魔神の如きものがある。だがアンナの情人で有力な虚無黨の一人たるステッパンが、アンナ對アルベルの駈引に嫉妬を感じたばかりに虚無黨側の手筈が次々と行き違ひ、結局アンナを囮りにステッパンが捕はれ、ステッパンの告白でボクタノウ、ルウミンなどが捕はれ、結局皇帝暗殺のための鐵道爆破といふ大陰謀も不成功に終つてしまふ。だがアルベルは此の陰謀暴露の手傳ひをしたといふので、歸國の後、虚無黨の手に斃れる。格別立派な作品だとも思へぬが、讀んでは極めて面白い。殊に虚無黨の手段の陰密殘酷な點を容捨なく剝き出してあるあたりなど、我知らず慄然とする。場面としては、アンナを囮りにボリスの邸で捕はれたステッパンが、アンナの身を思ふて黨の祕密を告白した上隙を見てアンナの傍に駈け寄り、最後の接吻をして自殺するところが所謂やまであらう。悲壯、悽慘な氣が紙面に溢れてゐる。原譯本の文章も流暢なものだが、紫瀾の演義も巧みに出來てゐる、演義第七回の一節を文例として引かう。

此の安那が情郎たる少年の書生こそは卽ち當時露國虚無黨の首領中に其人ありと仰がれたる彼の斯哲般がことにして忍び逢ふ夜の一衾雙枕寢物語りの折々も覺えず知らず滿腔に溢るゝ議論を聞くにつけ安那も原と是れ一箇の女丈夫なり〳〵と慷慨なし今や社會の公敵たる壓制政府を打ち倒し我が同胞をば虎より猛き苛法の軛に脫せしめ其が根柢より一新して自由の空氣に呼吸する幸福世界を造らんには彼の激烈なる虚無黨の打壞主義を賴ますして更に何をか期しつべき妾も今より情郎が爲めにつくす眞心もて影となり日なたとなり數ならぬ身を擲ちすて公道正義の犠

牲となし千載ふりにし後の世までいと芳ばしき我が名をば青史につたへくれんずものをと姿に似氣なき精神も又一つには境遇に自づと薫陶せらるゝ理り實に朱にまじれば赤くなる譬にもれぬ安那が身の上云々

以上の二部は、演義として巧みな出來であり、何れも讀んで面白いものではあるが、正直にいふと、何となく無理に時尙と調子を合せようとしたところが見える、所謂板につかぬといふ感じである。それは畢竟紫瀾としては、假りものだからであらう。

『佛國革命修羅の衢』原作はヴィクトル・ユーゴーの『九十三年』で、紫瀾漁長譯演と署名してある、自由新聞に載つたものだが、これが恐らく飜つたユーゴー小說を紹介した最初であらう。原作は勿論板垣が洋行の際持來した政治小說物の一つであらう。譯は丁度原本の第一部第四編第四の終るところまで行つて、中絕してゐる。これは所謂明治初期の豪傑譯とは違つて、逐次譯を文飾演義したもので、先づは佳い譯といふべきである。紫瀾に西洋語の嗜みがなかつた以上、原譯は果して何人の手に成つたものであらうか。此の頃の自由新聞には英佛語に達した人物が多勢ゐるかその誰なるやは分からない。政治的啓蒙乃至宣傳のつもりで掲げたものであらうが、ユーゴーの人道主義はさう簡單に呑み込めず、宣傳小說としては餘り受けなかつたのではあるまいか。此の小說には手頃な譯本があるから、梗概はそれで見ていたゞくことにして、こゝには、出さない。

只見る千年の喬木晝暗く生ひ茂り梢より洩る日影さへ綠を映じて物凄く此は名に負ふ佛蘭西國革命歷史に紀念あるラザントレーの森林頃ろしも五月雨の空晴れゆき露の珠なす下蔭の涼しさ謂ん方もなく小徑を鎖す草叢に燕紫鵑紅こきまぜて今を盛りと咲き出しは萠黃の地絹に花形の縫箔したるが如くにていと美しき眺めなり斯るところにしづ〳〵と喇叭も吹かず旗を卷き共和政府の斥候隊此處に三人彼處に五人思ひ〳〵に進みつゝ前後左右に眼を配れば果せるかな向ふなる澤の邊りに今引拂ひし陣屋の跡と覺しくて或は燒き捨てし松明或は血に染みたる十字形の腕木或

は創口を繃帶せし布片など落ち散りあれども敵は何處へ立ち退きしか更に影だに見せざれば先に進みし兵卒も且つは惑ひ且つは畏れて互に顏を見合せつ其が目に觸るゝ大砲の筒口の中へも敵兵の潜み居らんも圖られずと疑心暗鬼の我と我が安き心もなかりけり云々

第三類に屬する『政治小說美人國』これは本來なら紫瀾の政治小說觀が出てから後に書かれたものだから、彼の政治小說觀について書いた後で書く方がいゝと思ふのだが、次でだからこゝで述べて置く。

此の小說は一種の女權小說である、數人の女英雄を描き、これによつて女權回復と女性による社會改良とを寫さうと試みたものである。緒言にいふ、——

昔し唐の則天武氏は駱賓王が徐敬業の爲めに草せし檄文を讀みて才ある此の如くにして用ひず反せしむるは宰相の罪なりと申せしとかや巾幗一婦人の身をもて斯る雅量を抱けること優にやさしき心とや謂はん若し則天武氏をして第十九世紀の歐洲大陸に再生せしめなば必ずや交際場裡の女王と仰がれ其名譽を宇內に轟かすなるべく此は固より稀にある例とは云へ已に一たび其社會に顯れし例の又と顯れ出でじと保證すべきの道理なし然れば何國にまれ孰れの時代にまれ則天武氏の如き女英雄の之れなからめやとの道人が平生の幻想は愈々久ふして愈々凝り遂に本編をものする緣起とはなりぬ

梗概をいへば、淸原高子といふ妙齡の女子が女性による社會改良を志し、月岡花子、松島浪江、春野翠烟などといふ同志と共に吾妻倶樂部を結び、その機關として乙女新聞といふ繪入新聞を發刊する。これは編輯、會計、賣子殘らず女子の新聞である。さうして自由結婚、妻君の位置、女子教育、家庭生活、衣食住改良等を論じて大に社會に勢力を得る。殊に女子貞操問題には凛とした主張があり、その賣子の各々に短銃を供して暴漢を防ぐ用意をさせてゐる。

間もなく賓子の一人が醉紳士の猥褻行爲を防ぐため短銃で射つたので社會の大問題となる。だがその公判の際、高子は大に女子貞操の尊貴を論じて檢事を閉口させ、その賓子に無罪の宣告をさせる。これより新聞の鋒先はいつとなく貴女社會の弊風に向ひ、保守黨反對の旗幟を明にする。保守黨は毒筆を弄して乙女新聞同人の艶聞を傳へる。それを消すために吾妻俱樂部では武藝の稽古を始める。するとこれでは女梁山泊で淑女の德を汚すといふ非難が出るので、それならといふので歌舞協會を設け、唱歌を新作し、日本固有の舞踏の改良を計る。つまり歌舞の藝術を利用して男女同等の理論を社會に注入し、これによつて男子に勝ち社會の權を握らうといふのである。この新歌舞が社會に勢を加へると、又々貴族政治の修飾物だといふ非難をうけるので、初めて定期通俗學術演說會を開いて大衆の啓蒙に當る。老巧な松島浪江の婚姻論は恐らく紫瀾の持說を示すものであらう。婚姻は女子の義務であり、婚姻の快樂は人倫の模範であり、婚姻には父母の干涉を排すべく、男子をして賤業婦と結婚せしめるのは貴女社會の恥辱である云々。さうして演說會の入場料は、貧民、勞役者、國事に斃れた人々の遺族に贈つた。

こゝまで來て、「聊か思旨もあれば」、といふので、紫瀾は「不日揭出すべき政治小說の楔子」として『美人國』を一先づ打ち切つてゐる。その思ふ旨とは何事であつたらう。兎もあれ、この「政治小說」は遂に揭出されなかつた。

『美人國』は背景を察すると現代物だが、人物や事件は凡て紫瀾の胸裏から生れたものであらう。時事的出來事を諷してゐるところも多少はあるが、殊更論じ立てる程もない。「美人國」の中心問題たる女權恢復は紫瀾の持論で、ただ口に唱へるのみでなく、家に常に數人の女學生、むしろ女志士を養ふてその實行を期してゐたといふ。明治初期の女政客として有名な影山英女の如きも、一時紫瀾の許にゐて敎へを受けたのである（五）。晩年支那革命に興味をもつに及んで、支那の女學生を家に置き、これを薫陶してゐたこともあつたといふ。

註（一）『汗血千里駒』（駸々堂版）初篇第四回

註（二） 明治二十四年刊「南海之勤王」（「南山皇旗の魁」改題）の序文

註（三） 「南山皇旗の魁」、第八回

註（四） 明治十三年七月二十六日高知新聞第四號廣告

註（五） 福田（景山）英子「妾の半生涯」第十五頁（第二 上京）

三

紫瀾の小説論と大袈裟に書き立てるほどのこともないのであるが、いはゞ小説雜感とでもいふやうな、小説に對する紫瀾の態度なり觀念なりを窺ふことの出來る材料がいさゝかある。

○老婆居士の問難に答へまつる

明治十六年十二月十二日、土陽新聞

○政治小説の効力

明治十八年五月二十八日、自由燈

○新著の評判

同 八月一日、 同

○東洋小説協會を設くるの議

同 八月六日、 同

○日本情史の改良を望む（二回）

同 八月十九、二十日 同

○小說文體一家言　　同　九月十日、　同

此のうち第二に烏々道人と署名してある外、他は皆無位眞人の別號で署名してゐる。元來が今いふやうに雜感程度のもので、確乎と組織立つた議論ではないので、その要旨を摑むこともさう明瞭には出來ないが、幾分でも系統立てゝ述べてみると、大體次のやうなものになる。

紫瀾が今日からいつて政治家であるかないかは兎に角、當時は政治家のつもり乃至政治家になるつもりで居り、從つてその思想行動が當時の政治家通有のイデオロギイに支配されてゐたことはいふまでもない。純文學乃至小說に對しては彼等は概して極めて低俗功利的な考へを持し、たゞその强盛な感化力を利用するといふ一點に於いてのみその存在を認めてゐた。紫瀾の小說に對する態度とて根本的にはその埒外に出てゐはしないこと勿論だが、たゞ紫瀾は漢學書生出身に似ず頭腦の融通がきく方で、新奇な事象に對する適應性に富んでゐたので、社會の變遷と文學現象の展開につれ、以上の如き態度を幾分かづつ改め、多少は小說を小說として認めて、これに可成り深い關心をもち始めるに至つたのである。

紫瀾が最初小說稗史に筆を執り始めたころの彼の考へが專ら功利的利用的なものであつたことは、前記土陽新聞所載の文章を讀むとよくわかる、——

居士が共政談演說以外の方便に於ては其感化の方便の中等以上に畫限せすとの辯明は敢て一場の誇言にあらす咄々居士は我が土陽新聞の下等社會を感化するが爲めに續々揭出する政論稗史の繪入和解を見すや自由の曙の新狂言を見すや自由講釋の外題自由躍の文句を聞かすや乎云々

即ち政談演說をもつて中等社會以上の感化方便とし政治、小說、演劇、講釋、歌謠をもつて中等社會以下の感化方便

とするといふのである。これは宮崎夢柳も同じことをいつてゐる。

無論この場合の感化とは自由黨思想の傳播のことで、黨のためといふのが紫瀾が小說を書き始めた第一目的であつたに違ひない。ところが十七年十月自由黨が解黨した以後、黨のためといふ紫瀾の目的が、社會の爲めといふやゝ漠然としたものにならざるを得なかつた。黨といふ明白な目的の解消と共に次第に政治小說といふ手段の方に彼の關心が移つて來同時に小說を低俗視する態度が改まつて來た、さうして種々な新刺戟がこの關心を助長させ、遂に小說改良とまで發心させた。それ等の新刺戟には、十七八年に擡頭した社會改良熱、西洋小說の消化、西洋流の文學觀の移入（つまり小說尊重主義）、これに伴なふ新小說及び新小說論の現れ、殊に春のやおぼろのそれなどを數へることが出來る。紫瀾が小說改良に志したのは、必ずしも春のやに動かされたものだとは言ひ得ぬが、春のやに最も有力な先達を認め、或る程度までこれと結んで自家の主張を實現せんとしたことは、事實であらう。

「政治小說の効力」は一種の政治小說奬勵論改良論と見ていゝ。劈頭、小說の効能を論じ、社會の眞相を知らしめるには歷史より小說の方が効があることをいひ、小說尊重論を唱へてゐる。殊に西洋では、政治小說は新聞、演說と並んで政黨宣傳の三大機關といはれ、尋常の政論より遙かに有効である。それで何れかといへば、歷史的のものより現代物の寫實的政治小說の方が効力がある。日本の文化は現代西洋文化を學んだもの故、現代西洋社會の政治小說は日本の文化を助長する。力めて現代西洋社會の政治小說を譯せよ、それは日本人の心志風俗を高尙にする。追々はこれに類する政治小說も作りたい云々。

これは西洋小說の模倣によつて側面から小說改良の意味を示したものだが、「日本情史の改良を望む」では正面から小說改良を說いたものである。紫瀾はいふ、爲永一派の人情本が出て以來その勢力が從來の稗史その他を壓し、小說卽人情本の氣味がある。人情本にも取柄はあり、背景の穿ちと描寫の文字は稱すべきだが、たゞその構想と性格が今

日に適しない。人情本の典型的性格は丹次郎である。丹次郎は武家の子で妓家に生長し、佳人に立過されるといふ封建的情氏社會の理想的人物だが、此の活潑な日新社會の理想には適しない、無力無能、生きて社會的に何等貢獻するところのない丹次郎式人物は、たゞいやしむべきを覺える。新小説の出現にまづ此の點の改良から着手しなければならぬ。西洋にも支那にも丹次郎式主人公の小説はあるが、日本のそれ程愚劣なものはない、これは畢竟作者の理想が低いからである。若し夫れ丹次郎式以外の主人公は無いかと求めると、人情本ならぬ稗史小説の主人公は大概破落戸や豪賊の類である。器量骨柄、物の役に立つにせよ、封建的時代遲れの點では丹次郎と同じことである。新小説にはかゝる封建時代的性格の型を打破して新社會に相應はしい高尙な主人公を寫さなければならぬ云々。かくて紫瀾は自身の注文を出していふ、從來の一夫數婦を常態とするものでなく一夫一婦を理想とすること、女主人公がたゞ富貴の人を夫と仰ぎこれに依賴して生活する如きを避け、歐米の貴女の如く、夫と賴む人が富貴を占めるまで好んで艱難を共にする女主人公を描くこと、篇中の哀別離苦の原因が單なる私的事件ではなく社會國家の一治一亂に關するやうにすること云々。最後に紫瀾は、自分もこの理想を實際に描いてみたいことは山々だが、先づ若い人々に讓らうといつてゐる。

以上によつて紫瀾の小説改良論の如何なるものかゞ大體知られるわけだが、これは如何にも紫瀾らしい小説改良論である。何故なれば、以上の所論を詮じつめると、現代物の新政治小説を作れといふ結論になるからである。現代社會に適切な人物と背景をもち現代社會に適切な理想をこめた西洋風の政治小説、これがつまるところ紫瀾の暗示する理想の改良小説ではないか。小説そのものを見る態度は前後に於いて多少相違を示してゐる、前には半無理解的に低俗視したのであるが、後にはやゝ理解的をもつて重視してゐる、この進歩は皮相的にせよ賞讚すべきものであるが、然し根本の小説に對する理想に於いては、依然功利主義な政治的イデオロギイを多分に持つてゐる。だから小説に理

解をもつた後に於いても、やゝもすると小說の價値は社會の需要に對する適不適にあるなどと放言して(一)平然としてゐる。春のやの所論にあくまで敬意を表しつゝも、その本音を抑へきれなかつた趣きが見える。だがたゞその功利主義が、以前に比して、廣汎な社會的な性質を帶びてゐる點だけは認めなければならぬ。

『政治小說美人國』は、當然以上の小說論の結實たるべきであり、又幾分かそれを實現した傾きは見えるが、途中で端折られたので、持論を十分に具現してゐはしない。且つこの一作に止まつたのは遺憾であると思ふ。

紫瀾は、尙ほ小說改良の具體策として次の三事を論じてゐる。

一　批評の奬勵

二　小說協會

三　新文體の創定

一は、當時『書生氣質』が珍しく讀書界のセンセーションを起した時であつたので、それに因んで西洋の實例を引いて批評を奬勵したもの。二はこの頃としては確に一種の奇想といへる。即ち維新以來政府の力入れで諸種の學藝美術が進化したが、小說だけは進化が遲い。遲い原因は種々あるが、それはそれとして、遲れた進化を推進めるには史學協會地學協會の例に倣ひ、東洋小說協會を設け、作者作物の練磨を計るより仕方がない。勿論最初は茶話會風のもので宜しい。戲作者、狂言作者、新聞記者、小說好の漢學先生、大學出の文學士などが此の主旨の下に一堂に會して語り合つたなら面白い結果を得るに違ひない云々。

三は、當時の新聞續物の文體に漢文調、和文調、談話筆記調(卽ち會話入りのもの)の三種あるをいひ、維新後の世態人情を寫して新小說體をつくるには、東京語中心の談話筆記體を用ひるが可いといふ結論である。但しそれには冒頭や地の文では和文體漢文體を併用せよといふ條件がついてゐる。一個の技術的革命論としては到底粗大不徹底な論

ではあるが、言文一致體創定前の準備期間では、これを最新文章體と考へたのも敢て笑ふべきではない。歴史的にいへば、此の文體が一轉して言文一致となるのだからである（事實彼自身はかういふ「あります調」の言文一致で自由燈に澤山論文を書いてゐる）。

註(一)「小說新文體一家言」末段

四

紫瀾及び彼の小說について略ぼ語るべきを語り終つたやうに思ふが、こゝに見逃すことが出來ないのは、紫瀾の史傳文學家としての一面である。紫瀾について今度さう度々書かれる機會もあるまいから、この方面に於ける彼の業績を簡單に一瞥して置かう。

紫瀾の史癖は彼の幼少の折からといつて可い。資治通鑑通讀などの逸話もこれを證據立てゝゐる。彼の維新小說の類も、小說とはいへ史傳的色彩が極めて强いことは、一讀した人のすぐ氣づくところである。私は『他山之石』(十九年)の條で、この作が歴史小說家としての彼と歴史家としての彼との過渡期を語るものだ語つたが、その通り、上の作以後彼の歴史小說は本格の史傳文學となつて來る。さうしてその最初に公けになつたものは、『萬死一生江戸城引渡始末』であらう。これはいふまでもなく勝安房の事蹟で、明治二十一年二月仙臺で起草し、翌二十二年四月東西新聞に連載したものである(二十三年五月刊)。これの緒言で紫瀾は尋常歴史小說の類には非ずなどと斷はつてはゐるが、然しその筆にはまだ幾分歴史小說的臭味がついてゐる。だが翌々二十三年四月の『林有造舊夢談』から、二十五年十一月、自由に連載した『天海僧正黑衣宰相』、十二月同紙に連載した『本多正信鬼哭篇』に至ると純然たる史傳文學である。それ以後の同種の著作を擧げると、――

明治三十年　「後藤象二郎傳」（暘谷實錄）三十三年脫稿
同　三十一年　「陸奥宗光」（六月單行）
同　年　「岩崎彌太郎傳」
同　三十二年　「板垣退助傳」（三十四年脫稿）
同　三十三年　「坂本龍馬」（三月單行）
同　三十四年　「鯨海醉侯」（三十五年二月單行）

此等はその主要なものであるが、かゝる一切を集大成したものが、大正元年十一月刊の『維新土佐勤王史』の巨册であると見ることが出來やう。

紫瀾の史傳物の特色は、概していふと、博聞强記、叙述が甚だ詳密であること、事實を直書して漫に私の回護を加へぬこと、記事の案配がよく、文章が暢達であることなどである。直筆の例をいふと、後藤象二郎の傳は正式の委托を受けて草したものだが、事實直書が禍ひをなしてそのまゝでは出版が出來ず、遂に大町桂月の改訂を經て公けにされた如きである。性格論人物論に直觀的鋭さがある。たゞ彼の根本史觀が舊い型の漠然とした東洋的國粹的なものであることは、主として和漢史書で頭腦の固まつてゐる彼としては、已むを得ぬことであつたらう。

五

紫瀾は性酒を好み、磊落豁達、負け嫌ひの一面男性的淡泊さも多分に持つてゐた。一種の英雄崇拜心から自由民權運動に身を投じたが、彼自身として何程の明瞭な政見があつたか、疑ふべきであらう。たゞ然し終始變らず女權恢復論を持してゐた點は、夢柳などに比して幾分取柄があるといへる。南國人らしい熱血もあり、熱するだけ冷め易いと

いふ弊もあり、從つて時々好新的好奇的な癖も見える。博覧强記といふ性質で、而かも頭腦が舊い割合に敏速に動いたので、耳學問が甚く發達してゐた。外國語の知識など全くなかつたのに、社會學概論や心理學の講義をしたり、地理學的知識で洋行者と間違はれたりしたといふのは、皆この耳學問の所爲である。だが外國語の素養のなかつたことが、彼の生涯に相當大きな影響を與へてゐはしないであらうか。

紫瀾の漢詩は有名なものであるが、俗曲も上手で、自由民權の意を織り込んだものが、よく當時の志士達に愛唱された。

彼は板垣と共に政治運動に投じ板垣と共に足を洗つた。三十三年憲政黨が板垣を引退せしめて伊藤博文の傘下に奔り立憲政友會と變形するや、紫瀾は板垣を棄てた人々に多大の憤りを感じた。その上、伊藤は保安條例發布當時の首相として、紫瀾が最も憎んだ人物であつた。それやこれやで政治界を見限つたものと見える。だが日露戰爭當時から支那の革命運動に多大の關心をもち、好んで革命志士と交り、親切に世話した。汪兆銘その他も、一時紫瀾の家に寓して日本語を學んだことがあるといふ。

紫瀾の政治的生涯はその材能の點からいつて、不遇の一生であつたといふべきであらう。さうしてその不遇を生んだ第一の原因は、彼が先輩の多い土佐に生れた爲めであつた。他の土地に生れたなら或は實際政治界で相當名を成し得たかも知れないが、板垣を始め、後藤、中島、片岡、谷、島本、その他の大先輩が二重にも三重にも頭を抑へてゐる土佐にあつては、紫瀾の如き、「文章の書ける一若輩」といふより以上には遇されなかつたのである。

【附】高瀬眞卿について

一

紫瀾の研究に附するに、今高瀬眞卿をもつてするのであるが、紫瀾と眞卿との關係は、龍溪に於ける菊亭香水の如く、何等か個人的因緣があるといふのではない、學問的に相承の親があるといふのでもない、又政治的思想に本末的流脈を絡いでゐるのでもないが、たゞ一つその著作家的態度に甚だ相類した一面をもつてゐる。それは、その歴史癖である。紫瀾は好んで幕末維新の歴史を扱ひ、これを稗史小說化した、眞卿も好んで幕末維新の歴史を扱ひ、これを稗史小說化した。その點で實に揆を一にしてゐる。且つその扱つた歴史も、共に自家の鄕國を中心にし、紫瀾が主として土佐及び土佐人の勤王運動を描いたに對し、眞卿は、水戸及び水戸人の勤王運動を描いた、この點も亦、實によく似てゐる。勿論二家とも、かゝる一面だけよりもたぬ著作家ではないが、此の一面に於て、全く兄弟の如く似てゐる。それで、私は、眞卿を以て獨立の政治小說家とするには多少躊躇するに係らず、こゝに取り上げて、紫瀾研究に一篇の研究を附載することにした所以である。

且つや眞卿は明治初期文學界に於いて可成り活動を示した著作家であるが、その著述の多くは場當りの所謂雜著雜記の類であるために、如何なる文學史にも彼の名をさへ錄される幸運に惠まれてゐない。これ又、私が憤を發して、此の書の幾頁を高瀬眞卿傳に割くことにした一因でもある。

高瀨眞卿の傳記の比較的詳備したものには、『羽皐半面錄』といふのがある。これは眞卿が主宰してゐた雜誌「刀劍と歷史」に連載した自傳であるが、明治二十五年までゞ止まつてゐる。いはゞ前半生だけの記錄であるが、眞卿が明治文學と多少接觸してゐたのは、明治十八九年乃至二十年位までのことであるから、先づ此の『半面錄』だけで、私にとつては十分な資料となる。だから今これを主として、眞卿の傳記を一亙り述べて置かう。因みに、眞卿が此の書で豫告してゐる『後半面錄』は遂に成らずして止んだものらしい。

高瀨眞卿、幼名は政吉、後に眞之助、諱を茂顯と改めた。維新後一時茂顯又は眞之助を通稱としてゐた。眞卿は漢學者流の所謂字(アザナ)であらう。鐵窓、往生庵、春雨、羽皐等號し、別に菊亭靜とも名乘つてゐる。後半生は、此の眞卿を通稱としてゐたらしい。安政二年、水戶藩士高瀨某の子として、水戶下市に生れたといふ。此の高瀨家は代々の士族ではなく穀物商であつたが、父の代に士籍に列せられるに至つたものであると聞く。眞卿は四五歲頃から歷史の話を聞くのが好きであつた。その頃『英雄百人一首』といふ武者繪のある百人一首の繪草紙を、祖母や叔母に讀んで貰つて、三日ばかりで百首をあらまし暗記したことがあつたといふ。「歷史と云ふ事にいくらか趣味を覺えたのは、全く此百人一首の感化であらうと思ふ」と眞卿自身語つてゐる。七歲から九歲まで小井戶甚之進の寺小屋に通つたが、眞卿は餘り敏捷でもなく才氣にも富んでゐなかつたとかで、子供同志の仲間では馬鹿にされることが多かつた、それで大抵は獨りで草双紙や戰爭のことを書いた本を見て樂しんでゐた。こゝでは、三年間に、三字經、大學、中庸、孝經の素讀をした。それから十歲から十三歲まで上市の川崎巖雄の塾に通つて論語孟子を讀んだ。十三歲の暮に更に庄司春村の塾に轉じ、こゝで孟子一部を卒業したが、こゝでは學問の外に、先生の感化で刀劍に關する趣味を覺えたといふ。

庄司塾を去つて後一年間は、何の故か太田から宇都宮へ丁稚奉公に出され、具さに辛苦を嘗めた。此の時は丁度明治元年であり、恐らくこれが封建士族の沒落現象の一つの現れではなかつたらうか。明治二年十五歲の時には、再び水戶へ歸つて、前の小井戶氏の塾に通つたが、この時は間もなく塾頭めいた位地についた。だが自分の修養のために、別に改めて庄司先生の塾へも通ひ、又戶村義暢(よしのぶ)について國學和歌を學んだ。かうして十五歲から十七歲(明治四年)に及んだ。

眞卿が志を立てたのは「日新眞事誌」を讀んでからであるといふ(「眞事誌」は明治五年三月創刊、眞卿卽ち眞之助十八歲の時である。)——

(前略) 三丁目と云處に郵便局長某と云人が居た、其處へいつて話を聞くと東京の事も支那、西洋の事も、能く分るのである、どうして居ながら、斯う世の中の事を知つて居るので有らう、不思議の事と思つて、段々聞いて見ると『日新眞事誌』と云新聞を取つて見て居たのであつた、(中略)ソコで吾等も『日新眞事誌』購讀者となる事を賴んで、一枚づつ郵送を受た。これを讀むにつけて、段々吾等の頭が變つて來た、今まで少しも知らなかつた世界の近事(できごと)も知る樣になり、東京の模樣も手にとる樣に分る、國々から出て來て、一足飛に官員に成た書生の話もあり、橫濱で一攫千金の富を得た話しなぞを見るにつけて、ア、斯な土地に居ては詰らないと云考へが浮んで來た云々

そこで考へたのは、東京に出るには、どれ位學問があればよいので有るかといふことであつたが、彼はそれを試驗する爲めに、縣廳の役人と交際をして學力を試驗してみた。ところが、その頃の縣廳の役人など殆んど無學な人が多くさもなくても日本外史位の學者ばかりであつた。「そこで吾とても彼の人々に劣りはしない、東京へ出て何かに有ついて志を立たいものだと思つた」云々。

『半面錄』では、事後直に密に上京したやうになつてゐるが、それは實は明治六年の夏で、此の時眞卿は密に家出

して上京し知己の家に四十日計りも泊つて東京見物をして歸つた。そこで愈々國を正式に出てしまふ決心をつけて、密々計畫をした。ところが縣の屬官岡某が奈良縣へ轉任するといふ、此の人は高瀨氏も知合であつたので、眞卿はこれ幸ひと奈良まで同行を頼み、奈良から全國を漫遊することにした。さうして岡氏と打合せて國を出たのが、明治七年七月であつたといふ。

二人は横濱から汽船で大阪へ行き大阪から奈良に赴いた。眞卿は一月ばかり奈良見物をして、八月初め伊勢參宮に出かけた。その途中、大阪の軍談師石川一口の弟子と道連れになり、軍談師の前を勸めたといふ面白い話がある。伊勢から江州へ出で、京都に入つて見物し、伏見宇治から大阪へ下り、更に兵庫に楠公社を拜し、又大阪へ引返し、漸くのことで東京まで歸つた、それが同じ年十月頃であつたといふ。それから水戸へ歸つて、暫時家にゐたが、その間中何とか東京へ出て都下の狀況を見たり學問をしたいといふ考へがぬけない。そこで今度は傳手を求めて東京の永田組といふのゝ事務員になつて喜び勇んで出京した。これは翌明治八年の六月頃であつた。だが折角の出京奉公も、不圖した濡衣で一月ばかりで駄目になつたので、今度は奮然起つて、斷然水戸へは歸らずに日本全國の行脚旅行に出かけることにした。

眞卿は東京を發つて先づ府中、八王子から甲州に入つた、明治八年七月中旬のことである。ところが甲府の旅宿で病氣をした爲め、旅費が失くなつて進退に窮し、丁度知人が山梨縣廳の役人をしてゐたので、その人の世話で、縣廳警察課の履吏となつた。こゝで眞卿は大分面白い經驗を積んだらしい。罪人の捕縛に向つたり、城内番人の風紀を改めたり、胡麻畑で博徒と大格鬪をしたり、斬罪の檢使となつたり、いろいろな面白い事が『半面錄』に見えてゐる。俗吏氣質に染まぬ眞卿は、始終上司と衝突しがちであつたが、それでも二年足らず續けた。然し結局役人生活が厭に

なつて、元の日本漫遊の素志を遂げることにし、明治九年十月の頃辭職した。眞卿が在官中、甲府に「甲府日々新聞」(明治八年創刊か)といふのがあり、水戸人渡井量藏が編輯主任であつたので、これに數度投書した。

何れも政治論である、青書生が天下の大政を論じて、縣の廢合に就ての利害だの、民權の振はぬ原因だのを堂々とやるのだから、警察課の同僚もはじめて高瀬と云男は高尚な理屈を言ふ奴だといふ事を知つて、其より多少推重する様な傾きになつた云々

これが眞卿が後日新聞記者になる因縁となつた。

眞卿は漫遊の始め富士川下りで難船して危く生命拾ひをした。それから東海道を岩淵から名古屋に出て、こゝに二三ヶ月足を止めた。それは奈良縣にゐた岡氏が、此の地に轉任してゐた爲めもあつた。こゝで再び官途につかうとしたが巧く行かず、同行者があつたので、東京に上ることになつた。處が同行者の都合で再び甲府入りをしたところ、前の渡井量藏から、官界藩閥の現狀を說かれ、水戸出身では官吏として立身が出來ぬ、且つ君はそんな人に使はれて甘んじてゐる人間でない、先づ官途は斷念して新聞記者になれと言はれて、それも成る程と、そのまゝ甲府に腰を落つけて、日々新聞の編輯長となつた。日々新聞の持主內藤は有名な書肆であつたから、眞卿は、編輯の餘暇に大に勉强して讀書したものである。(『野史』、『鹽尻』、『綱鑑易知錄』、『御實記』等)。

十年一月、眞卿、新聞條例に觸れて禁獄五十日、それは大久保內務卿と藤村山梨縣令に對する誹謗非議の件であつた。大久保に對するものは、韓退之に擬した「上大久保內務卿書」といふので、その論旨は「卿が維新の際、天下有志の士と交つて幕府の役人に反抗した時に、幕吏は壓制であると罵つたであらう、然るに自ら地位を得れば、幕吏以上の壓制をして民權を抑制するのはどう云譯か、位地によつて賢愚を異にし、善惡を顚倒するのか」と言つた様な事を書いたものであつた。申渡しは五十日であつたが、三日の入獄で自宅禁錮となつたので、自宅で悠々酒を飲み、

友人と談論し、且つ著述をした。それは神風連と萩の亂に關する速報記錄めいたものであつた。

十年夏五月、甲府日々を辭して、渡井氏と共同で同じ甲府に觀風新聞といふものを創刊した。ところが、創刊後間もなく、兩親が水戸を引拂つて東京住居をしたといふ報知があつたので、夏の中旬に、遂に甲府を辭し上京した。父母の膝にあること長からず、同じ年又水戸に赴いて茨城新聞に助筆したが餘り面白くないので年の暮に歸京した。その翌十一年一月兼て話のあつた函館新聞に入るつもりで行つてみたが、これも大して思はしくないので直に歸つた。然るに前々から彼に話をかけてゐた仙臺新聞から又々話があり、彼も遂にこれに應じて、明治十一年三月いよいよ仙臺に下つた。下仙早々眞卿は仙臺新聞改め仙臺日々新聞の大改革をやり、これを眞に有力な地方大新聞たらしめた、その改革顚末は『半面錄』の中「仙臺新聞の改革」に詳しい。伊東洋次郎の『日本新聞歷史』に、此の年五月、縣令松平正直の職事を譏毀したといふので、禁獄一ヶ月に處された旨の記事があるが、縣令は松平ではなくて、宮城時亮といふ人である。宮城の後に松平が來たのである。此の時は縣の大書記官成川尙義の好意で大いに優待され、獄中で「鐵窓小言」といふ著述をした。鐵窓の號は此の時から時々用ゐたものといふ。甲府時代の彼の下宿は書生の梁山泊であつたが、仙臺時代はそれに輪をかけた政治的梁山泊であり、自由主義言論の搖籃でもあつた。『半面錄』にかうある。

當時民權論は土佐の一角より起つて、漸次關西地方を風靡し、關東奥羽にもポツ〱民權論者あり、政論家を以て自ら任ずる程のものはまだ一人もなけれど、政治家の鷄卵(たまご)とも言ふべき者はいくらもある、また代言人敎員等には演說と云ふものをして見たく思ふ者もあり、此等の人々は皆なわが梁山泊を訪ねて相談に及ぶ事なり、酒田、青森會津邊の有志者、遙々と尋ね來るもあり、近年宮城縣會議長となつた田代進四郎、代議士に度々なつた首藤陸三、今も代議士たる村松龜一郎など云ふ人々も、わが梁山泊を訪ねて演說會を起す相談をなし、仙臺の人若生精一郎を說いてこれをも仲間に入れ、岡山の人淺尾哲次それから中學校師範學校等の敎員を勸誘して出席させるなど、宮城

に於ける政談演説、學術演説など云ふものは、總て此梁山泊が產出したものと言ふも可なり、暗々裡に多少社會に貢獻したる處もあるべし云々

此の年眞卿は縣令松平正直の囑任で、初縣會に書記をつとめた。

明治十二年八月仙臺日々新聞と離れ、若生精一郎と「宮城日報」發行。

吾等の名は奥羽二州へいくらか廣まつて居る仙臺で新聞を讀む程の者は皆知つて居たから、吾等が主筆で宮城日報が出たと聞いて随分相應に賣れた、此頃は福島縣の河野廣中氏、青森（實は盛岡）の鈴木舍定、酒田の森藤右衛門などを仙臺へ會し、一の政社を建る事にした、田代進四郎、村松龜一郎、草刈親明の諸氏も從來しば〳〵政談演說を開いて、頻りに人心を鼓舞して居て、來年は東北七州の大連合會を開かうと云ふ計畫を立て宮城日報を其機關としたから、賣口は次第に弘まつて來る。

だが經營方の若生氏の優柔な態度に業を沸し、十三年春四月、遂に獨力で東北新報といふ雜誌を發行した。その計畫に曰く、——

一　毎月四回發行の雜誌とし、名を東北新報と云ふ、一冊代價金四錢

一　第一に過激な政治論を掲げ、次に判事、檢事、知事、書記官、郡區長の人物評を掲ぐ。

一　次に狂畫（ポンチ）を加へて政府側の役人の内幕を穿つこと、次に軍談、また小說、詩歌。

一　次に花柳社會の事情、藝妓の藝評、次に雜報。

これは、案の定、發刊早々大に賣れた。縣廳でも東北新報の筆鋒と民權論に閉口して、遂に高瀬を警部にでもして新聞をやめさせたらといふ案があつたが、これは眞卿の辭退で實現されず、印刷御用で僅に筆鋒を緩和して貰つた。

眞卿は社運の隆盛に任せ、十四年七月更に東北毎日新聞を發刊し、山川善太郎、中田豪晴、筏島吉太郎等の豪傑を

編輯者にして花々しく自由民權のために奮鬪したが、この方は、敵手たる陸羽日々（舊仙臺日々の改題）の資本力に壓倒されて流石に延ることが出來ず、遂に十五年夏休刊と決した。然るに今度は東北新報社そのものまで危くなつて來たので、眞卿は詭計を用ゐて見事敵手にすつぱりと賣りつけ、同年十一月東京へ引上げた。

二

こゝでは眞卿と福島事件の關係を「半面錄」から聞くことにする。曰く、——

吾等が仙臺を出て間もなく、所謂福島事件なる者は起りしなり、河野廣中、花香恭次郞、苅宿仲衞等の諸氏を初め捕縛せられた者十數人あり、仙臺にても松村龜一郞初め數名入獄となる、國事犯の嫌疑にて最も嚴密なる糺問を受けしと聞く、吾等も此人々とは素より同志なり、奧州七州の聯合を謀るに就ては及ばずながら、參謀を以て自ら任じ、機密に立入つて計畫したる事故河野氏以下の入獄を聞いては心中甚だ安からず、吾等も必ず免れざるべしと內內覺悟して居たれど、其年は何等の沙汰もなし、翌年の春なりしと覺ゆ、一日內務省に至りて知人に面會して、やがて暇を告げて樓上の廊下を通りたるに、後ろより低聲にて吾名を呼ぶ者がある、振向いて見れば、警保局の屬官小笠原誠と云ふ人である、この人は松平宮城縣知事の實弟なれど、小笠原家の養子となり、昨年迄宮城縣にて五等屬を奉職し、一等昇進して警保局へ轉じたのである、仙臺にて親しく交際した人なり、小笠原は何とも言はずに、吾等が手を執つて廊下の隅、人の居らぬ處へ連れ行き、君を捕縛する事に成つて居る早く何處へか避け給へウカウカと斯う云ふ處へ來ては危險なり早く逃げたまへと云ふ、吾等も驚いた、縛られては耐らんと思ひたる故、早々內務省を出て、本鄕弓町の家へ歸れば、今朝吾等が家を出ると間もなく、刑事が二人來て御主人は在宅ですかと聞き今日は內務省へ行くと申して出ましたと言つたら、お歸宅まで御待申ませうと玄關へ上り込んで今迄坐つて居て、

また後刻上りますと言ひ置いて歸つたと言ふ、さては小笠原が言つた通りなり、併しながら今入獄すれば、兩親に心配を懸ける事になる、兎も角も當分避けて、また分別しようと、千葉縣に用事があるから四五日旅行して來ると言ひ置き、直ぐ家を出た、水戸を志して赴く途中、土浦に遊び、石岡に松崎氏を尋ねてこゝに二泊して刀劍鑑定の話を聞き、水戸に赴き十日許りも遊むだ、其頃は朝倉、高橋、柏など云ふ鑑定家も在り、大火災の前であつたから刀劍も多少あり、書畫なども蘆澤、後藤兩氏の心配で隨分見る事が出來た、太田の西山に義公の遺跡を尋ね、大洗の海水浴に鬱悶を散じ、彼是と日を送つて翌月歸京した、家に歸つて聞いて見ると其後は刑事も來ないと云ふ、少し安心はしたものゝ何時縛られるか其も測り難し、熟考ふるに、福島の事件と云ふものは河野氏等が政府に反對した結果過激な擧動をなした迄の事で、政府を轉覆しようと云ふ程の計畫はない、然るを三島通庸（當時福島縣令栃木縣令兼なり）氏が、民權家撲滅の手段として、先づ河野氏を縛し、强て國事犯と云ふ名を付けた迄の事で、今度の大獄は三島氏の方寸より起きた事であるから、三島氏に逢つて自分の所見を述べて見ようと思つた、是は少々危險な仕事で、三島氏の許で直ぐ捕縛されるかも知れぬ、併し彼も薩摩の豪傑を以つて自ら任じて居る男なれば卑怯の振舞は致すまいと、其より三島の上京するのを待つて居る中に、數寄屋橋で怡土（キト）信吉と云ふ者に逢つた、この男は筑前の人で、仙臺新聞の主筆となつて明治九年頃より仙臺に居た。吾等も一年許り、同社に勤めて親しく交つた間柄である、其後彼は三島縣令へ取入つて遂に屬官となり、今度お供をして上京したのである、吾等は此人に逢つたのを此上もない幸ひと思つて、直ぐ近所の小亭へ伴ひ、一酌催し、吾等は三島氏に睨視れて居て甚だ危險である、今の姿では何時縛られるか知れぬ身なれば何事も手に着かぬと云つた處、怡土が然うであらう君の事は花香恭次郎が陳述した處から嫌疑が掛つた樣に聞いたが、實は三島君も君の事は一昨年來よく聞いて居て、吾々にも時々話があつた、高瀬と云ふ奴は筆先と口先で良民を煽動する實に宜くない奴だ、水戸は勤王の國であるに、彼の樣な不埒な男が出るとは

不思議な事だと言はれたと話した、ソコで吾等は怡土に向つて、虎穴に入らざればと云ふ諺もある、吾等は三島君の旅館へいつて面會を求め、なぜ私を縛るのですか私は政府に對して謀反を起した覺えはない、縛る前に一つ御尋問を願ひたいとやる積りだと言つたら怡土が、然う議論で持込んではいけない、其事なら僕から一つ甘く申入れて見よう、三島君が逢ふと言つたら、直ぐ逢せるから言葉を丁寧にして、民權臭い事は一切言はぬがよい、然うすれば君は或は無事に濟むかも知れぬと言ふ、これは萬事此男に頼むより外に手段なしと思つたから、何分宜敷頼むと諸事打合せて其より同行して三島縣令の家を訪うた、怡土が先づ入つて凡そ一時間も經つて出て來た、首尾はどうだ縛るとは言はぬかと聞いたら、さう云ふ事は言はぬ、併し高瀬は方今何をして居ると云ふから、唯だ學問をして居て世間の事には頓着せぬと申して居りますと言つたらイヤ／＼彼の男は唯は居られぬ性質だ、學問して居るは當分の事だらう、兎も角も逢つて見よう連れて來いと言はるゝ、就ては先刻も言つた通り、成るべく穏便にしたまへ議論などを仕掛られては僕が迷惑すると云ふから、大丈夫心配したまふなと、笑ひながら打連れて奥へ通つた、三島氏は定めて苦蟲を喰潰した樣な顔をして居るかと思へば、至つて寛厚な體である、君が高瀬君か大分奥州では暴れたのと一本切込んで來た、ハイ彼れもパンの爲ですから致方が有ませんと輕く受流した、それから種々な雜話になつて三島君が、君は是からまた新聞社へでも這入る積りかと聞くから、私は政治上の事を斷念致しました故、新聞記者も止める積りで有ます、私は先年新聞條例と讒謗律に觸れて二度禁獄に處せられ、獄内の事も少々は存じて居りますが、日本の監獄は甚だ野蠻で、未だ幕府時代の陋習が殘つて居りますから、之を改良するのは目下の急務で有らうと思ひます、また我國の犯罪者と云ものゝ數を調べて見まするに、去十三年には已決囚三萬千九百三十八人が歳末の現在數で有ましたが十四年には四千二百人の増加を見ました、昨十五年は五萬〇二百三人に達して居ます、從來の比例で將來を推しますと來年は六萬近い罪囚になりませう、歐米諸國では年々罪囚が減じて行く、日本

は反對に殖えて參る、世界中で最も罪人の多いのは英國で人口千人に對しては七人一分に當りますが、日本は今日已に七人六分五に當つて居ります、日本は昔君子國などゝ言はれたさうであるが、今日は罪人國で罪人の多いのが世界一である、私はかく殖えて行く犯罪者を減らすには、如何したら宜しからうかと云事を先達つて以來研究致して居ります、と話たら、三島君殊の外歡んで、君は實に感心だ、愛國の士は斯くありたい事である、其取調上に就ては相當の便宜を與へてもよいから、何事に據らず怡土へ相談し給へと云様な事で、初對面からスッカリ懇意になつて仕舞つた、これで最早縛られる氣遣はないと思つたから、宜加減に話して歸つた、この罪囚減少策は吾等の本心より出た意見ではない、當座の出鱈目であつたが、三島君は之を眞に受て仕舞つて、其後も度々聞かれた、實は此問題を取調た事はない、監獄局の屬官に聞いた話を受賣した迄であるから、深く聞かれては困るのである、然るに此の法螺話が遂に事實に成つて、獄事新報を發行し、また在監者の教科書を著作して出版するに至つたのは、寔に意外の結果と言はねばならぬ、其事は次回にお話を致す事にする、さて三島君には其後二三度逢た迄で出入はしなかつた、大浦氏を以て役人にならぬかと勸告されたのも此時である。

三

眞卿の自敍傳『羽皐半面錄』は福島事件以後の分は後記となつてゐる。その後記の目次は○福島事件との關係○內職の著述○監獄の教科書○相馬家の事件○山岡鐵舟の扱ひ○感化事業の創業○感化事業の產聲といふのであるが、その一は今掲げたもの、二は後に必要があるから除けるとして、三は、三島に話したことが、遂に嘘から出た誠となり十七年の夏頃在監人教科書として『感化修身談』を著した顚末、四と五は、これも十七年春、友人の依賴で例の相馬事件の錦織剛淸に手を借し、相馬家に打ち入つて子爵を盜み出さうとして同志を集めたが、山岡鐵舟に止められて中

止した話で仲々面白い。

明治十七年五月、眞卿は『感化修身談』を著したのが緣で監獄教誨師のやうに巡回講演を始めた。これが又、緣で此の年十一月感化心學會を起し、又此の年十二月頃感化協會といふものを設立して、同志と共に府下の各地で道話會を催した、かういふ試みが根本となつて、明治十八年十月、遂に豫備感化院といふものを設立した、これが日本で感化院の出來た始めである、場所は池ノ端兩門町稱仰院といふ寺であつた。明治二十一年駒込區曙町に院を新築した、廿六年には更に澁谷の御料地九千餘坪の無料拜借を許可されて、同年から翌二十七年にかけて院を建築した。今日の東京感化院が卽ちこれである。

眞卿はこれから四十五年まで感化院に盡力した。四十五年感化院の事業が日蓮宗の手に委托されるに及んで始めて悠遊自適し、好きな歷史趣味と刀劍趣味を滿足させて、或は新聞に刀劍談を發表したり「刀劍と歷史」といふ雜誌を發行したり、刀劍保存會を設立したりしたが、大正十三年十一月十七日、年七十で歿した。

有體にいふと、眞卿が多少とも我等明治文學硏究者の興味をひくのは、前にもいつたが明治十七八年頃までのことで、明治十八年感化事業に身を投じて以後の眞卿は殆んど別世界に入つたものと見てよく、從つてその以後の經歷もさう詳く尋ねるにも及ばぬので、大に簡略にした。その點は諒察を乞ひたい。

四

眞卿が自由民權を高唱して政治運動を煽つたのは、在仙臺の五年間、それも明治十三年から十五間が特に猛烈であつた。だから三島通庸もあゝいふ言を出したものである（福島事件の項參照）。ところで『半面錄』だけではさういふ政治活動や政治意見が一寸十分に分からぬ憾みがあるので、今東北新報によつて少々補足を試みて置かう。

眞卿の意見は、政治思想として何れだけの根抵素養をもつものであるか、恐らく漠然たる自由民權說といふ以外たしたことはなかつたであらう。眞卿は惡くいへば一種の叛骨があり、よくいへば惡戲氣分たつぷりな性格につむじ曲りを加味したもので、その自由民權贊成も、多少その性格から出てゐると見て可い。從つて官憲が彈壓的態度に出れば出る程反抗する、惡戲をする、人が怒れば面白くて堪らないといふ風である。これには取締る方でも手を燒いたことゝ思ふ。

眞卿からいはせると、自由民權の實現は憲法と國會とであり、この爲めには、地方感情を超越した合同運動の力が必要であるとなした。そこで彼は、明治十二年仙臺日々新聞の頃から既に東北有志の連合會を唱導し、明治十三年宮城新聞時代に至つて二回程これを開いたといふ。これは眞卿の肝煎で、兎もかく東北七州が政治運動上一致提携するに至つたことは、民間運動史からいへば一大功臣であり、當局役人からいへば、全く眼の上の瘤的煽動家と思はれたことであらう。從つて松平縣令が警部にしたらといつたのも、弱つた本心からであつたらう。

東北新報を發行するに及んで、眞卿は、例の計畫案をピシピシ實行した。正直にいふと彼の過激民權論といふのは抽象的なもので感情的な强さが少ないので一般運動からいへばそれ程でもなかつたが（縣當局施設の評論などには鋭いものがある）、人物評と狂畫を加へた內幕話には却々面白いものがあつた。殊に此の後者が喝采を博したものであつた。彼は宮城縣だけの內幕話では我慢が出來ず方々へ手を出した、山形縣令三島通庸の縣會との衝突をポンチにして三島から訴訟され、罰金十圓に處されたりした。尙ほ論說の見本として「私立國會宜シク起ス可シ」といふ論の內容を紹介しよう。これは、國會の願望運動者の中信州奬匡社の連中が岩倉公と面會した時に、岩倉公が、其方達が矢鱈に國會だの何だのと宣傳して步くが、それが國民全體の意志といふのでもあるまい、國民の中には國會を願望しないものもあらうといつたとかで、人民は我も我もと小さい國會をつくつてみせ、これを土臺にして全國的議會を要求せ

よと叫んだものである。

眞卿の唱道した東北連合會はその聲が大きかつた割に實質は至つて振はぬものであつたらしい、十三年六月の連合會の時は集會條例發令の直後のことゝて、殆んど一人も來なかつたといふ。然し愛國社と連契があつたので、當局は大層もないものゝやうに恐れたのである。宣傳價値からいつて、柴瀾の民權講釋と幾分似たところがある。眞卿は、この時怒つて「東北人ハ腰拔ナルカ」と罵倒してゐる。

十三年十月東京で國會期成同盟の會合があり、それが一部の人々をして政黨結成の案を出さしめるまでに進んだ。此の時出席した東北七州の有志は、期成會の決議後、相會して東北有志會を催したが、十四年一月これを常置の會合とするに決し、三月一日仙臺にその大會を開いた。有志會の趣旨原案に「吾人ハ自由ノ天地ヨリ生レタリ故ニ自由ノ權アリ」云々、假規則に「第一條、本會ハ自由ヲ伸暢シ權理ヲ擴充シ以テ社會ノ改良ヲ謀ルヲ目的トス」云々とある。さうして三月一日の大會には、これをたゞ有志大會とせずに今一歩進めて一大政談會社とし、東北七州自由黨同盟といふ政社組織にすることになつた。こゝまで漕ぎつけるには、眞卿も勿論裏面表面で大活動をしたことであらう。三月十日の大演說會には、眞卿も出席して「宣戰ト講和ノ權利」といふので一席辯じてゐる。同盟の盟約に曰く

第一條　吾黨ハ國家ニアリ自由ノ主義ヲ以テ相和ス故ニ自由ノ主義ハ吾黨ノ心軸ニシテ始終渝ラザルモノトス〇第二條　吾黨ハ前條ノ主義ヲ以テ社會ノ改良ヲ圖リ吾人最大ノ幸福ヲ得有スル事ヲ務ムベシ〇第三條　吾黨ハ我日本國民ノ當ニ同權ナルベキヲ信ズ〇第四條　吾黨ハ我日本ハ立憲政體ノ其宜シキヲ得ルモノナルヲ信ズ

七州を七部とし、一部の總代を十名として、大擧遊說することになり、各々班を分つて民權論の未發達の各地に乘り込むことになつた。かくて眞卿の東北連合會が漸く實を結んだ形になつた。

これも十四年八月十三日の第二回有志會が不成績であつたので、眞卿は東北人民の民權に冷淡なのを怒罵してゐる、

だが眞卿等の努力が決して無になつたのではない、その證據には十五年の末福島事件の如きものが起つたのにも、人民の覺醒が知られるのである。此の事件の時福島人民が仙臺へ駈けつけて應援を求めたのは、此の東北七州同盟の手前があつたからで、それで仙臺でも村松龜一郎等が出來るだけ福島の人民に應援したのであつた。だから所謂春秋の筆法でいけば、福島事件を教唆した一半の責任は、煽動家高瀨眞卿の負ふべきものとなる。たゞ此の事件の直前に彼が仙臺を去つたのは、何よりの幸ひであつた。

十四年頃から、東北新報も笹島吉太郎、山川善太郎などが執筆することになり、益〻過激な文字を連ねて來てゐる「國會開設ノ快報ハ信ズルニ足ル乎」、「社會組織ノ權理」、「有司專制論」の如きものが、その一例である。

東北の民權家で眞卿と爾汝の交のない人がなかつた、河野廣中、鈴木舍定、森藤右衛門、若生精一郎、村松龜一郎等は眞卿と兄弟の如く交つた、それといふのも、彼等は眞卿をもつて東北民權振興の恩人と見てゐたからである。

五

吾等はいよいよ小說家、雜著家としての眞卿を語ることにする。

小說、稗史、著作方面の事を眞卿が仕事にするに至つたのは何ういふ譯か。

眞卿が、仙臺から十五年十一月歸京したこと、福島事件でお尋ね者になつたこと、十六年春三島に會つて諒解を求めつと捕縛だけは逃れ得ることになつたこと等は、前々節乃至その前の節で說いてある。眞卿が著作家に化けたのは、三島に會つた直後、卽ち十六年以後二三年のことである。例によつて『羽皐半面錄』によつて、著作家となつた事情を聞かう。『半面錄』には「內職の著述」と題して、さういふ一條が特に說いてあるのである。

まだ仙臺に居た頃、宮城縣警察課長を勤めて居た遠山千里と云ふ人は、同鄕の先輩であるが水戶に居た頃は此方も

年少であつたから、遠山に面會した事もない、仙臺で初めて逢つて其人の實父虚舟翁にも屢々逢つた、また水戸の久米幹文先生も神宮本部長として仙臺にに居つたから、暇のある時は久米先生を訪うて水戸の話を聞き、また虚舟翁を訪うては經歴談を聞き、この兩先輩に就て水戸國亂の內情を知る事を得た、其話に據つて考へて見るに、――

東京の小石川區長を勤めて居る、內藤耻叟と云ふ人は、もと彌太夫と稱し水戸藩では御軍用係（武者奉行なり）を勤め、また御祐筆頭取（書記官長）をも勤めた有爲の人物である。元治元年子の歳藤田小四郎一派が、筑波山へ屯集して攘夷の旗を擧た時、幕府は大に狼狽を極め、鎭撫の策が立ず、困り切て居たのを內藤氏早くも見拔いて、幕府の老中へ取入て筑波追討の兵を起し、市川、佐藤、朝比奈の三老臣を御神輿にして、江戸へ押出した、この計策を坐から運らしたのは內藤彌太夫であると聞いた時は、アヽ今の世にも黒田如水が居る、其內藤氏に逢つて見たいものだと思つて、上京した序に逢つて見た、穩厚の君子の樣に見ゆる人であつたが胸中には無量の智略を疊んで居るのが談笑の間に透いてゆる。これは偉い爺だと思つた、吾等が上京後は役人をやめて學校の教授をなし、其傍ら著述をして居た、時々訪問して教を受たのであるが、或時斯う云ふ事を言はれた。

學問はいくら弘くても宜い、殊に史學をする者は何でも讀んで置くがよい、佛教の經文も耶蘇の經典でも、淨瑠璃本でも、狂歌の集でも見るがよい、また史學は或る部分を極めて精通するがよい、建武前後とか、元龜天正以後とか區域を立ぬと廣く淺い學問が出來る、また讀書は文字の間を讀まねばいけぬ、字を讀むは誰にでも出來るが、字の間の白い處を讀破るのが最も大切である。吾等など近頃學問の足らぬ事を自覺して日夜讀書をして居る。

と語られた、吾等は此話を聞いて、大に感悟した、內藤先生が自ら學問の足らぬを感するとあつては、吾等抔は何として宜かコリャ浮々として居てはいかぬと云ふ考へが出た、其から東京圖書館へ通ひ初めた、何でも手當り次第に澤山の本を讀むと云考へを起した、けれども豫定通りには何事もゆかぬもので思つた半分も讀まれない、其頃は

是と云仕事もなければ只管讀書をして居れば宜い筈なれども、生活上の都合で左樣な譯にも參らず、晝は圖書館に赴き夜間は、書林の依賴にて著述をした。吾等が書たいと思つて、書いたものは槪た賣口がよろしくない、書林の考から出た物は存外に賣れる、其頃吾等が書いたもので七版、八版に至つたものは『櫻田血染雪』と云一冊の讀本であつた、次に『閻魔大王判決錄』これは政治社會の裏面を穿つたもので、政治家が死んで地獄へ落ち、大王に糺問せらるる始末を書いたもので、五版まで出た、次に『明治流行噓八百』これも滑稽ものであるが、時勢を諷刺したもの故、存外に賣た、其次が『筑波水滸傳』これは歷史小說である、斯云種類の物を一ヶ月に一二冊宛書いて、皆な匿名で出版した（下略）。

そこで左に眞卿の著作で私の知り得たもの乃至寓目したものを列擧して見よう。勿論こゝでは小說稗史乃至それに類する雜著に限つてのことで、それ以外の感化事業や刀劍關係の著書は揭げない。又眞卿は、上記『半面錄』でも分かつてゐるやうに、此等の著述を本職とせず、生活の爲の內職と見てゐた、從つて自家の眞面目を出したものでないといふので、他人（といつても兄弟や親戚、友人、門下等）の名儀を借りることが多かつた、これでさういふ姓名も合せ揭げて、一寸說明してみることにする。

明治九年　○「熊本傳報記」（三冊）

（第三冊が十一年一月であり、眞卿が自宅禁錮中に著したといふのが、第一でなく、此の第三であらう）

明治十三年　○「穿探訪宮城の穴」（四月、東北新報）

（縣會や縣廳の所謂穴探し物、多少の政治的分子あり。）

○「名高嶺紫山の旗揚」（五月、東北新報）

（水戸史實を扱つた最初、藤田小四郎、筑波擧兵一件から、天狗騷動に及び、那珂湊の戰から加賀陣へ降參までの事蹟、第六回までは脚本風、以後は讀本風、十五年二月以後「後篇」が掲載されてゐる）

○蝦夷錦名譽染分（六月、東北新報）

（仙臺藩士星恂太郎忠狂を頭領とする額兵隊が、維新の際、奥羽列藩同盟して會津を助けることを約しながら見捨てたのを怒つて函館の幕軍に投じて奮戰する話）

明治十四年　○滑稽國會夢物語（二月五日、東北新報廣告）

（高瀬鐵窓閲、小柳津柳窓著云々、柳窓、名は親雄、長野縣士族で當時は東北新報印刷人たり。實際は眞卿の著書であらう）

○滑稽天狗討論會（九月）

（高瀬眞之助閲、小柳津親雄編、福島自由堂、これも眞之助即ち鐵窓の著述であらう）

明治十五年　○筑波の旗揚後編（三月、東北新報）

（此の頃より愈〻詳しくなる）

明治十六年　○近事奇談內幕話（一月）

（菊水亭主人序、渡井新之助編輯、渡井氏は水戸の人、渡井量藏の子、漢學歷史の嗜好ありし人、勿論菊水亭即ち眞卿の仕事である。）

○全國新聞雜誌評判記（二月）

（菊水亭靜人閲、高瀬紫峯著、奥附に編輯高瀬己之吉とある。紫峯は己之吉とある。紫峯は己之吉の號と見るべきか、筑波山のことである。己之吉は眞卿の末弟で、早く歿した人。眞卿の著なるに疑ひはない）

○新奇妙談閻魔大王判決錄（初篇二月、二篇五月）

（菊水亭靜閱、高瀬紫峯戲述、奥附、高瀬己之吉編輯）

○滑稽奇談三政黨穴探（二月）

（菊水亭靜人閱、柳窓外史著、奥附、小柳津親雄編輯となつてゐる）

○二十三年未來記（三月）

（菊亭靜閱、柳窓外史著、奥附は著者小柳津親雄）

○珍談雜煮餅（四月）

（菊亭靜閱、竹亭綠著述、竹亭本名は高田實、これも實は菊亭靜の著述たることいふまでもなからう）

○滑稽新話明治流行噓八百（四月）

（菊亭靜著、高瀬己之吉編輯）

○時事新話明治乘合船（六月）

（太田五洲序、柳窓外史小柳津親雄著）

○明治新話抱腹奇談（七月）

（菊亭靜閱、晴亭柳窓戲述、奥附、著者小柳津親雄）

○明治英名傳（八月）

（菊亭靜序、高瀬松吉著、松吉は眞卿の弟今小山氏を冒して現に內閣の司法大臣たり、水城と號す。眞卿の著なることはその序文に明らかである。）

○滑稽新話書生肝粒誌（九月）

（柳窓外史著、いろは新聞廣告）

○運輸會社船中演説會（十月）

（深洲五洲閲、柳窓外史著、『明治乗合船』を増補せるもの）

○勤王實傳櫻田血染雪（十月）

（菊亭静著、奥附、高瀬松吉、櫻田事件を稗史化したもの、但し水戸側の資料のみに依る）

○徳川回復噂龍浪（十一月）

（菊亭静閲、秋亭（高田）實著、雲井龍雄の事蹟を稗史化せるもの）

○明治紀聞赤穂仇討（十一月）

（菊亭静閲、水亭清著、播州赤穂藩村上六郎が明治二年高野に於て父の仇六人を射止めたる忠孝美談である）

明治十七年　○尊攘紀聞筑波夢（七月）

（菊亭静編輯、奥附編輯小林隣三、藤田小四郎大志あることより筑波山擧兵のこと、討手大敗のところまでとす）

○報國勤王筑波水滸傳（三冊、十一月）

（菊亭静著、横田兼太郎編輯、水戸の有志が關八州に遊説して兵を筑波に上るところから、武田藤田以下北國で處刑されるまでの物語と著者は觸れてゐるが、事實は矢張り筑波擧兵、藤田武田の合流のところまでゞある。此の種の稗史としては最も全備せるもの）

明治十八年　○近代暗殺事蹟（五月）

（高瀬眞卿閲、菊亭静著述、本文には『殉難事蹟』とあり、萬延元年から慶應四年に至るまでの暗殺されし人々

の事蹟を集錄せるもの)

○宗教競進會(五月)
(高瀬眞卿校閲、菊亭靜編述)、

○光彩生門明治三美人(刊否未詳)
(高瀬眞卿校閲、菊亭靜著、『宗教競進會』奥附豫告に見える)

明治十九年 ○ボッカース翁十日物語想夫戀(十月)
(佐野尙重譯、菊亭靜校、事實は『十日物語』第五日の第七話を引延して更に小說化せるもの、これは眞卿の仕事である)

○雲井龍雄之傳(五月)
(『德川回復噂龍浪』改題もの)

○櫻田志士銘々傳(十月か)
(鐵窓高瀬眞卿閲、菊亭靜編輯、『想夫戀』の廣告に見える)

明治二十年 ○伊國情史鴛鴦奇觀(一月)
(菊亭靜閲、近藤東之助譯、ボッカチョ『十日物語』第三日第三話を引のばして小說化せるもの)

○泰西情譜密夫之奇獄(二月)
(菊亭靜重譯、本文終、近藤東之助譯とあり、『十日物語』第三日の第十話の引のばし小說)

○巫山春夢美人譚(二月、『密夫之奇獄』豫告)
(高瀬眞卿校閲、菊亭靜著)、

○錦之御旗（三月）

（菊亭靜著、扉に高瀬眞卿先生編輯、奥附、編輯人高瀬恭助、恭助は眞卿の長男である。これは天忠組の一件殊に後天狗黨田中源藏の參謀となつた土田耕平のことが中心になつてゐる）

○書生肝潰誌（八月）

（菊亭靜閲、柳窓外史著、奥附、田中一郎とある）

○櫻田後日譚（十一月）

（菊亭靜著、本文に著者近藤東之助とあり、後日といふも、補傳也、『櫻田血染雪』と合卷出版）

○立志鳳鑑美少年錄（十一月）

（菊亭靜著、奥附、近藤東之助）

○時事珍談開化乘合船（月未詳）

（『明治乘合船』の改題である）。

明治廿二年　○革命起原近世紀聞（二月）

（『錦の御旗』の改題もの、內容は殆んど同一である。）

明治廿四年　○人間萬事嘘之世乃中（三月）

（『明治流行嘘八百』を改題せるもの）

以上で明治初期文學史に於ける眞卿の研究に必要な限りの著作は、殆んど凡て網羅されたと思ふ。次に右の著作中若干の政治的寓意ありと認めらるゝ稗史物及び諷刺雜著についていさゝか語ることにする。

六

眞卿の稗史は、水戸藩天狗騒動に關係するものと然らざるものと二種類に別たれるが、水戸藩關係のものは十中六分で、あとの四分が水戸藩に關係のないものである。

その水戸藩に關係ある稗史は(一)『名高嶺紫山の旗揚』(二)『勤王實傳櫻田血染雪』(三)『魯擾紀聞筑波夢』(四)『報國勤王筑波水滸傳』(五)『櫻田志士銘々傳』(六)『櫻田後日譚』。筑波擧兵といひ、櫻田義擧といひ、强權に對する反抗と政治の正義を要求したものであり。封建時代末期の封建制度自己崩壞を示す現象として、維新史上有名な事蹟ばかりである。眞卿は別にこれを描寫するに托して自由民權イデオロギィを宣傳しようといふ意志はなかつたが、知縣豪富の横暴、壯士の輕擧、政府の强壓政策の不成功を描くあたりは、多少政治小說的色彩がある。然しそれは讀者の態度如何で感受されることで、著者が何もさう深い寓意をこめたわけではなからう。今一種水戸藩關係ならぬものには(一)『蝦夷錦名譽染分』(二)『德川回復噂龍浪』(三)『明治紀聞赤穗仇討』(四)『近代暗殺事蹟』(五)『雲井龍雄之傳』(六)『錦之御旗』先づ以上六部とし、これ等も大體水戸藩の黨爭と同じ時代乃至以後のことを書いたものであるが、矢張り全體に通じた特色は、强權に反抗して政治改革を企圖すること、政治の正義を要求すること等々にある(『赤穗仇討』の如きは例外として)。勿論かゝる稗史にも眞卿が必ず思想的に何かを寓してゐると考へたら誤まらう。これは矢張り大體にして當時のさういふ空氣が、暗々裡にかういふ稗史に反映したと見るべきであらう。然し眞卿の假托附加したらしいところが全然無いのではない。例へば、『錦之御旗』で、天忠組の連中が五條の知縣鈴木玄蕃の暴惡を懲すところの如き諷するところがある。又志士達が軍用金をつくる爲め大に苦心し、遂に强盜を働くに至るところも、當時の自由黨壯士の間の非合法運動でよく實行を見たところであつた。勿論眞卿はこれを諷してゐるのである。又水戸關係、筑波擧

兵の點では何うしても、志士の擧動や非合法運動が自由黨連中の暴動を思はせるものがあり（或は意識的に狙つたところもあらう。）後半の水戸藩に關係のない方面では、維新運動の訂正を高唱し、藩閥政治の反對の立場を主張してゐるところが、矢張り間接に自由民權意識の主張となるのである。此の點でも紫瀾と共通するものをもつてゐる。又兩者ともに所謂實錄文學の脈をひいてゐることは、改めていふまでもない。

私は、以上の稗史的諸作の細々しい内容の紹介をまでは試みぬことにしよう。概していつて此等の諸作は『水滸傳』『三國志』等の影響を受けてゐるところが多い。勿論水戸出身の眞卿のことであるから、水戸關係のことはよく調べて書いてゐる。然し『水滸』や『三國志』の趣向をそのまゝ一片切り取つて自分の小說に生かしてゐるのも少くはない。紫瀾に比して、描寫粗大であるが構想の力は優つてゐるかも知れない。文章は紫瀾の筆に一種淸新の味ひがあるが眞卿の方にはさういふものがない。その代り老蒼といつた味がこもつてゐる。煽動的文字を陳べることは、兩者ともに兄たり難く弟たり難い老手である。

稗史に關して以上で語を止め、以下政治的（乃至准政治的）雜著に就いて語ることにしよう。

此の種の著作で先づ注意しなくてはならぬことは、それが何れも他人の名で書かれてゐることである。さうして正直のところ、その何れ何れが眞卿の自著で何れ何れがさうでないのか、分別がつかないのがある。實際から考へてもこれだけの著作を何もかも一人でやつたといふことは考へられぬ。現に『想夫戀』以下飜譯物の三點などは、確かに他人の助力をかりてゐることが明白である。だから材料を集めるとか、口授を筆記するとか、原稿を作らせるとか、必ずや多勢の手を要したと思ふが、それぞれの手傳人の名が此等の著作者と名乘つてゐる名であるかも知れぬ。然し如何に手傳人が多かつたにせよ、此等の署名の著作が全然眞卿と無緣に出來たのでない。その證據には、誰の著作となつてゐても必ず菊亭靜か高瀨眞卿の校閲になつてゐる。何れもこれも皆眞卿の息がかゝつてゐる。思ふに、これは

眞卿がかういふ戲著小說風のものに署名することを許さぬ事情が一つ（感化院といふ眞劍な事業を控へてゐるので）、それから眞卿自身かゝる文學的雜著を些も重要視せず、全く生活の手段視してゐたので、署名は便宜に任せて自分を表面に出さなかつたことが一つ、その邊からして眞卿の自著でも他人の名を署するといふ結果になつたもので、その代り校閱等の文字で、これは眞卿の本なのだぞといふ意味を示したものであらう。私は、こゝでは、上記の政治的雜著について、その全部を眞卿の著作と見て語るつもりである。

明治十四年二月刊行『滑稽國會夢物語』、これは未見であるが、廣告の文に曰く、右は目下の急務なる國會開設の利害を討論するため大鰺搖左衛門、國學者古琴學、新聞屋暗雲怖三、演說者國野會三、其他金貸、貸座敷、大工、左官、醫者、藝妓、草餅、車夫等いろいろの人物寄り集りて大議論の體を寫したる新奇妙案也云々。結論國會は早々開設する方可しといふのであらうが、全體の調子が後の「閻魔大王判決錄」を思はせるものがある。

同じ年の九月『滑稽天狗討論會』は未見であり、一向內容不明である（福島自由堂刊行）。

十五年を飛んで明治十六年一月『近事密談內幕話』は、小說ではない。當時の風聞集である。〇第一銀行と三菱會社不和の原因並風帆會社創立之事附第一銀行閉店之義ニ付五代友厚仲裁の事〇帝政黨の內幕並機關の事日報社長福地氏立腹の事附日報社帝政黨となりし事〇板垣後藤の兩氏洋行の事に付某貴顯板垣氏に面會之事〇自由改進兩黨不和を生ぜし話並沼間氏不入情の事〇三菱會社の內幕同社損益實算の事、以上の內容となつてゐる。いはゞ明治十五六年度政治界經濟界の側面史として（兩者が如何に微妙の運關をもつてゐたかについて）、極めて面白い且つ貴重なものである。こゝで直接政治に關係があるのは第二、第三、第四項であるが、第三項、板垣が洋行前伊藤に會つて志を語つたことなどは、最近の研究で裏書されるに至つてゐる。第四項に於いては、眞卿の持論たる政黨大同主義を高調し、兩黨相爭ふの愚を笑つてゐる。その他の經濟關係の事項も政治界の裏面に如何に經濟界の手が動いてゐたかを知る資料とし

て缺く可からぬものである。

同じ十六年二月の『新奇妙談閻魔大王判決錄』は或る意味では眞卿の代表作とされてゐる。此の書の主旨は現世「德義の罪人」が未來に地獄に於いて如何なる罰を受くるかを說いて、世敎に益せんとしたものである。明治十四年に生田精之の『冥府紀事』があり、眞卿は此の邊から思ひ付いてこの一書を成したものであらうが、生田氏の書は知る人がなく、獨り眞卿の『判決錄』のみ大に賣れたといふのも、著書にも運不運がある一證であらう。

國尾愛四郎なる者があり。平日政談演說を試みたり新聞雜誌の編輯をしてゐた。一日晝寢の際、借金や靑樓下宿支拂踏倒しの罪で閻魔王の前に引かれる。然し國尾は辯舌を揮つて免れる。大王は國尾の才辯に感じ、彼を地獄の檢察官に任じ、大にその手腕を揮はしめる、これが發端である。國尾は恐らく眞卿の靑年時代の面影であらう。裁判の第一席は新聞記者鼻藥の件（出鱈新聞主幹暗雲掻藏、外は愛國社會の事の如く見せつゝ內は汽船會社その他より鼻藥を貪ぼる）、第二席大鯰蓄財並本妻離別政黨樹立の件（これは大隈重信の行事に當てつけたものが多い）、第三席演說家暴民權の件（民權民尾於多輝が過激民權論にて人民を煽てる罪、これは大王が民尾の志の壯なるに感じ、再生させてゐる）、第四席警吏壓制の件、（これは說明までもあるまい）。第五席藝妓ころ八罪狀糺明、（これも明白であらう）、第六席後家お好の件、第七席代言人（法盾眞難太）の罪狀露顯の件、第八席著述者厚日田湯雁太呵責の件（古書の丸取り云々）、第九席華族鼻下延長の放蕩祖先よりの告訴の件である。以上が初篇、第二編は、第九席（前編引續き）、華族鼻下延長不埒の件、第十席胡魔揩新聞社長（横島應樹）金貰の件、（始め急進論、後或るところより金を貰ひ漸進論、心にもない提灯をもつ）、第十一席權妻旦那を〇〇せしめたる件（華族の妾なることに注意）、第十二席落語家洒落はなしの件、第十三席書林不正の段々白狀の件、第十四席燒餅女房夫の陽物〇〇の件、第十五席地方鯰私曲の件白狀、第十六席銀行の役員私利の件、第十七席山師白狀云々、卷末の廣告には今一篇（八席）を豫定してあるがそれは成ら

なかつたものらしい。政治的寓意からはさしていふ程もないが、社會諷刺としては深刻な穿ちもあり、當時の社會の實情を知る參考にもなる、面白いものである。

十六年三月『滑稽奇談三政黨穴探』、全編一貫せる作でなく○主義を以て結びし政黨の月次會、○籠絡されし黨員の卑屈だましひ○田舍演說の內幕のぞき○三政黨の評紳士の高論、といふ四篇から成つてゐる。第一は改進黨の月次會の穿ちで、今年度の黨勢擴張の大策を論ずるところ、黨內に二派あり、一は自由、帝政兩黨の言動に關せず堂々と進めといふ論、一は賣られた喧嘩は買はうといふ論、それから黨勢擴張のため巡回演說となり旅費日當の詮議といふ細かいところを見せてゐる。第二は政府大官が內密の手蔓で政黨員を買收してゐる實狀の穿ち、第三は田舍巡回演說の可笑し味いろいろ、實況を見る如く說いてある。最後が三政黨及び當時の政治界に對する紳士（卽ち眞卿なるべし）の評である。自由黨は、暗雲に論理のみ先とし、無上政府論自由平等論等、日本では實行出來ぬ急躁過激で、その實質は書生の集りといふに過ぎず、何の實力もなく口舌の理窟を唯一の武器として、時々過激論で人眼を眩するのみ。改進黨は天下太平の時には天晴な政黨であるが、政論大波瀾を生じた時には膽力がないので手も足も出ない。色男政黨、紳士政黨、體裁政黨、國家無事の時の裝飾政黨である。帝政黨は如何。この政黨はもう論外である。第一主張するところからして道理になつてゐない。秩序と進歩と並行せしめるといふが、秩序に天然と人爲の別のあることを知らぬ有樣では、政黨の主義も方針もあつたものではない云々。三政黨共にこき下ろされてゐるが、著者の態度は、全く當時の政黨運動に對して幻滅を感じたものであり、一種暴露的口吻を帶びてゐる。これは二十三年以後の暴露的政治小說の先驅として、福地櫻痴の試みた戲謔調の穿ちを主とした、政治的雜著の粉本として、政治小說硏究家からは注意さるべきところである。然し著者はまだ虛無的な棄鉢氣分は少なく、今に政黨が大同團結し、官民協和して國家の爲めに盡す機が來るに違ひないことを期待してゐる。此の書は、跋文を書いた笹川雪窓の文章で見ると、小柳津柳窓の

原稿らしく見えるが、何うであらうか。然し政治的意見に至つては眞卿の旨を受けたものであらうから、これを眞卿の意見と見て可からう。

十六年三月『二十三年未來記』此の著は眞卿の此の種の政治的雜著戲作中での白眉である（これも柳窓の署名があるが、勿論眞卿の旨を受けて書いたものと見て可い。）序文は、未來の豫言可能の論であるが、それは歷史的方法により、「歷史上ニ生シタル現象ト其ノ原因ノ分子トヲ探求シ最モ學問上ノ方法ヲ以テ」せば未來知るべしとなすもので、簡單な歷史哲學觀を示してゐる點は注意される。本文は七回に分れ、全體の構想は小說であるが、その所說の政治論は必ずしも妄誕不稽なものではない。（第一）「秩父山ニ異人未來ヲ說ク事」、壯士某一日秩父山中に獵して、洞中に一老翁と會ふ、老翁は卽ち大鹽平八郞である（大鹽が甲信に逃れたといふ傳說は、大鹽の亂の當時からあつたのである。）平八郞は年九十に餘つても尙ほ憂國の志を消せず、明治二十三年國會開設當時の有樣を想像して大に嗟嘆し。壯士に對しその未來記を語る。（第二）改革ノ事（政府自ラ改革ス可キコトヲ論ズ）、これは根本論である。民間政治運動に對する政府の根本態度を說いたものである。大意は、現下の形勢でいへば、上下の軋轢から十分大變革を生ずる危險がある。これを避けるのは國家の幸福であり政府の任である。それには政府は人民の望むところのものを我から進んで與ふるが良策である。政治上改革すべきものは人民に迫られるに先立つて、その望む以上に十分改革する。さうすると自由民權の假面の下に何ういふ底意をもつてゐるか知れぬ政黨等が、如何に人民を煽動しようとしても、人民は乘らぬ。かうして官民の協和が得られると我國家の幸福である云々。第三（憲法ノ大意ヲ豫言スル事）、大鹽はそこでいよいよ未來の豫言をする。憲法制定は伊藤參議歸朝の上のことであるが、然しその憲法は必ずや國約でなく欽定であらう。これを發布する前に政府は過激論者を徹底的に一掃する方策を取り、謹愼着實の政治家のみとなつてから始めて憲法發布とならう。それでも國約でなければ云々と主張する連中には、必ずや嚴罰が下されるであらう（眞卿の

豫想は大體として當つたのである)。さてその欽定憲法の內容を推測するに(少し長文であるが、此の種の文獻は、明治初期文化硏究家に必須のものであるから、未讀の人々の便のために全文を揭げる)、第一は天皇に關する項である

——

(皇權)天皇ハ聖神ナリ犯ス可ラズ政務ノ責ハ內閣連帶シテ之ニ當ル

行政ノ大權ハ天皇ニ屬ス

司法ノ大權ハ天皇ニ屬ス法律ニ從ヒ裁判官ヲシテ審判セシム

天皇ハ陸海軍ヲ統率シ。外國ニ對シ宣戰講和ヲナシ玉フ事。條約ヲ結ビ玉フ事。有功ヲ賞シ。罪犯ヲ宥免シ玉フ事

天皇ハ國憲ヲ制定シ之ヲ改正シ玉フ事。國會議院ヲ開閉シ中止シ又タ國會院ヲ解散スルノ特權ヲ有シ玉フ

成文ではなくてたゞ內容の豫測であるから順序組織は立つてゐないが、現在の憲法に規定されたものは皆含まれてゐる。たゞ現在の憲法と違ふのは、「國憲ヲ制定シ之ヲ改正シ玉フ事」の一條で、此の一條は現在の憲法にはさう强調した文句で示されてゐない。この邊に、明治十六年當時の欽定憲法論者の主張が反映されてゐるものと察しても可からう。第二は內閣に關すること、これは現在の憲法では條文がないが(大臣の責任以外)、十八年の內閣改正の條に、太政官達で、その職任が發布されてゐるが、後二十二年に更に內閣官制が勅令で出てゐる。

(內閣)內閣ハ參議何名ヲ以テ之ヲ組織ス

內閣參議ハ各省長ヲ兼任スル事

內閣宰相ハ共同シテ內外ノ政務ヲ掌リ連帶シテ其責ニ任スル事

內閣ニ首領一人ヲ置キ政令ハ其名ヲ以テ之ヲ行フ事

內閣ノ議決セザルモノハ首相ヨリ上裁ヲ仰ク事

政府ノ歳出入豫算ハ內閣之ヲ起草スルコト
內閣ヨリ出ス所ノ議ハ國會院(下院)ノ議決ヲ得之ヲ元老院(上院)ノ議ニ附シ更ニ議決ヲ得可キ事
內閣ハ每歳ノ歳出入決算及び內外政務施行ノ要領ヲ國會元老兩院ニ報告スル事
內閣ノ意見兩議院ノ議ト相合セサルトキハ天皇ノ上裁ニヨリテ決スル事

此の條で重要なのは、內閣の連帶責任の點で、これは二十二年に發布された內閣官制には無いが、この官制について各大臣の上表の文中に「內閣ノ憲法上ノ義務人身ヲ以テ責ニ任スルニ在リ」云々「內閣ノ組織ハ同心一致ヲ以テ根本トスヘク」云々等見えてゐるから、當時の政府にも連帶責任の觀念があるにはあつたわけである。此の條も先づ大體合致してゐるが、參議と內閣大臣を別々に考へてゐるのは、まだ此の當時として尤もである。次には議會、これは上下二院制、制限選擧である。その上院たる元老院については、かう想像してゐる――

(元老院)元老院ハ左ノ資格ノ者ヨリ成ル
特選議員ハ皇族、華族、及ビ勅奏任官ニアリテ勤功アリシ者並ニ學識アル者
公選議員ハ元老院議員選擧區ヨリ各一人ヲ選擧ス
各州ヲ以テ元老院議員選擧區トス
年齡三十歳以上ニシテ國會議員被選權ヲ有スル者ニ限ル可シ

大體は後の貴族院令に規定するところと同じである。公選議員とは多額納稅者をいふのであるが、各府縣を一選擧と見てゐる點、年齡の點も合致してゐる。次には下院即ち國會院の件である。――

(國會院)國會議員選擧區ハ各府縣ヲ以テ一區若クハ數區ニ分チ人口十萬人每ニ一人ノ割ヲ以テ公選ス十萬ニ滿サル區ハ除ク

人口三萬人以上ノ都市ハ別ニ一選擧區トナス國會議員選擧ハ地租十圓以上ヲ納ムヘキ土地ヲ有シ價金四百圓以上ノ家屋ニ住居シ滿廿五歳以上ニ達シタル者タル可シ（現ニ處刑中ノ者、政權剝奪セラレシ者、白痴、瘋癲、官吏等ヲ除ク）國會議員被選候補ハ年齡三十歳以上ニシテ地租三十圓以上ヲ納ム可キ土地ヲ有シ五百圓以上ノ家屋ニ住居シ（此ニ前ノ如ク云々ヲ加フ）タル者ニ限ル可シ

これは憲法といふよりも、議院法、乃至選擧法に相當するものであるが、當時の人々はこれを憲法と見てゐたのである。これについては多くいふところはないか、たゞその制限が二十三年當時の選擧法に比してさへ如何に嚴重なものかといふ點である。以て欽定憲法論者の初度の態度の嚴烈が想像されるであらう。

憲法案を扱つた政治小説は他にないので、思はず長文に亙つたが、さて此の草案の內容を眞卿は何處から何を基礎に想像したかといふことが問題であるが、これを決する明白な資料はない。然し總體として當時の元老院側の國憲案や自由黨立憲政黨側の日本國々憲按などに似ずして、遙かに多く交詢社案私擬憲法に似てゐる點から見て、何うしても此の案を基礎にして、新聞雜誌に發表された斷片的議論などを繼ぎ合して、これだけに纏め上げたものと考へられる。（第四）國會招集（國會招集ノ模樣並議院選擧）、大鹽の豫想は續く、政府はかゝる憲法を發布して、第一期に於いては、先づ歲出入の豫算だけを議させようとかゝるであらう。「國會ハ國稅ヲ以テ支辨ス可キ經費ノ豫算及ビ其徵收方法ヲ議定スルモノト定メ國會ハ經費ノ豫算ヲ議スルニ止マリテ事業ノ興發起源性質等ニ論及スルヲ得ス抔ト言フ着實極マリタル方法ヲ以テ開設セラルヽニ至ナラン乎」、然しこれでは議院は承伏せず必ず、騷然たるものにならう。さて議員の數は、前條の豫想から割出すと約四百人となる。議員の內譯は——

第一　金力と老年による舊家老、舊名主、富農、豪商の類が	五割
第二　前官吏	一割五分

第三　舊政黨人、政論家　　一割五分
第四　地方の金滿家中の好事家及び書生　　二割

數の豫想は種々な事情で當らなかつたが、その數を別にしたら議員の實質を吟味したら、この豫想が當つてゐるのではなからうかと思ふ。それで、此の中議院の議事で活躍するのは先づ第三類の人々と見て、その中大多數は急進論であらうから、先づ來る可き議會は急進論者に支配されるであらう（これは末廣鐵腸の『二十三年未來記』でも大體さうなつてゐる。）

選擧競爭の大騷動についての豫想もあるが、それは省く、又上院招集のこと、上院議員の內譯もあるが、それも省く、又議事院の新築、議會招集の光景もあるが、これも省かう、議長は後藤か板垣かとなるであらうが、眞卿は後藤の方に贊成してゐるらしい。

（第五）內閣更迭ヲ促スノ議起ル事、そこで議會に對して政府は議案を出すが、それがたゞ來年度の國稅支出徵收の豫算だけであると、必ず議員中の不平家は默してゐない。そこで先づ內閣の改造を唱へ、西洋の例を引いて內閣を議員から成り立つ責任內閣としたいと發議する。それが更に發展して（第六）「憲法改正ノ議事」となる。卽ち折角國會を開設してもかういふ不完全なものでは困るから、更に完全にしなくてはならぬ。それには憲法から改正しなくてはならぬといふのである。だが欽定憲法そのものを直に改正することは出來ないので、改進的秩序主義者は、先づ「改正センコトヲ建議」して改正の御裁可を得ようと發議し、遂にこれに決する。下院はこれを可決するが、上院は、憲法の完不完はまだ實驗されないから、かゝる決議は尙早であるとして、此の決議に反對する。そこで兩院の紛議となり、國會解散の議が起るが、かく兩院の不和に乘じ、一方過激議員も亦これに對抗し、一種の政治改革を試みようとさへかゝり、遂に國家の大騷動となる。丁度此處で大鹽の豫言は終つてゐるが、畢竟するところ、國家將來の爲めを

思はゞ早く政府自ら改革を成し、憲法は、思ひ切つて國約にしたら何うかといふのが眼目なのである。こゝに、野人眞卿の面目が多少とも出てゐるのは嬉しいことである。

十六年四月『珍談雜煮餅』序文には眞卿が政治戯作者の使命を書いてゐる。――

> 滑稽奇談を以て官民の內幕を模寫し上下の情意を通ずるは作者の本色なり民間の穴を探り或は政府を誹議するは作者の通弊なり(中略)今ま世上の光景を視るに漸く官民不和の兆を顯し上下猜疑して各々不安の情を抱くものゝ如し是れ上下情意の通ぜざるにあらざるなきを得んや

上下官民の內幕を寫して官民の調和を計るのが、その使命でもあり。刻下の急務でもあるといふ。眞卿の大同調和論からは當然の結論であらう。內容は〇朝野横濱兩記者相爭ふて帝政黨の城廓を攻落す(東洋新報を朝野に抜かれ、東京日々又沼間の攻擊に支へざらんとす)〇南柯の一夢(福島事件の諷刺的戯作)〇各地方政黨創立の內幕話〇地方新聞組織の穴探、此の四篇から成つてゐる。政情の穿ちとしては何れも面白い。又暗示に富むものであるが、これが果して眞卿の宣言通り官民調和の原因となり得るか何うか、そこは受け合はれないが、眞卿の宣言をカムフラージュとすれば、それで可い譯であらう。これも又一讀すべきものに屬する。

同じ十六年四月の『滑稽新話明治流行嘘八百』は、政治的分子は殆んどなく、先づ普通の社會的暴露戯作である。目次だけ掲げて置く。〇銀行の役員會議、實際報告の下拵へ〇豫約出版濡れ手で粟の錢まふけ〇口先でころす浮れ女が劍の舌〇新聞記者の增長坊低い鼻をおやかし話〇裏をかゝれた半可通の計略〇大きな顏をする役人の自慢話し〇法螺で堅めて金主をだます山師の心中〇村夫子の化物漢僻論を唱ふ〇倒れかゝつた雜誌局の內證〇叩き出したる張扇の大法螺。第二編出版の旨豫告してあるが、これは恐らく出版されなかつたものであらう。

十六年六月『時事新話明治乘合船』これも形式は小說になつてゐるが、內容は皆實事實話である。『乘合船』の趣向も舊

い戲作形式の一つであるらしい。横濱を解纜した神戸行汽船の下等室で、乘合した客が各〻自己の見聞に誇ることを趣向としたものである。○甲州商人甲州博徒狩りの話○陸前石卷商人仙臺の名所舊跡話○九州邊の官員邦國と政府の區別を演說す○大阪の新聞記者新聞屋の內幕困難話○水戶人藤田東湖の言行話○東京の政黨員男女同權論を主張す○奧州白石の人旅人白鳥を打て一郡の大騷動を引起せし原因話○高知人久松座自由黨大演說會の話附十六名辯士の細話これに、『船中演說會』と改題された時に、○福島自由黨員、河野廣中の言行話といふ一項が增補されてゐる。

十六年七月『明治新話 抱腹奇談』これには政治的イデオロギイは先づ無い。人情の穿ち物といつた方が可い。本來略しても可いのであるが、內容だけ揭げて置かう。○開化を氣取る坊主の文盲○流行に遲れた若者の擊劍○爪で火を燈す金滿家の胸算用○迷ひ込たる放蕩者の熱心○お諭を喰つた官員の瘠我慢○先きの見へぬ車夫の歎息○意氣相投ぜし老人の舊幕自慢○萬藝を知つて一藝に達せぬ人物。勿論穿ち物といふ方面から見れば、風俗人情を知る點で好資料となつてゐる。眞卿の雜著はさういふ方面から今一度讀み直さるべきである。これは序で菊亭靜が又跋で高瀨紫峯が二度も斷つてゐるから、或は原稿が柳窓小柳津親雄の手に成つたものでもあらうか。

十六年八月『明治英名傳』、これは小說戲作ではない。明治年間の英雄名士の傳記を集錄したものである。高瀨松吉著となつてゐるが、眞卿の著たるは序文で明白である。內容は○名家傳（德川慶喜、島津久光）○學士傳（福澤諭吉加藤弘之）○才子傳（福地源一郎、守田勘彌、岸田吟香）○滑稽傳（成嶋柳北、總生寛、忍峽稜威兄、小西甚之助）○辯士傳（沼間守一、馬場辰猪）○叛臣傳（江藤新平、前原一誠）○刺客傳（武市熊吉、島田一郎、相原尙褧）。

次に十六年九月十八日のいろは新聞に『滑稽新話 書生肝粒誌』が刊行されたかの如く廣告されてゐるが、私は實は此の十六年版を見たことがない。何うも私が見たのには明治二十年八月の版が初版らしく受けとられた。若し二十年版が十六年版の飜刻であつても內容は同じものであらうから、二十年版で此の書のことをいさゝか語つて置く。この著の

性質は序文の一節に明らかである。――

（前略）書生の放蕩さかんにして諷諌の書顯はれ、書生の風俗日々頽れて肝粒誌の編成るそれ此の書の出るや著者の好でする所にあらず、書生自ら種を蒔きて著者をして拾はしむるに過ぎず書生の品行方正にして無分別の所業なくばいかんぞ此の著書の材を生ぜんや蒔たが因果の著書の材料自業自得の肝粒誌ソレよツくお讀なんしと爾云。

即ち書生々活の諷刺が此の書の主眼である。換言せば舊い形式の『當世書生氣質』がこれである。書生々活の描寫、穿ち物として破顔させる點はあるが、政治的戲著としては餘り取るところがない。第一回下宿屋の主人三生の懶怠を責む、第二回天保の憂國者明治の憂國者を戒む、これは一家の生計さへ營めぬ者が憂國の愛國の口先でばかり空言論を弄したとて駄目なことと嗜なめられる話、第三回二生相會して電線の糸口を求む。電線とは因緣引立による主身出世、第四回無分別の出京同鄉人のおなさけ頂戴、第五回浮世民權家の手品の一曲、こゝにも多少の政治的イデオロギイがある。即ち民權を賣物に准奏任に拾はれた小官吏の述懷談である。第六回威張そこねた田舍辯士、第七回後悔先に立たず居殘りの歎息、これがその內容である。當時の書生々活の一面に如何に墮落したものがあつたか、如何に無理想に小利巧になつてゐたか、それが分つて面白い。

明治十八年六月『宗教競進會』、これは題名の如く一種の宗教小說であり。政治には關係がない。內容は、大和屋國兵衞の一家が各宗混合のことから始終紛議が絕えぬので、國兵衞も困却し、各宗の大德を集めて說教させて見（これが宗教競進會である）その最も優れたのを家の宗教にするといふことになる。そこで日蓮宗、淨土眞宗、禪宗、心學、神道家、儒道、耶蘇教と順々說教するも何れも氣に喰はぬ。最後に道義哲學の講談となり。遂に改良心學ともいふべき感化心學が勝利を得るといふことになる。此の感化心學は、當時感化事業準備中の眞卿が最も心をこめて研究してゐたものであつたのである。

最後に刊否未詳の著作が二種ある。一は『宗教競進會』の廣告に見える『光彩生門明治三美人』といふもので、廣告には、「天下固ヨリ小說多矣、然モ此書ノ如ク、明治今日ノ時態ヲ寫シ、現今ノ人情ヲ說キシ者アルコトナシ、本書中三個絕無ノ美人アリ又タ比倫ナキ淫婦アリ、附スルニ貴顯、商家、書生、著述家、同人、武官、政談家アリ」云々、或は多少政治がゝつたものかも知れない。その二は二十年二月『密夫之奇獄』の廣告に見える『巫山春夢美人譚』といふものである。「方今女權ノ說漸ク行ハレ心上ノ結婚ヲ是トシ體上ノ結婚ヲ不可トスルノ說アリ本書ハ事ヲ人情直寫ノ話說ニ假リテ心上婚ノ利害ヲ述ベ以テ世上ノ處女ノ爲メニセントスル者ナリ」云々、これも或は女權方面のイデオロギイが多少入るかと思ふが、何うもその邊は望み薄であらうと考へてゐる。

眞卿は文學を輕視し、小說に努力するに意がないので、その書くものは皆雜駁にして統紀の無い雜著戲作の類だけであり。自家の理想を文學的に明確に說く如きことをしない。文學の才はあるが、本氣に眞劍になつてゐないので折角の才も單に遊戲氣分の犧牲になつてゐる。惜しいと思ふ。又政治小說の立場からして、彼の小說が多くは暴露的諷刺小說で、政治に幻滅を感じたところを書いたものが多い。これは何故であらうか、これは勿論政治界の先輩であつて然かも政治界に志を得なかつたせゐもあらうが、恐らく彼が東北に居たころの苦い經驗が祟つてゐるのではあるまいか。東北人が案外彼の考へる程に躍らなかつたり何かした點があるのではないか。然し眞卿の暴露的政治小說は、十五六年當時の燃る火の如き民權運動の半面を活寫した點に於いて、當時早くも政治運動に幻滅を感じた虛無的氣分の存在を語る點に於いて、遂に棄つべからざるものがある。又一面戲作家として見ても、社會的諷刺の鋭さと取材の各方面に亘つてゐるといふ點で、明治十六年を中心に何年かの間の社會裏面の穿ち物語としてユニークなものをもつてゐると思ふ。眞卿は、兎に角明治初期の如き混沌期に時偶出る畸形的人材の一人であつたのであらう。

案外堂主人小室信介

一

時人から宮崎夢柳居士と併べて聯璧の稱を得、案外に小說的手腕に富むと驚かれた案外堂主人小室信介は、夢柳と違つてその文筆を生命とした士でない。その本領はあくまでも政治經世にあり、小說の如きは全く餘技と見て居た。夢柳は文筆著述の外に取柄のない人物であるし、信介は、その小說や文章を別としても立派に抱負も有ち仕事も出來た人である。從つてかく彼の政治小說を中心にした私の研究も、恐らく「政治小說家としての」斷り書きをつけるのが當然であらう。以下そのつもりで讀んでいたゞきたい。

信介の傳記については、谷中天王寺墓地にある古澤滋の撰した墓碑銘が大要を盡してゐる。曰く（原漢文）――

君、名は信介、字は順叔、宮津藩士小笠原忠四郎長縄の第二子なり。嘉永五年壬子の七月二十一日を以て生る。長ずるに及んで容姿美しく、好んで稗史を讀み、風流にして文詞に工みに、俊辯にして志氣を尙ぶ。養はれて小室信夫の子と爲り、其の長女に配す。一生を生む。東京大阪の間に在りて、瓢を新聞に操り、常に民理を張り、世運を進むるを以て己が任と爲す義民の事迹を論敍するや、每に三たび思を致す。世、頗る其の著述を讀んで興起する者有り。明治十五年朝鮮京城の變、往いて其の情形を觀る。十六年八月、淸佛の戰起るや、乃ち又上海に赴き北京に至る。巳にして歸り、大に東洋の大勢に感ずる所有り。會々京城又變あり。外務卿井上公、全權大使と爲り、之に

赴く。發するに前だつ一日、特に君を擢んでて出仕と爲し、自ら隨ふ。君も亦此よりして因て爲さんと欲する所有り。事平ぐや、留りて我が公使館に在り。居ること六月にして歸り、將に再び淸國に航せんとす。俄に疾に罹りて卒す。實に明治十八年八月二十五日也。享年三十四。谷中天王寺墓地に葬る。嗚呼、君、利器を抱いて試みず、將に少しく其の材を展んとして天忽ち命を奪ふ。悲しいかな。明年、祥ならんとするころ、其の父信夫、爲めに碑を建つ。友人古澤滋、君が平生の梗概を書して、其の蔭に識す。

流石古澤氏は文章家であるだけに、實に簡潔に要領を得てゐる。然し再讀三讀すれば、餘りに簡潔に過ぎてゐて、人をして何とか今少しく信介の生涯を知りたいといふ氣をもたせる。私は、自分の捜羅し得た事實を綜合して、此の碑銘の註脚とし、讀者のかゝる要求を、幾分でも滿したい。

信介の本姓が小笠原氏であることは、碑銘の通りである。諱は長道、幼名は銻吉（銻吉ともあり）、後に少と改めたが、明治五年以後、諱の長道をもつて通稱とした。信介といふのは小室氏を冒して後更めたものである。小笠原氏は宮津藩の砲術家、同城下柳繩手に邸があり、信介もそこで生れたのである。

信介の別傳（一）に曰く、「幼にして慧敏頗る學を好み衆童と相戯るも手に書册を離さず其病に罹り臥蓐に在る時と雖も朗々咿唔の聲を發し毫も疾苦を覺へざる者の如し」云々。信介は夙に同藩の儒者澤邊淡藏に學び、又藩學禮讓館に入り、秀才の名があつたといふ。淡藏の子友吉は卽ち澤邊正修で、その邸も同じ柳繩手にあつたので、兩人は竹馬の友ともいふべき仲であつた。

同じ別傳に曰く、「稍や長するに及び豪放不羈義俠の風あり武術を修め父祖の職を繼ぎ慶應二年（十五歲）七月同藩軍臺熕手に補せられ同三年（十六歲）二月禮讓館助教を兼攝す」、然るに幾ばくもなく「藩主（本莊宗武）其器局豁如國家の大計を以て自ら任じ其志望の非凡なるを知り學資を給し笈を負ひて京師にせしむ」云々。何うも大變な褒めや

うであるが、漢文流の文章にあり勝ちな誇張癖を斟酌しても、まだ少年ながら既に才鋒の穎脱してゐたことが推想されやう。

この時遊學したのは、信介ばかりではない、數人ある。その多くは、當時有名な葵園中沼了三に師事したといふが信介も恐らく同門に遊んだものであらう。だが此時は約一年足らずで、維新の大變革となつたので遊學を切り上げて歸藩した。さうして藩兵として越後口へ出征したといふ。(十七歲)

明治二年、藩の執政伊織某が頗る威福を擅まゝにし、直言の士を斥けて横暴を極めたことがあつたが、信介等はこれを見て慨然として藩政の匡救を圖り、淸議の士十八人同盟し、有吉三七を主盟として伊織を排しようとした。然し伊織の黨與が頗る多くて牢固たる權力をもつてゐる。それで三七、信介等は最後の手段として伊織を暗殺することにした。ところが幸ひにも藩主が賢明で、早く伊織の奸狀を覺り、その一黨を捕へたので、無事に濟んだといふ。

明治三年以後の數年間、信介の傳記は不明であるが、想像を逞しくすることを許せば、この間に信介は大に苦學したものと思ふ。信介が但馬聖人といはれた宿南(しゆくなみ)の池田草菴について學んだといふのは(二)、恐らくこの間のことではなかつたか。賴山陽弟の子宮原節菴等に學んだともいふのもこの頃のことか。

明治五年八月學制頒布、この時京都府下にも學制による小學校が方々に出來た。信介はこの頃、山城國綴喜郡井手村の小學校の敎師に任ぜられたといふ。この在職が足かけ四年、明治八年に及んだ。この間彼が如何に土人の啓蒙に盡したかは、その校外敎育ともいふべき夜話の筆記が殘つてゐるのでも分かる(三)。明治八年一月、信介は閑を得て歸鄕したが、廢藩以來禮讓館もなくなり、鄕里の敎育が頗る振はぬのを見て、諸有志と謀り、既に小學校を卒業した者若しくは小學に通學してなほ餘暇のある者の爲めに一の學舍を設立し、大に鄕里の子弟の敎育を振興して自治獨立の計を得させようとした。信介は間もなく井手に歸つたが、この時の案が熟して、遂に八年七月三丹自由主義の淵叢

たる天橋義塾の創立となつた。然るに創業の際とて、義塾の經營には並々ならぬ敏腕家を必要としたので、社員は相談し、信介を迎へてこれに當らしめることにした。それが八年八月のことである。これより先き井手學校に歸つた信介は、何か志を立てゝ小學校教員を辭し、京都に出て、宮原節菴、吉田秀穀等の門に出入りして再び書生生活を始めてゐたのである。義塾の學科は、先づ漢學を中心としたものだが、特に法律知識の養成に力を入れて、刑法治罪法等を講授した。

かくて信介の力によつて天橋義塾の基礎は定まつたが、然し信介は間もなく此の年十一月、小室信夫の女幸子(さき)と婚し、小室氏を冒すと共に義塾を去ることになつた。(然し義塾は無事に成長し、塾生は自由の使徒として所在に遊說したので、三丹の自由民權論は全く此の義塾によつて勃興したといはれる)。その小室家の人となつたのは、有吉三七の媒介であると傳はつてゐるが、事實は小室信夫が信介の人物に惚れ込んだ爲めであるといふ。

明治九年の春、信介は始めて東京の土を踏んだ。同時に慶應義塾に學んだともいふが、これは正確には分からない、若し學んだとしても、眞の暫時で、知識としては英學の初歩を學び得た位で止んだのであらう。若し慶應義塾に學んだとせば、それは英學勉强が目的ではなくて、彼が夙にその著書によつて自主自由の論を鼓吹されてゐたと思はれる大福澤の謦咳に接したかつたからであらう。

信介は小室家に入る以前から彼一流の民權論者であつたといふ。これは恐らく時勢と讀書によつて感得したもので東洋流の政治思想がその根底になつてゐたと思ふが、小室家に入つて養父の信夫に接觸するや、洋行歸りの新知識たる信夫から西洋流の民權論を相當に吹き込まれたものと見て可い。それが、更に東京で、養父の關係から種々な自由民權論者と交際談論するうちに、立派に鍛へ上げられて、自由民權運動方面に於て信夫の代理乃至後繼者として立てることになつた。(信夫はいふまでもなく明治七年の民選議院建白に四參議と共に署名した一人である)。

以上はいはゞ小室信介傳の前記乃至第一期である。これからがその傳記として本舞臺に入ることになる。

明治六年、征韓論の問題で廟堂が分裂してから地方的に小動搖をつゞけて來たが、明治十年二月、起つか起たぬかと危ぶまれてゐた大西郷は遂に起ち、西南の大亂となつた。この時土佐に於ても林有造、大江卓、岩神昂等が擧兵してこれに應じようとして歸縣した。林は歸縣に先立ち、小室信夫と何等か談合するところがあつたが、信夫は信介をして林等と同船歸國の途につかしめた。此の時は後藤、板垣も同船してゐたのであるが、信介は板垣、林等と船中で何事か密議するところがあつたといふ。此の密議の内容は分らないが、何をするつもりであつたかは兎にかくとして自由民權を名として一大反政府運動を起さうとしたことは明白といつて可からう。信介は歸國早々有吉三七、澤邊正修、小笠原長孝（信介兄）等の同志を集めてこの事に力を盡さうとかゝつたが、忽ちその異常な擧動が嫌疑を招き、同志九名と共に捕はれて京都府に拘致され、高倉六角の檻倉に繋がれた（後二條の獄に移された）。始めは時が時だけに相當嚴しい吟味を受けたらしいが、格別纏つた罪跡が擧がらぬので、果はたゞ禁錮されたまでゞ、明治十年の暮に多く無罪釋放された。然し信介と三七だけは首魁と見られてか、翌年まで謹愼の中にあり。殊に信介は十一年四月に及んで、——

其方儀鹿兒島縣下賊徒暴擧ノ際道路ノ風説ヲ信ジ漫リニ政體ヲ誹毀スル科ニ依リ禁獄三十日申付ル

旨を申し渡された。然しこれも數日の實刑で後は責付となり。寛大な處置で事が濟んだのは、陰に養父信夫の手が動いてゐたかと思はれる（五月）。

此の時、禁獄中の信介の詩を集めたものを「鐵釘詩存」といふ（序にいふ、囚房無二筆硯一、偶就二厠中一、得二一鐵釘一、毎レ得レ詩以印二書帙一、僅備二他日遺忘一云々）そのうちから信介の志を見るに足るものを一二引いて置かう。

囚身人欲少　心月照二眞如一　幽室無二溫酒一

郷天絶㆓信書㆒ 肉臞飢㆓蟣虱㆒ 意倦夢㆓蕁魚㆒
閑晝將來事 雄圖綽有㆑餘
三刖始知荊璞眞 由來志士多㆓悲辛㆒
四房今夜無聊客 天外明朝飛躍人

更に次の一首の如きは優に作家の域に入つてゐるかに見える。

小檻朝陽暖 幽窓夕籟清 柳青三樹里
烟暗二條城 見㆑雁思㆓郷信㆒ 聞㆑鵑動㆓旅情㆒
人生多㆓感慨㆒ 偏覺毀譽輕

これより先、信介は、謹愼中の無聊を紛らすために大坂日報その他へ匿名（小牟呂新、大江山人等）で種々投書し投書家として名を馳せたが、十二年一月から、正式に大坂日報へ入社し、同紙によつて自由民權の持論を鼓吹することになつた。同年五月同日報の印刷長代理、同七月には社長と署名がある（社長署名は、養父信夫と大坂日報社の間に何か出資關係でもあつたからではないか）。此の社長は翌十三年三月まで續いてゐるが、この役が相當激務であつたものか、信介は健康を害し、此の年四月頃、大坂日報を退社して京都に靜養の身となつた。然し勿論たゞ遊んでゐることはなく、病の快い折々には京都日々新聞に助筆したものである（この新聞はいはゞ大坂日報の分身の如く、信介の友人で宮津人の島居誨等が關係してゐた）。かくて夏から秋にかけて養生に過し、漸く病氣も快癒したものか、十三年十一月には大坂日報に復社して、間もなく印刷長と署名した。さうして更に十四年には監事となり、さては種々な名目で、十五年二月同新聞が日本立憲政黨新聞と改まつた後までその關係がつゞいた。なほ十三年十一月復社後一方

朝日新聞大阪からも懇望されて編輯主任の如き位置につき、それが十四年三四月まで及んだ（四）

こゝで私は筆を轉じて小室信介の政治運動を述べたい。

明治十年の西南の亂によつて、武力抗爭の幕が先づ閉ぢられたので、言論戰による政治鬪爭が漸く盛となる。此の政治鬪爭の中心に立つたものは土佐の立志社（板垣退助、片岡健吉等の創立したもの）で、各地の政治有志家も立志社の動靜に響應した。明治十一年の四月立志社が主盟となつて大阪に於て愛國社の再興（といふよりも寧ろ擴大運動）を企て、各地方に向つて遊說員を派し、同年九月、大阪に大會を開いて、愛國社再興合議書を定め、明年大會を開くことを約した。然しこの時は主として土佐を中心として士族階級が動いたのみであつた。然るに翌十二年三月、約の如く愛國社第二回大會を大阪に開き、同年十一月第三回大會を同地に開くに及んで、運動は次第に全國的になつた。さうして國會開設願望といふ目的が定まり、愛國社が擴張されて、關東關西の二つとなり、且つこれに參加した全國二十餘の同盟各社は各自大會の主旨によつて遊說して政治鬪爭の擴大に努力することになつた。十三年三月、愛國社は第四回大會を大阪に開いたが、この時には立派な全國的運動で、同盟が二十七社會衆は一府二十二縣八萬七千人の總代百十四名が集つて國會期成同盟規約を議定し（國會開設に加ふるに、憲法制定をそれと不可分の條件と見て國約憲法の制定を請ふ意味もその主旨に包含された）愛國社なる名を國會開設願望有志會と改めた。かくて愛國社は此の年四月の集會條例によつて解散させられたが、この大會の決議によつて具體的の國會願望運動が起され、此の期成有志會の代表は勿論これと直接間接に關係ある全國各社の有志總代が太政官、元老院を國會願望の建白で惱ますに至つた（政府は又政府で、かゝる猛運動を取締る一方、この願望の主意に應ずるやう政府だけの努力はしてゐた。この點には今觸れずに置く）。

政府は此等諸有志の願望を悉く却けた。それで期成有志會は前回會合の際の決議に基づき、善後策を議する爲め、十三年十一月第二回大會を東京の元愛國社支社に開いた。折柄大先輩板垣の上京があつて（表面私用と稱す）、自由運動者のために氣勢を添へること大なるものがあつた。期成有志會はこの會で、大日本國會期成有志公會と改稱し、前の合議書を改定した。善後策としては、國會再願望の件について議論が種々あつて決せず、結局各社の自由問題とすることに定まつた。同時に一部有志は、期成同盟の加盟者たると否とに關せず、同主義の者が集まつて政黨を組織して運動を永久的たらしむべきであるとなして、自由黨結成の盟約を約した。こゝに於いて國會願望運動は又一段と具體的なものになり、明瞭に政黨運動の形をとつて來て、各地にその地名を冠した自由黨が續々起つて來た（これ等が大同團結し又傍系分子も入れて十四年の自由黨となるのである。）

先づ自由黨興起までの形勢は大體かういふものであるが、此の間に於いて信介は何をなしたか。從來知られてゐないだけに、少し詳しく語りたい。

第一に注意したいのは、信介の政治運動は根本理論としては大略大阪日報（後には立憲政黨新聞）中心にしたものであり、又その運動も最初から土地に卽した具體的のものではなく、自由民權の大所からした應援的な同情的な啓蒙的なものが多分にあつたことである。再興愛國社の第一回會合は謹愼中であつたから止むを得ないとしても、その以後の數度の大會には單に同情的態度をとつただけで、自分から此の大運動に飛び込む如き思ひきつたことはしなかつた。京都府下は總體として政治的覺醒の遲いところであつたが、信介の故里の宮津もその例にもれない。だが信介は新聞によつてその政治的覺醒の必要を叫んだのみで、最初は此の覺醒運動の第一線に立ちはしなかつた。この第一線に立つて宮津を中心に丹後一國の政治的覺醒を目ざして苦鬪の幾年を續けたのは、信介の盟友澤邊正修であり、信介の兄小笠原長孝であり。天橋義塾の人々であつた。信介は勿論此の人々と提携はして居り、この人々に應援はしたも

のであるが、自ら第一線に立つといふよりも、寧ろ黒幕として種々盡力した。

だが流石の丹後人も、明治十三年頃に及んでは、澤邊等の努力が功を成して、漸く政治的に覺醒して來た。十三年三月「丹後有志人民ニ告ル書」が書かれて、人民總代を派して國會請願の大運動に歩調を合せようといふ決心の示された如き、その一例である。京都府知事槇村正直は、その治下に國會開設運動をするものゝ出たのを見て大に狼狽し急に澤邊等を召喚して或は說諭し或は威壓してかゝる運動を止めさせようとしたが、澤邊を始め天橋義塾の有志達はさういふ障碍ぐらゐで閉息するものではない。總代派遣のことは一時延期したものゝ、宮津を中心に近郷近在を益々盛んに遊說したので、國會開設を熱望する者が日に日に增すのみ、遂に十三年十月に至つて、再び國會願望のため總代を派遣することになり、天橋義塾長澤邊正修は丹後一國有志の總代として同月二十五日上京の途についた。然るに澤邊が京都につくや、京都府下有志が更にその總代の任を托したので、澤邊は山城及び二丹の有志總代として十一月二日揚々と出發した。運動のこゝまで盛り上るまでには、信介も終始盡力したことは勿論である。その上、かく丹後人士が全國的運動に乘り出して來た以上は、その運動の統一をとつて中央と連絡を計る人がなくてはならぬ。然るにこの留守司令には、いろいろの點で小室信介程の適任者はない。そこで黒幕の人が遂に第一線に引出されることになつた。

上京後の澤邊が國會期成同盟の幹事として活躍したことは周知の事實であるから述べない。たゞ此の序に澤邊に關して餘り人の知らないことを二事だけ附記して置く。その一は、告國會期成同盟有志諸君書といふものゝ發表で、これは今後の自分達の運動は人民を味方にして進むより仕方がないから、今から新聞の刊行なり良書の飜譯なり出版なりをして人民の啓蒙を計りたいといふ遠大な計畫を述べたもの、今一つは、期成同盟會の議事終了後、澤邊が單身で國約憲法請願を太政官に提出したことである。

第一線に立つた信介は先づ何をしたか。新聞を利用して此の一般的氣勢を煽つたことはいふまでもないとして、實地運動の第一歩は天橋懇親會の政治的利用であつた。此の會は從來京阪にゐる宮津人の懇親會といふだけのものであつたが、それを信介は政治的結合に變革させ、同時に擴大さして先づ丹後一國の有志の會合とし、次いで兩丹有志の會合とし、遂に十四年六月三丹有志の會合とした。澤邊は十三年暮歸國してから、有志の團結に努力して兎もかく丹後自由黨なるものを作り上げた。信介の此の努力は、勿論澤邊等と相應じたもので、兩丹懇親會、三丹懇親會は、最早や單なる一時的懇親の會ではなく、丹後自由黨その他同地方の自由主義小政黨の外廓的結合となつたのである。これより先き十四年四月中島信行が丹後自由黨に招待されて來す遊るや、中島を案内した信介は、これを機會に澤邊と謀つて中島を押し立てゝいさゝか大規模な三丹遊説を試みたが、それが地方人士の啓蒙乃至團結に大に役立つた。中島は元老院に於ける民權議官として囑望されてゐたが、元老院起案の國憲按に關して政府と意見の相違を來して前年十月慨然辭職した。これが全國民權家の人氣に投じ、忽ち板垣退助と並ん在野民權家の副總帥と祭り上げられるに至つたものである。然かも此の時の關西漫遊は辭職直後のことゝて、各地の歡迎熱は殊に甚だしいものがあつた。慧敏な信介は、此の人と此の機會を利用したわけであるから成功は當然であつた。

此の時は大坂日報が關西に於ける自由主義運動の啓蒙的應援本部の如く見られてゐたので、社員はよく諸方の自由懇親會政談演說會に出援したものであるが、信介も大和地方その他に出張した。

十四年八月北海道開拓使拂下問題が東京方面で喧しく論議され始めるや、京阪にもそれが波及し、關西各地の自由主義者が期せずして奮起した。かくて彼等の運動戰線はこの問題によつて一致結束が成り立ちかけたところへ、東北漫遊を名として板垣が立志社の精鋭を伴なつて自由主義の大遊說を試みるべく上つて來た。この時の板垣の人氣は眞に凄まじい程で、時の大阪朝日新聞は「雷雨來矣、雷雨來矣」と題して、大低氣壓が海南土佐から起つて日本を蔽ふ

意味を諷した。九月十日大坂日報が主催で大阪戎座に於いて板垣を中心に立志社の連中及び大坂日報社員の政談大演說會を開いたが、此の時の板垣の演題は「未開ノ人民ト雖ドモ權理ニ差等アル可カラズ」といふので、自由平等の大道理を飽くまで高唱して五千餘の聽衆を醉はしめた。その翌十一日、中ノ島自由亭に於いて關西自由主義者の大懇親會が開かれたが、その席上で板垣は自由黨の將來及び東北漫遊の目的について演說し、これ又多大な感動を與へた。板垣の說いたのはいはゞ(第一)人民は地方的に團結し、同主義の團結が一大政黨をつくるべきこと、(第二)一大自由主義新聞を發行すべきこと、(第三)一大出版會社を興し自由民權の學術的啓蒙を計ることの三項であるが、丁度結束氣分の出かゝつてゐた關西の自由主義者は大にこれに共鳴し、板垣の退阪後、直ちに正式に各地自由黨聯合のことを決議し、近畿自由黨といふものを組織した。十四年九月中旬のことである。その決議に曰く、——

目的

第一條　我黨ノ目的ハ自由ヲ擴充シ人民ノ幸福ヲ增益スルニアリ

第二條　我黨ハ現今ノ政治ヲ善美ナル立憲政體トナスニ務ムベシ

同盟

第三條　同盟ハ全國同主義ノモノト相結合スベシト雖モ暫ク我黨ノ茲ニ會スル山城、大和、河內、和泉、攝津、紀伊、丹波、丹後、但馬、播磨、美作十一ケ國ノモノヲ名ケテ近畿自由黨トシ其他逐次增加スベシ

本部地方部及役員

第四條　本部ヲ大坂ニ置キ日報社ヲ以テ假事務所トシ左ノ役員ヲ公選ス

事務委員　三名

第五條　地方部ハ一國ヲ以テ假リニ一部トシ各幹事ヲ定メ其住所氏名ヲ本部及各地方部ヘ通ズベシ

但地方ノ便宜ニヨリ一國ヲ數部トスルコトアルベシ

新　聞

第六條　我黨ニ於テ一ノ政黨新聞ヲ發行シ有用ナル書籍ノ飜譯出版ヲナスベシ其資本金ハ大約五萬圓トシ廣ク同志ヲ募ルベシ

演　舌

第七條　各地方部ニ於テ演舌員ヲ定メ之ヲ往來セシメ各地方部ヨリ集會ノ照會アルトキハ之ヲ派遣スベシ

第八條　來ル十一月ヲ以テ再ビ大坂ニ會シ新聞發行等ノ方法ヲ議定スベシ

名簿並報告

第九條　各地方部ニ於テ自由黨名簿ヲ編製シ本部ニ通ジ各地方部ヘ通ズベシ

第十條　大坂日報社ニ近畿自由黨報告ノ一欄ヲ設ケ黨中ノ報告ヲナスベシ

十四年東京の自由黨に先立つて關西の自由黨が結成された事は、政黨史上何等の記述はないが、事實は此の通りであるから、今後この點だけ訂正を要しやう。

信介は不幸にして、此の年九月實母の病氣のため宮津に歸省し、ついで實母死去のため十月九日迄同地に滯留してゐたので、板垣の大演說もきかず、近畿自由黨の結成にも直接與からなかつた。だが此の自由黨組織に賛成であつたことは、勿論で、これは信介が宮津滯留中、度々澤邊等と演說會を開いて有志の啓蒙鼓舞を試みてゐる一事でも知られる。

明治十四年十月には所謂十四年の政變があり、續いて憲政史上最も重大な國會開設の大詔が降下された。こゝに於て近畿自由黨は十一月の大會を待たずして再組織の必要を見るに至つた。彼等は十月二十五日を以て聖詔降下紀念の

意味で一大政談演説會を開き、此の聖詔に見出される陛下の御意志に報ずるには、國會準備のための立憲政黨を組織するにある旨を發表し、殆んど時を移さずその實行に着手した。此の時から彼等は、自ら立憲政黨と稱したが、この時はまだ嚴然たる公稱となつたものではなく、一種の私稱とも、乃至立憲的政黨といふ普通名詞とも見らるべき性質を可成多くもつてゐたのである。近畿自由黨の假本部たる大坂日報社は直ちにいはゞ立憲政黨組織本部となり、社員は立憲政黨組織のため大擧して各地遊説の途につくと共に、別に小島忠里を東京特派員として派遣し、東北漫遊中の板垣退助中島信行に立憲政黨の成立を報ぜしめて二人が早く來阪して應援せんことを希望し、一面東京の自由黨（期成同盟會と舊自由黨と國友會と合せるもの）と聯絡をとらしめた。板垣、中島は關西自由黨のいはゞ生みの親であり、暗默の間に黨首問題等についての默契があつたものであらう。

こゝで一言したいのは、立憲政黨組織當時の幹部である。普通に立憲政黨の幹部といふと、中島信行、河津祐之、草間時福云々と擧げるのを常とするが、これは立憲政黨へ加入した有名な人々で創立した人々ではない。創立した功勞者としては、古澤滋（當時大坂日報社長）、小室信介、澤邊正修、城山靜一、田口謙吉、小島忠里、善積順藏、永田一二、新井毫、菊池侃二、岡崎高厚等の人々を擧げるのを至當とする（中島は十五年一月、草間は同年五月、河津は同年九月加入したものである）。

社員の遊説分擔に從ひ、丹波丹後但馬因幡等山陰地方を分擔した信介は、十四年十一月五日、遊説員新井毫と共に大阪を發し京都を經て第一回遊説の途についた。十一月七日は丹波園部に同黨員で熱心家の谷紀百を訪ふて政黨組織の懇談を遂げ、八日谷も同行で須知驛の臨時懇親會に出席、九日新井と共に福知山に赴き、同十一日宮津、十二日岩瀧村（小室家の本據）、十三日宮津の懇親會（會衆二百人）、こゝで一行に天橋義塾の生徒若干が加はり、十五日から十九日まで宮津と岩瀧村を中心に遊説して大成功を收め、十七日宮津佛性寺の大懇親會には會衆千三百人、その夜の

政談演說會には聽衆千五百餘人と算せられた。二十二日峯山の自由大懇親會（會衆五百三十人）、翌二十三日同所で學術演說會（聽衆千餘人）、二十四日峯山より久美濱へ赴き、二十六日同地に自由懇親會を開いて盛會、二十九日まで同地を中心に附近の各村落を遊說し（交通不便でよく轎にのつたが、轎から投出されて打身をしたこともある）、十一月三十日但馬の湯島村、十二月一日こゝで政談演說會、二日自由懇親會で盛會であつた。信介はいさゝか健康を害したので、八日までこゝの溫泉に靜養し、新井が一行と共に先行した。信介は八日豐岡に出たが、更に邪熱に犯されたので、二十二日江原の玄光寺で但馬氣多郡有志の懇親會に出席したのみで靜養を專一とし、二十三日八鹿村、こゝで新井と分れ、新井は一旦歸阪し、信介及び天橋塾生は宮津に歸つた。

明治十五年一月、信介はまだ宮津岩瀧に滯在して遊說をつゞけ、頻りに懇親會、酒屋會議（酒屋會議は至るところにあつたものと見える）等に臨み、一月二十五日には更に大阪からまた新井毫等と舞鶴の自由懇親會、學術演說會に出席し、宮津に歸つて又々演說會懇親會等に臨んだ。二月五日新井等と別れ、二十二日までまだ宮津岩瀧地方を往來してゐたが、二十二日再び峯山、二十三日久美濱、二十四日但馬湯島村、二十五日豐岡に至り佛敎講演會、二十六日學術演說會に臨み、二十七日八鹿村、二十八日養父市場、三月一日竹田村、二日生野銀山（此の夜懇親會）、至るところ有志に面會して政黨組織のことを懇談し、三日播州加古川に出で、第一回の山陰大遊說を終つて四日歸阪した。

信介が山陰遊說に奔走してゐる間に、近畿自由黨のプログラムの第二條たる一大政黨新聞發行の計畫も、大和の土豪土倉庄三郎の經濟的援助によつて豫定の如く進行した。立憲政黨では初め板垣の社長、中島の主幹といふ案（或は總理板垣、社長中島といふ案）で小島忠里に交涉せしめたが、板垣が自由黨總理、中島が同副總理に選ばれたので二人とも辭退した。それで小島が再三東京大阪の間を往復して、自由黨方面に交涉し、漸く妥協が熟して副總理中島信行を立憲政黨の總理兼立憲政黨新聞の社長にすることになつた。それで十四年十二月、大坂日報を菊池侃二の名で買

收して、社内の部署を更へ、社長中島信行、主幹古澤滋、監督小島忠里、澤邊正修等と定めて、十五年二月をもつて日本立憲政黨新聞と改題して續刊した。こゝに於いて日本立憲政黨の陣容は先づ成つた。その立黨大意及び申合に曰く

立憲政黨大意

一我黨ハ明治元年三月五條ノ御誓ヲ奉體シ明治八年四月詔書「國家立憲ノ政體ヲ立テ汝衆庶ト倶ニ其慶ニ賴ラント欲ス其レ能ク朕カ旨ヲ體シテ翼賛スル所アレ」トノ宸旨ヲ對揚シ奉リ以テ　皇室ノ尊榮光寵ヲ增シ國人ノ權利福祉ヲ進ムルヲ以テ忠トス

一斯ノ志ヲ同フスル者ヲ我立憲政黨トス

一我黨ハ汎ク斯ノ志ヲ同フスル者ヨリ組織スル所ノ公黨ニシテ政治ニ關スル事項ヲ講談論議スルガ爲メニ結社シタルモノニアラズ故ニ我黨ノ志ヲ達スルカ爲メニ將來ニ於テ結社若シクハ其他ノ方法ヲ要スルトキハ別ニ規則ヲ定メ國法ニ遵フテ之ヲ爲ス可シ

申合書

第一條　黨員ノ協同及ヒ意志交換若クハ其他ノ諸事ニ便宜ヲ得ンガ爲メ總理一名幹事二名常議員七名以上書記若干名ヲ置クベシ

但總理幹事ハ當分無給トシ書記ハ有志醵金ヲ以テ十圓以下ノ給料ヲ與フベシ

第二條　各地方ニ在ル黨員ハ其地方ノ便宜ニ寄リ若干名ノ委員ヲ置キ其ノ地方ノ情況ヲ幹事ニ報道スベシ

第三條　幹事ハ毎月一回或ハ隔月一回政黨報告書ヲ造リ之ヲ印刷ニ付シ會議記事及ビ各地方黨員ノ情況ヲ各地方黨員ニ報告スベシ

第四條　黨員ノ姓名住所ヲ明ニスル爲メ各地方委員ハ其地方ノ黨員姓名簿ヲ設ケ記名捺印セシメ其寫ヲ幹事ニ送致

スベシ

第五條　黨員タルモノハ本部ニ於テ製シタル一定ノ證票ヲ交付シ黨員ノ證トスベシ

第六條　一年一回大阪ニ於テ黨員ノ大親睦會ヲ開クベシ

但シ其入費ハ自費若クハ有志ノ醵金ヲ以テスベシ

第七條　總理ハ其見込ニ依リ派出委員若干名ヲ定メ各地方ニ派出セシムベシ

但シ其旅費日當ハ自費若クハ有志醵金ヲ以テスベシ

第八條　黨員タラント欲スル者ハ一己人若クハ組合ナルトヲ問ハズ已ニ黨員タルモノノ紹介ニ依リテ其地委員ニ申出ツベシ委員ハ其不都合ナキヲ察スレバ直チニ黨員簿ニ記載シ捺印セシメ黨員タルコトヲ證スベシ

但シ地方委員ヲ經ズシテ紹介人ヲ以テ直チニ總理ニ申出ルモ妨ゲナシ

第九條　黨員ノ協同一致ヲ得ルトキハ新聞學校其他社會ノ必要ナル事業ヲ起スベシ

第十條　七名以上ノ常議員ヲ設ケ黨員ニ代リ平常黨員ノ利害ニ關スル事件ヲ議定スベシ此場合ニ於テハ總理其議長トナルベシ

第十一條　總理常議員幹事在任期間ハ滿一ケ年トス

第十二條　此申合書ハ黨員總會ニ非レバ變更スルヲ得ズ

十五年三月十五日から臨時大會議を開き、代表者三十四名が熟議討論した結果、政黨新聞社の維持方法、立憲政黨申合書、地方派出員のこと、新聞株式募集の規則等を議了した。而して申合書に從つて、立憲政黨役員を左の如く選出した。

總理　中島信行

幹事　小室信介　　小島忠里
常議員　古澤滋　　瀬川正治
菊池侃二　　伊藤熊夫
城山靜一　　田口謙吉
岡崎高厚

以て信介が立憲政黨中に如何に要望を負ふてゐたかゞ分るであらう。此の役員中、小室、小島の幹事はその功勞から當然であるが、信介と功を分つべき澤邊が漏れたのは、一見不思議と思はれる、然し澤邊は政黨新聞社の方で會計監督の大任を引きうけてゐたので、さう一時に方々に手を出しかねたからであつたらう（後、七月の大會で常議員を增加した際に、果して澤邊は常議員に當選した）。

十五年三月、自由黨總理垣退助は竹内綱その他數名の黨員と共に黨勢擴張のため遊說の途に上り、甲府から、靜岡名古屋を經て、四月上旬美濃に入つた。立憲政黨の諸氏はこれを聞き、板垣の一行を招待して一大懇親會を催す豫定を立て、信介は代表として出迎へ且つ打合せのため四月四日大阪を出發し、五日岐阜で板垣一行と會つて打合を了した。四月六日、同地金華山麓の神道中敎院に於て板垣歡迎の自由大懇親會が開かれたので、信介も板垣の一行に加はつてそれに臨席し、板垣についで一場の演說をした。彼の次には、內藤魯一、宮地茂春、上岡美枝等の人々がそれぞれ演說した。それが終つて酒宴となつたが、酒宴に先だち病氣を押して出席してゐた板垣は衆に先だつて退席せんとしたところ、中敎院の入口に於て刺客相原尙褧の襲ふところとなつたのである。內藤その他の人々は直ちに馳けつけ一方刺客を捕へ、一方板垣を介抱する。板垣は數創を負ふたが、重なものは胸部の二創であつた。板垣は介抱してゐ

る人々に向つて胸を二つも刺されてゐるからもう命はだめだといつた。そこで側で介抱してゐた信介は、「息にかゝりますか、聲には變りないやうですが」といつたので、板垣も始めて心づき、成る程さういへば息には障りがない、助かるか知らんといつたので、一同愁眉を開いた(五)。信介は早速政黨新聞へ電報をうつて號外を出さしめた。これはジャーナリストとして如才がない。翌七日には中島信行、城山靜一等の人々が驚いて飛んで來た(この騷動が如何に大變なものであり、又今後の民權運動を如何に深刻なものにしたか、それは政治史上周知の事であるから、今こゝでは贅しないことにする)。板垣は負傷治療のため四月十五日まで岐阜に滯在してゐたので、信介も矢張り滯在してゐた。信介は人當りがよくて顔が廣かつたので應接掛りをしてゐたのである。一行の岐阜出發に先だち、四月十三日岐阜末廣座に於て、政談大演說會を開き、自由主義のための大示威を試みた(中島、城山、小室、宮地その他が出演、小室演題「板垣死ストモ自由ハ亡ビズ」、)。四月十五日岐阜出發、信介は竹內綱と共に大垣に赴き、十六日彥根にて板垣と會した。十七日板垣一行は彥根を發して大阪に直行し、信介は竹內綱、植木枝盛と共に、板の垣代りに彥根の自由懇親會に臨んで、四月十八日歸阪、同月二十二日大阪戎座の政談演說會に於て「板垣君遭變實地目擊ノ報道」を演說して大喝釆を博した。

此の時立憲政黨では、立黨後第一回の黨勢擴張を計畫してゐたので、歸阪早々の信介は又も本部派遣委員として、第二回の(一層大規模な)山陰地方巡回に出かけることになつた。この行の報告を「山陰日記」といふ。四月二十八日大阪を發し、龜岡園部を經て水戸に至り、二十九日檜山、生野、福知山、河守を經、三十日宮津につき、五月三日まで宮津岩瀧に滯在、有志に接し、且つ立憲政黨懇親會、學術演說會、政談演說會等に臨む。五月五日岩瀧を發し、但馬に入り、太田村に至り、六日出石、養父市場、和田山を經、竹田村に着く。七日竹田の自由懇親會晝夜二回、八日

八鹿村懇親會、九日豐岡を經て湯島に至り、更に美含郡竹野濱に着く、十日同地懇親會、十一日再び同地の懇親會、夜訓谷村懇親會、十二日森村懇親會、十三日七美郡村岡町、十四日同町政談演說會(「立憲政黨ノ志ヲ告グ」聽衆五百餘人)、十五日再び同所政談演說會(「城ノ狐ヲ逐ヒ社ノ鼠ヲ薰ベヨ」、聽衆五百餘人)、夜同所懇親會。十六日二方郡湯村着、十七日同地政談演說會(「卑屈人民ヲ警醒ス」、「立憲政黨ノ志ヲ告グ」、聽衆四百餘人)、十八日濱坂村着、同所懇親會、演說(聽衆五百餘人)、夜再び懇親會。五月十九日因幡國岩井郡岩井宿着、二十日鳥取町着、二十七日同地懇親會(「大阪土産」會衆四百餘人)、二十八日同。五月三十日伯耆の國倉吉着、夜懇親會。六月一日大懇親會(會衆四百餘人、二題を演す)。二日八橋村、夜懇親會。六月三日米子着、四日同地懇親會(「立憲政體ノ正解」、會衆七十餘人)、五日同地懇親會(「急進漸進ノ辨」會衆五十餘人)。六月六日汗入郡淀江に引返し、夜自由懇親會(會衆三百餘人)、六月七日中野村懇親會。八日境町着、夜懇親會。九日出雲松江に至る。十日同地に在り、有志に面接す。十一日同地懇親會。六月十二日から十四日まで玉造溫泉滯在。十四日松江に歸る。十七日同地政談演說會(聽衆一千餘人、「立憲政黨ノ志ヲ告グ」)。六月十八日伯耆境ノ津着、十九日渡村懇親會(「忠君愛國ノ說」、會衆二百餘人)。六月二十日小篠津村懇親會。二十一日境ノ津へ引返す、二十三日米子を經て安來驛着、二十四日松江に歸る。二十五日杵築町着、二十六日同地學術演說會(「大和魂」、聽衆二百餘人)、二十七日夜又懇親會。六月二十八日石見國安濃郡波根東村に着、二十九日有志懇親小宴、三十日同地懇親會、太田村に至る。七月一日同地自由大懇親會(「立憲政體ノ正解」前半、會衆五百餘人)、三日同大懇親會(「立憲政體ノ正解」後半、會衆七百餘人)、夜、太田遂良社員小宴(「板垣君遭難事實」)。七月三日大國村着、四日同地自由懇親會(會衆百餘名、「立憲政黨ノ志ヲ告グ」)溫泉津に至る。五日溫泉津自由懇親會(會員二百餘人)、六日夜有志小宴(「團結力ノ解」)。七月七日濱田町着、八日夜有志小宴、九日夜同地政談演說會(聽衆五百餘人、「立憲政體ノ一斑」、)十日夜又政談演說會(會衆七百餘人、「自由ノ大敵」及び「立憲政體

ノ一斑」の續)、十一日夜自由懇親會。七月十二日美濃郡益田村着、十三日懇親宴會、十四日同地政談演說會(聽衆四百有餘人、「立憲政體ノ一斑」)、十五日同政談演說會(聽衆七百有餘人、「自由ノ大敵」と「立憲政體ノ一斑」の續)。七月十六日鹿足郡津和野着、十七日夜政談會(聽衆七百餘人、「立憲政體ノ一斑」)。七月十八日周防山口町、十九日三田尻、こゝから汽船に乘つて二十一日無事大阪に歸つたが、炎暑の候、實に並々ならぬ努力であつた。從來信介が立憲政黨に何れ程盡力したかといふことが知られてゐないのを慨し、これを明らかにしようとする餘り、いさゝか敍述が煩細に流れたかとも思はれるが、その點は酌量されたい。

信介の歸阪後間もなく、七月二十三日から本部の會議が始まり、二十五日の大會で、大意の第三項を削除して、正に政社として結黨屆を出すことにした(集會條例による警察の認定のため)、同時に黨務多端のため役員の增置を議決し、副幹事を新設し常議員を增員した。信介は澤邊、草間、北村左吉などゝ共に常議員に當選した(幹事兼任)。二十八日には道頓堀角芝居の政談演說會で「山陰土產」の一題を以て遊說報告に代へた。八月三日政談會といふので城山、土倉庄三郞、和田彥次郞等と木津驛に會したところ、翌四日政談會の直前、本社から急使があつて、呼び歸された。それは、折柄勃發した朝鮮事變視察のため、特派員として出張することを懇請したものであつた。信介は山陰巡回の疲勞の醫えてゐない時ではあつたが、かねてから東洋問題に眼を着けてゐないでもなかつたので、慨然として引き受けた。それで彼は、折柄大阪の藤田傳三郞邸に滯在中の井上參議(遣韓大使)に面會して(彼の養父信夫は井上とは舊友である)渡韓のことを依賴し、八月六日には神戶發の玄海丸に同乘、いよいよ朝鮮視察の途に上つた。此の行の報告は二種あり、公けの方は「朝鮮詳報」、私のものは「朝鮮紀行」といふ、前者は日韓兩國の交涉始末を詳記したもの、後者は信介個人の見聞進退を記したもので、共に政黨新聞紙上で讀むことを得る。

信介は八月十日、花房公使、高島少將の一行と共に明治丸に乘船し、十二日濟物浦につき、十三日仁川まで赴いた

が一旦艦中に引歸し、十六日高島少將一行と共に正式に上陸し、十八日京城に入つた。だが京城が案外無事で一向開戰の模樣もなく、且つ信介自身連日の疲勞その他のため病氣となつたので、八月二十一日には濟物浦に引歸し、爾後はこゝを中心に養生しつゝ視察に從つた。その後日韓兩國の交渉は一度破裂しさうになつたが、結局韓廷の讓步で急に談判結了となつたので、信介は八月三十一日濟物浦發の迅鯨艦に便乘させてもらひ、馬關から汽船に乘り換へて、九月四日大阪に歸つた。

此の行信介は種々得るところがあつたが、その第一は韓國の虛實に對する正確な認識である。明治以來日本政府なり民間有志なりは朝鮮を堂々たる獨立王國として相手にして來たが、信介はこの行の見聞によつて、韓國政府に獨立せる行政能力も何もないことを知り、朝鮮なるものゝ眞相を幾分捉んだ。第二に、朝鮮に對する支那の勢力が意外に根强いこと、同時に支那に對する朝鮮の依賴的態度も案外根深いことも知つた。第三に、朝鮮に對する支那の態度を通じて、支那の兵力が豫想以上强力な充實したところがあることを知つた。第四に、朝鮮の現狀がかくの如くであり支那が朝鮮に對しかゝる態度で臨んでゐる以上は、朝鮮はやがて東洋のバルカンとしてこれに隣接する新興日本帝國のため百年の禍患を生ずるに違ひないことを察し、日本は早く朝鮮支那に對する覺悟を固む可きであると決するところがあつた。かくてこの行以後信介は、卒先して東洋問題の急を唱へることになつた。この意味で、十五年の朝鮮行は信介の生涯で劃期的に重大なものであつたといひ得やう。

十五年九月日本立憲政黨が正式に結黨を許可された。だが間もなく立憲政黨新聞の主幹古澤滋が上京して自由新聞を主宰することになつた。古澤の上京は自由黨内訌のためとなつてゐるが、單にそれだけではなく、中島と古澤の間があまり面白くいかなかつた點があり、古澤は早晩立憲政黨新聞社を去る腹をきめてゐたらしい。想像するに信介が

二人の間にゐて調和してゐたものではなからうか。――だが、今はさう穿鑿だてをせずに、自由黨の内訌から上京することになつたとして置かう。

自由黨の内訌とは何か。これも信介には直接關係がないので詳しく語らないが（末廣鐵腸傳參照）、一言でいへば、板垣の負傷快癒後、洋行問題がもち上つた、表面の理由は豫後靜養旁々西歐の政情を見て我が國の自由主義の發展に資するといふのであるが、一つは、板垣の負傷から自由黨員の感情が激化して此のまゝだと何時板垣が西鄕の二の舞をせぬとも限らぬので、友人や側近者が心配して外遊を勸めたものとも見られる。此の外遊は、自由黨を贊成反對の二分子に分けた。そこへ一石を投じて波亂を擴大したのが改進黨系の東京橫濱每日新聞に掲げられた洋行費の出所問題である。同紙の暗示によると、此の費用は政府筋から出てゐるといふ（六）。これが自由黨内の對立を更に深刻なものにした。かくて洋行反對派は馬場辰猪、末廣重恭、大石正己等を始めとして脫黨し、爲めに機關紙の自由新聞が人不足になつた。そこで古澤へ白羽の矢が立つて、自由新聞主宰となつたものである。

自由黨内の内訌はこれで兎もかくも鎭まつたわけだが、自由黨の改進黨に對する惡感情は消えるどころでない。自由黨は激復的に、改進黨及びその黨首大隈重信が海上王三菱會社から金を貰つてゐることを公然と非難し、又改進黨の幹部が前官吏である點を指摘して、かゝる政黨は眞の民權黨ではない、僞民權黨であると罵り、更に轉じて三菱會社そのものに痛烈な攻擊の矢を向けた。

かういへば如何にも自由黨が純な愛黨的衝動からのみ改進黨や三菱を攻擊したやうで、如何にも尤もに受けとれるが、この攻擊には裏がある。これより先き政府では三菱の橫暴を牽制し、又大隈の糧道を絕ち切るといふ意味で、政府保護の下に三井系財閥を動員して共同運輸會社といふものを設立した。三菱の頭領岩崎彌太郎は敢然この企圖に批難を浴せたが、政府側は然し遮二無二これが設立を强行したのである。ところで、信介の養父小室信夫は此の共同運

輪の創立委員の一人であり、創立後の理事の一人であり、且つ此の計畫の立役者たる井上參議(馨)の齊友でもある。古澤と信夫の關係はいふまでもない。以前は古澤は小室の書記といはれた位であり、英國留學、民選議院建白以來の間柄である。井上の手が信夫を通じて如何に古澤を動かしたか、それは想像がつく。即ち、自由黨の三菱會社攻擊はいはゞ一石二鳥の妙計であつた。(勿論自由黨が皆が皆古澤と同じ動機で動いてゐたといふのではない)。

古澤は十五年十二月をもつて自由新聞紙上三菱會社攻擊の火の手を揚げると共に、大阪の立憲政黨へ應援を求めた。古澤は勿論信介を第一に呼び迎へる心算であつたらうが、信介は何か考へるところがあつたか、自分は動かず、先づ(十六年一月)城山靜一、和田彥次郎等を東上せしめた。信介は立憲政黨の幹事といふ立場から、此の泥仕合に立憲政黨を投げ込むことを欲しなかつたものかも知れない。或は輕擧して信夫との關係から自己の進退に意外な批判をうけることを愼んでゐたものかも知れない。事實、信夫が共同運輸なる官設會社の役員に名を連ねてから信介も志士仲間から多少疑惑の眼を向けられてはゐたのである。それで彼は、一月紀伊、大和、二月は宇治と遊說に出張して他意なきを示してゐたが、三月に入つて急に旅裝を調へ、その九日、名を東海道甲州地方漫遊に托して東京に向つた。

信介の東行は、早晩豫期されたところであるとしても、何うして三月九日に急に出發したものであらう。三月十五日には立憲政黨の大會がある筈であり、此の大會には解黨問題が提出されることが豫定されてゐたらしいのに、黨幹事乃至有力黨員たる信介が此の大會を前に急に出發して、而かも直眞ぐに東上でもすることか、悠々と東海道を上つて行つてゐる。矢張りこれは立憲政黨に對して、或は解黨の件について、又は幹部の何人かに對して不平不滿の抑へかねるものがあつたのではなからうか。さういへば、十六年に入つては、河津、草間の如き學者派が黨內に勢力をもち政黨新聞の如きは實權が學者派の手に歸した觀のある點が、一寸注意される。要するに黨首の中島信行に群雄駕御の才がなかつたものであらう。

信介は、奈良から伊賀に向ひ、月瀬の梅を賞し、東海道を下つて、濱松に至るや、折柄遊說中の自由黨員西村玄道・土居光華、及び城山靜一と落ち合ひ、同道して東行し、三月二十四日着京した。信介が道中にゐるうちに、三月十五日大阪立憲政黨は解黨を決議し（發議者は澤邊正修）、殆んど滿場一致で可決して、團體を解き、名簿を廢し、たゞ、「形而上」的（主義上）の集合體たらしめることになつた。時の勢ひもあり、政府の壓迫もあり、組織の手違、內訌もあつたらうが、信介等が組織當時の苦心努力を思へば、この擧はいはゆる知識階級の粘ばりなさを餘りに露骨に示したものである。

信介は着京早々古澤に招かれて、自由新聞の社友乃至客員（何れの肩書も使つてゐた）となつた、勿論立憲政黨新聞とも絕緣したのではなく、此方でも社友と稱してゐるが、此の以後信介の活動中心は自然大阪から東京に移り、立憲政黨の小室信介ではなしに、自由黨の小室信介となるわけである。

此の間、自由改進兩黨の軋轢は都鄙ともに績き、たゞに績いたばかりでなく次第に高潮に達して來た。此の軋轢が自由萬歲僞黨撲滅の大旗を押し立てゝ正義と腕力を武器とした自由黨側に分があつたことはいふまでもない。然し自由民權運動の大局からいへば、始めからして勝つたとて何の意味もない感情的鬪爭であつた。況んや、裏面に政府の手があるに於てをや。兎もあれ、十六年四月の自由黨定期大會で改進黨討伐を正式に決定してからは、自由黨の三菱攻擊僞黨撲滅の叫びが最高潮に達し、五月十三日及び二十日、久松座に政談大演說會を開き、これを手始めに各地に遊說して、改進黨及び三菱會社を口を極めて痛論した。信介が始めて出演したのは、五月二十日の大演說會からであるが、「海坊主退治の相談」と題して諧謔の辯を振ひ、殊に喝采を得た。

（前略）第十三席は大阪の小室信介氏が海坊主退治の相談とて本題に入る前に余未だ言論の自由を得ざるが爲めに事を譬喩に取り言を滑稽に假る旨を述べ本題に入りては海坊主の性質形體等を說き保護專賣に依て暴橫の擧行をな

す者は恰も海坊主の怪と齊しく此怪物が社會を惱まし人類を苦しむる有樣より其退治の手段策略如何を細說され聽衆をして特にその感情を惹き起さしめしにや殊に非常の喝采を博されたり（後略）（七）

「海坊主」が海上政府といはれた三菱會社を指す諷語たるは勿論だが、如何にも恰好な諷語なので、この後大に流行し、大熊退治（大隈退治）と共に諸方の演說會で誰によつても反復された。信介は此の一席で、一躍人氣を得、遊說員中の花形として、五月から六七月へかけて、或は橫濱、或は八王子、或は東海道筋を遊說した。勿論至るところで喝采された。然し信介自身には十四五年の頃、立憲政黨のために山陰近畿を遊說した如き意氣と熱心とは感じられなかつたらう。

信介はかういふ走馬燈めく生活にゐながら、寸閑を窃んでは筆硯に親み、大阪以來書きかけてゐた『東洋民權百家傳』の完成につとめて此年八月初編三冊を公にし、十七年一月二編（二編以下、『義人百家傳』と改題す）、同年六月三編まで出した。

獨り『民權百家傳』に止まらず、信介は十六年から十七年へかけて盛んに政治小說を書き出した、それ等の小說の如何なるものかは後に詳述するとして、總體十六年三月東上以後の信介は、第一線の實行運動から漸く身を引いて稗史小說に隱れた態を示してゐる。これは恐らく信介の意識的な轉向であらう。彼は、不自由極まる言論乃至實行運動では如何としても表現し難いイデオロギイをかゝる民權家の傳記乃至政治的稗史小說に托さうとしたものであらう。それだけに彼はかゝる著作に人知れぬ苦心もしたのである。

十七年五月十一日には、自由新聞の別働隊として、同じく自由黨の宣傳啓蒙機關たる自由燈が創刊された。これは自由黨の領袖星亨が巨費を投じたものといはれてゐるが（八）、實際の計畫は信介自身であるらしい（九）、信介が星

を動かし、又宮崎夢柳、坂崎紫瀾の如き自由黨系の花形記者を羽翼として實現させたものと見るのが當つてゐやう。此の新聞の出現が華々しかつた上、出現早々非常な人氣を博しにので、所謂小新聞界に强いショックを與へ、小新聞の改革が續出した。信介は、此の紙上に案外坊又は案外堂主人の名で、夢柳と殆んど競爭的に小說戲曲を載せ、世人をしてその才筆と文藻に驚かしめたものである。いはゆる双玉聯璧の美稱を恣まゝにしたのが、卽ちこの時のことである。

然し信介が自由燈に艷筆を振つたのはさう長くはなかつた。五月から足かけ四月目の八月には前々から持ち越しの淸佛兩國間の事態が惡化し、いよいよ開戰の報があり、續いて佛國東洋艦隊の福州攻となつたので、かねて東洋問題に志があつた信介は、これを對岸の火災と坐視してゐられず、殆んど自分から望んで自由燈及び自由新聞の特派員として（後には立憲政黨新聞の特派員も兼ぬ）、支那へ出張した。それの出發が八月二十七日（橫濱）、九月四日上海に着いて當時三井洋行にゐた義弟小室三吉などに會ひ、又當時上海に碇泊してゐた扶桑艦の將士と語つて、種々所謂戰況を尋ねては通信したが、正直にいへば、當の支那には一向戰時氣分がなく、信介は戰況視察に來て視察すべき戰況のないのに驚いたのである。それで九月二十六日迄上海中心に支那を見物し、二十七日に通信義務を義弟三吉に托して北京方面に遊び、天津、北京城内から、長城まで見物し、十月十九日北京を發し、二十六日上海着、三十一日上海發で歸國の途につき、十一月十一日歸京した。此の行、自由燈への通信は「淸佛事件」及び「支那紀行」の二種、自由新聞へのは「淸國通信」といふ、後「支那紀行」を增删して『第一遊淸記』（十八年一月刊）となした。

信介の不在の間に內地の政界も可成り多事であつたが、信介に直接關係のある事件としては自由黨が十月二十九日大阪の大會で解黨したこと、立憲政黨新聞が組織を變更し、元の大坂日報に戾ることになつたこと等（岡崎高厚、澤邊正修が維持委員）である、自由黨解黨前後の所謂政治暴動についてはは別にいふ必要はあるまい。

越えて十七年十二月再び朝鮮京城に變が起り、開化黨事大黨の爭ひから、支那兵の暴行となり日本對韓清の開戰かと危ぶまれるに至つた。政府は早速外務卿參議井上馨を特派全權大使として問罪の爲めに朝鮮に赴かしめた。支那から歸つて間もない信介は、又も奮つて朝鮮に出向かうとしたが、前回の經驗で、官吏となる方が視察の便益が多いことを知つたので、何等の手段で賴み込んだか（恐らく養父信夫と井上大使の舊好によつて）井上出發の前日（十二月二十一日）急に外務省准奏任御用掛（月俸四十圓）を命ぜられ、即時自由燈を辭し、井上大使に隨行して朝鮮に出張した。此の事が餘りに意外でも突然でもあつたので、自然舊自由黨の同志の間で信介の變節が云々されたのは、蓋し止むを得ないことであつたらう。然し止むを得ないにしても、信介のこの擧を變節の二字で片づけることは正しくはない。信介にして始から官人たらんとせば、養父の勢力で如何樣にも出來た筈である。何も此の期に及んで、かゝる擧動に出るには及ばぬ筈である。又乃翁の庇蔭で衣食に事を缺きもせぬ以上、今更月俸四十圓が欲しくなつて節を賣つたとも考へられない。矢張りこれは、信介としては、たゞ朝鮮視察の便宜乃至方便として、心にもない小役人の官を甘んじて受けたものと想定すべきである。

たゞ然し信介を井上に賴んだかと推される養父信夫と井上の間には、信介に關して一脈の默契がなかつたか何うか。恐らく信夫は自由黨の成行、各地自由黨員の暴動などを見て、彼等のシンパサイザーともいふべき自由燈の主宰者たる信介の身邊に危懼の念を拂はざるを得なかつたらう（星の入獄後は殊にさう思つたかも知れぬ）。それで信介の朝鮮行の志望を聞いて、喜んで贊成したらうと思ふ。何となれば信介が內地を去ることは、同時に政黨不穩の暴風から安全地帶へ避難することだからである。そこで井上に賴んで、信介をしてこの安全地帶に長くゐさせたい心算から准奏任云々といふ命令となつたものではあるまいか。信介は信夫のかういふ心配を知つてゐたか知らなかつたか、恐らく知つてゐたであらう。然しこれを知つて變節をカムフラージュする假面劇をやつたとは思はれない。縱し幾歩か讓つ

て假りに信夫父子が表面妥協して井上に頼んだとして見ても、信介の本心はこれを方便として朝鮮視察の利益を得、轉じて東亞問題の解決に資せんとしたことは、疑ふことが出來ない。

十八年一月對朝鮮の問題は落着して井上は歸朝したが、信介は公使館新築の主任として殘つた。信介は更に京城に留まること四月、六月の末に歸朝した。さうして種々準備の上、再度支那へ渡つて更に視察研究する心算であつた。だが滯京中俄に盲腸炎を病み、それが悪化して、八月二十五日死んだ(一〇)、享年三十四歲。同二十七日淺草松葉町海禪寺で葬儀を行ひ、谷中天王寺墓地に葬つた。官民の會葬者三百餘人、當時としては稀有な盛儀であつたといふ。彼の養父の友人であり彼自身の知己でもあつた古澤滋は、墓前に弔詩一篇を供した。

同時偶病阻ニ同群一　豈謂幽明竟忽分
四海交情誰似レ我　十年心事最憐レ君
韜軒羞レ問箕封俗　劍氣空凌禹域雲
古寺會埋名士骨　可レ堪自レ此對ニ双墳一

「古寺會埋名士骨」――名士とは福島事件で獄中に死んだ自由黨の名士田母野秀顯をいふ。信介は田母野のため種々奔走して天王寺墓畔に碑を建てたのが昨十七年だのに、今は早くも自分がこゝに葬られる、古澤がいふ如く、「可堪自此對双墳」に違ひない。有爲の材と期待されたゞけに、信介を知る人々で、その餘りに早い死を惜まぬはなかつたのである。

註(一) 明治二十四年十月發兌「同志社文學雜誌」第四十七號所載、此の月三日紀念文庫開庫式に和田彥次郎の讀み上げしといふ「小室信介小傳」

註(二) 小室信介の小學教師時代の弟子たる大槻秀一氏(現存)の書翰による。

註（三）「大日本夜話」初集なるもの、明治七年九月刊

註（四）明治十三年十一月九日、朝日新聞五三七號社告

註（五）此の一段の記事は主として岩田德義著『板垣伯岐阜遭難錄』を節錄したるもの。

註（六）最近さるところで井上馨から岩倉へ宛てた書翰が發見されたが、これによると、この時の洋行費が井上の口添で萬圓程三井の方から出てゐることが判明した。沼間が何處からこれを嗅ぎつけたか知らぬが、沼間がうそを吐いたのでないことが確實になつた。板垣は土倉から三千圓貰つたといつてゐるが、これも勿論眞實であらう、然しこれは板垣の小遣ひで、洋行費用は後藤の方から出てゐるのである。この金についての後藤の言は頗る曖昧を極めてゐる、後藤としては正直にいへぬ點があつたのであらう。（「明治文化研究」第二輯、尾佐竹博士「板垣退助洋行費問題」參照）

註（七）明治十六年五月二十三日繪入自由新聞一四五號

註（八）『自由黨史』上卷第六篇第三章、七二六頁

註（九）明治十七年五月十一日自由燈第一號、彩霞園東洋太朗の祝詞その他による。

註（一〇）或はいふ、信介は肺病で、歸朝もそれが嵩じた爲めであつた。死んだのもその爲めであると。肺の弱かつたのは事實であつたらうが、直接の死因は盲腸炎であつた。

二

前にいつた如く、信介が自由燈にゐた時代には、宮崎夢柳が彼と並んで筆を執つて居り、世間では二人を所謂双玉聯璧視して、案外堂主人、夢柳居士の名が必ず相併んで口にされたものであつた。案外堂の『自由艶舌女文章』と夢柳の『虛無黨實傳記・鬼啾啾』は青年讀書子から盛に喝采された。信介の小説はこれが處女作ではなかつたが、自由燈の出發（スタート）がいかにも華々しい水際だつたものであつたゞけ、信介の作家生活もこの時新に華々しく始まつたかの如く

見えた。だが今日、夢柳の名や作品のことを掲げた明治文學史はあつても、案外堂の名や作のことを述べたものは先づ見當らない。當年の華々しさを顧みると、何となく底寂しさを覺える。勿論夢柳の方は小說作家としては信介よりも若干の先輩で、作品も數は三倍もあるし、又小說といふものに多少の自信をもち、幾分眞劍に文學者となるつもりであつたから、信介が忘られて夢柳が殘るのは當然であるかも知れない。此の點、信介の小說に對する態度は全く餘技的であつた。信介は小說的文字に對して眞劍になるには餘りに多く政治家であつた。成る程、信介は小說に指を染める以前に、既に文名があるにはあつた。だがそのころ彼の實際活動が殊に人目を惹くものがあつたので、世間では彼を文士視せず、一流の青年政治家、政論家、政黨人として待ち、彼自身もそれを期してゐたのである。即ち夢柳は專ら文筆の士として立ち、世間もさう認めてゐたのに對し、信介は政治上の實際活動を本來の面目として、世間も自身も專ら文筆のみの人とは認めなかつた。再びいふが、夢柳と信介との間にはこれだけの違ふものがある。しかも信介の場合、それだけに又、彼の小說が世間の注目と人氣を案外多く集めたことも、想像されやう。

信介は、墓碑銘にもあるやうに、美しい姿貌の持主であつた。彼の傳記者も、――

氏は風神瀟洒容貌淸瘦殆んど衣に勝へざるが如し（一）

と特筆してゐる。從つて、――

佳人名姝の往々意を屬するものあり（二）

といふのは、自然の結果であらう。當時の政治家政黨人が花柳の巷に足を留めるのは、維新志士以來持越しの習癖で格別咎め立てするにも當らないが、信介の場合にはいさゝか恕すべき事情がある。それは彼の夫人幸子が一女（美枝子）を生んで後間もなく、不慮の禍ひに遭つて不具廢疾の身となり、終生病院暮しをしてゐたので、彼のために箕掃

を執り枕席を奉ずることが出來なかつたのである。多忙な彼は平生家にあることが稀であつたが、それでも旅先から歸れば必ず先づ病める妻を慰めたといふ。だがかゝる家庭的不幸があつた上に、紅燈綠酒が政治家の生活と必然的に結びついてゐた當時のことであるから、信介も風流な情事は相應にもつてゐたらしい。多言に避けるが、彼の臨終にのぞみ、いはゆる死水を取つたものは柳橋の妓小さんであつたといふ一事だけでもそれが首肯出來るであらう。

信介は容貌が瀟洒としてゐたばかりでなく、胸中にも天性洒落なところがあり、諧謔嘻戯を好むいたづら兒的分子をも多分にもつてゐたらしい。彼の模擬自傳たる『大江山人傳』(三)をよむと、若いころの信介が如何に滑稽諧謔の書を嗜んだかといふことが察せられる。

(前略) コレヨリ心ヲ滑稽ニ潜メ深ク莊子ノ寓言ヲ喜ビ甚タ東方朔ノ人トナリヲ愛ス其讀ム所ノ書ハ五雜爼、笑府、開卷百笑、胡蘆百轉、前戲錄、江戸繁昌記、笑堂福聚、膝栗毛、浮世風呂、浮世床、七偏人、八笑人、和合人、千社參、江島廻等凡和漢滑稽ノ書、書トシテ讀マザルハナク讀ムトシテ誦セザルハナシ (中略) 曾テ滑稽ノ下手文章ヲ作テ大坂日報ニ投ズ云々

信介が悲歌慷慨一點張りの熱頭漢子でなかつたことは、これでも分かる。

信介が才物であり、所謂やりてゞあつたことはいふまでもない。才人だけに頭腦明敏で頗る要領がよく、且つ自然に活動せずに居れぬといふ趣きが見える。而かも才人たる割合に氣骨があり、年齢の割合に老成してゐて、腹藝も出來、單純な直情徑行家ではない。前にいつた如く、外務省に入つて以來、在野時代の盛名の反動として、同志から變節無節操を云々された。事の跡について論ずれば、或はかゝる非難が當然であらう。だが彼の心事がさう單純であつたとは思はれない。彼を責めるとせば、むしろ三菱退治の動機の不純の點であらう。この點では、彼は三菱退治の裏面の機關(からくり)を知つてゐたに違ひないと斷ぜられても言があるまい。然し前節にもいつたが、彼程の人間が准奏任月俸四

十圓といふ外務省の小役人に本心から甘んじたものとは何の點から考へても信じられない。暫らく小官に身を委したのは、蓋し前にものべた如く、他日東亞經營の大問題に大に期するところがあつたからである(四)。だが、天年を假さずで、所志の片鱗も實現出來ぬうちに、空しく變節の疑ひを負ふたまゝ死んだ。口にこそいはなかつたれ、心の底を叩いたら滿腔の感慨、死んでも死に切れぬものがあつたであらう。

註(一) 明治十八年八月廿七日自由燈三四九號記事「小室信介氏歿す」

註(二) 同記事

註(三) 明治十一年四月六日、大阪日報六三八號

註(四) 以上の文章を記して了つてから、遺族佐藤美枝子女史か拜借した信介夫人幸子の心覺えの雜記を讀むと、役人になつた時の信介からの手紙に「此度よぎないことで役人にしてもらひ朝鮮に行く又支那へも行くつもり故二三年あはれぬ云々」とあつたよし記してある。これで信介の心事が大分明瞭になつたやうに思ふ。信介は正しく最初から何等かの大決心をもつて官界に入つたのであつた。

三

信介は小笠原氏時代から彼一流の民權論者であつたといふ。これは、主として當時信介の身近に居て謦咳に接した門生大槻秀一氏(現存、京邦在住)の談によつたものである。それによれば當時信介は專ら福澤氏又は中村正直の著譯書を讀んでゐたといふも、恐らくかゝる著譯を我流に解釋しての民權論で、信介が最初から西洋流の自由民權說を理解し、且つこれを唱道したとは考へられない。

信介は教養の點では勿論漢學仕込みであるが、そのうちでも歷史を十分叩込んである點が注意されて可い(宮津の

藩學禮讓館では特に歴史を重視してゐる、これは同館の日課表に明らかである)。歴史が信介のあらゆる思想の根柢をなしてゐる。從つて如何に流行の西洋流の自由民權論に接しても、俄にこれに雷同する如きことはせず、一應その歴史的立場から批判したに違ひない。批判して後、一種の啓蒙的利益を認めてこれを採り容れたことであらう。信介が漫に西洋流の流行議論に贊成しなかつたことは、非手學校時代に著した『大日本夜話』のうちに、——

(前略) そこで西洋學をするものが、我國の學者の議論を聞て、屁の樣に思て仕舞は尤千萬の事ながら、何も我國の國體や人間が、西洋に劣るのではない。全く右に云、學者先生等の了簡が違ふによりて、日本と云土地は昔開けぬ處じや兎角西洋で無くては、埒が明かぬ、なんでも西洋じや／＼とむやみに西洋好になつて、仕舞て、人間は自由の權があるによつて、子じやと云て、親のまゝになるものではない、いくら天子樣じやといふても、百姓を自由にする事は出來ぬ、などゝ云立て、いつその事、日本も共和政治にしたら宜からうといふ樣な、狼狽た事を吐露て、衆人を惑はす、樣な事が出來る、是と云もつまり國體と云事を、會得せぬから起た事で、我國の歴史は、一字一點讀だ事が無いのに、西洋の書物のみ、首突込で居たら、そんな物でも有るべき事なれども、外の間違とは事ちがひ、間違ひにも、程のある事なり云々

といふ一節のあるのをみても知られる。要するに信介の政治的信念は歴史的國粹主義に基礎したものであり、彼は自由民權の淵源、國會論の起點を歴史的に見、明治維新の大精神の繼續乃至完成としてこれに贊成したものであつたといひ得る(一)。

勿論後には養父信夫なり先輩古澤滋なりの感化が加はつて、その國粹主義に英國風の實直な立憲思想が加味されて來たと思ふ。就中信夫の感化は案外大きかつたのではないかと考へられる。然し矢張り英國風の立憲思想が彼の言動に見えても、それは畢竟附加物で、根本は何處までも歴史的國粹主義であつた。この點では、信介は何よりも先づ、

（坂崎紫瀾と共に）板垣哲學の祖述者たるものである。

信介の政治思想を撮要したものは、明治十三年十二月一日から朝日新聞に連載された「平假名民權論」である。これは彼一流の民權論の立場から國會論を啓蒙的に說いたもので、時節柄頗ぶる讀者の渴想を醫したが、翌十四年一月これが當局の忌諱にふれて遂に朝日が三週間發行停止の厄に會つた。信介の政治思想を知るに必要であるのみならず明治初期の啓蒙的政治文獻として注目すべきものゝ一つであると思ふから、大要を紹介する。第一篇緒言に、――

國會と云へる詞は近來日本國中專ら流行の者にして上は廟堂の官員より下は裏店の八公に至るまで學者と靑盲とを問はず智者と痴騃（ガイ）とを論ぜず譯の分ると分らざるとは固より揚て論ぜずして一にも國會二にも國會口を開けば國會の聲を出さゞるものなし（中略）諺に云く目明千人盲目千人と平田篤胤これを論じて曰く吾眼を以て世間の有樣を見れば盲目千人盲目千人なり決して目明の者あるを見ずと此は是れ天保以前の事今日の世に於ては斯る例を以て見るべからずと云ふと雖も三千五百萬兄弟中失敬ながら譯分らずして國會の二字を口にするものあらん國會願望の同盟に加はりたきも譯分らざるが爲恥入りて手を束ぬる人あらんも知るべからず今我輩は此等の同胞の爲めに世間流行の國會論の要旨を取りこれを數篇に分ち俗談平話（ちやのみばなし）に說和げて以て國會同盟を勸奬する處あらんとす云々（下略）

第二篇（十二月三日）、第三篇（十二月八日）、第四篇（十二月十六日）は「日本國會論の濫觴」（上中下）を歷史的に論じたもの。國會論は論としては近來の流行であるが事實は古いもので、太古に濫觴する、かの大祓の語に神集集賜云々とあり、又「古事記」の天の窟戶の段を讀んでもそれが分かる。だが國會論といふ新しい形で認められたのは明治以來のことで、明治元年の五條の御誓文が先づ國會論の嚆矢である。その後明治八年降下の立憲政體を立つべき旨の聖詔によつて益々國會論の根據が定まつた。今日の國會論者は　陛下の御誓文に從ひ其深意を擴充して人民に敎へんとするもの、國會論を非とするものは　陛下の仁意に背いて私論を立てるものである。民間の國會論は明治七年

の民選議院建白に發する。此の建白が一度現はれるや、これを中心に賛否の論が交々戰はされた。反對派の有力者とされたのは加藤弘之、森有禮、西周等であるが、然しその反對論は或は尙早といひ、或は枝葉の點に拘泥したもので國會論そのものには反對したのではない。且つ尙早論その他は次第に勢力を減じて國會論が盛大になつて來た。盛大になるにつれて國會論に二派が生じた。卽ち漸進と急進で（これは東京日日記者の私稱であるが）、漸進とは小より大に及ぼすを可とするもの、府縣會より國會へをモツトーとするもので、東京日日一派がこれを代表し、反對の急進とは大擧れば小自ら擧るといふ國會第一主義を取るもので、曙、朝野、報知等がこれを代表した。かくて國會論は全日本有志の大問題となり漸く文壇上の大議論とされるに至つた。民選議院建白後、萩、佐賀等の亂があり、世間は穩かでなかつたが、國會論は益々勢力を得て來た。明治八年二月、小室信夫は奮發して大阪に愛國社を組織し、板垣等の贊成を得て全國の志士がこれに加はつた。國會論が盛になるにつれて、朝野の紳士は却て親和の姿を示し、八年三月板垣が又參議となつて入閣し、四月立憲政體の聖詔降下となつたので、天下の有志は國會開設が今にも成るかと待つたが、その後憲法制定も國會設立も音沙汰なしで、九月板垣の辭職となつた。且つ內閣が元老院をいぢめて權力を奪つたので、議長の後藤象二郎は憤然辭職した。それで有志は大に失望した。この頃愛國社に倣つて各地に社が生じたが、土佐の立志社が一番有名でも有力でもあり、愛國社の衰へるにつれて、立志社が海內自由主義の泰斗、國會論の中心となつて來た。その後三四年は國會論が衰へたが、最近に至つて又大に起つて來たのである云々。

第五篇（十二月十九日）「國會は共和政治に非る解」、國會論に對して一種の謬見を懷くものがあり、國會論は卽ち共和政治の主張であり、共和政治の主張は卽ち皇室に對して不忠、日本國家としても不可能なものであると考へてゐる。この謬見は國學者、神道家、儒家、漢學書生、官吏などに多い。然しこれは海外の事情を知らず、立憲政體の何物たるかを知らぬために生じた思想であつて、國會といへば直に米國を聯想し、米國といへば直に共和政治を聯想す

るからである。然し歐洲に眼を轉ずると、國會があつても共和政治でない國が多い、英、伊、蘭、獨、墺皆國會論が盛で國會があり、その國會が政治の實務を討議論定する、然し決して共和政治ではない。これで國會と共和政治との別物たるが分かるであらう。國會といつても國會が帝王に代るといふのではない、憲法によつて國會の權力を定め、帝王の權と國會の權といふものを確然約束して一國の政治に臨むのである。憲法があれば、國會による民黨の跋扈も萬一の際に於ける人民の亂暴も防ぎ得、又國會があれば個々の有力家の勝手を許さず、君位も安全であり、君民相持にて國家を無事に治めることが出來る。然しこれは決して共和政治ではない。

第六篇（十二月二十二日）、第七篇（同二十六日）「國會論者は勤王無二の精忠者たる解」（上下）、國會論は共和政治の主張でないのみならず、國會論者こそ勤王無二の忠臣也といひ得る。凡て如何なる國家でもいつ無法者や有力者の扈跋とならぬとも限らぬ。その際國會と憲法となくば帝王の位も危いことになる。古い日本の歷史にもその例は多多あり、權臣が天朝を抑へたといふ恐多い事實が少くない。これは畢竟憲法立たず國會開けぬ故である。國會と憲法があれば權臣が亂暴せんとしても、國會と憲法とでこれを抑へ、帝王も人民も安泰でゐられる。國會こそ、憲法こそ萬世無窮の寶祚を確固たらしむるもの、これあれば君德缺けんとするも得べからず、民心叛かんと欲して得べからず、こゝが國會願望論者が君國に對する無二の忠臣たるところである。これは西洋の歷史に例をとつて見ても、明白である。かの佛國大革命の時、國家大亂、暴民の猖獗となり、殆んど亡國に瀕したのは國會憲法の無きためであり、又かの英國がナポレオンの强壓に報へて屈せず、終に最後の勝利を得たのは國會の力が確固としてゐた爲めである云々。

第八篇（十四年一月六日）、第九篇（同一月九日）、第十篇（一月十三日）は「守舊論者の惑を解く」（上中下）といふもので、やゝ第五篇の論旨と重複の感があるが、これを十分詳しく論破したものである。今日民間で國會論に反對するのは、儒者、漢學書生、尚古論者であるが、彼等は國會開く可からず、開いても何もならないといつて、君主專

裁（信介は專制をかういふ）で押し通さうとする。亞細亞國は皆此の主義であるが、これは人民に不便で當今の如き日々改進の時代には通用しない。君主を尊ばんとして、危くし、人民を安んぜんとして然らざるものである。彼等の論據にいふ、人民は君主の私有物である、君民相和せば他は何ものも要らぬ、若し君主が賢明でなければ賢明な大臣を立てれば可い云々。然しこれだけでいかぬことは和漢の例が示してゐる。元來一國の治安を一人の聖明に托するのみで人民に參政の權を與へるには及ばぬといふが、これは治國の良策ではない。君主專裁では人民に愛國の情がなく獨立の氣がない、亞細亞各國で治亂興廢の急なのは、全くこの爲めであり、それといふのも國會がなく人民に參政權がないといふことが根本になつてゐる。如何に孔孟主義者が君主專裁を墨守しようとしても、此の制度自身の缺陷がそれを許さない、今日の複雜な政務は到底一人で執り切れるものではない、そこで補政の大臣百官が必要となる。然るに人を觀るのは一人ですれば誤り易い。その事實は君主を危くするのが有力なる大臣にあるのを見ても知られる。國會なく憲法なくば、上君主の位を固からしめず、下人民の生命財産を守れぬといふことになる。されば今日時勢に適せぬ中世主義の君主專裁を主張して、これをもつて精忠と心得たら大きな間違ひで、國會論こそ君國に忠なる所以である云々。

第十一篇（一月二十日）、第十二篇（一月二十三日）、第十三篇（一月二十五日）は「尙早論者を駁す」（上中下）である。別に又無用論者ではなく尙早論者といふものがある、その論據は（加藤弘之もいつた如く）日本の人民は現在まだ未開で知識が進まぬ、從つてこれが參政權を欲するのは猿の人眞似といふべく、却つて自身害がある、又無理に與へても、その國會は愚論の府となるのみ。宜しく人民の知識上進をまつて國會を開くを可とする云々。これは國會にも兎もかく贊成してゐるのであるから、一種の國會論者である。然し國會論を毒することこれ程甚しいのはない。それは味方の假面を被つて阻止の實を擧んとするものだからである。畢竟尙早論は官邊の人士が國會を拒絕する口實

に唱へ出したものとしか考へられない。人民を未開無智といふが、官吏も人民である、政府當局も人民である、國會は在野人民のみの集合ではない、官吏も議員たり得るし、又事實さうなる、それでは國會が愚論の府となる如き心配はない、又知識の上進を待つて云々といふが、その上進といふのは何の程度をいふのか、今日の教育程度は維新前に比すれば甚だしい上進であり、又外國と比較しても日本人民が特に無智であるとは思へない。若しその上進の意味が全國人民が悉く識者となるのを待つといふのであれば、それは無理で、いつまで經つて出來はせぬ、何處の國とて人民がさうなるのを待つて國會を開設したと聞かない。元來、人民が不學無智故國會尙早といふが、その國會そのものが人民をして且つ智あらしめ彼等をして開明に赴かしむるの道であることを知らぬ。人民を開明ならしむるには、多年の卑屈狡猾な風を破り、天下と休戚を共にする志を養はしめるが第一である。それには人民の通義權理を保護し自尊自重の氣を起さしめなくてはならぬ。それには天下の事に干與せしめ、天下の事を自分一身の事の如く親切ならしめるが可い。これでは人民の方で開明すまいとしても出來ない相談である。さうせずにたゞ人民を放任して人民自身開明になるのを待てばとて、それは期することが出來ぬ。人智は事業上で切磋すれば上進する。例へば去る十二年に府縣會を開いた時には、種々拙いこともあつたが、然し十三年にはもう面目を一新してゐる。僅々二回の經驗でかう功能がある以上、尙早論者に何の辭柄があらう云々。(こゝで發行停止となる)。

以上今日からせば全く啓蒙的な常識論ではあるが、當時としては、「平假名」と冠してゐても、淸新な尖鋭さをもつて讀者を感銘させたものであらう。根本が歷史的國粹主義であることは（大に進步的なものになつてゐるにせよ）いふまでもない。

信介は、國會論が禁止されたのを遺憾に思つたが、十四年三月二十九日から「平假名立憲政體論」を同じ朝日に掲げて同じ論旨を續け始めたが、これは第一回だけで中絕といふことになつた、本人の多忙か新聞社の方で泣きを入れ

たか恐らくその何れもの理由があつたからであらう。然し一回だけにせよ、全篇の主意がこれで推察されるから、その一回の全文を揭げて置かう。

○人民に立憲政體を與ふることの解

西哲曰く君主專裁の下唯一箇の愛國人有り即ち君主是れなりと蓋し此言稍過激にして或は中庸を失ふ者あるが如しと雖も理を以て論ずれば能く專制國人民の實情を探り得て一言以て之を蔽ふ者と云ふべきなり蓋し古今內外を問はず專制獨裁を以て國の體と爲し治者私專に政事を爲すの風を以て立ちたる國は人民に參政の權利を與ふる事無く人民は古來甘んじて其指揮駕御の儘にこれ從ひし所の者なり故に此の如きの人民に在りては愛國盡忠の心極めて輕薄にして治者の變換沿革に於て毫も關係するの心なく甚しきは其邦土なり國產なり併せて全く他の治者の支配に變ずる事あるも自己身上に於て著しき損益のあらざれば默從して顧みざる者往々皆是れなり即ち漢土の革命の如きも其の類にして一國の人民百姓は數百年君として主人とし尊戴せし所の國王が亡滅して他の邊陲の諸侯の代つて治者即ち國王となることあるも少しも頓着することなく甚しきは外國即ち夷狄と賤みし所の者が侵入して前の國王を亡し自立して國王となり以て一國を駕御するも其人民は生命財產さへ安堵なれば更に構ひなきありさまなり今其の人民の心を推究するに畢竟自分等が大事とし大切とし守て以て社會に生息する所の者は生命なり財產なり苟も其の生命財產にして保つに足るべくんば其の治者として戴く所の君主に於ては其の誰たるも構はざる者の如し豈これを愛國心あるの人民と云ふべけんや又之を我邦に例せば假令(たとへ)　皇統は萬世一系金甌無缺なるにもせよ其の政統の如きは時時沿革あるを免れず即ち源氏が王室の政權を奪ひしが如く北條氏が陪臣國命を執りしが如く元弘の中興となり足利氏の跋扈となり織田氏となり豐臣氏となり以て德川氏の世に至る迄執政家即ち治者を代ふること其れ幾何なるを知るべからず而て其れが爲めに休戚利害を倶にする者所謂愛國盡忠の人たる者は僅々其の臣僚に止りて而て其の平民

たる者は與らざるなり否あづからざりしにはあらず之に與るの權利なかりしなり幸ひにして外寇釁を窺ふの恐れもなく勝つ者負る者興る者亡ぶる者得る者失ふ者盛なる者衰ふる者我邦同胞の間に循環融通して今日に至りしが故に皇統の一系も金甌無缺と稱せられ日章(ひのまる)の國旗も彼の臭羶(なまぐさ)の氣を佩びざりしと云ふと雖もかの漢土なり西洋なりの諸國が數々隣國外夷の爲めに侵掠せられ或は全く之を亡滅せられし所の史跡に就て鑑みれば嗚呼亦危ふかりきの嘆聲を發せずんばあらざるなり故に吾儕は我邦政事家が遠く鑑み深く慮りて而日本將來の政略に於て彼の岌々乎たる情態を一變し確乎不拔の國體政治たらしめんことを希望するなり(未完)(これにて中絶す)

日本の自由民權の特質は、それが緊密に國權意識と結合してゐる點にあるが(此の特質が何故に生じたかまでは今こゝでは述べる必要がなからう)、わが案外堂主人信介の民權論の如き、その代表的なものゝ一つといつて可い、信介の民權論、民權運動の底には常に國權意識が潜んでゐたと見るべく、さうしてこの國權意識がその歴史的國粹主義から出てゐることはいふまでもない。

處でこの潜在してゐた國權意識は、明治十五年夏の朝鮮事件を機として、信介の言動の表面に明白に出ることになつた。朝鮮を實地視察した彼が何を見、何を感じたかは、大體前に述べた如くであり、詳しくはその「朝鮮紀行」なり、「朝鮮詳報」なりで讀むことを得るが、此の頃からして信介は民權論と同等にか、乃至それ以上に國權意識に腦裡を支配されるに至つた。彼は卒先して「東洋政略」(例へば十六年七月武州蕨驛にて)、又は「東洋殷鑑」(例へば十六年十月大阪にて)の如き演題を揭げて所謂東亞經營問題と日本の立場を論じ、國權擴張意識のあるところを明かにした。そこに明治十七年の淸佛開戰が事實となつたので、信介のかゝる國權意識は拍車を驅けられた如く强烈なものとなつた。彼は直ちに支那に飛んで行つたが、大淸帝國なるものゝ情實を看破するに及んで、東洋に於ける日本の進出

と責任について種々省覺するところがあり、機會があらば此の方面に於て大に爲すあらんとする志を起した。然るに十七年十二月の再度の朝鮮事件である。信介は此の時こそと思つたに違ひない、彼は先づ朝鮮に渡り、續いて支那に赴き、二三年歸らぬ決心で出かけたのである（二）。だが蒲柳の信介に殆んど豫期されてゐた早い死が、豫期よりも早く來たので、彼の志を現實に見る機會は永遠に失はれてしまひ、彼の志そのものも眞の輪廓だけを殘したのみとなつた（後節『夢戀々』の條參照）。だが、信介が東亞問題を先唱した功は沒すべきではない、民權論者小室信介の名と共に、東亞先覺の士としての彼の名は、永く心ある日本人士の記憶に存すべきである。

註（一）明治十二年八月二十八日大坂日報社説「國勢變革論」參照（この社説は無署名であるが、文致論旨からして小室信介のものたるに疑ひがない）

註（二）明治十七年十二月二十四日、信介が夫人幸子に與へた書翰（既記の如く夫人の雜記『こゝろおほへ』中にその要旨がある。

四

信介は文章に對して特殊な嗜好をもつてゐた。それは彼の家に遺傳の血があるかも知れず、或は讀書癖が天性を成したところから出てゐるでもあらうが、藩學禮讓館の學風に養はれたところも多かつたらうと思ふ。時の宮津藩主本莊宗秀は文雅の嗜みが深く、藩學でも大に文章を奬勵したが、その文章は、當時の所謂文章學が専ら漢文を指してゐるのに禮讓館の文章は廣い意味の文章で、和文漢文稗史小説體俗文體俳諧何でも構はぬといふ掟になつてゐたのである。信介は早くから文才を示し、作文が好きで、學校教師になつてからも、作文の教授講釋が大分得意だつたといふ（一）。事實、明治七年九月出版の『大日本（やまと）夜話（よばなし）』の序文などを見てもその文才の豐富を知り得る。だが信介が大に文

才を示して世間的に所謂文名をかち得たのは、明治十年の投書時代が最初である。此の時彼は謹愼中の退屈紛らしに諸方の新聞に匿名で投書した。さうしてその正式處分を宣告された十一年四月にはもう「投書家として有名」となつてゐた(二)。その後大坂日報へ入社し、京都日々に助筆するに及んで文名は益々暢びた。だが十四年十五年十六年は、政治上の實際運動に奔走したので幾分文筆に遠ざかり、寧ろ舌の人として知られた(後段に詳しく說く)。その後、十七年自由燈を創刊するに及んで又暫時筆を主とすることになつた。

信介の筆に成るもので、小說稗史以外、論文雜錄が今日相當澤山遺つてゐると思ふが、中には散佚して見るを得なくなつたものもあり、又署名がないので判別のつかぬものもあるので、勿論これを悉く確かめることは出來ない。だが此等の遺文の中、私が見たので比較的長篇のもの、又は內容的に注目すべきもの、無署名でも彼の文章と推定されるものを左に擧げて置かう。

○文明ト自由ハ並行ス可ラザル歟(在西京　小牟呂　新)明治十年十二月十九日、大坂日報五五二號
○內　幕　論(四回)(西京三條　小牟呂　新)同　年十二月二十三日、朝野新聞一二九八號以下
○讀史有感(在西京　小牟呂　新)同　年十二月二十六日、大坂日報五五八號
○小成世界ノ歎(小牟呂　新)明治十一年一月十二日、同　日報五六八號
○內幕論補遺(西京　小牟呂　新)同　年一月二十二日、朝野新聞一三一八號
○淫風世界ノ歎(在西京　小牟呂　新)同　年二月七日、大坂日報五八九號
○西京人ノ弊習(在西京　小牟呂　新)同　年二月十七日、同　日報五九八號
○以呂波短歌變體講釋(小牟呂　新戲稿)同　年二月十六日、同　日報五九七號以下
(い號)犬もあるけば棒　猫もころべば棒

（ろ號）論語讀みの論語知らず　論語讀まずの論語知り　以下數回連載

○日本宗教者三十年之命脈（三回）（西京　小牢呂　新稿）同　年二月二十四日、大坂日報六〇四號

○獄窓の夢（在西京　小室信介記）同　年七月十九日、同　日報七二七號

○琉球處分論（在大阪　小牢呂　莞太稿）明治十二年一月二十二日、同　日報八七九號

○古今民權開宗（大江山人山陰柴山子）同　年三月四日、同　日報九一二號

○教海ノ風波（三回）（小室信介カ）同　年七月十七日、同　日報七二五號

○民會ノ效力（小室信介カ）同　年八月二十二日、同　日報

○國勢變革論（二回）（小室信介カ）同　年八月二十八日、同　日報

○箕面紀行（山陰柴山子）同　年十一月二十九日、同　日報

○國會論ノ沿革（小室信介カ）同　年十二月二十五日　同　日報

○文珠九助傳（小室信介）明治十三年五月三十日、朝野新聞二〇一一號（京都日日新聞よりの拔萃）

これは『東洋民權百家傳』の萠芽である。

○壅蔽ノ害（小室信介稿）同　年十一月十七日、大坂日報一四二八號

○三寶論（二回）（小室信介稿）同　年十一月十八日、同　日報一四二九號

○干渉政治ノ弊害（大江山人）同　年十一月二十日、同　日報一四三一號

○重テ壅蔽ノ害ヲ論ズ　同　年十二月一日、同　日報一四三九號

明治十四年十五年分の文章については上記の傳中に散見してゐるのでこゝでは略す。

○改進黨員の大閉口　明治十六年四月八日、自由新聞二二〇號

署名なきも信介の筆だと傳はつてゐる（伊藤痴遊）、數回連載、後單行本となり『政黨膝栗毛』といふ。三菱問題について矢野文雄と尾崎行雄が名古屋で自由黨員に詰問された顚末を自由黨側から宣傳せしもの。

〇冥府狆談（六回）（案外堂主人戯稿）　同　年七月二十九日、自由新聞三七〇號以下

後宮崎孝一編輯にて單行す。

〇故田母野秀顯氏の履歴（小室信介）　同　年十二月五日、自由新聞

大體右の如きものである、志ある諸士は就いて見られるが可い。

信介の文章の特徵を一二いへば、その態度は何處までも啓蒙的である、何等かの思想敎訓を滑稽諧謔に托して民衆の啓蒙に資さうとする、時としては戯作的にくだけ、又は稗史小說的趣向を設けたりする。「以呂波短歌」の如き「冥府狆談」の如きこれである。然し事あつて衷心から感激する時は歌行體の感傷文字を悲壯淋漓と並べることも出來る。かゝる歌行體の例は後にも引かれるからこゝでは擧げない。かゝる文字は、當時の壯士間に最も愛誦されたものである。信介はかく戯作的小說的文章は得意であつたが、生眞面目な論はあまり得意でなかつた、それだけに數も比較的少ない。生眞面目な論文では歷史的根據を摑んで中々しつかりしたことをいふが、文勢が平板であつて光焔がないので、（つまり多少よそ行きの修飾をしないので）、達意ではあるが面白くはない。たゞかゝる際にも決して危言覈論をしないで餘裕のある迫らぬ物言ひをしてゐる。

信介は文才に秀でた上に、辯舌も爽利であつたことは、古澤の墓碑銘に見える通りである。井手學校にゐた小笠原先生時代から雄辯家の素質をもつてゐたことは、その得意の夜話にも知られるが、政談を始めるやうになつてから度度遊說したのですつかり練り上げられて立派なものになつたらしい。明治十五年刊の『日本全國新聞記者評判記』には彼

の辯舌について——

下手トハ誣言ナレド上手トハ過賞ナルカ如シ

と賞めた如く貶した如き言を弄してゐるが、此の書の著者大井通明はこれまでに信介の演説を聞いたことがあるとも思へぬから（或は筆記位は讀んだかも知れない）、信用は出來ない。假に十五年頃には大井のいふ如き評判があつたとしても、十六年上京以後は立派な辯舌をもつてゐたことは、當時彼の演説が毎時喝采されて遊説等にも引張り凧にされてゐるのでも分るし、第一當時彼の演説を一度ならず聞いた伊藤仁太郎氏（痴遊、此の頃は井上といふ）なども、彼の演説の上手なことを明言してゐる。殊に上手といふだけでなく美しい演説として記憶されてゐる（三）

信介が辯舌の人として最も活躍したのは、十四年の山陰遊説から、十五年の大阪政談演説會時代である。大阪政談演説會は大阪日報を中心にした立憲政黨本部の人々が主として出演したもので、毎月一回乃至數回大阪で開會する外京都堺その他近畿の諸地方に出張演説をした。信介の傳記中でも、此の會に於ける信介の演説に言及して置いたが、今左に纏めて此の演説會その他に於ける信介の演題を記し止めて置く、勿論演題の數がこれだけでないことは知れ切れてゐるが、これは私が見た範圍で拾ひ上げたものである。

○寧ろ餓鬼道に墮落するも畜生道の業を爲す事勿れ　明治十五年四月一日（道頓堀朝日座）

○災害は帝王にも諂はず（この時には出席せずに、板垣出迎へに岐阜に出張した）。同　年四月七日（大江座）

○城ノ狐ヲ逐ヒ社ノ鼠ヲ熏ベヨ　同　年四月二十日（京都）

○災害ハ王室ニモ諂ハズ　同

○板垣君遭變實地目撃ノ報道　同　年四月二十二日（道頓堀戎座）

○山陰土産　同年七月二十八日（道頓堀角ノ芝居）

○朝鮮ばなし　同　年九月二十一日（大江座）
○記八大地獄廻之夢　同　年九月二十六日
○國家一日も節義の士なかる可からず　同　年十二月三日（角ノ芝居）――中止
○題未詳　同　年十二月八日
○題未詳　同　年十二月十七日
○題未詳　同　年十二月二十一日（京都）
○初夢記　明治十六年一月三日（角ノ芝居）
○國家一日不可莫節義之士　同　年一月十四日（紀伊橋本村）
○立憲政體正解　同　年一月十五日（同）
○前同題　同　年一月十七日（大和五條）
○神乎紙乎　同　年一月二十日（北榮座）
○節義論（國家一日云々と同じものか）　同　年二月三日（宇治）
此の後上京して、自由黨の爲め諸方に遊説したことは既記の通りである。一時歸阪の際、――
○東洋殷鑑　同　年十月十一日（大阪堀江市ノ側劇場）
その後東京に定住するにつれて餘り演説をしなくなり、筆の方に戻つたことも既記の通りである。

信介の演説の調子は總體にして如何なるものであつたかといふと、これ又その文章の特徴と相似て、根本は啓蒙的態度であり、生眞面目な題目でも四角な議論よりは寧ろ諧謔まじりに何ものかを説與へるといふ方が上手であつたらしい、又カムフラージュのために往々戲作的分子を加味した點も認められる。さうして修辭的にも美しい演説であつ

たといふ評がある。たゞ演説には内容の傳はらぬものが多いので、その點は遺憾である。信介の演説で後世に最も有名になつたのは、何といつても十六年五月二十二日新富座に於ける「海坊主退治の相談」であらう、此の筆記は幸ひ當時の繪入自由新聞に載つてゐるから、これを讀んで信介の諧謔的雄辯の一斑を概したい（因に、海坊主云々はたゞ偶然に考へたのでなく、當時大阪千日前で有名な海坊主の見世物があつたので、信介はこれからも思ひついたものであらう）。

○左の一篇は過日久松座の大演説會に於て關西の辯士小室信介氏の演ぜられし論を筆記せし者なり（繪入自由新聞第百四十八號――百五十二號）

○海坊主退治の相談

諸君よ諸君は余輩の演題の奇異なるを怪まるゝか余輩も亦た自ら其の奇異なるに驚き且つ怪まずんばあらざるなり余輩自ら之を怪み諸君も亦た之を怪む實に此れ奇々怪々の演題なるに相違なかるべきなり已に其の奇怪なる事を知る何が故に此の演題を諸君の前に掲げ以て諸君の心中に奇怪の情を惹き起さしめんとするか是れ抑も故あるなり夫れ東洋未だ自由の曙光を見ず天地多くは晦冥にして世海屢々風波を生じ且つ時として魑魅魍魎の妖術を逞ふして社會に出沒し余輩をしてアーラ怪しやの叫聲を發せしむる事蓋し尠しとせざるなり則ち世俗の所謂鯰と云ひ鰌と云ひ彼の北海の章魚と云ふが如き又或は人語を解するの猫あり又は針金を見ざるの電信あり其他此類の妖怪實に僂指るに遑あらずして眞に之れ百鬼夜行の暗黑世界と云ふべき乎是れ皆な余輩が夙に驚き且つ怪む所の者なり意ふに諸君も亦た余輩と同情同感を表さるゝならん今や此の奇怪なる世に在りて此の妖怪の多きを見る余輩が此の奇怪なる演題を掲げて諸君の靜聽を煩すも亦た眞に止むを得ざるに出るを知るべし嗚呼余輩は未だ言論の自由を完ふせざる者なり故にその思想を吐露はすに當り比喩を怪談に取り議論を諧謔に寓する者豈に復た止むを得んや然り而して余輩

今此の百鬼夜行の世に當り諸君と共に勇を鼓し氣を勵まし奮ふて之れを退治征伐せんと欲する者は何ぞや彼の鯰にあらず鰌にあらず又た章魚に非ず又た猫に非ず古今無類前代未聞の大妖怪即ち日本海に生育せし海坊主是れなり諸君よ余輩は諸君に向ひ海坊主退治の相談を爲さんとするの前に於て先づ其の海坊主の妖怪は如何なる性質の者なるか又如何なる害毒を人間に與ふる者なるかを說き明し而して其の之れを今日に於て退治せざるを得ざるの實に余儀なき次第を明にせざる可からず抑も海坊主とは如何なる形體を有する者なるか余輩も未だ確かに之れを目撃し事はあらざるなり思ふに今日に於て余輩が海坊主と認むる所の者は世俗の所謂鯰なる者と其の形容相似て而して衣服に食物に住居に器具に皆な最も驕奢美麗を極めたる俄長者即ち金滿家の變化たるに外ならざるべきなり余輩嘗て聞く昔し淨海入道平清盛は保元平治の時に當り源平競爭の間に於て狡猾なる手段を以つて常に王家の威光と其の保護により己れに競ひ起る者を悉く打ち倒して横暴跋扈至らざる所なく殆んど海內敵なきが如きに至れり宜なる哉大納言平時忠が平族に非ざる者は人に非ず人非人と放言せし事や是れ所謂平族が獨り壟斷の利を占めて驕奢淫佚を恣にし上は恐れ多くも當時の乘輿に擬し下は人民の膏血を絞りて虎狼の欲を逞くせしも彼の平家物語に謂へる如く祇園精舍の鐘の聲は諸行無常の響あり沙羅双樹の花の色は盛者必衰の理を示して驕る者は久しからず身死して屍未だ冷かならざるに子孫は檀浦の海底の水屑となり果たりと其の淨海の墓は今猶ほ兵庫柳原の邊に存せり蓋し此の地は淨海が海上の利を專らにせんが爲め土を運び石を集め而して海を塡めて港灣の便をなせし所なりと云ふ土人傳へ曰ふ淨海入道は在世の惡業猶ほ未だ盡きず死して海坊主と化け兵庫海灣の中に現はるゝ事ありと余輩元より其の言の信僞を知らざるなり

諸君よ諸君は余輩が今日稱する所の海坊主も亦た此の淨海入道の化身たる者に似たるにはあらざる耶の疑團を起さるゝ事なきや此の海坊主は專ら兵庫神戸の間に於て最も其の威力を擅まゝにし而して吾人人類を苦しましむる所の

者なれば則ち思ふに諸君は必らず此の海坊主の淨海入道の化身なるべしとの想像を起し來り隨つて余輩の比喩の敢て誤謬にあらざる事を認知されしならん而して此の海坊主の生成(おひたち)に付き說を爲す者あり其の說によれば蛸の年月を經たる者變化して海坊主となると(但しこれは尋常普通の蛸にして彼の北海の黑蛸の謂に非らず)猶ほ猿の老功を經て狒となるが如き類なりと余輩は今ま假りに此の說に從ひ此の海坊主の素性來歷を說かん抑も此の海坊主が猶ほ未だ蛸にてありし時代に當りてや纔に土佐卽ち南海の一小蛸に過ぎざりしが其稍好時機に遇ひ僥倖を得て以つて七八年間を過ぐる間に忽まち其の手足を延長(のば)して古今無類前代未聞の一大海坊主とはなりたる也

同じく是れ魚なり均しく是れ蛸なり然るに此の蛸は非常の發育を爲して斯くの如き實に驚くべく怪しむべきの古今無類前代未聞の一大海坊主とはなりたるが是れ則ち其の然る所以なくんばあらざるなり余輩聞く所によれば龍宮城の政府には手の長く且つ大なる蝦ありて其の威權も亦た强し常に此の蛸と其の交情(なか)密なり依つて蛸の爲めに許多の餌食卽ち特別の保護を與へて以つて之れを肥し之れを富まし而して飽く事を知らざるに至らしめ遂に龍王政府を凌がんとするの最大なる海坊主とならしめたりと是れ其の初め餌食卽ち保護を與へたる者の假令龍宮城の政府を退ぞき普通の鱗類と成たりとも決して其の罪を辭する事能はざる所なり夫れ特別の保護とは何んぞや則ち租稅吾人民の粒々辛苦の膏汗を集合(あつめ)し物を以つて一私人を養ひその私利を壟斷せしもの丶謂ひなり此の海坊主は實に吾人人民の膏汗を吸ふて其の滋養物となし斯く肥大延長を致せしなり而して又た此の膏汗卽ち滋養は海坊主自身が直接に之れを絞り取りしにあらず乃ち間接に龍王政府の手を借り以つて已れの滋養に供ふるの方術を行へり故に此の海坊主は頗ぶる狡猾手段に長じたる最も憎むべく厭ふべき海中の動物と云ふべき者なり

諸君よ諸君は今此海坊主は吾人人類の膏汗を滋養となし豪富を極め肥大を致し海上殆んど敵なきが如く蟹の如く横行し鯨の如く跳躍り而して他の船舶を呑み他の貨財を食ひ且つ海中の鱗類は勿論其の陸上の人と雖も手を上げ足を

延して其の膏汗を間接に吸盡して以て干魚の如くならしめんとせり諸君よ諸君の中には必らず神戸橫濱間の海上を航行せられし方もあるなるべし此等の諸君は已に親しく彼の海坊主が暴富の勢により肥大の力に乘じて其の乘客或は船問屋等に加ふるに無禮千萬失敬至極なる取扱を以つてする事を實驗せられ且つ躬自ら其の辛き目に遭はれし事あるなるべし嗚呼諸君と余等は直接に或は間接に其の膏汗を以つて滋養ひたる此の海坊主の爲めに斯る苦しみを目前に受けながら猶ほ默々に省過さんとすとは憐れ果敢なき吾人の境界ならずや然るも諸君は尙依然として忍んで此坊主の下に屈せらるゝか

諸君よ彼の海坊主は業已に特別の保護により獨專壟斷の利益を占め傍若無人の擧動を爲すの地位に達したり於是他亦た憚る所なきなり則ち航海の船客を食ひ瀨戸灘の酒色を喫し而して神戸の牛肉に飽き吾人人類が因つて以て生活を爲さんと欲する所の物は彼れ必らず皆な併呑せざるは無なり加之金融の塞迫商賣の衰微産業の不振等の爲め各地到る所人民に菜色あるを見るは概ね皆な彼の海坊主の毒氣に中られたるものなり之に反して其の海坊主自身の有樣を見よ身には綾羅錦繡を纏ひ口には美酒佳肴を食ひ居には高樓壯麗を極め侍妾小厮其の前後に伺候し萬事己れが意の如くならざるはなし是れ實に古今無類前代未聞の事にして此の他一々之れを枚擧れば指を屈するに遑あらず之れを前代の紀文大盡淀屋辰五郎等の驕奢に比するも猶ほ遠く及ばざるなりとの一言を以てするも可なりと信ずるなり其の豪富強大此の如くなるを以て海坊主の眷族從者に至る迄皆な海陸の間に跋扈蔓延して殆んど彼の淨海入道が專橫なるの時に當りて平家の食邑は天下の半に過ぎ平大納言時忠が漫言を放ちし時代に髣髴たる事愈々益々明かになれり然ればにや彼の海坊主の勢は世の操觚を以て任ずる所の新聞記者改進の先導を以て自稱する所の演說家或は其の甚しきは堂々門戸を張る所の學者紳士の如き皆な彼の海坊主の毒氣に中られて口を噤み耳を掩ひ而して筆を拋ち手を拱きて之れを論議せざるのみならず甘んじて之れに服從し且つ海坊主の從者の末席たらん事を願ひ而して偶々

其の望を得れば則ち無上の榮譽とし小心翼々唯だ之れを失はん事を憂ふるが如き最も見苦敷體裁を現はす者は是れ抑も何たる事ぞや諸君よ余輩が才力の微弱なるをも顧みず今日に當り其の勇を鼓し氣を勵まし奮つて此の妖怪退治の事を諸君に相談せんと欲する事の眞に餘儀なき次第なる事を了知せられしならん

然り而して彼の海坊主の如き妖怪を外國の歴史に求むるに彼の英國惹迷斯第一世の朝に當りてミチェル氏モンペソン氏及びサール、エドワルド、ヴヰリヱルス氏等を始め其他狡黠の徒が國會開けず政事衰微へたるの時に乘じて同王及び其の宰相寵臣に因緣し各種々の專賣保護の利を占め而して僅に數年の間に於て非常の暴富を爲し或は海坊主ともなり或は大入道ともなり或は鬼ともなり又は蛇ともなりて英國人民の血液を吸ひ鮮肉を喫ひ海陸を横行跋扈する事ありしが一千六百二十年に及んで同王は其の國庫歳入の都合の爲めに復た止むを得ずして初めて國會を開き千載の下其名英史に光輝を放ち自由正義の士と稱せらるゝ所の彼のジョン、ハンプデン氏始めて擧げられて此の國會の代議士に列しけるが同國會は何の議案にも着手せず直ちに右のミチェル氏等以下の不義惡德の富を處分するの事より始め或は其の久しく私したるの財産を沒收げ或は之れを終身の禁獄に處し其の幸にして此の處分を免れし者も皆な其の國に居る事能はずして各地方に脫走し其罪を償ひしより英國の妖怪は此に至りて一切退治せられて其の迹を絕ちたりと云ふ

又た佛國革命の前に於ては焉より甚しき者ありたる事は諸君も夙に詳かに了知せらるゝ所なるべし又其の昔英國の東印度會社なる大怪物顯はれたり此怪物は英國政府の保護に藉りて印度の人民を凌虐げ其の血を吸ひ其の肉を喫ひ而して印度人民をして今日の如き無氣力に陷らしめたり余輩は其の海外たる印度の事に於てすら斯る妖怪の人類を疾しむるの事あるを見聞する毎に未だ嘗て慨然として嘆じ奮然として怒り頭髮冠を衝き目眥悉く裂け切齒扼腕して其の退治を速にせざりし事を憾みずんばあらざるなり然るに今や面の當り我が日本海に於てその妖怪即ち大いなる

海坊主の顯はるゝを見る何ぞ默して彼れが害毒を人類社會に流布するを坐視するに忍びんや嗚呼諸君よ此の海坊主なる者は海上の權を專らにせり豈に彼の藤原純友の如き比ならんや又陸上の力をも擅まゝにせり豈に彼の淨海入道の類ならんや實に此の海坊主は我邦の航運を障碍せり地方の產業を妨害せり北海道の物產を興らざらしめたり北地の開拓を衰退せしめたり僞黨を助けて正黨を傷けたり自由の主義に敵對せり明治政府を苦しめたり人類社會を害したり同胞三千五百萬人の幸福を奪ひたり掛卷も畏けれども九重の上の尊榮をも汚し奉る者と云ふべきなり故に余輩は諸君と共に我邦の航運の爲めに地方の產業の爲めに北海の物產の爲めに北地の開拓の爲めに僞黨を排擊するが爲めに自由の主義の爲めに明治政府の爲めに人類社會の爲めに同胞三千五百萬人の幸福の爲めに王室の尊榮の爲めに此の前代未聞古今無類の大海坊主を退治せんと欲するなり思ふに諸君も亦た此の相談に贊成同意を表せらるゝなるべし

然り而して此の海坊主を退治するに於ては如何なる方略に依り如何なる器械を用ゆべきか是れ亦た諸君に向ふて相談せざるを得ざるものなり諸君よ彼の海坊主は尋常の怪物にはあらざる事を會得せられよ則ち源賴光の四天王が土蜘蛛を退治したるが如き方略を用ひ蜘蛛切丸の名刀を以て之を斬るが如き迂策を用ゆ可らず又渡邊綱が羅生門に於て茨城童子の腕を切りしが如き舊套にも倣ふ可らず弓矢を用ひんか刀槍を用ひんかアルムストロング砲を用ひんか村田銃を用ひんか否々余輩が依らんと欲する所の方略用ひんと欲する所の器械は之に異なりとす然らば則ち如何なる方略器械かある他無し公平の砲臺を築き正理の鐵艦を造り精神活潑のトルピードを製し言論自由のクルプ砲を備へ而して立憲政體の太陽赫々たる光輝の下に於て彈劾一發之れを擊ば如何なる巨大の海坊主も豈に粉虀に摧破ざらんや必ずや知るべし彼の變幻自在なる海坊主も復た元の一小蛸となりて魚肆の碇りに頤を釣されんことを況んや彼の海坊主の眷族や奴隷や忽ちに干蛸となり醋蛸となり或は彼の淨海入道の末路の如く熱湯の中にユデ蛸となりて往

生を遂げんを知るべきなり知らず諸君は此の相談に賛成同意を表せらるゝや否や

余輩は今演壇を下らんとするに臨み猶ほ一言せん諸君よ彼の海坊主は天より降りし者に非らず地より湧きし者に非らず必らずや之れを産むの母なるべからず又之れを養ふの父なかるべからず諸君にして彼の海坊主に果して父母あるを知られしならば其の父母をして後來斯る最大不祥の怪物を此の明治の昭代に生み出さゞる樣要求あらん事を希望に堪へざる所なり　（完）

註（一）　信介の門下、大槻秀一、大木正吉兩氏の談話。

註（二）　明治十一年四月二十七日、愛國議事新聞第十六號、西京通信の中。

註（三）　伊藤痴遊全集、『政界表裏快談逸話』のうち、「雄辯と雄辯家」の項（昭和五年三月）

五

いよいよ信介の政治小說について語るが、吾々はこれを先づ『東洋民權百家傳』の研究から始めなければならぬ。此の著は明白に政治小說ではないが、政治小說と同じ意圖で作られ、それ以上の効果を擧げたものであり、信介が最も苦心したもの、而かもこの方面で信介を最も有名にしたものであるから、先づ特出して語るとする。

『東洋民權百家傳』、一名を『日本義人傳』といふ（二帙三帙は『東洋義人百家傳』と改題、これは版權免許を得る方便からであつた）、全部三帙九册ある。初帙は明治十六年八月、二帙は十七年一月、三帙は同六月の出版である。四帙五帙と續刊の豫定で、材料も殆ど揃つてゐたが（一）、十七年六月以後信介の邊身が多忙であつたので、この豫定は遂に實現せずに止んだ。

信介が何時頃から此の書著作の志を起したか、これを知る材料はないが、相當早いころではなかつたらうか。信介

が例言（後出）でいふ西洋民權百家傳とは、明治十二年刊の『通俗民權百家傳』（島田三郎抄譯萩原乙彦演義）を指すものとし、若し信介がこれに倣つたとせば、明治十二年の交からその志があつたわけである。かくて明治十三年「文珠九助」の傳となつてその萠芽が出たことは既記の如くである。十四年十五年を經て地方遊說に赴く度が重なるにつれて、義人傳の材料も次第に殖ゑたことが想像される。そこで愈々義人傳の腹案を定めて本式に執筆したのが明治十六年一月である（日記殘片による）。同年三月の上京は既記の通りであるが、この時信介は草稿を携へて來り、四五月の頃初帙を成就し、引續いて二帙三帙分を執筆し、十七年一二月の交には全部脫稿したらしい（一）。十七年二月には四帙の材料を搜訪するためわざわざ房州那古へ出かけてゐる。此の頃の信介が如何にこの著の完成に熱心であつたか分かるのである。

此の書の性質、著作の動機、目的については例言と緒言に詳しく述べられてある。例言には――

此書ハ緒言ニ述フルカ如ク我邦ノ仁人義士今世所謂民權家也者ノ其ノ名ト跡ノ湮滅シテ傳ハラザル者ノ傳記ヲ考索蒐輯シタル者ナリ之ニ冠ラスニ東洋ノ二字ヲ以テスル者ハカノ西洋民權百家傳ナル者ニ對スレバナリ故ニ更ニ又一名ヲ附シテ日本義人傳ト云フ

とあるが、これを讀むと、この著が如何なる性質のものか、判然する。緒言は主として民權家に對する頌辭とこの書の由來、著作の動機を述べたものである。頌辭の全部は長過ぎるから、その幾分を引用することにしよう。

（前略）いざさらばやつがれの萬のものに立ちまさりて。褒めたゝゆるものを申さん。其は世の爲め國の爲め人の爲めに理の爲めに。名譽をも利益をも財產をも子孫をも顧みず。わが一命を塵よりも輕んして。磐石よりも重かるべき壓制に撓まず折れず。終に志を達せし仁人義士のいはゆる民權家てふものにぞありける。凡そ我邦にては、この人々のおこなひほどなし難くたやすからぬはなかりけり。我邦にてはいにしへより。かゝる人の教はなかりき。か

かる世のならはしもなかりき。これを爲し遂げたる時も身に禍はまぬかれず。世の衰れなれどはあるやなしや。あづさ弓春の夜の月のおぼろげに知るゝほどなりけり。この禍の大なるものは。子孫をも絶たれ家財をもとりあげられて。今の世に至りて其の名も跡もほろび失せて。誰にたづねんよすがだになきまでになりぬるさへもありけり。あはれにいたましき事のかぎりなりかし。彼の西の國の民權家てふものゝ死しての後。大なる記念標。またはうつくしき銅像なんど建られて。稱えまつらるゝ樣のありさまにくらぶれば。ひさかたの天とあらかねの地との隔たりにも似たるべし。されば我邦の民權家てふものは。西の國のものに比ぶれば。いとも／＼なしがたくたやすからぬものにて。やつがれもいとどに萬のものに立まさりて。褒め稱ゆるものにぞある。

いさゝか修飾に拘束されてゐるので平生の文調とは少々勝手が違ふが、正に信介得意の文章である。緒言は進んでこの書成立の由來を述べる。

やつがれ幼き時。佐倉宗五郎の演劇を見たりけるに。その事跡のあはれにいたましくて。ほと／＼身の毛の彌だち涙の自ら目にあふれて。いと堪がたき思ひありけり。當時思ひけるは德川の太平三百年の間。三百あまりの諸侯。六十餘州に星羅棊布して。己がじゝ領内の民を治めけり。その間武威武斷てふ政をもて民を虐げ人を苦むることあげて數ふべからず。されば官に抗し理を守りて。民の爲に身を擲ちたるもの。唯かの佐倉宗五郎一人のみかは。他に湮沒れたる人々の數多なからずやは。いかでこの湮沒たる人々の名と跡とをさぐり求めて。世に公にし明治の昭代に光りを出さしめて。かの仁人義士てふ人々の靈を黄泉の下に慰めばやと思ひ立ちしが。これをさぐらん史とてはなく問ひこゝろみん人さへあらねば。むらきもの心ばかりはやれどせんかたなくて過ぎたりしに。去年より今年にかけて國々を經めぐることのありけるにぞ。これこそやつがれが日頃の志を遂ぐる時なれと。よろこびて。通り過ぎぬる國郡にて。かの民權家てふものゝ湮沒たるもの。ありやなしやと訪ねこゝろみ。雨しげき寺の庭に苔むし

たる石碑をたづね。風荒き家の軒端に蟲食みたる反故をあつめ。或は古老の口碑などを聞書きして僅かに其の跡のおぼろげに知れつるものを。亞弗利加の濱邊に金剛石をさぐりあてし夷人のうれしみよろこべる心地して携えかへりつ。書肆の庫にあさり求めて。やゝ證ともなるべきものを。おぼつかなくもかきさがしつ。たま／＼に似たりと思ふものあらば。土佐の海の漁人が千たびの網に一顆の珊瑚ひき得し思ひにて持かへりつ。これやかれをばつゞくり合はして。もしほ木のからくもやう／＼にかの民權家てふ人々の百あまりの數をぞ得たりける。此は彼の演劇に物する佐倉宗五郎の傳記に劣らぬ人々なりけり。さればやつがれの本望はこゝに足りける心地してかくもつたなき文に物しつ。人の嗚呼なりと譏り笑はんことをさへもかへりみず。もの／＼しくも東洋民權百家傳一の名は日本義人傳と名けて世に公にすることゝはなしぬ

此の書の材料の蒐集にいかに苦心したかといふことは、本文の各民權家の傳後に附記してある文章を讀んでみてもわかる。この文中に縷々と述べてあるのは、決して單なる美辭麗句ではない、一々例はあげぬが、事實殊勝な程良心的に骨を折つてゐる。さて緒言の末段だが、末段はこの書に對する希望とこの書の目的とを概括して結んである。

あはれ江湖の君子この文のつたなきを捨てず。この事跡の粗を容して。其のつたなきはこれを巧にし。そのあらきは之をくはしくて賛成補助なし玉ふところあらば。やつがれのさいはいのみかは。彼の仁人義士いはゆる民權家てふ人々の靈を黄泉の下に慰むることを得て。世の自由をすゝめ。民權を張ることにおいて。大に補ひ益すところあらんかし。

この最後の數句によつて信介が幾多の苦心を拂つてこの書を編纂した旨趣がうかがはれる。換言すれば矢野龍溪が、『經國美談』によつて達成せんとしたこと——即ち人心作興の民權的經典——を、信介はこの傳記的實錄によつて成就しようと志したのである。信介は謙抑な語を用ゐてゐるが、この書述作の動機を單なる好古癖史傳癖とのみ見るの

は見當外れである。著者究極の目的の大部分は、「世の自由をすゝめ、民權を張ることにおいて大に補ひ益す」るところにあつたのはいふまでもない。これは書中本文の中でも、機會のある毎に、自由民權の名によつて編中の義人の行爲を稱讃してゐるのでも、察せられる。（例へば初帙卷之上、戸谷新右衛門の條を見よ）。即ち聰明な信介は、近古義人の事蹟をかりて、極めて痛烈な自由民權宣傳文學を書き上げたのであつた。

且つ又、今日からいつてこの書に收載されてゐる義人は必ずしも悉くがいはゆる民權家ではない、志士仁人とはいへるが自由主義者とか民權家とはいへない人々もある。これは信介も十分心得てゐて初帙の例言に記してある。それにも係らず本文では民權家と呼び、通編それで押切つてゐる。かういふ態度も、一面信介の如上の目的を證示するものといつて可い。

この書九冊中に傳記の收まつてゐる義人は、初帙には——

戸谷新右衛門　湧井莊五郎
須藤佐次兵衛　五賀野右衛門（上卷）
文珠九助　丸屋九兵衛
麴屋傳兵衛　水島甲庵（中卷）
井戸平左衛門　白須賀驛平八
杉本左近　溝口元右衛門
中島役四郎　深江村彌右衛門
貝賀治部助　（下卷）

第二帙には——

松木　莊左衛門　（上卷）
高原村常右衛門　同山口吉左衛門
同山口市左衛門　同百姓　長兵衛
同百姓　京右衛門
西口　與左衛門　中村　新左衛門
轂　六兵衛　皆川　左五兵衛　（中卷）
岡村　十兵衛　生野町　小左衛門
同　勘十郎　野村　小兵衛
殿村　左兵衛　野間村　久左衛門
久田和村　六郎兵衛　殿村　儀右衛門　（下卷）

第三帙には——

高梨　利右衛門　（上卷）
宮村　才藏　石井　伊左衛門
神長　市兵衛　須鎌　作次郎
中神谷村　武左衛門　中平久保村　與總治
上小川村　與八　好間村　理四郎
柴原村　長兵衛　（中卷）
小池村　吉兵衛　小池村　勇七

合して四十六人である。（第四帙に豫定された人々は、信州須坂騷動の人々、房州屋代騷動の人々〔根本五左衛門、山角右衛、飯田長次郎〕及び忍足左內、佐渡善兵衛、里見五兵衛など）。何れも正傳を旨としたもので、稗史小說にならぬやう心したと信介は斷はつてゐるが、然し義人中には單に口碑に傳つてゐるのみで正傳材料のない人々もあり又材料があつても材料そのものが既に稗史的要素を多分にもつてゐたりするので、自然本文中にはいつとはなく小說的潤飾が意外に多く入つてゐる。此の點で、この書を直ちに政治的小說と見ることは勿論出來ぬが、信介の政治小說の先驅的著作と見なすことは、十分出來ると思ふのである。

此の著は出版早々大歡迎をうけた。諸新聞は大概賞賛の評を載せたが、中にも特に社說に於いて「東洋民權百家傳を讀む」といふ批評を掲げるもの(三)もあつた。これは、この頃の新刊書籍としては、破格の出來事であつた。時も時、改進黨が專ら上中層ブルジョアの間に勢力を扶植してゐるのと反對に、中層以下、殊にいはゆる勞役社會や婦女子社會の間を目がけて自黨のイデオロギイを普及させようと懸命になつてゐた自由黨では、不自由極まる言論拘束を幾分か緩和するため且つ大衆啓蒙の本來の目的に合ふやう、通俗自由講談といふ新武器を利用し出したばかりのところである。從來フランス革命史や『經國美談』等をのみ講談材料にしてゐた自由黨の辯士は、信介のこの著作に幾多の新資料を見出した、奧宮健之、同健吉、福井茂兵衛、龍野周一郎などといふ人々は爭ふてこの書中の義人傳を潤飾して、大衆に民權思想を吹き込む方便に使つた。又本職の講談師の方にとつても、實に屈强の好資料であつたので、有名な開化講談師松林伯圓の如き、早速これを利用した(四)。それだけに、此の書と著者案外堂信介の名も廣く喧傳されたが、かくポピュラーになる一面社會大衆にも相當大きな感化を與へたこと、疑ひがない。古澤滋が墓碑銘中この書のことに言及して――

義民の事迹を論敍するや、毎に三たび思を致す。世頗る其の著述を讀んで興起する者有り云々

と述べてゐるのは、頗る當つてゐると云へやう。

註（一）『義人傳淋漓墨坂』の序詞及び十七年七月一日自由新聞、「第四帙も材料全く集まりたれば不日出版せらるべし」云々。

註（二）明治十七年一月十一日の自由新聞には「佐渡善兵衞」の傳が載つてゐる、これは第三集にのる筈のものとあるが、今の第三集にはこれがない、即ち材料豐富のため此の分は四集へ廻された事と思ふ、即ち此の時原稿は三集から四集に手をかけるまでに進んでゐたのである。

註（三）例せば明治十六年九月七日、繪入自由新聞二三七號の如き。

註（四）明治十六年十一月六日、繪入自由新聞二八五號の記事。

六

形式内容とも明瞭な政治小說といふものに信介が筆を取つたのは、先づ明治十六年以後のこととして可い。明治七年の『大日本夜話』などにも早く、稗史體をかりたといふ意味が記してあるが、それは幾分通俗な軍談風のものに和らげたといふだけで、小說體にしたといふのではない。それ以後、十六年に及ぶ間に戲作風の筆を弄してゐることは既記の如くであるが（四節參照）、小說と銘うつほどのものを書いてゐるか何うか。或は匿名で一二ありはせぬかと思はれるが、只今のところでは分明しない。それで信介の小說といふものは大體十六年以後の所產であるとし、記憶して置くべきは此の明治十六年が、言論取締の上からも團體集會拘束の上からも、新にその苛辣さが殆んど劃期的といつてもよくなつた年だといふことである。（明治十六年四月新聞條例改正、六月出版條例改正）。

明治十六年から十八年八月まで二年餘の間に公にされた信介の政治小說（戲曲形式のものも含む）は、左の五篇で

ある。

○法燈將滅高野曉

日本立憲政黨新聞三一六號——三三九號（明治十六年四月二十日——五月二十四日）

○勤王僞經民權僞緯新編大和錦

日本立憲政黨新聞四〇七號——四八三號（明治十六年八月十一日——十一月十一日）、明治十六年九月第一號——十月第二號刊

○興亞綺談夢戀々

自由新聞五一九號——五八一號（明治十七年四月六日——六月十八日）、明治二十五年一月刊

○自由艶舌女文章

自由燈一號——五八號（明治十七年五月十一日——七月二十三日）、明治十七年五月刊

○義人傳淋漓墨坂

自由燈六四號——九九號中絶（明治十七年七月三十日——九月九日）

數は五篇であるが、此の當時の政治小説は概して短かいのに、信介の作は五十回、六十回、七十回以上に及ぶものがあり、長篇の部類に入る。小説家としても先づ先づ健筆家といつて可い。以下この五篇について語ることにする。

『法燈將滅高野曉』、これは戯曲體で五幕十二場ある。その内容については、作者信介卽ち案外堂主人の序語に明白である。

左の一篇は紀伊國の民權家戸谷新右衛門氏が租稅の爭ひより高野山に於て石籠詰の刑に處せられし悲壮の昔談を試

みに演劇に作りたるものなり其の實錄は近日發行の東洋民權百家傳に詳にすべければ就いて見らるべし唯この篇は狂言綺語を事となせしものなれば假りに作爲したる所少なからず實錄とは大に相違する所も多かるべけれど其は狂言の免れがたき所にして讀者の注意容赦あるべき所なり又主人は狂言作者にも非ず所謂素人に外ならざれば其の脚色文辭或は劇道の法に叶はざるもの少なからざらんか是も亦讀者の容赦を蒙るべき所なり云々

義人戸谷新右衞門の事蹟は『東洋民權百家傳』の外に、後にちぬの浦浪六その他の小說もあり、中里介山氏の『高野の義人』ともなつたので、大抵の人は知つてゐると思ふから、別にこゝで述べることはしない。たゞ『高野曉』の幕割だけ擧げて置く。

序　幕　高野山奧の院の場
二幕目　興山寺役所の場
　　同　門前の場
　　同　女人堂場
三幕目　新右衞門住居の場
　　同　奧座敷の場
　　紀伊見峠の場
四幕目　箱根山の場
　　同關所の場
　　牢內夢の場
五幕目　紀州熊野漁師磯八住居の場

同　高野玉川仕置の場

大　切（立憲政黨員）招魂祭の場

大切の招魂祭の場といふのは、明治十六年一月信介の一行が紀伊橋本村に遊說した際に高野に遊び、新右衞門の遺跡を尋ね、墓碑を拂つて幽魂を祭つたことがある。それをいふのである。その時信介は新右衞門の墓碑に向つて一場の悲壯淋漓たる演說を試みた。「嗚呼自由ノ友朋ナル新右衞門君ヨ我民權ノ知己タル新右衞門君ヨ自由ノ爲メニ一身ヲ犧牲ニ供シタル新右衞門君ヨ民權ノ爲メニ痛楚ヲ顧ミサリシ新右衞門君ヨ地下ニ靈アラバ願クハ予ガ述ブル所ノ言ヲ聞カレヨ（中略）今ヤ君ガ墓前ニ集合スル所ノ吾人ハ君ノ百年ノ知己ナリ幽顯途ヲ異ニスルモ其ノ義タル固ヨリ君ト相合フヲ以テ自由ヲ伸張シ民權ヲ擴充センコトヲ欲スルモノナリ聊カ菓ヲ薦メテ靈ヲ祭ル嗚呼悲イ哉尙クハ饗ケヨ。」この演說の筆記は政黨新聞にも載つてゐるが、『民權百家傳』初帙上卷にも出てゐる。信介の『高野曉』はこの大切がないと何等の政治的寓意のない普通の義民劇のやうに見えるが、この大切、殊に信介の演說で、その自由民權宣傳といふ寓意が明らかにされ、『高野曉』が普通の戯曲ではなしに一種の政治小說のつもりで書かれてゐるのだといふことがわかる。

この戯曲は單行本になつてゐない。執筆の明治十六年四月は信介東上後である、卽ち東京から大阪の政黨新聞へ書き送つたものである。

『勤王爲經・民權爲緯』と角書した**『新編大和錦』**は正しい意味での小說としては、今のところ信介の處女執筆と見るべきものであり、それだけに相當大きな構想を設けてかゝつたらしいが、完成せずに止んだ。前篇として十三回、每回各々「錦」といふ字を用ひ（「襤褸の錦」、「京都錦」の如き）、短いのは三回、長いのは六七回に小分されてゐる

されてゐなかつた。然しこれは政黨新聞所載の分を見れば何の疑問もない、明瞭に「案外堂主人稿」と署名してある。第五回分までは單行本（第一號、二號二冊）があるが、それが他人編輯の名となつてゐるので、從來信介の小説だと

梗概は語らう。

頃は文久二年十一月、勤王攘夷の論が盛んで諸國の浪士が跋扈を極めた時である。京師三條橋畔に於て、水戸浪士武藤次郎猛臣は、父の仇幕臣三浦左近を打果さうと斬かゝるが、三浦の手練鋭く危く返討にならうとするところを十津川の人平野八郎國武の助太刀によつて本懐を達する。折柄幕吏の押寄せるのにあひ、二人は散り散りに逃れ去つたが、武藤は年若だけに追手に捕はれやうとしたのを、祇園社内に紛れ入つて一美人に救はれる（第一回、檻褸錦）。此の美人はかねて武藤と夫婦を約束した藝妓千束である。この女は水戸に緣ある者だが武藤とは幼馴染みで、若くて父母を失つて妓籍に落ちたものである。ところが一日武藤と清水寺に會つて、遂に將來を契つた。現にこの夜仇人三浦を打つ手引したのも彼の女であつた。かくて仇討の夜、武藤を助けて自分の家に匿まつたが、武藤は負傷が原因で熱病となつて久しく立つことが出來なかつた。これを嗅ぎつけたのが、かねて千束に懸想してゐた目明し文藏である。一日千束の家に來て、暗に武藤を捕へることを仄めかし、それが嫌なら意に從へといふ。千束は大いに困つたが、折よく通りかゝつた清水寺の客僧案外和尙の奇計で武藤を逃すことが出來た（第二回京都錦（みやこのにしき））。京都を逃れた武藤は吉野の奥に隱れて養生を續けて全快する。一日延元陵に參詣して、平野八郎とあひ、始めて勤王の志を語りあふ。二人は義兄弟の約を固め、天忠組に入つて所志を遂んとする。然し事志と違つて天忠組は失敗したので、二人は又逃れるが夜路を失して分れ分れになる。平野は、意を決して武藤の故郷の水戸に赴く、武藤が必ず故鄕に歸ると考へたからである（第三回花の錦、以上刊行第一號）。然るに水戸は當時姦黨の勢力が盛んで面白くないので、平野は奥州蝦夷地方を漫遊するつもりで出かける。途中宮城野で三島奸藏を懲して少年民吉を救ふ、奸藏は民吉の主人で豪富家であるが

爲人貪欲で龍陽の色を好み、民吉を意に從はせんとて苦しめたところを、平野が出會つて民吉を自由の身としたのである（第四回萩の錦）。さうして更に少年の身上を聞き、故里津輕に往き、里正慾右衞門を懲して民吉の田產を取返してやらうとする。然るに丁度慾右衞門が里人の一揆に殺されんとする所に出會つたので、却つて里人を諭して慾右衞門の生命を助けてやる。慾右衞門は感服して、民吉に田を返した上、民吉を娘細布の婿にする。かく事が無事治まつたのに、一揆鎭撫に來た津輕藩の捕卒等は、八郞を一揆の頭人と誤り、捕へようとかゝる。八郞は怒つて戰ふ。が衆寡敵せず危くなる（第五回錦木、以上刊行第二號）。此方は平野と離れた武藤は、龍田川近くにて、京都から安否を尋ねて來た千束にあふ。そこへ案外和尙も追ふて來るので、武藤は千束を案外に托して京都に歸らしめ、自分は平野の後を尋ねようと決心する。だが案外は、武藤に山陰道から長州に逃れて時機を待つことを勸める。そこへ、天忠組殘黨搜索の捕方が來たが、武藤は難なく切りぬけ、大和の豪傑土浦等の助力を得て、長州に向ふ。案外と千束は捕方に捉はれる。案外に或る考へがあつたのである（第六回紅葉錦）。武藤は山陰道を取つて長州に入らうとする。途中の旅宿で、但馬銀山擧兵の事を聞く。志士等は平和の改革は思ひも寄らぬと覺悟し始めたのである。普甲嶺で亂暴武士二人を斬つた時、女俠岸村お俊と知り合ひ、お俊の案內でその家に滯留する。だが銀山擧兵の失敗から落人詮議が喧しくなるので、お俊の乳母の家に奔る（第七回、機の錦、本文、武藤がお俊の機の陰にかくれる事があるのでかういふ）。然し詮議がゆるまぬので容易に動けず、遂に元治元年になる。此の間將軍上洛、七卿落など時勢の變化がいろいろある。二月下旬になつて武藤は漸く海路因幡の國に渡ることが出來た。この時海上で假死の少女を救つたが、少女が蘇生して物語るところを聞けば、これは意外にも津輕乙女の細布である（第八回纜の錦）。細布の物語から平野の方に話頭が轉ずる。平野は津輕家の捕方に殺されんとしたところを、理解ある家老の執なしで免される。平野は、かねて水戶烈公の意見で蝦夷が北門の固めとして大切なことを知つてゐたので、津輕から松前へ渡らうとする。民吉細布

等はこれを送つて外ヶ濱まで行つたが、いつしか平野の壯志に感化されて行を共にせんといふ。かくて三人松前に向つたが、途中難船して別々になり、死生も覺束なくなる。武藤は細布の物語で平野の運命を知つて長大息する。さうして自分を送つて來たお俊の乳母の父に賴んで細布を千束の許に返し、自分は長州を志す(第九回蝦夷の錦)。伯耆の船上山に詣して武運長久を祈つた夜、武藤は夢に平野と會ひ、その身に危難の迫れるを知る。夢さめた武藤は平野を死んだかと怪ぶんでゐると、忽ち床下から白刄が出る。曲者の正體は因幡の探偵で、人違ひから武藤を刺さうとしたものである。武藤は切手を得んとして探偵を斬る。物蔭からこれを見てゐた巡禮と六部は武藤を捉へようとしたが、武藤は脫して出雲に入る(第十回戸帳の錦)。この巡禮は千束、六部は案外和尙であつた。だが双方ともさうとは氣づかなかつた。武藤は出雲の安來で青樓に上り、端なく元の千束の妹藝妓の八汐といふのに會つた、八汐は公卿の出であるが、情人の肥後浪士のために身賣したのである。こゝで武藤はその後の千束と案外の消息をきく。これによると千束は出牢後病み、武藤の後を追へぬを果敢なみ身投して死んだといふ、案外も嫌疑がつよいため京都に身を置難く筑紫落ちをしたといふ。八汐は千束の遺書を出して渡した。この夜、武藤は早くも探偵殺しの事が露顯して捕はれの身となる(第十一回床の錦)。武藤は淸水寺といふのに拘留されたが、こゝで千束の遺書をみると、千束は死なず、彼を追ふて長州に赴く意が分明した。この夜、武藤は案外と千束のために助け出されて自由の身となり、三人で石見に逃れる。千束は武藤の後を慕つて來る途中、京へ引返した案外と一緒になつたのである(第十二回守袋の錦)。元治元年七月下旬、武藤は石見の大森町で病氣をしたが、それが癒えて、慰みに山に遊んで雁を射たところ、その雁の脚に平野の書面が結んである。それには、平野が漂流して朝鮮松島についたこと、今や朝鮮經略の志を定め松島から朝鮮に渡り、延いては滿洲に入らんとする覺悟なることが認めてあつた、(第十三回文章の錦)。

以上で前編の終りとなつてゐるが、第十三回の終りに案外堂主人はかう斷り書をしてゐる。

案外堂主人曰くこの大和錦は題にかゝぐる如く。勤王を以て經となし。民權を以て緯と爲すものにて。前編の中は勤王のみを主義とすれども。中編の半よりは。民權の事に書き及ぼす腹稿なりしが。覺えず長編になりて。最初より這回迄。合して十三回六十三章に迄及びたりしが。未だ腹稿の三分の一を了らず。故に若し全編を揭げ終らんとせば本年中の日子を費すも。尙終ること能はず。新聞紙上の續物語には。餘り長々しくて。讀者の厭嫌を來すべき恐れもあれば。遺憾ながら本回を以て。大和錦前編となし新聞紙上にては暫く擱筆となす。中編後編等の分は。近日東京書肆某の需に應じて。美麗なる繪草紙として綴り出すべし。愛顧讀者は請ふ。同書に就て全編を知了せられんことを。扨又中後兩編の題目は。高麗錦。蜀江錦。繪の錦。御旗の錦。故鄕錦。赤地錦。山車錦。袈裟の錦。詞の錦。等の錦の種々織成して。自由民權國會論に至る迄。人情艷話を混交し。世を諷し民を導き。風化の萬一に裨補する所あらんとするなり。江湖の君子世の尋常稗史小說とな。見侮り玉ひそ。

だがこの中編後編は遂に成らなかつたので、吾等はたゞこの後語の中で、その腹案を窺ふのみである。

さて又此の後語でも分かるやうに『大和錦』は明白に政治小說として構想着筆されたものであるが、假にこの後語なしとするも『大和錦』を注意して讀めばその政治的寓意は瞭然と看取される。例へば第四回、平野が民吉を助けしは、勤王の武士によつて民權伸張の端が作られしことを暗示する。又三島奸藏云々は當時民權家の怨府となつた三島通庸をいふもので、龍陽癖云々も通庸に當時さういふ噂があつたのである。第六回、案外和尙の案外哲學（人は運命なり、運命は希望に反く、世事は必ず意想外なり、意想外を案外といふ云々）は、いさゝかニヒリスチックな匂ひがするが著者案外堂が自由主義の過激志士に對する忠言であらう。客氣に任せて改革に熱心するも必ず心通り事が成るものではない、何事も誠心盡力して、成敗は天に任せよ、一挫一屈の爲めに志をすてず、運命の逆風にも怒る勿れといふ意味が、噛んでふくめるやうに說いてある。第七回、川邊と一貫道人の生野擧兵贊否論のところで一貫道人が平

和的改革の絶望を知りつゝも輕擧を拙とし、大雄藩を說て味方として勢を制するが上策也といふのは立憲政黨を解いて自由黨に合し主義の實力を强めることであらう。第十回の探偵罵倒論も寓意がある。その他篇中人名に立憲政黨の人々の名が寓されてゐるのが多い。川邊は澤邊であり、長島は中島、瀨山は城山、或は瀨川であり、兒島は小島であり、岸村は岸田であり、土浦は土倉であり、案外は信介自ら買つてゐるのである。この人名の寓意だけでも、この作に可成りの政治的イデオロギイの寓されてゐるのが察せられるであらう。

この小說はいはゞ一種の大衆小說であり（創作大衆小說としては元祖か）、近代小說の意圖は全然もたぬ素人の處女作であるから、技巧方面からは缺點だらけである。性格も描き分けられてゐず、事件も不自然な波瀾が多く、そのくせ平板單調な印象を與へる。その邊のことは立ち入つていふまでもなからう。たゞ面白いのは背景であるが、平野の辿る奧州方面は至つて概念的なのに反し、武藤の辿る山陰方面は精細を極めてゐる。これは信介が十四年から十五年の遊說で地理に熟した結果であらう。從つて描寫も眞實味がある。

この小說の最後に滿洲や朝鮮に志すところを暗示してあるのは、注意していたゞきたいところである。

文章は思ひきつて艷麗なもので、いはゆる歌行體の朗詠調が到るところに飛び出す。見本として第六回紅葉錦の一節を引いて置かう。

> 頃しも秋の九月(ながつき)や。外山の紅葉名に殘る。龍田の川に着きにけり。實に此川は昔人(せきじん)が韓紅(からくれない)の錦をなすと和歌にも詠ぜし如くにて。朝の山の霞にも夕の川に立つ霧も。皆紅の錦して。散りしく庭の楓葉を。踏みつゝ歩めはさながらに。樵蘇往返して林朱買臣(はやしゆばいしん)の錦を織る。隱逸優遊して履葛稚仙(くつかつちせん)の藥を踏むと。咏(なが)めし趣に髣髴たり。次郎はこの有樣に覺えず咏め入りて。坐(そゞろ)に興を催しつゝありける時。後の方(しりへ)に女の聲あり云々。

此の小說は、それでも相當人氣が出たものと見えて、東京と京都で競爭的に出版の計畫がなされたが、遂に京都側が

先手をうつて二冊まで出したので、東京側は豫告のみで立消えとなつた。

『興亞奇談夢戀々』、これは題名の示す如く著者が興亞の大理想を描いた壯快な政治小說であり、民權伸張の反面たる國權伸張を以つて骨子とする。著者の例言によれば――

此綺談は發端より中頃に至る迄東洋敎育に成立たる勤王主義の英雄豪傑等の言行を書顯はし中頃より國權伸張即ち亞細亞振作の事歷に及び竟に自由民權平等主義を以て局を結べるものなり腹稿甚だ多し旬日の能く綴り書し得る所にあらず云々

とあり、又單行刊本の緖言には――

(前略)然れば今この篇に於て綴り出しぬる才子佳人は尋常の眼もてこれを瞥視せんか一双伉儷の戀のみなるべし、若し活眼を開いて明らかにこれを熟視するに及ばゞ亞細亞洲の衰へたるを興さんと欲する切なる戀の大綱より社會人民に自由平權を得せしむる俠勇義膽の戀のくさ〴〵書きあらはされて云々

とあるを以つて、著者の主意と腹構の大を概することが出來やう、因にいふ、この單行本の緖言は、後に案外堂が書き足したものであるが、その戀づくしの戲文風の文字は、得意のものゝ一つらしい、案外堂の文才の豐麗なのを窺ふべき好見本である。

此の小說の舞臺は支那であり、滿洲から發端する。この點で或ひは、『新編大和錦』の後半をつくり代へたものと考へられていゝであらう。

この小說の主人公を雷春字は應龍といふ。源義經滿洲入りの傳說と緣ある吉林省寧古塔の近郊石龍村の待雲寺といふので生長したのであるが、元來支那人ではなく、大雷雨の夜、漂流した日本婦人の死胎を破つて生れ出た日本人な

のである。雷春は生れつき聰明豪勇で膽略があつたが、待雲寺の物外長老といふのが又、豪傑的聖僧であつて、雷春の天資を見込んで、學問兵法を仕込んだので、少年にして將相の材器を備へてゐた。道光の末年、鴉片の亂があつてから、彼は深く東洋の衰頽と西洋人の跋扈を憤つて密々興亞の大志を抱き始めた一日有名な林則徐に遥々振氣篇といふ文章を送つたところが、林は大に感歎し、異日雷春を重用すべきことを北京朝廷に薦めたのみならず、種々の著書を送つて雷の見識を助長させた。雷は林に勵まされ、米人宣教師某について英語を學び、他日の用に備へた。雷は年二十の頃、いよいよ北京に出て林氏にも會ひ、朝廷に遊說して西人抑壓東亞興復の策を起てようとして物外に暇乞して出かけた。急がぬ旅とて諸方を見物し、數月して盛京省の奉天府についた。ところが街上でかねて相識の奇峯法師と出會ひ、一酒亭で舊交を暖める、と、こゝで林の門下の陽威といふ奇士と知り合ひ、陽威から長髮賊の亂のことを聞く。三人は天下の爲めに長大息し、酒の勢ひで散々時政をこき下した。ところが密偵がこれを聞いて官府に告げたので、官兵が三人を捕へに來た。三人は酒亭の少女芳姑の知らせで、酒亭を逃れて山地に入る、官兵はこれを追ふ。結局三人が離れ離れになつて、雷一人が山路に迷ひ、遂に朱騰飛といふ山賊の手に落ちる。朱は山賊ではあるが、憂國の義士だつたし、且つ雷公子の名を聞いてゐたので、大に優待する。だが間もなく朱の山塞が官兵の襲ふところとなり、防禦も力及ばず、雷は朱の娘と共に落ちのびる。朱の娘とは、卽ち奉天の酒亭に危難を助けた芳姑なので、酒亭はつまり朱の見張所だつたのである。かねて芳姑は雷の才名を聞いて見ぬ戀にあくがれてゐたので、喜んで雷と共に落ち去る。二人は漸く錦州まで來たが、欺かれて海賊島に連れ込まれる、それも暫時で英國軍艦の海賊撃滅の時救はれ、支那官憲の手に渡されるが、官は二人に何の訊問もせず江寧の獄に繫いで置く。雷は英人の寛厚大度と支那役人の無能殘忍とを比べて西洋人が勢力を伸すのが偶然でないことを知る。それで興亞の第一着手は西洋人を抑へるよりも支那の內政を改良し、兵備を充實させて實力を養ふにあることを悟る。咸豐三年正月、長髮賊は南京を陥れ、賊

首洪秀全は僞王位につく。雷と芳姑の二人は洪秀全旗下の將劉永福の手で救ひ出されたが、劉は雷と語つて、才識に驚き、洪秀全に薦めて重用させる。洪は雷を引見したが雷の年少を侮り、重用せぬのみか、却つて奴隷にしようとする。だが洪の養女素娥は、雷の美貌と才能に戀し、洪に乞ふて宮中に禁錮させる。初め雷は芳姑との義を思つて素娥のいふことを聞かぬが素娥は一夜死をもつて雷に迫り、雷も止むなく一度契りを交す。芳姑は劉永福の家にあつて、雷と素娥との事、雷が自分への義理立てを聞き、投身して死ぬ。雷は素娥達の油斷を見澄し、洪秀全の宮を逃れ、江岸に沿ふて蜀に入る、迂回して北京に赴かうといふのである。一日定軍山の諸葛武侯の墓に參詣しての歸途、輕氣球が落下して來るのにあふ、その乘籠の中には西洋人めく服裝の美人が氣絶してゐる……

まことに波瀾重疊の長物語であるが惜しいかな、こゝで中絶してゐる。然し後半は案外堂が腹構をそのまゝ投出してゐるので、その大體は知り難くない。

本編の腹稿は是よりこの處女(をとめ)が元清國の女なりしを幼なき時奴隷賣買の外船人の爲めに買取られて佛國に至り佛國慈善家に助けられ學校に入りて修業中輕氣球試驗の事ありし日暴風(はやて)に逢ひて故郷に歸りたる履歴を記し夫より本編の眼目たる自由主義と勤王論の大問答となり雷公子はこの處女の爲めに說破せられ從來抱く所の東洋主義を捨て熱心の自由家となりこの娘と夫婦となりて(諸國を遊說し終に都留其斯坦に入り帖木兒の偉業を慕ひ亞細亞を興し歐羅巴を抑へ回天飜地の大事業を作すに至る又朱騰飛奇峯陽威賽芝龍等の生死本末等も一々洩れなく記載すべき腹稿なりしが云々

著者はその後閑を得て後編の方も脫稿した如く、友人飯田鎭雄の手にこの小說の完全な原稿を殘して死んだといふ。然し後年飯田氏によつて出版されてゐるのは矢張り今梗槪を掲げた前半だけであつて、後半が果して何うなつたかは分らない。たゞ案外堂自身が新に緒言を書いてゐるところを見ると、完結させたらしくあるが、若し完結させたとせ

ば十八年朝鮮在留中でゞもあらうか。然しこれは疑問である。

『新編大和錦』が朝鮮行の影響を暗示してゐるとせば、この作はそれを明示してゐる。政治的寓意の方からいへば、前記案外堂の腹案にも明らかである如く、東洋從來の弊風を破り自由政治を行つて富强の實を擧げ、東洋を打て一丸とし以て西歐の跋扈を抑へるといふにある。然しこの前編に現はれてゐるところだけでいへば、專ら東亞振興の準備工作の潜行だけである。主人公の雷春は元來日本人であるが、その日本人が支那の爲めに挺身して興復の苦心をする、こゝがこの政治小說の眼目で、日本をもつて東亞の救世主にしようといふ信介胸裡の理想の現れである。雷春の準備工作的行爲の大體は梗概で判明してゐるが、なほ追補的に雷春の政治思想の動きであつて同時に案外堂信介のそれであるべきものを二三拾つて見ると、第七回雷春が林則徐に示した振氣篇には、「東洋の衰勢を挽回し西洋髯奴を壓伏せんとす」る意を論じてある。第八回林が雷に與へた書には、「英國は支那の大敵となつてゐるがこれは畢竟與し易きのみ、終に患を爲す者は其れ魯西亞乎」といつてある。これは著者が支那をかりて幾分日本の爲めに語つてゐるところがあらう。第十回雷が西洋人の跋扈を怒つて朝廷に遊說せんとするところ、奇峯法師と二人で外人に對する政府の態度の手ぬるいことを嘆ずるところも、矢張り當時の日本の爲めに慨するところがあるのである。第十三回雷が陽威、奇峯と長髮賊を討つことを誓ふところを、若者は評して「東洋亞細亞の敎育に浸潤せられし悲しさには自由平等の說を唱へ卑屈奴隸の風習を一變せんとは謀りもせで唯彼の一種の奴隸主義忠義の說をのみ主張して淸廷の爲に軍を起し長髮賊に當らん」と云々といつてゐるが、これも勿論日本人に對する自由主義宣傳の意が含まれてゐるのである。第二十三回山賊朱騰飛が虛無黨の傳へた爆藥を用ゐて後白浪と逃うせるところで、あの虛無黨の記事は面白いが、これは然し加波山事件から思ひついたのではなく、本物の虛無黨をさすものである（時日が先だつてゐる）。第三十二回雷と芳姑と二人が英艦に助けられてから英人の生活を見、西洋人が東洋に雄長たる所以あるかなと悟るところ、「我が平

生の志を達し東洋亞細亞を興さんには內國の政事を改良し且つ兵備をも擴張して政事兵力彼と對等の地位を得ざる可からず單に空拳を張り空理を談ずるも無益なれば將來飽まで實力を養生して大事を晩成す可き事を工夫なしつゝ」云云と慨嘆するあたりは、寧ろ支那よりも日本に向つて說いてゐるかの感がある。勿論正面的には支那を眼中に於いて語つてゐるのであり、それに違ひないが、同時に支那をカムフラージュとして當時の日本に對して言ひたいところを吐露してもゐるのである。

然し何れにしても東洋問題、東亞經營の理想を小說化して最初の小說として、單にそれのみをもつてするも政治小說史上重視すべき作たるは、改めていふまでもない。

小說としては、此の種の小說の常として人物事件に多大の理想化や誇張があるが、先づ無難の作であらう。支那の地理その他、長髮賊の史實などは當時としてはよく調べて書いてある。人物の才子佳人式對偶は舊式人情本の脫化と見てもいゝが、然しその扱ひ方がさう定りきつたものでなく、悲壯味を伴ふのは面白い。洪秀全は本來なら今少し力を入れて描いていゝ人物であり、元來雷春等と對立すべき人物ではなかつたのであらうが、然しこれは腹案の進行上止むを得なかつたものか。何せ規模の大きいのと波瀾に富むのとは、想像力創作力の微弱な當時の小說界でいへば長所と賞めて差支へない。かういふ點になると、案外堂の小說的手腕は全く案外である。殊に面白いのは、案外堂持前のいたづら癖が時々顏を出してゐることで、山賊が虛無黨將來の爆藥で逃のびるところもその一例であるが、最後の定軍山の諸葛孔明の墓近くで輕氣球の飛んで來るのを見るところなどは、いさゝか念の入つたいたづらである。

此の小說の文章も歌行體が非常に多く、艷麗なこと、諧調に富むことは『大和錦』以上かも知れない。第二十五回雷春と芳姑が道行の一節——

行々(かうかう)として重ねて行々たり明月峽の曉(あかつき)の色盡さず渺々として復渺　たり長風浦の暮の聲猶深し偖ても遙けき旅路

かな曉に長松の洞に入れば巖泉咽んで靈猿吟ず夜極浦の浪に宿れば靑嵐吹て皓月寒し實に便なき世のさまや「住馴し山塞（とりで）の雲を跡に見て踏しく野邊の草まくら旅のかりねにくさまくら結ぶ緣の戀の道うきてふことも白雲の宿定めなき落人の野くれ山くれ行きくれて苔のむしろや岩がねをかたしく夜の裀（しとね）さへ錦にまさる思ひなり（下略）

これを讀んで大體想像がつくであらう。同型の才人でも、夢柳居士は時に文章に拘泥苦吟する樣子が見えるが、案外堂に至つてはたゞ滾々と筆に任せて湧き溢れる感じがある。些も澁滯の痕がない。才人の面影の躍々たるを覺える。

以上の二作は、何れも所謂稗史であり、歷史小說の體をなしてゐる。古昔の事蹟にかりて今を述べたものであるが第四作の『**自由艷舌女文章**』になると、現代を舞臺にとつて所謂小說的なものとなつて來る。而かも以上二作は必らずしも自由黨の主義思想をのみ反映したものといひ難いが、この『女文章』になると、全然自由黨の宣傳小說になつてゐる。從つて前記二作は自由主義民權論者たる信介本來の理想を描きたいまゝに描いた小說といひ得るが、『女文章』の方は、自由黨員信介が黨の爲めに執筆したものと見てよい。

その上この作は當時の政治小說としてやゝ特殊の部類に屬する。これは作全體の趣向が女性を主位に、男性を客位に置いてある點でゞある。女子が自由に主動的に活躍し、男子は凡て受動的位置に於かれてゐる。內容は男女の情事に托して自由に對する熱愛を諷示したもので、『情海波瀾』、『自由廼錦袍』の傳統を追ふ寓意ではあるが、作中の男女がこれ程極端に主客の地を顚倒した例は無い。普通女性を主人公とした小說に於いては成る程男性は客位に立つが、然しその場合はたゞ女主人公一人が主位に立つだけで他の女性には及ばない。ところがこの『女文章』に於いては、女主人公も他の女性も一團となつて男性群を壓してゐる。これは當時としては珍らしい手法に屬する。それでこの特色から推論して、この小說を女權小說と見なす論者もある。序文には自由戀愛禮讃めく言葉が見え、本文の中（例へば

上巻第十回終りの如き）にも女權をほのめかしたところがあるなど、或は女權擴張主義の底意とうけとれぬでもないが、然しこの小說を直に女權小說といふのは聊か的外れの見當であらう。作者が多數の女性を驅使し女性群を男性群の主位に置いたのは、女性尊重の心からではない、一に女性讀者の開拓といふことを眼中に置いた爲めである、自由民權思想と當時の政情を婦人社會に宣傳して、女流の間に政治思想を養成し且つその奮起を促さうとした、いはゞ一のトリックに外ならない。女流を目標にしただけ、幾分女權的臭味はつき纏ふてゐるし、その結果遂には女權擴張主義を奬勵することになるのは當然だが、この小說そのものを專ら女權思想を寓したものと見るのは、正しい見方でない。尙ほこの事は、作者の意圖をつきとめて、作中の女性なり男性なりが寫實的存在ではなしに寓意的存在であることを知ると、疑問の餘地はなくなる。作者の狙ひは女性尊重にあるのではない、女性利用にあるのである。

女性群の中で主位に立つものはあづまや小たみといふ藝妓である。今年十七だが、十四の歲から二十三までは抱へと定つた不自由な身だのに、養母おかんは非道にも威勢づくめで金持の大官髯大盡の意に從へと責める。小たみがその辛さに堪へて生きてゐるのは、未見の戀人古井由次郎に會ひたい一心からである。一日小たみは髯大盡の强暴な意志に手强く逆つたので斬られるところを、新貝熊次といふ豪商に救はれる。だが熊次もかねて小たみを思つてゐたので、今度は恩を笠に、わが意に從へと責め立てる。小たみは堪へきれず、逃れて、日ごろ姉分としてゐる隅田川畔の女隱士淺間のお信の許に匿れる。

お信は極めて複雜な經歷をもつた女性である。彼の女は大鹽の殘黨人見權平の子で姉と共に勤王公卿の妹大路家に奉仕したが、主人妹大路が兇徒に暗擊され、姉おたかは幕吏の手に死んで後、藝妓となつて母を養つてゐる中、勤王の壯士櫻山某と契つた。だが櫻山が元治の變に長州兵と共に働いたので、幕吏に狙はれ、お信の苦心で漸く長州に落ちのびたが、それもつかの間、奇兵隊小倉の戰に討死した。お信は悲歎して貞信と名を改めて尼になつたが、ある老

隱士の情で學問することが出來、智見も大に擴まつたので、發奮して女人のために奉仕しようといふ大願を起し、還俗して諸國遍歷に出た。さうしてお力、お金、智次（女）などの同志を得、自身は暫時隅田川に假住居して、同士からの消息を待つてゐるのである。

一方、髯大盡、新貝は、おかんと箱屋の戌吉を使つて頻りに小たみの行衞を搜してゐる。戌吉は遂に小たみがお信の許に隱れてゐるのを嗅ぎつけて、押しかけて來て、小たみを受取らうといふ。髯大盡も來る。そこへお力が突然現はれて、お信に力を添へ、小たみを何うしても由次郎に添はせようとかゝる、二人は髯大盡の威嚇には恐れぬが、おかんが小たみの身の代千兩よこせといふのに、ハタと當惑する。だがこれも、お金智次が出現して、おかんに千兩箱を投げつけるので、難なく小たみは自由の身となる。髯大盡と新貝は小たみを取逃した上、それぞれ酷い目にあふ。

これが荒筋である。

此の小說の政治的意圖は如何なるものであるか。それはいふまでもない、自由黨の立場からする民權自由思想の宣傳普及である。國民をして自由黨の勝利を信ぜしめ、政府の暴虐及び失敗を悟らしめんと試みることである。殊に僞黨撲滅運動熱のまだ冷めないころとて、改進黨の行動に對する多分の諷刺嘲謔を含んでゐるが、この點も、當時の政治小說としてこの作の一特徵となつてゐる。この作中の男女性が表示する寓意は何か、作中の事件と當時政界の事實を對照して、先づそれを明かにし、この小說の含んでゐる政治的意圖を今少し具體的に證示しよう。

藝妓小たみは、年十七といふ點、十四の歲から二十三まで抱へと定つた不自由の身云々の文句から推して、當時の日本國民を指すことは明白である。十四云々は明治十四年國會開設の大詔をいひ、二十三云々は二十三年國會開設の期をいふものである。養母おかん、かんは卽ち奸、官權乃至吏黨をさす。箱屋の戌吉とはいぬ（探偵）、卽ち警察の俗稱である。髯大盡は政府大官たること、いふまでもない。新貝熊次、新貝は改進を逆にしたものだが、その上新參新

米の新の意を寓してある、熊次の熊は勿論隈で大隈のことである、合して大隈を總理とした改進黨のことゝなる、小たみの未見の戀人吉井由次郎といふのは、國民熱望の對象たる自由及びその權化たる自由黨を意味する。吉井とは新貝の新に對するもので、自由黨が愛國公黨以來成立の由來が古く、改進黨の如き出來星の新黨とは違ふといふ意である。お信とは、信はマコト、卽ち憂國の志士の赤心の信賴すべきをいつたのであり、お力はいふまでもなく腕力の表徵、お金は金力、智次は智力を表徵するものである。さうしてこの腕、智、金の三力主義は時の自由黨領袖星亨の政黨操縱の信條であつた點を思ふと、この作中の自由黨イデオロギイは卽ち星亨のそれだといふことがわかる。以つてこの頃の星の自由黨に於ける勢力を見るべきである。

作中の男女性に以上の如き寓意があることがわかると、此等の男女性の交渉に成る作中の事件はかういふ寓意をもつことになる。卽ち將大盡がおかん、戌吉を味方として小たみを意のまゝにしようといふのは、政府大官が官權警察の力によつて國民を自己の喰物にしようとかゝることの諷示である。小たみが辛苦して由次郎と相見えることを期してゐるのは、國民があらゆる暴壓に堪へて自由の天を見る日を待つてゐる意味である。新貝が一度小たみを將大盡の手から救ふてやることは、明治十四年の開拓使拂下事件を暗示する。當時世評では、大隈の反對で此の事件が抑止されたが、その代り喧嘩兩成敗の意味で大隈は免官になり、大隈の一味の辭職となつたものとしてゐた。そこで大隈の力で國民が政府大官の喰物となるのを免れたといふことを、小たみを救つたことにしたのである。それから新貝が小たみを手に入れようとかゝるのは、卽ちこの問題に端を發して、大隈及びその一派が改進黨を組織し、この件を恩に被せて國民の歡心を得ようとするのを諷したものである。此等の點から見て、將大盡には黑田清隆の面影があることは否み難い。將大盡が度々酒狂的行爲をするのも、當時黑田が度々さういふ行爲を事實やつたことを諷刺したものであらう。小たみは新貝の許を逃れて更にお信に賴つたのは、國民が私利私慾の僞黨を離れて憂國志士（暗に自由黨を

いふ）の赤心に信賴したことの意味である。お信が大鹽殘黨人見權平の娘云々は、人權の發揮が大鹽騷動以來であり憂國の赤心もこの邊を基點として高まつて來たといふのであらう。末段、小たみがお信、お力、お金、智次等の助力で自身の身となるのは、國民は、憂國志士の赤心に腕力、金力、智力の援助を得て自由の身となり、自由黨の完全な勝利となるといふ意味であるに疑ひがない。

この小說の人物事件を寓意的にしたのは、この頃の政治小說の常として官憲の眼を逃れるためと下層階級の讀者に訴へるためには違ひないが、然し幾分例のいたづら氣分が手傳つてゐることも事實である。さうしてこのいたづら氣分はやゝ痛烈な感情につゝまれ、主として髯大盡と新貝熊次に對して向けられてゐる。今日からいふと、この小說の諷刺は甚だ陰微で捕捉し難いものに見えるが、當時の讀者には直ぐぴたりと分つたので、喝采されたものであらう。著者のいたづらが又、この喝采を助けたことはいふまでもなからう。然しこれを單に小說として見るときは、勿論幾多の缺點がある。機構に均齊が缺け（お信の身の上話が長過ぎる如き）、物語にも曖昧不可解な點が多々あり（例へばお信の隅田川畔の生活の長過ぎることや小たみと由次郎との關係など）、性格描寫など論ずるまでもない。殊に女性群に於いて眼立つて不自然さが多く、又古井由次郎の如きも全然幽靈的存在となつてゐる。だが政治的寓意を傳へるのが主であつた案外堂は、かういふ諸點を問題にする程小說創作のテクニクを重視しなかつたものに違ひない。小たみを中心に數多の女性を點出して主位に立てたのは、著者案外堂の新工夫であるが、これは、物語そのものと必然的な關係があつてさうなつたのではない。この小說の趣向からいつて、必ずしもかういふ女性群を必要としたとはいへない。お信、お力、お金、智次等が以上の如き寓意的存在である以上、これを男性としても間に合つた筈である。これを女性にしたのは、全く女性の讀者を啓蒙し、奮起させて自黨の味方にする心算からに外ならない。即ち女性尊重ではない。女性利用である。これが、この小說を漫然女權小說と呼ぶことを許さぬ所以である。

『義人傳淋漓墨坂』は案外堂の政治小說として最後の作物である。此の作に於て、案外堂は再び戲曲院本の形式（彼の所謂淨瑠璃體）をとることにした。然し、實質の政治小說たることには何の變りもない。發端の序詞に曰く——

左に記す所の者は過日御約束申上おきたる東洋義人百家傳（未發兌第四帙に掲載すべき分）の內信濃の國須坂城主堀長門守のお家騷動並びに百姓一揆義人民助駕訴の一條より堀內藏守の仁政及ひ瓦解の秋本丸に於て德川慶喜公を切諫なし屠腹して死するに至るまでの事歷を記すものなり然れども爰に記す所の者は試に院本風に模擬したるが故に實錄とは相違したる廉も少なからず近日百家傳第四帙刊行を待つて參照あらんことを希望仕る所なりさて全篇の役割は大略左の如し

第一　墨坂城內の段
第二　米子村瀧の段
第三　芝宮祭禮の段
第四　小布施酒店の段
第五　土谷坊村川普請騷動の段
第六　龜井戶天神駕訴の段
第七　江戶屋敷の段
第八　丸山邸早打の段
第九　城外刑場の段
第十　御本丸の段

右の如く豫め役割は相定めたるが筆の都合にて多少の變更はあるべし云々

時代は再び幕末に還つたわけである。從つてこれは、『女文章』程、露骨な黨派的なものではなく、寧ろ以前の超黨派的な民權思想の宣傳を主旨としたかに見える。

第一墨坂城内の段。保里家の執權野口源兵衛は家老河野某等と計り、殿に淫酒を進め、保里家を横領せんとする。殿の弟大角があるので、河野と二人でこれを除く計を議する。殿が長夜の宴を張つてゐるところへ、忠臣齋藤丈右衛門が出て諫言し、百姓の虐政に苦しむ由を告げ、且つ硬骨の臣龜田某の勘氣を許し玉へといふ。殿は怒つて齋藤を手打にせんとする。野口はこれを見て、殿をなだめ齋藤を助ける。これは齋藤をわが味方につける調略からである。齋藤はわざと野口に一味した如く見せ、本心を明させて、野口を一刀に斬らんとするが、斬り損ずる。

第二米子村別莊の段。齋藤の妻お貞は父（龜田）や夫の安全を祈るため米子村の不動に參詣する。仲間某が來てお貞をかどわかし、かねて執心してゐる廣瀨軍記の許につれて行かうとする。お貞はきかぬ。殿の弟大角は米子村の別莊に態よく押込められてゐるが、佯つて狂氣とふれこんでゐる。そこへ殿から上使として土屋庄藏、廣瀨軍記の二人が來、齋藤丈右衛門がこゝに匿れてゐることが分かつたから、出して渡せとかけ合ふ。齋藤は大角に迷惑をかけぬため怨を呑んで屠腹する。上使は首を持つて歸らうとするが、大角は佯狂振りを發揮してきかない。上使の歸つた後で大角が本心を示すので、齋藤も安心して死ぬ。この時不動の瀧から落ちて來る水に血が見えるので、大角は怪んで瀧壺に向ふ。これより先、廣瀨は大角の許から歸る途中、瀧のところでお貞にあひ、意に從はせようとする。お貞が肯かぬので怒つて斬る。そこへ大角が見えるので廣瀨は暗に紛れて逃る。大角は齋藤夫婦夫婦の義死に大に感激する。

第三芝宮祭禮の段。芝宮は殿の先祖を祭つた宮、その神殿の新築の祭りである。下見分の土屋は、土谷坊村庄屋德右衛門の娘お蝶を見かけ、かねての思ひを晴さうとして追ひかけるが、相役廣瀨が出て來たので殘念がる。お蝶は戀

人民藏と出あひ、民藏の薄情を恨み、互ひに苦勞する覺悟を明す。

龜田は芝宮に參詣する途中、野口から神主上野兵庫宛の密書を拾ふが、中には、神酒に毒を入れて殿を亡き者にする由が書いてある。使丁が龜田を怪しみ捕へんとするのを、河野が助けて、野口にとりなし、神酒を戴かしめる、龜田は覺悟して飮んで醉倒れる、殿の身代りに立つつもりである。そこへ土屋はお蝶と民藏の密會を見つけ、不敬とひ立てゝ連れて來る。然し此の二人の處分について土屋と神主の爭ひになつて決着せぬ、土屋はお蝶だけを助けようとするのである。河野兩人を仲裁し、民藏お蝶に向ひ、夫婦の約束があれば助けるがさもないと罰するといふ。お蝶の父は、その約束があるといひ立てる。そこで河野は神酒を出して二人に祝言させようとする、ところが醉倒れてゐた龜田は急に起上つて、これを邪魔して神器も瓦盃もめちやめちやにする。野口河野は毒酒の計をあきらめて歸る。歸つた後で龜田は、民藏德右衛門に惡人の計略を明し、殿の身を賴む。この時廣瀨軍記の立聞きしてゐるのを見つけた龜田は、手足のきかぬ身で軍記を喰ひ殺す、同時に毒酒の利目で吐血して死ぬ。民藏は龜田の言に感激し國のために起つ。

第四墨坂町の段。酒店布施屋で、娘おみきは父佐五兵衛の氣象がこの頃變つたことを心配してゐる。惡番頭燗八はおみきが新參の手代直七と譯あることを父にいふと脅し、口止めに自分の意に從へといふ。おみきは直七に勸めて夜逃げしようとする。燗八は、直七を陷れるため、直七に盜賊の汚名をきせる、直七が店の金を盜んで兄に送つたといふのである。ところへその兄が出て燗八の計事が割れる。……

信介が此處まで書いて來たところ、丁度淸國へ出張しなければならなくなつたので、續筆を約して、これだけで一旦打切つた、然しその後續筆の機がなく、終にこのまゝ第四段目で中絶となつた。

まだ腹稿が半分にも達せぬので、斷定的なことはいへぬが、序詞とこゝまでの梗概に照して民權思想を鼓吹し、人

民の奮起を慫慂したものたることは、分明である。殊に第三段を見ればそれがよく出てゐる。民藏は人民の表象であり、お蝶は國會を意味すべく、河野が二人の約ありや否やと聞くあたり、頗る寓意に富んでゐる。この寓意が何う發展されて行くか、興味をもつて期待させるが、それは然し今こゝで私が想像する限りではない。この作は、未完ながら讀者に大きな感激を與へたらしく、當時の一戲作（『二十三年國會道中膝栗毛』）の中に――

又寄席だと言つても講釋にや近來の義民仁人の美談新談や淨瑠璃にや淋漓の墨坂だのテ言ふ新作物の隨分感心するものも出來てゐる云々

といふ一節があるのでも知られやう。

信介の作物については、上來所々で批評めく語を陳べて來たので、改めて結論はつけぬが、その結構の大規模な點、文章の流麗な點、大衆的興味に富む點等で、彼が餘技視してゐた文學の上からも、十分記憶に價する手腕をもつてゐたことを繰返して置かう。

『佳人之奇遇』と東海散士

第一　『佳人之奇遇』以前の東海散士

一　柴四朗傳

柴東海散士の『佳人之奇遇』が、政治小説として、矢野龍溪の『經國美談』と並んで末廣鐵腸登場以前の政治小説界に壓倒的な勢力をもつてゐたことは、もう文學史家の定論で、私が衒學的にその證據を拾ひ集めて列べ立てるまでもない。然かも東海散士も、龍溪や鐵腸と同じく文壇小説界には全くの素人であり飛入りであること、而かも時の文壇小説が如何にこの飛入り新人達の政治小説に壓倒され、追隨を餘儀なくされたかといふことは、興味ある事實として記憶されるべきであらう。私の目的は、この『佳人之奇遇』を能ふ限り詳しく研究することにあるが、それには、『佳人之奇遇』以前の東海散士、『佳人之奇遇』時代の彼、『佳人之奇遇』以後の彼といふ順序で、著者自身の傳記をも併せて研究して行きたい。一つは、『佳人之奇遇』の性質がこれを要求するからであり、一つは柴氏の傳記の可及的正確なるものを傳へて置きたいからである。

先づ『佳人之奇遇』以前の散士について語らう。

散士は柴氏、名は四朗、嘉永五年十二月二日、安房國周淮郡富津の會津陣屋に生れた。父の佐多藏出道は代々の會

津藩士で馬術と砲術の師範役を兼ね三百石を領してゐた。母は日野氏。この頃いはゆる夷船が近海に出沒するため幕府は海防として諸藩に江戸灣を守らせたが、會津もその番に當り、富津に陣屋があつて藩士を詰めさせてゐた。丁度佐多藏が組頭としてこゝの陣屋に在番のとき、散士が生れたのであつた。第四男なので茂四郎と名づけたが、維新後何時とはなく四朗にしてしまつたといふ。兄弟姉妹十一人の多勢で、兄が三人、弟が一人、この弟が陸軍大將柴五郎氏である。三人の兄についても種々記すべきことがあるが、こゝでは略して置く。

幕末多故の際とて父兄は公事に東奔西走してゐたので、散士は祖母と母の手に生長した、且つ生來多病であつたので、餘り學問武藝も學ばなかつた。藩校日新館に入つて漢學を勉强したといふが、自身では殆んど學問らしい學問はせぬといつてゐる。然し先づ後年の敎養文才を考へて、相應に學ぶところがあつたと見て可い。

散士が生れて間もなく藩主松平容保侯が京都所司代となつたので、佐多藏も上京し、選まれて精選組の隊長となつた。散士は十餘歲で始めて兄秀次（後太一郎）に從つて京都に上つたが、間もなく慶應三年の大政奉還となり、ついで鳥羽伏見の役となつた。散士はこの時會津側の一兵として出陣したといふ。會津軍が東歸するとき、散士も一緒に大阪から乘船した、ところが相模灘で難風に遭ひ、伊豆の網代に漂着したのでそこに上陸し、陸行して江戸に出で直ちに會津に歸つた。

續いて官軍の會津征伐となり、明治元年十月會津侯の降伏と共に散士は十四で亡國の臣となつた、會津征伐の悲慘は『佳人之奇遇』初篇卷二の中に詳しいから、別に述べないが、たゞ散士個人に關することを二三語ると、散士は歸藩後間もなく有志の少年達と幕府の亡士沼間愼次郎（守一）についてフランス語を學んだ。時勢に感じてこの頃早く海外渡航の志を起したものであるといふ。だが別に藩の有司の間にも海外留學生を派遣する議が起り、散士等の二三子を當時藩に雇はれてゐた外人スネルに托して送ることになつたが、折惡く散士は熱病に罹つてその機を失した。さ

うして熱情が癒たころはもう落境が四方から官軍に包圍されて何うにも出來なかつた。籠城の際は散士も銃を手にして戰つた。父は傷つき、次兄は死し、母と幼妹は自刄する。散士は全く斷腸の悲を嘗めた

會津沒落後、降服人として東京に護送され明治元年の末頃まで謹愼所に拘禁されてゐた。放免後の散士は、敗殘者の生活苦を骨に徹する程味はゝされたが、それでも好學の念が絶えなかつた。明治二年の初頃は舊會津藩で假設した英語學校に學び、次いで沼間氏の塾に入つたが、間もなく閉塾となつたので、山東直砥の北門社に遊んだが學資がつづかす、傳手を得て横濱に赴き、英人某の書生となつた。これが明治三年から四年頃のことである。五年春の頃に及んで、斗南地方(舊會津藩の移封された土地)に於ける廣澤安任の牧場に傭はれた英人某の通辯兼案内として東京から陸路斗南に赴き、そのまゝ自家に留まつて開墾仕事に手傳つてゐたが何うしても修學の志がやます、思ひ切つて函館に渡り、漂浪して就學の途を求めたが、見つからない、それで去つて弘前にある東奧義塾に入つた。然しそれも元より學資がある譯ではないので、塾僕さながら塾の雜用に扱き使はれつゝ勉強したものらしい。然しこれとて永くはなく、明治六年末か七年の初め頃去て會津に歸り、暫時同處の日新館に學んだ(これは、維新後會津藩士の食祿公債を基金としたもので、舊藩士の子弟には學費輕減の特典があつた)、だが矢張り田舍學校では滿足が出來す、明治七年再び上京し、人の書生となり食客となりなどして苦學しながら具さに困窮の味を知つた。だがそのうちに漸く一縷の光明が見出された。

明治七年の末か八年の初頃、散士は長兄太一郎の周旋によつて、横濱の税關長をしてゐた柳谷謙太郎氏の書生となつた。處が柳谷氏は散士の才識と篤志に感心し、學資を補助して勉強させてくれたので、散士は八、九、十年まで足かけ三年間大に落着いて學業に專念することが出來、又餘暇には文章を書いて新聞に投寄した。此等の文章の或るものは、今日なほ見ることが出來る。

明治十年二月西南の役が起るや、散士の先輩山川浩中佐は別働旅團の一隊を率ゐて出征した。此の役、會津人士で政府の召募に應じ、巡査となつて戰地に赴くものが多かつたが、散士も遂に山川氏に乞ふて臨時將校となり、その隊に屬して出征した。散士が戰況を報じた書簡が東京日日新聞及び東京曙新聞に掲載されたので(一)、兩紙の通信員となつたかの如く噂されたが、事實は違つてゐた。

役終つて凱旋すると共に、戰史編纂御用掛を命ぜられたが、これは、別働旅團の殘務整理所で同旅團、就中山川隊の戰鬪報告を編纂したものであつたらうといふ。

山川將軍は谷將軍と入魂の間柄であつたので、散士はこの時谷將軍の知遇を得た。その他山川將軍と知合の土佐軍人と多く相知つた。此の人々とは役後歸京してからも交際を續けたが、そのうちに豐川良平氏の如き人々とも知り合ひ、岩崎家へも出入するに至つた。これが緣となつて、豐川その他の口添へで岩崎家から金を出して貰ふことに話が熟し、米國留學の夢が現實して、明治十二年一月(と傳はつてゐる)いよいよ洋行の途に上つた。散士時に年二十五であつた。

此の時丁度前の柳谷氏が桑港領事に轉じてゐたので、散士は先づ桑港に落着き、同地の商法學校に入つた。こゝに在ること約二年、明治十四年春東部のマサチューセッツ州ケンブリッヂに移り、有名なハーヴァード大學に暫時遊んだ。政治經濟の學を專攻したものであらう。十四年の秋冬の間、フィラデルフィアに移り、ペンシルヴァニア大學に入り、主として同大學內のホワートン理財學校といふので經濟學を勉强した。散士は此の頃好んで保護貿易論者のケリーの著書を好んで研究したといふが、これは散士が後年の政見乃至活動と關連して注意すべき事實である。かくて同大學でバチェラア・オフ・フィナンセスの學位を得て六年目の十七年十二月歸朝の途に就き、十八年一月着いた。

滯米中の散士の生活は『佳人之奇遇』の處々でも一斑が窺はれるが、熱心に勉强したのみならず好んで旅行して米

國政治經濟界の實地を見聞した。學資は岩崎家から大部分貰つてゐたがこれで足りずに、内外の新聞雜誌に寄書して多少稼ぎ足したともいふ（今日その形跡を認めることが出來る）。又時々日本の事物なり歴史なりに關する講演をした、これは一つは日本紹介の手段でもあつたのであらうが、一つは矢張り學資稼ぎであつたのかも知れない。淺草の某書肆に此の頃の講演の手控が一束藏されてゐる。日本の雜誌では、犬養毅の主宰した「東海經濟新報」に頻々と寄稿してゐるが、これ等の通信や論文も、多少の報酬を目當としたものであつたらう。

こゝにロマンチックな一挿話があるが、散士が柳谷氏に寄食してゐたころ、柳谷氏の遠縁とかいふ一少女が矢張り同家に寓してゐた。散士は少女の才貌を見て大に心を動し、幾度か切なる胸中を打ち明けようとしたが、人の寄食者たる身で妻帶でもあるまいと、漸く耐え忍んだ。さうして他日成業の曉には柳谷氏に告げ、必ず此の人を得て伉儷とならんと誓つた。散士はそのまゝ洋行の途に上つたので柳谷氏は勿論、少女も散士の厚い心は少しも知らなかつた。かくて春秋七星霜、散士は心窃かに他日の誓を實現する日を數へて歸つて來たが、歸つてみると、少女は既に良縁を得て他家に嫁り、綠葉成蔭子滿枝の歎に悵然たるものがあつたといふ。然し少女も見事嫁し當てた。その良人と仰いだ人は、前の内務大臣男爵山本達雄氏であつたのである。（二）

註（一）例へば東京日日新聞、明治十年七月四日、九月十一日の條、東京曙新聞、明治十年五月八日戰場實話及び十五日（別報）の條等參照。

註（二）三十三年九月一日、讀賣新聞「失戀文士」の記事。

○なほ以上の傳記は、明治元年までは、大體明治二十年九月二十五日繪入自由新聞一三七〇二號附錄「東海散士詳傳」により、元年以後は主として散士の令弟陸軍大將柴五郎氏の手翰によつて草した。

二　初期の諸文章

『佳人之奇遇』發表の以前に成る散士の文章は、私が可成り努力して捜したに拘らず、何程も寓目することが出來なかつた。前註（一）の戰時通信の外、私は東京毎日新聞に於いて(一)「山林ノ材木ヲ伐ルハ國家ノ利害ニ關スルノ論」（九年十月二十七日）(二)「東洋美人ノ歎」（九年十一月二十四日）、(三)「盲數學家サンドルソンの遺事」（九年十二月十六日）(四)「地方人民ノ疲弊」（十年二月十五日）(五)「送友人西征」（十年三月九日）の數篇、『東海經濟新報』所載の諸論文、朝野新聞に於て米國からの書翰（十六年四月十九日、二十日）を發見したに止まる。

だが私は、發見した文章の數の少ないのに失望しなかつた。何故なれば私は實に意外ともいふべき珍らしい文獻を發見した。それは謂はゞ『佳人之奇遇』の原型とも萠芽ともいふべきものであり、散士がこの時既に若干の小說家的手腕と想像力をもつてゐることを證明したものであつた。「東洋美人ノ歎」がそれである。この一篇は、『佳人之奇遇』發表以前に於いて、種々の點で最も注目すべき文章であるから、且つ又誰人もさう容易に見られるといふものでもないから、左に全文を採錄しよう。

東洋美人ノ歎

誰カ云フ東洋ニ美人ナシト東洋ニ少女有リ名ヲ蜻和ト呼ブ其ノ顏ハ桃李ノ如ク其容ハ嬋娟眉ハ遠山ノ綠ヲ畵キ肌ハ芙蓉ノ露ヲ凝シ春花秋月人ヲシテ神飛ビ魂消セシム之ニ加ルニ其ノ性溫和ヨク天ノ明命ニ從ヒ聖賢ノ敎ヲ守リ父母ニ孝ニ婢僕ヲ憐ミ未ダ嘗テ外ヲ窺ハズ況ンヤ外人ト交通スルニ於テヲヤ故ヲ以テ男女交際ノ道世間人情ノ何物タルヲ知ラザリシ也蜻和年既ニ二八東風花綻ノ時世人競テ之ヲ庭中ニ移植シ朝夕ニ之ヲ愛弄セント欲スルモノ比々皆然リ西家富貴ノ遊冶郎東隣輕薄ノ少年輩爭テ交通ヲ競ヒ艷書陸續案上堆ヲナス或ハ珍器奇物ヲ贈リ百方誘引ノ術ヲ盡

スト雖モ靖和固ク執テ従ヒ肯ゼズ玆ニ西方ニ貴公子アリ頗ル猾才ニ富メリ嘗テ靖和ノ容色アルヲ聞キ來テ說テ曰ク容色ハ時ニ及ブヲ貴ビ朝華ハ日ノ暮ルルヲ忌ム男女ノ伉儷ハ天道ノ常理ナリ木石ニ非ザルヨリハ人間豈ニ無情ナランヤ然ルニ貴嬢ハ人ヲ拒絕スルコト斯ノ如ク其レ甚シ是レ天道ニ背ク者ナリ貴嬢若シ固ク執テ余ガ言ニ從ハズンバ或ハ父母親族ニ害アラン且ツ貴嬢モ亦早晩他人ニ嫁セザルヲ得ザルベシト或ハ慰諭シ或ハ恐嚇シテ其志操ヲ動カサント試ミタリシニ靖和性孝順ナリ或ハ父母親戚ニ害アランコトヲ恐レ意ヲ枉テ遂ニ之ヲ許セリ而シテ交通ヲ許スノ初ニハ嫌惡ノ情甚ダ深カリシカドモ彼ノ情緖ニ牽引セラレテ情好日ニ密ニ愛戀愈々深シ嘗テ貴公子ノ高堂大廈ニ誘引セラレ美味珍肴ニ飽キ桂殿蘭宮ノ壯麗ナルニ驚キ食服粧飾ノ雅致ナル池園樓房ノ風流ナル舟車橋梁ノ華美ナルヲ美ミソノ心ニ我ガ家屋衣服ノ鄙野ニシテ濁酒枯魚ノ口ニ適セザルヲ歎ジ赧然自ラ耻チ汗流レテ背ヲ濕セリ家ニ歸ルノ後悉ク貴公子ノ風ヲ模擬セント欲シテ衣服飲食ノ美ヲ盡シ奇花異卉ヲ苑中ニ植ヱ奇峯新池ヲ庭前ニ築キ曲房高樓ヲ建テ、彼ノ少年輩遊冶郎ト日夜相ヒ會セリ是ニ於テ天性ノ美質ハ豹變シテ輕躁浮薄トナリ務テ流行ヲ逐ヒ外貌ヲ裝ヒ意氣揚々トシテ自ラ謂フ東洋中復タ我ニ及ブ者ナシト而シテ遊逸度ヲ失テ家財早ク已ニ盡キ負債山ノ如ク促債雲ノ如キヲ意トセズ其ノ乳母深ク之ヲ憂ヒ諫テ曰ク令嬢イマ情人ヲ得タリ詩歌文章ノ進步實ニ少々ナラズ然ト雖モ一利アレバ必ズ一弊アリ此ノ言ノ如キハ必ズ令嬢ノ耳ニ逆フヲ知ルト雖モ其不可ナルヲ知テ言ハザルハ不忠ナリ希クハ平氣虛心以テ乳母ノ諫ヲ聞ケ近來家財已ニ盡テ負債山ノ如ク殆ンド前途ノ活計ニ苦シメリ令嬢ハ之ヲ是レ顧ミズ浪リニ金銀ヲ散ジテ衣服ヲ飾リ情人ト雅美ヲ競フト雖モ彼ノ情人ハ富貴ノ公子ナリ祖先傳來ノ家產甚ダ富メリ令嬢豈ニ彼ニ企及スベケンヤ願クハ令嬢粧飾ヲ以テ念トスルコト勿レ人間ノ交際ハ只眞情ヲ貴ブノミ今ヤ令嬢ノ情人ニ於ル愛敬眞情盡サヾル所ナシ而シテ彼等ノ令嬢ヲ遇スル驕慢不敬薄情ノ跡蓋シ尠キニ非ズ其心中モ亦往々信ズベカラザル者アリ且ツ最モ恐ルベキハ黴毒ナリ恭シク察スルニ令嬢已ニ黴毒ニ染ミ精神大ニ衰ヘタルニ似タリ是レ寔

ニ令嬢ノ爲メニ寒心スル所ナリ今ニシテ外形粧飾ノ費ヲ省キ精神ノ培養ニ其力ヲ盡サズンバ恐クハ言フニ忍ビザルノ害ヲ生ゼン聞ク膏肓ノ病ヲ治ムルモノハ必ズ口ニ苦キノ藥ヲ服シ狐疑ヲ決スルモノハ必ズ耳ニ逆フノ言ヲ用ヒザルベカラズト今若シ迷惑シテ改メズ愈々甚シキニ及バヾ扁鵲モ匕ヲ投ズルニ至ルベキナリ令嬢宜シク老婆ノ言ヲ納レ玉フベシト說諭懇到聲涙共ニ下ル蜻和勃然トシテ憤テ曰ク汝頑愚未ダ嘗テ交際人情ノ何物タルヲ知ラズ我ガ郎ハ妾ガ野様ヲ變ジテ京様トナリ頑朴悍强ノ風ヲ化シテ洒落薄弱ノ風ニ移ルヲ愛シ妾ヲ携テ弱水ヲ渡リ瀟湘巫峽ニ遊ビ東雲夢ノ跡ヲ探リ西龍仙ノ窟ヲ尋ネ烏拉ノ山太平ノ海到ル所必ズ妾ヲ伴ヒ出レバ車ヲ同ウシ入テハ席ヲ共ニス琴瑟ノ交既ニ許シ誓フニ偕老ノ契ヲ以テセリ然ルヲ頭髮櫛ラズ敝衣以テ此身ヲ保タバ情郎ノ愛ヲ失フヲ奈何セン諸公子ノ笑ヲ招クヲ奈何センヤト抗言已マズ交遊飮逸初メニ異ナラズ是レヨリ身體益々虛弱ニ精氣愈々衰ヘテ黴毒皮膚ニ顯ハレ形容枯槁シタリ是レ海棠帶雨秋葉染霜更ニ一層ノ美ヲ倍スニ似タリト雖モ一朝風陣ノ起ルアラバ薄暮寥々感ジ去テ他鄕ノ客トナルハ寔ニ憐レムベキノ至ナリ然ルニ蜻和ハ迷惑ノ甚シキ日ニ紅粉ヲ粧テ以テ皮膚ノ黴毒ヲ隱シ美服ヲ着シテ以テ胸圍ノ骨立ヲ飾リ媚ヲ呈シ愛ヲ送リ殊ニ識ラズ彼ノ少年輩遊冶郎ハ羊裘ヲ衣テ其心ハ豺狼ノ諺ノ如ク外ニハ戀着愛憐ヲ表シテ內ニハ貪戾情慾ヲ恣ニシ蜻和ノ田畝家財ヲ掠メ去ラントスルノ企アルコトヲ是レ蜻和ガ斯ノ如キノ苦界ニ沈ミシ所以ナリ若シ蜻和ヲシテ容色ナカラシメバ豈ニ此ノ慘狀ニ陷ルノ患アランヤ噫々容色ノ人ニ勝ルハ果シテ蜻和ガ身ヲ毀ヒ家ヲ滅スノ原因ナル哉時ニ涕涙滴々悲痛已マズ醒メ來レバ全ク是レ南柯ノ夢ニシテ胸中尙ホ悲哀ノ念ヲ殘セリ因テ夢ヲ記シテ以テ東洋美人ノ歎ト云フ亦タ區々ノ寓意ナキニシモ非ザルナリ

本文中、蜻和は蜻蜓洲大和即ちわが大日本のこと、西方遊冶少年とは歐米諸國を指すことといふまでもない。日本は國土の美の故に西歐諸國の着目するところとなり、彼等は種々の手段を弄して鎖國を破つて開國を實行せしめるに至つた。而かもこの後の實狀は如何。初めは嫌惡し拔いた西洋文明にいつしか心醉し、一意模倣に日も是れ足らぬ有樣で

ある、その結果國家の財利は日々に彼等の手に歸り、國家の心髓は次第に蠹蝕されて行く。識者は憂慮して忠言するが惑溺の深き、一も耳に入れず、益々西歐の皮相的文明を追逐する。日本の將來を思へば深憂に堪へない、大意はかういふ點であらう。

明治十年前後までは、明治政府が民間に率先して、所謂文明開化に努めた時代であり、急進的に西洋文明を採用するに熱心した時代である、而かもかく熱心するのは、皆當年攘夷論をもつて幕府一派を苦しめた連中ではないか。攘夷を看板にして天下を取つて、取つた揚句が手掌を返すやうに開國の極端を實行し、その又揚句が國家の前途を上述の如き不安なものにした。これは抑もそも何といふことであらう。いはゆる亡國の臣、會津人たる散士の心中には、必ずしも保守反動ではないが、以上の如き感慨があつたに違ひない、それが何時となく結晶したものが此の「東洋美人ノ歎」の一篇であらう。而かも僅々一篇の文字ながら、東洋侵略に伸びて來る西歐白人の魔手に對して日本を愛護せんとする意氣は、十年後の大作『佳人之奇遇』に横溢する同じものゝ源泉ともいひ得る。且つ又、この一篇で、吾等は散士が夙に多少の小說的構思とこれを具現する文才とをもつてゐたことを認めなくてはならぬ。これが又『佳人之奇遇』の著作を暗示する大切な鍵となる。

次に私は滯米時代の散士の述作について一言しよう。前にいつた淺草某書肆の英文草稿一束は玉石混淆で、學校ノートや抄錄ものなどもあるが、二つばかり纒つてゐる草稿がある、その一つを Things Japanese (日本風物誌)、今一つは Ancient History of Japan (日本歷史) これである。歷史の方には續篇があり、源平時代まで及んでゐたと思ふ。散士は此等の著述によつて日本の精神を歐米人に紹介せんとしたのである。又その他米國新聞に寄書して、日本人と支那人の違ふ點を種々力說してゐるが、これは、當時米國で支那人排斥運動があつた爲めもある。風物誌も歷史も遂に完成せずに終つたらしいので、米人には僅か斷片的にしか傳へられはしなかつたであらうから、何れだけ日

本を紹介し得たかわからぬが、却つて散士自身をして故國日本の姿を、海の外から明確に認識せしめる助けには大分成つたと思ふ。

東海經濟新報に對する散士の寄書通信は私の調べた號までゞは次の通りであつた。――

○米國桑港近況（十三年十二月二十一日朝發）

明治十四年一月二十五日、東海經濟新報

○米國船舶律ノ疑問並ニ近時航海造船ノ形況ヲ論ズ

明治十四年六月二十五日、同新報第三十號

○保護自由兩主義ノ現況ヲ論ズ

同　年八月五日、同新報第三十四號――三十五號

○外國船舶運輸論（六月九日發）

同　年八月二十五日、同新報第三十六號

○紐育對本邦商業ノ報知（七月二十五日發）

同　年九月五日、同新報第三十七號

○英國モ亦タ自由貿易主義ヲ廢セントス（九月十日發）

同　年十月二十五日、同新報第四十三號

○火災保險石綿ノ記

同　號

○鐵道論

明治十五年一月二十五日、同新報第五十號

○米國聞見小錄（一月十五日發）

同　年二月二十五日、同新報第五十三號

○讀東京横濱毎日新聞（一月十日發）

同　年三月五日、同新報第五十四號

○米國毛布增加（二月四日發）

同　年三月二十五日、同新報第五十六號

○米國通信　同　號

○米國保護政策成功（十四年十二月發）

同　四月十五日、同新報第五十八號

○米國費府婦人養蠶競進會（三月二十四日發）

同　年五月五日、同新報第六十號

○海關税論並ニ英國ノ政策ニ及ブ

同　年六月六日、同新報第六十三號――六十六號

○紐育日本生絲商況（五月廿九日）

同　年七月十五日、同新報第六十七號

大體以上の如くであるが、此等の投書寄稿は、何れも自由政策の失敗、保護政策の成功、日本貿易の今後の方針、條約改正等に觸れたものであるが、その著しい特色は、保護經濟政策から來る米國讃美、英國排斥の二點である。例へ

ば、次の文章を讀め――

○保護自由兩主義ノ現況ヲ現況ヲ論ス　　在米ケンブリッヂ　柴四朗

六月十八日費府夕版新聞ヲ見ルニ五月ノ末旬英國新聞ニ龍動府ヨリノ一投書ヲ揭載シ其眼目トシテ論セシ所ヲ略言スレバ我大英國ノ最好ノ顧主タル印土、支那、土耳其及其他ノ諸邦ハ恐クハ地球上ニテノ最大ノ貧窶國ナルヘシ云云ト論ジタリ

此議論タルヤ實ニ正鵠ニ中リテ痛快ノ名論ト云ヘシ何ガ故ニ英國ガ最好ノ顧主トシテ通商セル諸邦國ハ世界中ノ最大貧窶國ナルヤノ原理ヲ推究スルニ元來土耳其國ハ製造繁昌ノ國ニテ熟練ノ織物精巧ノ製品ヲ産出シタル國ナリシガ前王ノ奢侈ト經濟ノ途ヲ誤レルト國庫ノ足ラザルトヨリシテ遂ニ英國ヨリ大金ヲ借入ルヽニ到レリ英人ハ其機ニ乘ジ其報酬トシテ内國ノ諸業ヲ保護セシ所ノ海關税ヲ廢サシメタリ此結果タル國中ノ諸業ヲ敗毀シ人民日々ニ究迫ニ陷リ現時ノ貧窶トナリタルナリ

印土國ハ曾テ世界中ニテ尤モ木綿織物ニ名高ク精巧ノ良品ヲ産シタリシガ今日加奈多人ガ採用セシガ如ク保護税ヲ再用シテ自カラ内國ノ工業ヲ保禦スルニ由ナク英國ノ製品ハ殆ンド全國ノ織工諸業ヲ抑壓シ且十年間ニ一度ハ全國ノ大飢饉ヲ免レズ流離飢死スル者常ニ百萬人ノ多キヲ以テ數フルニ至ル悲嘆スベキノ情況ナリ

愛蘭土モ又タ均ク望ナキノ苦界ニ傾キ英國ノ製造品ガ内國ノ製造ヲ蹂躪シ田園ハ爲ニ荒レ工場ハ爲メニ頽レ尚且ツ數年每ニ飢饉凶歲襲來シ壯者ハ散シテ四方ニ行キ老幼ハ溝瀆ニ斃レ又世界中極貧國ノ列ニ落チタリ

支那國モ又同織物ニ巧ニ頗ル佳品ヲ作リ今猶ホ之ヲ勉ルモ英人ハ五割以上贋造混糊麁惡ノ木綿ヲ造リテ廉價ヲ以テ彼内國ノ職工ト競賣シ遂ニ勝ヲ取リ爾來支那國モ亦彼貧國ノ中ニ加ハレリ

今ヤ英國同技倆ヲ以テ日本國最行ヒ日本ヲシテ同狀ノ列ニ入レシメント欲ス殊ニ惡ムベク嫌フベキノ奸計ノ欺騙蠱

惡ノ條約ニ據リテ日本獨立帝國ヲシテ稅權ヲ專有セシムルコトヲ得ザラシメ英國麁惡ノ製造品ハ國内ニ氾濫シ日本固有ノ製造工業ハ廢止シテ財政困難ノ歎、金貨缺乏ノ叫ハ四方ニ聞ヘ政府ハ内人ニ稅ヲ得ル所ナク叉海關稅ヲ增加スル能ハズ殆ンド財政ノ苦境ニ沈マントセリ

是則彼名聲ノ芳シキ自由貿易主義ノ實行セル所ノ結果ナリ諸君見ルベシ英國ガ他國ノ互市貿易ニ干涉ノ權力ヲ得タルノ國ハ一國トシテ貧窮ニ罹ラザルナシ（下略）

かくの如く散士は筆を執れば、直ちに英國の自由政策の排撃と、これを模倣せんとする日本の自由貿易論者の輕躁とを戒めたものである。今一つ例を擧げると——

○英國モ亦タ自由貿易主義ヲ廢セントス　（九月十日發）紐育　柴四朗稿

龍動「ヲブソルウル」、「ポールモール、ガゼット」、「リバルプール新聞」、「ビルミングハムガゼット」ノ諸新聞紙モ皆自由貿易ノ弊害ヲ論ジ自由貿易廢止論ヲ主張シ愛蘭國第一ノ勢力ヲ有スル「ベルハスト新聞」ニ曰ク我英國ハ保護稅ヲ廢セシヨリ漸々製造及職工ニ衰頽ヲ來シ外國人ニ公然我國民ト競爭スルコトヲ許スノミナラス此風習及敎法ハ徒ニ吾輩英人ヲシテ行々零落ニ沈マシムルノミ云々

去月彼有名ナル愛蘭議員パーネル氏ガ都府怠武林（ダブリン）ノ一新聞ニ投書シテ曰ク愛蘭人民ハ一ニ自國ノ生産製造ニ倚頼スベシ決シテ他邦ノ製造工業ヲ消費スベカラズ農工ヲ勸誘シ商業ヲ奬勵シ奮テ國運ヲ挽回スベシ云々ト激烈慷慨ノ保護稅論一篇ヲ艸セリ我日本帝國ノ愛國ノ志ヲ抱クノ士モ亦如此ノ志操ヲ以テカノ歐洲各邦ガ我日本ニ施行スル專橫ノ政略ヲ破ランコト切ニ希望ニ堪ヘザルナリ」

往年我國ノ漢儒ガ徒ニ支那ノ政敎文物ニ心醉シ自カラ東夷ト稱シ僧侶カ天竺ヲ崇信シテ聖地ト稱セル兩邦モソノ原ト夷狄ト輕蔑セシ英人ノ爲ニ蹂躙セラレ且ツソノ敎法文物モ亦大ニ高尚ニアルヲ知ラスシテ天下後世ノ惘笑スル所

トナレリ是畢竟宇内ノ形況ニ暗キノ致ス所ナリ論者ハ然ラズ英國自由貿易ノ主義ヲ奉シ宇内ノ形勢ヲ明カニシテ經濟ヲ以テ自ラ任ズルノ博學明哲ノ君子ナリ今ヤ自由貿易主義ハ吾輩ガ上ニ論セルカ如シ論者ガ崇信スル英國モ自由貿易ノ弊ニ堪ヘズ將ニ之ヲ癈セントス論者以テ如何トナス云々

散士の保護貿易主義は、これ又歸朝後の行動と考へ合せて、さもあるべしと首肯される。尙ほ散士の生活志向を知る資料として、彼の歸朝の前年卽ち明治十六年四月十日から二十日にかけての朝野新聞に掲げられた書翰がある、――

（米國費府に六年間滯留し專ら實地に就き經濟學を研究せらるゝ柴四朗氏より或る友人（一）に贈られたる書翰）

當地別に御報聞申程の珍事も無之兼て申上候通海關稅改正及び內國稅減輕議案は頗る六ケ敷常に上下議員の見込相違し改正に改正を加へ人民中保護論者は今日迄の經歷と統計を擧げて益々英國物品の輸入を排擊し內國の職業を保護するの必要と內國稅を輕くして人民を休息すべきを論じ議員に迫り輸入商人及自由貿易論者は海關稅の弊を說き直接間稅の別なきを主張して海關稅を減ぜんと主張し諸說紛々たり加之昨年の議員及縣令等の選擧は至る處共和分權黨の勝を制せしより少く自由貿易論者の聲焰を援けたるもの〻如く憂國の士人は今度の議會には海關稅改正案は所詮通過せざるべく且つ已むことを得ず之を次會に延すに至らば當會の下院議員は共和分權黨百九十二人共和集權黨百廿七人に當るの割合故更に海關稅の減少案を作り多數に依て法とならんも知る可からず故に是非とも今會に經過せしめんと希望する人多かるべし初め共和集權黨の諸議員は熱心して海關稅減少を攻擊せしも保護稅の主唱家たる上院議員モーリール氏及下院議員ケレー氏等は非常の奮勵を以て議院閉會の前々夜に海關稅改正及內國稅輕減の兩案を通過せしめしに付諸人は安心致し候如何となれば此議定らざるときは商賣輸入仕入等の目算を立つる能はざればなり也今日米國の海關稅は戰爭の爲めに重稅を課せしものも有之或は二十年前と同額なるものも有之例へば鋼鐵軌の如きは當時英國輸入の價一噸百弗以上のものに廿八弗を課し來り候に鐵價年々減少し今日は四十弗に下落せしも

矢張當時の如き課税故今度改正案には十七弗と改めしが如き適當の改正にて皆な如此類に御座候○又昨年共和黨の到る處に勝を制せしは大將グラント氏の執職より役人の醜汚甚しきを加へ實に云ふに忍びざる者多く共和合權黨のみならず合衆集權黨にてもグラント派を嫌ふにいたりヘース氏代て執職し初て公務改革の委員を置き役人の選擧法等を改正せんと着手しガーヒールド氏の大統領たるに及びて斷然之に着手し初めに紐育府の關稅役人を免職せしより事六ヶ敷相成り同氏の非命の死の如きも假令グラント派にして彼のギットー氏を指唆せざるも幾分之を促せし嫌なき能はず遂にグラント派なる副統領アーソル氏位を繼ぎしより益々不人望にて州中到る處共和集權獨立黨及び役人選擧改正黨を設立して共和集權黨と分離せし故共和黨の勝を制せしにて眞に共和集權黨の勢力の減少せしとも思はれず候米國にて一代に富を致し且つ世界中屈指の大金滿家たるゴウールト氏は今度美麗なる新形速力の一船を造らせ一家內乘り込みて三年程世界を周遊し日本にも來航するよし隨分愉快なることゝ存候小弟の見る所にては墨西哥國も遠からず名のみ獨立國にて其實は米國に屬するが如き觀を呈すべしと存候右の議論は長ければ歸朝の節に相讓り候智利とペルーの戰爭も近々平和の局を結ぶべし云々（畢）

右の書翰は、いはゞ眞の消息で特別に意識的に自分の生活を報道するために執筆されたものではないが、然しこれを流讀したばかりでも彼の滯米生活の一端が知れる。それは、散士の米國行は所謂遊學であつたが、然し散士は然し學窓で書物ばかり讀んでゐたのではなかつたといふ點である。勿論學校にも入り、正規の學科も學び、讀書勉學も人に負けずにやつたに違ひなからうが、それと同時に、米國の政治社會なり經濟社會なり世界の形勢なりに及ぶべきだけ眼光を放つて活學問を學んでもゐたこと、學問が學問だからかも知れないが、この時から散士には並々ならぬ政治趣味があつたことなどが窺はれる。而して更に時事觀察による活學問から母國の現狀に對して次第次第に濃い憂慮の念を抱きつゝあつたことは、『佳人之奇遇』の誕生がこれを立證してゐるのである。

註（一） 此の書翰の誰人に宛たものか確證はないが、推想し得る。記事文中の或る「友人」といふのは恐らく、學資補給の點で對岩崎の代理人となつてゐる豐川良平であらう、豐川氏宛の書翰を豐川氏の親友でも柴の知人でもある朝野社の末廣鐵腸が借りて來て新聞へ載せたものであらう。

第二 『佳人之奇遇』と東海散士

一 『佳人之奇遇』の成立

以上を前置として、いよいよ『佳人之奇遇』の研究に入る。

『佳人之奇遇』の成立については、散士の自敍が簡明に盡してゐる、この自敍はたゞに、此の小説の成立を説明してゐるのみならず、その成立までの散士の自敍傳ともいふべきものを兼ねてゐる。

斯士幼ニシテ戊辰ノ變亂ニ遭逢シ全家陸沈迍邅流離其後或ハ東西ニ飄流シ或ハ筆ヲ投ジテ軍ニ從ヒ遑々草々席暖ナルニ暇アラズ既ニシテ笈ヲ負テ海外ニ遊ビ專ラ實用ノ業ニ志シ經濟、商法、殖産ノ諸課ヲ修ムルニ汲々タリシヨリ殖産利用ノ心日ニ長ジテ花月風流ノ情日ニ消シ文ヲ練リ詩ヲ咏ズルノ餘閑ニ乏シ然レドモ多年客土ニ在リ國ヲ憂ヘ世ヲ慨シ千萬里ノ山海ヲ跋渉シ物ニ觸レ事ニ感ジ發シテ筆トナルモノ積テ十餘冊ニ及ベリ是レ皆偷閑ノ漫錄ニシテ和文アリ漢文アリ時ニ或ハ英文アリテ未ダ一體ノ文格ヲ爲サズ今年十八年歸朝病ヲ熱海ノ浴舍ニ養ヒ始テ六旬ノ閑ヲ得タリ乃チ本邦今世ノ文ニ倣ヒ之ヲ集錄削正シ名ケテ佳人之奇遇ト云フ

これで勿論『佳人之奇遇』の成立は、一應は分かるが、一寸突込んで考へると、成る程この自敍の文章には滯米時代から著書の志があつたことは明白に見えるが、政治小説『佳人之奇遇』を著す心算があつたか何うかゞ判然しないと

いふ疑問が起るかも知れないから、この點を明確にして置く。柴五郎大將が、在米の散士から貰つた手紙のうちに、明白にこの書の著作に觸れたものがあつた。それは十六七年頃の手紙で、その中には、時事に感じて政治小說を作りこれを『佳人之奇遇』と呼ぶことにしたいといふ意味の文句があつたといふ。これによつて自敍の語には謙辭があり事實散士は早くから『佳人之奇遇』なる政治小說を作らうといふ下心があつたことが知られる。且つ又、恐らくその十六七年頃に立てた『佳人之奇遇』の構想といふのも、今日の『佳人之奇遇』のそれと根本は同じものであつたらうと思はれる。

この自敍の日附は十八年三月であるから、此の時少くとも『佳人之奇遇』中の初、二、三の三編が成つたものに違ひない。

この成立の事情も、柴五郎大將の祕篋が精査されたなら、幾倍も詳しく說明の出來る資料が得られやうと想像してゐるが、今日はまだその時機に達してゐないので、遺憾ながら、この程度で滿足するより仕方がない。次に、散士が時事に感じてこの小說を書いたといふその所謂時事について一瞥しよう。散士の所謂時事とは日本的觀點より見たる世界の動きのことである。

二　時事瞥見

散士航米の年は明治十二年、卽ち一八七九年であり、その歸朝は同十八年、卽ち一八八五年である。此の七年間に世界は何う動いたか。散士發程の前年、十一年は、露土戰爭の善後策を主題とした伯林會議で暮れた年であり、これが或る意味で歐洲乃至世界近世史上に一のエポークを成した。十二年の諸問題は多く十一年の引つゞきであるから、十一年から語ると、伯林會議で啀み合つた英露は、アフガニスタン問題で中央亞細亞に於いて角逐を仕直してゐる。

露は戰後財政、內政の不安から虛無黨の動きが始まる、英はビコンズフィールドがこゝぞとばかりジンゴイズムを發揮する。アフガニスタン問題では露を食ひ止めた形であるが、新にアフリカでズールー討伐軍が活動する。露は印度方面へ伸びる手を轉じて支那に向ける、それで露淸が中央亞細亞を挾んで葛藤を始める。兎にかく露國をして露土條約を實行させるまでが、十二年の前半かゝる。勿論土耳共の尻押しをした英獨も、土からそれぞれ得るところがあつたのである。十二年一月頃から埃及王の失政が明白となり、四月の交から英佛の對埃壓迫が露骨になる。これは追々重大形勢に發展して來る。南米のペルーと智利が長い慘憺たる戰爭の火蓋を切るが、これは然し世界の大勢にさう影響がない。此の年の暮近く愛蘭土の借地黨が土地所有法改革の要求から暴動を始める。これもやがて長い根深い葛藤となる。西班牙は此の前數年から引續いて、內亂騷ぎが絕えない。日本はといへば、日米の條約改正だけは成就したが、支那と琉球問題を蒸し返して、頻りに張肱をしてゐる。

十三年に入つて歐洲の不安が增大し、大亂の兆が現れる。何れも伯林會議の無理納めの結果といつてよい。不安の中心は露國で、露國は一方に於いて腹癒の心算で獨逸に對して挑戰的態度に出で、他方益々淸國に對して高壓的に出るが、淸國もなかなか屈しないで、正面衝突となる。さうして土耳共の背後に英國がゐた如く、淸の背後にも英國がゐる。歐洲に於いては、露國と獨逸が衝突必至とまでせりつめ、佛國は獨の野心を疑つて露に近づき、英は勿論暗々に獨を支援してゐる。露國の出方如何によつて大亂が當然のこととなる。露國も亦思ひきつてかゝる態度に出で、露土條約などを蹂躪したいと思つてゐるが、內部的に一概にさう出來ない事情が種々ある。その最大なものは虛無黨の活躍が勢力を得て來たことであり、露帝父子の不和である。虛無黨は遂に冬宮の變まで起すに至つた。英國は此の年四月までは例のビコンズフィールド內閣でジンゴイズムをやめないが、四月內閣更迭で自由黨のグラッドストーンが組閣してから、對外不干涉を主義とする風が現れ、アフリカ、アフガニスタン、土耳共その他に對しても皆此の態度

をとり出す。愛蘭土問題は、この年に入つて運動に指導者（パーネル）を得てから一段と過激猛烈なものになり、土地所有改正から、土地回復に進み、更に愛蘭自治乃至獨立をスローガンとするまで發展する。米國人はこの問題で少なからず愛蘭土人に同情する。政府も止むなくパーネル一派を捕へるが、それは事態を悪化させ、運動を深酷にしたのみである。

かく歐洲列強が隣境乃至内政に多忙である際に乘じ、佛國はその國力を傾けて鋭意東方進出を試み、アフリカ、マダガスカルと着々足場を固め、遂に東京（トンキン）占領を計畫する。

此の間日本が最も刺戟されたのは、露國の東漸である。清國との葛藤では、結局清國の讓步となつて落着したが、日本人はこゝに明白に露國の野心を見、これに對して早く準備しなくてはならぬと考へ始めた。歐洲諸國が朝鮮に着目して頻りにこれに交通を求めたことも、刺戟になつたに違ひない。

十四年、英國に於いては、愛蘭土問題が益々猛烈になるので自由黨政府も止むなく鎭壓令を發布し、借地黨を彈壓する。パーネル一黨の活動は反抗的に益々壯烈なものとなる、緩和の意味で新土地案が可決されはするが、大に不評を買ふ。對外的には、トランスヴァール遠征があるが、戰況が英軍に有利に展開せぬので、土人と和し、その獨立を認めることにする。歐大陸への干渉からは勿論手をひくが近東に於いても華々しい外交的成功がない。土耳其を壓迫して希臘に地を割かしめんとするが、獨墺に抑へられて果さず、アフガニスタン問題もまだ解決がつかず、埃及内政失敗問題も漸次重大性をもつて來る。佛國はアフリカのチュニスに進出する。待望のガムベッタが大宰相となつたものゝ、忽ち失敗して辭職したのは意外であつた。露國は依然對内的に虛無黨の暗躍に惱み、遂に此の年三月露帝の暗殺となつた。だが概していつて、昨年から見ると局面一變した感があり、昨の大亂の兆は去つて平和の氣が滿ち渡つてゐるかに思はれる。それといふのも英佛は埃及問題で牽制し合ふに忙しく、露、獨兩帝はダンチヒに會盟し、墺も

これに加入して三國同盟が成立せんとしてゐたからである。

十五年に入つても、愛蘭土借地黨の勢焔は衰へず、官吏暗殺とまで發展する。更に女子借地黨といふものも出來、ミス・パーネルがリイダアとして奮闘する。此の年は歐洲全體に社會黨共和黨が勢力を得て來る。佛は、獨中心の三國同盟成立を苦にやみ、アフリカに事あるを名として大に兵備を修める。もつとも、モロッコに反亂があつて、出征を必要としたことも事實である。かく佛國が頻りにアフリカに進出するのは伊國の喜ばぬところであり、墺を誘つて佛を抑へんとする。然しかくては佛をして英露に親しましめる恐れがあるので、獨は墺をして伊と絶縁せしめる。一方又、露國は虛無黨に惱み、內政改革問題に煩はされつゝも、持前の積極的態度を改めず、今度は伊國を誘ふて墺國の勢を殺がんとする、此の形勢を看取した獨は、俄に我から露に近づき、二國の皇帝の會盟が實現したわけである。然るに伊國は、對佛問題その他で墺に親まんとしたので、露は憤り、逆に露墺の會盟が別に成らんとした。然し歐洲だけでいへば、英佛ともに平和主義であり、大勢はやはり安定と見て可い。

埃及では、今迄に數年間內紛を繰返してゐたが、遂に外國の干渉を招いて危急存亡の機に臨むに至つた。初め埃及は、內政改良と軍備充實のため英佛より負債したので、英佛はこの債權の實行を圓滿にすべく會計監督官を派した。ところが此の會計監督たる外人の勢力が强大になり、遂に內政を左右するに至つたので、埃及の官吏及び貴族等の間に一種の憂國黨を生じ外人跋扈排斥の氣風が顯著になつて來た。陸軍大臣アラビイ・パシャ等は此の憂國黨の巨魁であつた。彼等は英佛會計監督の意のまゝには動かない、それで監督等は本國に牒知し、國王に迫つてアラビイ以下かかる大臣官吏を免職せしめた、國王は意氣地なくもこれに從つた。然るに兵士等は大に國王の措置を不滿とし、此の年五月變を起して王宮を圍み、新政府を退けて、アラビイ以下の復職を要求した。王は又これを納れてアラビイ以下を復職させた。埃及人の排外熱は大に高まつたので、歐洲諸國の軍艦派遣となつたが、アラビイも事態がかくなつ

ては開戰も止むなしとして覺悟するところがあつた。かゝる折柄六月十二日遂にアレキサンドリアの變（外人虐殺）が起つたのである。歐洲諸國はコンスタンチノープルに集まつて埃及問題を議し、埃及に談判したが、アラビイは强硬政策を持して一もきゝ入れず、かくて七月十二日英軍が開戰を宣した。アラビイも覺悟の上とてこれに應戰し、可成りよく戰つたが、何にしても力敵せず、次ぎに內地に後退し、テルケビルの血戰に一敗して、九月十六日擒にされるに至つた（十二月死刑と定まつたが一等を減じて流刑となり、セイロンに流される）。

此の後佛國も出兵しようとしたが、丁度共和黨が下院で勢力を得てゐたので、軍備を否決し、遂に出兵が實現されなかつた。然し埃及の處分は英佛合同で當ることになつた。佛國はチュニス問題を有利に解決したが、更に東京において侵略の兵端を開いた。

此の年、北米合衆國の上下兩院が人民の輿論によつて支那人が米國に移入することを二十年間禁止する議を通過して、大に世人の注意を惹いた。

十六年の歐洲は獨墺伊三國同盟とビスマルクの遠謀で露佛諸國を箝制し、兎も角も平和を維持しつゝある現狀である（勿論武裝的平和ながら）。然し各國別に見來れば多少の難件のない國はないが、概して無事であり、英國の愛蘭土借地黨の動搖も（一二爆彈騷ぎがあるにせよ）漸く平穩に赴き、露國虛無黨の勢焰も表面可成り消滅したかに見える。その代り社會黨の潛行運動が次第に勢力を得て來るのは注目される。たゞ佛國は內政やゝ不安で、一寸とした經緯を經てフェリイ內閣が出現したが、同內閣は平和主義と侵略主義を共に方針にしたものか、又は內政に對する注意轉換のためか漸く國外に多事ならんとする。同政府は淸國の異議を顧みずその安南遠征軍に安南征服を强行せしめ、續いて東京地方にも及び、淸國又暗に東京地方の土兵を後援して佛軍に對抗せしめ、何となく淸佛の間に危機が孕まれてゐる。佛國はその上、前年より葛籐の紛議について滿足を得るためと稱して、一隊の軍艦をマダガスカル島に向け同

島を砲撃して、同島女王に和を請はしめた。然し土民に必らずしも佛國の治下に入ることを悦ばぬものがあり、これで一切が片付いたとはいへない。然し佛の此の態度は、英が埃及に優先權を握る代償として、默認されたものであるといふ。

朝鮮は此の年始めて米英獨諸國と條約を結び、歐米列國から公式に獨立國の待遇を受けた、これで朝鮮を獨立國と見る我が國の主張が幾分裏書きされるに至つた。

明治十七年は、歐洲諸國にとつても東洋諸國にとつても多事な年である。殊に東洋にとつては多事中の多事な年である。歐洲本土に於いては、各國とも表面は親交を保ち平和を續けてゐるやうに見えるが、一度その內幕に入ると、互ひに自國の富强に努め、呑噬攘奪の策を運らし開境拓土に汲々たる有樣である。然かも歐洲本土では諸國の國力が略ぼ均衡して俄にこれを破ることを許さぬので、此の方針は近來東洋の諸國に試みられ、歐洲諸國の侵略主義外交に熱心なるは、年々異常の度を增す。英國の埃及に於ける、佛國のマダガスカル、安南東京乃至南淸に對する、露國の中央亞細亞に對する、皆かゝる外交政略から割出された態度である、獨逸も、漸く新興國家としての植民地の必要を自覺し、アフリカ及び南洋東洋に手を伸すに至つてゐる。實に歐洲からいへば躍進の年であるが、東洋からいへば安危の年といはざるを得ない。

先づ淸佛事件から語らう。これは勿論安南（東京）事件の連續である。昨年佛國が安南侵略を露骨に始めるや、淸國は、安南が淸國の屬地だといふので强硬な談判をした、その一方、安南の黑旗軍に應援を與へ、あくまで佛軍に對抗するやう奬ました。然し佛國政府は淸國の抗議にも拘らず、大兵を發し今年三月に入つて遂に東京地方まで席捲してしまつた。これに對して淸廷では平和、主戰の二派に分れて方略が一定しなかつたが遂に主戰黨が勝利を得た。然し佛國に對する態度は格別强硬を加へなかつた。東京を占領した佛國は却つて淸國に對して佛國の軍事行動を妨碍し

た點で抗議し、軍艦を派して示威を試みた。が、この時は調停者が出で、李鴻章が乘り出して淸佛の間に天津條約が結ばれ、無事局を收めるかと思はれた(五月)。然るに六月東京領城邑引渡の手違ひから有名な諒山襲擊となり、種々談判の末再び淸佛の國交が破れることになつた(八月)。

佛國東洋艦隊は直に行動を起し、一隊は臺灣に向ひ、一隊は福州に向つて攻擊を始めた。福州攻擊は數日に亘る激烈なもので、淸國側は大損を受けた。且つこの爲めに淸國側は臺灣に援兵を送ることが出來ず、臺灣は孤立した。佛國側はこの攻擊後これで淸國から和議の申込みがあるものと幾分形勢を窺つたが、淸國も例に似ず意外の强硬態度であることが分つたので、本式に對淸戰爭を決心し、軍費援軍を送ることになつた。

次に埃及問題、これは內亂及財政處分の問題であるが、昨年アラビイの亂後、國內が一向落つかなかつたが、遂に此の年僞聖マージイなるものがカーツーム附近に起つて、迷信土人を糾合し、歐洲異敎の白人連を排斥するを名として亂暴をした。埃及政府は兵を出してこれを討つたが、每戰敗北で如何ともならぬ、保護役の英國も傍觀して居られず、將校を借して勢援した。その將校中には有名なゴルドン將軍もゐた。將軍は然し反軍中に深入し、遂にカーツームで重圍に陷入つた。英國政府は事態容易ならずとして、ウォルスレー將軍を派遣して援けしめたが、敵の勢焰がなかなか鎭まらず、此の年中には勿論片付かない。歐洲諸國は何れも多かれ少なかれ埃及に投資關係があるので、かく內亂によつて國力が疲弊するを悅ばず、ロンドンに埃及財政會議を開き、埃及に軍費を十分借して反軍を勘定させようといふことを議した、然し英佛二國の意見の相違から、この案は廢棄されてしまつた。

中央亞細亞に對する露國の野心は、着々實現されて行く。

獨逸がアフリカ、南洋等に手を伸したのみならず、ベルギイの如きさへアフリカ、コンゴー地方を植民地にした。(此の年コンゴー會議)。

十八年は散士歸朝の年であり、『佳人之奇遇』發刊の年であるが、此の年も多事たるに違ひはない。清佛戰爭に於いては、一時佛の軍容が大に振つたが、此の年に入つて海軍には惡疫が流行し、陸軍は諒山を中心に拔きつ拔かれつしてゐるのみで、兩軍ともに戰ひ疲れの氣味があり、その結果兩國政府に和議が生じ、四月パリで成立した。勿論清國の讓步となつたのはいふまでもない。

英國の多事は佛國よりも甚だしい。此の年二月カーツーム陷落、ゴルドンは戰死す、英國大衆は擧つてグラッドストーン內閣の手緩さを今更のやうに難じた。それはともあれグラッドストーン內閣は對露問題の切迫で辭職することになりサリスベリ內閣出現する。對露とはアフガニスタンに對する露國の侵入で、一時は英露開戰せんばかりであつたが、外交談判で何とか妥協がついた。何れにしてもアフガニスタンの損害はいふまでもない。此の衝突の飛沫が英國の巨文島占領となつて日本人を甚だ驚かしたものである。猶ほ佛が東京地方を占領したのに對抗して、英は緬甸を滅ぼしてその有とした。佛國は更に此の年の暮マダガスカルと和した（事實は占有）。獨逸はカロリン群島占領問題で西班牙政府と爭つたが、法王の仲裁で獨逸が實を取つて名を讓つた。これが一時騷がしかつたゞけに日本人の注意もひき、油斷がならぬ思ひをさせた。

歐洲には社會黨、過激黨の勢力が年々高まつて來てゐることも事實である。從つて歐洲各國當局が相會して共通の取締法を協議することになつた。

さて、此の七年間の世界の動きは大略以上の如きものである。かゝる動向の中に、散士は何を見、何を感じたか。散士の見、且つ感じたものは、恐らく種々多端で、こゝに枚擧されぬ程であつたであらうが、これを要約せば、强國の弱國侵掠である、武力なき正義の悲慘である。これを世界の現勢についていへば、歐洲白人の東方侵略である。この侵略は必らずしも武力によるものとは限らない、經濟的にも思想的にも、宗教、風俗習慣上からも種々な形態をと

つて行はれる。然かも半開化の、經濟的科學的には無力な東洋諸國には歐洲人の鋭い進出を防止する力がない。これは必須の運命であるかに見える。此のまゝで行けばやがて祖國日本も同じ運命の脚下に蹂躙されるであらう。勿論この點は、「東洋美人ノ歎」にも見える如く、夙に彼が懷抱してゐた意見であるが、故國を離れて、世界的觀點からこの恐ろしい運命の渦流の進行をまざまざと眺めさせられては、今更のやうに祖國の爲めに慄然としたに違ひない。こゝに於いてか、「時事に感じて」政治小說の形式を假り、滿腔憂國の熱血を吐露しようとしたものである。左に散士の語をかりて、以上の意味を裏書きしよう、曰く――

當時徐ニ東西ノ形勢ヲ觀察スルニ歐ノ諸强國平和對峙ノ利ヲ知リ競爭侵掠ノ非ヲ覺リ列國互ニ平和權衡ヲ維持スルニ汲々トシ唯其餘威ヲ將テ之ヲ東南遠洋ニ洩シ蠶食呑噬ノ欲ヲ恣ニセント欲シ日淸二國ノ未ダ大ニ振ハザルニ乘ジ藩屬ヲ擴有セント欲スルノ狀アリ卽英國ハ其手ヲ埃及ヨリ南洋ニ延ベ佛國ハ馬島(マダカスカル)ヨリ東京(トンキン)ニ獨國ハ南米ヨリ南洋ニ露國ハ土ノ北境ヨリ淸ノ西域ニ迫リ朝鮮ノ北界ヲ窺フコト瞭然火ヲ觀ルガ如シ然ラバ則東洋今日ノ形勢眞ニ積薪ノ上ニ坐シ火機早ク旣ニ其下ニ陰伏スルヲ覺ラザルガ如シ而シテ東洋諸國ノ爲ス所ヲ顧レバ唇齒輔車相依ルノ利ヲ忘レ互ニ猜忌娼嫉遂ニ路ヲ假シテ自ラ伐ツノ拙謀ヲ學ブニ至ルモノアリ散士之ヲ見之ニ感ジ痛慨措ク能ハズ(『佳人之奇遇』第卷六九二十一丁裏――二丁表)

なほ本文中機會ある每に、出來得るだけ散士の素志を示す文章を引用することにする。

三　執筆者についての異說・刊行年代

『佳人之奇遇』の根本の構案が、東海散士の滯米中東洋の形勢に感慨して成つたものであることは以上述べた如くであるが、然しこの現在の『佳人之奇遇』を實際執筆した人に就いては、從來異說がある。卽ち第一實際の執筆者は

高橋太華氏であるといふ說、第二高橋氏の外に西村天囚が助筆し殊に詩は西村の手に成るといふ說、第三武田範之が先づ漢文で筆し、これを東海散士が和譯したものであるといふ說、かういふ三說がある。右のうち(一)と(二)は文學史上の通說となつてゐるもの、(三)は文學史家で觸れた人はないが、一部の人々が事實と確信してゐるものである。

此の問題を解く鍵は今日のところ高橋太華氏の手中にある。私はかつて同氏に此の作の眞の執筆者を尋ねたことがある。然し高橋氏は、散士なき今日、自分のみが『佳人之奇遇』の著者だとは勿論明答されない。然し自身が關係のあることは否定されなかつた。だが(二)の西村天囚の手傳ひと(三)の武田範之說は明白に打ち消した、曰く西村は欄外の批評を書き跋文を認めくれし位のもので、小說の本文には何の關係もない、又武田範之は天佑俠の一人であるが、散士が朝鮮問題に奔走する頃知合ひとなり、暫時散士のところに寄寓してゐたものである。この時誰からともなく『佳人之奇遇』を漢譯して支那人にも讀ませ、大に覺醒させようといふ議が出で、それには武田は遊んでゐるし、漢學の力も相當あることだからといふので、武田に漢文譯にさせてみた、ところが武田は小說家ではなし、忙しくもあるしで、巧く纏らず困つてゐたところ、亡命客梁啓超が「淸議報」紙上で一足先に漢譯を公にしたのを見ると、實に立派な原文以上ともいふべき名文になつてゐるので、武田の譯の方は中止したものであるといふ。此の時の稿本が、後で武田が住職になつた越後の顯聖寺にあるが、これがあるのでいつも問題にされる、これを信ずる人々は全く武田の方が先だと思つてゐるらしいが、然し事實は散士の著の漢譯といふことになる。

では『佳人之奇遇』の執筆に直接關係あるのは高橋太華氏だけといふことになるが、その關係の程度は何の程度であらうか。これは高橋氏が何ともいはれない以上、明白にし難い問題であるが、然し種々の點で推測に難くはない。推測の基礎となるものは、前記柴五郎大將宛の散士の手紙と『佳人之奇遇』の自敍でなくてはならない。これによつて、此の小說の案が元來散士の肚裏に湧いたものであること、更に進んで散士がその案によつてこれが下稿に着手し

だことは勿論と見て可い。(猶ほ『佳人之奇遇』の萠芽ともいふべき「東洋美人ノ歎」が夙く發表されてゐるといふ事實は、『佳人之奇遇』が柴氏の著だといふ別樣の證據の一つとならう)。從つて高橋氏が『佳人之奇遇』に關係した時には少くとも散士の手に成る『佳人之奇遇』第一稿が出來てゐたものと考へなくてはならぬ。從つて『佳人之奇遇』の成立に對する高橋氏の役割は先づ潤飾刪正といふ事でなくてはならぬ。そこで問題はこの高橋氏の潤飾なり刪正乃至增補なりの程度であるが、これが何の程度のものであつたか、私の考へでいへば恐らく可成り深く立ち入つて、たゞに文辭上だけのことではなく、構案の或る部分、人物の捻出、場面の點綴等にまで及んだものに違ひないと思ふ。それでこそ、高橋氏も『佳人之奇遇』の筆者といはれても、或る場合は否定せず、或る場合には自分から自著に等しいとの口吻を洩らされたりした(一)ものと思ふ。然し事情が上の如くであるからして、これを全く高橋氏の著作とし、柴氏はたゞノミナルの關係であつたといふ說は取消さなくてはならぬ。やゝ妥當なのは、柴氏立案乃至原稿、高橋氏增訂といふ點であらう。だがそれは本書の如く細密な研究を試みるときにはさういふ斟酌も必要であらうが、普通文學史上の事實として語るとき『佳人之奇遇』の著者は誰ぞといふ問題に對しては、矢張柴東海散士と答へて一向差支へない、高橋氏の意向を酌んでも寧ろその方が正當であるといつてよい。

一部の論者は、柴氏が文章が書けぬとか詩が出來なかつたとかいつて『佳人之奇遇』が代作だといふ事實を證明したがるが、それは間違ひで、柴氏の文章は「東洋美人ノ歎」でも知られる如く、當時としては尋常以上であり、又卷中の詩も矢張り柴氏の詩として別に當時の新聞雜誌に散見(二)してゐる位だから、これも問題ではない。

『佳人之奇遇』は此の頃としては相當な長篇であり、而かも刊行年代が約十年に亙つてゐる、それで左に全八篇十六冊の初刊年月を揭げて置く。

初編　明治十八年十月

貳編　同　十九年一月
參編　同　二十年二月
四編　同　二十一年三月
五編　同　二十四年十二月
六編　同　三十年七月
七編　同　年九月
八編　同　年十月

こゝで特に注意を乞ひたいのは、四編と五編の間に三年の間隔のあること、五編と六編以下との間に六年の間隔のあることである。この事實は『佳人之奇遇』の見方を決定する上に於いて一寸大切な手掛りのやうに思はれるから、記憶して置いて戴きたい。

又此の作には、毎編必らず序と跋（乃至何れか一つ）があり又欄外に漢文の評語がある。序跋の人はその署名なり別號なりによつて略ぼ分つてゐるが、評者の方は多く匿名であつて、何れが何人か指し難い、これが指せると可成り面白いことになるのだが、遺憾ながら止むを得ない。何れは然し西村天囚、鈴木天眼の如き豪傑文士等の手になつたものが多いことゝ思ふ。今こゝに序跋を書いた人々の名たけを示して置かう。

初編（一）引　隈山（谷　干城）
　　　　自敍　東海散士
　（二）書後　金玉均
貳編（三）序　暘谷居士（後藤象二郎）

（四）跋　望洋居士
參編（五）序　芳暉園主人（增島六一郎）
此の序は異色のあるもので一種の小說論といふべき主張を含んでゐる。
（六）序　得菴居士（鳥尾小彌太）
四編（七）序　鈕叔平（淸國志士）
題詩　泉南鐵硯
題後　天台道士（杉浦重剛）
（八）序　三浦梧樓
五編（九）自敍　東海散士
遲刊の理由を述べしもの
序　廣澤安任
書後　紫山（川崎か）
同　木堂居士（犬養毅）
六編（十一）序歌　耕雲散人
八編（十六）跋　雲外道士

これ又、概念整理の意味に於いて、且つ又散士の交友範圍が一見して知られる點で、多少の役には立つ。

註（一）著者に對する幸田露伴氏の話。
註（二）例へば明治十九年一月二十日朝野に『佳人之奇遇』第六卷中の有名な我所思行の詩が柴の署名で掲載されてゐる。

四　『佳人之奇遇』初編――三編

以下、『佳人之奇遇』研究の本文に入るのであるが、何せ前後十年に亘る作品であるから、これを一時に連續的に扱つてしまふのは無理である。矢張り間隔のあるところは間隔を於いて、連續してゐるところは連續させてといふ風に『佳人之奇遇』の生長につれて研究の筆を自然に進めていかう。つまり作品の解題と傳記を交互に語る、といふよりも解題の途中に傳記を織り込むといふことになる。

それで先づ初編から第三編までの六卷について述べる。この六卷は刊行年月の連接してゐる點からいつても、內容的に吟味してみても、全く一氣に書かれたものゝ如く六卷首尾貫聯してゐる。勿論散士の初案がこの分だけで終つてゐたといふ譯ではない。それは恐らく四編乃至五編あたりまで及んでゐたと思ふが、滯米時代の腹案が最も素直に現はされてゐるのは、恐らく全編中此の部分がさうであらう。四編五編は初度の腹案に從つてゐても多少增删訂正してあるらしい樣子が見える。

（初編）此の小說の發端は大體何時頃であらうかといふに、散士はそれを一々明記してゐるのではないが、書中の事實の斷片を綜合して考へると、明治十五年春を發端として讀むべきであるらしい。散士が十四年東部に來たことは、その晚霞丘に遊んだ條（一卷二丁裏）で分かる、然るに二卷三十丁裏から三十一丁へかけて散士は佳人に對して昨秋費府外の一江村の旅寓で作つたといふ詩を吟して聞かしてゐる、十三年秋桑港にまだゐたことは、卷一三丁以後の鐵硯子の詩で明白に推されるから、この昨秋は十四年秋でなければならぬ。此の物語はその翌年の春に發端してゐるのであるから、十五年と假定して理無ではあるまい。卽ち初編二卷はすべて明治十五年春の出來事となつてゐる。

東海散士が一日費府（フィラデルフィアの略稱）の獨立閣に上り、自由の破鐘を見て米國獨立の歷史を回想し、そ

の繁盛の現勢と自由不羈の氣魄に感慨を催してゐると、そこへ偶然見物の二佳人と會ふ。ところが佳人の指點するのが、尋常の名勝でなしに米國獨立戰爭の遺跡だけであり、米國の自由を羨む語意があるので、散士はこの二佳人を常人でないと思ふ。佳人の方でも何やら散士に注意を拂ふ樣である。その後數日、散士は春風駘蕩たるに遊心動いて蹄水（デラウエーア河）に小舟を浮べて靄谿（フォルヂ・ヴェリイ）に遊ぶと、又前日の二佳人に出會ふたので、散士は何やら懷しく思ふ心が起つた。すると二佳人中の一人が散士に近づいた、それとなくスペイン人でないかと尋ね、散士が日本人だと答へると、二佳人共に安心する。さうして佳人の方でも獨立閣以來の奇遇に懷しく思ふ心があつたので、散士を隱栖に招いて胸襟を披くことになる。二佳人、一は紅蓮（コーレン）といひ、愛蘭土の人、一は幽蘭（ユーラン）といひ、スペインの人、年は紅蓮はやゝ年長で二十三四、幽蘭は二十許、ともに稀なる美人である。散士の心は殊に幽蘭に惹かれ、幽蘭も散士に意あるかに見られる。二人ともに散士に對してかく人里離れて隱栖する故を語る、散士が獨立閣で悟つた如く、二人ともいはゞ亡命の人で憂國の女丈夫であつたのである。

幽蘭の身上は宛然一部の近世スペイン衰勢史である。幽蘭の父幽將軍はスペインの名族で、ドン・カルロス黨の領袖である。此より先きスペイン王フェルヂナンド七世の殂するや、皇帝ドン・カルロスは王位繼承權を要求したが、女王イサベラの爲めに奪はれてしまつた。そこでカルロスの味方は一團となつて女王に對抗し、カルロスを王位に卽けようとした。カルロス黨の名がこゝに起るのであるが、その子のドン・カルロスが父の意志を繼いで矢張り王位に卽かうとする。幽氏父子はこの人を助けて股肱の働をしてゐるのである。イサベラ女王は一八六八年卽ち明治元年に、積年の失政の爲め王子と共に國人に逐はれた。これが歴史にいふスペイン革命であるが、これ以後のスペインは內亂、外爭、野心黨禍相繼ぎ、國勢凌遲實にいふに忍びない。一度普國王族の王子を迎へんとして失敗し（普佛戰の原因）、再び伊國王族の王子を迎へて失敗し、遂に共和黨の擡頭となり、民權共和の議論が天下を風靡するが、共和民政はス

ペインの如き黨爭の激しい國家には急には適せぬ。幽將軍は機を見てドン・カルロスを奉じて起ち立憲公議の自由政治を標榜して國人の歡迎を得、黨人を破つて王位に卽くに垂んとしたが、ビスマルクの陰謀で破れた。而かも此の爭ひで漁夫の利を占めたのはイサベラの子アルフォンソ十二世で、民政黨と妥協して先づ王位についたのである。ドンカルロスは止むなくロンドンに奔り、幽氏父子は米國に赴き再擧に腐心する。(散士往訪の時幽將軍はスペインで同志のカルロス黨と密謀を運してゐたものである。)

紅蓮の父は愛蘭土の富商であるが、英國の愛蘭土壓迫に堪へかねて、その陰險な愛蘭土自滅策に憤慨する餘り、獨立運動に參畫したが、英政府の知るゝところとなり入獄して死んだ、寄るべなき紅蓮は太守の毒手に貞操を汚されようとするのを拒んで米國に追放されたのである。從つて愛蘭土を獨立せしめて英國の虐政に報復しようとする一念が蛇の如く深く、目下パーネル一派と聲息を通じ、米國から愛蘭土獨立運動を後援してゐる。

散士は二佳人の身上話に大に感激する、然るに二佳人の物語に嗟歎久しうしたコックの老支那人も、自分が亡朝の遺臣で興亞策を藏する身なることを語つたので、散士は益々感激する。老支那人は鼎氏、名は泰璉字を范卿といひ、明末の名將瞿氏の部下の後である。明朝興復の師を興して事成らず、米國に亡命したが、白人の横暴を見て痛憤し、祕かに興亞の策を抱いて同志を求めつゝあつたのである。

三人は何れも亡命の身を歎じ、新興國日本の民たる散士の多幸なのを羨む、然し散士自身も戊辰の昔を思へば亡國の遺臣たる身である。遂に涙と共に會津落城の一段を語る。こゝで三人が亦、奇遇に驚く。此の書の名がこゝから出て來るのである。二佳人は酒宴を設け、歌舞して散士を慰める、散士は春夜の淸興に思はず一宿し、一週日後を約束して還る。

(二編)同じ年の春から夏へかけての出來事と推定される。

約束の日に散士は踏水まで行つたが、生憎の風雨で小舟が出せず空しく歸る、それから病氣となり彼是してゐるうちに十餘日を費した。病氣も何うやら快くなつたので、無理して二佳人の居を訪ふて見ると、人ありとも覺えない。一人の漁夫が來て佳人から托された手紙といふのを渡してくれる。それを見ると、幽蘭の父將軍が捕縛されてスペインの首都に送られるといふ飛報が來たので、名殘惜しいが急に父の許に赴く、とあり、散士の成功を勵ましてある。別に紅蓮の手書で同志パーネル女史への紹介狀が同封されてある。幽蘭の行衞はこれで知れたとして、紅蓮、范卿が何うしたのであらう、一緒に出發したものかそれとも別に志すところに向つたものか、散士は獨り心に怪しんだ。

散士はこの後快々樂しまず寢食も廢するに至つたので、皆心配して保養をすゝめる。散士も暫時は讀書する氣にもならぬので、山水に放懷しようとする。一日費府凱旋街のフランクリンの墓に詣で、彼の功業を偲び、時代の墮落を痛歎し、自分の碌々たるを感傷してゐるとき、ふと一士人と會ふ。此の人は散士の日本人たるを聞き、頻りに國事を尋ね、魯國の恐るべきを警告する。さうして丁度墓畔にポーランドの愛國家コッシュースコ（高節公）の手植の楡樹があるのに因んで、散士にポーランド亡國の由來とコッシュースコの奮鬪を語つて聞かせる。散士はこゝでも强國の暴横と弱國の悲慘、亡國の因の內爭にあること、誤れる自由論の恐るべきことを悟る。

その後散士一日新聞電報で、スペインの都でドン・カルロス黨の殘黨の脫獄があつたとあるのを讀み、これが幽蘭ではないかと疑ふ。さうして急にパーネル女史をニュージャアシイに訪ふことにする、同志だけに何か消息が入つてゐはせぬかと思つたからである。女史は在米愛蘭土獨立黨の首領で神の如く敬愛されてゐる。この時病氣であつたが快よく散士を引見して夜半まで英國の虐政の實狀を語つた。然し散士の心中望んだ如き幽蘭等の消息は別に握み得ずに終つた。然るに散士と語つて僅に六日後、パーネル女史は逝く（年二十八）。散士は感傷して又病床の人となり、女史の葬儀にも會されなかつた。（本文にいふパーネル女史とは有名なパーネルの妹ファンニイ・パーネルで、ファンニ

イは一八四九年に生れ、一八八二年（明治十五年）七月二十日ニュージァジイのホーデンタウンで歿した、未婚のまゝであつた。散士は年二十八などゝいつてゐるが、實は三十三なことが明らかである）。

一夜病後の散士は月光を便りに費府の北邙にあるパーネル女史の旅櫬を尋ね、追弔の祭文を讀む、さうしてゆくりなく紅蓮と會ふ、散士は夢かと驚喜した、幽蘭、范卿のことを問ふ。紅蓮は沈吟躊躇の狀を示しつゝも、幽將軍捕縛の飛報が來てから、單身敵地に入らうとする幽蘭を說いて三人同行した顚末に及ぶ。そのうち夜が明けかけるので、散士は二人、蹄水の舊居に赴いて物語を續ける。こゝで紅蓮は、幽蘭と范卿の此の世の人でないことを告げたので、散士は初めは信としない。然し紅蓮の物語を聞いて成程と得心した。

三人はスペインの都マドリッドについて幽將軍が城西の獄にあることを知り、何とかして助け出さうとした。然し尋常の手段では出來ないので、紅蓮は守城長王羅の好色なのを利用し、自分が奇策を建て主役を買つて出た。先づ米國富豪の女といふので王羅に近づき、監獄見物に托して幽蘭と將軍を面會させ、脫獄の打ち合せをとげる。幽將軍は打ち合せ通り病氣と稱し、今生の思ひ出に新鮮な空氣の中を散步したいと願ひ出す。王羅はうつかりこれに乘せられ紅蓮の色香に迷はされた爲め、遂に散步の途中幽將軍を逃がしてしまふ。

（三編）紅蓮の物語の續き、十五年夏埃及の亂に及ぶまで。

漸く脫獄に成功した一行五人は、途中追手を逃れ、種々の困難を凌いでイタリーに入り、カプレラ島に住む俠雄ガリバルヂーに依らんとした。然るに彼等の船が港についた日が丁度ガリバルヂーの死んだ日であつた（六月二日死）。でやむなく轉じて佛國に赴き、ガムベッタを手賴ることとにしたが、カプレラから佛國に行く途中、難船して五人離れ離れになつた。紅蓮の考へでは、他の四人は何れも死んだものと思はれるといふのである。

紅蓮は幸ひ助かつたので、ガムベッタの許に赴いて、幽將軍父子の死を告げ、愛蘭土獨立の志を語つたところ彼は

大に賛成してくれた。その時、風評のあつた如く日本に赴いて自由主義を助けるかと聞いたら、彼は全然これを打ち消し、母國の任重し、自分にはそんな暇がない、尤も日本人が眞底から自由を欲してゐるなら別だが然し今の様子ではさうも見えぬとて、國權恢復の冷淡なのを憤るかに見えた。王羅は一つは幽將軍の踪跡を知るため、一つは紅蓮の色香を忘れかねて執拗に後をつけるので、急いで米國に逃れて來た、さうして同志パーネル女史の魂を慰めんとして思はず散士に會つたわけである。

此の後紅蓮と散士が屢々相會ふにつれていつしか幽蘭に對する情が紅蓮に移るを覺えた、然し紅蓮の大膽權變に富む性格に幾分戒心して、品行を亂さない、紅蓮もいつしか散士を戀人の如く扱つてゐる。然し二人の關係を危險から遠ざけたのは、埃及のアラビイ・パシヤの擧兵である(此年六月―九月)。アラビイの檄文を二人は感激して讀んだ。英佛の强壓に對抗して國權を恢復するといふアラビイの擧が著しく二人の關心を高めた。ところが一日新誌は驚くべき消息を傳へた。それはアラビイの幕賓にカルロス黨の老將がゐる、老將には影の如く美少女が伴なつてゐる云々。「兩人相テ茫然語ナキモノ之ヲ久フ」したのである。

三編から四編へは眞の少々だが間隔があるので、今三編の梗概の終つたこの邊で、先づ以上について語ることにする。

故國を離れて世界の動きを見、東洋に於ける日本將來の使命を思ふとき、散士の心は暗然たらざるを得ない。幽蘭女史はいふ、――

方今東洋大ニ爲スベキノ秋ニ當リ牛耳ヲ執テ亞細亞ノ盟主ト爲リ東生民倒懸ノ難ヲ解キ西英佛ノ跋扈ヲ制シ南清人ガ陋習ヲ壞リ北俄人ノ覬覦ヲ絕チ歐洲諸邦ガ東洋ヲ蔑視シ內治ニ干渉シ遂ニ之ヲ內屬ト爲サントスルノ政略ヲ拒キ

彼億兆ノ蒼生ヲシテ初テ自主獨立ノ眞味ヲ嘗メ文物典章ノ光輝ヲ發セシムル者ハ貴國日本ニ非ズシテ其レ誰カ之ニ當ラン（二卷七丁表裏）

これこそ日本將來の使命であり理想でもある。然るにかゝる輝やかしき將來の使命を托されてゐる若き日本の現狀は如何。歐米諸國に比して不幸にして未だ半植民地的狀態を脫しない、殊に散士の遊學してゐる米國が自主獨立の本場であるだけに、日本の半植民地的狀態がなほ一層甚しいものに映じる。

今ヤ外人禍心ヲ包藏シ神州ヲ蔑視シ淸ハ猥ニ自ラ尊大我ヲ輕シテ鄰交ニ信ナク俄獨ハ勢威ヲ賴テ驕傲シ英佛ハ狡智ニ老ケテ蕩逸シ我ニ飮マシムルニ美酒ヲ以テシ我ニ贈ルニ翠羽ヲ以テス其酒其羽往往鴆毒ノ制スル所我士民之ヲ受ケテ而シテ未タ疑ハス所謂此レ毒藥ヲ甘餐シ猛獸ノ爪牙ニ戯ルモノナリ只タ恐ル彼ノ爲メニ侮ヲ取ランコトヲ且ツ彼ロニ仁義ヲ誦シテ而シテ桀虜ノ行アリ表ニ天道ヲ說テ裏ニ豺狼ノ慾ヲ懷ク亞細亞北部ハ彊俄ノ爲メニ幷セラレ南方印度ハ英王ノ臣妾トナリ安南ハ佛國ニ隷屬シ土耳其淸國モ亦萎微既ニ已ニ亡滅ノ運ニ傾ク嗚呼鯨鯢浪ヲ蹴テ東洋ヲ縱横シ豺狼食ヲ求メテ戶外ヲ窺フ仰テ殷鑑ヲ覽テ千歲ノ憂ニ堪ヘザルナリ加之ナラズ我人民開明ノ域ヲ愛シ自由ノ里ヲ慕ヘドモ之ニ達スルノ道ニ迷ヒ腐言邪說取捨スル所ナク枉ヲ矯メ却テ直ニ過キ祖宗百年ノ良法ヲ破毀シ工農數世ノ組織ヲ撲滅シテ顧慮スル所ナク輕佻浮薄强辨ニシテ能ク談ジ米ヲ模シ歐ヲ擬シ徒ニ理論ニ奔テ實業ヲ勉メズ政令ニ抗シテ自由ノ伸暢ト誤リ横議罵詈シテ民權ノ朋黨ト誇リ以テ世俗ノ好ニ投ジ譽ヲ當世ニ求メンコトヲ務メ後世識者ノ譏ヲ顧ミズ虛ニ吠ヘ臭ヲ逐フノ徒ハ靡然響應シ士風壞頹德義地ヲ拂ヒ朝ニ民權ヲ主唱セシ者夕ニ官權ヲ呼號シ甘シテ轅下ノ狗トナリ士ニ常操ナク議ニ確論ナシ甚矣哉士ノ節義ヲ失フヤ黃金ノ爲メニ其說ヲ變ジ詐術權謀互ニ相傷ク忌嫌姦計徒ニ相仇シ善惡成敗ニ陷リ毀譽執利ニ脅サル是ニ於テ輕薄于紀ノ輩姦智ヲ役シテ以テ之ニ乘ジ良民困頓シテ姦徒蕩逸シ禮敎彫衰士民其所ヲ失ヒ生ヲ救フノ急ナル卑利是レ務メ廉恥ノ心月ニ消シテ貪婪ノ欲日ニ增

シ遂ニ護國ノ大義ヲ忘レ體ヲ毀リ身ヲ傷ケ以テ兵役ヲ避ク（中略）是ニ於テ風憲愈々薄ク賄賂漸ク風ヲ爲シ富者ハ妾ヲ買ヒ賸ヲ納レ貧者ノ子女醜行ヲ愧ヂズ鄙情賤行世教ヲ壞リ家聲ヲ汚ス志士之ヲ見テ心ヲ傷メ舊老之ガ爲メニ流涕ス賦税年々多キヲ加ヘ而シテ民力未ダ伸ビズ中央集權重キニ過ギ地方其鈞ヲ失ヒ帝京ニ非ザレバ事ヲ起シ名ヲ擧グル能ハズ悠々タル奔競ノ士政府場外ニ別ニ名利ノ餘地アルヲ覺ラズ皆官途ニ狂奔シテ偏ニ租税ニ衣食センコトヲ願フ其弊ヤ限リナキ饕餮ノ徒限リアルノ官徒ヲ哮望シテ已マズ恒産ナキノ民ハ窮路ニ懇泣シテ適從スル所ナク禍機陰伏病肺腑ニ入リ浮言相動シ漸ク大計ヲ遺レントス殊ニ知ラズ日本固有ノ國權ハ歐人ノ爲メニ奪ハレ吾人幸福ノ利ハ外商ノ爲メニ殺ガル丶ヲ散士ヲ以テ之ヲ見レバ方今焦眉ノ急ハ十尺ノ自由ヲ内ニ伸バサンヨリ寧ロ一尺ノ國權ノ外ニ暢フルニ在リ噫（以下原文抹殺）（二卷十九丁裏——二十二丁表）

日本の現狀に對するかゝる感慨は、夙に「東洋美人ノ歎」にも見えるところで、實にこの政治小說の依つて成る眼目でなければならぬ。日本の現狀既にかくの如し、これは如何なる手段をつくしても矯救し改良しなくてはならぬではこれを矯救する道は何うか。散士は語を續けていふ——

嗚呼此大難を救濟挽回スルノ策果シテ如何セン上下小怨ヲ棄テ舊惡ヲ捨テ私心ヲ去テ公儀ニ從ヒ遊員ヲ去リ冗費ヲ減ジ内結外競ノ志操ヲ勵マシ國權恢復ヲ以テ各自ラ任ジ國家ノ盛運ヲ以テ自ラ期シ外人ノ移住ヲ奬勵シ外國ノ資本ヲ利用シ古來國人ガ漫ニ官爵ヲ重ジテ天爵ヲ輕シ淸貧ニ傲テ商利ヲ賤ムノ陋習ヲ破リ農桑ヲ課シ工商ヲ進メ海運ヲ隆盛ニシ以テ沿海ノ航權ヲ保護シ鐵路ヲ縱橫ニシ以テ内地ノ交通ヲ便ニシ四民心ヲ一ニシ耐久努力セバ厄運漸ク去リ自由始メテ伸ビ國家ノ富强文明ハ期シテ待ツベキナリ然リト雖モ今日ノ域中ヲ看ルニ我國ノ士人志遠大ナラズ多クハ小成ニ安ジテ歌舞遊蕩圍碁抹茶ニ耽リ書畫骨董ヲ玩ヒ以テ一日ノ富貴ヲ偷ミ唯々一二州人ノ歡心ヲ得ルヲ務メ私怨ノ爲メニ公道ヲ忘レ情義ノ爲メニ庸人ニ任ズ米人ガ能ク私心ヲ捨テ公議ニ據リ國家ノ爲メニ盡スノ心肝ニ照セ

バ天淵モ啻ナラズ吾人實ニ忸怩スルニ堪ヘザルナリ是レ散士ガ日夜胸臆ニ積テ國家前途ノ大計ノ爲メニ悁悒憤懣スル所以ナリ」（二卷二十三丁表裏）

散士の慷慨は兎も角とし、その矯救策を要約せば、（一）先づ上下一和、四民一心、內爭を去ること、（二）內爭の心を外に向け國權恢復に努力すべきこと、（三）同時に外國との通商交易は厚くすべきこと、（四）財政は儉に從ひ調整すべきこと、（五）實業思想を振起し、工商業を奬勵すべきこと、（六）獨立の氣節を勵まし品行を重んずべきこと、の六ケ條となるが、だがこれを更に簡約せば、內爭を避け、國權を張り、財政を整ふの三項目になる、當時の日本として、富强獨立の實を擧げんとせば、この三項は實に適策であるといふべきである。散士は卽ちその見聞より先づ外に備へることを眼目とし、萬事こゝから割出して來る、從つて彼の場合には、同時の民間鬪士が懸命になつて努力した自由民權にさう熱中しなかつたのみか、却つてかゝる運動の取りつゝある方向を危險なりと見て警告をさへ與へた。勿論壓制が可いといふのではない、立憲公議の政治が可いには違ひないが、然もそれも此の國權恢復獨立維持の理想を達成せしめる一過程として可いといふのである。卽ち手段であつて目的ではない、こゝが散士と普通の民權鬪士と一寸違ふところであり『佳人之奇遇』の政治的イデオロギイが少し同時代の他の政治小說と違ふところである、この頃の政治小說は背景に政黨的色彩があつたが、この小說にはそれがない、國權的色彩が極めて濃いのである。

以上は散士の政治的信念の根本であるが、散士はこの信念を啻に上の如き場所で述べてゐるだけに止まらず、機會ある每に、或は部分的に、或は全面的に自己の意見とし、他人の口を藉りて度々反復し、補足して印象を强めんとしてゐる。例へば、初編から三編に至る間にも、フランクリン墓畔に於ける一士人のポーランド滅亡論（二卷九丁表以下）やガムベッタの日本論（六卷五丁裏以下）や、アラビイ・パシヤの擧兵檄文（六卷二十四丁表）以下やに於いて散士のかゝる試みがなされてゐる。而かも散士は歷史的事實なり人物なりをもつて一種の實物教訓を試みてゐる。（前記一

士人の口を藉りて)ポーランドの滅亡は國に常主なく內に相鬩ぎ、上下不和黨爭激烈を加へ、且つ國人が自由を誤解した結果、强國の乘ずる隙が生じたのであるとする、內爭と自由の誤解を特に力調してゐる。ガムベッタの言に藉口した日本論に至つては、轟々として皆肯綮に中り、眞に當時の日本人に對する頂門の一大鍼である。丁度明治十四五年の交、日本ではガムベッタが渡來して自由主義の後援をするといふ風說が高まつたものであるが、散士はこれを利用し、ガムベッタをして日本行無用の理由として一場の日本論を試みさせたものである。(前略)然レドモ日本人民ニシテ上下心ヲ一ニシ眞ニ國權ノ振ハザルヲ慨シ眞ニ外人ノ專橫ヲ憤リ昔時米國ノ義擧ノ如ク聖士奴民嗷(シントドミンゴー)ノ獨立ノ如ク愛人ガ英政ニ敵スル如ク百折撓マズ千挫屈セズ志氣愈々振ヒ民心益々固クンバ余亦其孤忠ニ感ジ一臂ノ勞ヲ盡ス可シ然レドモ未ダ全國人民條約改正ノ成ラザルヲ憤リ慷慨激昂自ラ政府ニ迫リテ之ヲ論ズル者アルヲ聞カザルナリ苛稅ヲ課シ酷租ヲ布キ以テ軍艦ヲ購ヒ兵備ヲ裝フモ只內亂ヲ鎭壓スルニ汲々タル耳未ダ海岸ニ砲壘ヲ增シ外寇ヲ防禦セント欲スルヲ聞カザルナリ故ナク外事ニ干涉シ隣交ヲ傷リ人ヲシテ弱邦ヲ蔑視スルノ志アルヲ疑ハシムルモ未ダ曾テ上下一致全力ヲ國權恢復ニ盡シ若シ歐人ニシテ日本ノ正理ヲ承諾セズンバ斷然獨立國ノ體面ヲ保持セント欲スルノ決意アルヲ聞カザルナリ在野ノ名士奮然臂ヲ揮テ歐米ニ航シ條約ノ偏重ヲ各國ノ君相ニ訴フル者アルヲ聞カザルナリ志士論客ガ此土ニ來リ筆ヲ搦リテ書ヲ新聞ニ投ジ舌ヲ掉フテ公衆ニ演說シ以テ輿論ヲ傾動スルモノアルヲ聞カザルナリ全國ノ民才ヲ擇ビ能ヲ選ミ使ヲ遣シテ書ヲ各國ノ議院ニ奉ゲ以テ條約ノ改正ヲ請求スル者アルヲ聞カザルナリ國家獨立ノ實力ヲ傷ケ自治ノ大權ヲ失ヒ外人ノ鼻息ヲ窺ヒ他邦ノ虛喝ヲ恐レ三千餘萬ノ衆上下恬然トシテ愧ヅル所ヲ知ラズ內結外競ノ大計ヲ遺レ互ニ相語テ曰ク自由ノ爲メニ斃レンノミ國權ヲ擴張セザレバ死モ且ツ已マズト之ヲ小蛙ノ井底ニ躍ルニ譬フ、世或ハ日本男兒ヲ稱スルモノアリト雖モ是レ皮相ノミ未ダ其肺腑ヲ知ラザルノミ云々、實に稀に見る痛快な文字である。當時の現實日本に對してこれ程强烈な鞭韃はない。散士は又更に、アラビイ・パシャの擧兵檄文を假りて外

人の暴横を制し、國權を恢復し、立憲政治を確立し、民力を休養するために擧兵する意味を宣傳してゐる。近世埃及の衰亂によつて國家滅亡の原因を悟らしめ、日本國民の覺悟を促がさうといふのである。幽蘭、紅蓮、范卿の諸人も、消極的一面に於いては、實物教訓のシムボルたるに論はない。卽ちスペインは、內爭黨爭をやめ、貴族（僧侶）の專權を排し、自由を誤用せず、財政を整へて强國に乘じられぬやうとの警告、愛蘭土は、强國の稱ふる四海兄弟自由交通の甘言に欺かれてはならぬとのそれ、淸國は、內爭を止め、專權の弊を去り、外國に備へ、上下和睦、國力の富實を努めよとのそれに外ならぬのである。

さて『佳人之奇遇』の如き際立つて政治的イデオロギイに富んだ作物にあつては、小説的テクニクの如きものは殆んど問題とならぬかも知れないが、然し小説である以上、一應はこのテクニクの側からも取り上げて論するのを至當とする。

この作の趣向の立て方は大體支那小説によつてゐる。本來は東海散士の身邊雜記とでもいふべきものを小説化した感じがある（或は私小説といつても可い）。その發端に於いて陶淵明が桃花源記とスコット湖上美人に負ふところがあると思ふが何うであらうか。本筋のプロットは極單純であり、露骨に人爲的な偶然的なものといつてよく、いはゞ散士を介して讀者に世界亡國史を聞かしめる機會を與へるやう種々な出來事を並べ立てゝゐるに過ぎないかに見える。主體プロットたる散士と二佳人の關係が抑もそも最初から偶然の出來事になつてゐるのである。この點で偶然事の連續といへぬこともないが、然し支那小説式手法の伏線といふので貫穿されてゐるから、ともかく本筋が一貫してゐる。ではかういふ風に本筋が單純であるから讀んでも單調かといふに、案外變化に富んで複雜なやうに讀ませる。これは皆サブプロット卽ち枝葉的趣向が本筋に比して案外變化に富んだ複雜なものだからである。例へば二佳人、范卿の身上、紅蓮の物語の如き、皆さうである。而かもこのサブプロットが可成り多いので、むしろサブプロットが本筋にさ

れ、主人公の散士が客位に立つてゐる場合が少くない。何れにしても、散士對二佳人の關係といふ本筋のプロットが無雑作に考へられたものではないらしく、日本人に對して白人の美女を配した點は、當時の日本人の歐米崇拜心理を狙つたとも見えるが、然し白人の美人が競爭的羨望的に此の東海の遊子を愛慕するといふのは、散士の理想たる國權意識を寓したものとして注意すべきものであらう。單純といひ、偶然とはいひ條、感ずべき趣向が一二ないわけでもない、病後の散士が月夜パーネル女史の旅櫬を弔ふて紅蓮と再會する凄壯な光景（卷四）、紅蓮の物語中、幽將軍を脫獄せしめる一段（卷四、五）、この一段は冒險的興味に滿ちみちてゐる、紅蓮が王羅を翻弄一番するところは眞に讀者をして微笑せしめるものがある、殊に辛うじて追手をのがれ、ガリバルヂーに依らんとしてカプレラ島に赴き、端なくガリバルヂーの死に會ふことになるのは、殊に妙である。こゝで幽蘭を散士と分れさせて、運命的に二人を團圓せしめぬかの如く見せかけ、讀者を困悶せしめるところは、作者も相當考へてゐる。

趣向が偶然事の連續なる如く、人物も偶然の集合であつて、たゞ作者の都合でこゝにかう寄せ集められたものと見るべきである。幽蘭紅蓮は假りにこれ等に類するモデルがあつたか何うか、この作中の二佳人は勿論散士の主觀散士の理想の所產であり、スペイン、愛蘭土二國の逆境に對する散士の深甚な同情の現れである。范卿も略ば同じ型になる人物である『佳人之奇遇』の主要人物は散士以外には先づこの三人であるが、かくの如く三人ともいはゞ散士の分身ともいふべきものであるから、理想的で個性がないといはれるのも當然であらう。然らば同一かといはれると、粗雑ながら多少描き分けられてはゐる、散士の多情多感は勿論として、幽蘭の貞婉で內に剛烈の氣を含んでゐるのと、紅蓮のやゝ輕俠で大膽權詐なのとは、同じ革命的美人とはいへ、明白に違ふ、この性格の相違は幽將軍を救ふ段に、守城長に對する色仕掛の危計を案ずる際になつてはつきりと示されてゐる。范卿の風格は全く支那小說からそつくり脫化して來たものであるらしい。パーネル女史は流石にリアルな感じを與へるが、散士は恐らく女史に實際會つたこ

とがあるのであらう、實感がこもつてゐるやうなところがある。

舞臺が世界に跨つてゐる點も、當時としてはこの作を歡迎した理由の一つに數へられぬことはあるまい。本筋の舞臺はまだ米國だけであるが、サブプロットの方は或はスペイン、或は地中海、或はイタリー、或は佛國、或は埃及と移動して回る。その度に讀者は新なる國土に入り珍らしい風物に接する樂しみがなくともなかつたであらう。サブプロットの舞臺の描寫も可成り調べて描いてあるらしいが、本筋の米國費府附近の風光に至つては、極々荒い筆致ながら寫實的描寫があり、讀者をして此の作の眞實性を高めさせるに力があつたことゝ思ふ、一例をいへば（卷四、十四丁表）、――

（前略）且ツ語リ且ツ行キ既ニ北邙ヲ下ル紫山旭日ヲ孕テ萬象漸ク鮮ナリ乃チ川岸ヲ下リ小舟ヲ僦テ跡水ニ向フ舟絕景山（フエイヤモント）ノ間ヲ過グ絕景山ハ費府ノ遊園ナリ地勢高爽境域廣大風光ノ美眺望ノ奇五洲第一ト稱ス時ニ兩岸樹木欝茂禽鳥和鳴實ニ我耳目ヲ歡バシムルニ足ル紅蓮首ヲ右ニシ林頭ノ一樓ヲ指シテ曰ク郎君彼ノ古屋ヲ知ルヤト散士曰ク咄叛將阿能奴ノ舊居カト云々

これは眞に一例であつて、此の種の描寫はまだまだ枚擧し得る。且つ又、本文中一地區、一人物、一史實で重要なものと見れば、挿話の如き體裁で詳細丁寧に解說を加へる。（卷一を取つていへば、獨立閣の條にその由來の解說があり晩露丘（バンカーヒル）の條にバンカーヒルの地理、古戰場等の解說がある、又印度の虐政を記し、印民飢死者五百萬といふに、ナイチンゲール女史の言を引き、又女史の傳を掲げ、英國のジンゴイズムを攻擊するにブライトの語をもつて證としてゐる等）。これは小說としては新しい體裁で、所謂新機軸を出したものである。小說としての一般的得失は兎もあれ、此の小說としては、これも亦讀者に對する眞實性を强める一助となつたであらうし、讀者の知見を廣めた點は多大なものであつたらう。

次にはこの作の描寫である、描寫の手法造語は矢張全く支那小説式に外ならぬ。地の文章、會話、人物の形容、服裝、室家の有様、器物等に至るまで全く支那小説風の描寫であり、いはゞ『剪燈新話』からでも借りて來たものゝ如く見える。今卷一、二から例を取つていはう。先づ人物の形容であるが、幽蘭を描いて曰く——

遠ク之ヲ望メバ（中略）髣髴トシテ輕雲ノ新月ヲ蔽フガ如ク近テ之ヲ見レバ皓タル白鶴ノ仙堦ニ立ツガ如シ年齒二十許盛粧濃飾セズト雖モ冷艶全ク雪ヲ欺キ眉ハ遠山ノ翠ヲ畫キテ鳳髻雲ヨリ綠ニ秋波情ヲ凝セトモ炯炯人ヲ射テ暗ニ威儀ヲ備ヘ紅頬咲ヲ含ミテ皓齒微ニ露ハレ云々

紅蓮を描いては曰く——

一妃輕裙ヲ提ゲ徐歩シテ散士ガ傍ニ近ク年二十三四綠眸皓齒黃金ノ髮ヲ垂レ細腰氷肌遊散ノ文履ヲ踏ミ纖手ヲ揚ゲテ楊柳一枝ヲ折ル其態度風采梨花ノ露ヲ含ミ紅蓮ノ綠地ニ浴スルガ如シ

これだけ拔讀すると宛然曹子建の『洛神賦』か張文成の『遊仙窟』でも讀んでゐるやうな氣がする、近人歐洲の美人の形容とは思へぬ。更にその家室器物を寫す段に曰く——

深邃幽閒庭前ノ櫻花十分ニ開キ楊柳枝ヲ垂レテ翠蔭婆娑タリ窓外ニ一雕花籠ヲ掛ケ籠中ニ白鸚鵡ヲ畜フ又壁頭ニ扁額ヲ揭ゲ題シテ曰ク

幽谷蕙蘭空懷香　年年全節待鳳皇

架上ニ一玉簫ヲ橫ヘ壁間ニ一風箏ヲ掛ク大琴小琴相對シ皆清楚ヲ極ム

益々以て支那小説である。殊にこの描寫の支那臭を助けるものに、篇中の人物が會話の間に頻りに支那の故事典故を引用すること、二佳人の詩句の如き當然歐文なるべくして皆漢詩化されてゐること等がある。前者の例は——

宜ナル哉米人ノ能ク頽勢ヲ挽回シ凱歌振旅シテ馬ヲ華山ノ陽ニ歸シ牛ヲ桃林ノ野ニ放チ云々（二佳人の相語る言葉）

妾將ニ歸水ニ鵲橋ヲ作リ星客ヲシテ之ヲ渡ラシメント云々（紅蓮）
毒ハ永野ノ蛇ニ逾ヘ猛ハ泰山ノ虎ニ過グ（同）
夫レ道以テ天下ヲ濟フニ足リ而シテ人ニ貴バルヽコトヲ得ズ言以テ萬世ヲ經ルニ足リ而シテ時ニ信ゼラレズ陳蔡ノ間ニ餓ヲ救フ能ハザリシハ闕里ノ孔聖是也（幽蘭）

等々の語に知るべく、後者の例は——

春風吹兮水潺潺。白雲散兮月團圓。室有賓兮臭如蘭。坐有朋兮吐心丹。五絃彈兮中情歡。悲歌唱兮髮衝冠。乘風雲兮沖九天。潜龍躍兮還胡淵。

これが幽蘭女史の散士を慰める爲めの宴歌である。誰だとてこれを歐洲人の詩と思ふ者があらう。米歐を舞臺とした小說であつて當然あるべき異國情調の描寫は殆んどなく、宛然支那小說中の女仙宮でも訪れた感じがある。たゞ全然さうだといへないのは、僅かでも異國情調が滲み出てゐるからである（例へば、散士の歸るとき、幽蘭が白薔薇一輪胸にはさんでくれるところ、醉後の二佳人が散士を挾んで庭除に步するところなど）。

此の描寫の支那小說式なことは、一つの問題を提起する、抑もそもこれは偶然の結果か故意にさうしたのか。偶然といへばさうもいひ得る。この作に加筆潤飾した高橋太華氏は漢文家出身であり、洋語を知らぬ人であるから、表現樣式に支那流を用ゐるのは自然であらう、然し私はこの支那臭は單なる偶然ではないと思ふ、譬ひ高橋氏が洋語調の描寫が出來ぬとしても、散士は多年彼土にあつてかゝる表現に習熟してゐる筈である、さうしたいと思へば出來ぬことはない筈である。然し矢張り甘んじて支那小說式を用ゐてゐるからは、幾分故意の氣味があると許されても仕方がない。こゝに今一つの國權意識めくものが見られやう。尤もこの描寫の支那臭は初半にはかく甚しいが、次第にそれが減じて來る、初半の舞臺が米歐であり役者に歐洲人が多いから、それだけ甚しく感じられるのかも知れない。

何れにしてもテクニクの點から論すれば、「佳人之奇遇」は不具な小説たるは論がない、散士は西洋文學の知識も多少あつたらうからもつと立派な小説を作らうと思へば作れたことと思ふ、而かもそれをしなかつたのは、經世家的衒氣が煩ひしたか漢學者流の小説輕視に捉はれてゐたか、或は主意たる政治的イデオロギイが通れば可いとしたか。何れにしても新奇な型の作品ではあるが、小説としてのテクニクはさう成功したものとはいへない。ではさうとして、『佳人之奇遇』はこの頃の群政治小説中に伍して了るべきであらうか。否な、さうはならぬ、それは此の作がこの頃の群政治小説乃至一般創作には珍らしい重大な一要素を多分にもつてゐるからだ。それは全篇に漲る強烈な熱情である。凡そ明治初期の小説といふ小説で、この作程に作者の強い熱情を恣まゝに迸散させてゐるものはなからう。この一要素は幾多テクニク上の缺點を補つて、今なほ此の作を讀むに値するものにする。讀者は一度讀みついたら最後、猛烈な情緒の旋渦に捲きこまれて、最終卷の最終頁までいや應なしに讀み通させられるであらう。かつて「佳人之奇遇」の優秀な研究(一)を公にした小島政二郎氏も曰く——

(前略)私は讀後作者の鬱屈した熱情を滿身に浴びた思ひがした。これは飽くこと疲れることを知らぬ熱情だ。明るい喜びの熱情ではない。鬱屈した悲劇的熱情だ。苦境逆境に敢然として戰ふ忍苦の生活となつて現れてゐる熱情だ。不義を憎み、正義を愛する精神となつて襲つて來る熱情だ。多くの場合、悲壯の響を帶びて耳朶を打つ(中略)この熱情は、或は單純、單調の譏りを免れないかも知れない。併し贋物では決してない。本物である。純粹である。

小島氏の形容は實によくこの熱情の本質を説明してゐる。この熱情は時相を知つてゐる讀者にはそれだけ多くこの作を面白いものにするが、時相に知識のない讀者をも引摺つて行く力のあることは確かである。この熱情は「贋物ではなく、本物であり、純粹で」ある。この熱情には強度の眞實性(ヴェリシミリチュード)がある。それは作者自身の感情を正直に吐露してゐるからだ。作者は自身亡國的感情を經驗した身であり、從つて世界の諸衰亡國に對する感情も衷心から出る。此等の諸

衰亡國に對しても他國のこととは思へない、全く今日歴史的に考へるやうなものではない。從つて又、日本が亡國の悲運に陷入れられはせぬか、亞細亞を何とか救濟する途はないかと憂ふる感情も衷心からする。この作の熱情の眞實性の鍵は、散士が實際亡國の遺臣として幾多の悲辛を味はゝされたといふ事實である。再びいふが、實に强烈な熱情だ。いはゞ歐化主義的混迷の眞只中にたゝきつけた國權的感情の爆彈とでもいひたいくらゐのものである。

註（一） 文藝春秋社『文藝講座』第四「明說小說史」

五 明治十八年――二十年。『東洋之佳人』、『佳人之奇遇』四編

十八年以後の散士は、いはゞ時代の歴史的人物であり、從つてその足跡を辿るに、十八年以前程苦心しなくても可い。然し矢張りさう明瞭といふわけには行かない。

十八年までの、日本を包圍しつゝ進展する世界の狀勢は既に述べた如くである。散士はこの狀勢に寒心しつゝ十八年一月歸朝したのであるが、歸つて見ると、更に獨立黨事大黨の衝突から韓國事變が起つて今や日本と淸國とが必死に起ち上る勢になつてゐる。日本全國民、政府も人民も大に緊張して國事に勤めなくてはならぬ時である。然るに國內の狀態は案外で、「上流者歌舞遊樂之レ耽リ、恬トシテ知ラザルガ如シ」（『佳人之奇遇』卷十）。今や歐化政策の施設に急で、外人の御機嫌取りに忙しく、眼前重大の東洋問題などを顧慮する暇がない。多血性の散士たるもの、これを見て慨然たらざるを得ない。そこで歸朝早々「一縉紳」を訪ふて朝鮮問題についての意見を述べ、その善後策から東洋の大勢に及んだが「縉紳冷然笑テ曰ク海外留學ノ諸生、志氣徒ニ高尙學理ヲ偏信シ歐米ノ形勢ヲ借リ來リテ直ニ我ガ國事ヲ論ズルコト常ナリ是レ所謂柱ニ膠シ瑟ヲ皷スルガ如シ夫レ朝鮮ノ民人其力ヲ計ラズ不敬ヲ我ニ加フル數回我之ヲ許容スルコト既ニ大ナリ彼誠ニ伏謝セズンバ兵ヲ擧テ征センノミ淸國トノ交涉ニ至リテハ和戰ノ妙算我ガ胸中ニ

成竹アリ復諸生輩ノ容喙ヲ待タズ白面ノ書生何ゾ兵ヲ知ランヤ」(前同)と、散士の果斷勇往の力說に對して相手にならぬ。此の時人心が日に激昂し、主戰論平和策の論難は紛々擾々日としてなきはない。散士も民間志士に交つて盛んに時事を談論した、散士は事玆に至つては出兵主義より道がないと爲した。散士は元來土佐人に知己が多かつたが、馬場辰猪、大石正巳等とはこの時始めて知り合つた、末廣鐵腸、犬養木堂等とは前から相知つてゐた、會津人では山川將軍(浩)、赤羽四郎その他が彼の議論の相手となつたであらう。最も意氣が合つたのは馬場であつた。彼は此の間國民に自覺を促すため滯米時代の腹案を急速にまとめて、政治小說『佳人之奇遇』を發表し、日本の危機を警告した。政府は二月伊藤博文を淸國に派遣して、韓國事變について李鴻章と談判させ、所謂天津條約の締結となり平和に局を結んだが、この平和の結局が必ずしも國民を滿足せしめるものではなかつた。國辱を雪ぐ條件は何等觸れられず、たゞ漫然撤兵を約したといふ點が面白くないとされたのである(天津條約は然しそれだけでも當時の日本として得るところがないでもなかつたのだが)。

旣にして獨立黨の首領朴泳孝や金玉均等十五六人が亡命して來たので、散士は彼等を訪ふてその國事盡瘁の勞を慰め、且つ朝鮮問題から東亞の將來を論じ合つた、金とは殊に親しくなつて、一益友を得た思ひがしたらしい。だが間もなく秋冬の間に及んで大井憲太郎、小林樟雄、新井章吾等の大阪事件が起つて、金は翌年小笠原島に配されることになつた。(大井等は金等を中心にして、朝鮮に事を起さうとしたからである)。これより先散士は金が禍に罹るを恐れ自家(恐らく熱海の別莊か)に引取つて世話しようとしたが、金はその厚意を喜びつゝも辭して受けなかつたといふ。

新聞によると(十八年六月十八日時事)散士はこの年六月、犬養毅、若山儀一郎、柳谷謙太郎、和田垣謙三その他と日本經濟會なるものを創設したといふ、その主旨は、國家經濟の眞理を硏究し農工商の殖產を奬勵し敎育を隆盛にし漸を逐ふて衣食住の程度を高尙ならしめ、以て吾人の福祉を增し人生の快樂を求むるを以て其の目的となし、之を達

せんが爲には放任主義經濟主義に據らずして、保護主義に據る云々といふのである。こゝに新歸朝の知識階級たり、文明紳士たる散士の一面が見えるやうな氣がする。その保護經濟は注意すべき點である。）なほ散士はこの前後に於いて一時三菱社員となつた形跡がある。

此の時に當つて淸國は日本を屈せしめ、佛國と媾和し、その平生自尊の念が一段と甚しく、「勇氣百倍病獅再ビ風ニ嘯クノ態」があつたところが、「我國ノ內情ヲ顧ミレバ、通貨縮蹙人民窮厄ノ歎ヲ聞クノミ能ク外事ヲ說キ國威ノ伸縮ヲ以テ念頭ニ措クモノニ至リテハ寥々晨星ノ如シ」である。散士は元來が一書生のことだから、徒手空拳、國家社會を稗益し難いのを知つて、「歐人ガ殖民政略ノ慾熱一時冷却スルニ乘ジ慷慨沈痛無事ニ苦ミ無聊ニ堪ヘザルノ志士ト與ニ南洋ニ遠航シ不毛ノ島嶼ニ到リ別ニ一乾坤ヲ開キ以テ遺利ヲ拾ハント欲ス」。是れが卽ち「內ニ慷慨不平ノ士ヲ減ジ外ニ有爲企業ノ徒ヲ增作シ以テ人心ヲ振起セント欲」するもので、「淸狂居士等ト謀リ議熟シ計定ル」、淸狂居士は卽ち馬場辰猪である。然るに「小人アリ讒誣シテ曰ク是レ不平ヲ抱キ無事ニ倦ムノ激徒ヲ驅リ帝國ノ版圖外ニ一地ヲ相シ不軌ヲ謀ル立脚ノ基礎ヲ定メ大ニ爲ス所アラント欲スルナリト探偵周索豫防嚴酷到ラザル所ナシ」。これでは如何とも施しやうがない、馬場大石等が爆裂藥購入交涉の嫌疑で逮捕されたのは恐らくこの前後であらう。「是ニ於テ同盟破レ志士散ズ散士痛慨策ヲ杖テ飄然東洋諸邦ヲ經歷セント欲ス」、東洋遊說は散士が在米時代からの素志である。然るに「發スル日アリ偶々、病痾再ビ發シ伊豆ノ溫泉熱海ニ浴」さゞるを得なくなつた。此の年十二月政府に大改革が行はれ、內閣官制を布いて行政整理を斷行し、一時人心を新にする勢ひがあつた。これが散士が熱海入浴中のことであらう。この改革で散士數年の知己たる谷干城が入閣して農商務大臣の椅子を占めた。谷は入閣前鳥尾得庵中將と共に軍事視察の洋行に出かけることになつてゐたが、大臣になつてこれが延びた、だが間もなく再びその洋行問題が決定したものと見える。谷から散士へ洋行の隨行を慫慂して來た。

海南古狂將軍書ヲ寄セテ曰ク明春將ニ歐米ニ遊ハントス足下相與ニ西征スルノ意ナキヤト散士固辭スルニ官情ニ意ナキヲ以テス友人來リ說テ曰ク吾子ガ常ニ現政府ヲ非難スル所ノモノハ內ニ强傲ニシテ外ニ弱媚ナルガ爲メノミ情實ノ弊多キガ爲ノミ苟且ノ政長ズルガ爲ノミ冗員ノ增スガ爲ノミ費用ノ加ハルガ爲ノミ今ヤ政府新ニ官制ヲ布キ大ニ改革ヲ行ヒ責任ノ歸スル所ヲ明カニシ政費ヲ省シ冗員ヲ去ル是レ足下ガ常ニ見ンコトヲ願フ所ノモノニアラズヤ徒ラニ空論壯語ヲ放テテ親ラ其責ニ任ゼザルハ經世ヲ志スモノ、深ク恥ヅル所ナラズヤ將軍初メ淸狂居士ヲ擧ゲテ與ニ手ヲ携ヘテ遊バントス居士小人ノ讒ニ遭ヒ不惻ノ變ニ罹リ今ヤ疑獄ニアリ將軍足下ヲ知ル足下義俠以テ自ラ任ズルノ志士豈己ヲ知ルモノ、爲ニ鞭ヲ執ルヲ厭ハンヤト（卷十、以上の引用句皆同卷）

こゝに於て、散士は意を飜して、谷の洋行に隨ふことに決し、十九年二月を以て農商務大臣祕書官に任ぜられた。無位の處士がかく一躍拔擢されるのは當時としては幾分世人の眼を欹てしめた感がなくもなかつたらう。谷自身西南役以來一種の人氣男であり、散士は又丁度「佳人之奇遇」によつて一時に文名を揚げたばかりのところであり、二人とも或る意味で天下に風采を想望せしめたものである。而かも谷は、散士の小說に對して、「嗟乎使此有用之才不能施之事業纔借筆墨以洩其志者抑誰之咎也」といつた、その「有用之才」が今や谷自身の識拔によつて股肱の任に就くことになつたので、大に期待の眼を見張らせたのである。然し此の洋行は全く世人の意外とする結果をもたらした、さうして散士の烱眼はその邊のことを多少豫期せぬでもなかつた。

散士の洋行は十九年三月から翌年の六月まで一年餘である。此の洋行については谷自身の洋行日記があつて可成り詳細に一行の消息が語られてゐる。後に散士も『佳人之奇遇』第五編以下にこれを取入れてゐるが、然し散士の語るところと谷の日記に多少記事の違ふところがある。散士のは事實に依るにせよ小說的構成にしたものゝことであるから、矢張り谷の日記を正しとすべきであらう。その行程は大體次の如くである。

十九年二月九日農商務大臣祕書官に任ぜられた散士は、二月二十日附で歐洲視察隨行を命ぜられ、三月十三日出發、これに先立つ四日、三月九日に散士は知友を鹿鳴館に招いて留別の宴を開いた。

柴四朗氏は一昨日鹿鳴館に於て朝野の紳士三十餘人を招きて歐行の留別宴を開かれたり顧ふに同氏が經濟學士社會學士としての朋友佳人奇遇の著者東海散士としての風流の朋國難以來辛酸を與にせられたる同鄕の朋友及び祕書官としての交際等其の交の甚だ多かる中にも此の別宴に列せられたる人々は最も懇親の朋友にてありければ卓上の演說も頗る盛にして一人了れば一人起ち莊重の言を以て行を送るあれば諧謔の語を以て別を慰むるありて實に近來になき快活の別宴なりき（十九年三月十一日、朝野新聞三七〇八號）

三月十三日出發、橫濱から乘船、同二十日香港着、此の時弟の五郎氏が面會に來て一緒に見物した。二十六日柴棍、二十九日シンガポール、四月三日錫蘭着、こゝで上陸して埃及の敗將アラビイ・パシヤを訪ね慷慨の談話を交した。十日アデン、十五日スヱズ着、谷將軍及び散士は、アラビイに會つてから埃及は是非一見したいと思つたのでこゝで上陸し、途中アラビイの新戰場を訪ひなどして十六日カイロ着、十七、十八兩日は見物、國力衰頽、外人跋扈の有樣を見てアラビイの擧兵も無理がないと感じた。二十日アレキサンドリア出帆、二十三日ネープルス、二十五日マルセイル着、こゝで歸國の西園寺公使に會つた。二十六日パリ入り、調査、見物、視察で六月十日迄ゐて、同十一日スウィスへ行き、バヴァリアを經て二十四日ウィンナ着、七月六日スタインを訪ねて種々農政上の實務について敎を乞ふことを約束し、先づハンガリイを先に視察するつもりで七日ブタスペトに向ひ、十五日ウィンナに歸着、この時は往復とも水路をとつたが實に好い風景であつて谷も散士も詩を作つてゐる。かくて七月二十六日から柴の通譯で正式にスタインの敎を受けた。八月十一日から三十一日まで谷將軍はロシア軍事視察に行つたが、散士はこれには隨行しなかつた。九月二日から又スタインの敎へを受けることになつたが、そのうち谷が健康を害したので（胃腸障害）、十四日

から有名なカルヽスバード溫泉へ行つて二十日ばかりゐた。鳥尾得庵中將とはパリで一緒になつて以來、相前後してゐたので、ウィンナでも又一緒になつてよく國事を論じた。十月十六日散士は鳥尾等と再度ブダペスト行を企てた、これは出來ればバルカンまで出るつもりであつたらしいが、然しコレラの流行でブダペストから引き歸して來た、此の間、谷將軍はスタインの忠告を聞くにつけ、又故國の歐化主義の狂態を聞くにつけ、深く決心するところがあり、歸朝後出すべき意見書の草稿を立案した（その主意はスタインからも贊成を得たものであつた）。十一月一日伯林行、十四日グナイストに會つたが、谷はこの人を大して重く見てゐない。十八、九日クルップ工場を視察して感心してゐる。十二月十日ウィンナに一旦歸り、土耳其行の支度をし、十三日ウィンナ出發、十五日ヲデッサにつき（ウィンナよりヲデッサへ行く途中ポーランドの舊都を通る）、船で土耳其に向ひ、二十日コンスタンチノープル着、二十三日は亞細亞土耳其に渡つて感慨に堪へぬものがあつた。三十一日土耳其帝に謁見、散士も同席した、オスマン・パシヤに會つて談話したのはこの時である。これで明治十九年は暮れた。

二十年は一月六日土耳其を發し、七日希臘のピレー（？）港につき、十二日アゼンスに入る、十三日希臘を離れてイタリイに向ふ。十四日ブリンヂッシ着、十六日ポンペイ見物、十八日ローマに入つたが、谷將軍がこゝで重い病氣にかゝつて（肺炎その他）三月二十五日までローマにゐた。二十六日ローマ發、ピサ・チュリンを經て又パリに入る、チュリンでは散士はこゝに隱栖してゐるハンガリイ愛國家コッスートに會つた。四月一日パリ着、同十六日ロンドン着、バァミンガム、マンチェスタアを經て三十日リバァプールを發し、米國に渡り、五月十日ニューヨーク入り、十五日ワシントン、十九日フィラデルフィヤ、二十六日シカゴ、三十一日サクラメントから桑港着、六月四日同港出帆二十三日橫濱へ無事歸着した。

始め伊藤總理大臣が谷を洋行させたのは、勿論政務取調の必要もあつたからであらうが、然し大體は此の樸實の古

武士的理屈家を文明開化の風に當てゝ軟化させ、これで内閣の歐化政策遂行を圓滿にする腹であつたことは事實であらう。然し結果はその逆となり、伊藤の豫期しないところに出た。谷は洋行中の見聞によつて益々その國家主義的意識を强め、スタインの敎へによつて眞に日本の政治制度に一大改革を加へ、自主獨立の力を强めるのでなければ國家の存亡も危いことを知つた。だから洋行中、内閣に政治外交刷新の意見書を出す決心をし、既にその草案を作つてゐた。これには散士の力が加はつてゐたに違ひない。兎もあれ、無事歸朝の挨拶の濟むか濟まぬ七月三日、谷はその意見書を伊藤總理の手に出した。これは伊藤にとつて、從つて政府にとつて實に靑天の霹靂であつた。谷の意見書の主眼は、井上馨の國辱的條約改正反對に置かれてあるが、その意見の要領は、斷然今日進行の條約改正を中止し「現政府ノ組織ヲ一變シ立憲公議ノ新政ヲ設立シ而シテ後外交ノ方針ヲ定メ上下一致内結外競ノ志操ヲ奬勵シ當局者ハ天皇陛下ノ聖意ヲ奉戴シ立法府ノ決議ニ基キ更ニ上下人民ノ輿論ニ據テ此條約改正ノ談判ヲ開キ更ニ内外ノ新聞演說ヲ利用シ外交ノ智術ヲ揮ヒ以テ是非ヲ歐米ノ公論ニ訴フベシ而シテ彼尙我要求ヲ聞カズシテ不正不理ノ擧動ヲ爲サバ正義ニ依リ正理ヲ履ミ斷然交ヲ其諸國ニ絕ツベキノミ」（『佳人之奇遇』卷十五、谷の本文はこれと字句に異同がある）といふにある。さうして更に條約改正を完成するため輿論の應援と兵備を十分にすることを痛論した。谷はこれに附加的に「國家の大要」として時事六條を陳べた。曰く情實の弊（政治弊害の根本は情實による、且つ陛下に累を及ぼす宮中と政府を分離せしめる要がある）、曰く内閣の弊（責任内閣を作り主義によりて離合するが肝要也）、曰く輕佻の弊（政費節減を令して土木交際に大金を擲ち、軍備に經費の不足をいひ、陛下以下國民迄心配す、然るに内部は歐化主義生活の驕奢驚くべきものがある、且つ外交學術等にも目下獨逸を利として獨逸にのみ倚賴するがこれも輕佻の一現象である）、曰く外交上の弊（平和主義は可なるも、裏面には堅固なる國家觀念あるを要す）、曰く行政の弊（官吏の無責任、過多、地方政務、警察行政、皆改正を要す）、曰く儉約（政費を省き、上流驕奢愼み、節儉して國力を養ふ

べし、皮相的文明をそのまゝ模して生活改良を行ふは不可）、曰く立憲政體（先づ準備として集會新聞條例を寛にし民意を通すべし、且つ萬事歐米に學ぶ政府がこの點のみ背馳するは不可也）、これである。（『谷干城遺稿』中にこの意見書の全文があるから、有志の人はこれに就いて一讀されたい）。

政府は無論これをこの儘受け容れようとはせぬ、總理の伊藤の如き、憤怒驚愕の餘り、谷を狂者とまで罵つた、谷は七月二十日參內して右の意見を明治天皇に奏上し、二十六日辭職を許され、故山に去つた（土方久元が後任）。

散士は勿論谷の此の擧については異體同心、腹心とも股肱ともいふべき身であるし、谷の辭職と共に直に農商務大臣祕書官を辭し、都門を去つて駿河興津の淸見寺に卜居し（一つは暑熱を避けたものである）、客を謝して暫時讀書と著作に抑へかねる胸を紛らした。（『東洋之佳人』、及び『佳人之奇遇』の第四編はこの間の著作である）。

谷と散士は素志を遂せずに去つたが、然しその擧は徒爾ではない、この政弊彈劾が世人に痛烈な刺戟を與へ、同志の士が響應して起ち、全日本的大運動となつた、而して條約改正は遂に無期延期となり、間もなく伊藤內閣一角は崩れたのである。谷は時代の英雄とされた、谷と進退を共にした散士も亦、一躍英雄視され、眞に「佳人之奇遇」中の人物といはれた。世人は爭つてその人となりを知らんことを求め、新聞は谷と散士の評傳を特別附錄として發刊した程であつた。（一）

谷の此の擧によつて數年沈睡してゐた政治界に再び風雲が捲き起つた。この風雲に乘じて起つたのが、天性のオポチュニスト後藤象二郎である。拔目ない後藤は、勿論散士をも幕下に招いだに違ひない。散士も亦、喜んで後藤の幕賓になつたかの如く見え、後藤の反政府運動の第一聲たる十月三日の芝三緣亭への招待には加はつてゐる。然し恐らく散士は單に後藤の乾兒となり、その尻馬に入つたり先棒を勤めたりするより反對に後藤を利用しようといふもつと大きな計畫をもつてゐたらしい。それは後藤中心の一大政黨を組織しようといふにあつた（二）、今少し具體的に推測

して見ると、後藤を中心に谷と板垣を左右翼にした反藩閥の大同團結的政黨を作らうとしたものらしい。散士はこの策を定めるや、これを胸に疊んで同志を全國に求めることになり、先づ東海道から、關西、四國、中國、九州へも漫遊する豫定で、十一月二日東京を發した。國友重章、その他が同行したのでも、此の行後藤側と一脈相通ずるものがあつたことを語つてゐる。

かくて散士は、靜岡、濱松、豐橋、名古屋、大垣、大津、京都、大阪、神戸と到るところで有志と會談し、神戸から船で高知に赴き、谷干城を訪ふた。十一月二十三日である。谷に對しては、散士はその胸中の策を打ち明けて相談したらしい。谷がこれに何と應じたかそれは分からない。然し谷の方には、後藤や板垣に對する關係には歷史もあることであり、散士が考へる程、三人の連衡が單純には行かぬことが分かつたらう、要するに谷は散士の考へる程巧く踊つてくれなかつたのである。散士は谷を訪問した結果、九州行は止め、陸路松山に出で、廣島に渡り、中國路を神戸に引返して、谷の出京を待ち合した。恐らく今一度谷を說いてその大政黨組織運動に引込まうといふつもりがあつたのであらう。十二月二十七日、谷はともかく神戸につき、散士と會つたが、散士の望んだ如く陸路東海道を下つて各地有志と會ふことはせず、海路直に東上した。散士も止むなくこれに隨つた。恐らく事の急に成し難いのを知つたことであらう。

こゝで散士の傳記の筆を一寸止めて、『佳人之奇遇』の第四編を語る順序であるが、その前に殆んど同時に書かれ、同時に世に出た『東洋之佳人』を片づけよう。

『東洋之佳人』は、前述の如く、散士辭職後興津の淸見寺に暑を避けて讀書してゐた時の著作で、本來をいへば卽興的作物である。その內容は、思想的には勿論『佳人之奇遇』と關連してゐるが、然しその他の點に於いては、佳人の

名が似通つてゐる以外、格別緊密に關連したものではない。

夏の一日、散士は漁舟を淸見潟に浮べ、風にまかせて三保の松原に向ふ、さうして松間の一丘、一老松の下に羽衣松の古碑を見、何となく感慨を催すうちに華胥に遊んで、夢に仙妃と逢ふ。仙妃は散士の爲めに伯良の故事を辯じ、羽衣の舞をまつて見せた後、散士に素願を聞いてもらつて「郎君ガ俠勇ノ勢援ヲ借リ以テ身家ノ沈淪ヲ救ヒ主家ヲ托セント」欲する。この仙妃は東天の帝の皇女に侍する身であつたが、ある事から皇女を度々忠諫したので、遂に逆鱗にふれて下界に追放されたのである。皇女の名は旭子といふ、才色淑德一も間然するところない深窓の佳人である。妙齡に及んで西家富豪の遊冶郎や東隣放逸の薄倖子弟が爭つて情を通はさうとするが、旭子はきかぬ、西方の貴公子なるものがあり、言葉巧みに旭子に通交の天理なるを說き、若しこれを拒めば天理を傷ける上暴威暴力で奪ふ者がないとも限らぬと威脅したので、旭子は先づこれに交際だけを許した。ところが、次第に深く交るにつれて、いつしか彼を厭ふ念が消えて愛慕の情となり、今は旭子の方から進んで公子に近づくことになつた。彼に近づいて見ると今更その邸宅服飾、飮食、音樂、實に心を驚かすものゝみが多い。旭子は急に自分の今迄の生活一切が公子のそれに及びもつかぬを恥ぢ、何もかも公子の眞似をすることになる。かくて淑德の佳人が一變して輕佻浮薄の人となり、日夜宴遊し、西家の陋習たる舞踏を演じて、公然男子と相戲れ、猥褻醜を極むるに至つた。かゝる生活を續けてゐるうちに旭子の祖先の積財は漸く公子の家に移つて影を殘さぬやうになり、旭子天性の美質も痕形がなく、身も疲れて肺患の徵を示して來た。そこで忠義な仙妃は旭子を諫言する、曰く人間の交際はたゞ眞情を貴ぶ、金銀珠玉盛粧艶飾は眞の交際には必要でないものだ、交際にこれを條件とするのは、皆利慾の心から出てゐる、且つ今日の勢ひ、公子の方は家を富す道が備へてゐるので、令孃の如き交際では到底太刀打ちが出來るわけがない。「願クハ令孃今ヨリ外形粧飾ノ費ヲ省キ力ヲ精神ノ培養ニ盡シ以テ身家ノ安全ヲ圖ル可シ然ラザレバ言フニ忍ビザルノ害ヲ生シテ扁鵲モ亦遂ニ其術

ヲ施ス所ナキニ至ラン」である。ところが旭子はこれを聞いて大に怒り、公子の恩情と親愛を說いて仙妃の諫を言下に却けてしまつた。さうして――

其後驕奢逸樂愈々益々甚シク更ニ樓舍ヲ築キ服裝ヲ飾リ一家ノ婢僕ヲシテ亦皆西家ノ風ニ摸セシメ相會シテ舞踏ヲ演ジ月ノ前庭ニ落ツルヲ知ラズ相合シテ骨牌賽球ノ輸贏ヲ爭ヒ日ノ西山ニ沒スルヲ忘ル而シテ旭孃精神漸ク衰ヒ身體日ニ虛弱ニ赴キ肺患正ニ發シテ形容既ニ枯槁タリ海棠雨ヲ帶ビ秋葉霜ニ染ムノ美ナキニ非ズト雖モ忽然暴風ノ起ルアラバ倏爾一夜散ジテ泥土ニ化セン寔ニ憐ム可キナリ抑彼ノ東家西隣ノ情郎ハ皆是レ犬羊ノ衣ヲ着ケテ豺狼ノ心ヲ掩フ者外戀着愛慕ヲ表シテ內實ニ婪心欲慮ヲ包藏シ主家ノ田園家財ヲ掠奪シテ而シテ後止マントスルニ外ナラズ而ルニ旭孃迷惑ノ甚シキ遂ニ之ヲ悟ラズ愈々紅粉ヲ粧ヒ以テ病患ノ面ニ顯ハルヽヲ隱シ美服ヲ着シ以テ身軀ノ衰弱肉落チ骨出ヅルヲ掩ヒ意ヲ枉ゲ志ヲ屈シ媚ヲ獻ジ愛ヲ呈シ唯其意ニ狠ルアラン事ヲ恐ル而シテ今ヤ四隣ノ少年皆其色衰ヘ財盡キ朝ニ東郎ニ從ヒ夕ニ西郎ニ隨ヒ情薄クシテ實固カラザルヲ見漸ク之ヲ厭ヒ之ヲ惡ミ借ス所ノ財貨ヲ促シ居ル所ノ家屋ヲ奪ハントスルノ狀アリ嗚呼事既ニ此ノ如シ主家ノ存亡亦計ル可カラザルナリ云々(十三、十四丁)

散士は仙妃の言葉に大に感動し、仙妃の主家とその姓を問ふ、仙妃はそれに答へず、たゞ一緒においでなさいといつたので散士が身を起す、そこでこの夢が破れる。

以上の梗概で知られる如く、この作は、この時新に書かれたものではなく、寧ろ書き直したといふべきものである。この一篇の根本趣向は前に揭げた明治九年の「東洋美人ノ歎」と全然同じものであり、たゞこれを擴大し、鋪長し、强化してやゝ小說に近いものにしたといふだけである。仙妃の述懷以後の部分が「美人ノ歎」に相當し、これに構想を與へ、仙妃と散士とを扱かつて小說の形式を整へたに過ぎない。旭子は「美人ノ歎」中の靖和即ち日本のこと仙妃は散士乃至散士の同志等の分身である。西家は淸國、東隣は米國、西方の公子は歐洲諸國を指すことも、「美人ノ

同じ、國家を蔑るに至るといふ主旨も、朝の醉漢は是ぞ世の人に聳を欲しばし、東海散士はおうぞ等を蔑して歐の不自由しんで、蹴をこれをひやす(又非歐化主義を高唱して職を抛つた當座であつただけ)、「東洋之佳人」の方がずつと強い切實な感情をもつてゐることが分かる。

ここのへ書くはまた違ふ

歎」に同じ、旭子が西方公子に誘惑され、日夜これを慕ひこれを模して身家を亡ぼさんとするに至るといふ主旨も同じである。たゞ社會的には歐化の弊害が此の時絶頂であつたゞけ（又非歐化主義を高唱して職を抛つた當座であつただけ）、「東洋之佳人」の方がずつと強い切實な感情をもつてゐることが分かる。

引き續いて『佳人之奇遇』第四編を語らう。

（第四編）は明治十五年の夏の出來事であるが、その中の人物の物語りは遙か古い年代を辿つてゐる。

散士と紅蓮は交情益々密に入るとき、幽蘭の生存を知つて驚くが、散士が幽蘭を思ふ情が紅蓮よりも深いと分つても、自然の機會と環境か二人を離さうとはしない。一日、女客の來訪がある。女客は二人の態度に何やら點頭するものゝ如く、紅蓮に對して意中の人と山水に悠遊して友誼を思はぬと責める。紅蓮散士冷然女客の言を取り合はぬので女客は面罵一番して立ち去らうとする。紅蓮は女客を探偵かと疑ひ、非常の決心を見せる。女客は金指環を出して紅蓮に示すと、紅蓮は大に驚く、これは幽蘭が海に沈む時猶ほ指に穿めてゐたものだからである。そこで始めて心とけて、女客に對して幽蘭の消息を問ふ。女客は、二佳人范卿とカプレラから同船して同じく難船に會つたのである。

女客は語る、難船の時幽將軍父子と女客とが小舟に殘され、海中に漂流するうち、希臘の郵船に救はれ、アレキサンドリア港に上陸した。この時はもう埃及兵と英國艦隊とは睨み合つて火蓋を切るばかりになつてゐたが、遂に六月の變となつた。變起つて間もなく、幽將軍のことをアラビイ・パシヤに告げるものがあつたので、パシヤは幽將軍を訪ひ、軍師にした。彼の有名な檄文は實はアラビイの爲めに幽將軍が草したのである。だが折角軍師に迎へたものゝアラビイは將軍を用ひることが出來なかつた。埃及人は擧兵の名を回教回復に藉りようとした、將軍はこれを排し、宗教を旗幟とするのは好んで死地につくものである、宜しく國權恢復、獨立自由を標示して起たなくてはならぬとした。アラビイは强いて將軍の言に從つたが、然し讒者の言もあつて遲疑してゐる。又將軍はアラビイの爲めに大策を

建て、カイロ、アレキサンドリア等の都市を棄て深く內地に引いて敵を疲らせる方略をすゝめるが、これもアラビイの左右から却けられる。將軍は怏々として戰死を分とし、いよいよ女客や幽蘭を去らしめんとしたが、幽蘭は去ることをきかず、女客は父の許に還ることになる。還る時將軍はドン・カルロスへ奉ずる書を托し、又幽蘭は、紅蓮范卿二人の墓を建てんことを賴み、別に金指環を拔いて餞し、東海散士に逢つたときこの顚末を語つてくれるやう乞うた。女客はイタリイなる父に會ひ、父の忠言で再びかく蹄水の舊居を尋ねて二人に會へたわけである。

紅蓮と散士は女客の厚意を謝した。散士は女客が初めから自分の名を知つてゐるのを怪んで尋ねると、かつてフランクリン墓畔にコッシユースコの昔語りをした、一士人が女客の父で、女客も物蔭で二人の物語を聞いてゐたと答へる。散士は改めて女客の父の名を問ふて、彼の士人は卽ちハンガリイの名士ルイス・コッスートであり、女客はその女コッスート夫人であると知り、大に驚いた。

食後、散士は月影の淸きに乘じ舟遊をしようといふ、夫人は笑つて辭する、自分は年長で且つ不美人だからといふのであるが、これを機つかけに、一場の風流な美人の論が始まる。散士は二女の問ひに應じ、博引傍證美人に年齡のないといふ說を主張する、いはゞ國事慷慨のいきぬきに紅樓で三杯傾ける意氣である。風流な美人論が終つて三人舟遊する。紅蓮は夫人がコッスートの女なるを聞き、又亡國忠臣の一人を同志に得たことを喜び、夫人に迫つてコッスートがハンガリイの爲めに奮鬪した事歷を物語らせる。こゝで筆は一轉して近世ハンガリイ亡國史に入り、散士得意の文字が疊出する。

ハンガリイの亡國史とコッスートの奮鬪について語る散士の筆は光焰陸離たるものがあり、且つ絮々と說いて倦まぬものがある、然し大體は周知の(今日では)史實に據つたものであるだけに、こゝでその梗概を繰返すことはしない。たゞ注意すべきは、或はオーストリア政府の政策を攻擊するに托し、或はメッテルニヒの反動政治を批評するに

喩へ、コッスートの愛國經綸を賞揚するに擬して、屢々わが國の當路者を諷規し、或は當時の政狀の間接描寫を試み、散士の胸中に鬱屈する熱烈なものを吐露してゐる點々である。此等の諸點を通じて散士は可成り手強くその政治的イデオロギイを示してゐる。

オーストリア帝ヨセフ二世は、大にハンガリイに暴壓を加へ、地方自治の權を奪ひ、民選の吏員、民選の法官を廢し、陪審の法を止め、言論集會の自由を禁じ、甚しきは國家獨立の骨髓たる國語を廢して外國語たる獨逸語を用ひしめる令を發した。散士はこれを論じて曰く――

嗚呼數百年來固有ノ風俗習慣タル衣食住ノ一事ヲ改良セントスルニモ先ヅ豫メ前途國家ニ影響スル經濟及ビ人民生計ノ度ヲ斟酌シテ徐ニ之ヲ施行スベキモノニシテ僅々數年ノ能ク改良スベキモノナランヤ然ルニ俄然一國ノ國語ヲ廢シ外國語ヲ以テ之ヲ實地ニ應用セシメントスル無智朦昧輕佻浮薄豈少シク國ヲ愛シ事理ヲ解スルモノヽ爲スベキ者ナランヤ（卷八、十三丁裏、十四丁表）

これは何も遠く數十年昔のハンガリイの事を論じてゐるのではない、實は近く二十年當時の歐化主義者所謂改良主義者に當てつけたもので、一部論者の英語を國語とする論を微塵に打倒し、兼ねて條約改正の外人法官問題のあたりにも觸れたものである。此の時のハンガリイ志士の上書といふものも全文載つてゐるが、これが又實に痛烈に皇帝左右の大官が皇帝と人民の中間にゐて聖明を壅蔽することを彈劾してゐる。元來は譯文であらうが大分散士の感情的潤飾が加はつてゐるであらう。

メッテルニヒ公の政略を咎彈する一段に至つて散士の筆は眞に風霜の趣を帶びる、これは實にメッテルニヒに托して當時の伊藤井上以下廟堂諸公の所行を論難したものに外ならぬからである。

滅延日苦人ト爲リ姦才ニ長ズレドモ節操ナク佞辯ニ巧ナレドモ國家ノ大計ヲ知ラズ已レ一旦政權ヲ握ルニ至リ漸々

自主自由ノ根ヲ殺ギ抑壓暴制ノ令ヲ布キ云々（中略）是ヨリ賄賂公行諂諛佞倖ノ小人漫ニ爵祿ヲ享ク節操忠義ノ士皆廟堂ヲ退ケラル商工ノ大業悉ク滅廷日苦ノ黨與ニ握リ不正ノ利ヲ貪リ不義ノ益ヲ占メ日夜蓄財ニ汲々シテ別莊ヲ風光明媚ノ勝地ニ營ミ酒ニ耽リ色ヲ貪リ良家ノ子女ニ戯レ僚屬ノ妻妾ヲ姦シ花柳ノ賤婦ヲ愛シ政令ノ機密ヲ寵商ニ通ジ賭博萬金以テ自ラ豪ナリト稱ス云々（卷八、二十丁表――二十一丁表）

メッテルニヒに果してかゝる醜行があつたかなかつたか、それは散士の深く問ふところではない、この匕首の如き痛烈な言辭を胸に擬されたのは何人か、知る人ぞ知るである。語はまだ續く、――

（前略）故ニ務メテ容儀ヲ作リ言語ヲ曖昧ニシ一ニ籠絡主義ニ據リ（中略）榮官以テ不平ノ士ヲ籠絡シ諂諛以テ外人ヲ籠絡シ宮殿ヲ美ニシ衣服ヲ壯ニシ以テ萬人ヲ籠絡セントス是ニ於テ費用日ニ加ハリ俸祿能ク支フ可カラズ因テ外交ヲ名トシ交際ヲ名トシ更ニ探偵費ト稱シ〇〇費ト稱シ百萬ノ金額ヲ模稜ノ中ニ濫費スルモ彈正御史ノ官ナク議院糺彈ノ實權ナク滔々タル三千餘萬ノ生靈酷租ヲ納メ苛斂ニ苦ミ田ヲ賣リ家ヲ失フモノ毎年數萬人官府強テ之ガ説ヲ爲シテ曰ク之人民ノ奢侈ト怠惰ノ致ス所ナリト（中略）時ニ猶ホ國家中興ノ老將多シ滅廷日苦威望爭ヒ難キヲ知リ且ツ姦佞ノ才ヲ以テ上位ニアルモ元ト汗馬ノ勞ナク一朝事アルノ日政柄ヲ失ハン事ヲ恐レ一策ヲ案ジ外交ヲ名トシ諂諛主義ヲ以テ強國ニ依賴シ警察探偵ヲ嚴ニシ外交祕密ヲ主トシ假令國權ヲ傷ケ國威ヲ損ズルモ太平無事ヲ維持セバ老將ハ遂ニ無用ノ人タルヤ明ナリ乃初メテ枕ヲ高ウスル事ヲ得ント是ニ於テ舞踏遊樂ヲ奬勵シ唯元氣ヲ謳歌ノ中ニ消靡シ將士ヲ醉夢ノ間ニ昏倒セシメ人民ヲ貧究ノ淵ニ沈メテ他事ヲ顧ミルニ暇ナカラシメ而シテ已レ黨與ト共ニ萬金ヲ積ミ生涯ヲ安樂放逸ノ域ニ送ラントスルモ天其レ之ヲ許サンヤ人豈之ヲ許サンヤ（卷八、二十一丁――二十二丁）。

此の一段の欄外評者は「余讀至此。不覺大呼曰。似哉似哉何其相似之甚也」云々と再三繰返してゐるが、今日の吾等

が讀んでさへ全くさう感ずる。これをメッテルニヒの代りに伊藤一派の諸公をもつて來、中興の老將云々を谷、三浦曾我、鳥尾その他の將軍連と置き換へて讀めば、これは實にこのまゝで二十年前後の廟堂諸公の政略の活寫となるではないか。

進んでコッスートの功業奮鬪を叙し、國政改革の五綱領を論ずるに及んで、散士の憂憤的熱情は頂點に達する。コッスートは議事錄を刊行して、先づ政治の實際を人民に知らしめた、政府が籠絡しようとしたが從はない、新聞を發行し、改進自由立憲公議の政治を主張し、貴族の專橫を攻撃し、又多年の宿望たる國語を回復した、國家の實力を養ふために經濟の策を講じ、工商の權の外人に移るを防ぎ、保護政策を執り、國產獎勵を主義とした。これ實に散士が理想として當時に行はんと欲するところである。此等の理想は偶々もつて政府の施設に對抗する結果となり、政府又その黨與をすぐつてこれに當らうとする。散士は政府黨の爲すところを述べて曰く——

此時政府黨ハ貴族ヲ以テ魁首ト爲シ節操ニ乏ク權臣ニ賴テ榮達ヲ求ムル者浮薄ナル記者ノ金慾ノ爲メニ使用セラル者戇直ノ士當時ノ事情ニ暗キ者相集リテ一黨ヲ爲ス其唱道スル所ニ曰ク古來ヨリ聖君ノ功德ヲ垂ル丶所以ノモノハ皆專制ノ治代ニ非ザルハナシ曰ク立憲公議ノ政ハ民政ノ楷梯ニテ天威ヲ蔑如スルモノナリ曰ク舊ヲ改メ新ニ就クハ國家ノ秩序ヲ亂ル者ナリ（中略）曰ク責任內閣ハ帝王ノ主權ヲ割ク者ナリ曰ク內閣ノ更迭ハ國本動搖ノ萠ナリ國是定マラザルノ證ナリト一意政府ノ意ヲ遵奉スルヲ以テ國民ノ義務ト爲シ嚴酷民ニ臨ミ鐵椎民ヲ御スルヲ以テ王家ノ重キヲ加フル者ト爲シ改進自由ノ輿論ヲ撲滅スルヲ以テ王家ノ侮ヲ禦グ者ト爲シ集會演說ノ自由ハ處士橫議國安ヲ妨害スル者ト爲シ新聞出版ノ自由ハ讒謗煽激社界ヲ紊亂スル者ト爲ス（卷八、三十丁裏——三十一丁表）

此の引用の一段だけを讀めば、實に遠い昔の異國の事實とは思へない、散士眼前の實勢かと思へる、小松原末松の一輩、福地丸山の連中をそれぞれのところに當てはめて讀むと、散士の意は昔を論ずるよりも今を寫すにあるのではな

いかと疑はれる。一八四八年パリ革命の報が墺匈國に達するや、コッスートは議院に向つて國政改革の機の來たことを警告し、改革の五綱領を述べた、曰く――

第一　君側ヲ清ム可シ
第二　責任內閣ヲ組織ス可シ
第三　中央集權ノ弊ヲ去ル可シ
第四　財政ヲシテ當ヲ得シム可シ
第五　情實ノ政治ヲ止ム可シ

この各綱にはそれぞれ敷衍した說明があるが今悉く引用すべき限りでもない、又一々讀まずとも何を意味するか解するを難んじない、將たその說明の語が悉くコッスートの口から出たものか散士の潤飾したものかも深く尋ねるを要しない。吾等はたゞ此のコッスートの革政五綱領が、當時の日本の現狀にそのまゝ當て嵌るべきものたるを認めれば、それで可い。この五綱領は實に、谷干城の上書した意見書の時事六條と相表裏するものである、而かも谷の上書には種々な事情による迂餘齒痒ひ語句があるが、この綱領の方は小說といふカムフラージュを利用してゐるだけ、その感情を十二分に迸散させてゐる。殊に次の一說の如きはコッスートの言、或は衆議員の言として述べられてゐるが、事實は散士が時の政府當局に對して投げつけた一種痛烈な癇癪玉に外ならぬであらう。

嗚呼廟堂ノ諸公歌謠踏太平ヲ裝飾シ日又一日苟且安ヲ偸ミ外ハ隣邦ノ輕侮ヲ招キ國威漸ク衰ヘ內ハ威權ヲ弄シテ郵便ノ公權ヲ破リテ私信ヲ開封シ忠臣義士ヲ疑忌シ志士ヲ追放シ論客ヲ抑壓シ蒼生塗炭ニ苦ミ國本殆ンド盡ク是ノ時ニ當リ私心ヲ捨テ公明ヲ主トシテ公議ニ訴ヘ公議輿論ヲ以テ內閣組織ヲ一變シ無用ノ官吏ヲ掃滌シ不急ノ土木ヲ廢シ政費ヲ減ジテ稅斂ヲ薄ウシ以テ生民ヲ休養スルニ非ズンバ國勢ヲ興復セン事萬望ム可カラザルナリ（中略）今

日ノ內閣ハ情實ニ成ル者ナリ國權ヲ傷ケ國威ヲ損ズルモ位置ヲ保ツガ爲メニ徒ニ平和ヲ唱フル者ナリ現時ノ大宰相ハ巧言令色反復表裡ニシテ大臣ノ風ナキ者ナリ弊政更革ノ責メ吾輩ニ在リ宜ク內閣組織ヲ一變シ官吏糺彈ノ權ヲ議院ニ提リ自由出版ヲ許シ集會演說ノ條例ヲ寬ニシ賦稅ヲ輕クシ休養ヲ計リ以テ外敵國ノ侮リヲ禦ギ內蕭墻ノ禍ヲ防グベシ云々（卷八、三十五丁表――三十六丁表）

此段の欄外評者が又々「似哉似哉何其相似之甚也」を繰返してゐるのは、當然である。

以上は「佳人之奇遇」第四編に現れた東海散士の政治的イデオロギイであるが、これを前三編までのものに比すると、國權伸張獨立維持の根本思想は勿論變つてゐないが、その對象なり方面なりに、多少の變化があるやに認められる。これは、前三編の時は、專ら國外から日本を觀察し、國民全體を對象として國家の危機を叫んだものであるが、四編のは、既に國內に在つて政治の實狀を見、主として政府を對象として內政改革（國權獨立の前提として）を促したものである。既に故國政治の現勢を認識してゐるから、それに基いて諷規警告攻擊を試み、前諸編のやうに（日本からいへば）いさゝか理想的に過ぎる悲憤の淚を繰返しはしない。從つて感慨の發揚が前諸編程華々しくはないが、何やら深酷切實なるものがこもつて來る。然しこの點で切實なものが多くなるだけ創作的分子が少なくなつて來るから、小說的興味は次第に薄れて來る。

想像を許すならば、この第四編は根本は勿論米國時代の初案とさう變るまいが、コッスートをこれ程徹底的に利用しようといふ工夫は洋行後考へついたものゝやうに思ふ（第二編にフランクリン墓畔の一士人が出るが、あれをコッスートにしてこの物語に取入れる考へが最初からあつたか何うか）。

プロツトの上からは格別いふところがない、たゞハンガリイ亡國史に餘り多く頁を割いたのは不均衡の謗りを免れぬ。平板で構成のないのは前三編と同じ。コッスート夫人の來訪、美人論、幽蘭の消息などがあるので僅に小說らし

い體裁を失はずにゐるが、單にプロットだけとして見れば餘りに藝がないものである。それにハンガリイが第五編へ連絡するのであるから、何やら中途半端な感じがある。

人物はコッスート夫人が先づ實在的人物らしい感じを與へるが、然し本質的に幽蘭紅蓮等とさう劃然區別される個性が出てゐるわけではない、幾分世故に長けたらしい言動があるのみ。紅蓮は益々その大膽な底氣味惡い一面を示すが、散士との關係がいつとはなく深まり、幽蘭に對して嫉妬めいた氣持を動かすところは面白い、此の編をして小說らしく讀ませるのは紅蓮のかゝる氣持と散士の風流美人論があるからである。散士は全く受身であるが、紅蓮に對する心の動きは一寸滲み出てゐる。

テクニクの上からはかく餘り語るべきものはない。たゞ熱情だけは依然前三編に減じてゐない氣がする。

註（一）即ち繪入自由新聞、明治二十年九月二十五日「東海散士詳傳」

註（二）明治二十三年六月十七日國民新聞「東海散士の近狀」

六　明治二十一年――二十四年。『佳人之奇遇』五編

大政黨組織の策が急には實現し難いと知つた散士は、歸後直ちに熱海に隱れ、二十一年の三月に及ぶまで出なかつた。三月出京、四月には交詢社の常議員になつてゐる、三菱、及び慶應出身の人々と知人が多いので、こゝに出入してゐたものらしい。此の月東京電報の發刊と共にその客員といふものになつた。四月の末に及んで後藤はいよいよ大遊說の小手調べとして、その幕賓たる菅了法、瀧本誠一、安岡雄吉等と會津若松の東北七州有志懇親會に臨席したが（二十二日）この時散士も同行した。越えて六月五日東京を出發、海路四日市に出で、伊勢伊賀大和を經て京阪の地方に遊んだが、勿論政治的意味のあるものと見て可なるべく、後藤と何等か默契があつたのではなからうか。京阪か

ら去年果さなかつた九州地方へも赴く筈であつたが、偶々大阪商業會議所から同會議所の改良を托され、政治家をもつて自任する散士は再三辭退したものゝ、先方の懇請もだし難く、遂に八月一日から顧問となつた。且つ此機會に、大阪では由緒ある大阪日報が經營不振で七月以來休刊してゐたので、散士を主筆としてこれをも續刊する計畫が決した。かくて暫時足を大阪に止めたが、折柄高島炭坑の坑夫虐待問題が起つたので、散士はそれを調査することを思ひ立ち中國四國の諸鑛山を視察の上長崎に渡り、高島炭坑について具にその實況を視察して、九月六日一旦歸京した。（これ等は散士と關係ある岩崎家の持山である。）此の間後藤は東北遊說の壯擧を試み、到るところ國家の危急存亡と人民の大同團結を說いて、多大の成功を得、政府當路を震駭させた。大阪でも有志の士が奮起してこれに應じ、關西と九州と合して關西の大同團結を作つた。

散士は十月二十二日更めて大阪に向つたが、大阪日報續刊の計畫を立て、これを大阪每日新聞と改題して翌十一月の二十日を以て續刊した。主旨は大阪府下の商工業の發達改良を主眼に政治論を加味したもので、散士を主筆に竹內正志、門田正經、高山圭三、宮崎三昧等がゐた。（金は藤田傳三郞、黛松房次郞、玉手弘道、松本重太郞等が出したものである。）だが此の新聞は最初から無理があつて衝突の種が含まれてゐた。元來大阪では紳商派と有志派と別れて事每にいがみ合つてゐたのだが、この新聞は紳商派の新聞であるのに、執筆者は散士を始め竹內、門田、何れもが有志派乃至これに近い連中だつたからである。

これより先き散士の盟友馬場は十九年出獄後（散士洋行中）大石と共に米國に去つて海の彼方から日本政治改革の必要を痛論してゐたが、此の年十一月一日遂にフィラデルフィヤで病歿した。

散士は大阪で更に「經世評論」なる政治雜誌を發行した（十二月七日第一號）。これは、每日新聞が存分に政治を論じられぬところから出したもので、主筆は池邊吉太郞であつた。なほ此の年の著として、散士は『河野磐州傳』（二冊）

を書いてゐる。十二月四日折から高知から上京の谷將軍と會つた。谷はこの頃までには後藤の大同運動の性質を理解し、これを默認した形となつてゐたらしい。後藤は十二月、東海北陸の遊說に向ひ、二十二年一月歸京してその政治的意氣の益々旺盛なるを示した、豫定では、二十二年には京阪地方にも遊び、大會を開き、山陽山陰より九州にも遊ぶことになつて居り、散士等もその心組みでゐた。

二十二年一月散士は熊本の九州日報の一千號祝典に參加する旁々、九州各地方に遊び、土地の有志と接し、談論を交へて月の終に歸阪したが、後藤の豫定と照合して何等か連絡があるかに思はしめる。熊本國權黨の名士、佐々友房(鵬洲)と親しくなつたのは、この時である。此の時の見聞を彼は「九州政黨の大勢」と題して經世評論及び大坂每日新聞に發表した。

此の年二月十一日は不磨の大典たる憲法發布式の擧行される日である、この盛儀を拜すべく散士は二月初旬匆遑上京した。盛儀が終つて谷一派の機關紙日本新聞の發刊があり、且つ政治上の用事が種々あつたので、三月半ば過ぎ漸く歸阪した。この間散士は谷と相談して明年の國會議員選擧には必ず候補に立つ決心をし、今から資格をつくつて置くことにした。だが何よりも意外に思つたのは、あれ程まで信じてゐた大同團結主義の本山たる危急存亡伯後藤が、三月飜然團結を見棄てゝ黑田內閣の遞信大臣となつたことである。散士の計畫と希望が大きかつたゞけに、內心の喫驚と落膽も甚だ大きかつたらうと思ふ。散士は早晚大同團結が分裂することを覺悟した。

散士は在京中狂犬(眞ものゝ)の襲ふところとなつて足を傷つけた、これが原因で多少身心違和を覺えたので、三月二十日一度歸阪し、直ちに有馬の溫泉に入浴した(高橋太華同行)。さうして違和が癒るに及んで又直ちに上京した(四月十六日)。それと同時に大阪每日新聞に對して辭意を表明した。理由は病弱と政治上東京を離れかねるといふのであつたか、實は最初豫期された如く、大阪每日の株主たる有臭的縉紳連との衝突から出てゐるのである。だが大阪

方にも具眼の士があり、却て散士の辭意を入れず一と月ばかり懸案のまゝになつてゐたが、遂に都新聞の渡邊治が主筆になることによつて納まつた。散士の正式の退社は五月十七日附となつてゐる、(退社の際に甚だ性惡な妨碍をして去つたかの如く傳はつて居り、事實さう書いた文獻もあるが(一)、それはたゞ感情を誇張しての想像話で、表面は尋常に散士起草の退社の辭を出してゐる、但し散士に殉する意味で竹內正志等が連袂退社したことは事實であるが、これは散士が大阪を去つて後の出來事である)。

散士が四月十六日急いで上京したのは、二十日米澤に於ける東北十五州有志懇親會に列して、昨年の約を果し、且つ故郷の政況に接する爲めであつた。かくて上京早々米澤に向つたが、殘雪がまだ深いのと病氣になつたので、途中から引返して臨席せずに終つた。だが會津方面でもこの頃までにはやゝ大同主義に傾く人々が出て來、散士をもつて議員候補に決する說が有力になつて來た、これは兄の柴五三郎氏の努力も與へてゐたことであらう。尙ほ散士の歸京を機に大同派では散士をして正式に加入せしめんとして勸誘に來たが、散士は自重して正式には加入せず、陰で力を添へるといふことにした。尤も谷等の慫慂で日本新聞の社友とだけはなつた。さうして散士の豫想の如く大同派が分裂するや、散士は谷、淺野（長勳侯）、佐々、福富（孝季）等と相談して、徐ろに同志を集めて來るべき變動に備へることにした。つまり能ふべくば後藤の跡に谷を据え、谷中心の一政黨を作らうとしたものであつた。

五月散士は、谷及び佐々友房と手を携へて會津に遊んだ、これは今述べた如く谷を政治運動に引込む腹と散士自身の選擧運動の先驅といふ意味と兩樣あつたのであらう。(二十一日出發、二十三日若松懇親會)。歸路福島で谷と別れた散士は、佐々を案內して越後方面へも遊ぶ筈で庄內まで行つたが、折節『佳人之奇遇』の版權侵害の訴訟が起つたので、六月半急いで散士だけ歸京した。佐々はそのまゝ漫遊をつゞけて新潟縣下に及んだのである。

此の時端なくも起つたのが新な條約改正問題である。時の外務大臣大隈重信は井上馨の後を受けて、條約改正に大

に努めた、だが功を急ぐ餘り一二の點で國權侵害と思惟された條件が伴なつてゐたので、外國新聞によつて條約內容が漏れるや、大に全國志士の不滿を買ひ、これの反對から非條約改正運動が猛然と起つた、勿論政府內にもこれが反對者は少くなかつた。此の時民間運動の中心に立つたのは大同派、日本人社派、大同協和會派等五團體であつたが、就中痛烈な活躍をしたのは、谷、三浦、淺野その他の日本人社派（後に日本倶樂部派）が多かつた。散士は谷三浦等を第一線に立てゝ熱心に奔走した（此の時の中止運動は必らずしも純愛國的なものゝみには限らずこれを利用する野心家もあつた、然しその邊のことはこゝに語つてゐる餘裕がない）。

散士は平生よく病氣をした、これは『佳人之奇遇』を讀んでも分るが、この時（八月）又々病氣をして暫時熱海に退いた。恐らく散士の體力はその激しい政治的活動に堪えきれなかつたものであらう。

九月出京した散士は谷に向つて運動促進のため機關紙をつくらうと提議したが、谷は何れとも答へなかつた。然し谷や散士やの反對運動が意外の出來事で割合容易に目的を達することになつた。それは十月十八日の大隈外相暗殺未遂（來島恒喜）の事件で、これで政府が總辭職をし、條約改正が中止されたからである。

この年秋から冬へかけて散士は閑を窃んで『埃及近世史』を書き、十一月出版した。この書も、久し振りでの散士の著作であり、又內容が埃及亡國を例にとつた國權伸張國粹保存主義の高唱であり、いはゞ『佳人之奇遇』の一變形乃至横枝とも見られるので、可成り歡迎された。

散士は此の年十一月會津に赴き、更に仙臺地方に遊び十二月に入つて歸つた。政治上の目的があつたことはいふまでもあるまい。

始め後藤の入閣と共に大同團結は分裂したことは既記の如くであるが、條約改正反對の運動が起るに及んで、一時歩調を一致させた、然し決してその各々の主張を棄てゝ歩み寄つたものではない、その爲め條約中止が明白となり五

團體が萬歳聲裡に解散するや、直ちに以前の對立狀態に返り、それが進んで明白に敵對狀態とまでなつた。こゝに於いて、散士等の考へてゐたらしい谷を中心に民間黨大合同の組織といふことも實現が不能になつて、散士は政黨組織に再度幻滅を感じた。十二月二十五日、「日本派」の面々、谷、三浦、淺野、杉浦、高橋、中村、古莊、國友(重章)、國府寺(新作)、千頭(淸臣)、宮崎、福富(孝季)、陸(實)及び散士等が集まり、國權主義者の結束について相談したが重大問題につき、熟議の上來る一月頃までに決定しようと申合せただけで終つた。事實は種々の事情で「日本」派の人々の間にも一致し難い感情の溝が出來てゐたのである(二)。散士は此の頃から次第に政治社會、政治運動から遠退くやうになつた、さうして肝心な二十三年をよそにして、讀書と筆硯に耽る時が多くなつた。勿論東亞振興の理想が燃えてゐる、國權伸張の經綸を棄てたのではない、だが感情のもつれが歷史的なものになつた烈しい政黨間の私爭に對して、いはゞ飛入りの素人たる散士が如何に大同を叫んだとて何う出來よう。散士が、匙を投げた形で讀書と著述に隱れようとしたのも當然である。且つ又、先に散士を議員候補とするに傾いた故鄕の政況も先輩山川浩(今は少將)の出馬によつて一變し、このまゝではこの尊敬すべき先輩と血の出るやうな爭ひをしなくてはならぬ、これは勿論散士の本意ではない、そこですでに心境の變化を來してゐた散士は、その選擧區なる會津協會の人々に書面を送つて議員立候補を辭した。かうして本來なら散士生涯中最も華々しい最も多事多忙なるべき明治二十三年は、散士にとつて殆んど空白な年となつた。他の同士が銳意選擧準備をしてゐる間に、散士は『佳人之奇遇』の完成に努めた。又熱海の地を愛し、そこに小廬を營んだのも二十三年から四年にかけてのことであらう。かうして散士は當世に意なきを示した、勿論東亞問題は夢寐懷に忘れ得ぬところであり、從つて東邦協會の出現(二十四年)には力を添へた、然しこれとても政黨組織に奔走した時程の熱意が見えてゐない。なほ二十四年の消息として、散士が朝鮮漫遊を思ひ立つたことが傳はつてゐるが(三)、これは同年には遂に實現されずに終つたものらしい。だがこの消息も散士の東亞問題に

對する關心の現れとして認むべきであらう。

『佳人之奇遇』第五編（二十四年十二月刊）に移る。

第四編の二十一年刊行に比すると、第五編の二十四年刊行は、少し間が空きすぎるが、これを說明する爲めかいなか、散士は第五編に特別な序文をつけてゐる。これは第五編の成立なりその性質なりを知るに必要なものであるから先づこれから語らう。

散士は先づ『佳人之奇遇』が人氣に投じたのを謝し、後編の今迄に出なかつた理由（再ビ歐米ニ西征セシヨリ國事ニ奔走シ塵俗ニ牽連シ云々）、著書の容易でないことを述べてゐる。――

徐ニ首ヲ回シテ顧レバ第一篇ヲ出セシヨリ以テ今日ニ至ルマデ已ニ六星霜而シテ僅ニ十卷餘ノ書ヲ著ス六星霜ノ長日月ヲ費ス是レ豈厚意ニ報ユルモノナランヤ蓋遷延此ニ至リシモノハ何ゾヤ出版ノ自由ヲ得ザルニ因ルノミ云々

實に出版の自由がない時代に此の種の作物を公にするのは並々ならぬ苦心を要する。

抑初篇ヲ公ニスルニ當リ出版ノ自由ヲ得ザルガ爲ニ稿ヲ更ムルコト十餘回爾來法規ノアルアリテ每ニ思フ所ノ半ヲモ書スルヲ得ズ稿成リテ之ヲ剞劂ニ附スルニ及ビテ更ニ又是ヲ毀チテ稿ヲ删除スルガ如キ剞劂全ク工ヲ終ヘテ塗抹セザルベカラザルノ不運ニ遭遇スルガ如キ每卷皆殆ンド然ラザルハナシ且歐人ノ植民策ヨリ東邦ノ形勢ヲ說クノ處ノ如キ事勢到底出版ノ自由ヲ與ヘズ是ニ於テ慨然數十葉ヲ裂キ硯ヲ焚キ筆ニ茲ニ絕ントセリ

全くこの通りであらう、だが如何に苦心を要するからとて、こゝで中絕しては折角の幾十萬の讀者の愛顧に背くものたるを免れない。そこで「一昨冬二十二年再ビ筆ヲ呵シ稿ヲ更メ」諸友人の論評を乞ふた上、その原稿を更に某詩人に送つて文章を訂正させた、ところが生憎その詩人の不注意からこの原稿（卽ち第九、十卷に相當するもの）が失な

はれてしまつた。

此稿ヤ幾多諸友ガ榮許スル所散士ガ多少心血ヲ濺ギシ所而シテ一朝空シク之ヲ失フ豈懷ニ介然タラザランヤ

だが仕方がないので「快々トシテ又筆ヲ執ルニ懶キモノ數旬」の後、漸く再び舊稿を追懷して再錄し、いざ版刻といふ段になつて、忽然大津事件（二十四年）が起り、緊急命令が下つたので又々出版の自由を失つて今日に及んだ。かうして漸く第五編の出現となつたわけである。

さてその（五編）九、十兩卷の內容を語れば、明治十五年の夏から十六年を飛んで十七年十二月散士が歸朝の途につくまでが第九卷、歸朝後から十九年三月農商務大臣谷干城の隨員として再度洋行するまでが第十卷になつてゐて、時間的には、前諸編よりもずつとあはたゞしい。

話題は直に第四編の終りにつゞく。コッスート夫人のハンガリィ獨立戰爭の物語であるが、クラプカ將軍の胡蒙裕城守の一段が、わが戰國時代にでもある如き壯烈なものである。墺露の暴虐、亡命者コッスートの畫策を逐一物語つてコッスート夫人の物語は終る。

紅蓮は幽蘭が生きて埃及にあると聞き、蹶起して埃及に赴き、埃及を助けて英國に抗し、いさゝか故國の爲めに盡さんとする。コッスート夫人も使命の終つた今は、父の許に去らうとするので、紅蓮と同行する。紅蓮は情を矯めて散士に別を告げる、彼女は今更のやうに自分が深く散士を慕つてゐることを知るが、幽蘭との友情に恥ぢ、幽蘭を伴つて散士の許に歸らうといふのである。散士も女史達に同行して埃及に赴き、幽蘭を助けようとするが、身學窓にあり、故鄉に老父あり、思ふまゝにならず、實に心緒百端である。既に二女史に別れて幾日、カイロの埃及兵營中佳人の看護婦あるを新聞紙で讀み、それが幽蘭なるを知る。同時にアラビィが早く幽蘭將軍の獻策を用ひ、內地に退いて持久の計をなし、愛蘭士に獨立の機會を與へんことを祈つた、だが折角の祈りのかひもなく、夏も過るに及んでアラ

ビイの敗軍が傳はり、散士をして並々ならず落膽せしめた。そこへ紅蓮から消息が來たが、惡い時には惡く、紅蓮は渡歐早々例の守城長王羅に見つかり、彼の手を逃れるに苦んでゐる、幽蘭を助けるどころではない、且つ紅蓮が頼みにしたガムベッタは案外な國權的侵略主義を唱へ、此の機に地中海に横行してフランスの國威を恢復しようといふことを理想とし、紅蓮等には力を借さうといはないといふ。秋に入つては、故郷の情報があり、散士の父の死（散士の父佐多藏、この年九月死去す）を傳へた。散士は悲歎數日、憂愁の極その身も又も病床の人とならんとしたが、漸くにして自ら奮ひ、慰めて曰ふ——

逝クモノ歸ル可カラズ嘆ズル亦何ノ益アランヤ今ヤ一身孤立父母ナク妻子ナク家ナク財ナク更ニ此生ヲ累スモノナク又我ガ肘ヲ掣スルモノナシ眞ニ不羈獨立一言一行唯我ガ欲スル所ノマヽノミ其身ヲ國家社會ニ盡サントスルニ於テ或ハ世俗ニ優ルコト遠カラント

此の時に當つて歐洲の諸强國は平和對峙の利を覺り、餘力を東洋南洋に振はうとする、范雎の所謂近交遠取の策によるものである。それだけに東洋の形勢は益々急である、而かも肝心の東洋諸國は相猜忌して一致しない。そこで散士は東洋列國を遊説して興亞の大策を定めんとする志を起す。

散士はその後ニューヨークに遊んで日本人の一僧侶と會つた、この僧は年紀六旬餘、「氣豪ニ心雄ニ東西諸邦ヲ周遊シ宇内ノ大勢ヲ通覽シ將ニ以テ爲ス所アラント」するものである。(散士は名指してゐないがこれは本願寺の豪傑僧北畠道龍をさすもの、道龍の米國訪問は明治十六年五月である)。散士が彼と會談の際、端なく慷慨の心を洩らし、世界の大勢を論じて列國遊説のことに及ぶと、僧は拍案して同意した。この僧は米國から歐洲に渡り、更に印度に航しようといふのである、僧は散士に同行を勸めたが、散士は急に米國を去ることを許されない事情があつたのでこれを辭し、一書を贈つて東洋連衡の策を述べた。

僧と別れて後、散士はフイラデルフィアを去つて南方メキシコに遊び、具さにその國俗を觀察し、又憂國の志士散多を訪ひ、メキシコの現狀を聞いて覺るところが多かつた（散士のメキシコ行が若し事實とせば十六年から十七年、恐らく十七年であらう）殊にメキシコが條約改正成功の跡を見て感慨を增すものがある。かくて散士はメキシコから桑港に出で、歸朝の船に乘つた（十七年十二月）、かくて翌年一月日本に着いたが、忽ち朝鮮事變から日淸兩國の戰爭とならんとすることを聞いて大に驚いた。

散士歸朝後の『佳人之奇遇』は多くは散士身邊の實錄であり、小說的興味が益々少ない。五編の後半の如き、專ら朝鮮問題乃至東亞問題に對する散士の經綸を表明したもので、日淸が未だ和平の約を結ばぬ前、白雲山下の范卿から一封の東亞策論が屆いて、散士をして范老の生存を覺らしめる一段の外は、小說的構成がない。從つて旣に散士の傳を語れば、その上この編の梗概を語る必要はない、讀者はよろしく前條十八年歸朝から十九年三月までの散士の傳記的事實を今一度讀過されゝばそれで足りるのである。たゞ朝鮮事件の由來、日本の朝鮮政策、これに對する當時の日本人の感情、朝鮮側の事實を知るには、此の卷（十）は是非必要なものである。

此の編に見える散士の政治的イデオロギイは東洋振興策が主である。たゞ感情的な危急存亡論、乃至現狀の警告指摘の態度から一步進んで具體的な方策（と散士の考へたもの）を論議の中心としてゐるところは、その歸朝後の政治社會に於ける實際的經驗から學んだものに違ひない。

五編には散士の東方策論の結晶とも見るべきものが三個所に出てゐる。その第一は卽ちニューヨークで出會つた一僧侶に與へし書翰である。この書翰の論策の根幹は東洋連衡、日淸同盟である、曰く――

夫レ能ク東洋列國ヲ連衡シ以テ西洋諸邦ト頡頏セント欲セバ埃及ヲ以テ其鎖鑰トナシ坐ナガラ地峽ヲ拒ガシメ印度ヲ以テ其藩屛トシ進ンデ亞典（アデン）ノ要害ヲ奪ハシメ土耳其ヲシテ奮テ北向黃海ヨリ强露ノ横ヲ窺ハシメ英露ヲシテ猜忌

相爭ヒ以テ歐人ヲシテ歐人ヲ攻メシメ而シテ我國淸國ト相合シ小邦ヲ率キテ其背ヲ拊タザル可カラズ（卷九、二十三丁表——二十三丁裏）

甚だロマンチックで實行の能不能が氣遣はれるが、兎もあれこれが散士胸底の理想的大策である。（その何處となく戰國策から脫化した氣味があるのは、一つは表現形式のせゐもある）。だがこの大策を實現するためには何處から着手すべきか。散士の目算では、配所のアラビイ・パシヤと結んで埃及に於ける同志を動かし、別に印度人の愛國心を刺激して國土恢復の志を起さしめるを第一とする、而してその爲めには此の僧の如き有爲の人物が佛法を利用して印度を訪ひ、先づアラビイを說き、次いで印度志士に結交する、さらでも印度獨立の機は遠からず來るが、これを促進するには佛敎の力を利用することが妙である。かくて「深謀遠慮豫メ其必然ノ勢ヲ審ニシ以テ其必至ノ機ニ乘」ずれば則ち——

他日東洋列國ヲ連衡シ印度ヲ助ケテ獨立タラシメ埃及馬島ヲシテ英佛ノ干涉ヲ絕タシメ朝鮮ノ獨立ヲ保護シ淸國ト連合シテ遠ク露人ヲ退ケ亞細亞洲中歐人ノ鼻息ヲ納ルルナカラシメ屹然宇內ヲ三分シ亞歐米鼎立シ武ヲ偃セ道ニ仗リ人生安樂四海平和ノ大業ノ基ヲ建ツル（卷九、二十七丁表裏）

ことも、格別「泰山ヲ挾テ北海ヲ超ユルノ類ナランヤ」である。たゞ問題なのは當時の日本人民の意氣であるが、昔から尙武の國といはれ自らもさう信じてゐる日本國民だが、今日のところ「一人ノ蹶起臂ヲ揮テ眞ニ歐人ノ橫恣ヲ憤リ國權ノ毀損ヲ慨シ進ンデ我ガ正理ヲ宇內ニ鳴ラスモノ」あるを見ぬ、況んや武力で歐人と國權を爭ふ程の元氣ある人物に於いてをやである。

今ヤ我國ノ士人徒ニ空理ニ溺レ漫リニ文墨ニ泥ミ筆辯口議能ク論ズルモ然レドモ其國ニ報ズルノ精神凛乎トシテ拔ケズ而シテ猶ホ悔イザルモノ果シテ幾何カアル嗟呼口ニ堂々タル神州ト唱ヘ日本男兒ト稱スルモ豈獨リ心ニ愧ヂザ

ランヤ（卷九、二十五丁表）
慷慨激昂覺えず淚が下るといつてゐる。此の一段は當時の所謂政治家達に當てつけて、事志と違つた餘憤を洩したものであらうが、今日尙ほ感情的には此の氣持が肯定されるのである。

次に注意すべきは、メキシコの愛國的新聞記者散多と散士との問答である。二人は、メキシコの國情からヂアレスが國政改革の顚末を語り合つてゐる、然しこれは何もメキシコを語りたくて語つてゐるのではない、例によつてメキシコをだしにして當時の日本を論じ日本人民を勵まさうといふのである。散多は始めメキシコ人の懶惰を罵る、これは先づメキシコが日本に劣つた國家たることを讀者に印象させるためである、かうして置いて扨てヂアレスが國政を改革し、英佛西の三國を相手にして如何に戰ひ勝つたか、如何に外債滅却に成功したか、新條約締結に成功したかといふ顚末を述べる。ヂアレスの功業や公子マキシミリアンの悲運は正史に詳しいからこゝでは繰返さぬが、これが散士が讀者の眼前に投げ出す謎である、日本より實力の劣つたメキシコさへ一旦國民が奮發して立てばなほかゝる諸强國を相手にこれ程の大事を成し遂る、然るにメキシコ以上の優秀國家たるわが神州日本が條約改正の一事をさへ成功出來ぬといふのは何といふ腑甲斐なさだといふ叱責が、そこに含ませてある。勿論メキシコの國情を語るに托して當時の日本の現狀を諷刺することを忘れはしない、曰く（前略）學術殖產之ガ爲ニ沈退シ未ダ文明國ト肩ヲ比スル能ハズ蓋シ學術技藝ノ我ガ社會ニ於ケル未ダ以テ名利ニ關スルニ足ラズ是ヲ以テ功名富貴ハ唯一ノ政府ニ集マリ少ク氣概アルモノハ皆心力ヲ政事ニ注ギ空理論ニ馳セ偏ニ政府ヲ顚覆シ己レ自ラ代リテ其政柄ヲ握リ浮雲ノ榮華ヲ夢ミント欲シ云々（卷九、二十九丁裏）、此等の言は實際メキシコを語つたものか又は直に日本を語つたものか、判別出來ぬ位ではないか。更に又散士の正面的な日本現狀觀もいさゝか發露されてゐなくもない、曰く、我國ノ內憂ハ小黨分裂シテ相私軋シ人民確乎タル志操ナク輕佻ニ流レ徒ニ外物ニ心醉シ日本國民ノ保有シタル特性ヲ

失ヒ遂ニ獨立自重ノ氣風ヲ消磨シ禍ヲ子孫ニ殘スニ在リ其外患ヲ擧グレバ即チ條約改正未ダ成ラザルアリ云々（卷九三十丁裏）。散士が散多に語つてゐる日本は明治十七八年の日本であり、散士がかく此の文章を筆にしつゝある時は明治二十三四年の日本であるが、吾等は散士の感憤を場違ひの印象をもつて受けとることが出來ぬ、前者へのかゝる感憤が直に後者にもあてはまつてゐるのである。

散士の東方策論を語る第三は、范卿即ち「白雲山下ノ客」の散士に投寄したといふ名目で掲げられてゐる上中下三策である。これは明治十八年現在の日本の立場から對淸韓策を論じたもので、散士としては最も具體的な指示を含んでゐる。前にも述べたが當時十七年の朝鮮事變のため、日淸兩國が正面衝突しさうになり、伊藤博文が淸國へ談判に行つてまだ和戰何れとも定まらず、國論紛々たる際であつたことを記憶しなければならぬ。その三策中上策は如何、神速に大兵を韓國に出し、釜山東萊府を占領し、北行して行く人民を安撫し汚吏を追ひつゝ諸城市を降し、仁川から京城に迫り、淸國の駐韓兵を擒にする、さうして國王を宮城に奉じて士民に順逆利害の道理を說き、さて陸には山海の要害を扼して長駐の勢を示し、海には猛艦を艤して備を嚴にし、當時淸國と敵對中である佛國と同盟の約が成つたと聲言する。かうして淸なり韓なりと談判を開けば、「費ス所小ニシテ獲ル所大」である。殆んど戰はずして勝つもので、これが上策である。では中策は如何、此の中策が實は三策中の骨子なのである。曰く、先づ仁川京城を封鎖し、さて淸國に重大な要求を出す、淸國がこれを容れない時は一二軍艦をもつて南方廣東福建邊の海港を脅して淸國を奔命に疲れしめ、別に一艦隊をして北方大同江から平壤を窺はせ、鴨綠江から牛莊方面に出で審陽（奉天）を襲擊する勢を示させる。淸國は南北ともに動搖し、疑懼百湧、智者も勇者も如何ともなし難い、そこを見計らつて陸兵を太塘に上陸させ、天津から北京と進擊させて城下の盟をさせる、或は淸國にも兵艦が少くなく且つ名將が多いから此の策の如く容易に事が進行はせぬであらうと疑はれるかも知れない、然し陸兵百萬といふが訓練なき大衆であり且つ

將帥たる李鴻章、左宗棠、曾國荃等の間が睦しからず、又福建、雲南等に佛國と相對してゐるのでそれ程恐るゝに足りない、たゞ海軍で若し福建及び南北西洋の水師が合すると一寸困難であるが、然し目今佛艦隊の爲めに南洋福建の二水師は如何とも出來ず、獨り北洋水師が日本と戰ひ得るのみ、これ又此の機に乘ずれば憂ふるを要せぬ、要は斷行の二字にある、實に「朝鮮ヲ懷ケ清國ヲ挫キ凱歌振旅威名五洲ニ諠キ勇武四海ニ震ヒ初テ歐人ノ爲メニ敬憚セシメ東洋盟主ノ實權ヲ握リ興亞ノ大計ヲ建ツル眞ニ此時ヲ然リト」する。これが中策であつて、三策中の骨子、散士が最も得意とする縱橫の計である。又相當計考し、彼我の實力に基礎してゐるところも見える、見方によつては上策に比してこの方が優つてゐるやうに思ふ。さて下策であるが、それは――

日清元是唇齒兄弟ノ國ナリ佛勢頗ル猖獗ニシテ清人ノ寒心スル所ナリ此時ヲ以テ貴國唯東洋ノ安危ヲ以テ自ラ任ジ私心ヲ去リ舊怨ヲ捨テ大ニ胸襟ヲ披キテ藩籬ヲ設ケズ清國ト攻守同盟ノ約ヲ結ビ歐人ヲ以テ東洋ノ公敵トナシ先ヅ同盟軍ヲ興シテ臺灣ノ封鎖ヲ解キ佛ノ巡洋艦隊ヲ追擊シ東京（トンキン）ヲ克復シ朝鮮ノ保護者トナリ强俄ノ防ギ再ビ琉球藩王ヲ封ゼバ清國必ズ貴國ヲ德トシ舊來ノ怨ヲ解キ猜忌ヲ脫セン是又興亞ノ大計ナリ

である。これは下策とはいふが、見方次第では上々の策ともいへる。たゞ然しこれを眞に行ふには、豪傑の士でなければならぬ、彼我ともに豪傑の士が赤心をもつて相許すのでないと、この下策を上々策となすことが難しい。こゝが即ち上々策でありながら下策なる所以である。此等三策は然し何れも當路者の採るところとならず、十八年の天津談判の結局が、散士等からいへば甚だ屈辱的な條約締結となつて、一部識者をして痛憤せしめたことは、前に記した通りである。

『佳人之奇遇』第五編は四編に比すると又一段と小說的分子（構成）が少くなつてゐる。小說的テクニクの點からは殆んど論外といつて可い。白鸚鵡を點出して幽蘭を想ひ出させる邊は一寸面白く、又物語としてはコッスートのハン

ガリイ獨立運動の顚末、ベム、クラプカ諸將の奮鬪が、實に悲壯とも壯烈とも表現に苦しむやうな熱烈な雄辯で物語られてゐる。だがこの小說的分子の少ないといふことが、小說としての『佳人之奇遇』にとつては一つの缺點短所に外ならぬであらうが、(創作的感興のない點で)、一面散士身邊の事實を寫すことが益々多いだけ、その出來事、その人物、その感情が益々眞ものとなり、小說として以外別樣の興味が津々と湧く、たゞそれをさうと知らずして讀めば、或は讀むに堪へないものと見えるかも知れない。時代の活寫としては、卷を追ふて（小說的價値の認められなくなるにつれて）興味が增して來るやの感がある、これは時事の渦中に餘り入り込み過ぎたので、今更らしくその感情を小說的に再現することが出來なくなつた爲めかも知れない。

さて以上五編を通讀して分かることであるが、四編以下は明白に谷と洋行して後の作であるだけに、何う見ても歐洲で得た知識なり經驗が織り込まれてゐる（コッスート夫人の點出、埃及に關する知識、ハンガリイの衰亡の如き）、だが先づ此の第五編の散士歸國の一條までが『佳人之奇遇』としての最初の腹案であつたのではなからうか。無論歐洲の知識が豫想外のものであつであつたゞけに、四、五編の最初のプランも種々變更はされたらうが、然し要するに散士の歸朝をもつて一時筆を止め、『佳人之奇遇』を一應完結させるつもりであつたらしいことは、第五編に對する散士の序文の中にも仄見えて居り、又現に讀者の方でも明白にさう受け取つてゐるものもある(四)。勿論續筆する意圖はあつたかも知れないが（否なあつたに違ひないが）、兎も角もこれで最初のプラン通り書き終へたから先づ一段落といふ氣持ちがあつたと思ふ。それが、如何なる犧牲を拂つても（序文を參照）第五編までは書かずにゐられなかつたわけであり、同時に第五編以後數年間その續筆を顧みなかつたことの說明にもなるであらう。種々な點から考へて、此の第五編までが『佳人之奇遇』proper（正編）であり、これ以後は續編であると見たい、勿論今も述べた如く豫想外の分子が混入したので多少の變更を餘儀なくされてゐることが分かるが、かく解するが『佳人之奇遇』に對する最

も自然な態度であらう。

註（一）例へば『本山彥一翁傳』一二五―六頁、性惡社員が柴を說いて連袂退社を決行しようとしたのは二十二年五月二十六日であるといはれてゐるが、五月には柴は大阪にゐない、谷干城の日記を見れば明白である。十七日掲載の退社の辭はかれてから認められてあつたものと見える。

註（二）『觀樹將軍回顧錄』（政教社編）中、條約改正問題の條

註（三）明治二十四年五月二十八日國會（朝鮮通信）中

註（四）明治二十五年一月十日國會（三四三號）、『佳人之奇過』第十卷の評に「本書は實に此卷を以て其局を收結せり」云々と明言してゐる。

七　明治二十五年――三十年

明治二十五年以後の散士は、表面は議會人としての柴四朗氏である。興亞の大經綸を抱くロマンチックな策士東海散士は裏面的な存在になつてしまふ。然し仔細に觀ると、此の裏面的の存在が却つて散士自身もこれを本領としてゐたかに見える。

二十四年十二月第二議會が解散されたが、これを機に散士は二年に亘る冬眠をかなぐつて起つた。それは選擧區に於ける政況の一變が散士を政界に再起せしめた主因であらう。彼ある間は我起たぬと散士が遠慮した山川浩將軍は去つて貴族院に入つた、第一回總選擧で散士の身代りに出た三浦信六は今度は何うしても出ずに極力散士を推した。散士自身も勿論第一、第二議會の現狀を見ては乃公出でずんばの感がなくもなかつたかも知れない。かくて二十五年一月會津に向ひ、正式に立候補し、二月福島縣第四區代議士に當選した、日本新聞（一月三十一日）は此の際の士の散

逸話を傳へて曰く——

東海散士與の會津に候補者たり一日政治上の意見を述べて曰く予が意見は佳人之奇遇第八卷に同じと自著の小説を把つて宣言に代ふ亦奇

讀者は本章『佳人之奇遇』第四編に關する條を繰返して、直ちに散士の政見の如何なるものかを知るべきである。

第三議會は五月二日から六月十五日迄亘つたが、此の議會には散士は無所屬として安部井磐根等と行動を共にし、保守黨的の朦朧たる色彩の部類に入れられて、何やら勝手の違ふ感じを與へてゐるが、十一月第四議會の召集前、楠本正隆、河島醇等によつて同盟倶樂部の組織されるや、散士はこれに入り、漸く色彩を鮮明にした。此の倶樂部は自由改進外の獨立議員が政府反對を旗幟にして組織した巴倶樂部の變形したもので、大體政府反對黨である。即ち——

『藩閥政府の積弊を除き、立憲政治の完成を期し、國利民福の增進を圖る』を目的とし『政治上進步の主義を執り立憲的の運動を爲し、速に國民の輿望を達せんことを希望する獨立議員』を以て之を組織す（『帝國議會史綱』一七六頁）

といふもので、先づ立法權を固守して行政を監督し、選擧干渉その他の非擧を矯正する方針で新議會（十一月二十九日開會）に臨んだ。これより先き時の松方內閣は選擧干渉の善後措置から閣內不統一を來して辭職し、新議會は伊藤內閣（第二次）の下に召集されたのである。（二十六年三月一日閉會）散士は豫算委員の一人として第四科陸海軍の部に屬した。（此の後大抵陸海軍が外務に屬した）。

このころ議會內に於ける活動以外、散士は國家經濟會員として（谷が頭株である）奔走し、又內地雜居問題にも手を染めたらしい。

此の議會は官民の衝突猛烈を極め、衝突又衝突、拒否、休會についで遂に二十六年一月二十三日政府彈劾上奏案上

程となり、又停會となつた。散士の倶樂部は大體民黨として政府反對側に立つたが、かく官民の衝突が停止するところを知らぬので、散士は谷の旨を受けて政府と議會の調停に奔走したが、餘り利目もなかつたらしい。

議會閉會と共に、散士等は同盟倶樂部の運動方針として、(第一)政府をして第四議會に於ける誓言公約を履行せしめること、(第二)對外方針を確定すること、(第三)官紀振肅の三條を決議した、散士は河島醇と共に(第二)の外交政務調査を分擔した。その主眼は條約勵行、對等條約締結であつたか、倶樂部としては、內地雜居問題は自由問題とし、稅權恢復は黨議によるべきものとした。

この年十一月の第五議會も第四議會に劣らぬ紛糾したものであつた、獨り政府對議會が衝突したのみならず、議會自身、各政黨間に不和の空氣が生じ、更に星議長不德問題から第一黨たる自由黨が分裂した。分裂した連中は同志倶樂部といふものを組織したが、これは種々な關係で同盟倶樂部に大分接近して來た。この議會も停會につぐに停會をもつてし、遂に二十六年十二月三十日解散された、その衝突の主たる原因は議會が條約勵行建議案で政府に迫つた爲めである、說明者は安部井磐根であるが、彼の背後には散士や散士の友人鈴木天眼などが潛んでゐたらしい。

この議會には散士も馴れて、倶樂部の交涉、文書起草等の仕事に種々執掌した。散士は何れかといへば、議政壇上に大見得を切る鬪將といふよりも帷幕にあつて戰機を練る謀將といふ格であつたらしい。

これより先き二十六年三月植民協會が組織され、散士も評議員に列した(會長榎本武揚)、その趣意を要約せば、(第一)我が國の人口繁殖の緩和、(第二)四面皆海の地形が植民事業に適せるため、(第三)海權を握るには植民航海を盛にするため、(第四)商權を伸張し外に向つて利を爭ふため、(第五)鎖國根性を打破し開國政略の必要を知らしめるため、といふのである。これ又散士の理想の一部分の現れと見て可い。

又二十六年十月創刊の二六新報に社員の名だけを列したが、これは同紙の主筆天眼子鈴木力との交情によるもので

あらう。

散士は勿論再起の用意をした。然るに政府は言論集會結社の自由を抑壓することによつて民黨各派の氣勢を殺ぐことを努めたので、その煽りから同盟倶樂部も一先づ解散と決し、二十七年一月その屆出をなすと共に、散士と中村彌六の二人で同盟政社なるものを組織し、正式に政社屆を濟した。これは進歩主義で政弊革新、責任內閣、對外强硬の三綱領を旗幟としたものであつた。かくて散士は二月半ば漸く歸鄕して選擧運動に奔走しかけたところ、留守中に集會政社法違反で告發され、大に同志を憂慮させた。是より先、同盟倶樂部が同盟政社となると前後して同志倶樂部が同志政社といふものになつたが、兩政社は何事につけ親密に提携してゐたので、政社の連合と見られた然る。に政社の連合は政社法の禁ずるところであつたので、當局の告發となつたのである、これが有罪と定まれば當選しても代議士を失格するので、同志の憂慮は當然であつた。然し幸ひ連合の證據無しといふので無罪となつた。裁判確定に先立つて散士は三月一日無事再選された。

政府の抑壓は然し同盟同志兩政社の合併を促進させたものである。總選擧終了後兩政社の當選議員達だけで先づ公同倶樂部といふ交涉團體をつくつた、これには散士が大に奔走した。五月に入つて兩政社合併の議が正式に決定され新黨を立憲革新黨と稱することになり、五月九日錦輝館に於て盛大な結黨式を擧げ、翌十日政談大演說會を開いた。その主旨に曰く綱領に曰く——

我黨ハ自由進步ノ主義ヲ執リ立憲的革新ノ方針ニ基キ左ノ綱領ヲ定ム

綱領に曰く——

一　立憲ノ聖旨ヲ奉ジ國民ノ公議ニ則リ上皇室ノ尊榮ヲ保全シ下人民ノ權利ヲ伸張ス

一　政弊ヲ革新シ責任內閣ノ速成ヲ期ス
一　財政ヲ整理シ勉メテ民業ノ發達ヲ圖ル
一　外交ハ自主的方針ヲ執リ國威ノ宣揚ヲ期ス
一　國防ハ外交ノ緩急ニ應ジ其整備ヲ圖ル

此の五綱領の內主眼とするところは、責任內閣、對外强硬の二ケ條である。これは獨り革新黨のみならず、改進黨、國民協會（佐々友房一派）、舊大日本協會派（安部井磐根一派）その他民黨諸派の共同旗幟である。就中條約改正對外强硬の主張が最も烈しく世人の眼に映じたので、民黨は普通對外强硬派とも別稱された。

元より條約改正對外强硬の主張は此等諸派の人士が議會開設乃至それ以前から唱道してゐたものであるが、前議會に於いて、遂に議會を解散せしめるまでの凄まじい勢をもつに至つた。政府は當時列國を相手に條約改正の工作を進めてゐたので、前議會に於ける條約勵行建議案には頗る困却し、列國の抗議にあつて遂に建議案阻止のため議會解散を斷行したものである（條約勵行は現條約の不便不利を外人に知悉せしめる最有効の手段として案出されたものである）。この年に入つて四月先づ日布改正條約が公布され、日英條約又た近く成らんとすることが分つた。然るに此の日布條約は日本としては極めて不利なもので、必ず恢復すべしと要望されてゐた法權稅權の中、稅權は先づ先づ恢復されてゐたが、法權はそのまゝであり、その反對に內地雜居及び營業權が彼に對して與へられてゐた。區々たる布哇に對してかくの如くであるとせば、日英條約の內容の如き思ひ半ばに過ぎるものがあらう。對外强硬の民黨諸派は日布條約公布を機會に勢を新にして結束した。彼等は貴族院の有志に呼びかけ、更に新聞記者同盟を羽翼として、日布條約問題を一般的對外强硬の全國的運動たらしめるに成功した。

かゝる空氣のうちに第六議會は五月十二日召集されたが、騎虎の勢が何うで圓滿に行くわけはない、議院は前議會

の解散問題を不當とし前議會から引掛りの內外失政の咎彈を上奏案として可決したので、政府は六月二日又も議會解散を連施した。民黨諸派はこれに屈せず、新議會に於て陣容を立直して今一ト息と政府に迫らんとした。ところがこの時端なく日清戰爭の勃發となり、官民の政爭は一時自然消滅となつたのである。(政界消息通の言によれば、此の時の條約勵行問題にも日清戰爭の勃發にも政府の手が微妙に動いてゐたともいふ、列國牽制のため、又內爭を外競に向けるためにである。恐らくさういふことがあつたかと思はれる形跡もある、例へば對外硬の急先鋒の一人たるわが東海散士の如き、外務大臣陸奧宗光と相當親善な關係にあり、條約勵行建議案に對する散士の奔走が別段陸奧との親善關係を害したとも思へない、又日清戰爭勃發當時朝鮮で策謀した有力な浪人頭に岡本柳之助がゐる、これも陸奧と同國人で親交があつたといふ、必ずやそこには面白い裏面史があることゝ思ふ。然し今は散士を傳するのが目的であるからその邊の詮索は一切止めてしない)。

日清戰爭はいふまでもなく正史上の大事實であり、新興日本の運命を賭した最初の國家的大事件であつて、あまりに大事件なためこゝではその全貌を髣髴させることも出來ぬし、又その必要もないが、たゞ日清戰爭が朝鮮問題に端を發してゐる限りに於いて、朝鮮問題と東海散士の特殊な關係から日清戰爭時代の散士は特別な注意と記述を要する。

東學黨の所謂東學とは東方の學の義で、儒佛道の三教を圓融した新宗教であるが、その教旨の革命的なところが朝鮮政府(といふよりも閔族)の虐政に逆ひ、甚だしい彈壓をうけたので、新宗教から政治革命に轉じ、大院君を奉じて朝政を改め衆民を救ふことを標榜して蜂起した。亂民の蜂起は朝鮮では從來珍らしからぬものであるが、これがやや毛色の變つたものとして日本人の注目を惹いたのは、明治二十六年の春である。それが二十七年に入つて朝鮮政府の力では何うにもならぬ程猖獗を極めたものになつた。此の頃、日本の民間志士の朝鮮政府に對する感情は可成り惡

化してゐたので、東學黨の蜂起を機會に、これを助けて是非朝鮮の政治革命とまで擴大させようといふ希望が日本の民間志士の間に起つた、さうして此の希望の具體化されたのが所謂鈴木天眼、內田良平、武田範之等、天祐俠の一團である（二十七年）。散士は此の中の或る人々とは親交があつたし、又その平生の持論からしても東學黨に同情してゐたに違ひない。

東學黨が次第に勢力を得て度々の征討兵が失敗するや、閔族は狼狽して駐韓淸國公使袁世凱に泣きつき、袁から淸國へ援兵を出してくれるやう賴んだ。袁は喜んでこれに應じ、李鴻章と打ち合せの上、若干兵を借して東學黨鎭壓に當つた。勿論彼等の態度は屬國の紛亂に口を出すのは當然だといはぬ計りであつた。支那がかゝる態度で出兵したことは、日本の對外硬派の神經を大に刺激した、彼等は在韓邦人保護、及び韓國獨立權扶植のため、日本も直に出兵せよと政府を鞭撻し、同時に日本の主張を貫徹し權利を擁護するため、支那に對する一大覺悟を必要とする旨を高唱した。支那政府からも、天津條約の約束通り出兵を通告して來たので、政府も支那へ通知して出兵を斷行した、これは何といつても外務大臣陸奧宗光の英斷である。

日本が出兵して間もなく東學黨の亂はやゝ鎭靜に歸した（淸國援兵の力といつて可い）。そこで日本では、撤兵に先立つて淸國と共力して韓國の政治を根本的に改革し、東洋不安の根源を正すことが必要だと提議した、然し淸國は韓國を屬國視してゐるから日本からのかういふ提議に應ずる譯がない、然しこの時は日本政府も十分覺悟をしてゐたから、それではと獨力韓國の內政改革を促し、自主獨立の實を擧げしめることになつた、これが日淸戰爭の發端である。

八月一日宣戰の詔勅が降つた。宣戰以後の戰況の推移については、正史に委しいからこゝでは繰返さない、たゞかゝる匆忙な空氣を背景にしてわが東海散士が如何に動いたか、それだけを述ることにする。

丁度二十七年春頃東學黨が次第に勢を得て來たのと前後して所謂金朴事件なるものが起つて、さらでも惡化してゐる

た民間志士の討韓感情を層一層惡化させたものである。韓人金玉均、朴泳孝は明治十七年の朝鮮事件で亡命して以來日本を根據として陰然開化黨の牛耳を執り故國の惡政を改革する計畫を抛擲しなかつた。韓國政府特に金朴の眼の敵たる閔族は如何にもして此の二人を亡き者にしようと心を碎いたが、如何にも韓人らしい何年がかりの暗殺計畫を運し、遂に二十七年三月二十七日、上海に於いて金を、東京に於て朴を殺す手筈をつけることに成功した。かくて金は空しく刺客の手に斃れたが、朴は刺客の手を免れたばかりか、却つて刺客を捕縛して警察に差出した。上海で斃れた金の死屍は李鴻章の手で韓國政府に引渡され、韓國政府は日本に對してこれ見よがしに、楊花津で四肢を斷裂して梟示した。これには日本の諸新聞は筆を揃へてその野蠻を攻擊した。然るに東京裁判所で朴の刺客李某その他を審問するに及んで金朴暗殺事件に韓國公使兪箕煥が關係し、且つこれを命じた國王の勅書まで現はれたので、日本の國論は囂々を極めた。だが日本政府はこの件で韓國と事端を啓き、引いて淸國と紛爭を起すことを避けて、かく證據明白な刺客を證據不十分で無罪とし、たゞ國外に放逐するだけで終つたのみか、反對に朴等を監禁罪に問ふたので（結局無罪にはなつたものゝ）、民間志士が軟弱外交を呪ふ叫びは全國に擧つたのである。

散士は金朴二人とは十八年以來交誼があり、殊に朴とは親しかつた。初め金が刺客洪某の甘言に誘はれて上海に去るや、祕密を守つて朴にも目的地を告げなかつたので、朴は散士に托して京阪地方に赴いて金の行動を搜索させた（三月）。金が上海で斃れるや、金朴の日本友人は總代を派して金の遺骸を受け取ることを議決し、朴は散士にこの任を賴んだが、散士はこれを辭し、岡本柳之助をもつて自ら代へた。（岡本は遂に不成功に終つた）。朴が監禁事件に問はれるや、散士はその釋放のために大に盡力したことはいふまでもない（六月釋放）。これより先散士きは東方協會が起るや、ずつと會員になつてゐたが、此の年五月その評議員に擧られた。又此の年六、七月の頃、政府の軟弱外交を慨した浪人豪傑組の韓國討入案が立てられたが、宣戰となつて止んだといふ（『巨人荒尾精』第五章ニ對韓經畫の條に詳

しい）、この計畫に散士も實は關係してゐたのであるといふ。

いよいよ征淸の大詔が降つて、韓國政府も日本の要求を入れ、日本によつて國政改革する方針に決定するや、同政府から朴泳孝の許に召還狀が來た。十年振りの歸國であり、而かも歸國せば日本黨の陰然たる領袖の彼が重用されることは分つてゐる。朴は急いで八月六日歸國した。散士は朴と同じく韓國に赴いてその落着く先途を見屆けたいと思つたらうが、然し總選擧は九月一日に迫つてゐるので、思ひ止つた。

朴は多大の希望を抱いて歸つたに拘はらず、その餘りに客氣に富んだ言動が禍ひして、大院君からも政府からも、大鳥公使からも厄介者視され、怏々として樂まず、仁川京城の間に空しく滯留すること一月餘に及んだ。散士は選擧に當選したので、この趣を得て九月早々韓國に急行した、朴は折角召還されて來たものゝ進退に窮し、空しく日本に歸るより仕方のない場合であつたので、散士の來韓を非常に喜んだ。散士は朴のために種々周旋するところがあつた。かくて朴のため前途の方向をつけて一先づ歸國したのは、十月の臨時議會（第七議會）の直前であつた。十月には井上馨が公使として韓國へ乘り込み、いよいよ政治改革を促した。井上は閔妃の政治によるのを禁ずると共に大院君をも抑へ、開化主義の新内閣を組織させた。朴は新内閣の内務大臣に任ぜられて、漸く得意の舞臺に立つに至つた。これは二十七年十二月である。

第八議會は二十七年十二月から二十八年三月に亙る長期の軍國議會である。散士は革新黨の評議員として、諸種議案の委員として、對外硬派有志の一人として、この間院内院外とも相當多事であつたであらう。三月日淸媾和が成立し、祝酒のさめぬうちに、三國干渉、遼東還付（四月）となり、志士を悲憤せしめる事件が續出した。

三國干渉の首唱者は露國である。韓國に對する露國の野心は久しいものであるが、これの成功を機會にいよいよそれが表面化して來た。二十八年五月に及んでは、韓國政府の親露傾向が頻々傳へられ、日本黨の領袖たる筈の朴内務

さへ變節して、閔妃に取り入り、露國と結んでゐると噂された。これは今日から考へて噂だけでない、多少その形跡があつたものかと思ふ。始め朴が次第に勢力を得るや、朴等新日本黨と金宏集等の舊日本黨との間に軋轢が生じた。この時井上公使は朴等を叱して舊派と妥協せしめたので、朴等は心中不平に感じたであらう。閔妃はさうでなくとも新勢力の朴を利用して勢力を恢復しようとしてゐたので、こゝにつけ入つて籠絡したものらしい。かくて朴も時々露國公使館に出入する姿が目立つやうになつたといふ（露國は閔妃を通じて頻りに策動してゐた）。散士はこれを聞いて憂慮に堪へず、同志（谷、三浦）等の意を帶して、五月下旬韓國に赴き、朴に忠告旁々戰後の韓國政狀を視察した。政友佐々友房も同じ目的で同行した。韓國行の結果、朴の變說はさう根底のないものであることは大體確めたが、然し露國の手が閔妃を通じて意外に伸びてゐたことは認めざるを得なかつた。これはこの儘では濟まぬ、早晩形勢一變といふことになりはせぬか、といふ氣が内心にあつたが、然しその一變が、これ程早いとは考へつかなかつたであらう。

散士と佐々は六月下旬歸國したが、歸國後間もなく形勢が急轉した。閔妃は大院君を抑へるまで朴と結んでゐたが大院君を抑へてしまふと俄に朴等を疎外し、朴等日本語派に對立する英語派政治家とその背後の西洋人を利用して陰險な排日策を試みた。朴等もこれには默つてゐない、日本の力でこれに對抗しようとする。この軋轢が遂に七月六日の政變となり、朴は大逆を謀つたといふので再び逮捕命令を出され、又も日本へ亡命して來、その内閣は瓦解した。韓國政府がかく思ひ切つた手段に出たといふのは、一つは井上公使の不在中であり、又一つは遼東還付以後一般に反對的に日本人を見くびり、日本を侮る感情が盛り上つてゐたからである。井上は早々歸任して善後策を講じた。

これより先き井上は歸國の時辭意を示したので、伊藤總理はこれを諒とし、陸軍中將三浦梧樓を乞て公使の後任と定めた（谷干城の推薦）。三浦が公使となると共に、散士は顧問の一人として渡韓するに内定した。初め三浦は伊藤の

囑を受けても容易に起たなかつた、だが井上山縣等も聲を揃へて是非出馬して吳れるやうに頼むので、出馬を承諾しはしたが、それと同時に政府に一篇の建議を出して訓令を乞ふた、今散士の語によつて、その要領を簡約して曰へば

(『佳人之奇遇』卷十六)——

某命ヲ半島ニ奉ズ宜ク征淸ノ詔勅ニ則リ朝鮮ヲ視テ同盟獨立王國トナシ我レ獨力其責ニ任ジテ其改革ト禦備トヲ負擔スベキカ將タ占領保護ノ雄心ヲ抑制シ歐米列國中ノ公平ナルモノヲ撰ミ之ト相謀リテ共同保護ノ獨立國タラシムベキカ抑々我國一二强國ト早晩紛擾ヲ朝鮮ニ生ズルヤ必セリ是故ニ大難事ノ未ダ紛起セザルニ先チ今日之ヲ勇斷スベキカ某旣ニ難局ニ當ルヲ顧ミズ素ヨリ政府ノ方略ニ容喙スル意ナシ但三者其一ヲ採決シ某ヲシテ方針ニ迷ハシムル勿レ

依然盟邦として助けて行くか、それとも露國あたりと協力して助けることにするか、これとも今のうちに日本のものにするか、此の三策の何れに出てよいかはつきり訓令してくれといふのである、當時の大勢からして我國の對韓策はこの三つに出ない。然しその何れに決するやは政府としても輕々に答へかねる重大問題であつたらう、且つや三國干涉直後の自信を失つた外務當局に於いては尙更である。政府は依違して答へないので、三浦はこの根本方針が定まらないと出馬しても駄目と見て公使になることを拒絕した。政府は狼狽して、それではそのうち明確な訓令を出すから當分第一の方針に從つてゐてくれ（「宣戰ノ大詔ニ遵ヒ獨力扶植ヲ貫クベシ」）といつたので、三浦は漸く公使に就任し(八月)、卽時出發した。三浦と政府の駈引の間には、といふよりも此の時の三浦の背後には恐らく散士がゐたことと思ふ、又此の三浦の建議なるものは、事實散士の筆になつたものかも知れない、從つて問題の三策も散士胸中の祕が洩れたものとも見られるのである。

散士は三浦に同行すべきであつたが代議士關係の公務の仕殘りがあつたので（散士は當時鐵道會議委員として大に

盡力したものである)、少し遲れて九月初旬出發した。此の時は半公式の顧問として政府から認められてゐたものらしく、旅費は盡く外務省から出てゐる(一)。出發に先立ち散士の政友は一夕送別の宴を開いたが、散士は席上謝辭に代へて對外硬を高唱した、曰く――

外交は强硬にして永久ならざる可からず一定の方針を有せざる可からず而して其方針は自働的なるべし他働的なる可からず或る一派の人の唱ふる他働的方針臨機應變的政策は余の欲せざる所なり今後我國は宜しく朝鮮をして眞個の獨立國たらしむるか保護國たらしむべきか强國の何れかに結托して他の强國に當るべきか等につき永久不變の方針を確定し之によりて進退せざる可からず此の事は今日の最も緊急に堪ざる所なれば內國にある我黨諸君も此點に就き常に充分の御考慮を煩はされたし(云々)。(二)

此の演說の要領が三浦の建議と相應じてゐる點は注目すべきであらう。

三浦は九月一日京城に着いた、散士は九月九日に東京を出發したから恐らく早くとも二十日近くに着いたことであらう。これより先き閔妃は露力の勢力によつて日本を抑へんと謀り、露國公使ウェーベルを操り、井上の王宮內事に對する干涉を止めしめ、王妃の政治的容喙を默認せしめて、今や事實上韓國の支配者たる位置にあつた。王妃及びその一黨はこの機會によつて一擧日本黨を屠り、日本の勢力を韓半島から却けて積年の憤恨を晴らさうとして一大クーデターを用意しつゝあつた。そこへ三浦が着任したのである。王妃及びその一黨は三浦の爲人を知つたら恐らくそのクーデターの陰謀を中止したであらうが、然し井上の去つたのを幸ひに益々その用意を進めたものらしい。勿論露國公使及び米人某々等もこれを後援してゐる。三浦は着任早々此のクーデターを耳にし、その對策に着手したに違ひない。三浦の腹は政府の訓令たる獨力扶殖を積極的に行かうといふのであるが、彼は方便として以毒制毒の策に出で大院君を引出して閔妃を抑へることにした。かくして起つたのが十月八日の變である。十月八日の變に關する文獻には

散士自身にも詳しいもの（三）があり、正史は勿論他に種々あるが、然し『佳人之奇遇』（卷十六）中に挿記したものが最も簡潔で且つ詩趣に富んでゐる。これは此の變の主役者の一人たる李周會の幽魂と金玉均の幽魂とが時事を語り會ふ散士夢中語の一節となつてゐる。

（前略）曩ニ閔后ノ黨與再ビ大權ヲ掌握スルヤ先ヅ日人ノ訓練セシ近衞軍ヲ解散シ大院君ヲ毒殺シ大宰相金宏集以下日人ト交結セル要路者數十人ヲ屠戮シ北疆ヲ露國ニ割キ保護ヲ彼ニ托シ舊政ヲ復セントス是ニ於テ吾黨密ニ祕計ヲ運ラシ去歲ノ政策ヲ襲ギ以テ機先ヲ制セントス間者走テ外人ニ告グ外人大ニ驚キ急ニ細作ヲ四方ニ放ツ然レドモ吾黨ノ擧動平日ニ異ナラズ公使親カラ日館ヲ訪ヘバ日星使談笑自若館內外ニ寂寞ヲ極ム因テ相語リテ曰ク昨年日人ノ事ヲ擧グルヤ人馬結束居民踴躍將ニ戰ニ赴カントスルノ狀アリ今寂寂此ノ如シ豈異圖アランヤト其夜我名士觀月ノ宴ヲ張リ吟詩朗詠ノ聲四ニ達ス閔黨之ヲ聽キ益々以テ流言ノ信ズルニ足ラザルヲ知リ私ニ笑テ曰ク竪子未ダ我ガ大謀ヲ覺ラザルカ宜ク明夜ヲ以テ一擧竪子ノ族類ヲ殲滅スベシト是ニ於テ彼亦觀月ノ宴ヲ張リ舞踏醉歌月ノ天心ニ傾クヲ知ラズ夜將ニ三更ナラントス僕同志七八人日人十五六人大院君ヲ孔德里ノ別墅ニ訪ヒ事ノ急ナルヲ告ゲ輿ヲ擁シテ大闕ニ向フ時ニ月星明朗晝ノ如ク柳影地ニ在リ萬戶闃寂人馬聲ナク仰テ月中ヲ望メバ飛雲忽チ動キテ嫦娥光ヲ斂メ斗柄低ク垂レ金露天ニ滿ツ夜未ダ全ク明ケズ大事既ニ定ル而シテ何ゾ圖ラン閔后此夜ヲ以テ殂落セントハ（三十七丁表――三十八丁表）

閔妃の殂落は全く豫定外の出來事である。これには三浦もいさゝか困つたらうが、然し一面には對韓策の禍根を斷つた氣味がなくもない。たゞ當面の問題として、外國側の非難が强かつたので何よりも先づ政府が弱つた。それで三浦から事件が到底かゝる結果に出でなくてはならなかつた所以を報告して來てもそれには何等答へず、又も井上を大使に任じて韓廷を慰問せしめ、三浦、杉村以下の文武官を罷免して歸朝を命じ、岡本柳之助、國友重章以下志士四十餘

名に退韓を命じた。散士は退韓命令を受けなかつたが、三浦がかういふことになつて默つてゐられる譯のものではないので自發的に退韓した。傳ふる如くば散士は十月八日の變の發した時には京城に居ず事變に關係がなかつたともいふ、然しこれは事件そのものに直接手をかさなかつたといふ意味で、三浦と散士の間だから大體の計畫は承知してゐたと見るべきであらう。(此の擧は、三浦のやり過ぎといふ意味で日本の史家の間にも非難がある、然しこれが實は三浦に對する内閣の訓令から出た自然の結果たるを認める人は少ない。三浦が事を好んだのではなく、如何に隱忍しても事こゝに出でなければならなかつたことは、三浦が事變後伊藤總理大臣に與へた書翰によつて分る)(四)。

三浦以下の文武官、及び退韓者一同は似島に着するや、政府の命令として直に兇徒嘯集謀殺罪として拘引され、廣島の獄に繋がれた。散士も同一の運命に會つた。三浦は政府の遣り方を大に憤つたものゝ、今となつては仕方なく、默然下獄した。だがさらでも戰後の外交政策に不滿を感じつゝあつた國民は、政府のかゝる處置に大に反對の叫びを揚げ、却つて三浦以下の人々を目するに一種の國民的英雄をもつてした。

散士が廣島の獄に繋がれたとの報が東京に達するや、彼の政友諸氏は代表を派して獄中に慰問せしめ(だが面會不能)、彼の親友增島六一郎は奮つて辯護の任に當らんことを申出た。獄中の散士は度々病氣もしたが、病間ある折は刑法刑事訴訟法を耽讀して審問に備へるところがあつた。(二十九年一月二十二日、三浦以下一同證據不十分で免訴となつた。流石に政府も多少は反省したものであらう。散士は事件そのものに無關係なことを公然と宣告された)。

散士は議會出席の都合上、他の拘囚者達よりもずつと早く、二十九年一月七日、病を押して歸京した。翌八日昨年末から休會中の議會開會、九日、對外硬派の伊藤内閣彈劾案が上程され、尾崎行雄が大雄辯を振つて内閣の戰後經營なり外交なりが如何に機宜を失したものであるかといふことをこき下し、最後に十月八日事件に論及して、かゝる結果を見たのは遺憾であるが、これも政府の外交的措置が宜しきを得ぬからであると責めた。散士は病床から起つて强

て登院しようとしたが、醫者の諫止によつてやめた（これも病氣の末廣鐵腸が、死を決して登院したのはこの時である）。然し散士は尾崎の議論に慊たらぬところがあり、政府の態度にも甚しい憤懣を感じてゐたので、改めて朝鮮事件をもち出す決心をした。

一月二十五日三浦は歸京したが、散士は谷夫婦と靜岡まで出迎へた。二月（二十三日――三月一日）、東京朝日新聞に、國友重章と連名で「八日事變の原因」と題し、數回に亘つて寄稿し、八日事變が我が對韓策の延長として止むを得ず起つたものであり、三浦以下の行爲は別に事を好んだものではないことを辯じ、日露の衝突は早晩韓半島を中心に露骨になるべく、日本は對韓方針の不定の爲めに勢力を失墜せざるを得ぬであらうと豫言した。

十月八日事變の善後處置に日本政府が狼狽するや、益々韓廷の侮を招き、日本黨壓迫は公然となつた、遂に二十九年二月十一日閔妃の殘黨が露國の後援で政變を起し、日本黨の大臣（總理大臣金宏集以下）は或は斬殺され、或は奔竄し、國王及び世子は露國公使館に行幸して、一時露國公使館が行宮たるやの觀があつた。折柄議會の開會中であつたので革新黨の工藤行幹は質問書を提出して、政府の對韓政策の軟弱を詰問し、更に國民協會の佐々友房はこの件に關し內閣處決を要求する重大なる決議案を提出した。案は政府の策略と國民協會の無氣力の爲めに（撤回意志を表明したので）遂に敗れたが、政府を脅威すること少なくはなかつた。散士はこの案の上程日たる二月二十五日、病後の痩軀を議政壇上に運び、決議案贊成に托して、今回の事件の原因たる昨年十月八日事變について政府の態度を痛烈に劾論し、公使就任前の三浦の建議、事變後の三浦の書翰を朗讀引用して、八日事變が間接に政府の無能無策によるものたることを明白にした。

是より先き改進黨、革新黨、中國進步黨、財政革新會、越佐會、大手俱樂部等の各黨派は民黨若くは對外硬派といふ總稱で呼ばれ、戰後政府の內政外交の失態、殊に遼東還付問題の責任を糺すに熱中したが、政府の强い彈壓を蒙つ

て、已むを得ず同志會なるものを組織して各派聯合の實を保つてゐたが、二十九年一月九日、此の派の提出した上奏案が自由黨、國民協會の反對で議場に敗れるや、頓に合同の機運を促進し、遂にまだ第九議會開會中の三月一日、遂に一大政黨を實現せしめ、これを進歩黨と名づけた。散士はその常議員の一人となつたのみならず、舊革新黨を代表して假總務委員の一人となつた。進歩黨は結黨式當日を以て長文の宣言書を發表して、政府の失計、特に外交の不振を論議し「帝國ノ實勢ト寰宇ノ大機」とに顧みて玆に一大政黨を組織する旨を宣言して、左の政綱を定めた。

我黨ハ進歩主義ヲ執リ皇室ノ尊榮ヲ宣揚シ人民ノ權利幸福ヲ增進セン爲メ左ノ政綱ヲ定ム

一 政弊ヲ改革シ責任內閣ノ完成ヲ期ス

一 外政ヲ刷新シ國權ノ擴張ヲ期ス

一 財政ヲ整理シ民業ノ發達ヲ期ス

三月第九議會は閉會したが、議會閉會後數ヶ月間の散士は、黨勢擴張に懸命になつた、散士がかく政黨遊說に熱心になつたことは、二十一二年の條約改正、大同團結問題以來といつて可い。散士は四月福島に歸つて進歩黨支部發會式を擧げ、第九議會の報告演說會を開き（聽衆二千餘、入黨二百餘）、越えて七月十日、鈴木重遠、高田早苗、工藤行幹等と共に東北大遊說の途に上り、宮城縣から山梨縣、秋田縣、青森縣、岩手縣と遊說し、到るところの演說會に大成功を收めて、八月初め歸京した。後藤伯一行が東北遊說の際にも弘前で最も士氣が盛んであつたが、此の行も然りで、八月二日弘前の演說會の聽衆實に三千五百餘人、この種の會合としては類のないものである。散士はこの時母校たる東奥義塾を訪れ、雨露に文字の薄れた表札を見て昔の苦學を思ひ出して、感慨に堪なかつたと傳はる。

散士が遊說から歸つて間もなく、明治二十五年以來五年間續いた伊藤內閣も改造問題に成功せず遂に辭職し、九月松方大隈の聯立內閣が成立した。大隈は事實上の進歩黨首領であつたので、進歩黨は此の內閣の成立には相當盡すと

ころがあり、大隈も進歩黨を立脚地として新内閣に重きをなす心算であつたので、入閣に先立ち、閣臣の聯帶責任、人權尊重、行政財政の根本改革、輿論を基礎とす、政綱の發表等の條件を出し、總理松方、内相樺山等の承諾を得た。此の提議は實に進歩黨の希望を代表したものであつた。十月十二日新内閣は地方官を召集して松方總理から政綱を發表したが、その要領は――

内は國民の輿論に考へ、外は列國の形勢に察し、以て戰後の經營を畫し、帝國議會の協賛を完ふし、上下一致の効を圖り、至尊に對して大政の責に任ぜんとす○列國との交誼を敦ふすると共に、國家の權利を進暢し、貿易の擴張を企圖し、又條約上當然の効果を遺漏なく收得せんことを期す○軍備を擴張すると共に教育及び實業を奬勵するの方針を執る○言論出版集會等の權利自由を尊重保障す○行政事務を改良し、官紀を振肅せんことを期す○財政を整理し、國家經濟の擴張發達を期す（『帝國議會史綱』による）

伊藤内閣に倦みきつてゐた人心はこの新政綱に接して歡迎謳歌する狀のあつたことは事實である。是より先き大隈が入閣してから政府と進歩黨の關係は同情より提携に進み、散士及び長谷場純孝等は進歩黨を代表して松方首相樺山内相に數次會見して希望を述べ合ひ、兩者の主義大差なしとして大に諒解を深めた。かくて新政綱の發表されるや、進歩黨は常議員會を開いて正式に内閣に味方する議決をなした、要に曰く「政府の發表せる政綱は皆な方今の急務にして我黨の方針と大差なし。故に我黨は其實行を完美ならしめんことを期す」云々。但しその政府盲從に非ざることを示さんが爲めに「現内閣の實行若し非ならば、我黨は之れを攻撃するの責務を存す」と附言した。かく黨の方針が定まると共に、對政府、對議會の駈引上黨幹部を確定する必要を生じ、政務委員なる名の下に柴四朗、尾崎行雄、犬養毅、大東義徹、長谷場純孝の五人を選定した、この五人は何れも進歩黨結黨以來假總務委員として黨務に執掌して來た人々である。それが颯爽と揃つて政府を督勵して我黨政策を實現せしめるといふ得意の地位に立つたので、頗る世

人の注意を集めた。且つ散士は政務委員たる外に幹事を兼ねたので、恐らくこれは散士としては、その長い政黨生活中最も得意を感じた時期であらう。當時筆鋒苛辣を以て聞えた「日本」は五總務を月旦したが（十月二十七日）、その散士を評する語に曰く――

頭なく尾なく隱然一敵國を爲すが如き重望を負ふ既に士に於て多とすべし其靈犀の氣人多く知らず

十一月一日進歩黨は大會を開き、宣言を發して松隈内閣と提携成立せることを是認し、第十議會に於いて實現に努むべき議案十五條（新聞條例改正、集會政社法改正、出版法改正、保安條例廢止、豫戒令廢止、經費節減、臺灣行政整備、軍備擴張期短縮等々、十五條の外職工保護、小作人と地主・工場取締等の件が追加）を議決したが、その討議に先立ち散士は總務委員を代表してこの議案は政府の方針と大差なき旨を陳べて、黨員に多大な希望を與へた。東京の大會終つて間もなく、散士は再び黨勢擴張の爲め福島に赴いた。

散士が福島に赴いてゐる間に、折角提携成つた内閣對進歩黨の前途に早くも暗影を投ずる一事件が生じた、それは即ち「二十六世紀」事件なるものである。「二十六世紀」は高橋健三（内閣書記官長）が主宰してゐた政治雜誌の名であるが、此の年十月この雜誌に「宮内大臣論」と題し主として時の宮相土方久元の曠職と宮中府中の別を無視した行爲を彈劾した文章が掲載された。然るにその筆鋒が如何にも痛烈であり且つ土方の行爲が一部世人には憤慨されてゐた際なので各新聞が爭て此の文章を轉載し、忽ち全國的に擴まつた。土方はこれを見て大に怒り、言を不敬に托し、「二十六世紀」の所罰を要求した、然るに松隈内閣の成立を憚ばぬ自由黨の連中はこれに和して盛に政府の怠慢を論じ、わざと問題を重大化させた。政府部内でもかうなつては何等かの對策を講ずる外なしとなつたが、その對策について進歩黨派と薩派及び官僚との對立を生じ、前者は内閣當初の言論尊重宣言に照し嚴罰主義を不可としたに對して後者は前言を無視して嚴罰すべきを主張した。かくて嚴罰説が勝を占め、樺山内相は「二十六世紀」を發行禁止に、

又十數日前發行の關係新聞雜誌を發行停止に處した。

この一着手に見て散士等は我黨政策の實現もさう好望視されぬと感じたであらう。事實言論尊重を約束した政府は言論自由の根本ともいふべき新聞雜誌發行禁停止全廢案を容易に議會に提出するとも見えなかつた。散士等は或は有志會に於いて、或は機關紙に於て反覆その必要を論じた。その爲め十二月最終の進歩黨代議士會はこの問題をめぐつて大紛擾を生じ、遂に政府の提案なくば、第十議會開會(十二月二十五日)の劈頭に進歩黨立案の全廢案を提出するといふことに決した(實現せずに止む)。散士は重ねて松方總理を訪ふて黨內の空氣を告げ、政府の誠意ある善處を望んだ。

明治三十年一月議會は再開されたが(英照皇太后御葬儀等にて延期)、政府對進歩黨の關係は、未だ惡化するに至らず、進歩黨は豫算案に對しても、勿論不滿足だが前內閣の非政の爲めといふ意味もあるから、兎もかく三十一年度まで此の程度で忍耐すべしとして、支持の態度に出た。然し黨內の輿論をまとめるために散士等は可成り苦心をしたものらしい。散士は此の議會に於いても鐵道會議委員として熱心に盡力した。三月二十五日議會閉會となつたが、その間近に多年の懸案たる新聞雜誌禁停止權全廢案が通過したので、黨の面目が僅に立つたのみならず、黨員乃至社會の對政府感情もやゝ好轉し、三月二十九日の同黨代議會に於いては「內閣トノ關係ハ益々改善シ我黨ノ三大政策ヲ行ハシム」との好意的決議案が出た程であつた。第十議會が終るや、大隈は進歩黨側の希望を容れて、新人登庸と黨政策實現を期する意味に於いて進歩黨の領袖數氏を次官局長參事官知事等に任用した。大隈の意は此等諸子を羽翼として立憲政治の軌道を歩まうとしたものである、然し政府中の薩派及び官僚分子は黨人の跋扈を悅ばず、陰に陽に反抗して兩者屢々軋轢するに至り、內閣當初の宣言が殆んど實行されなかつた。政府內が既にかくの如くである上に、外部には臺灣の弊政、會計檢査院の紊亂、獨逸の膠州灣占領默許等の失態が續出したので、又も次第に人心が離れ、民論の

攻撃が益々急なるものがあつた。その上進歩黨内にも舊改進黨系の横暴に對する舊革新黨系の不平があり、尾崎、犬養が大隈をかさに專横を極めるのを嫉視するものも少くなく、有力黨員（鈴木重遠の如き）の脱黨をさへ招いた。黨内既にかく統一を缺いてゐる上に、内閣が政綱を實行せぬので、不平組の不平が一層昂ぶる。散士の此の間に處する憂慮は言葉で現はせぬものがあつたであらう。然し政府對黨の關係が日に日に危機を孕んで來ては、散士も怏々たるものがあり、屢々政務委員を辭したい意志を洩した。政府内でも高橋健三（内閣書記官長）及び神鞭知常（法制局長官）がかゝる對立的形勢を患へ、これが解消策として何よりも先づ當初の立憲的政綱の實行を松方總理に進言した。松方は二人の言を是と知つたが、優柔不斷の後入齋であるから押し切つて實行することが出來ぬ。勿論薩派や官僚分子の背後には自由黨邊の大小天狗の策動が利いてゐるので、益々政局は紛糾するばかりである。高橋と神鞭は、かくなつてはと内閣の前途に見切りをつけて、十月四日斷然辭職した。大隈はこの形勢に大に決するところあり、十月二十日松方總理に左の件々を提議した、曰く大に弊政を刷新すべし、非立憲的行動を嚴禁すべし、伴食大臣を罷黜して内閣の統一を圖るべしと。松方は大隈の言を諒としたが、例の優柔でこれを裁することが出來ず、却つて薩派の激昂を煽る結果になつた。事玆に至つて進歩黨も憤慨禁ぜず、異常の興奮をもつて、内閣が宣言を實行せぬことを高唱し大會を開いて黨の態度を決することゝしたが、その前に、黨常議員會を開いて（一）内閣改造（二）臺灣弊政の革新（三）經費の節減（四）憲政の完成の四項を決議し、委員を派して松方に交渉せしめた。勿論第一の内閣改造が主眼であつたのである。松方はこれに對して一應の考慮を諾し、互ひに交渉内容を祕密にすることを約したのであるが、これが端なくも進歩黨機關紙の洩らすことになつたので、松方は大に政黨の不信を怒り、十月二十九日、進歩黨の委員に書を與へて、閣臣の進退には第三者の容喙を許さぬ旨を語り、交渉要件を一蹴してしまつた。進歩黨も三十一日常議員會を開き、内閣と提携を絶つ旨の決議をし、左の宣言書案を作つた、曰く——

吾黨ハ既往ノ事蹟ニ徵シ現內閣ハ其宣言ヲ實行スルノ誠意ナキモノト認ム因テ自今提携ヲ絕ツ

越えて十一月四日進步黨は代議士總會を開き、この案文を可決した。散士は政務委員を代表して、提携破棄の已むべからざる所以を述べ、且つ昨年この提携の爲めに奔走した自分等の行爲に對して深く愧謝の意を示した。

東海散士柴四朗氏は深く慷慨の氣を藏し肅然として襟を正し今日提携破棄の已むべからざる所以を報道し且つ曰く元來予の昨年提携を議するに當り總務委員を代表し責任を以て我黨の方針と現內閣との方針は大差なき旨を語りしは決して吾輩の揣摩臆測に出づるにあらず既に予及び長谷場君は總務委員を代表して閣員中最勢力ありて而して閣員を代表して面會せる某伯（樺山）に會し相互に宣言書を對照したる後同伯より大差なしとの確答を得て而後言明せるものなりき爾來新聞雜誌の禁停止を行ひしより失政惡令相踵で起れり予は實に此の頃よりして食言不明の失決して免るべきにあらざるを以て幾度か辭意を提出して荏苒今に至りしなり此際まだ輕々しく黨の進退を決すべきを諸君に謀らざりし所以のものは尙ほ一縷の光明を認むるものあるに由れり而して今や乃ちなし霜を踐んで堅氷至る神鞭高橋の勇退は偶々以てその一端を窺ふに足れりこれ本案の由て起る所なり事既に此に至る吾輩總務委員の微力と不明とは深く諸君の望に背く所あり吾輩等偏に之を謝し責を引て職を辭せんとす請ふ之を諒せよ云々（五）

これより先き、大石、犬養等は、伊東巳代治等と策謀し伊藤大隈の聯合を計らんとしたが、成らなかつたといふ。進步黨が既に絕つた以上、大隈は內閣に留ることが出來ぬので、十一月六日辭表を提出した。進步派の新任官吏は勿論連袂辭職した。かくて進步黨は第十一議會召集前大會を開いて氣勢を揚げ『現內閣ノ更迭ヲ期ス』との決議をなし、此の方針で新議會に臨むことになつた。

政府は大隈の辭職を機として薩派本位の移動を行ひ、進步黨の代りに自由黨と提携して新議會に臨まうとした、自由黨中の軟派分子は渡りに船と御用を勤めやうとしたが、硬派の反對で成立せず、黨としては內閣反對に決し、遂に

黨大會では議會劈頭內閣不信任案を提出することになつた。國民協會は高島等の薩派大臣と特殊な關係があるものが多かつたに係らず、來るべき議會に於いては內閣反對に決した。かくて十二月二十五日第十一議會の劈頭聯合反對黨から果然內閣不信任案を提出した。政府はその通過が明白なのを見て、即日議會を解散し、而かも自らも辭職したのは奇觀であつた。薩派の樺山、高島等は居殘つて百方內閣改造を試みたが、遂に成らずして矢張り去つた。此の最後の一擧によつて、この內閣は政治史上蠻勇內閣の異稱をかち得た。

此年十一月新領土臺灣の開發を目的とした臺灣協會が創立されたが、散士も創立委員に加はつた。

日清戰爭以後、散士の一身が政局に關係するところ多く、我ながら詳叙を必要とした。吾等は今や明治二十五年から三十年に至る政界に於ける散士の行藏を語り了つた。明治三十年は『佳人之奇遇』の續篇三篇が發表された年で、散士の生涯中『佳人之奇遇』時代の最後をなすものである。吾等は既に柴四朗としての散士については、先づ能ふ限り十分に語つた、こゝで筆を轉じて『佳人之奇遇』の著者たる東海散士本來の面目を描かなくてはならぬ。

註（一）　二十八年九月三日附、陸奥より谷宛書翰（『谷干城遺稿』下卷）

註（二）　二十八年九月八日、國會新聞記事

註（三）　二十九年二月二十三日——三月一日「八日事變の原因」（東京朝日新聞）柴四朗、國友重章

註（四）　二十九年二月二十七日、東京朝日新聞及び東海散士著『日露戰爭羽川六郎』に引用あり。

註（五）　三十年十一月六日、日本新聞

八　『佳人之奇遇』六編——八編

『佳人之奇遇』六——八編は共に明治三十年の出版で、實に五編を出版した明治二十四年からは六年後に當る。五編

出版の際、散士自身が當分この編をもつて打切りとしたい如き口吻を洩し、又世間讀者の側でもこれを以て完結と見なしたことは、五編の條に述べた。而して爾後六年間は全く續篇の公刊を見ずして過て來たのである。若し散士が必ず『佳人之奇遇』の續篇を著作しなければならぬと考へてゐたものならば、代議士生活が如何程多忙でもそれが出來たであらうし、又日清戰爭後に於いては兎もかく戰爭以前に於て、即ち二十五、六年の交に於て一二編の續筆を許さぬ程多忙であつたとは考へられない。然るに日清戰爭後から二十九年三十年にかけて、散士の政治生活が却て甚だ多忙であつたのに、かく三篇の續筆が一時に出版されたといふのは正に異常と見るべく、單に「書きかけのものを書きつゞけた」といふ以外に、それ相當の理由がなくてはならぬ。種々な點から推想して、私はかう考へたい。第一、二十七八年から九年へかけて散士は異常な政治的體驗をした、平生比較的無波瀾の書生的生活を送つてゐる散士としては眞に波瀾重疊の生活で、想像的感受力の強い散士は自らにして小說中の主人公たるかの如く感じたであらう、こゝからして小說執筆の興味が旺然盛返して來たものとは見られぬであらうか。第二、身自らかゝる政治的紛糾の渦裡にあつて未曾有の活劇を見聞した散士としては種々述べたく語りたい事柄が多かつたらう、然るに當時著作出版の上にまだ忌諱が多く直敍實寫を許されぬ點が少くない、こゝで再び政治小說といふ小說形式の便をかりなければならぬ必要が生じたとも見られる。第三、散士從來の持論たる歐人東侵に備ふべき事實が年々明かになつて行くのみならず、散士としては日清戰爭後政治小說によつて殊に國民大衆に警告すべき新な對象（露國の野心）を見出したことも數へられる。第四に、時代の要求といふ如きことも考へられはせぬか、明治二十三年國會開設後、國會の現狀を見て政治に對する興味なり感激なりを失つた人々が多かつたが、二十七八年の戰後で未曾有の國民的興奮を味ひ、三十一年憲政黨內閣の出來るに及んで、政黨內閣といふ明治十年代以來の理想が實現されたことゝて單政治社會のみならず一般社會の人々にも可成り政治に對する興味を恢復させた。この興味が文壇に反映して政治小說著作論となる(一)、二十

三年以後文壇にかゝる論が流行したことは珍らしいことである。二十九年の松隈內閣は、それ自身決して政黨內閣ではないが、大隈の入閣が全然進歩黨の黑幕首領として進歩黨を立脚地に成されたものであり、黨と內閣と政策の協定が行はれ、黨の政策を內閣が實行するといふ點で半政黨內閣、政黨內閣の前驅といつても可い、即ちこの邊から政治に對する世人の興味が徐々に高まりつゝあつたと見るべきであらう。この意味で、『佳人之奇遇』の續寫が松隈內閣（二十九年）と憲政黨內閣（三十一年）の中間たる明治三十年に出現したことは、政界と文壇の交涉上にも多少必然的な理由をもつと考へられても可いであらう。以上四條の理由を綜合すると『佳人之奇遇』續篇出現の動機がやゝ明白に說明されるかと思はれる。

　先づ續篇三編の梗概を語らう。

（六編）明治十九年三月から四月へかけて、凡て散士が谷將軍の祕書官として渡歐する途中の出來事となつてゐる。

　發端は香港發の船中である。散士は香港より新嘉坡に向ふ船中で端なく意外とも意外の人と會ふ。それは生ける范卿である。散士は、先に紅蓮の物語によつて范老の死を信じてゐた、然るに其後白雲山下から三策を投じた人物が范卿らしいので范卿の生死に多少の疑問をもつが、いざこゝで彼に會ふと大に驚く。范卿は散士に二妃と彼とが難船した時のことを話す。范卿の物語によれば、彼は二妃と離れて佛國の東洋巡察艦に救はれたのである。范卿は夙に佛國が東洋に異圖あるを知つてゐたから、わざと乞て佛艦のコックとなつて形勢を窺ふことにした。范卿を載せた佛艦がアレキサンドリア港に泊した時は丁度同港に變亂が起り、白人が避難して來た（即ち二佳人もこゝにゐたのであるがそれとは知らない）。佛國に人があつたら、この際直に上陸して長驅カイロを占領し、アルゼリアと連携して英國の勢力を一掃することも出來たのだが、英國に遠慮してそれをしない。范老の乘つた佛艦はマダガスカル島に向はうとして、アフリカの西岸自由國に碇泊する。これはアフリカ唯一の新立自由共和國であり、一時「亞非利加ノ幽闇ヲ照破

シ雲霧ヲ披キテ青天ヲ望マシムルモノ」とまで有望視されたものであるが、徒らに歐米の施設を模し、外債によつて事業を興したので、國勢が次第に凌遲して來、且つ內政上の爭闘を繰返し政權爭奪に夢中になつてゐるので國家の實力は歐人に握られて亡國に垂んとするに至つた。これは偏へに誤解された自由民政と皮相の歐化主義との致すところである、范老と散士は語り合つて嘆息する。然しこの自由國よりまだ甚しいものはマダガスカルである、マダガスカルは世界第三の大島で儼たる一王國であつたのに、外敎を入れ、歐風に心醉した揚句、遂に佛國に併呑されるに至つた（散士洋行の時はまだ佛國と抗爭を續けてゐたが、わが明治二十八年遂に國亡んで佛國の領有となつた）范老の佛艦はマダガスカルから東京及び淸國方面に向ひ佛軍の應援をしようとする。艦が東京につくや、佛將は范老を諭して間諜たらしめる。范老は佯つて承諾し、わざと黑旗軍の捕虜となつて黑旗軍の謀將顧江寧に近づく、江寧は范老の舊知である。范老は江寧に授くるに、淸佛共に勝たしむべからざるの計を以つてする、佛國が勝てば東洋の門戶が破れるからであり、淸が勝てば明朝復興の大計が行はれぬからである、宜しく逸に依つて勞を惱ますべく、巧みに淸佛を戰はしめて自ら勞するの愚を避けよといふ。江寧はこれに從つて諒山の大勝を得た。范の狙ふところは、日本が朝鮮事變（十八年の）を理由に淸國に挑戰せば引いて東洋の大亂となるべく、この機に乘じて日本と應じて明朝を再興せんといふのである。それで白雲山下に歸つて天下の動靜を窺つてゐたが、日淸の間も、淸佛の間も、范の所期の通りは進展せず、双方とも和議となつたので、今再び東京に出かけて江寧に一奮發せしめようとするところだといふ。これで范老の物語が終る。

船がセイロンに着くや、散士は谷將軍と共に埃及の敗將アラビイ・パシャを配所に訪うた、その意はアラビイに埃及亡國の原因を尋ねて日本將來の鑑戒にしたいといふのである。アラビイは將軍來訪の眞意を知つて大に感激し、埃及亡國と歐洲人の詐術を具さに語つた。歐洲人が、先づ欺くに宗敎の道を以てし、漸く外債の利を以て誘ひ、終には

武力を以て强壓して國の死命を制するに至る順序を聞いて、將軍と散士は今更の如く日本の爲めに寒心すると共に、益々歐米崇拜の非を悟る。折から、アラビイ訪問の外人客が多數來たが、散士等を見てからかふやうに、頻りに日本近來の所謂進步（卽ち外國文明崇拜）をほめるので、心中大に赤面した。別れに臨んでアラビイは散士等に埃及の新戰場を訪ふて勇士の靈を慰めんことを請うた。

將軍及び散士はスエズで一行と別れ、上陸してアラビイの新戰場を見つゝ行くに感慨に堪へぬことが多い。行いてカイロ府に宿る、翌日ピラミッドに登り、俯仰古今數千年の歷史を思ひ、埃及亡國の由來、權臣の外國崇拜が禍亂を招いた始終を想ひ、ナイル河の浩蕩たるを眺めては人民の不幸を悲しんで大に傷懷を增す。此の夜、宿の主人が無名氏の英文書翰を散士に渡す、これより先きカイロに來る途中、汽車の東西に擦れ違つた際、向ふの車中に一佳人があり、散士を見て愕いて車窓を明けんとしたが、それなりになつた、散士も何となく幽蘭ではないかといふ氣がしたが東西に別れる汽車のことで如何ともし難かつた。この夜、この書翰を見て愈々幽蘭が近くにゐるのではないかといふ氣がする。然しこの書翰は謎語の如く、散士もその意を十分解し得ないが、差出人の一身が監禁されて自由を得ぬといふ如く受けとれた。

翌日散士は埃及中興の英雄メヘメットアリの故宮に遊んでその幽魂を弔し、舊カイロ府の荒廢せる樣を見物し、遂にナイル河中のロウダ島に遊んだ。島の一小樓の傍を過ると、樓上で美人が讚美歌を唱へ琴を彈じてゐる、その聲で何やら聞覺えがあるが、姿は小窓細簾に遮られてよくわからない。だが友人や家主の怪むところとなるのを恐れて、躊躇しつゝも立ち去つたが、遙に振り返つて見ると、美人も自分に氣がついたものゝ如く手招きしてゐるらしい。この夜散士は再び一人でこの小樓に引返して佳人の幽蘭女史であるか何うかを確めようと試みる。さうして月光によつて佳人の幽蘭たるを認めるが、その途端樓の番人の爲めに撃たれて氣絕してしまふ。だが幽蘭の介抱で間もなく蘇生

し、二人は一別以來の物語をする。

幽將軍はテルケベルの血戰の後、カイロに引上げてアラビイに說き、內地に退いて持久の計を行ふことを勸める。然し國王が英艦に逃れて却てアラビイ追討の勅を出したので、軍氣沮喪してこの計も行はれぬ。幽將軍は獨り部下を連れてスーダン地方に赴き、僞聖マージを助けて英軍と一決戰せんとし、幽蘭に告別し、費府に歸つて後圖をなせといふ。幽蘭が一緖に行くといふのを許さぬ。そこで幽蘭も自分の手傳つてゐた病院の創傷者に告別して病院を去らうとしてゐると、忽ち變亂が起り、病院に闖入して來た亂徒によつて捕はれて了ふ。亂徒に父の行方を訊ねられたが知らぬので、そのまゝ監禁された。そのまゝ何の調べもなく二十日ばかり經つたが、やがてそれを許されて、何處か大きなお邸に連れて行かれた。監禁を許されたのは勢力ある一王子の取りなしによつたのだが、一難去つて又一難で、今度はその王子の橫戀慕に惱まされた。勿論幽蘭はそんなことを聞き入れはしないが、父をかせにして迫られるのには弱つた。王子は幽將軍がスーダンで捕はれて死刑にならうとしてゐると嚇かすのである。ところが幸ひ王子の衆孀を監督する老女がキリスト敎徒であつたので、奇計を用ゐて幽蘭を逃し、自分の親戚の家に潛ませてくれた。これが卽ちロウダ島のこの家なのである。王子は嚴重に幽蘭の行方を探したが勿論分からない。この頃探索がやゝ緩んだのでひそかにテルケベルに出かけて戰死者の靈を弔つて來た、散士を汽車中に認めたのはこの時である。それで書翰を托して宿へ屆けさせたのであるが、然し果して散士かいなかがわからぬので、文意を曖昧にして置いた。今夜家人が散士を拏つたのも、王子の探偵と誤まつたからである。

幽將軍はその後腹心の士を寄越して幽蘭に消息を傳へた。それによると、將軍は遂にマージに會ひ、頗るその敬重をかち得てゐるといふ。マージの一軍がカーツウム城に英將ゴルドンを圍んだとき、將軍はゴルドンに書を送つて、開城して歸國せんことを勸めた、だがゴルドンはマージの實力をさう大したものと考へず、將軍の勸告を拒んだので

遂に城が陷落して亂兵の手に斃されるに至つた。

散士は幽蘭に、紅蓮と范卿の生きてゐることを語り、且つ先にコッスート夫人から受けとつた幽蘭の指環を示した。幽蘭は、紅蓮が蹄水の舊居で暫時散士と歡會したことを聞いて、散士と紅蓮と誓約がありはせぬかと疑つたが、散士が今夜の訪問を以つてさうでない證據としたので、幽蘭は喜んだ。散士は官命があるので幽蘭と共に歐洲を訪へないことを悲み、その代り行資を贈るから、早くこの危險の地を脫して費府で天運の循環を待たれよと勸める。幽蘭は紅蓮に一書を認め、これを封して散士に托した。

（七編）前編に續いて十九年七八月の交から二十年四月頃までの出來事で、全編散士洋行中の見聞がその中心になつてゐる。

叙述の筆が洋行の日程によつて進めてあるので、第五節の十九年洋行の條を參照せば散士の足取りが大抵分かるので、この編の梗概でもその邊のことは略し、たゞ散士の見聞感慨の一斑を記すに止める。

散士が歐洲各地の遊歷中、注意を惹かれた國の一つは土耳其中心のバルカン半島である、當時バルカン半島は正に多事の秋で、土耳其希臘が相戰はんとし、又ブルガリア王アレキサンドルが露國の陰謀脅迫に憂憤して生國獨逸に歸るなどの出來事があつたので、遠客の注意を惹いたのも無理がない。散士は一度陸路バルカン入りを企てゝ果さず、（惡疫流行）、遂にオデッサから海路をとつてコンスタンチノープルに入る。その途上、ポーランドの舊都を訪ねて深く亡國の感にうたれた。又オデッサでは虛無黨嫌疑者と稱さるゝ老幼男女の一行を見て、政府の壓制を憤り人民の不幸に同情を禁じ得ない。土地人に虛無黨のことを聞き露國內の立憲自由に對する要求が必死的なものであるを知り、露國の病患が國の外にあらずして內にあるのを見て、又大に首肯するところがあつた。

コンスタンチノープルは實に歐亞の咽喉を扼す形勝の地である。散士はこれを見て露國が此の府に垂涎するのも亦

に理由があることを悟つた。散士同船の一露國士官は早晩露帝の玉座を此處に移す機あるを明言し、益々バルカンの多事を思はしめる。且つ士官は散士に對して、露國が淸國に對しても經略の意あることを洩す。散士が露國の東方經略の態度如何によりては日本と衝突する危險ある旨を警告するや、士官は露國のためにその然らざるを辯じ、且つ日本は露國に危懼するよりも英國の東洋に於ける世界統一策實行に注意しなければならぬといふ。

散士が土耳其に於ける見聞も、徒らに老大國の末路衰亡に垂んとしてゐることを示すものが多い。殊に驚くべきは宮廷政府の腐敗である。一日有名なオスマン・パシヤ等と語つたときも、パシヤは、今日露國と再戰しても幾十萬の露兵は恐れるに足らぬが、問題はたゞわが國宮中府中の改革が出來ぬ點にあると語り、土耳其の宮中府中が外人黨に動くことを痛嘆し、日本は此の土耳其の大患を學んで外人黨派を作らしむる勿れと忠告した。此の歳の暮、散士は隈なく土都を遊觀するに及んで、歐洲のが巧言の害がこゝに至るかと慄然とした。折も折、ジプシイの一團を古城廢垣の下に見る、その語るところを聞いて、彼等こそ理想的自由人たるを知り、故國の内外多事に想到して「人生ヲ大觀スレバ富貴榮華モ眞ニ一場ノ夢ナル哉」の嘆を發せざるを得なかつた。

散士は小アジヤ觀光の情に堪へず、ブルサの舊都に渡り、イウフラティス河畔にエデンの樂園の迹を尋ね、轉じて露領黑海沿岸カウカサスの地に到れば、天然の富源と人工の精と俟つて、實に露國南下の根底覇業の府庫たるに恥ぢない。實に露國をして東方侵略に鵬翼を振はしめるに至つたものはこのカウカサスの富源があればである、而してこれが又抑も十餘年前土耳其から略取したものなのである。散士は露國のカウカサス經略を回想すると共に、身命を賭してこれに反抗した快漢車彌兒（シャミイル）を懷つた。

散士一行はやがて土耳其を辭して希臘に向ひアゼンス文化の名殘を見、アクロポリス、マールス丘、ジュピター宮、オリンピック闘技場からソクラテスの石牢、デモスセネスの演壇等に感慨大方ならず、遂にセルモピレーの古戰場を

望んで古スパルタ人の勇武を想起した。

　希臘から羅馬に赴いて法王の大寺院を拜し、法王領の盛衰を尋ね、シイザア、オクタヴィウス、ケトウ、シピオ、シセロ等幾多英雄の遺跡を撫し、暫時滯在の後北方伊太利の都チュリンに赴く。こゝにはハンガリィ獨立戰爭の老英雄ルイス・コッスートが隱栖してゐる。散士は勿論コッスートを訪ふて起居を問ひ、且つ國事について敎を乞ふ（愛孃のコッスート夫人は病氣でゐない）。散士の質問の眼目は當時の日本朝野の大問題條約改正について、散士等の國權的主張正しきか政府有司の歐米迎合的讓步が當然かを聞かんとするにある。コッスートは歐米諸國の現勢から兵力によつて日本と條約改正の當不當を爭ふ國がないことを說き、英露利害相反して一致の行動に出られぬことを暗示し、要は國民一致斷の如何にあるのみと敎へる。散士が試みに露國に結んで英に當る問題を提起するや、コッスートは我が意を得たりとばかり露國論をする、日本としてはたゞ條約改正に利用するのみ、露國は遂に親むべき國ではない、露國は世界統一策を抱き、これを實行するに手段を顧みないとて露國の事を極論する、これは重要な問題であるから後に詳しく說くとしよう。尙ほコッスートの所謂歐洲三大禍（軍備過大、合從乖離、貧富懸隔）についても、その時に讓ることにする。

　散士が歐洲大陸を辭し、ロンドンに渡つて國會を傍聽したが、折柄議院にはビルマ占領是非論が鬪はされてゐた。散士は東洋の弱國に對する强英の亡狀に心中大に不平なるものがあつたが、然し同じ英國でもビルマ占領の名義正しからぬを高唱する正義の士があるのを見て、幾分の氣强さを覺える。

　（八編）十五、十六の二卷は年代的には可成り長い間を cover する。卽ち十五卷は明治二十年五月の交より、明治二十四年春に至り、十六卷は同二十四年春から二十八年冬に至る間の出來事を含んだことになつてゐる。

　散士は航米の途中、船が愛蘭に舶したとき、端なく紅蓮と同船する。紅蓮はパーネルの密使オブライエンの一行中

に加つて英領カナダに赴く途中である。紅蓮は散士の問ひに應じて王羅に苦しめられた顛末を語つた。紅蓮が蹈水の民を發し、歐洲に渡つてパリに入つたが、これは丁度王羅の張つた網に自ら落ちたものである。王羅は、紅蓮を誣ひるに自分の前妻を殺したといふ罪をもつてし、パリの警察の力によつて紅蓮を捕へようとする。紅蓮はイタリイに奔らんとして果さず、汽車飛移りの冒險をして一時を逃れ、パリに滯つたが、遂に警吏に捕はれて入牢せしめられる。だが公判廷に立つに及んで、紅蓮は前囘ガンベッタに會つたことを證言として辛うじて王羅の姦計を破り、晴天の身となることが出來た（王羅は却つて逮捕されてスペインに還送される）。紅蓮の語が幽蘭に及んだので、散士は先きに幽蘭から托された書翰を紅蓮に渡した。紅蓮はこれを讀んで怒るものゝ如く泣くものゝ如くであつたが、内容の如何は分からない。散士が問ふてもそのうち自然に分からうとのみで、答へない。二人は更にコッスート夫人や范卿のことを種々語つた。談、パーネルに及ぶと、紅蓮はパーネルの淫行を罵り、これによつて大事を破らんと歎くのを聞き散士は半信半疑であつたが、後果して紅蓮の言の如くであつた（パーネルとキャプテン・オーシア夫人の姦通事件を指す）。

この後散士は米國を經て歸朝したが（六月）、間もなく谷將軍が封事を奉つて挂冠するに及んでこれに殉じて辭職した。散士は「城西ノ一元老」の問ひに應じて時局に對する根本意見三條を述べ、直ちに都門を去つて興津の淸見寺に寓した。これより後は條約中止請願運動といひ、保安條例の發布といひ、皆散士傳中に記すものと同じ。同志交友にも種々な變化離合がある。二十一年散士の最も相許した淸狂居士（馬場辰猪のこと）の死に會つて深く悲んだ（祭文がある）。これよりして――

散士意益々無聊世事又心ト違フ會々不慮ノ傷ヲ負フヲ以テ暫ク世煩ヲ有馬ノ溫泉ニ避ク

此の記事は甚だ簡潔であるが、無量の感慨が籠つてゐることは、散士の傳を反覆されゝば分かる、有馬行は前記の如

く二十二年四月である。

病少ク癒ユ乃チ居ヲ函山ノ南熱海梅園ノ上ニトシ自ラ草萊ヲ剗除シテ一小廬ヲ抖擻ス是ニ於テ昔日蒙茸ノ地今ハ則チ茂林茂リ脩竹秀デ奇石出テ清泉湧ク且廬ヲ去ル數弓一飛瀑アリ層ヲ爲ス三下ヨリ之ヲ仰ゲバ白絲紛絮巖ニ觸レ石ニ激シ斷續飛騰欄ニ凭リテ之ヲ聽ケバ風雨ノ驟ニ至ルガ如ク琴瑟笙篌並作ルガ如シ首ヲ矯ゲテ天下ヲ望メバ海雲變幻七島依稀或ハ蒼波紅暾ヲ吐キ或ハ氷輪潮ト湧キ以テ曠如ノ懷ヲ暢ブベク以テ奥如ノ目ヲ娛マシムベシ（卷十五、四十丁表裏）

これが散士の別莊所謂磊々軒なるものである。かくて散士は悠々閑適、漁獵と讀書を樂んで將に老んとするものゝ如く、老莊屈原を理想とするものゝ如く見える。かくの如きが二十三四年の散士の生涯の大半であつたのであつた。

一日（卽ち二十四年春の交）范卿の徒で散士の同志たる鈕叔平の密使（朱鐵）が散士をこゝに訪れた。叔平の來書の要旨は、我等の祕密血約は既に淸廷に知られたから、捕へられて刑死されるのも日がない。だから仕方がないから兼約の如く南北擧兵の實を行はうとする、丁度國內頑固者流が哥老會などと合して外敎及び外人の排斥を企てゝゐるから、その騷動に乘じて起つ心算である、貴國遊俠の士にして此の際渡來援助されゝば、これに越す幸甚はない、といふのである。然し事を擧るは范卿の知らぬところだといふので、散士はその失敗を危み、一友人を密使に伴はしめて歸國せしめ、叔平の擧を中止せしめんとしたが時已に及ばず、叔平一敗塗地、捕吏の手に死んだ。鈕叔平は『佳人之奇遇』第四編の序（百字引）に見ても實在の人物たるは明白だから、此の二十四年叔平の密使の一節は、散士の補傳として役立つであらう。

これ以下の分は二十四五年來の日本對外交涉の實錄であり、從つて詳しく梗概の如きを述べる必要はないが、散士の傳記と相表裏するものがあるので多少述べざるを得ない。卽ち——

義キニ我國數々條約改正ニ失敗シテ國威外ニ伸ビズ憲政ノ組織ニ疲憊シテ上下內ニ軋轢スルヤ朝野常ニ其見ヲ異ニシ政府議會ヲ解散スル毎ニ百揆叙ヲ失ヒ物論恟然政府施政ノ道ヲ誤リ國民適從スル所ニ迷フ

これが國會開設後數年間の內政爭鬪史の概要である、その結果は如何といふに——

西人相語リテ曰ク立憲政事ハ東洋諸國ニ適セズ日本ヲ誤ルモノハ外患ニ非ズシテ內憂ナラント淸人亦我現狀ノ斯ノ如クナルヲ見相和シテ嘲リテ曰ク橘淮北ヲ踰エテ枳ト爲ル倭人徒ニ泰西ノ文明ニ眩惑シ妄リニ其俗ヲ易ヘ風ヲ移サントス豈沐猴ニシテ冠スル者ニ非ズヤ云々（十六卷、四丁表裏）

かくて淸國は韓國併呑琉球恢復の大野心を起し、先づ韓國に兵勇を送り、實力によつて貿易の全權を自分の手に收めようとする、日本政府はこれを見ても知らざるもの丶如く「優柔不斷唯其逆ハザルヲ期ス」といふ態度である。淸國のかゝる侮日的進出が日淸戰爭となつたわけである。金朴事件、韓國の虐政と朋黨禍、大院君と閔黨、東學黨の亂、東學黨と日本志士との交涉、淸國の野心、日本の派兵、日淸戰爭までの經過について、散士は本文中に如何にも簡明に語つてゐる。而かも日淸戰爭を論じて——

蓋我國振古以來兵ヲ海外ニ出スモノ少シトセズ而シテ其遺算ナク鴻功偉烈未ダ斯ノ如キ大捷アラザルナリ然レドモ退キテ細ニ之ヲ尋譯スレバ是レ范卿ガ十餘年前ノ獻策ト符節ヲ合スルガ如シ嗚呼亦奇ナリト謂フベシ（十六卷、十七丁表裏）

といつてゐるが、これは自讃の語に似て、自讃とはいへないものがある。更にこの間の散士自身の役割については自ら語つて曰ふ——

散士淸國膺懲朝鮮扶植ヲ唱呼スルヤ年アリ是ニ於テ其風雲漸ク將ニ急ナラントスルヲ見テ孤劍雞林ニ入ル（中略）散士雞林ニ入ルモノ一歲四回微力ヲ王師ノ征淸ト朝鮮ノ獨立トニ致サント欲ス（十六卷、十六丁裏—十七丁裏）

それで、戰役の間、「我執權者」を見て、對韓策の一定、その簡易卽實、恩威併行を先にすべきを說き、根本的制度改革は後にすべきを說いたが、執政者は聞入れなかつた。

散士が京城にゐるころ、一夜交友十餘人を招いて觀月の宴を張つた（恐らく二十八年、九月）。戰爭直後のことで主客懷を開いて時事を談じ、雄辯四筵を驚かすものがあつた。そのうち俠遊子、奇矯生、沈淪子、達觀道人、後樂隱士、孤憤士、靑雲閑人、三省老人等の意見が本文に記されてゐるが、日淸戰爭に對する總評として極めて興味があるものである。

三國干涉後、露國の進出となり、閔黨の擡頭となり、三浦公使の出馬となり、十月八日の變となつたことは、既記（七）散士傳中にある通りである。十月八日の變が在韓外人によつて誇大に傳報されるや、政府は狼狽して三浦以下の文武官を召喚し、岡本柳之助以下に退韓を命じ彼等を廣島の獄に投じ、散士もその數を免れず、入獄の身となつた。

散士廣陵ノ獄ニ繫ガル陰房僅ニ數笏殆ド身ヲ横フニ過ギズ坐臥無聊以テ悶ヲ排シ鬱ヲ遣ルナシ

然るに一夜「更闌ケ人靜リ萬籟俱ニ寂タリ忽チ李豐榮古筠居士ノ枕頭ニ來ルアリ」云々。豐榮は二十九年二月十一日の變に、閔妃殺害の張本人として刑死された硬骨漢李周會であり、古筠居士は金玉均たること勿論である。李は金に寃を訴へる。卽ち十月八日事變の責を一身に負はされたことを意外とし、二月十一日事變に對する日本政府の態度に遺憾の意を示してゐる。李の刑死は散士出獄の後であるから、廣島獄中散士の夢裡にその幽魂が入るわけはないが、これは小說の手段によつて散士彼自らの寃を語つたものと見て可い。金が李を慰める語には、人事の爲すべからざるを知つて天道を悟つた趣きがあり、朝鮮の獨立をして凡て天道に付し、老子の「天下ノ至柔ハ天下ノ至剛ヲ馳騁ス」の語を假りて朝鮮の將來に一脈の望を繼ぐところは、當時としては意味深長の暗示である。散士は二人の物語を聞くともなしに聞いて――

錚然驚キ起テバ正ニ是レ鐵窓ノ一夢覺メ來レバ風雪怒號四壁闇黒長夜漫々唯警邏劍履ノ響琤々タルヲ聞クノミ

此の一段をもつて、一部八編十六卷の長篇政治小説『佳人之奇遇』は結了してゐるのである。

以上『佳人之奇遇』の最後の三編で、散士の政治的イデオロギイを窺知すべき箇處、暗示寓含されてゐる場面は多多ある。老范卿との問答、アラビイとの對話、ピラミッド頂上の感慨、バルカンの近事、ロシヤの内患、露人の野心（以上六編）、コッスートの談論、英國議會の觀察（以上七編）等の叙述は、その意味で最も注意を要するところばかりである。第八編に至つては、殆んど時事に對する散士の政治的意見を直寫したもので、これは特に擧げるまでもな第八編は別としても、散士が六、七兩編に寓してゐる政治的イデオロギイも、それぞれ時事と緊密に結合してゐい。るものであり、單に理想論を掲げ出してゐるばかりではなく、これから割出して時事の批判に及ぶか、乃至批判を暗示してゐる。然し三編を通じて、その政治的意見の根底に國權伸張、東亞振興の主張が貫穿してゐることは、上記諸編と同じ、寧ろ上記諸編よりも色が濃いといつても薄くはない。且つ八編の如き場合に於いては、言辭があくまでも切實を極めるが、これは直接二十年以降の時事を取扱つてゐる上から止むを得ぬことである。

老范卿との問答は、既に梗概中に大要を紹介したから、こゝでは繰返さない、たゞその中に亡國マダガスカルに關する散士及び范卿の觀察があることを想起されたい。さて范卿の次に來るものは、アラビイ・パシャの慷慨談である。パシャは、前にも暗示した如く、歐人が東洋人を欺く二手段として、宗教と外債を擧げてゐる。アラビイは散士等に對して先づ宗教に用心せよと忠告する。歐人は最初は蜜の如き甘言で博愛の福音を說くが、それはその詐術を行ふ第一の手だといふのである。

天帝ハ一ナリ私親ナシ宇内ヲ照臨シ一視同仁ス四海ハ兄弟ナリ文明ノ世何ゾ邦ト人種トノ異同ヲ問ハン智術ノ長短

ヲ交換スルハ社會ノ職責ナリ有無相通ズルハ人世ノ通義ナリ耶蘇ノ本領ハ衣ヲ解キ食ヲ分チ强ヲ抑ヘ弱ヲ扶クルニ在リ各邦平和親睦ヲ締盟セバ萬世亡滅ノ憂ナシ若シ一國不良ノ謀アラバ萬國公法ニ據リテ天下共ニ之ヲ伐タンノミ云々（卷十二、三丁表）

かういふ調子で來るから未開の弱國は感激して彼等の宗敎に從ふ、これが歐人の詐術成功の第一步である。これが成功すると、彼等は漸を以て第二步に移る、詐術の第二步は貨幣運用の說である、つまりその手段を道から利に及ぼすわけである。歐人の說にいふ——

凡ソ貨幣ナルモノハ物品交換ノ量器ナリ其價ヤ毫モ物品ト異ナラス是故ニ物品ニ需用供給ノ動カス可カラザル原則アリ（中略）貨幣ノ需用供給モ亦此原則ニ率シテ動カス可カラズ故ニ一國ノ富ハ貨幣ノ多寡ヲ以テ計ル可カラズ一國强ヲ圖リ富ヲ增サンガ爲メニ貨幣ノ缺乏ヲ感ゼバ則之ヲ需用寡ク供給多キ他國ヨリ借ル可シ低利ノ資本溢レ來リテ其國ノ產業ヲ振起セン是レ天然ノ數經濟ノ理人世ノ通義ナリ（卷十二、三丁裏——四丁表）

そこで東方弱國の人民はこの高尙な經濟の理に迷ひ、文化的施設なり軍備擴張なりに貨幣不足を生じた時は好んで外債を募らんとする。然しこれは、熟思すれば實に歐人の詐術の第二步をして成功せしめるかせしめぬかの境界で、國家隆替の機ともいふべきものである。凡そ外債を起すには「時勢ト債權トヲ選バザル可カラズ」、古來弱國で外債の爲めに國を誤らぬものが稀有である。一度返償の期を愆まるや、佛面は鬼面となり、巧言は威嚇となり、遂に自國の利益を保護すると稱して腕力を用ふるに至る。これが第三の手である。

以上はアラビイ・パシャの埃及について語るところであるが、散士がこゝにそのうちの宗敎及び外債の二點を强調してゐるのは故があるのである。宗敎については、先にマダガスカル亡國の因として耶蘇敎に用心せしめたが、今アラビイの語として重て警告してゐる。散士自身には格別耶蘇を邪惡視する理由がなかるべき筈なのに、これは抑も何

故であらうか。吾等は明治の思想史宗教上有名な教育宗教の衝突を知つてゐる、明治二十四年より二十六年に亘る大問題である。教育者側で第一線に立つたのは井上哲次郎であつたが、井上の遊撃として杉浦重剛が國體上教育上耶蘇教を排斥すべき硬論を吐いた。杉浦は勿論井上も雜誌日本人系統の思想家である。杉浦は又日本新聞の客員でもある。散士と杉浦一派との關係は今更述べるまでもない。散士が排耶蘇論の强調はこゝに淵源すると見るべきであり、この教育宗教衝突事件の反映と見るべきである。然らば外債論は如何。これは外債が散士の根本主義、卽ち國權伸張主義と相容れない點で、散士が外債を排したと見れば當然であるが、然しそれだけではない、時局と照して始めて散士の排外債論の眞意が分かるのである。外債卽ち外資移入の事が經濟理論として人々の口に上つたのは明治二十年以前であるが、二十年前後の第一企業熱勃興時代に始めて朝野の間に眞面目に議論された。然るに今や日淸戰爭の戰後經營と國家施設の膨脹から公債募集の必要となり、それが滿足に行かずに遂に外債募集となつた。實際の募集は三十二年六月のことであるが、その前二三年間に此の事が我が國上下の間の相當喧ましい議論の焦點となつた。此の間散士一派は理論としては排外債論に加擔し、盛にそれを主張した。アラビイをして外債論を强調させてゐるのも、かゝる時局に對する持論の反映と見なさなくてはならぬのである。

　卷十二に於ける散士がピラミッド頂上の感慨は此の種の文字では名文章の中に屬すべきものであらう。その一段に埃及の衰亡を憐み、イスメイル王の權臣マーネーなるものを罵る條があるが、吾等はこれを熟讀し欄外評家の言に照して散士が諷する所のあるのを覺える。曰く——

　威須明流王ノ朝ニ當リ權臣摩侫ナルモノアリ曾テ歐洲ニ遊學シ叨リニ博學ノ虛名ヲ買ヒ其才能一時ニ冠絕スト稱セラル（中略）夫レ下ヲ虐スル者ハ必ズ上ニ媚ブ色莊ナル者ハ必ズ內柔ナリ（中略）彼レ喔咿嚅唲脂ノ如ク葦ノ如ク婦人ニ事ヘテ恥ヲ知ラズ歐人ニ對シテ皂隸ノ如ク雅ニ言フ蹇蹇諤諤ハ正道ニ非ズト其一旦要職ニ上リテ鹽梅ヲ調ス

ルヤ便僻姦佞ノ徒ヲ嘯聚シテ專ラ政府ヲ箝持シ門下ノ鷄狗皆龍翼ヲ張リ虎牙ヲ礪キ天下ノ生靈ヲ糜爛シテ已ニ狃上ノ魚肉トナス笑刀ノ利暗箭ノ毒中ルモノハ皆斃ル且婬亂倫ナク毛嬙西施ヲ物色シ手ニ任セテ花ヲ折ル貴ト賤ト姦ト蒸トヲ擇マズ穢德顯彰日月色荒ミ風雲憤ヲ含ミ山裂ケ河溢レ妖孽並ビ興ル然レドモ痛寃訴フルニ門ナク釁隙乘ズルニ路ナク天下唯睊々トシテ胥ヒ譏ルニ目ヲ以テスルノミ智者（中略）或ハ蔡澤ノ諷ヲ進メ或ハ趙良ノ諫ヲ呈ス彼陽ニ納レ陰ニ斥ケ遂ニ曰ク志丘壑ニアリ國ノ爲メニ暫ク賢勞スルノミト

かくてマーネー一家の亂民の手に横死することに及び「是レ誠ニ盈ヲ持スルヲ知ラザルニ因ルノミ嗚呼報施ノ爽ハザル涓滴遂ニ磐石ヲ穿ツ以テ鑑戒トナスベキナリ」と結んでゐる。これは何人を諷するものであるか、恐らく讀者は伊藤博文を眼中に思ひ浮べるであらう（而してこれは或る程度まで當時の感情として事實として認められる）、だが單に一博文を問題としたものと見ず、恐らく廟堂諸公を合成して對象としたものであらう。當時の讀者も亦これを暗に伊藤を指すものと見たことは「山裂ケ河溢レ妖孽並ビ興ル」の上に註して「地震洪水海嘯一時並至」と書いてあるのでも知られる。此の地震洪水海嘯云々が第二次伊藤内閣の末造に於ける顯著な現象であることは、年表を瞥見しても知られるのである。（二十九年八月三十一日陸羽大地震、又八月より九月にかけ、東京及び栃木、愛知、岐阜等に洪水の被害夥し、六月十五日三陸大海嘯、八月三十一日伊勢尾張海嘯等々）。

散士等が歐行中バルカンを頻りに視察したがつたのは、その當時（十九――二十年）バルカン多事の秋だつたからであるが、『佳人之奇遇』卷十三に見るバルカン行は專ら露國のバルカン併呑の志を說いて、一朝我が國がバルカン半島の立場となつた時の注意を喚起するにあるといつて可い。散士は先きにアラビイの語をかりて種々警告するところがあつた如く、バルカン行の記事中に於いて有名なオスマン・パシヤの談として、矢張り數條の警告を與へてゐる。その一は露國の雄略と國是不動を賞してこれに備へる用意をせしめる。その二は（一と關連して）内政外交改革の第

一着手として宮府の積弊を去るべきをいふ、これは恐らく前述二十九年の「二十六世紀」事件と關連せしめて讀むべきであらう。その三は國民をして外人黨派を作らしむるなといふのである。オスマンの言にいふ、「今ヤ此弊殊ニ甚シ遂ニ一家ノ內佛派獨流英露ノ黨アリ以テ互ニ相擠排スルニ至ル突厥ノ大患ハ實ニ此ニ在リ」云々、されば日本をしてかゝる崇外內卑の弊を長ぜしめてはならぬとの散士の意である。

散士の記事によばれ、上記のオスマン・パシャの言に徵し、又前述梗概の條（七編）に記した散士對露國士官の問答により、又その前、オデッサに於ける露國虛無黨の流謫について感慨をもらした際の言等にみても、此の頃から露國といふものに對して特殊な注意を拂つてゐるらしい、これが歐行時の散士の感情をそのまゝ出したものであるか否かは別として、行文の間に自ら遼東還付以後の日本人としての氣持が動いてゐることは事實である。露國といふ奴は油斷がならぬ、用心をしなくてはならぬといふ暗示が到處に織り送まれてゐるが、これは日清戰後の先覺識者間の通論であつたものである。

散士は北イタリイ、チュリンの地にコッスートを訪ひ、日本の條約改正問題について教を乞ふた。コッスートは、改正に當つて歐米の要求を容れずば交戰に至るやも知れぬといふ日本政府外交當局の威嚇（反對志士に對する）を一言に挫き——

今日歐米諸國豈兵力ヲ以テ日本ト條約改正ヲ爭フ者有ランヤ或ハ兵ヲ東方ニ出スモノアラン然レドモ何レノ國力能ク數萬ノ大兵ヲ出スコトヲ得ン

と明言した。さうして佛、英、獨、以、西、露等歐洲諸强の現勢を論じてこの斷案を裏書した。散士洋行の當時は改正問題の着手匆々の時でありコッスートのこの斷案が甚だ力强い助言と思はれたかも知れぬが、然し此の篇の書かれ又は公にされた二十九年三十年の交は陸奥が條約改正に成功し始めた後であるから、この點だけはいさゝか時機を失

し、證文の出し遲れの感がある。散士とてこれに氣づかぬ筈はないのに、かく七編の後半殆んど全部を費してコッスートの所論を紹介してゐるのは何の爲めであるか。散士の意は、コッスートを假りて歐洲諸强の現勢を詳述し以て日清戰後より一層日本人に必要となつた對歐的眼識を養はしむるに役立てようといふのである。從つてコッスートの口を假りた現勢論は、洋行當時のものといはんより寧ろ日清役後のそれに近いと見られる。必ずや名を條約改正の舊問題に托して、戰後日本の外交方針の得失を暗示しようといふのであらう。

コッスートは先づ佛國の現勢について語る。佛國は富强歐洲に冠たるものであるが、普佛戰後は獨逸に對する報復を國民的念願として居り、而かも本來の輕佻から外敵を忘れて內政の紛爭に沒頭する、內閣更迭が頻繁で國是が斷ず動搖してゐる。流行を眞似て植民地を開くも事業を成功せしむる忍耐熱心がなく、第一パリを世界第一の樂土と考へてこれを離れる氣がない。かゝる現勢では遠く東洋に出兵して條約改正を爭ふなど論外と見て可い。

英國は如何。表面からいへば、世界の海王として地球到るところに植民地的富源を有し、又自由主義を善用して無比の立憲政治を發達せしめ、內政は輿論の宜しきに從ひ外交は國際の機を失せず、歐洲列國中一頭地を拔くものゝ如く見える。然しその裏に入れば、全盛時は漸く去つて米獨に位地を讓らんとするかに見える。且つ輿論政治の結果英雄手腕を揮ふ餘地なく、その弊が往々外交上に現はれることがある、且つ今日英國の軍事は文臣に左右されるから兵機を知らぬ、又歐洲大陸諸國とは孤立し、內外多事（埃及問題、アフリカ問題の如き）であるから、條約改正が紛糾したとてその爲めに、東洋に出兵する如きことはせぬであらう。たゞ然し歐洲諸國中獨力東洋に十萬の兵を出し得るものを求むれば、獨り英國あるのみ。

獨逸は、學術の力と明君賢相の輩出によつて普佛戰に大勝し、戰後百事百業が進張して一躍歐洲に覇を稱する勢がある。然し本來は寒土で土地の富源が少なく、又その聯邦制が案外巧く行かぬ、人口繁殖の點では大に賴もしいが、

兵役逃れの壯丁が海外に奔るものも多いから、これはさう當てにならぬ、然し獨逸人は世界到るところに播布して居り、その工商業も次第に世界的に進出して來、且つこれを助けるに學術の力をもつてするから、獨逸の將來は注目すべきものがある。たゞ目下は佛國の復讐を恐れ、露人の背後を窺ふに用意し、內は社會黨の生長に苦んでゐるので、遠く東洋に事を起すまでの餘力はない。寧ろ出來るなら東洋に味方を求めて歐洲の敵を牽制したい位であるから、條約改正問題については場合によつて日本の味方ともなるであらう。

イタリィは、いはゞ漸く此のごろ歐洲列强の仲間に入つたのみであり、中興の大業が完成せぬうちに君相の死沒に會つて文物兵備とも十分でない、國に石炭が乏しく且つローマ法王といふ爆裂彈を懷中にしてゐる、最近少々の植民地を略取したがこれの經營さへ重荷であるのに、日本との條約改正などに兵を用ふとなど考へもされぬ。

スペインは東洋に領土があるので日本とも密接な關係があり、條約改正についても本來ならば默止してゐないかも知れぬが、今日のスペインは强弩の末勢で、內政は專制の態を脫せず、外領は日に背反するといふ風でそれ自身の始末さへつかぬ、これは出兵を憂ふるところでない、逆に我より進んで頂きたいものがある程である（且其領土地勢他ノ强國ト利害感情相關スル甚ダ鮮シ異日貴邦富强一進海軍優勢ナルノ日ニ至ラバ皆其好獵地トナリ好版圖トナランノミ云々）。

最後に露國は如何。

老偉人ハ肅然聲ヲ勵マシテ曰ク露國ハ貴邦ノ法權稅權ニ於テ痛痒殆ド相關セス故ニ其改正ニ反對セザルヤ必セリ極力反對センモノハ英國ナラン利害ノ關係尠少ニ非ザレバナリ但顧フニ露ハ此改正ヲ利用シテ貴國ニ結ビ貴國ノ歡心ヲ得テ排英ノ風ヲ起サシメ以テ英ノ裏面ヲ襲ハン是レ亦貴國ノ利用スベキ所ナラズヤ（卷十四、六丁裏）

かくてコッスートは論結していふ、——

蓋貴邦ノ條約ナルモノハ唯國民一致斷ノ如何ニ在ルノミ國民決戰ヲ以テ其心トナシ誠意ヲ披瀝シテ歐米ノ公論ニ訴フレバ何ノ就ラザルコトカ之レ有ラン云々（同卷、七丁表）

以上條約問題を中心として歐洲の現勢を語れば大略以上の如くであるが、前にも述べた如く條約問題を是非するのは散士の本意ではない、これを前提として時局百年の計を論じたいのである。

コッスートの論によつて、露が排英援日の意あることが仄めかされてゐる。現に散士はコンスタンチノープルに渡る船中にて露國士官から明白にこの意を示されさへしてゐる。然らば日本としては、露國に結んで英國の壓力を排すべきであらうか。一應は然り、コッスートもそれをいふ、條約改正の問題に關する限りに於いては、この策を惡しとしない。だが國家百年の外交をこの方針にて進んで可なるか否かの大問題になれば別樣の考慮を要する。かくて散士とコッスートの談話は、進んで英露に對して新なる吟味を加へるに至る。

英露二國家の比較に於いて、散士の見もコッスートの見も略ぼ同一である。散士は曰く、「露ノ信ズベカラザル英ヨリ甚ダシキモノアルヲ恐ル」と、コッスートは曰く、「英ハ傾カントスルノ夕日ナリ其熱炎炎タルモ猶忍ブベシ露ハ將ニ昇ラントスルノ旭曦ナリ其光未ダ灼灼タラズ遂ニ人馬ヲ爍銷セン是レ實ニ事歷ノ吾人ニ敎フル所タリ豈親ムベケンヤ豈親ムベケンヤ、」條約問題に於て露國を援とするといふのは、「毒藥時ニ死ヲ起ス之ヲ用フルノ如何ニ在リ」といふ趣意から、たゞこれを條約改正に利用すべきをいふのみ、その本音は「豈親ムベケンヤ」である。而してこれはコッスートの本音でもあるが、又散士の本音でもある。

「夫レ露人ノ六合ヲ併一シ露帝ヲシテ四海ニ君臨セシメント欲スルヤ久矣」、露國の國是たるものはピョートル大帝以來かく一定して動かない。加ふるに「露人性深沈ニシテ膽大ニ迷信ニシテ堅忍ナリ仁義ヲ取ルノ士人ナク專恣愚民ヲ管領スルノ侯伯アリ是レ露人ガ他ノ邦國ヲ滅シ他ノ宗祀ヲ絕チテ毫モ顧ミズ四方ヲ剝掠饕食シテ倦マザル所以ナ

リ。」その實跡を知らんとせばカウカサス經略の殘暴を見よ、中央亞細亞侵掠の酷虐を見よ、韃靼人の覆滅に至つては土人をもつて土人を伐たしむる慘忍、言ふに堪へざるものがある。

露ノ經略ハ必ズ已ニ征服スルノ國ヲシテ露黨ヲ樹テシムルヲ以テ足レリトセズ更ニ其近隣ニ露黨ヲ樹テ以テ互ニ相制セシム伯德ノ遺言ニ曰ク先ヅ乖離セシメテ而シテ後之ヲ制馭セヨト是レ其貽謀ヲ奉ズル者ナリ

中央亞細亞より轉じて絕東經略の跡を見れば、これ又露人の天性たる忍の一字をあくまでも發揮したものである。

其絕東ヲ經略セントスルヤ清朝ガ恰克圖庫倫（忽必烈舊都）ノ違約背盟ヲ忍ビ寸屈尺伸武剌咸虜將軍ヲシテ進ミテ黑龍ノ江波ニ鷲翼ノ影ヲ映セシムル猶弱ヲ示シテ機ヲ窺フモノ數年遂ニ長髮賊ノ內亂ト共ニ英佛連合ノ外寇ヲ利用シテ巧ニ外交ノ術數ヲ揮ヒ一矢ヲ放タズ一卒ヲ傷ケズ坐ナガラ黑龍江烏蘇里ヨリ高麗王國豆滿江ニ至ル一帶數千里ノ地ヲ掠奪シ以テ清國出師ノ咽吭ヲ閉塞セリ尋テ又貴國日本ノ唐太島ヲ獲タルハ是レ亦對岸ヲ控制シ一意專心歷代帝王ノ志ヲ繼ガントスルニ在ルノミ今ヤ慓悍ナル蒙古ノ古族ハ其勇氣銷磨シ復露兵ヲ扞禦スル能ハズ故ニ若シ露人ニシテ兵ヲ行ランカ無人ノ境ヲ過グルガ如クナラン而シテ露人今ニ至ルマデ空シク覬望シテ輕動セザル所ノモノハ唯漠北千里ノ地用水ト燃料トヲ獲ルノ途ナキヲ以テノミ（卷十四、十丁表——十一丁裏）

若しそれバルカン半島に於ける擧動は世人の知るところ、ブルガリヤ國王追放の如きは、傍若無人の點で典型的なものである。これを詳言するまでもない。さて露人にとつては「宇內ヲ統一シ坤輿ヲ家トシ政柄敎權ヲ總領シテ帝ヲ世界ニ稱セントスルハ寤寐忘ルヽ能ハザル所」であるから、初めシベリアを經略するや、「東海ニ抵リ海峽ヲ橫斷シテ北米阿羅斯加ヲ占領シ、急ニ七百五十萬ヲ以テ之ヲ北米合衆國ニ讓與シ飜然東向ノ策ヲ建テタルガ如キ是レ豈東方人士ノ毛髮悚然タラザルヲ得ザルモノニアラズヤ」である。蓋し露國謀臣の議に曰く——

今我國力未ダ以テ全世界ト雄ヲ爭フ能ハス東西兩球ニ力ヲ致シ腹背皆敵ヲ作ランヨリハ先ヅ全力ヲ衰殘廢亡セル亞

細亞ノ諸邦ニ注ギ之ヲ乖離凌轢セシメ或ハ征服シ或ハ懷柔シ以テ其富源ヲ拓キ徐ニ國庫ノ富實兵力ノ精强ヲ待タン國勢玆ニ至ラバ世界ヲ擧テ敵トナスモ亦畏ルルニ足ラザルナリ況ヤ歐ノ同盟抵抗ヲヤ其仇視スルノ國ヲ煽揚シ以テ互ニ相牽制セシメバ天下坐シテ定ムベキノミ米ノ如キハ百年ノ後手ヲ下スモ亦決シテ遲キニ非ズト（卷十四、十三丁表裏）

かくて東亞經略の根幹たるべく計畫されたものはシベリア大鐵道である。これは「その枝線を印度の背に向け、其の東端を遼東の海岸に出さんとする」もので、專ら資源開拓と軍備擴張を主眼としたものたるや論がない。此の鐵道完成の曉（一八九九年を完成期とす）には、露人の東亞に於ける活動が更に一段と露骨を極めるであらう。或はいふ、露國の內政は腐敗し、財度は窮乏甚しいのに、それ程の大事業が無事成就出來ようかと、——然るにコッスートは從來の露國の內政財度に關する悲觀說が英國から出てゐることを說き、「外觀ノ貧富未ダ以テ露國ヲ輕重ス可カラザルナリ」と語つた。

露國人はやゝともすると自家をもつて平和の主宰者の如く見せしめ、揚言して「今上ハ平和ノ帝ナリ仁慈ノ君ナリ世界ノ平和ハ實ニ我露帝ノ賜ナリ」といふ、中にはこの言に欺かれて眞實露國をもつて平和の維持者視するものがなくはない、然しこれは一のカムフラージュである。蓋し露國は對土耳其戰爭で國力の足らぬことを痛感し、汲々として全力を富源の伸張充實に注いでゐる。そしてその雄飛の羽翼が未だ就らぬ間これを隱蔽するために「平和ノ賜」を標置してゐる。此の平和の賜とぃふのも、畢竟露人が糧穰を積み鐵路を敷設し海軍を擴張する爲めの歲月時間だけのことで、その間にも「平和」の幕の中「仁慈」の帷の影に、驚天動地城を屠り國を覆へす計畫が絕ず進められつゝあるのである。而して他の國では時に隨ひ人に依つて必ず外交の國是を異にするが、露國は終始一貫、時と人とに關せず、國是を動かさぬ。このまゝで進めば露國の實力が歐洲の霸權を握るに至るは目に睹る如しとコッスートは斷言す

る。先にコッスートは露國の今日あるを慮かつたので、バルカン諸邦を連合して鞏固の同盟大邦を建て、ポーランドを扶植して保障と爲し、ハンガリイが此の間にゐて牛耳をとり、以て北露南下の進路を絶ち、永く歐洲諸國の權衡平和を維持せんとしたのである、だが獨墺は露の欲望とコッスートの本志を覺らず、コッスートの學を自由民權にかぶれて王室邦家を危うくするものといふので、露に助力して遂に露をして目の上の瘤を除かしめるの愚を敢てした、實に長大息に値するといふのである。

コッスートと散士の露國論は實に第十四卷の强半を占めて居り、滔々高調盡くるところを知らぬ程であるが、これは勿論敍述の偶然からかう長くなつたのではない、特に時人に對して露國なるものに注意せしめ、露國なるものゝ恐ろしさを飲みこませる必要上、こゝに及んだと見なくてはならぬ。散士がこの文章を記した明治二十九年三十年の交日本の外交は一つの岐路に立つてゐた。それは簡單にいふと結露排英か盟英抗露かの問題である。日本が注意すべきは歐洲列强中露と英であることは、コッスートも語つた通りである。露も英も、單に實力に於いて相拮抗する立場にあるのみならず、東洋に於ける利害は常に相反し、而かも東洋に對して多大の關心をもたざるを得ない立場にある。日本は勿論東洋に雄飛したいが、それには手近の淸韓との問題を淸算しなくてはならぬ、然るに日淸戰勝の餘威に乘じて獨力韓國改革に臨んだが方針動搖のため先づ先づ失敗の形である。その結果政府は獨力主義をやめて協調主義をとることになつた。つまり東洋に利害關係の深い歐洲强國と結んで東洋の治安平和を維持し、徐々に改革進步を期することになつた。そこで政府當局としては先づ日本の失敗を機に韓國に著しく勢力を進出させて來たロシヤと提携協調することを考へ、明治二十九年五月日露協約なるものを結び、六月日露議定書を作成した。(これの發表は松隈內閣時代であるが、實質は伊藤內閣時代に議定されてゐたもの、山縣が露帝戴冠式に派遣されて露都にあつたので伊藤の旨をうけて主として事に當つた)。卽ち伊藤政府は當面の問題として結露主義を取つたものである。然るにこれに對し

て英國は日清戰後支那の無能を知ると共に、日本と結んで露國の野心を喰ひ止める必要を認め、次第に日本に接近して好意を示して來た。從つてわが官界民間の一部にも英國のかゝる氣分に對應して日英同盟すべしといふ論が相當早くから擡頭し始めた（これが三十五年に實現したことは改めていふまでもない）。散士はその持論からいつても無條件で英國と提携するを欲しなかつたらうが、伊藤內閣の結露政策に至つては、朝鮮に於ける日本外交の退讓を示すものとして大に不滿であつた。散士がコッスートの口をかりた露國論は、正に結露政策への反對を映照したものと見て始めて首肯されるものである。散士は露國の野心に氣付き、その到底提携すべからざる國柄なるを察し、早くその侵略の魔手を防衞すべきを暗示した、散士がバルカンを論ずること再三なるは徒らに外國の近事に好奇の興味を感じてゐるからではない、實はこれによりて露國に對する防衞の道を諷せんとするにある。オスマン・パシヤが府中改革の言は直ちに日本に移すべく、又コッスートがバルカン同盟の論は、直ちに日清韓の三國同盟によつて露國を抑へることを暗示してゐるものである。（露國の野心に對する警告乃至反抗心は、『羽川六郎』〔三十六年刊〕に至つて益々明白になる）。

更に「歐ノ將來」は如何といふ散士の質問に對するコッスートの答は、露國論とは別樣の意味に於て當時の日本として傾聽すべきものでなければならぬ。コッスートは歐洲今日の繁華は新世界即ちアメリカに移り、それより濠洲に渡り、漸く舊世界に復歸するであらうと語つてゐるが、その當否は日本人たる吾等のさう關心するところではない。又當年の散士としてもさうであらう。吾等をして最も多く關心せしめるのは、歐洲に陰伏せる三大禍の說である。三大禍とは何々、曰く軍備過大の禍、曰く合從乖離の禍、曰く貧富懸隔の禍、これである。此等三禍は獨り歐洲のみのことではない、近代資本主義國家のうくべき通弊である。日清役後俄然國家的膨脹を來し、國際的位地を高めた日本としても漸くその弊を受ける立場になりつゝある。國權主義者たる散士等も、この點から日本國家の將來に對して憂

慮しつゝあつたのである。既にその第一禍を防止すべく、日清戰後の議會に於いて軍備縮少、人民休養を主旨とした提案が繰返されてゐることは、議會史の一瞥によつて知られる。散士はコッスートの口を藉りて歐米軍資の巨億なるを語り、更にかう歎息してゐる、——

嗚呼世人之ヲ平和ヲ維持スルニ缺ク可カラザルノ價ナリト謂フ然レドモ兵豈平和ノ具ナランヤ要スルニ其侵略功名ニ資スルニ過ギザルノミ故ニ互ニ侵略功名ヲ畏レ互ニ其兵ヲ加ヘ互ニ漸ク其資ヲ增ス而シテ遂ニ其究極スル所ヲ知ラズ其兵ト資トヲ給スルノ人民果シテ能ク永ク其負擔ニ堪フベキカ人民ノ產限アリ軍國ノ費限ナシ焉ゾ能ク困弊勞憊胥ヒ傾覆セザルヲ得ンヤ（卷十四、二十四丁表）

その第二禍に至つては特に歐洲諸國の爲にいふもので、日本としてはまだ間接となるであらうが、第三禍は當時日本に於ても漸く擡頭して世人の注目を惹きつゝあつたのである。散士曰く——

近時發明技術ノ增進スルヤ富者ハ益々富ミ貧者ハ益々貧ニ貧富ノ差貴賤ノ別日ニ以テ漸ク遠ク富者ハ優游逸豫シテ玉ヲ龍盤ニ炊キ貧者ハ役役筋骨ヲ勞シテ尙飢ニ路頭ニ泣ク是ニ於テカ天賦貧富平均說社會黨論勢力ヲ得ン是ニ對シ富者ハ金力ヲ利用シ法制警察以テ之ガ撲滅ヲ謀リ貧者益々不平ニ堪ヘズ提携保庇各國ヲ連徒シ脅迫咆哮遂ニ紛起破裂スルヤ必セリ此禍一タビ破裂センカ其慘害眞ニ名狀スベカラズ（中略）彝倫是ヨリ一變シテ世界ノ道義社界ノ制裁全ク其面目ヲ異ニスルニ足ラン（卷十四、二十五丁裏——二十六丁裏）

天下ノ變豈之ヨリ大ナルモノアランヤ」である。これを避くべき一縷の希望は、「學者仁人能ク國家社會主義ヲ以テ貧富ノ間ヲ調和シ之ヲ國家社會ノ事業ニ應用スル如何ニ在ルノミ」。思ふに、我が國の社會問題卽ち散士の所謂第三禍が急速に增大したのは、日清役後である。此の際、達識の士は政府が早く社會主義的施設を試みて貧富兩階級の無用の軋轢を避くべきであるとなした。明治二十九年十一月進步黨大會に於いて、その政綱議案に、職工保護、小作人問題

工場取締等を追加したのも、かゝる狀勢に應ぜんとしたものであらう。同じ年一月森本（樽井）藤吉、安岡雄吉等が板垣等の賛成を得て社會問題調査會が組織してゐる。此等は普通の社會運動史上には記されてない事柄であるが、何れも如上の雰圍氣を反映したもの目して論じ立てた。又日本新聞が（三十年三月）、『國家社會主義』に就いて張膽明たるはいふを待たない。此の邊の事は宜しく社會運動史と對照して讀まれたい。たゞ時代が國權擴張時代であり、散士が眞の意味で國家主義的政見の保持者であるだけに、社會主義的施設の必要を見て、上からの國家社會主義を採用することを薦めてゐる點は、當然と首肯される。

散士は英國に於ける代表的見聞として、英議會に於けるビルマ占領の討論の光景を述べてゐるが、例の如くビルマ亡國史を描いて盛に强英の亡狀を高唱してゐる一方、自由黨の名士スミス氏のビルマ占領反對の演說を擧げて、英國にも正義の士があることを力說してゐる。こゝが一寸從來の散士の態度と少し變化してゐる。從來なら英國の强横を飽くまでも痛憤し、日本人をしてビルマと同一轍に陷らしめぬやう警告するのであるが、こゝでは公平に楯の兩面を見る如き態度で臨んでゐる。この態度はロシヤに對する「豈親ムアケンヤ」の態度と比較すると、一層際立つて見える。此の對英態度の變化の裏には恐らく、日英同盟、乃至盟英抗露といふ一部世論の反映があると見て可い。

卷十五の谷の封事や時事六條の如きは、旣に傳記の條に引用したし、又卷十六の日清役前後の對韓對淸感情、我が政爭と外交關係の如きことについても前に略ぼ說いたから、こゝでは凡て省略する。たゞ一つ卷十六散士が漢城明月の夕、壯士を招いて置酒時事を論ずるところがあるが、これは各人各樣の時事批評で、日清戰役後の我國の立場、處置等時局に對する總評ともいふべき面白いものであるから、必ずしも散士のみのイデオロギイとはいへぬが、その大要を紹介したい。

（俠遊子）　日淸戰爭は、內外ともに機を得たものといひ得る。唯然し日本軍が東學黨を征伐したのは失策である、

東學黨は維新前の攘夷家の如く非進歩非開化的な分子はあるが、然し根本的に反閔的な點で、これを利用せば十分韓半島の改革の原動力となり得べきものだつたからである。且つ日本が獨力韓國扶植を聲明したのは可いが、韓國に對して徒らに形式的の煩瑣な改革を強いて急にさせるだけで、實を收めることを忘れ、又改革の費用を吝んで貸さぬ、(後に國會から迫られて貸す)、これでは、日本の擧が韓國を惱ますのみで、折角の公明な扶韓の擧も野心からかと疑はれる云々。

(奇嬌生) 日清の役、我は大院君を助けて政權を得しめたのに、彼は戰役中に淸に通じ東學黨を使嗾したり、反覆の行爲があつた。我はこれを利用し、この反覆を理由にして韓國をわが有にしても可かつたのである。然るに當局が優柔で事こゝに出でず、百年の憂を遺したのは何とも遺憾である云々

(沈論子) 日清戰役の初めに當つて、日本人は建國以來の重大事といふので態度愼重を極めたが、戰況の進展につれていつしか戰勝に醉ひ、輕佻にも東三省占領、支那分割の意志をほのめかし、この爲めには世界を敵とするも恐れぬなどといふ。そのために外人は、日本がアジアを紛爭の大渦中に投じ、引て世界大亂の原因たらしめることを恐れ自家の東洋に於ける利益がその爲めに危損されることを患ひて、早く支那を助けて日本を抑へよといふ意見を生じさせる。三國干渉は一は自ら招いだものである云々。

(達觀道人) 戰勝は極むべきではない、宜しく餘力を殘して和すべきである。早く和を講じ、韓國を懷柔して北方の藩塀として遼東は占領せぬが可い。かくして露英の猜忌を避け、日本發展の第二段の計畫を立つべきであつたと思ふ。然るに將士功を貪り、宰臣が機を見るに敏でないため、遼東を取つて國辱を招くことになつた云々

(後樂隱士) 露國東漸の大志は一朝一夕のものではない、シベリヤ鐵道の完成を急ぐのは、これによつて渤海沿岸に手をのばし、韓國と東三省を自然自分の領分に編入する機會を作らうとするのである。然るに日清戰役の勃發で露

國の心計は大に齟齬した。日本が徹底的に勝つて韓國淸國をリードすることになり、日支韓三國が同盟して露に向ふことになれば、露國東漸の大計には致命傷となる。それかといつて、今の勢では遠く滿洲の野に日本と戰ふことも出來ないし、海戰の方も自信がない。且つ高をくゝつた日本の財力は案外なものである。これは矢張り外交手段に訴へる方ない、外交手段によつて一方は淸國に恩を賣り、一方は日本を挫く、これが最善である。かくて三國干涉の現れとなつた。露國はこの干涉の成功で、殆んど一兵も用ひずに滿洲韓國に對する野心を達したものである云々。

（孤憤士）遼東は重地である、軍事上經濟上容易ならぬ土地である。軍事上には露國の南下を支へる要衝であり、經濟上には交通商業上の利が多く（例へば大連灣の如きもの）、又鑛物牧畜の利も多い。且つ人民は溫和で治め易い。日本がこれを割取したのは可いが、それを處するに於て下手であつた。遼東は古は韓國のものである。隋唐時代に韓國から取つたものである。從つて日本はこれを一應韓國に返し韓國の代理としてその統治に當るが可い。これを割取した後三國の干涉に會ひ、已むなく返すのもわが國の實力上仕方が無いとしても、東洋平和の建前から淸に對して他に割地せぬやう堅く約束すべきであつた。今日となつては皇師を歡迎した遼東の人民は憐れむべきものである。

嗚呼北ハ茫々タル荒原陰颷短草ヲ吹キ青燐髑髏ヲ照スノ夜何ヲ以テカ地下ノ寃魂ヲ弔フベキ南ハ則チ劍氣天ヲ掠メテ光芒長ク垂レ將星地ニ墜テ聖駕震駭ス而シテ宰相怵惕中夜以テ興キ心ノ憂危虎尾ヲ踏ミ春氷ヲ涉ルガ如ク厥愆ヲ免ル、ヲ思ハズ徒ニ遼東還附ヲ論議スルヲ禁壓シ宣戰ノ大義ヲ忘レ朝鮮ノ敗亡ヲ顧ミズ厚賞ヲ徼ヒ太平ヲ謳歌シ武臣錢ヲ愛シ文官賄ヲ貪リ新邸ヲ築キ別莊ヲ營ミ燕遊之レ事トシ奢侈ノ風ヲ煽ギ投機ノ業ヲ長ジ國民ガ臥薪嘗膽ノ壯志ヲ消磨セシメントス何ゾ嘆ズルニ堪フベケンヤト

（靑雲閑人）日淸戰爭の結果に就てこの位の勝利があれば先づ滿足すべきである。三國干涉は突發事件だから仕方がない、これは傳ふる如く露國の計畫的野心からでなく、若い獨逸のカイザアの功名心から出たものである。日本の

外交家の苦心は諒とすべく、遼東還附は英斷である。北守南進の策を決して强國と爭ふを避け、國家後日の大患を除いたのは百戰の功に優るものがある云々。

（三　老人）　戰後の結果として、韓半島の改革か遼東の占領か、その一を實現さしたかつた。然るに今やその一も成就されぬ。このまゝでは日本は丁度露國のために領土を拓いてやり、歐人に對して支那の內實を暴露し、徒らに支那に對する彼等の野心を刺激するのみである。淸國はこの爲め必ず大渦亂に捲きこまれるであらう。此の點で日本の責任は大きい。これといふのも政府當局の失敗と國民の輕佻から、我が國の豫定計畫の實行が不能となつたからである。而かも一旦かゝる場合になつては、立ち直らうとしても國力充實がさう一度に出來るものではない云々。

以上八人の論議のうち、孤憤士の言が最も痛烈、且つ長文である。これが恐らく散士であるかも知れない。後樂隱士の露國東漸論も此の頃としては傾聽すべきである。八人八樣の立場から、八人八樣の抱懷を披瀝したものであるが戰後時局の批判として、輿論を撮要した觀のあるところは、時人のイデオロギイを代表してゐるものと見て可い。

「佳人之奇遇」　六編――八編の政治的イデオロギイについては、以上にやゝ詳に失する程詳細に述べて來たが、まだまだ幾許も述べ得る、然し此の三編を單に小說として見るときは、さう澤山述べることがない、それは第五編と餘り違はぬのである。

先づこの三編は小說としては甚だしく時勢に遲れたといふ感じがする。明治二十四年から三十年へかけての六年間は、明治文學史上小說界が飛躍的進步を遂げた一時期であり、二十四年以前の小說と三十年以後の小說とは、多少大袈裟にいへば戲作と近代小說ぐらゐの差別がある程違つたものになつてゐるが、『佳人之奇遇』六編以下は、その以前の諸篇に比較してみて、決してそれ程の差違が感じられない、寧ろ此の六年間といふギャップが、小說としての此等

三篇には何等特殊な進歩的影響を與へてゐないといつてよい。時勢遲れといふ感じのするのは、主としてこの爲めである。內容的に舊い問題を扱つてゐるので幾分時勢遲れの感じがすることは、前にも一寸暗示したが、テクニク方面に於いては、それが一層甚しく目立つ。この小說の前後に通じての特色である主觀の熱、感情の强さは、全體的には決して衰へてゐない。衰へてゐないどころか、益々强烈な沈痛なものを見せてゐるが、然し條約改正問題を論じてゐるあたりは、何やら事後の絕叫といつたやうな氣味があり、日淸戰役のところになつて始めて調子が相應して來る、而かも一面、ジプシイの自由を羨み、老莊の隱遁哲學に感心したりしてゐるところは、感情的に新分子とはいへるが從來の緊張一點張りとは違つたものがある、事志と違ひ過る餘り出た一種の倦怠氣分といつたものがこれにまとつてゐる。つまり、感情的にも、意識的か何うかは別として、無理に力んでゐる一面、何かしら弛んだ淋しいところが見えるのである。十年前此の小說に靑春の血を湧した人々は、中年の域に入り、今日此の小說に血を湧すべき筈の靑年は、中々この調子外れの小說には感服してくれない。過去の傑作が、その名聲の尾について蛇足的に續いたといふ感じが深い。十年以前にはこの小說をもつて一傑作と考へた時代文壇も、十年後の今日、これに對して今更のやうに扱ひかねてゐる次第である。

そのテクニクの細部についていへば、プロットの點で、六、七の二編が散士の洋行を利用して、これを骨子として小說的構想を交へてゐる、然るに洋行記事の方がいかにも生々しい記述であるのに、小說的構想が舊いので、二者混然融和せず、とつてつけた風に見える。然し六編は先づ先づ小說的分子の多い點で却て五編あたりよりもいさゝか上出來かも知れない。何れにしても、洋行記事そのものを今少し小說化してから趣向を立てた方がよかつたらうと思ふが、或は洋行を上手に使つてこれを直ちに實は幽蘭紅蓮范老等と關係あるものゝ如くにした方が面白いものとなつたかと思ふ。第八編は歸朝後から二十九年の廣島在獄迄の身邊記事を走馬燈的に雜記した體で、多少の工夫があつても

小說としては論外の部に屬する。七、八編の如きは、先づ總體として見て小說の一部分として讀めるので、それだけ引離してはさうは讀めぬものである。場面場面の興味と作者の感情につられて讀めば讀めるものゝ、小說といふ氣分や印象は稀薄である。從つて身邊事實の方から見れば却て興味が多いわけである。

第六編范卿との再會、幽蘭との邂逅が先づ最も小說的工夫を弄した場面として擧げられる。

それから此の小說の一特色たる挿話的史實のことであるが、六編の馬島（マダカスカル）史（卷十一）七編のカウカサス征討史（卷十三）など何れも面白く且つ有益なものであるが、これも當初程讀者にとつて啓發的な役目は果さなくなつたであらう。此の數年間に讀者の知識もこの種の知識を傳へる書籍の數も可成り豐富に殖ゑたからである。然し此等の史實挿話は、先づ先づ今日に於いても有益なものが多い、この點は作者に感謝して可なりである。

性格の點で注意すべきは、作中の人物が現實分子の影響をうけてその當初のロマンチックな匂ひを失つて來たことである。主人公の散士は何うかといふと、初半分に於いては、作中の散士はともかくも小說中の人物で神韻を帶び古英雄の如きロマンチックな風格が至るところに仄見えてゐる。然るに後半乃至此等三編に出る散士は、全くその傳記中の散士で小說中の人ではない、現實の散士否柴四朗であつて、小說中の東海散士ではない。此の小說の東海散士は多血多感、詩人にして英雄實にロマンチック理想小說の主人公として打つてつけの人物であるべきであるが、此の後半部分に出て來る散士はさうではない、詩人味が減つて何やら俗吏臭いところが見え、熱も血氣も少なくなり、打算的功利的な、いかにも凡俗政治家型の人物となつてしまつてゐる。此の散士の性格の變化は、幽蘭・紅蓮二娘に對する態度で明瞭にされてゐる。幽蘭の幽閉を見ては、當初の散士の性格からせば、その友人達の手助をかりても、萬難を排して官職を賭しても、彼女を救出すべきである。然るに折角月夜尋訪しながら、一掬の涙を灑いだのみで、公務に藉口しておめおめと別れるのは水臭いも甚しい、作者はこの點、日本人としてプライドを示したつもりであつたら

うが、それは儒教臭味乃至キリスト教臭味のプライドで、純眞な日本人なら何事があつても幽蘭と運命を伴にすべきであつた。かくてこそ此の小說は復活すべき筈であつたのに、本文の如き結果になつたのは殘り惜しい。紅蓮に對する態度も、今少し綿々たるところがあつても大丈夫の面目を害しはしない。二妃佳人の方は散士に比してまだいゝ。たゞ范卿は、散士が凡俗化し卑小化したに反比例して、意外にも偉く描かれてゐる。これだけは面白い。

背景は六、七の兩編は洋行途次の實見實景を土臺にしてゐるので、流石にその印象を浮出さしてゐる。この背景は此等三編の中で兎もかくも最も取柄のある部分である。これを小說の背景として見ずに、一部の紀行として見ても、立派なものであらう。殊に所々の描寫に珠玉の文章が（舊い意味でだが）續々出る、その點で卷十二の三角塔の記や卷十三のダニューブ河下航や、土耳其見聞記や、何れも此の種の文章としては類の少ない名文であるらしい。三角塔の記を引いて、これを代表さして置かう。

明日三角塔ニ登ラント欲ス鑣ヲ連ネテ塔下ニ到ル大石疊積シテ天末ニ至リ危峭累卵ノ如ク削成砥ノ如ク石角坎陷ノ處纔ニ攀躋ヲ擬スベキノミ一行相顧ミテ難色アリ遂ニ意ヲ決シテ天鑱ヲ蹴ミ鬼工ヲ扳ツ三歩ニ一喘五歩ニ一息胸膜擊鼓ノ如ク流汗面ニ湛ヘ日崑崙ニ燃エ髓腦俱ニ沸ク同行者勞ニ堪ヘズ半ヨリ下ルモノ多シ能ク頂上ニ達スルモノ僅ニ三人ノミ絕巓ニ直立スレバ足戰々トシテ定マラズ人間杳渺身遠ク天界ニ上ルノ感アリ是ニ於テ石上ニ危坐シテ矚望スレバ沙波羅ノ大沙漠ハ塔下ヨリ數千里ニ綿亘シ曠蕩冥茫際涯ヲ見ズ共間一點青一微白ノ眼ニ入ルナク紅熱目ヲ射テ閃爍迷離混沌未分ノ前ニ似タル乎將タ天破レ地裂ケ世界分隤シテ刼火洞然タルノ眞象ニ比スベキ乎時ニ坱圠トシテ熱砂ノ起ルハ炎帝ノ火龍ヲ鞭ツガ如ク回飇ノ倏忽旋轉スルハ火車ノ罪人ヲ驅リテ八熱地獄ニ趕フニ似タリ人若シ此境ニ墮落セバ生キテハ生ニ迷ヒ死シテハ魂ノ依ルベキ莫ケン（下略）

以上の如く『佳人之奇遇』の續篇ともいふべき六、七、八の三編を專ら小說として見れば、時の文學界の水準に照

して如何にしても傑作佳作といひ難いものとなつて來た（種々の點で讀んで別様の興味があることはこゝでは問題外とする）。これは散士の小説的手腕の退歩を語るものではなく、寧ろ時代の小説界の急進歩によるものであることは既記の通りで、蓋し止むを得ない結果であらう。尤も、散士の心裡に探り入れば、或はこの頃の散士としては強て小説を作るといふ興味がなく、たゞ自家の意圖を披瀝するに急であつた爲めに、かゝる結果を來すことになつたものかも知れない。果してさうとせば、此等三編が小説として幾多の缺點があつても、缺點は缺點として多少の斟酌がなされて可からう。

これを以て『佳人之奇遇』研究の本文を終るのであるが、いかに覺悟の上とはいへ、やゝ冗長の氣味がなくはない。然しかゝる基礎研究に於いては、能ふ限り詳繁な方が可いといふ建前からいへば、かくなるのは當然であり、豫期したところである。深く讀者の諒察を乞ひたい。『佳人之奇遇』全篇として殘つた最後の問題は、此の作が八編十六卷で本質的に打ち切られにものであるか何うか、といふ點である。私は、種々の點から考察して、この作は、機會さへあつたならばまだまだ書き續けられるべきものであつたかと思ふ。例へば、幽蘭が散士に托して紅蓮に渡して貰つた手紙の如き、恐らく後篇を起す契子となるべきものであつたらう。然るに散士が後半に於て餘り多く身邊の事實を盛り込み、いはゞ現在の散士の政治的意見の報告書の如く變化さしてしまつた結果、この上更にローマンスの世界に引戻して後篇を續けることが出來ず、自然消滅となつたもので、散士としては、この後篇について多少の腹構がなくはなかつたものであらう。こゝに此の小説の一見尻切トンボらしい結末を説明するものがある。さうして私は、此の後篇に充つべき腹構が變態的に出現したのが、明治三十六年の、『日露戰爭羽川六郎』なる政治小説であると見たい。

註（一）　青年文第四卷五號（二十九年十二月五日）に「政治小説」と題し、政治小説を要求する辭あり。「新小説」第三年第十

一巻（三十一年十月）に後藤宙外の「小説界の新生面」と題するもの、同第三年十二巻（同年十一月）に同人の「政治小説について」と題するものあり、同年十一月七日讀賣新聞に島村抱月の「政治小説について」があり、同年九月といふ内田不知庵の「政治小説を作るべき動機」（『文藝小品』所收）といふものがある。

第三　『佳人之奇遇』以後の東海散士

一　『佳人之奇遇』以後の東海散士

上記二章に於いては、『佳人之奇遇』を理解する必要上、能ふ限り散士の傳記を詳細に記述して來たが、此の段はいはゞ本論が終つた後の結尾的役目をもつだけのものであるから、いさゝか唐突の感はあるが、散士の傳記的事實もさう念入りに調べる如きことはせず、『佳人之奇遇』以後、即ち明治三十年以後の公的經歷の大概を掲げるのみに止めたい。

明治三十年十二月二十八日、松方內閣總辭職、その後が揉めぬいたが、三十一年一月十二日伊藤內閣成立、三月十五日衆議院議員の總選擧となる。散士は矢張り福島縣第四區より當選す。此の年五月第十二議會が開かれたが、民間黨の反政府熱は依然强く、六月十日、進步、自由兩黨が提携して增稅案を否決したので、直ちに議會解散となつた。然るに解散となつても、兩黨の提携は破れぬのみか、共同の敵を前にして益々强く、六月二十二日遂に兩黨が合同して憲政黨を組織して、兩黨多年の歷史的行掛りを一擲したかに思はせた。散士はその創立委員の一人、伊藤內閣は議會を解散したものゝ、民間黨のかゝる强固な決意（表面的にもせよ）を見ては、施すところを知らず、遂に總選擧の結果も見ずに六月二十五日內閣總辭職を決行し、元老御前會議の結果、民間黨の總帥大隈、板垣の二人に內閣組織の大

命が下つた。かくて總理大隈、內務板垣、外務大隈兼任、文部尾崎行雄（後に犬養毅）大藏松田正久、遞信林有造、陸軍桂太郎、海軍西鄕從道、農商務大石正巳、司法大東義徹といふ顏觸れで、わが國最初の政黨內閣が、六月三十日に成立した。散士は勿論政黨大同論者であるから、兩黨合同には陰に陽に應分の努力をした。いよいよ隈板內閣成立となるや、散士は農商務大臣大石正巳の下に次官に就任した（正五位に敍す）。

此の年八月の總選擧には、勿論再選した。

だが間もなく、政權を握つた安心から、舊自由舊進步の抑へてゐた感情的もつれが次第に露骨になり、それが內閣に於ける軋轢とまで反映して、遂に共和演說なるものが祟つて辭職した尾崎文相の後任問題から大隈と板垣が正面衝突を來し、十月二十九日板垣一派が辭職し、同三十一日大隈一派が辭職して、折角歡呼して迎へた我が國最初の政黨內閣も、政黨人の淺ましい椅子爭ひから敢へない最後を遂げた。十一月八日山縣內閣成立。

是より先板垣一派が內閣から退くや、早速舊自由黨の議員を糾合し、擅斷で憲政黨を解散し、直ちに新に憲政黨なるものを組織した（內相板垣はまだ事を見て居り、警視總監西山志澄も舊自由黨である、多少の無理は難なく遂行された、然しこの時の立役者は星亨である）。舊進步黨の議員もこれに對抗して大會を開き、黨則改正その他を議せんとしたところ、警視總監西山は板垣の旨をうけ、此の大會を解散し、更に內務大臣板垣退助の名で秩序に妨害ありとの理由から舊憲政黨の存在を禁止した。それで舊憲政黨卽ち進步黨系の議員達は止むなく、憲政本黨なるものを組織した。散士は此の本黨組で、爾後本黨幹部の一人として活動した。

明治三十二年は非增租問題について、非增租派として、三浦子や谷子と合同して大運動を起し、憲政黨の心膽を冷した。

明治三十三年五月、義和團が猖獗を極め、北淸事件が起つた（八月平定）。この時散士の弟の柴五郎中佐が駐支公使

館附で團匪及び支那兵の包圍の中にゐたので、散士は公人として國家の爲めに心配したのみでなく、骨肉のためにも並々ならず痛心した。この時九月近衞篤麿公一派は露國の火事場泥坊式の野心を封じ込めるために淸國保全論を高唱して、國民同盟會を組織した。(九月十一日發表、二十四日正式發會)。散士は、佐々友房、大石正巳、犬養毅、神鞭知常等の人々と最初からこれに盡力した。これは何といつても露國を目標とした對外硬主義の發揚であつて、或る意味で散士等の理想の實現ともいひ得るものであるから、散士としても少なからぬ滿足と得意を感じたことであらう。九月下旬散士は、竹內正志(代議士)と共に淸國漫遊の途に上り、天津から北京に入り、仔細に亂後の實況を視察して歸つた(十一月)。十二月、憲政本黨の總務委員に就任した、十二月二十日國民同盟會は中央大會を開いて大に氣勢を添へたが、この時散士は北支事件見聞談を試み多大な感動を與へた。

三十五年八月十日の總選擧にも散士は再選、明治三十一年から此の年まで珍らしく法定期間だけ無事續いたのである。然るに此の年十二月の第十七議會に於て、增租繼續案で政府と議會と衝突を來し、遂に十二月二十八日議會は解散された。散士は勿論直ちに立候補したが、この時は地方的政情から餘儀なく多年の根據地たる會津地方を同志に讓り、若松市から出馬したところ、土地不馴れの上に、猛烈な選擧干涉を受けて、遂に落選するの止むなきに至つた。

(三十六年三月一日)。

三十六年十二月第十八議會召集、これは議長河野廣中の彈劾的奉答文の問題で一日で解散、翌三十七年三月一日總選擧には、散士は若松市から無事當選した。これより先、日露兩國間の風雲が益々急を告げてゐたが、此の年遂に開戰となり、二月宣戰布告となつた。三十八年八月、日本は遂に世界環視のうちに戰勝國として露國と媾和した。散士は日露役の功によつて勳四等になつた。

此の大戰役によつて、散士等の多年憂慮警告した露國東漸の野心が兎もかくも打壞はされたので、散士及び散士の

同志は國家のため慶祝の念を禁ずることが出來なかつたであらう。

翌三十九年、憲政本黨に内訌が生じ、遂に總理大隈の引退とまで發展したが、散士も黨の現狀に對する不滿から、本黨を脱し、佐々友房の牛耳を執つてゐた大同俱樂部に加入した。

四十一年五月一日の滿期改選には、若松市で、同鄕の先輩で前福島縣知事の日下義雄と爭つて勝つた。

同四十五年三月一日の改選には、同じ若松市で矢張り日下と猛烈な選擧戰を演じたが、遂に破れた。

此の間數年自適悠遊。

大正四年三月、大隈内閣の下に於ける第十一回總選擧には、白髮を染めて加藤高明の立憲同志會派から立候補、若松市に於いて大多數をもつて當選、外相石井菊次郎の下に外務參政官に就任した。然しこの就任は恐らく散士の本志ではなかつたであらう。

大正十一年九月二十五日、散士は七十一歲の高齡をもつて、熱海の山莊に歿した。

二 『日露戰爭羽川六郎』

旣に『佳人之奇遇』以後の散士について詳細語つてゐる暇のない如く『佳人之奇遇』研究の終つた以上その變形的後篇とはいへ『羽川六郎』についても悠々と研究の筆を弄してゐる餘裕がない。それで『羽川六郎』は『佳人之奇遇』の後篇と見られる内容はもつてゐるもの丶作物としては獨立してゐるものであり、それだけ獨立に精密に檢討されるべきものではあると思ふが、それは他日の機會に讓るとして、此の小說の如何なる性質のものであるかといふこと丶その物語の梗概とを語つて筆を擱きたい。

前にも記したが、明治三十六年三月の總選擧に、民黨の鬪士たる散士は政府の巧妙で猛烈な干涉に會つて、落選し

た。此の落選が政治小說『羽川六郎』を書く機會を與へたものであらうと思ふ。尤も、切迫した日露關係を題材にして政治小說を書き、これによつて國民に警告を與へたいといふ考へはもつと前からもつてゐたに違ひない、從つて、『羽川六郎』の腹案も『佳人之奇遇』絕筆の直後あたりからもう立つてゐたのかも知れない、それは『羽川六郎』の中に述べられてゐる重大事件が日清戰爭で始まつてゐて丁度『佳人之奇遇』が日清戰爭で擱筆してあるのとすぐ接續するやうになつてゐるのを見ても、恐らく『佳人之奇遇』の後篇乃至これに代るものとして(『佳人之奇遇』が餘り長く續いて、一はいさゝか時勢遲れの氣味があり、一はいさゝか讀者に飽かれた形でもあるので、(『佳人之奇遇』の後早々に立案したものゝやうに考へられる。

『羽川六郞』は一言でいへば、會津人羽川六郎なる憂國發明家の自傳小說である。羽川一家の運命、露國との因緣を骨子とした日露戰爭未來記である。廣告の文句に——

此書は小說にして小說にあらず、實傳にして實傳にあらず云々

といひ、又散士の序にも

會々羽川六郎と稱する者自傳を草して刪潤を散士に請ふ。文章鹵莽解し難きものありと雖、能く日露交涉の梗概を悉し、現狀を揣摩し、未來を理想する所大に予が意に適するものあり云々

とあつて、如何にも實錄らしき言を成してゐるが、これはたゞこの作中の記敍を効果的たらしめるためのカムフラージュであつて、『羽川六郎』が小說であることは、一讀した人の異論のないところである。たゞその日露交涉の經過、露國の滿洲經營、日露戰前の形勢等に至つては、散士の見聞その他種々豐富な事實に基礎してゐる上、羽川六郎の經歷に幾分散士自家の體驗を織り込んであるので、實傳云々の言も決して虛構ではない。

その梗概を語れば――

羽川六郎は、會津の士族であるが、父祖代々露國に因緣がある。祖父は文化年間露國防備のため樺太に赴いてそこで歿した。父は維新の際幕府方に加はり、最後は函館に脫走した一人であるが、榎本武揚が官軍に降るとき、これを肯んぜず、同志と共に北海道から樺太に赴き、樺太開拓によつて奉公の志を示さうとした、彼は祖父の敎訓によつて早くから露國東漸の野心を知り、機會があらばこれを阻止したいと望んでゐたのである。然し樺太開拓が緒につくや露局當局の忌むところとなり、露國官憲に幽囚されて憤悶のうちに歿したといふ。六郎は母の庭訓により夙に露國に對する敵愾心をもつてゐた。

父の歿後、母はまだ若いので、親類などの意見で父の友藤川夏雄といふ人を繼夫とした。六郎の父は羽川氏であるが、その才學を師の上條氏に見込まれ、上條氏の女と婚して上條氏を嗣いだものであるから、かゝる事情にもなつたのである。夏雄は才子で外務の官にゐたが、好色で野心家で、且つ露國崇拜家であつたので、六郎母子と折合はず、遂に節のない遊女を引入れて妻子を虐待するやうなことが續いたので、別居する。六郎は上條を名乘らず羽川を名乘つたのはそのためである。

「予の小經歷」といふ一回は、六郎の生立の記として注意して讀むべきものである。六郎は幼少から身體が弱く、學問を好み、殊に數學機械學を嗜好した。大學を病氣で退學してからは、又學校に入らず、身體の恢復をまつて、これも父の舊友太田伯爵の世話で英國に遊び、機械學を專攻して歸り、海軍技師となつた。さうして第一に軍用潜水艇の發明に志したが、不成功で世人同僚の笑を買つたに過ぎなかつた。

間もなく淸佛戰爭（明治十七年）が起つて、淸國が苦心して編成した南洋艦隊と福州の造船所は佛艦の攻擊に大破してしまつた。淸國はその修理の技師として日本に人を求めた。六郎は喜んでこれに應じて福州に赴いた。六郎は早

くから露國の野心を知り、同時に日清兩國の運命に大に關心してゐたので、日本が南方に雄飛する根據地をつくるつもりであつたからである。それで在清數年の間に、六郎は支那語を研究してこれに熟達し、又支那內地を旅行して見聞をひろめた。かうして日清の役に至つて歸國した。

日清の役については別にいふまでもない。續いて起つた問題は遼東還附である。これには六郎は政府の處置に大に義憤を感じ、思はず政黨に飛び込んで奔走したりした。

「遼東還附論」から「北清事件」までは、羽川六郎は全く東海散士になつてしまふ。夏雄父子とは久しぶりで戰役後或る戰勝記念會で出會つたが、相變らずの露國贔屓の上、遼東還附を政府の一大成功であるかの如き詭辯を弄したので、滿座の怒を買ひ、交々駁論された。六郎の如きは眞先に攻擊した。論旨は、成功でないことはいふまでもないが國家の實力の相違から還附するの止むなきに至つたとしても、還附した土地を不租借不割讓といふ條件をつけなかつたのは、國家百年の憂を殘すものであるとした。又他の人々のうちには、遼東は還附するはともかくとして、朝鮮に於ける勢力はすてる必要がなかつたのではないかと痛論したのもあつた。

遼東還附後、朝鮮に於ける日本の勢力は全く失墜し、朝鮮人は我を侮ることが甚しい。而かも政府にそれを斷然と抑へるだけの決意がない。國家の元老たる伊藤山縣は退讓の軟論である、これに業を沸した民間志士は遂に十月八日の變なるものを勃發させてしまふ、元來が退讓主義の恐露論者たる伊藤山縣は大にこれに狼狽し、急いで日露協商をなし、公然と朝鮮に於ける露國の勢力を認めるのみかこれに屈服することになる。加ふるに戰後の淸國に於ける維新運動も守舊派の跋扈のため失敗に終つたが、これは全く東洋の不幸で、そのため露獨に乘じられ、旅順、大連、及び膠州灣を失つてしまつた。何といふことであらう。さうして直接かゝる機會を生んだのは、三十三年の北清事件である。此の事件の善後策で最も巧妙に立ち廻つたのは、露國である。

此の事件に、六郎は支那語熟達の故をもつて通譯として從軍した。これが發表されるや、夏雄は俄に彼に接近し、彼に馳走して、軍の機密を內々で少し洩してくれ、外務省からの依賴だからといふやうに仄めかした。何かしらん此の時夏雄はエライ金持になつてゐた。

六郎は、北京に包圍された各國兵民と列國の攻擊軍との通信連絡に利用するつもりで、多年考案の軍用飛行機を製作してみた。然しこれは成功せず、空しく同胞及び各國軍の嘲笑をかつたに過ぎなかつたのだ。六郎はあまりの面目なさに、一時出奔して居所不明となる。

北淸事件を切掛に露國の滿洲占居の野心はいよいよ露骨になる。英國もこれに對抗する必要から威海衞占領の擧に出る。かく老大國支那が殆んど分割の憂目を見ようとして來たのに、日本政府は何等施すなく默々彼等の爲すまゝに任してゐる、この腑甲斐ない有樣に憤慨したのは、日淸戰役當時の對外硬の有志である、彼等は、近衞篤麿を首領にして國民同盟會なるものを組織し、淸國保全論を主旨に對外硬の氣勢を煽る。一方、露國の傍若無人振りに業を湧した英國の國論は、次第に日本に接近して來てゐたが、遂に日英同盟（三十五年）の締結となつて、露國は勿論、全世界をあつと呆れさせる。殊に驚いたのは、日本の露國崇拜家達であつた。

此の前後、露國の新聞が日本の政情その他を巨細となく載せ、大に世人の注目を惹いた、勿論誰人かの祕密通信に成るものらしく、通報の大體は正鵠を穿つたものであつた。

この間露國は、列國の抗議に會つて、滿洲から撤兵することを約したものゝ、何時實行するかも分からず、却てややもすれば淸廷を脅やかして滿洲占居を永久的なものにしようとする、且つ新なる勢で朝鮮へも進出し、利權獨占から租借地强請をなし、遂に龍巖浦に要塞を築くに至つて、日本に對する挑戰の意圖は明にされた。

明治三十六年六月、露國武斷派の領袖クロパトキン大將は幕僚數名を伴つて日本觀光に來たが、當時の風聞として

將軍は日露協商乃至滿韓交換の密命を帶びて來たとか、戰爭を覺悟で實地視察に來たものだとか、いろいろな風說が立つて朝野の神經を大に刺戟したが、結局後者が目的であつたらしい。將軍一行は日本から旅順へ去り、直に對日會議を開いて開戰か否かを論議したが、議論二派に分れて決しなかつたといふ。

この時日本の對露國論は二樣あつた、第一は主戰で、散士等對外硬の有志の（七博士、舊國民同盟の如き）素望である。第二は非戰論で、これは恐露病者、協商派、主義として戰爭を忌むもの等の抱くところである。結局は日露兩國の經濟能力の問題であるが、この點は當時としては日本は露國に比してさう悲觀すべき狀態にはゐないといふことになつた。

加ふるに、列國の同情は概して日本に多く、露國政界には又種々不利な內情があつた。然し露國全體としては日本を大に輕侮してゐたので、日露開戰論の方が勢があつたことはいふまでもない。かくして遂に明治三十七年二月の開戰に至る。

開戰までの日露の關係、彼我の內情の如きは、大抵實事であるが、開戰からは又小說となる。いはゞ一種の日露戰未來記となる（未來記としては早く明治三十四年に大町桂月譯の「日露戰爭未來記」あり、以下散士の空想的敍述もかゝるものを參考にしてあるらしい）。然し戰鬪それ自身のことは極大略に止めて置く。

戰鬪は先づ海軍の小ぜり合ひに始まり、一方わが混成旅團の仁川上陸となり、一方露艦の日本海沿岸襲擊となる。別にわが陸軍は直に露領に上陸して敵の根據を衝く作戰をとる。さうして苦戰の後浦鹽及びその附近を占領する。浦鹽から逃れた敵海軍は旅順その他の艦隊と合して巨文島沖で日本の海軍と大會戰するが、露艦は大敗北する。

これで日本海の制海權を握つたので、日本は露東半島に大兵を上陸させる。さうして一度金州に敗れたが、結局、勝進んで露軍を旅順口に包圍することになる。

開戰以來、露國にも種々な出來事があるが、日本でも內外とも種々多事である。その一々をいへば、國外では獨逸の干渉と、諸列國の同情の冷淡（露國の新聞政策による）とがあり、國內的には非戰論者の盲動と賣國奴の潜行運動がある。それが非戰論の巨頭桐谷伯の暗殺となり、上條父子の檢擧拘引となつて大に世人を驚かせる。露國贔負の上條父子はいつしか露探として、露國から巨萬の金を得て日本の政事外交軍事の祕密を通信してゐたものである。さうして上條父子檢擧は羽川六郎の出現による。

先に出奔した六郎は、支那語に巧みなところから支那人に化け旅順の露軍の通譯となり、大に露將の信任を得る、後には探偵掛として暗號電報の飜譯に關係する。その結果、賣國奴上條父子の內通が分つたので、露國の軍事暗號電報を窃んで急に歸朝する。さうして當局に申出たので、當局も驚いて、上條父子一味六十餘人を檢擧するに至つたのである。

これは戰時日本に對する六郎の大功績であるがその他に他に今一つ大功がある、それは軍用飛行機の完成である。大連の占領は、この飛行機の完成が與つて力がある。大連占領が旅順陷落の原因となつたことは、いふまでもない。海軍は再び膠州灣外に露艦を破つたので、今は、淸國も日本の勝利を確信して、露國に宣戰する。露國は國內益々不穩で遂に革命黨の活動となる。頑强に抵抗した旅順も遂に我が軍の死傷を顧みぬ猛襲の前に降參する。やがて今一度遼陽の大會戰があり、これにも日本が大勝したので、流石の露國も仕方がなくおめおめと和を乞ふことになつた。

日本は元來東洋永遠の平和の爲めに起つたものであるから、やはりその主旨から英米獨佛伊淸露の七國を東京に會同せしめて、列國會議を開き、滿洲の解放、沿海州の自治、露國の東漸中止、日本の東洋制覇等を正式に議定した。韓國が日本の保護國同樣になつたことはいふまでもない。

かくて日本は東洋の永遠の平和を確保した上、更に英米兩國と協議して、萬國平和會議を開き、世界の平和に制閉

的な貢獻をした。

羽川六郎は、日露戰役中の大功を錄されて授爵の恩命もあつたが、懇ろにこれを辭すると共に、我が事の終れるを感じ全く閑雲野鶴の身となつたといふ。

以上によつて『羽川六郎』の如何なる小說かといふことゝ、それが『佳人之奇遇』の變態的後篇といつて可いものであるといふことが明白であると思ふ。上の梗概でも分る如く、全體の結構は三部に分れてゐる。始め羽川六郎の出身から北淸事件までは小說の體裁である。北淸事件以後日露開戰までは、小說といはんよりも寧ろ史實乃至事實であ る。これがこの小說の眼目であるが、あまりに眼目にのみ力を入れたので此の小說が甚しく硬い議論じみたものに化してゐる、日露交涉の史實列べがあまり詳細に過るので讀者に倦怠を起させる。開戰以後萬國平和會議の結末までは又小說となる。一種の未來小說空想小說乃至冒險小說ともいふべきものとなつてゐる。この開戰以後の想像的戰況の記述は眞物の日露戰爭に比して勿論小規模たるを免れないが、然し大體として、散士の想像上の所產としては先づ偉いものであるといひたい。戰爭直前の記述であるだけに地名その他種々の點で制限されてゐるが、或る部分を除けば陸戰海戰の經過に於いて、本筋を辿つてゐる。これを幾まはりか大きくしたものが眞物の日露戰爭である。たゞの想像でこれだけの描寫記述が出來るのは、ともかく偉いといひたい。

プロットは簡單であり、この點でも妙味はさうないが、然し簡單なプロットながら羽川六郎を何處までも正面にして描いたら小說としてもつと文學的なものになりはしなかつたか、六郎を一時行衞不明にさせたのは、この間に日露交涉を直寫しようといふ目論みがあつたからであるが、然しあまりに經世家意識が露骨に出てゐて、小說的興味が全然なく、甚だ殺風景なものになつてゐる。これは失敗の部分である。

主人公が機械技師であり科學者である點は一寸注意すべきところで、『佳人之奇遇』の東海散士が政治經濟の學士であるのに對して、如何にも鮮やかに時勢の變遷を語つてゐはせぬか。六郎には散士のもつロマンチックな憂國的氣分がなく、主として現實的な國家の利害が彼の動機となつてゐる。潜行艇、飛行機の軍事への利用も、今日からいつて興味がある（然しこれは散士より先に押川春浪が着目してゐる）。のみならずかゝる冒險的分子が加味されてゐることは、政治小說が、後の冒險小說へ變形して來た經路を語る一證左として、文學史研究家の一顧を要する點であらう。

感情の强さは『佳人之奇遇』ほど純粹な燃え上るやうな力のこもつた藝術的なものではないが、此の作の目的たる憤懣感情といふ點では、通篇實にそれがみちみちてゐる。煽情的政治小說としては、相當の効果を收め得たものと思ふ。たゞそこに多少不自然な無理な、作爲的な痕跡があるので『佳人之奇遇』程の純粹な無條件な憂國的氣分で散士の悲憤慷慨に共鳴が出來ない、これは、この頃では憂國青年東海散士が政治家柴四朗になりきつてゐるところがあるので、讀者の心がその政治家に多少の反感をもつのであらう。

最も著しい差異は文章である。『佳人之奇遇』の六朝式四六駢儷體乃至支那小說直譯體なのに對して、『羽川六郎』のは、新聞記事調、時文調であり、極めて無雜作な文飾のない、淡白なものになつてゐる。こゝにも時勢の變遷が窺はれると思ふが、これは、既に明治三十年の『佳人之奇遇』續篇にもいさゝか見られた變化であつて、『羽川六郎』に至つて急に始まつたものではない。老練で艷消しの文章も結構には違ひないが、然し『佳人之奇遇』の成功が一つは艷美な文章にあつたのを考へたなら、今少し感情のこもつた文學的な描寫法を工風すべきであつたらう。

何れにしても、政治小說『羽川六郎』については、精詳な研究は他日に讓るべきものであるから、こゝでは多くを語らない。たゞ『佳人之奇遇』以前の散士を語り、『佳人之奇遇』時代の散士を語つた以上、『佳人之奇遇』以後の散士を語るべきが當然であると信じて『奇遇』以後の散士を語つたついでに、『奇遇』以後の散士の唯一の文績たる『羽川

六郎』に説き及んだのである。元より大略に過ぎぬとしても、その『佳人之奇遇』に對してかく變態的後篇と見らるべき關係のある以上、これを説くことによつて『佳人之奇遇』の研究は幾分の完全さを加へることであらう。

（九、二、十五）

（此の書を校し了る時、昭和十年五月十一日午後二時也）

昭和十年五月十二日印刷
昭和十年五月十七日發行

政治小說研究 上卷
【定價 參圓八拾錢】

著作者 東京市小石川區西丸町二五 柳田泉
發行者 東京市日本橋區吳服橋二ノ五 神田龍一
印刷者 東京市麴町區土手三番町二九 谷口熊之助
印刷所 東京市麴町區土手三番町二九 谷口印刷所

發賣所 東京市日本橋區吳服橋二ノ五 春秋社 振替（東京）二四八六一
發行所 東京市日本橋區吳服橋二ノ五 松柏館書店 振替東京三九七一六 電話日本橋二六二四

製本・植木製本所